千葉東南部ニュータウン34

－千葉市城ノ台遺跡－

平成18年３月

独立行政法人都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団

千葉東南部ニュータウン34

－千葉市城ノ台遺跡－

序　文

財団法人千葉県文化財教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年９月１日付で名称変更）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第539集として，独立行政法人都市再生機構の千葉東南部地区土地区画整理事業に伴って実施した千葉市城ノ台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代の石器がまとまって出土したほか，古墳時代前期から平安時代の集落跡や，平安時代末頃の土師器焼成坑と粘土採掘坑，中世の城郭遺構が発見されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年３月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長　佐　藤　健太郎

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
　第３節　調査の方法と経過……6
第２章　旧石器時代……16
　第１節　調査の概要……16
　第２節　基本土層……16
　第３節　第１地点……18
　第４節　第２地点……39
　第５節　第３地点ａ……42
　第６節　第３地点ｂ……42
　第７節　単独出土資料……45
第３章　縄文時代……48
　第１節　検出された遺構……48
　第２節　遺構外出土遺物……50
第４章　弥生時代……53
　第１節　検出された遺構……53
　第２節　遺構外出土遺物……55
第５章　古墳時代……56
　第１節　古墳時代前期から中期の遺構……56
　第２節　古墳時代後期の遺構……106
　第３節　遺構外出土遺物……184
第６章　奈良・平安時代……188
　第１節　奈良時代の遺構……188
　第２節　平安時代の遺構……205
　第３節　遺構外出土遺物……263
第７章　中世以降……264
　第１節　検出された遺構……264
　第２節　溝状遺構……268
　第３節　城ノ台行人塚……273
　第４節　遺構外出土遺物……275
第８章　まとめ……276
付　章　貝サンプルの分析結果……333
報告書抄録

挿図目次

第１図　千葉東南部地区事業範囲位置図 …… 4
第２図　千葉東南部地区遺跡分布図 …… 5
第３図　調査区及び周辺地形図 …… 7
第４図　遺跡全体図 ……11
第５図　遺構配置図（１） ……12
第６図　遺構配置図（２） ……13
第７図　遺構配置図（３） ……14
第８図　遺構配置図（４） ……15
第９図　基本土層図 ……16
第10図　旧石器時代調査概要図 ……17
第11図　第１地点石器別分布図（１） ……21
第12図　第１地点石器別分布図（２） ……22
第13図　第１地点石器別分布図（３） ……23
第14図　第１地点石器別分布図（４） ……24
第15図　第１地点石器別分布図（５） ……25
第16図　第１地点石器別分布図（６） ……26
第17図　第１地点石材別分布図 ……27
第18図　第１地点出土遺物（１） ……30
第19図　第１地点出土遺物（２） ……31
第20図　第１地点出土遺物（３） ……32
第21図　第１地点出土遺物（４） ……33
第22図　第１地点出土遺物（５） ……34
第23図　第１地点出土遺物（６） ……35
第24図　第１地点出土遺物（７） ……36
第25図　第１地点出土遺物（８） ……37
第26図　第１地点出土遺物（９） ……38
第27図　第１地点出土遺物(10) ……39
第28図　第２地点出土遺物 ……40
第29図　第２地点石器別分布図 ……41
第30図　第２地点石材別分布図 ……41
第31図　第３地点ａ出土遺物 ……42
第32図　第３地点ａ石器別分布図 ……43
第33図　第３地点ａ石材別分布図 ……43
第34図　第３地点ｂ石器別分布図 ……44
第35図　第３地点ｂ石材別分布図 ……44
第36図　単独出土遺物 ……45
第37図　陥穴，炉穴 ……49
第38図　遺構外出土縄文土器 ……50
第39図　縄文時代石器 ……51
第40図　弥生時代遺構 ……54
第41図　遺構外出土弥生土器 ……55
第42図　001 ……56
第43図　003及び出土遺物 ……57
第44図　006及び出土遺物 ……58
第45図　007 ……59
第46図　007出土遺物 ……60
第47図　009，016及び出土遺物 ……62
第48図　010，012及び出土遺物 ……64
第49図　018及び出土遺物 ……65
第50図　020及び出土遺物 ……66
第51図　021出土遺物 ……67
第52図　028Ａ・Ｂ・Ｃ ……69
第53図　028Ａ出土遺物 ……70
第54図　034及び出土遺物 ……71
第55図　038 ……72
第56図　038出土遺物 ……73
第57図　046Ａ・Ｂ及び出土遺物 ……74
第58図　054Ｂ出土遺物 ……75
第59図　063及び出土遺物 ……76
第60図　066Ｂ，069Ｄ及び出土遺物 ……77
第61図　071及び出土遺物 ……78
第62図　091及び出土遺物 ……79
第63図　092Ｂ及び出土遺物 ……80
第64図　101及び出土遺物 ……81
第65図　110及び出土遺物 ……82
第66図　115及び出土遺物 ……83
第67図　121及び出土遺物 ……84
第68図　138及び出土遺物 ……85

第69図　142及び出土遺物（１）……86
第70図　142出土遺物（２）……87
第71図　162，163，166Ｂ及び出土遺物……88
第72図　170Ａ，172Ａ・Ｂ……90
第73図　170Ａ，172Ａ出土遺物……91
第74図　170Ｂ及び出土遺物……93
第75図　181，184，185及び出土遺物……94
第76図　191及び出土遺物……95
第77図　197，198Ｃ・Ｄ，199Ｂ……97
第78図　198Ｃ・Ｄ，199Ｂ出土遺物……98
第79図　200Ｃ及び出土遺物……99
第80図　202及び出土遺物……100
第81図　206……101
第82図　212及び出土遺物……102
第83図　217Ｃ，187，218及び出土遺物……103
第84図　267Ｂ，306……104
第85図　203……105
第86図　203出土遺物……106
第87図　002及び出土遺物……107
第88図　004，005及び出土遺物（１）……109
第89図　004，005出土遺物（２）……110
第90図　008及び出土遺物……111
第91図　014，015及び出土遺物……112
第92図　019及び出土遺物……114
第93図　022，024，029及び出土遺物……115
第94図　036及び出土遺物……117
第95図　040，042及び出土遺物……118
第96図　043，048及び出土遺物……119
第97図　044，046及び出土遺物……121
第98図　054及び出土遺物……122
第99図　057，058，059，061Ｂ……123
第100図　057，058，059出土遺物……124
第101図　066Ａ及び出土遺物……126
第102図　069Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ……127
第103図　069Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ出土遺物……129
第104図　069Ｃ遺構外出土遺物……130
第105図　073，074，075及び出土遺物……131
第106図　080，082，083，093……133
第107図　080，082，083，093出土遺物……134
第108図　086及び出土遺物……136
第109図　090及び出土遺物（１）……137
第110図　090出土遺物（２）……138
第111図　095Ｂ・Ｃ及び出土遺物（１）……139
第112図　095Ｂ・Ｃ出土遺物（２）……140
第113図　096Ａ・Ｂ，097……142
第114図　096Ａ・Ｂ，097出土遺物……143
第115図　100及び出土遺物……144
第116図　102及び出土遺物……145
第117図　103，105，106……146
第118図　103，105出土遺物（１）……147
第119図　105，106出土遺物（２）……148
第120図　107及び出土遺物（１）……150
第121図　107出土遺物（２）……151
第122図　111及び出土遺物……152
第123図　114，116及び出土遺物……154
第124図　118，119，120及び出土遺物……155
第125図　122及び出土遺物……156
第126図　124，125及び出土遺物……158
第127図　126Ａ・Ｂ，127，129……160
第128図　126Ａ・Ｂ，127，129出土遺物……161
第129図　161Ｂ・Ｅ及び出土遺物……162
第130図　161Ｇ・Ｈ・Ｊ・Ｋ・Ｌ……164
第131図　161Ｇ・Ｈ・Ｊ・Ｋ・Ｌ出土遺物……165
第132図　164Ａ・Ｂ・Ｃ，166Ａ及び出土遺物…167
第133図　200Ａ・Ｂ及び出土遺物……168
第134図　204Ｂ及び出土遺物……169
第135図　216，215及び出土遺物……170
第136図　222及び出土遺物……171
第137図　225Ｃ・Ｄ及び出土遺物……172
第138図　253及び出土遺物……173
第139図　257，261及び出土遺物……175
第140図　271Ｅ及び出土遺物……176
第141図　283及び出土遺物……178
第142図　286，287及び出土遺物……179

第143図　307，326 ……180
第144図　307，326出土遺物 ……181
第145図　308，317及び出土遺物 ……182
第146図　098及び出土遺物 ……184
第147図　遺構外出土遺物（1） ……185
第148図　遺構外出土遺物（2） ……186
第149図　遺構外出土遺物（3） ……187
第150図　013及び出土遺物 ……189
第151図　017及び出土遺物 ……190
第152図　092A及び出土遺物 ……192
第153図　095A及び出土遺物 ……193
第154図　112及び出土遺物 ……194
第155図　161C・D及び出土遺物 ……195
第156図　204A・C及び出土遺物 ……197
第157図　214A・B，238及び出土遺物 ……198
第158図　214C及び出土遺物 ……199
第159図　217B及び出土遺物 ……200
第160図　258及び出土遺物 ……202
第161図　262，263，260及び出土遺物（1） ……203
第162図　262，263出土遺物（2） ……204
第163図　035 ……205
第164図　037及び出土遺物 ……206
第165図　060，061A及び出土遺物 ……208
第166図　062及び出土遺物 ……209
第167図　067，070及び出土遺物 ……209
第168図　081A・B及び出土遺物 ……210
第169図　104及び出土遺物 ……211
第170図　113A・B及び出土遺物 ……212
第171図　141及び出土遺物 ……213
第172図　161A及び出土遺物 ……214
第173図　198A・B，199A及び出土遺物（1） …215
第174図　198A，199A出土遺物（2） ……216
第175図　211，219A・B，234及び出土遺物 …217
第176図　217A及び出土遺物 ……218
第177図　224A・B及び出土遺物 ……219
第178図　225A及び出土遺物 ……221
第179図　225B及び出土遺物 ……222
第180図　226，227A ……223
第181図　240出土遺物 ……224
第182図　255及び出土遺物 ……224
第183図　264及び出土遺物 ……225
第184図　266，267及び出土遺物 ……226
第185図　271A～D・F・G及び出土遺物（1） …228
第186図　271A～D・F・G及び出土遺物（2） …229
第187図　272及び出土遺物 ……231
第188図　275，276及び出土遺物 ……232
第189図　277，278，279，325及び出土遺物 …233
第190図　313及び出土遺物 ……235
第191図　掘立柱建物跡（1） ……236
第192図　掘立柱建物跡（2），301，310 ……237
第193図　023 ……239
第194図　023出土遺物 ……240
第195図　025 ……241
第196図　025遺物出土状況（1） ……242
第197図　025遺物出土状況（2） ……243
第198図　025出土遺物（1） ……244
第199図　025出土遺物（2） ……245
第200図　粘土採掘坑（1） ……247
第201図　粘土採掘坑出土遺物（1） ……248
第202図　粘土採掘坑（2）及び出土遺物（2） …249
第203図　土師器焼成坑 ……251
第204図　256遺物出土状況 ……253
第205図　256粘土及び赤色化ローム範囲 ……254
第206図　256出土遺物（1） ……255
第207図　256出土遺物（2） ……256
第208図　256出土遺物（3） ……257
第209図　平安時代土坑（1） ……260
第210図　平安時代土坑（2） ……261
第211図　遺構外出土遺物 ……263
第212図　虎口周辺全体図 ……265
第213図　虎口 ……266
第214図　土塁，堀 ……268
第215図　溝状遺構（1） ……269
第216図　溝状遺構（2） ……271

第217図　溝状遺構（３）　……272
第218図　城ノ台行人塚　……274
第219図　遺構外出土遺物　……275
第220図　出土土器の分類　……279
第221図　貝種組成　……335
第222図　貝類計測値分布　……338

表　目　次

第１表　第１地点母岩別石器組成表　……46
第２表　第１地点石材別石器組成表　……46
第３表　第２地点母岩別石器組成表　……47
第４表　第２地点石材別石器組成表　……47
第５表　第３地点ａ母岩別石器組成表　……47
第６表　第３地点ａ石材別石器組成表　……47
第７表　第３地点ｂ母岩別石器組成表　……47
第８表　第３地点ｂ石材別石器組成表　……47
第９表　陥穴一覧　……48
第10表　縄文時代石器計測表　……52
第11表　銭貨計測表　……275
第12表　土師器焼成坑一覧　……278
第13表　古代末期の土器様相の変遷　……283
第14表　古墳時代前期・中期出土土器観察表　…286
第15表　古墳時代後期出土土器観察表　……296
第16表　奈良・平安時代以降出土土器観察表　…313
第17表　石製模造品（剣形品）計測表　……331
第18表　石製模造品（有孔円板）計測表　……332
第19表　貝サンプル一覧　……334
第20表　貝類種名一覧　……334
第21表　貝類同定結果　……334
第22表　貝種組成　……335
第23表　貝類計測値分布　……339

図　版　目　次

付図版　城ノ台遺跡のウミニナ類
図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　遺跡遠景（西から）
　　遺跡遠景（南東から）
図版３　調査地近景（Ｃ７－68付近）
　　調査地近景（Ｆ５－26付近）
図版４　調査地近景（Ｄ８グリッド付近）
　　調査地近景（Ｇ６－27付近）
図版５　調査地近景（Ｇ６－26付近）
　　調査地近景（Ｇ６－26付近）
図版６　229，236，309，316，052，298，207及び出土土器
図版７　006，007，020，028Ａ・Ｂ
図版８　028Ａ・Ｂ・Ｃ，038，063，071，091，101，110，121
図版９　121，142，163，170Ｂ，172Ａ，181
図版10　184，200Ｃ，202，206，217Ｃ，002，004，005
図版11　004，005，019，036，054，058，066Ａ
図版12　069Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ，080～083，086
図版13　090，095Ｂ，096Ａ・Ｂ，103，105，106，107，111
図版14　116，122，124，125，126Ａ・Ｂ，161Ｂ・Ｅ・Ｇ・Ｈ
図版15　164Ａ・Ｂ・Ｃ，200Ａ・Ｂ，216～218，253，257
図版16　261，283，286，287，307，308
図版17　098，221，013，017，095Ａ，112，161Ｃ・Ｄ
図版18　204Ａ・Ｃ，214Ａ・Ｂ，217Ｂ，258，262，

263，067
図版19　035，037，060，061A，067，141
図版20　161A，199A，211，224A・B
225A，225A・B，225A～D
図版21　255，266，267，271A，271A～D・F・G，272，275
図版22　277，313，233
023，025，049
図版23　256
図版24　256
図版25　056，259，289，320，173，270
図版26　270，348，349，350
288A・B，220
図版27　虎口・調査前近景
虎口・発掘状況
図版28　城ノ台行人塚
図版29　第1地点出土遺物（1）
図版30　第1地点出土遺物（2）
図版31　第1地点出土遺物（3）
第2地点・第3地点a・単独出土遺物
図版32　縄文土器，弥生土器，縄文時代石器
図版33　古墳時代前期・中期出土土器（1）
図版34　古墳時代前期・中期出土土器（2）
図版35　古墳時代前期・中期出土土器（3）
図版36　古墳時代前期・中期出土土器（4）
図版37　古墳時代前期・中期出土土器（5）
図版38　古墳時代前期・中期出土土器（6）
図版39　古墳時代前期・中期出土土器（7）
古墳時代後期出土土器（1）
図版40　古墳時代後期出土土器（2）
図版41　古墳時代後期出土土器（3）
図版42　古墳時代後期出土土器（4）
図版43　古墳時代後期出土土器（5）
図版44　古墳時代後期出土土器（6）
図版45　古墳時代後期出土土器（7）
図版46　遺構外出土土器
奈良・平安時代出土土器（1）
図版47　奈良・平安時代出土土器（2）
図版48　奈良・平安時代出土土器（3）
図版49　奈良・平安時代出土土器（4）
図版50　奈良・平安時代出土土器（5）
図版51　奈良・平安時代出土土器（6）
図版52　奈良・平安時代出土土器（7）
図版53　奈良・平安時代出土土器（8）
図版54　奈良・平安時代出土土器（9）
図版55　奈良・平安時代出土土器（10）
図版56　奈良・平安時代出土土器（11）
図版57　奈良・平安時代出土土器（12）
遺構外出土土器
図版58　石製模造品（剣形品，有孔円板）
図版59　石製模造品（勾玉），玉類，瓦，銭貨
図版60　石製紡錘車，土玉
図版61　住居跡出土金属製品

凡　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社による千葉東南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉市緑区おゆみ野中央２丁目２番地(旧千葉市南生実町1675-１他)に所在する城ノ台遺跡(遺跡コード 201-077)である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の委託を受け，財団法人千葉県文化財センター(平成17年９月１日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更)が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織，担当者及び実施期間は，第１章に記載した。

5　本書の執筆は，第１章・第３章から第８章を主席研究員　関口達彦，第２章を上席研究員　島立桂，付章を上席研究員　西野雅人が担当し，編集は関口が行った。。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，独立行政法人都市再生機構千葉地域支社，千葉市教育委員会ほか多くの方々から御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図(第１図)は，国土地理院発行　１：50,000　千葉　平成12年９月発行である。

8　本書で使用した周辺航空写真は，京葉測量株式会社が昭和45年に撮影したものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。座標系は，日本測地系を使用した。

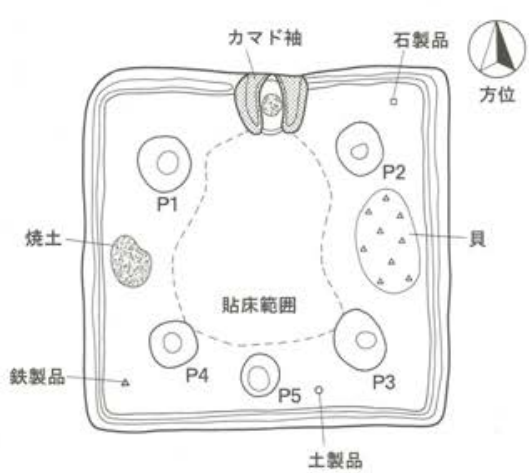
10　本書の遺構及び遺物の縮尺は，以下を基準とするが，作図の都合で統一されなかったものもある。

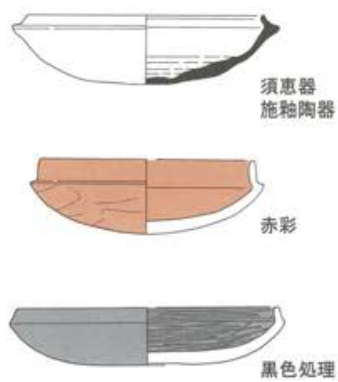
旧石器時代ブロック・竪穴住居跡・溝状遺構　1/80　　陥穴・炉穴・土坑　1/60

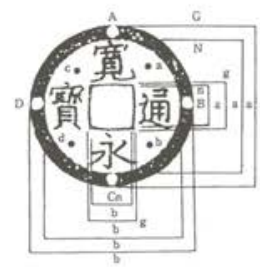
土器・支脚　1/4　　石器・石製品　2/3・1/3　　拓影　1/3

金属製品・玉類　1/2・1/1

11　本書の挿図の用例は，次のとおりである。住居跡の基本的な柱穴等の符号は以下のとおりであるが，これ以外の配列については挿図中に示した。







＊銭貨の各計測点については以下のとおり。

外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$

外縁内径 $N=\frac{Na+Nb}{2}$

外縁外径 $g=\frac{ga+gb}{2}$

外縁内径 $n=\frac{na+nb}{2}$

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{2}$

文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{2}$

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

独立行政法人都市再生機構は，首都圏の人口増加に対応するため，千葉東南部地区土地区画整理事業として大規模な宅地造成を計画した。このため，千葉県教育委員会では昭和46年に実施した事業地内の遺跡分布調査の結果に基づき，所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議を重ねてきた。その結果，可能な限り公園や緑地として現状保存をはかる一方，やむを得ず現状保存が困難な遺跡については記録保存の措置を講ずることとなり，財団法人千葉県教育振興財団が独立行政法人都市再生機構から委託を受け，発掘調査を実施してきた。

今回報告する城ノ台遺跡（総面積58,000㎡）は，「城館跡」として周知の遺跡である。独立行政法人都市再生機構は，遺跡の所在する台地上と西側の大百池を含めた区域を総合公園として活用し，併せて緑地として保存することを計画された。公園整備にあたっては遺跡への影響を最小限に留めるよう計画が策定されたが，整備の一環として設置する園路や外灯，運動広場などの施設の必要な範囲については記録保存の措置を講ずることで協議が整い，当財団が昭和62年度・63年度，平成２年度～４年度・６年度の６次にわたって発掘調査を実施した。調査の結果，旧石器時代の石器集中地点４か所，縄文時代の陥穴３基・炉穴３基，弥生時代中期の竪穴住居跡１軒，古墳時代前期から後期の竪穴住居跡132軒・古墳１基，奈良・平安時代の竪穴住居跡55軒・掘立柱建物跡５棟・地下式土坑２基・粘土採掘坑６基・土師器焼成坑６基，中世城郭の虎口遺構や土塁などを検出した。なお，遺跡内に所在した通称「城の台行人塚」については，独立行政法人都市再生機構と地元の「南生実町城の台行人塚対策委員会」及び八剣神社との間で協議が整い，古城小弓遺跡内の八剣神社の所有する通称「天神山の塚」へ移築することとなった。平成６年度にこれに伴う古城小弓遺跡の発掘調査を当財団が実施し，その成果は『千葉東南部ニュータウン26』に収録されている。

発掘調査の終了後，平成６年度に水洗・注記の一部を行い，平成８年度からは本格的な整理作業が開始され，平成17年度をもって報告書刊行の運びとなった。発掘調査及び整理作業の各年度の実施期間，組織及び作業内容は下記のとおりである。

発掘調査

昭和62年度

期　　間　　昭和62年10月５日から昭和62年12月11日

組　　織　　班　　長　阪田正一　　担当職員　出口雅人

内　　容　　第１地点　対象1,577㎡　確認調査　上層479㎡

第２地点　対象2,880㎡　確認調査　上層260㎡

昭和63年度

期　　間　　昭和63年８月５日から平成元年３月28日

組　　織　　班　　長　佐久間　豊　　担当職員　島立　桂

内　　容　　対象4,200㎡　確認調査　下層160㎡，本調査　上層4,200㎡　下層300㎡

平成２年度

期　　間　　平成２年11月１日から平成３年３月22日

組　　織　　班　　長　三浦和信　　担当職員　矢本節朗

内　　容　　対象3,500㎡　確認調査　上層428㎡，本調査　上層2,520㎡

平成３年度

期　　間　　平成３年12月２日から平成４年３月31日

組　　織　　班　　長　三浦和信　　担当職員　麻生正信　半澤幹雄

内　　容　　対象1,380㎡　確認調査　下層56㎡，本調査　上層1,380㎡・塚１基下層100㎡

平成４年度

期　　間　　平成４年６月１日から平成５年２月15日

組　　織　　班　　長　矢戸三男　　担当職員　麻生正信　田島　新　大石理子　半澤幹雄

内　　容　　対象2,010㎡　確認調査　下層80㎡，本調査　上層2,010㎡

平成６年度

期　　間　　平成６年10月１日から平成６年10月31日

組　　織　　千葉調査事務所長　田坂　浩　　担当職員　関口達彦

内　　容　　対象250㎡　本調査　上層250㎡(塚１基)

整理作業

平成６年度

期　　間　　平成６年４月１日から平成７年３月31日

組　　織　　千葉調査事務所長　田坂　浩

内　　容　　水洗・注記の一部

平成８年度

期　　間　　平成８年４月１日から平成９年３月31日

組　　織　　千葉調査事務所長　藤崎芳樹　　担当職員　栗田則久

内　　容　　水洗・注記の一部から復元まで

平成９年度

期　　間　　平成９年12月１日から平成10年３月31日

組　　織　　中央調査事務所長　藤崎芳樹　　担当職員　岸本雅人

内　　容　　記録整理

(重点遺跡整理促進事業)

期　　間　　平成９年11月１日から平成10年３月31日

組　　織　　整理課長　古内　茂　　担当職員　渡邉修一　整理技術員　木島桂子

内　　容　　実測の一部，トレースの一部

平成10年度

期　　間　　平成10年４月１日から平成10年９月30日

組　　織　　中央調査事務所長　石田廣美　　担当職員　小笠原永隆

内　　容　　分類・選別から挿図・図版作成の一部まで

（重点遺跡整理促進事業）

期　　間　　平成10年４月１日～平成10年６月30日

組　　織　　整理課長　古内　茂　　担当職員　渡邉修一　整理技術員　木島桂子

内　　容　　実測の一部，トレースの一部

平成16年度

期　　間　　平成16年12月１日から平成17年３月31日

組　　織　　中央調査事務所長　谷　旬　　担当職員　関口達彦

内　　容　　記録整理，挿図・図版作成の一部

平成17年度

期　　間　　平成17年４月１日から平成17年９月30日

組　　織　　中央調査事務所長　谷　旬　　担当職員　関口達彦

内　　容　　挿図・図版作成の一部から報告書刊行

第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡

１　遺跡の位置（第１図）

城ノ台遺跡は，千葉市緑区おゆみ野中央２丁目２番地に所在する。

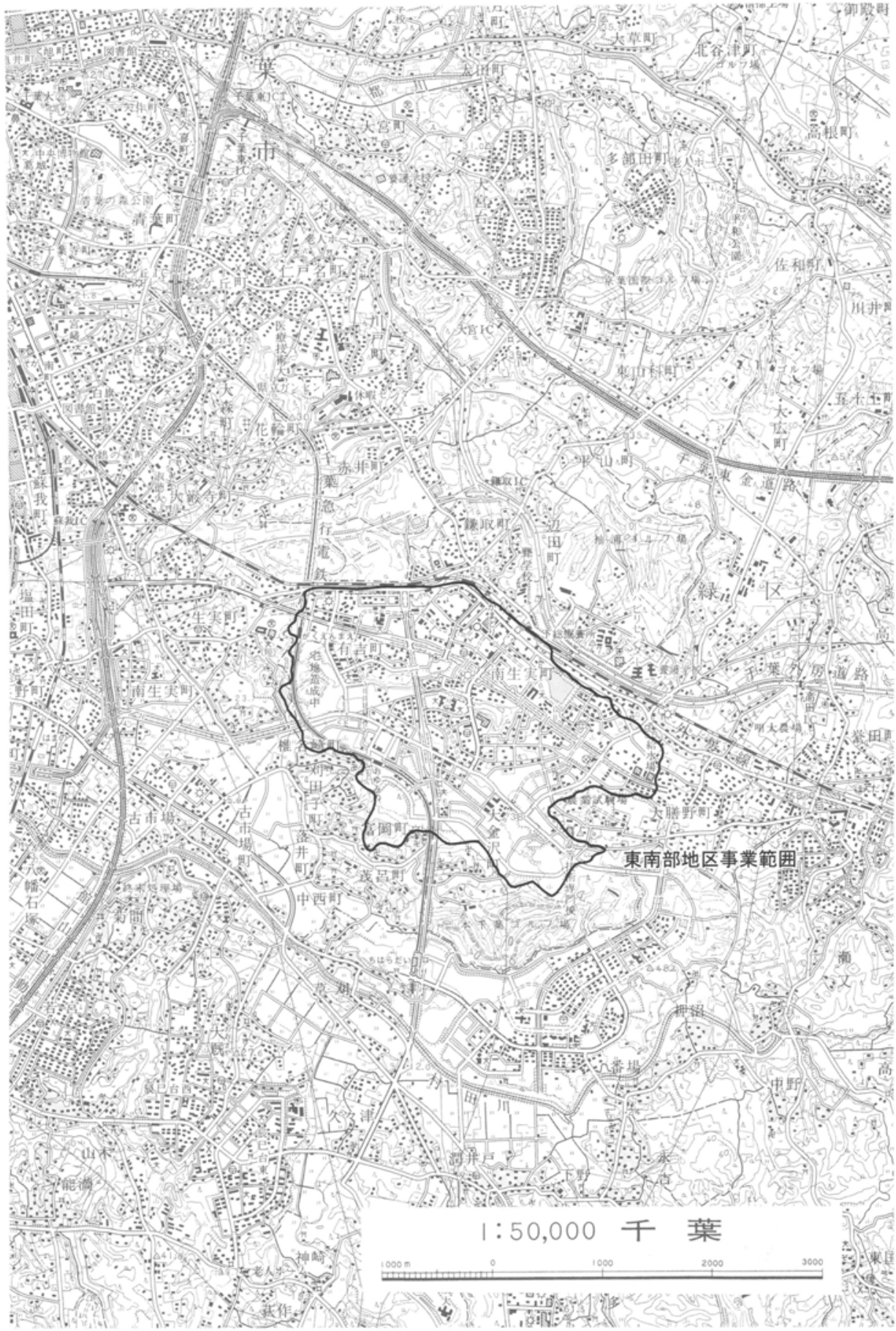
緑区は千葉市の東南部に位置し，南は村田川を境として市原市と接し，ＪＲ外房線や千葉東金道路，千葉外房有料道路などが通っている。本遺跡の所在する千葉東南部地区は，ＪＲ外房線鎌取駅の南側に広がり，現在も「おゆみ野」として新しい街づくりが展開されている地域である。

千葉市は千葉県の北東部に位置し，東京湾を西に臨み，内陸には房総半島の北部一帯を占める広大な下総台地が展開している。この台地は無数の小支谷によって開析され，東京湾岸には海岸平野，三角州などの沖積低地が形成されている。千葉東南部地区は，千葉市と市原市の境を流れ東京湾に流入する村田川の下流域右岸に位置し，台地はこの村田川に注ぎ込む支谷によって樹枝状に複雑に開析されている。

城ノ台遺跡は，このような支谷の一つである北側に侵入する赤塚支谷と南側へ延びる泉支谷が分岐する入口付近で，南北両面を開析された海岸平野を臨む台地の先端に位置している。この台地の東側は，２つの小支谷から侵入した短い谷津に南北を挟まれ，北東側に連続する台地から独立したような様相を呈している。台地西側の赤塚支谷の入口の低地には，大百池が位置している。台地は，北東－南西260m・北西－南東100m～200mの広さである。幅は南側では200mと広いが，南北から侵入する谷津のために部分的に狭くなり，北側になると100mと最も狭くなる。北東側がやや高く，標高は23m～26m，谷部との比高は約17mである。遺跡はこの台地全面に展開している。台地の北東側は細尾根を通して有吉城が連続し，赤塚支谷を挟んだ北側の台地上には上赤塚貝塚や上赤塚１号墳をはじめとする上赤塚遺跡が位置している。泉支谷の南側には椎名崎遺跡と伯父名台遺跡が展開している。特に，上赤塚古墳群は本遺跡の集落と同時期であり，密接に関連する古墳群として築造されたと考えられる。

２　周辺の遺跡（第２図）

千葉東南部地区内の遺跡の多くは，旧石器時代から中・近世までの遺構・遺物を複合的に伴っており，特定の時期に限られた単純な遺跡はきわめて少ない。なかでも，縄文時代の大型貝塚や古墳時代後期の集落跡や古墳群，奈良・平安時代の集落跡などが密集しているのが特徴的である。



第１図　千葉東南部地区事業範囲位置図

第２図　千葉東南部地区遺跡分布図

旧石器時代の遺物は，地区内で調査されたほとんどの遺跡から出土している。規模が比較的大きなものとしては，有吉城跡，太田法師遺跡，椎名崎古墳群Ｂ支群，神明社裏遺跡などがあげられる。なかでも神明社裏遺跡からは，ナイフ形石器・掻器・石核・尖頭器・剥片などが多量に出土している。

縄文時代には，中期から晩期の大型貝塚の他にも各時期にわたって各種の遺構や遺物が数多く検出されている。早期の炉穴は御塚台遺跡など，多数の遺跡から検出されている。前期では，地区内の北西に位置する南二重堀遺跡，鎌取遺跡，有吉城跡で竪穴住居跡が若干検出されている。中期には，ほとんどの遺跡に遺物の散布がみられ，特に上赤塚貝塚，有吉北貝塚，有吉南貝塚など大規模な貝塚が集中してみられ，多数の竪穴住居跡や土坑群を伴う大集落が形成されている。後期には，木戸作貝塚，小金沢貝塚，六通貝塚等，引き続き大規模貝塚が形成されているが，中期ほどの厖大な遺構を伴う大集落は形成されなくなる。晩期には遺跡数は激減するが，六通貝塚などで良好な遺物包含層等が検出されている。また，高沢遺跡では遺構は確認されなかったが，晩期終末の荒海式土器がまとまって検出されており注目される。

弥生時代は，地区内の遺跡が極端に少なくなる。有吉遺跡やバクチ穴遺跡などで遺構が検出されているにすぎず，遺物の出土も極めて少ない。市原市草刈遺跡などの大規模集落群に，周辺地域の小集落が集約されることもその原因の一つと考えられる。また，村田川下流域の海岸平野の低地一帯に集落が展開している可能性も考慮される。

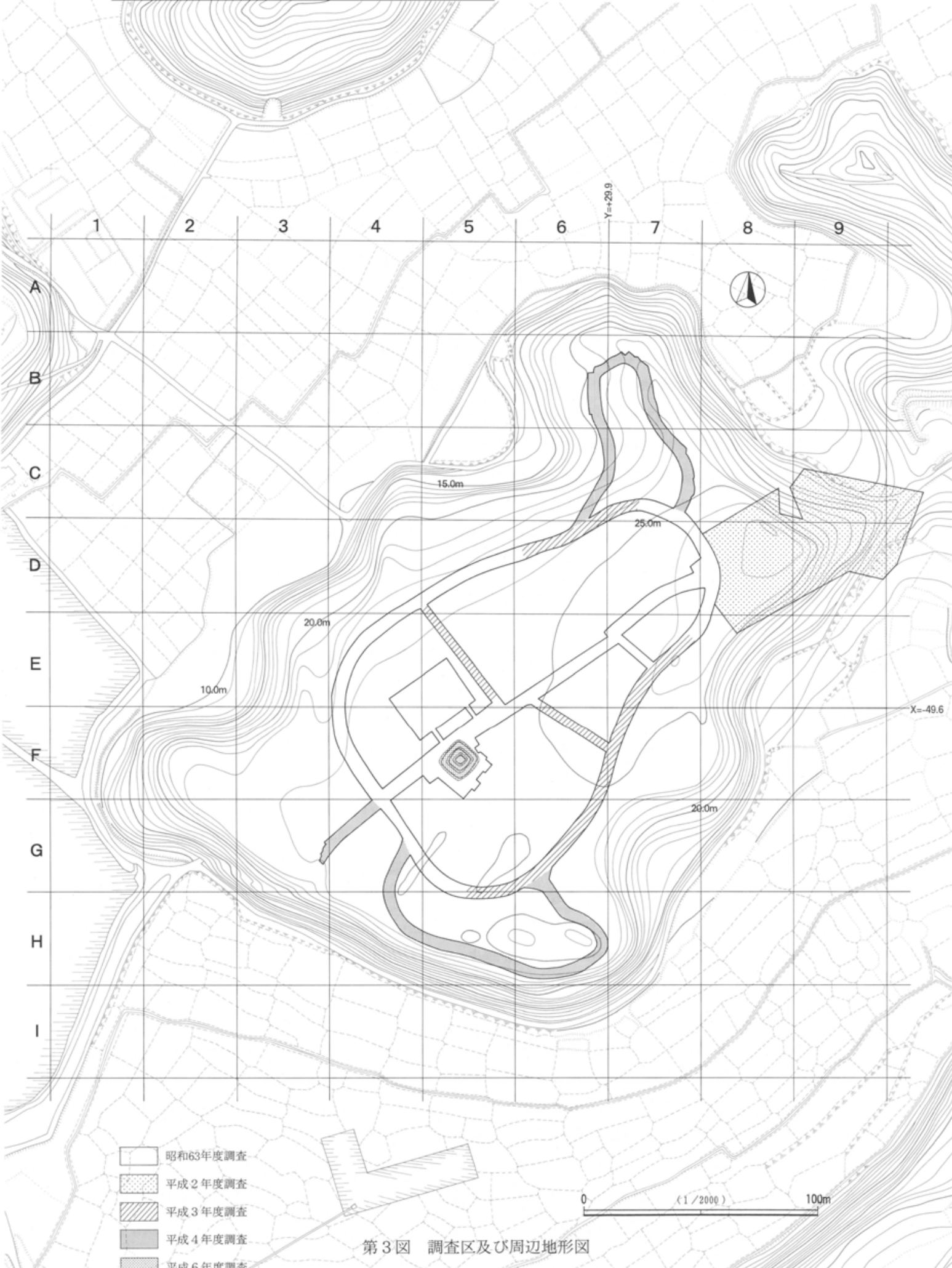
古墳時代に入ると新たな集落跡が展開する。前期から中期の遺跡は，地区北西側に集中していることが特徴的である。なかでも，南二重堀遺跡，鎌取遺跡，馬ノ口遺跡などで竪穴住居跡が検出されている。後期では，有吉遺跡，高沢遺跡，有吉北貝塚で多くの竪穴住居跡が検出されるなど，大規模集落が展開するようになる。古墳は，地区内において約290基が確認されている。前・中期の古墳では，石枕などが出土した上赤塚１号墳をはじめとする上赤塚古墳群や馬ノ口遺跡の方墳などが検出されている。特に，上赤塚古墳群は本遺跡の集落と同時期に築造されており，墓域と集落の密接な関連性が注目される。後期になると，有吉遺跡，生浜古墳群，南二重堀遺跡などでは，有吉遺跡と高沢遺跡の大集落と重複せずに明らかな墓域として大規模古墳群が営まれる。さらに，この椎名崎古墳群のように人形塚古墳をはじめとする，地区内で最も大規模な古墳群が造営されようになる。

奈良・平安時代の遺跡は，古墳後期から連続する大規模な集落が多い。特に，地区北西部に位置する有吉遺跡，高沢遺跡，椎名崎遺跡では古墳時代より集落の規模は大きくなる。鉄製品の保有率も高く，それぞれの遺跡に特徴的な墨書土器なども出土している。また，大金沢支谷の太田法師遺跡では，砂鉄などの原料に恵まれた立地条件のため，鍛治関連遺構が多数検出されている。有吉城跡，今台遺跡などでは，小鍛治遺構を伴う遺跡もわずかながら存在している。

中世以降では，本遺跡をはじめとして伯父名台遺跡，有吉城，有吉北貝塚などから，台地整形区画・土坑墓・火葬墓・地下式坑などが検出されている。本遺跡の周辺には小弓城などもあり，中世では軍事，交通の上で要衝の地域であったことが窺える。

第３節　調査の方法と経過(第３図)

発掘調査に先行して，公共座標(第Ⅸ系)を基準に，調査対象範囲全域に40ｍ×40ｍの方眼網を設定し基準点測量を行った。これを大グリッドとし，北西に起点を置いて，東西のＹ軸は西から順に1,2,・・・・８，南北のＸ軸は北から順にＡ，Ｂ,・・・・Ｈと付した。さらに，この大グリッドを４ｍ×４ｍの小グ



第３図　調査区及び周辺地形図

リッド100区画に分割し，北西隅を起点に01,02と順に付し南東隅を99とした。従って小グリッドの呼称は，例えばＦ５－25などとなる。

昭和62年度は２地点の確認調査を行った。第１地点は，進入路の工事に伴い1.577㎡を対象に，台地北端の西側斜面の確認調査を昭和62年10月５日から同年10月31日まで行った。城館跡のため，犬走り等の遺構の存在も考慮し，まず1/100の地形図を作成した。その後，台地上から斜面に向かって幅２ｍの確認トレンチを設定し人力による表土除去を行い，遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果，調査区中央部において，斜面の上部を削りだして急斜面を形成し，その下部に腰曲輪状の平坦面を作出していることが判明した。時期を確定できる出土遺物はなかったが，腰曲輪状の作出面の上面には宝永４年(1707)の富士山の噴火による火山灰が堆積していることから，それ以前に築造された城郭に伴う遺構であると判断した。また，トレンチ内からは多量の古墳時代の土器が出土した。第２地点は，「お花見広場」に予定されている台地中央部西側の平坦地2,880㎡を対象に，昭和62年10月５日～同年12月11日まで確認調査を行った。これは，城館跡として周知されてきた本遺跡の遺構の時期・分布状況等を発掘調査で確認することにより，より具体的な本遺跡の情報を把握することを目的としている。その結果，この地点では古墳時代後期を中心に平安時代までの住居跡がかなりの密度で検出され，多くの遺物も出土した。この２地点の確認調査から，本遺跡は城館跡に限らず，古墳時代以降の集落が台地全面に形成されている可能性が高いことが判明した。しかも遺構密度が高く，出土遺物も豊富な大規模な集落の存在が予想されるため，造成工事にあたっては慎重に対処する必要があると報告された。

昭和63年度は前年度の確認調査の成果を踏まえ，公園予定地の園路部分(3,500㎡)と運動広場建設予定地(700㎡)の計4,200㎡を対象に発掘調査を実施した。このうち，年度内に造成工事を行う運動広場建設予定地については調査を先行し，上層の本調査を昭和63年８月５日から同年12月23日まで行い，古墳時代前期から後期の住居跡など多数の遺構を検出した。下層の確認調査は同年11月15日から11月30日まで行った。上層調査区の約４％について調査区域全域に２ｍ×２ｍのグリッドを設定し，立川ローム層下部まで人力で掘削して，石器等の有無を確認した。その結果，４か所で石器が出土したため，周辺を十分に拡張して石器の広がりを明らかにし本調査範囲を確定した。本調査は300㎡を対象に行い，３か所でブロックを検出した。また，遺跡の中央から北西側にかけて設定された園路部分は，運動広場の調査に併行して，上層の本調査を昭和63年８月５日から平成元年３月17日まで，下層の確認調査は平成元年３月20日から３月28日まで行った。上層の本調査は狭長な調査範囲であったが，古墳時代から平安時代の相当数の遺構が複雑に重複しながら検出された。なかでも，平安時代の土師器焼成遺構が検出されたことは注目される。下層については，２か所で石器が出土したため周辺を拡張したが，それ以上の石器の出土はなかった。

平成２年度は，台地北東側部分を公園内の出入り口として整備するため，3,500㎡を対象に平成２年11月１日から同年12月27日まで上層の確認調査を実施した。確認調査は，対象範囲が斜面部を含む台地裾部から台地上までの範囲で，城館跡に関連する遺構の検出も予測されたため，幅２ｍの確認トレンチを斜面に沿って設定し，遺構・遺物の検出状況を確認した。その結果，台地縁辺部で虎口遺構や土塁，柵列等を検出した。本調査は2,520㎡を対象に行われ，平成３年３月22日に終了した。

平成３年度は，公園予定地内の園路部分(1,380㎡)の上層本調査を，平成３年12月２日から平成４年３月31日まで行った。今回は遺跡の南東側を中心に，中央部を北西－南東に連絡する園路も含めた範囲の調査が行われた。やはり狭長な調査範囲ではあったが，古墳時代後期の遺構を中心に，古墳時代前期から平

安時代の多数の竪穴住居跡が検出された。遺物の出土も多く，なかでも緑釉陶器の出土は注目される。下層の確認調査は上層の本調査に並行して，平成３年12月２日から平成４年３月17日まで行われた。その結果，２か所で石器が出土したため，周辺を拡張して石器の広がりを明らかにし，本調査の範囲を確定した。本調査は狭長な範囲ではあるが，100㎡を対象に行い２か所のブロックを検出した。

平成４年度は，公園予定地内の園路の一部が北側と南側にさらに拡張されるため，2,010㎡を対象に上層本調査を平成４年６月１日から平成５年２月15日まで行った。調査区は台地縁辺部であったが，古墳時代前期から平安時代の竪穴住居跡をはじめとする数多くの遺構が検出された。特に，調査区北側で平安時代の粘土採掘坑と土師器焼成遺構がともに検出され，昭和63年度に調査を行った土師器焼成遺構の成果も合わせて，本遺跡が規模の大きな土器生産遺跡であることが明らかとなった。下層の確認調査は，平成４年11月２日から同年12月25日まで行われたが，遺物の出土はなかった。

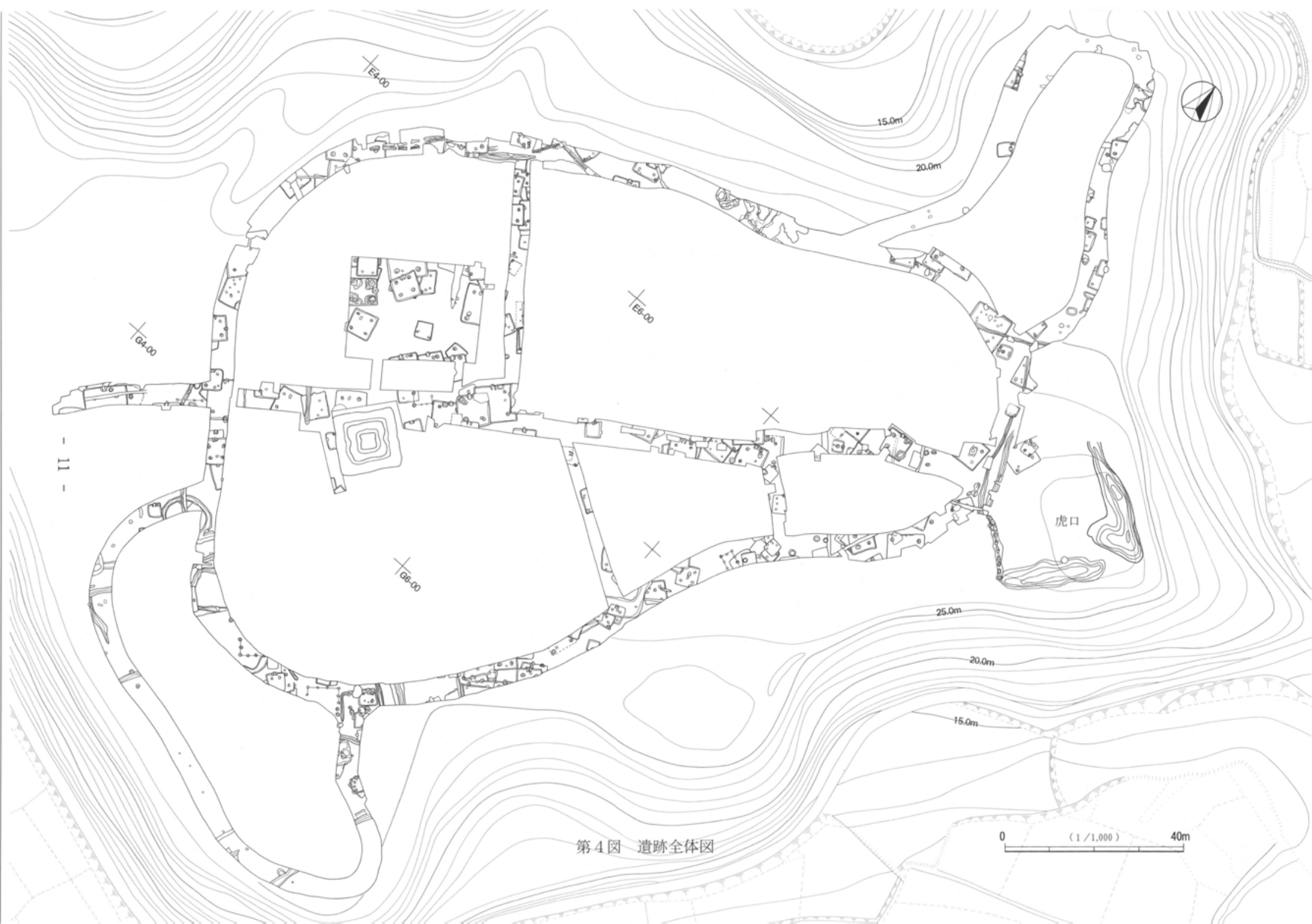
平成６年度は，遺跡内に所在していた出羽三山供養塚である通称「城の台行人塚」を公園整備のため移築することとなり，平成６年10月１日から同年10月31日まで発掘調査を行った。これは三段に築造された方形の塚で，調査終了後，古城小弓遺跡内に移築され同様の塚が再び築かれた。

以上のように，城ノ台遺跡では確認調査の結果から，台地上のほぼ全域に大規模な古墳時代前期から奈良・平安時代の集落が展開し，中世の城郭遺構などの存在も明らかになっていた。公園の造成にあたっては，園内を周回する園路や運動広場などの限定的な発掘調査のため，多くの遺構は調査区域外に広がり，しかも複雑に重複しており，全容を把握できたものは少ない。特に竪穴住居跡では，正確な形態・規模・主軸方位・柱穴の配置・炉やカマドの有無など，住居跡を構成する主要な要件について不明な点が少なからず存在する。さらに，出土状況が複雑なため，住居跡との関連性の把握が困難で帰属の判然としない遺物もあり，遺構外出土遺物として扱ったものもある。このようなことから，本報告では判明した事柄についてはできるだけ記述することにしたが，性格や時期の特定については困難な遺構が多い。竪穴住居跡の各要件のうち，規模については，遺存状態から判断して現存または推定の数値を記載し，形態を想定した。想定範囲は破線で示した。主軸方位は，炉またはカマドの配置から測定したが，いずれも確認できない竪穴住居跡は不明とした。柱穴は，検出できたものに限定して掲載したが，重複するほかの竪穴住居跡の柱穴や，単独で存在する土坑の可能性もある。また各遺構のうち，掘立柱建物跡は柱穴が調査区域外にかかっているため，正確な規模や方位が把握できないものがほとんどである。住居跡との位置関係や集落のなかでの配置など，要点が明らかにできなかった。溝状遺構は，遺跡内のほぼ全域から多数検出されたが，限定的な調査範囲のため，各遺構の連続性や方向性は判然とせず，本来の性格や用途は不明の遺構が多い。このように全容を把握できない調査範囲の制約された遺構がほとんどであるが，全体の調査成果から見る限り，本遺跡が古墳時代から平安時代にかけての重要な遺跡であることは明らかであろう。

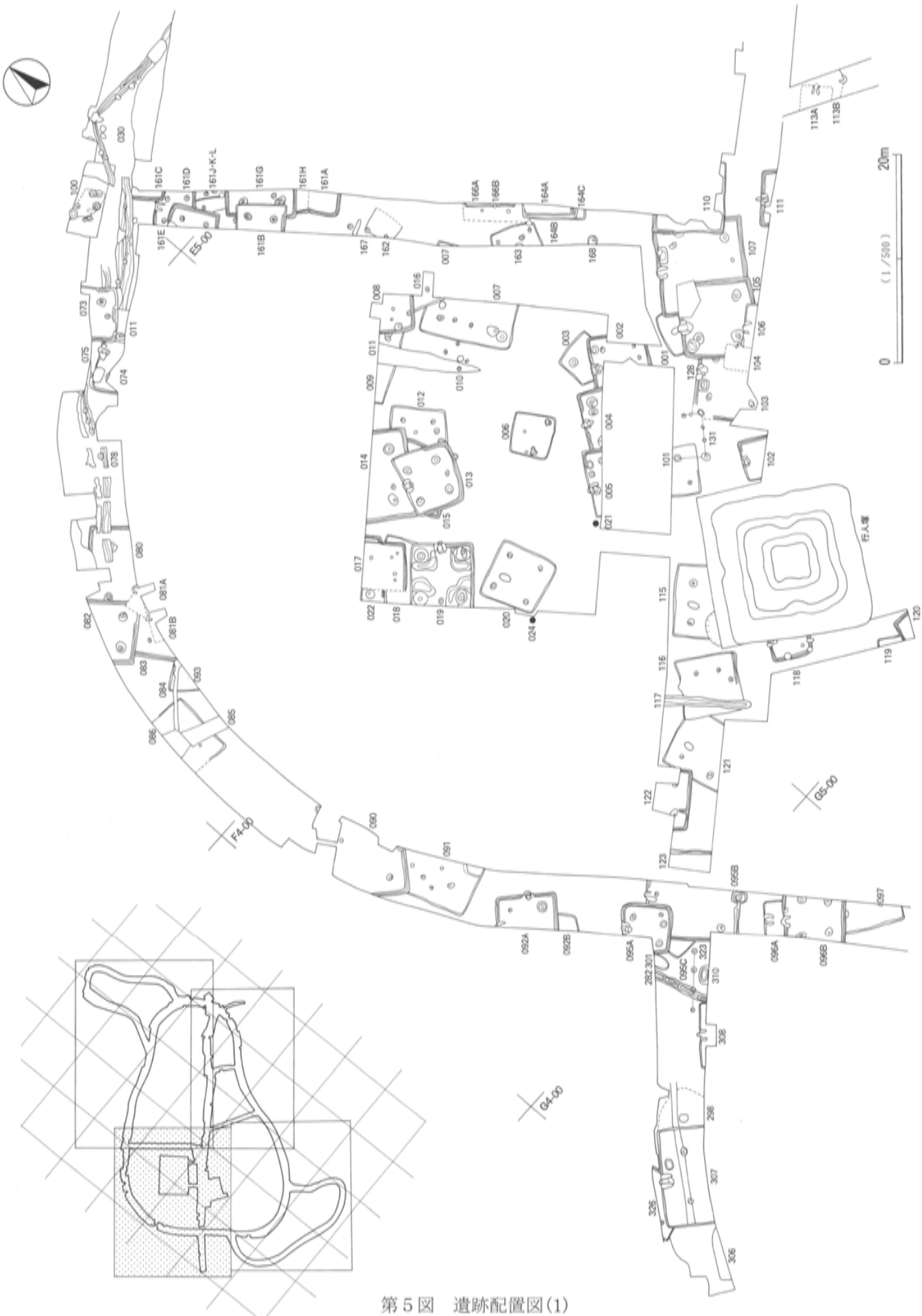
なお，遺構番号は発掘調査時の番号を極力使用することにしたが，整理作業時に出土遺物を検討して再度内容を精査した。その結果，重複の複雑な一部の遺構については，枝番を付して各遺構間の重複関係を整理したり，あるいは欠番にするなどの変更措置を行っている。そのため，出土遺物の注記は，発掘調査当時の遺構番号のままであり，報告書掲載時の遺構番号とは必ずしも一致していないものもある。

参考文献

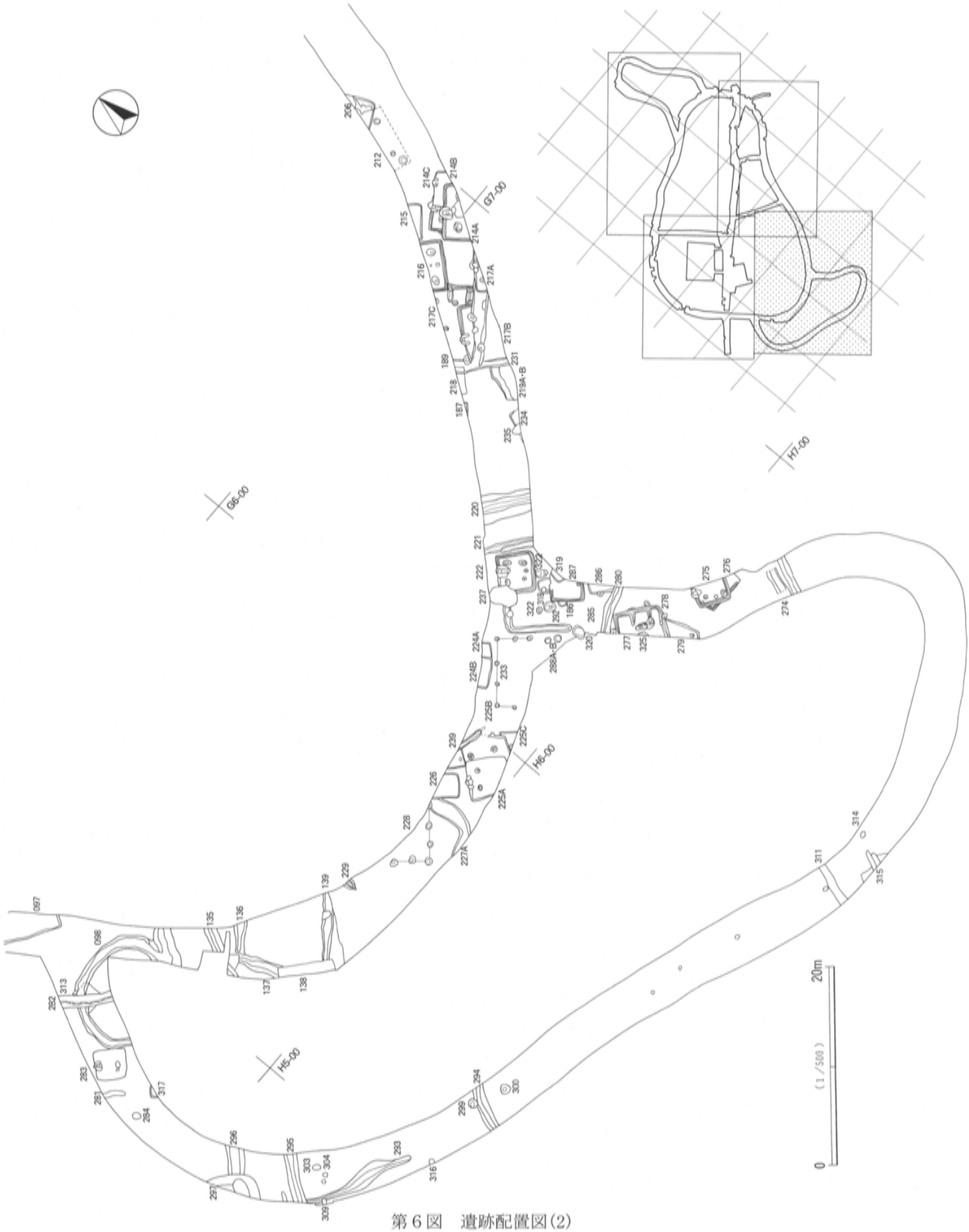
(財)千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン１－椎名崎古墳群(第１次)－』
(財)千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン２－木戸作遺跡(第１次)－』
(財)千葉県文化財センター1975『千葉東南部ニュータウン３－有吉遺跡(第１次)－』
(財)千葉県文化財センター1977『千葉東南部ニュータウン４－生浜古墳群－』
(財)千葉県文化財センター1978『千葉東南部ニュータウン５－有吉遺跡(第２次)－』
(財)千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン６－椎名崎遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン７－木戸作遺跡(第２次)－』
(財)千葉県文化財センター1979『千葉東南部ニュータウン８－ムコアラク遺跡・小金沢古墳群－』
(財)千葉県文化財センター1980『千葉東南部ニュータウン９－六通遺跡・御塚台遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン10－小金沢貝塚－』
(財)千葉県文化財センター1981『千葉東南部ニュータウン11－六通金山遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1983『千葉東南部ニュータウン12－南二重堀遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1982『千葉東南部ニュータウン13－上赤塚１号墳・狐塚古墳群－』
(財)千葉県文化財センター1983『千葉東南部ニュータウン14－バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第３次)・有吉南遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1984『千葉東南部ニュータウン15－馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1985『千葉東南部ニュータウン16－大膳野北遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1990『千葉東南部ニュータウン17－高沢遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1993『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』
(財)千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚１－』
(財)千葉県文化財センター1998『千葉東南部ニュータウン20－千葉市有吉北貝塚２－』
(財)千葉県文化財センター1999『千葉東南部ニュータウン21－千葉市有吉遺跡(第４次)・高沢古墳群－』
(財)千葉県文化財センター1999『千葉東南部ニュータウン22－鎌取場台遺跡－』
(財)千葉県文化財センター2001『千葉東南部ニュータウン23－千葉市太田法師遺跡２－』
(財)千葉県文化財センター2002『千葉東南部ニュータウン24－千葉市富岡古墳群・富岡古墳群Ｂ支群－』
(財)千葉県文化財センター2002『千葉東南部ニュータウン25－千葉市有吉城Ⅰ－』
(財)千葉県文化財センター2003『千葉東南部ニュータウン26－千葉市椎名神社遺跡・古城小弓遺跡・六通神社南遺跡・御塚台遺跡－』
(財)千葉県文化財センター2003『千葉東南部ニュータウン27－千葉市春日作遺跡－』
(財)千葉県文化財センター2004『千葉東南部ニュータウン28－千葉市今台遺跡－』
(財)千葉県文化財センター2004『千葉東南部ニュータウン29－千葉市バクチ穴遺跡・大膳野南貝塚・有吉城２－』
(財)千葉県文化財センター2004『千葉東南部ニュータウン30－千葉市伯父名台遺跡－』
(財)千葉県文化財センター2005『千葉東南部ニュータウン31－千葉市ムコアラク遺跡２・ムコアラク10号墳・上赤塚遺跡－』
(財)千葉県文化財センター2005『千葉東南部ニュータウン32－千葉市小金沢古墳群２－』
(財)千葉県文化財センター2005『千葉東南部ニュータウン33－千葉市椎名崎古墳群Ｃ支群－』



第４図　遺跡全体図

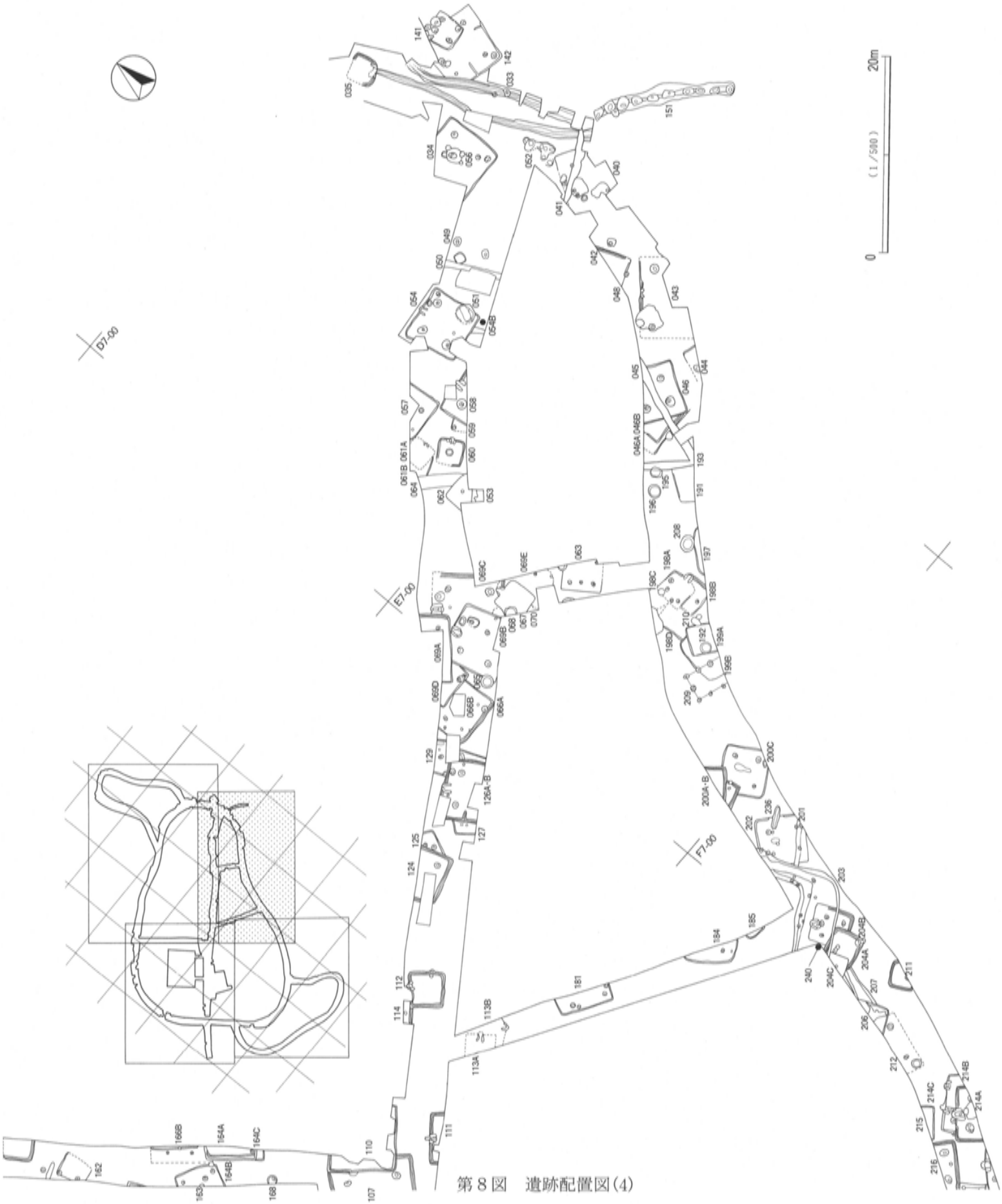


第５図　遺跡配置図(1)



第６図　遺跡配置図(2)

第７図　遺跡配置図(3)



第８図　遺跡配置図(4)

第２章　旧石器時代

第１節　調査の概要

城ノ台遺跡では，昭和63年度および平成３・４年度に下層調査を実施した。各年度の調査概要は以下のとおりである(第10図)。

昭和63年度は，4,200㎡を調査対象範囲として，160㎡の確認調査と300㎡の本調査を実施した。調査の結果，２か所のブロック(第１・２地点)と３か所の単独出土地点(Ｅ４-88・Ｅ５-99・Ｆ５-03グリッド)を検出した。

平成３年度は，1,380㎡を調査対象範囲として，56㎡の確認調査と100㎡の本調査を実施した。調査の結果，２か所のブロック(第３地点ａ・ｂ)と１か所の単独出土地点(Ｆ６-79グリッド)を検出した。

平成４年度は，2,010㎡を調査対象範囲として，80㎡の確認調査を実施し，調査終了とした。

第１・２地点では，立川ローム層第２黒色帯下部のⅨ層を中心として石器群が出土した。ナイフ形石器や台形石器，石斧など当該期に特徴的な石器はみられず，出土資料の大半は剥片と石核であり，これに楔形石器や使用痕ある剥片などが少数伴っていた。したがって，剥片生産を中心として形成されたブロックと考えられる。いっぽう，第３地点ａ・ｂではⅢ層からブロックが検出された。これは，武蔵野台地におけるⅣ層中～下部に対応する可能性があるが，被熱した破損礫を主体に構成されており，石器はブロック外で製作された搬入品が少量みられるにすぎない。第１・２地点とは対照的な様相で厨房的な機能が想定される空間である。

なお，遺物分布図や実測図，組成表中で用いた石器，石材の略号は，以下のとおりである。

石器：ナイフ形石器(Kn ☆)，台形石器(Tr △)，角錐状石器(Ka ◎)，槍先形石器(Po ◎)，掻器(Es ◎)，削器(Ss ○)，彫器(Gr ○)，楔形石器(Pi ○)，加工痕ある剥片(Rf ○)，使用痕ある剥片(Uf ○)，石刃(Bl ▲)，小石刃(Bls ▲)，敲石類(Ha ■)，台石(Anb ■)，礫器(Pb ■)，石斧(Ax ◆)，剥片(B ●)，削片(Sp ●)，砕片(C •)，石核(D □)，細石刃核(Mc □)，原石(E ⊙)，礫(＊)

石材：黒曜石(Ob ●)，安山岩(An ○)，流紋岩(Rh □)，頁岩(Sh ▲)，珪質頁岩(Csh ▲)，凝灰岩(Tu ▲)，チャート(Ch △)，砂岩(Sa ◎)，瑪瑙・玉髄(Ag ■)，石英(Qu ⊙)，ホルンフェルス(Ho ☆)

第２節　基本土層（第９図）

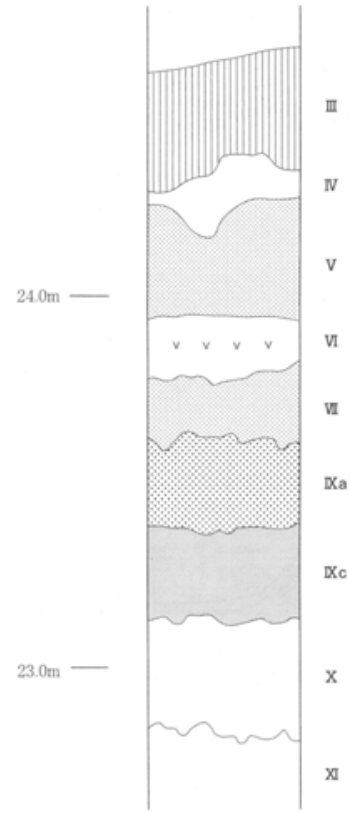
本遺跡における立川ローム層の堆積状況は，下総台地で広く観察される基本層序と共通する。以下，各層の概略について記す。

Ⅲ　層：黄褐色の軟質ローム層で，厚さは30cmほどである。

Ⅳ　層：赤みを帯びた黄褐色の硬質ローム層である。武蔵野台地のⅣ層上部に相当する層は，軟質化してⅢ層に取り込まれており，本層は，武蔵野台地Ⅳ層下部に対応すると考えられる。赤色スコリアを含み，厚さは10cm前後である。

Ⅴ　層：にぶい黄褐色の硬質ローム層で，下総台地における立川ローム層第１黒色帯に相当する。厚さは10cm～20cmである。

Ⅵ　層：明黄褐色の硬質ローム層で，黒色粒と火山ガラスによって構成



第９図　基本土層図

第10図　旧石器時代調査概要図

されるＡＴ(姶良丹沢火山灰)ブロックがまとまっている。厚さは10cm～15cmである。

Ⅶ　層：黄褐色の硬質ローム層で，第２黒色帯上半部に相当する。ＡＴが細かく拡散しており，あまり暗い色調ではない。厚さは10cm～20cmである。

Ⅸａ層：赤みを帯びた褐色硬質ローム層で，第２黒色帯下半部の上層である。赤色，暗緑色のスコリアを含む。厚さは10cm～20cmである。

Ⅸｃ層：暗褐色の硬質ローム層で，第２黒色帯下半部の下層にあたる。立川ローム層の中では最も暗く，薄墨を流したようにみえる。赤色・暗緑色のスコリアがⅨａ層よりも多く，大型のものが顕著である。厚さは20cm～30cmである。

Ｘ　層：黄褐色の硬質ローム層で，Ⅸ層に比べて軟質になる。スコリアは激減するが，部分的に赤橙色で小型のスコリアを含む。本層下底は波状を呈する。厚さは20cm～30cmである。

第３節　第１地点（第11～17図，第１・２表，図版29～31）

１．ブロックの概要

第１地点の石器群は，遺跡中央のＥ５-50～53・60～64・70～74・83・84グリッドに分布する。立地は，台地中央の平坦部である。

本地点から出土した石器・礫の分布は第11～16図のとおりで，２～３か所のブロックに区分すべき状況を示している。細かくみると，Ｅ５-63グリッドの南東部やＥ５-52グリッドの南部に石器が集中し，それぞれ西側に拡散している様子が窺えることから，それぞれの集中部がブロックの中心部であった可能性が考えられる。しかし，調査範囲の外側(東側)に石器の分布が広がる可能性がきわめて高いことから，分析単位としてのブロックを設定することが困難であり，長軸18m，短軸13mにおよぶ範囲から出土した232点の石器を一つのまとまりとして扱うことにした。石器群の形態的特徴や石器石材，出土層位からみて，これらの石器群を同時期とすることに問題はないと考えられる。なお，記述の都合でＥ５-63の方眼杭を境に，北西部の一群をグループＡ，南東部の一群をグループＢとする。

石器の出土層位は概ねⅨ層を中心とし，50cmほどの高低差をもって包含されている(第11～16図)。

石器組成は，削器２点，楔形石器８点，加工痕ある剥片２点，使用痕ある剥片８点，敲石８点(１個体)，剥片172点(164個体)，砕片13点，石核17点(13個体)，礫２点の合計232点(213個体)で，石器の石材は，黒曜石７点，安山岩175点，流紋岩10点，頁岩17点，珪質頁岩10点，凝灰岩１点，砂岩２点，ホルンフェルス６点，メノウ２点，礫の石材は，流紋岩２点である。

２．母岩の特徴と内容

・母岩１：本遺跡から出土した安山岩の中では最もきめが細かく硬質で，剥離面は滑らかである。色調は，やや青みがかった黒灰色を呈する。接合資料および剥片，石核に残る自然面の状況から判断して，原石は拳大ほどの円礫で，概ねその半分が遺跡内に遺存していると考えられる。自然面も比較的滑らかで，小さな弧状の傷が全面にみられる。同一母岩は，グループＡの東部に集中する。

石器組成は，使用痕ある剥片１点，剥片11点，石核２点で，総重量は103.9ｇである。接合資料は，剥片５点と石核１点の合計６点である(合計56.6ｇ)。

・母岩２：くすんだ黒灰色で，きめの粗い安山岩である。自然面は緩やかな曲面を成すことから，原石は円礫と判断できるが，自然面の残る資料が少なく，もとの大きさは不明である。自然面は，紙やすりのようにザラザラしている。同一母岩は，グループＢの東部に大半が集中し，少量がグループＡに分布する。

石器組成は，削器１点，剥片11点，石核１点で，総重量66.0ｇである。接合資料は，削器１点と剥片１点の合計２点である(8.1ｇ)。

・母岩３：白い夾雑物が顕著な，淡い黒灰色の安山岩である。同一母岩は，グループＡの西部に接合資料が集まり，１点がグループＢに分布する。

石器組成は，剥片４点(３個体)，石核３点(１個体)で，総重量は87.5ｇである。剥片１点を除いた６点が接合する。

・母岩４：φ0.5㎜以下の細かな粒を多量に含む安山岩で，色調は黒灰色から灰色までの変異がある。自然面は，凹凸が顕著であるが，角張らず摩滅している。同一母岩は，グループＡの東部とグループＢの東部に分かれて分布する。接合資料はグループ内で完結する。

石器組成は，楔形石器２点，使用痕ある剥片１点，剥片31点(28個体)，砕片３点，石核３点(２個体)で，総重量は120.6ｇである。接合資料は，剥片２点と石核１点が接合したもの(20.7ｇ)，剥片１点と石核２点(１個体)が接合したもの(26.8ｇ)，剥片３点が折れ面で接合し，１個体になるもの(4.3ｇ)，剥片２点が折れ面で接合し，１個体になるもの(10.4ｇ)の４組がある。

・母岩５：きめが細かく青みがかった灰色の安山岩である。白色の夾雑物が目立つ。同一母岩は，グループＡの東部とグループＢの西部に分布し，両者は平面的に連続しない。複数の接合資料のうち２組がグループＡ・Ｂ間で接合する。

石器組成は，楔形石器１点，使用痕ある剥片１点，剥片32点(29個体)，石核４点(３個体)で，総重量は111.3ｇである。接合資料は，剥片３点が表裏で接合したもの(14.3ｇ)，剥片１点と石核１点が接合したもの(10.7ｇ)，剥片３点が折れ面で接合し，１個体になるもの(8.1ｇ)，石核２点が折れ面で接合し，１個体になるもの(12.1ｇ)の４組である。

・母岩６：やや軟質で黄色みを帯びた灰色の安山岩である。同一母岩は，グループＡの西側に散漫に分布する。

石器組成は，楔形石器２点，剥片２点で，総重量は16.7ｇである。接合資料は，楔形石器２点と剥片１点が接合したもの(16.4ｇ)がある。

・母岩７：灰白色で，剥離面にシャープさのない軟質の安山岩であるが，「トロトロ石」ほどに軟質ではない。同一母岩は，グループＡの西側に散漫に分布する。

石器組成は，楔形石器１点，剥片５点，石核１点で，総重量は39.9ｇである。

・母岩８：灰色の地に黒灰色の縞が平行する安山岩である。使用痕ある剥片１点(31.1ｇ)の単独資料である。

・母岩９：灰白色で軟質の安山岩(トロトロ石)である。楔形石器１点(8.8ｇ)の単独資料である。

・母岩10：黒褐色で比較的硬質の安山岩である。自然面は平滑な２面で，稜がまっすぐとおることから，原石は角礫に近い可能性がある。石核１点(10.4ｇ)の単独資料である。

・母岩11：淡黒灰色の安山岩である。自然面は比較的滑らかな曲面で，円礫の一端と考えられる。剥片１

点(19.4ｇ)の単独資料である。

・母岩12：灰白色の安山岩である。楔形石器１点(11.3ｇ)の単独資料である。

・母岩13：自然面は褐色，内部は緑がかった灰色の頁岩である。自然面は滑らかで，緩やかな曲面を成す。原石の大きさは復元できないが，その一部の塊を搬入し，剥片生産を行った母岩である。同一母岩は，グループＢの西部にまとまって分布する。

石器組成は，剥片12点(11個体)，石核１点で，総重量は34.9ｇである。接合資料は，剥片６点と石核１点が接合したもの(29.8ｇ)，剥片２点が折れ面で接合したもの(2.3ｇ)がある。

・母岩14：黄褐色から黒灰色に変異する，きめの粗い流紋岩である。剥片１点(2.9ｇ)の単独資料である。

・母岩15：青みがかった灰色を呈する硬質の流紋岩である。剥片１点(6.1ｇ)の単独資料である。

・母岩16：漆黒色不透明で白い夾雑物が含まれている黒曜石である。肉眼的には栃木県高原山産と考えられる。石器組成は，剥片３点，石核１点で，総重量は8.9ｇである。

・母岩17：黒色不透明で白い夾雑物が少量含まれている黒曜石である。上記と同様の原産地が考えられる。使用痕ある剥片１点(2.8ｇ)の単独資料である。

・母岩19：黒色と灰色が互層になる不透明な黒曜石である。小さな夾雑物が含まれている。加工痕ある剥片１点(4.1ｇ)の単独資料である。

・母岩20：青みがかった黒灰色で不透明の黒曜石である。加工痕ある剥片１点(1.2ｇ)の単独資料である。

・母岩21：青みがかった灰色で，泥岩質の粗いホルンフェルスである。剥片１点(8.4ｇ)の単独資料である。

・母岩22：黒灰色で硬い砂岩質のホルンフェルスである。削器１点(14.6ｇ)の単独資料である。

・母岩23：黄灰色で細粒の砂岩である。剥片１点(80.8ｇ)の単独資料である。

・母岩24：緑がかった灰色で，きめの粗い凝灰岩である。剥片１点(2.4ｇ)の単独資料である。

・母岩25：乳白色半透明の瑪瑙である。剥片１点(10.1ｇ)の単独資料である。

・母岩26：節理面は褐色，内部は灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。使用痕ある剥片１点(16.2ｇ)の単独資料である。

・母岩27：自然面は褐色，内部は黄色みを帯びた灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。剥片１点(8.8ｇ)の単独資料である。

・母岩28：自然面は褐色，内部は暗褐色の珪質頁岩である。使用痕ある剥片１点(5.9ｇ)の単独資料である。

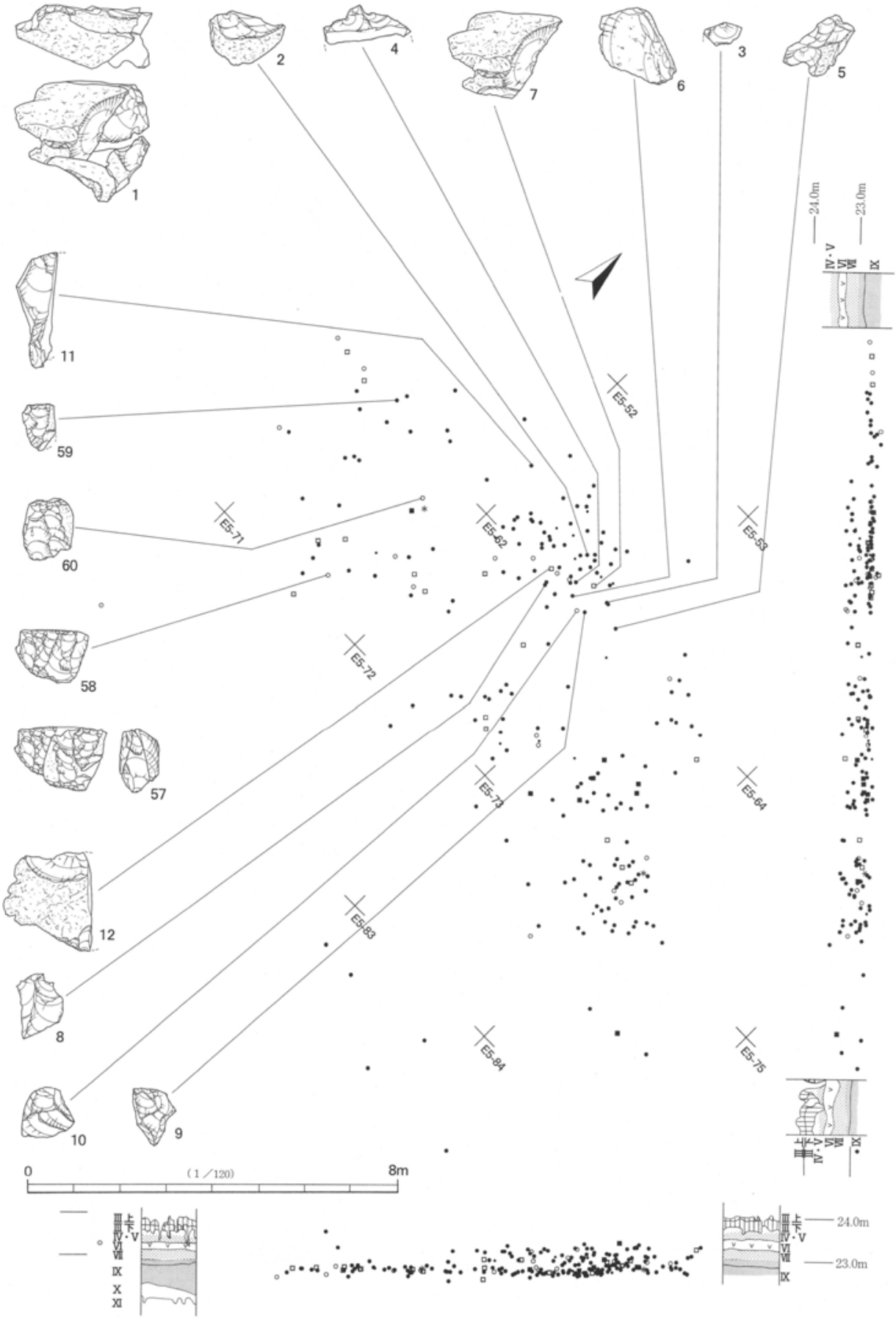
・母岩29：自然面は褐色と赤褐色，内部は灰緑色の嶺岡産珪質頁岩である。剥片１点(3.7ｇ)の単独資料である。

・母岩30：黄灰色の珪質頁岩である。剥片２点(1.8ｇ)である。

・母岩31：自然面は褐色，内部は暗灰緑色の珪質頁岩である。石器組成は，剥片１点，砕片１点で，総重量は0.8ｇである。

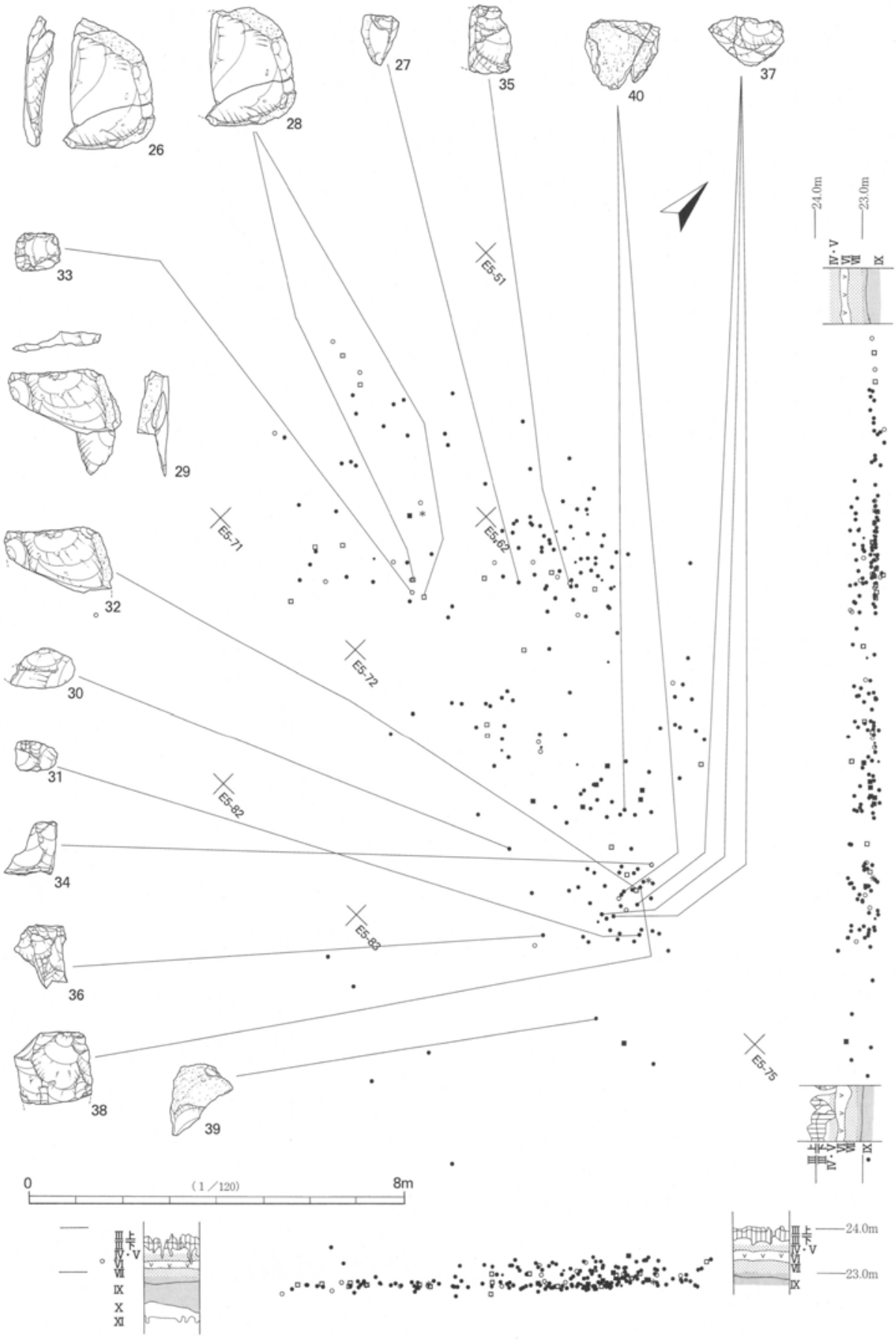
・母岩32：灰褐色で斑晶の多い流紋岩である。大型の敲石１個体(1,126.2ｇ)である。８点に破砕されているが，原因は不明である。グループＢの中央部を中心に，広い範囲に分布する。

なお，母岩分類できなかった資料に，安山岩の使用痕ある剥片１点，剥片37点，砕片９点(総重量15.1ｇ)，頁岩の剥片４点(2.6ｇ)，珪質頁岩の剥片２点(1.7ｇ)，砂岩の剥片１点(2.4ｇ)，ホルンフェルスの剥片４点(4.4ｇ)，瑪瑙の剥片１点(4.8ｇ)がある。

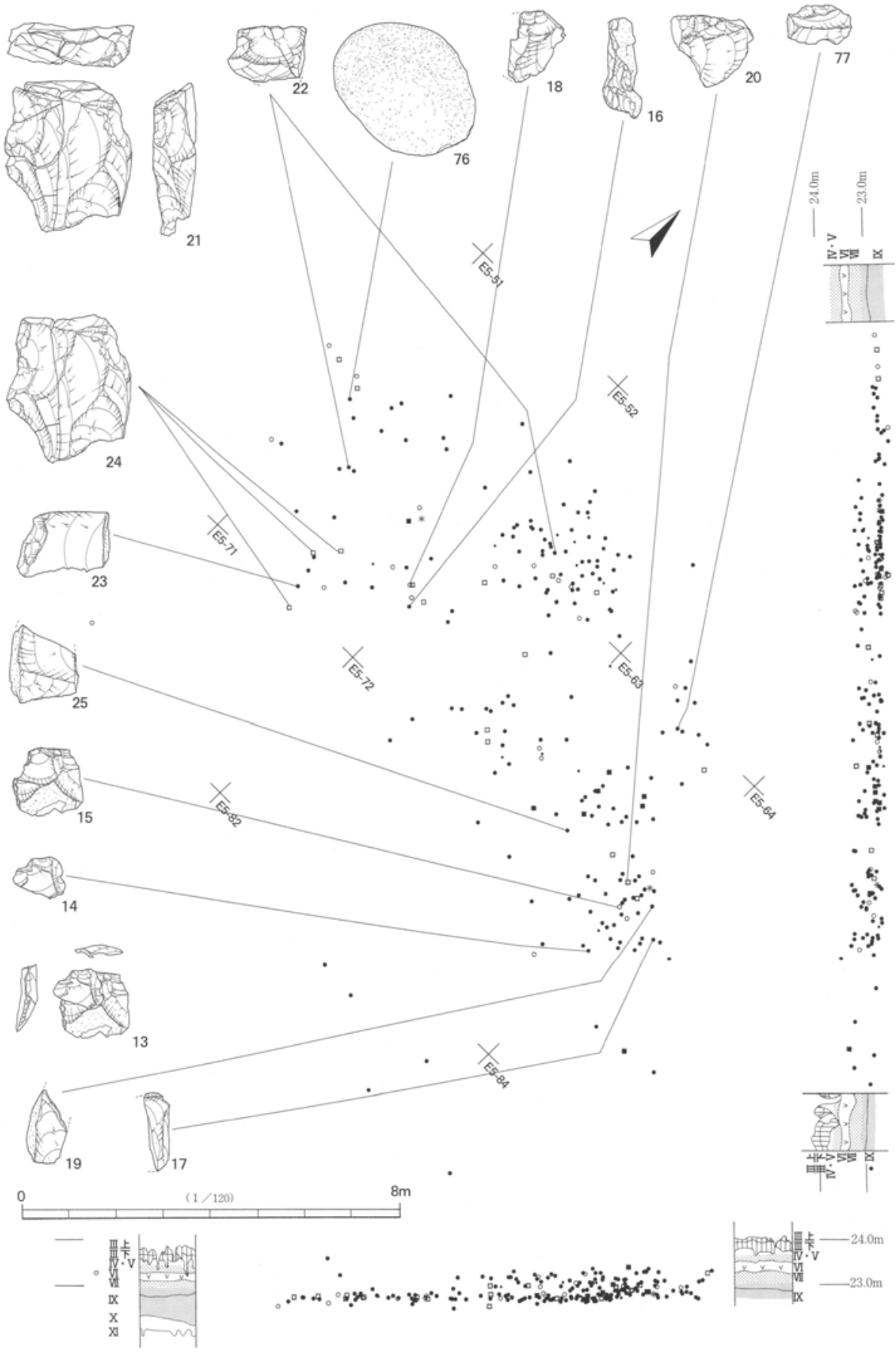


第11図　第１地点石器別分布図(1)

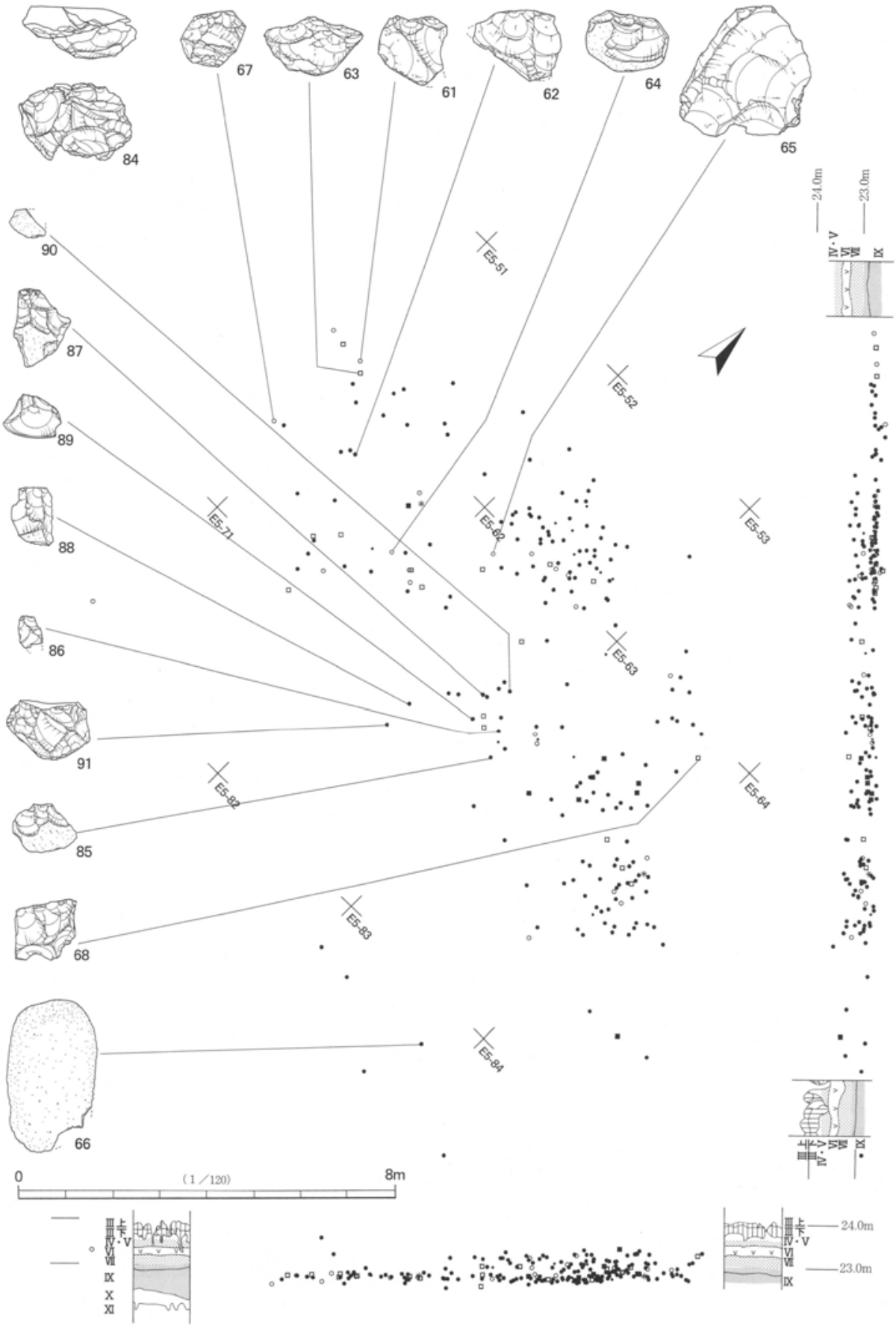
第12図　第１地点石器別分布図(2)



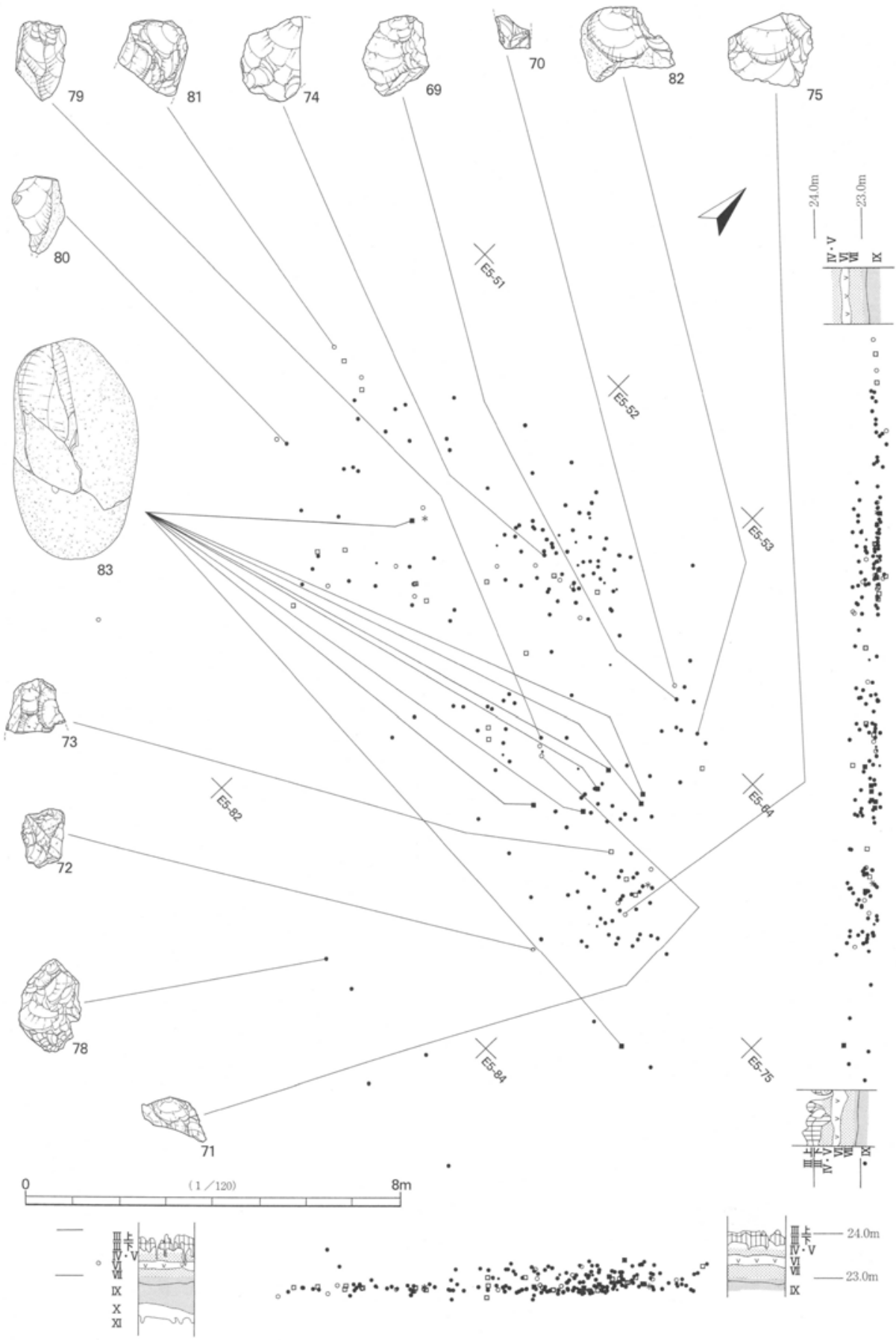
第13図　第１地点石器別分布図(3)



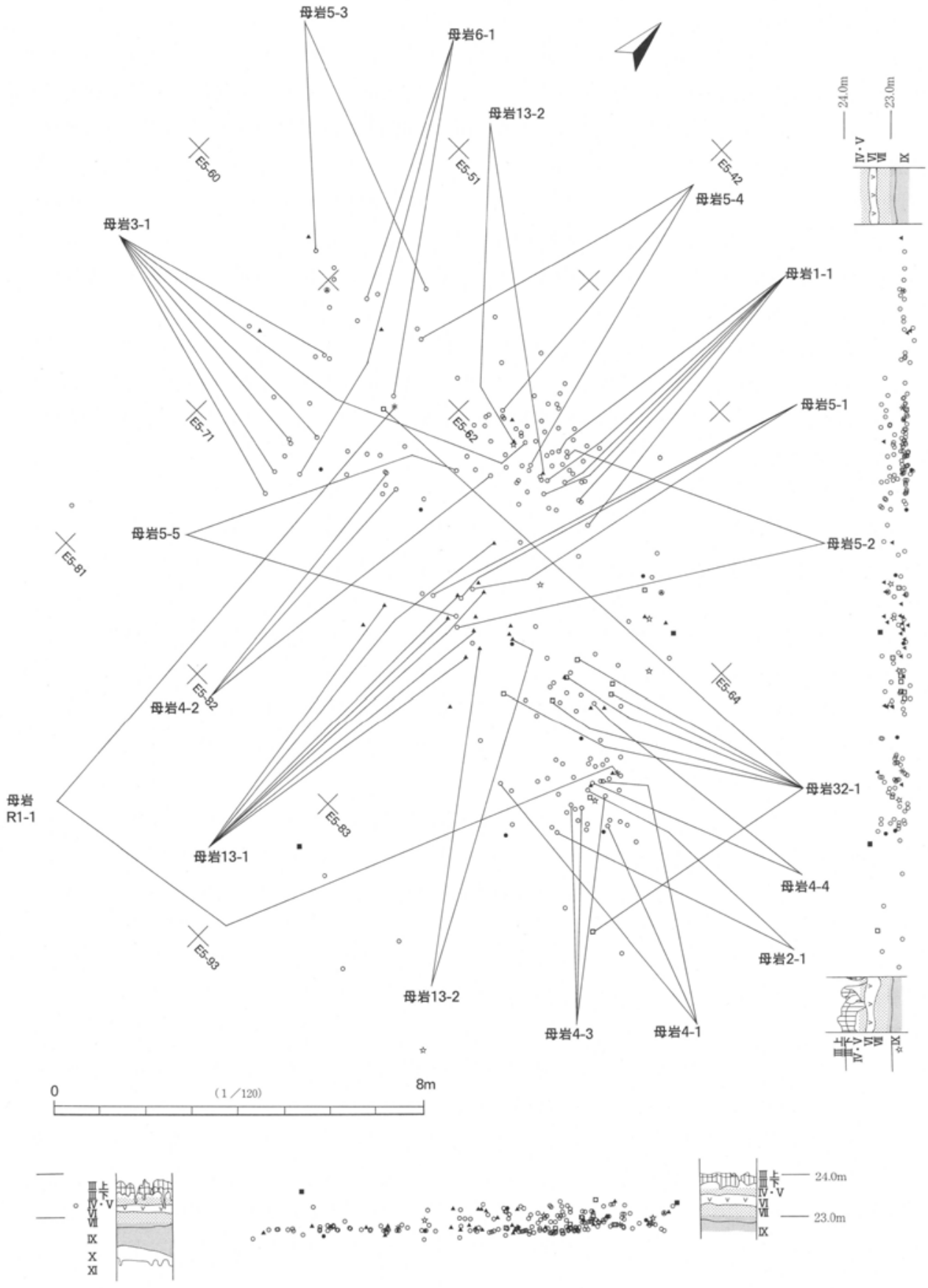
第14図　第１地点石器別分布図(4)



第15図　第１地点石器別分布図(5)



第16図　第１地点石器別分布図(6)



第17図　第１地点石材別分布図

3．出土遺物（第18～27図）

・母岩１（第18図１～７，第19図８～12）　１は，剥片５点（２～６）と石核１点（７）の接合資料である。接合資料からみた剥片剥離工程は，①原石を分割し，石核の素材が準備される。分割面は１の裏面に広く残る風化の著しい剥離面（図の上方から剥離）と中央やや下の剥離面（左から剥離）である。両者は二つの剥離面にもみえるが右端で一つになっており，おそらく，上方からの加撃によってヒビが入った後（または偶発的な衝撃でヒビが入っていた），左方向からの加撃によって分割面が形成されたのであろう。②裏面左下に示した剥離によって打面が作られ，小型不定型の剥片が数枚剥離される（接合したものは２→３→５の順番）。③②の作業面を打面として６が剥離される。④石核の端部が折れ（４），さらにもう一度石核が大きく折れて，作業を終了している。

８～12は，上記の資料に接合しないが，同一母岩と判断した剥片，石核である。８～11の剥片は，７や12とは別の石核から剥離された可能性が高い。また，12は，裏面に素材時の主要剥離面を広く残す剥片素材の石核である。こうした状況から，原石から数個の石核素材が生成され，そのいくつかについて本遺跡で剥片生産が行われたことがわかる。

・母岩２（第19図13～20）　13は，剥片１点（14）と削器１点（15）の接合資料である。平坦な打面から不定型の剥片を連続的に剥離している。15には，表面左側縁の一部に細かな調整加工を施している。

16～20は，同一母岩と判断した資料である。16～19は形状の整っていない縦長の剥片，20は打面と作業面を頻繁に移動させて，寸詰まりの縦長剥片を生産している石核である。

・母岩３（第20図21～25）　21は，剥片３点（２個体，22・23）と石核３点（１個体，24）の接合資料である。剥片剥離工程は，①大型厚手で板状の剥片を石核の素材とする。素材時の主要剥離面は裏面に広く残る。②21の左側で，表裏を作業面として交互剥離を行い，22を含む中・小型不定型の剥片を剥離する。22は剥離時に二つに割れている。③打面を21の上方に移動し，裏面を作業面として23を剥離する。これによって石核が二つに割れ，作業を終了している。

25は上記の資料に接合しない剥片である。板状を呈する剥片の一部で，21の石核素材に共通する。

・母岩４（第21図26～32，第22図33～40）　26は，剥片１点（27）と石核２点（１個体，28）の接合資料である。剥片剥離工程は，①中型厚手の剥片を石核の素材とする。素材剥片は，剥離時に左側が欠損している。②裏面を作業面にあてて，小型の剥片（27）を剥離する。

29は剥片２点（30・31）と石核１点（32）の接合資料である。剥片剥離工程は，①26に類似した中型厚手の剥片を石核の素材とする。②裏面の左側から小型の剥片数枚を剥離する。

33～40は，同一母岩と判断した各種石器である。33・34は楔形石器，35は使用痕ある剥片，36～40は不定型の剥片である。実測図を掲載していない資料にも小型の剥片が多いことから，接合資料の26・29以外にも剥片生産が行われたと考えられるが，石核がないため詳細は不明である。

・母岩５（第22図41～43，第23図44～56）　41は，剥片３点の接合資料である。もともと１個体の剥片が割れたものであるが，41の上端が細かく潰れており，42と43の接合面は上方からの加撃によるものであることから，楔形石器の製作を意図したものかも知れない。42の右側にある樋状の剥離面も楔形石器通有の割れ面に似る。44，47は剥片素材の石核に剥片が接合したものである。47は下端が潰れていることから，両極

打撃による可能性もある。

50～56は，同一母岩と判断した石器類で，楔形石器(50)，剥片(51～55)，石核(56)である。51, 54は打瘤の発達しない剥片で，両極打撃による可能性がある。本母岩は，剥片，石核が一定量あるものの，いずれも小型のものが大半で自然面を広く残すものはみられない。打面や末端部が潰れていたり，打瘤の発達しない剥片が含まれるなど，楔形石器(両極打撃)に関連した資料が多いようである。

・母岩６(第24図57～60) 57は，楔形石器２点(58・60)と剥片１点(59)の接合資料である。表面に自然面，上面に石核素材時のものと考えられる分割面(ポジティブな面)がある。

はじめに，厚手の剥片を素材として楔形石器の製作を開始したが，製作途上で二つに割れたため，それぞれに対して作業を継続し，最終的に二つの楔形石器を仕上げたと考えられる。

・母岩７(第24図61～63) 61は楔形石器，62は剥片，63は剥片素材の石核である。接合資料，自然面を広く残す剥片などはみられない。原石のごく一部が搬入され，小規模な剥片生産が実施されたものと考えられる。

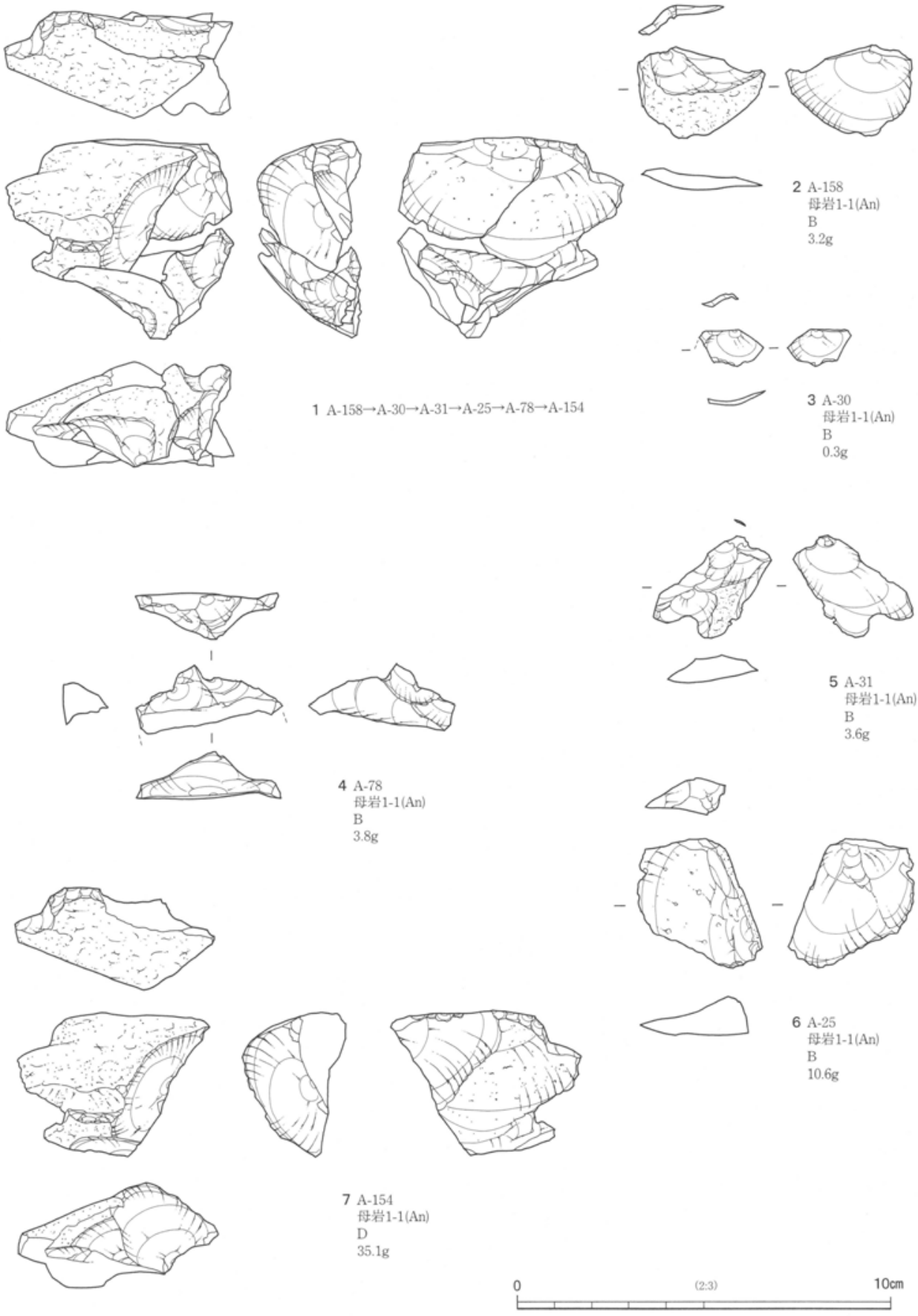
・母岩８～12(第24図64・65，第25図66～68) いずれも安山岩の単独母岩である。64は，不定型の剥片を用いた楔形石器である。裏面に素材の主要剥離面が広く残り，裏面の打面部と末端部に細かな剥離痕がみえる。65は，大型幅広の不定型な剥片を利用した使用痕ある剥片である。鋭利な右側縁に刃こぼれがみられる。66は，打瘤の扁平な剥片，67・68は小型不定型の剥片を生産した石核である。

・母岩13(第27図84～90) 84は，剥片６点(85～90)と石核１点(91)の接合資料である。接合資料からみた剥片剥離工程は，①原石を分割し，石核素材とする(本遺跡外)。②表裏を作業面として，求心的な打点移動と交互剥離によって，小型不定型の剥片を生産する。この過程で，85→86→87→88→89の順で剥片が剥離される。なお，91の下端部をみると，掻器の刃部のように細かな剥離面が連続していることから，石器に転用されたことも考えられる。90は，この細かな剥離面に近接して接合することから，石核としての機能が終了する時点での剥離であった可能性が高い。

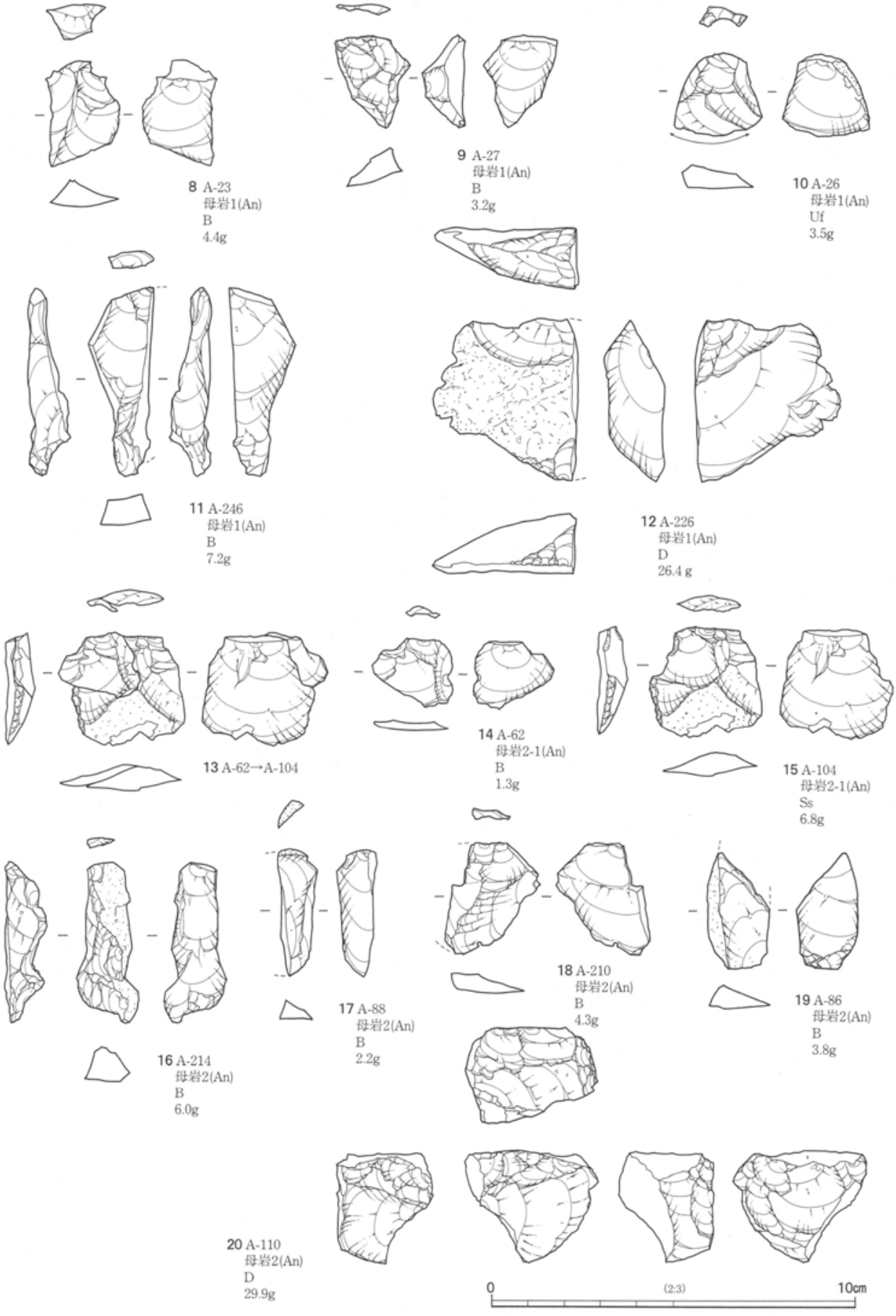
・母岩15～17・19・20(第25図69～73) 69は流紋岩の単独資料による幅広の不定型な剥片である。表面の剥離方向は，概ね主要剥離面と一致する。70～73は黒曜石の石器類であるが，遺跡内において製作作業の形跡はほとんどない。70は，不定型の剥片を用いた加工痕ある剥片である。ナイフ形石器の可能性もあるが，上下とも欠損しており形態は不明である。71は，使用痕ある剥片で，不定型な剥片の鋭利な縁辺に刃こぼれがみられる。72は，寸詰まりの縦長剥片を素材とし，左側面に数回の小剥離を行った加工痕ある剥片である。73は，剥片素材の石核である。表裏を作業面と，交互剥離によって小型不定型の剥片を剥離している。下半は欠損する。

・母岩21～29(第25図74・75，第26図76～82) 74～82は，各種石材の単独母岩による石器である。74・76～78・80・82は不定型の剥片，79・81は不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片である。75はホルンフェルスの削器である。やや厚手の剥片を素材として主要剥離面側に粗い調整加工を行い，鋸刃状の刃部を作っている。

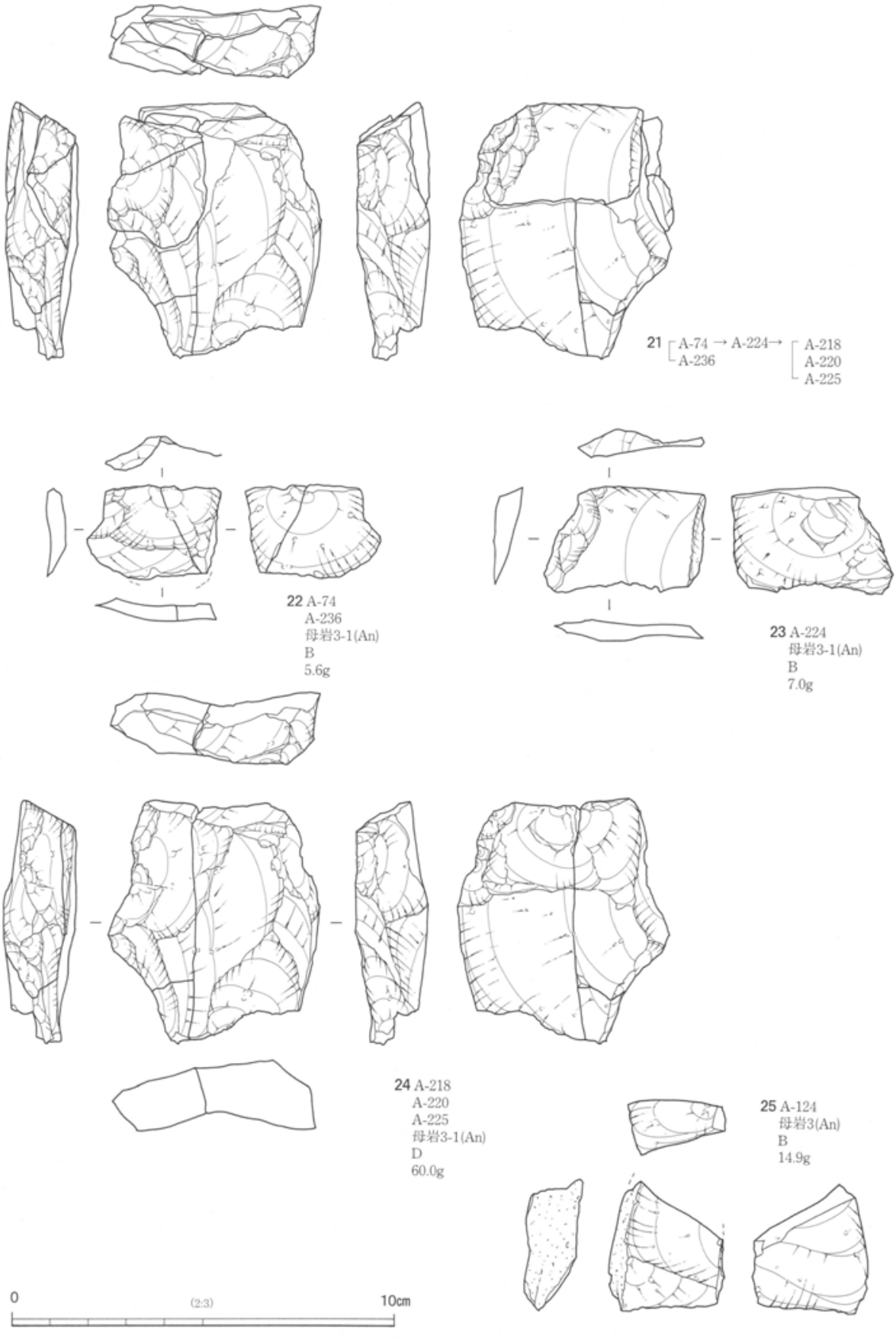
・母岩32(第26図83) 大型の敲石である。片手で自由に使える重さではなく，用途は不明である。ばらばらになって出土しており，使用方法に関連するのかも知れない。



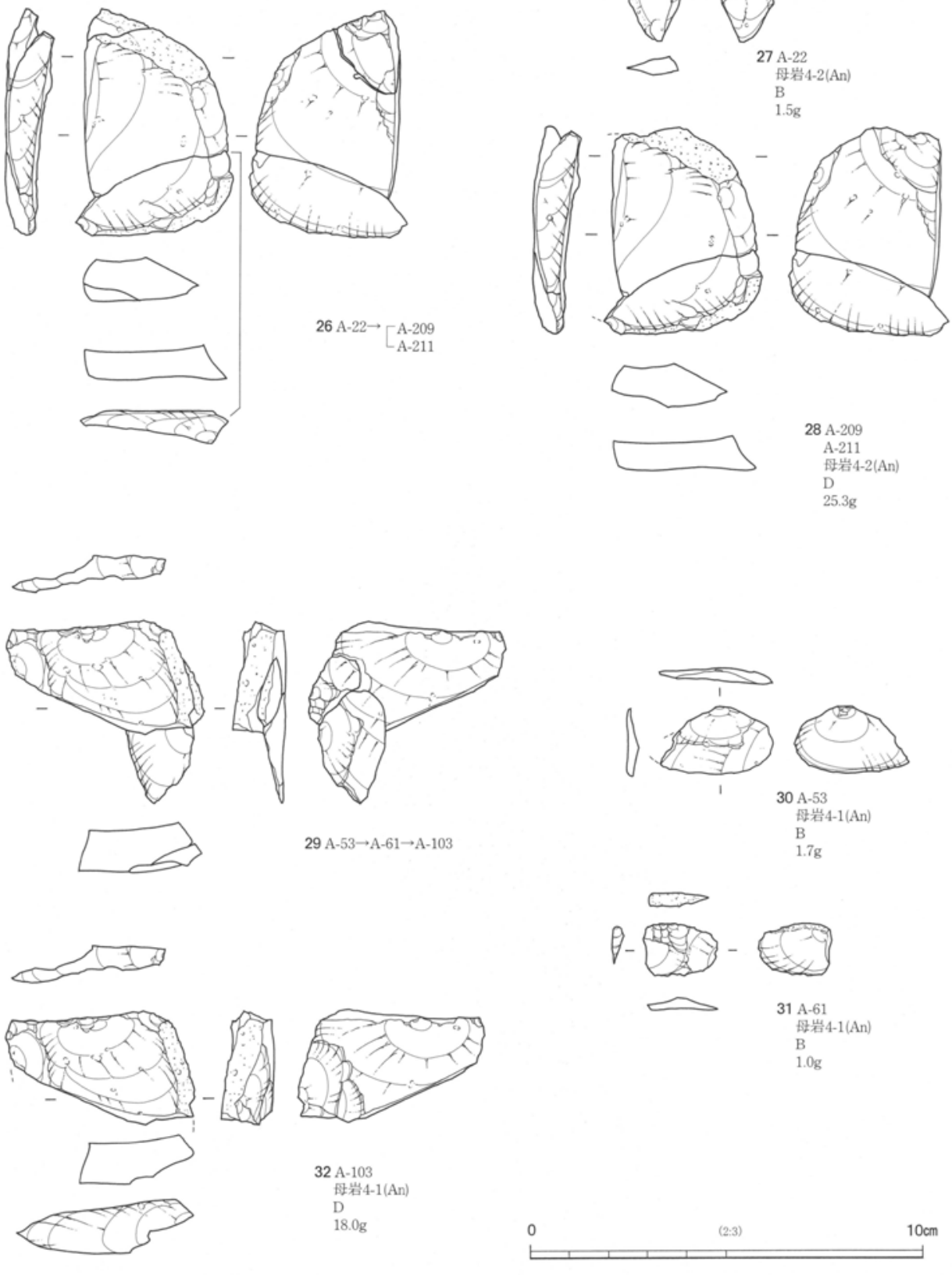
第18図　第１地点出土遺物(1)



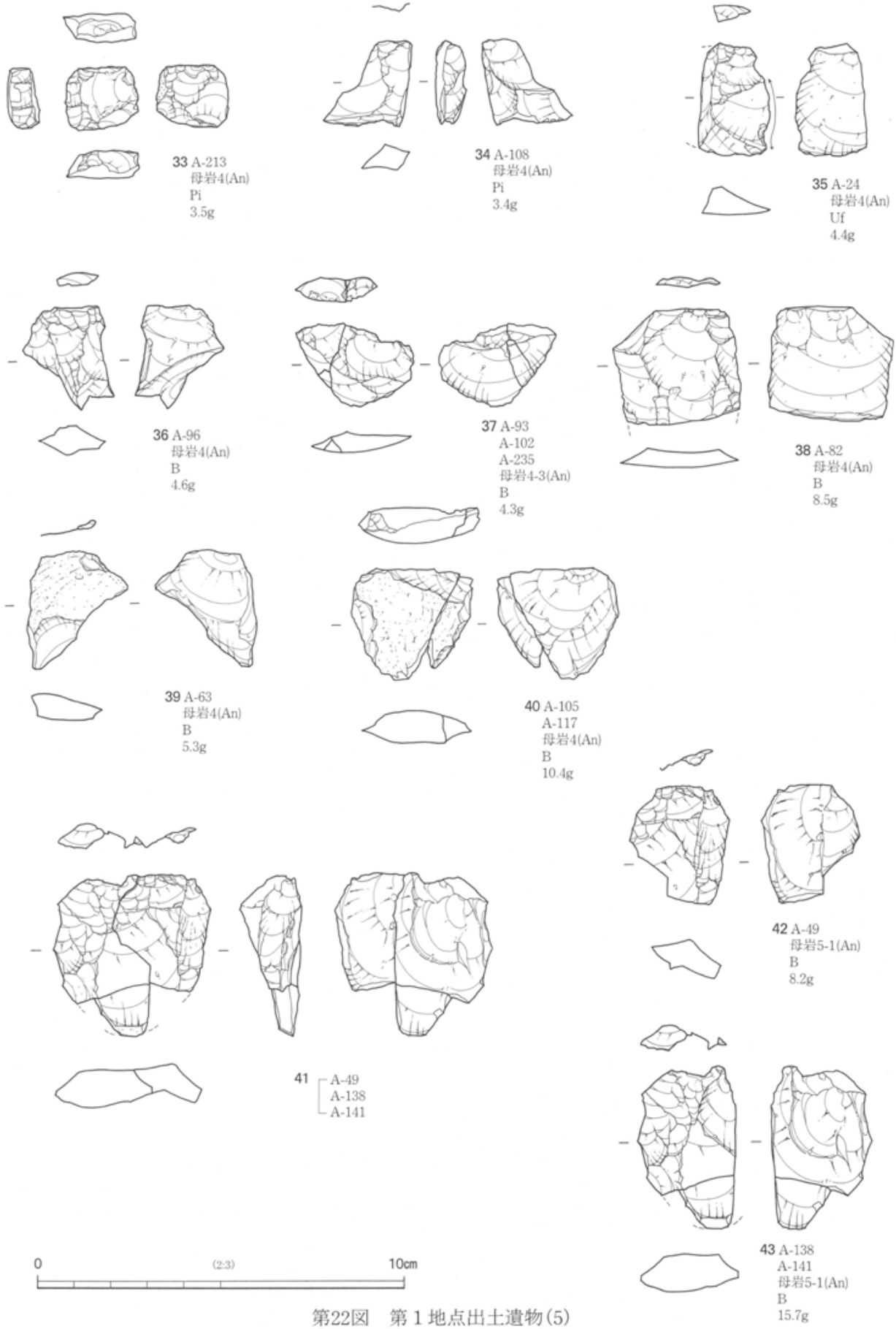
第19図　第１地点出土遺物(2)



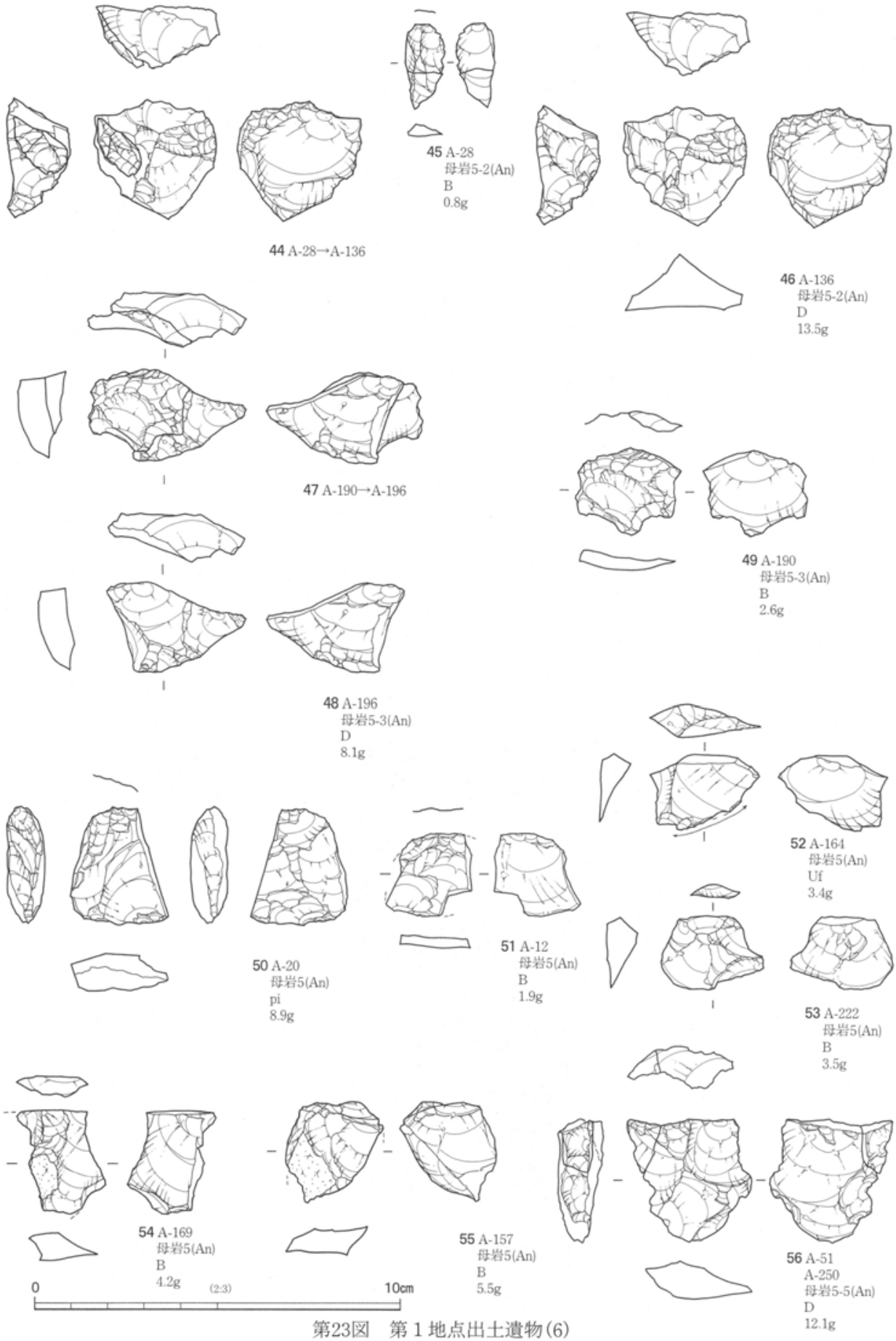
第20図　第１地点出土遺物(3)



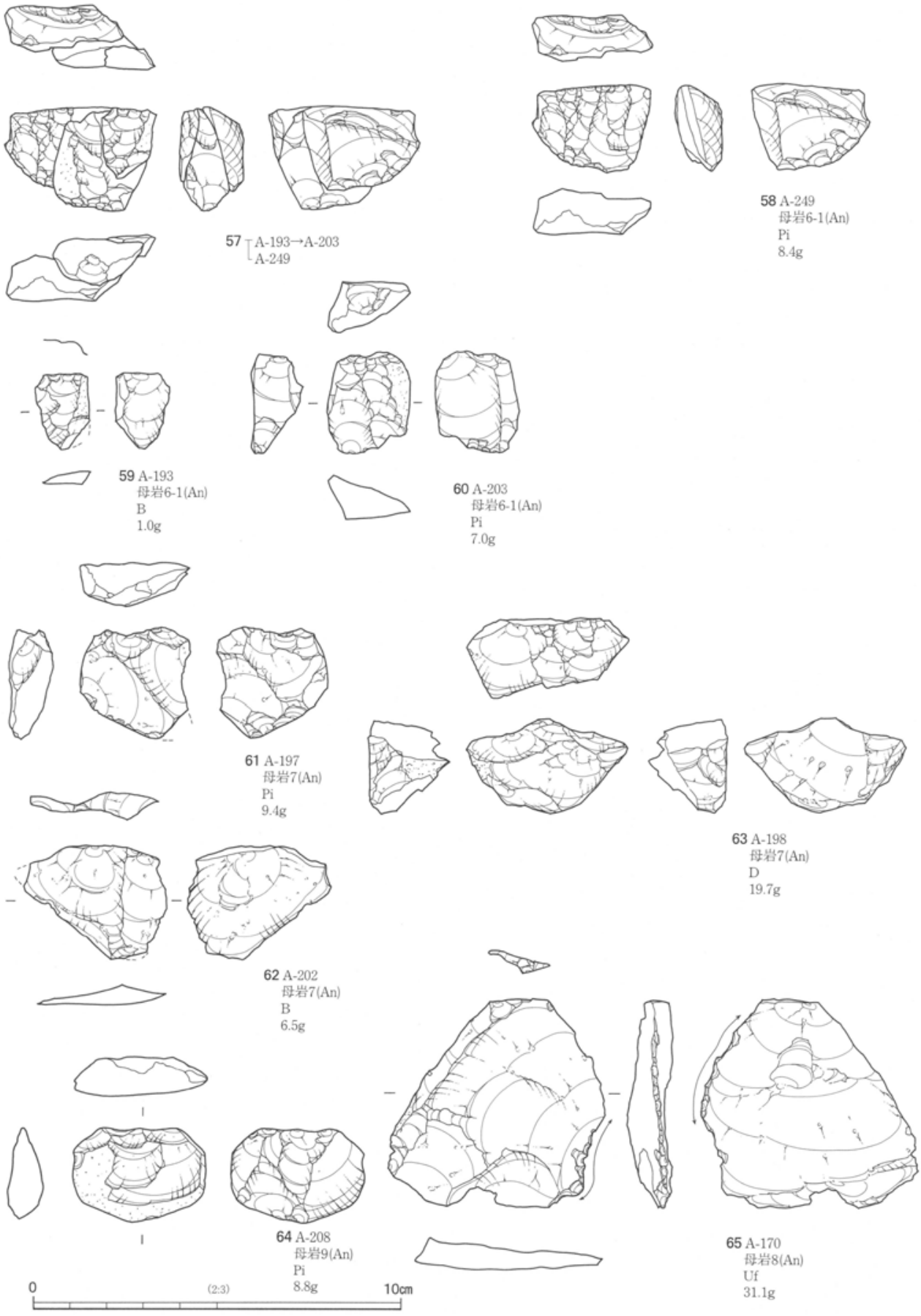
第21図　第１地点出土遺物(4)



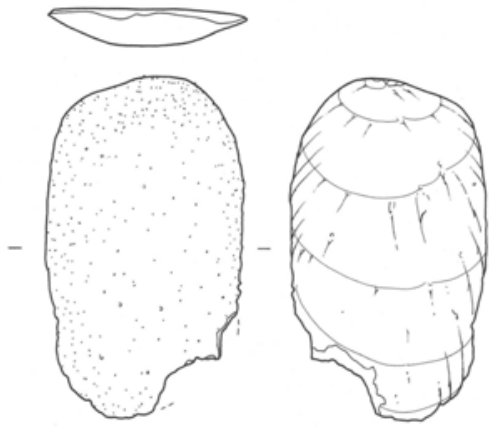
第22図　第１地点出土遺物(5)



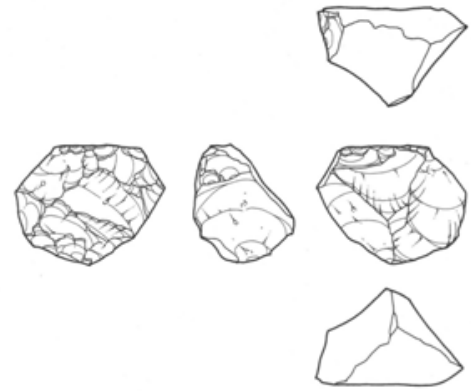
第23図　第１地点出土遺物(6)



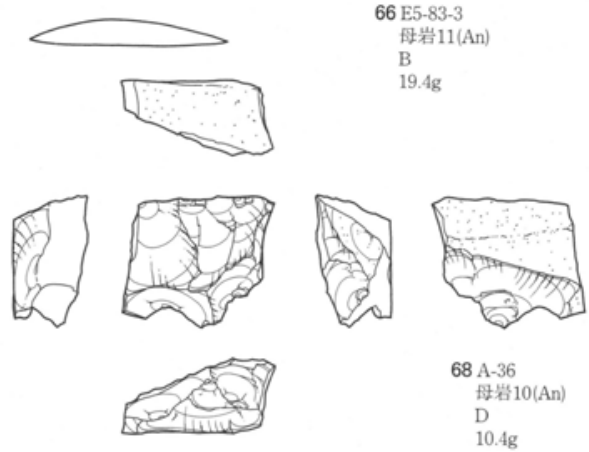
第24図　第１地点出土遺物(7)



66 E5-83-3
母岩11(An)
B
19.4g



67 E5-60-2
母岩12(An)
Pi
11.5g

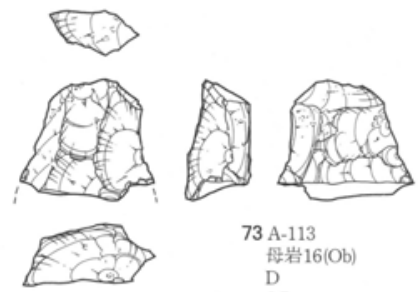


68 A-36
母岩10(An)
D
10.4g

69 A-84
母岩15(Rh)
B
6.1g

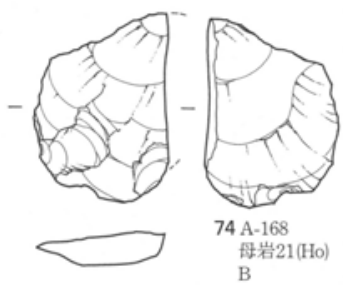
70 A-79
母岩20(Ob)
Rf
1.2g

72 A-55
母岩19(Ob)
Rf
4.1g

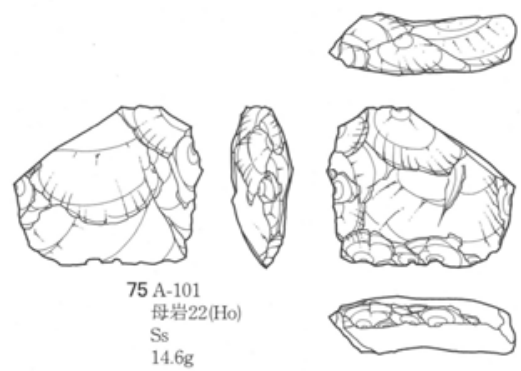


73 A-113
母岩16(Ob)
D
6.7g

71 A-129
母岩17(Ob)
Uf
2.8g

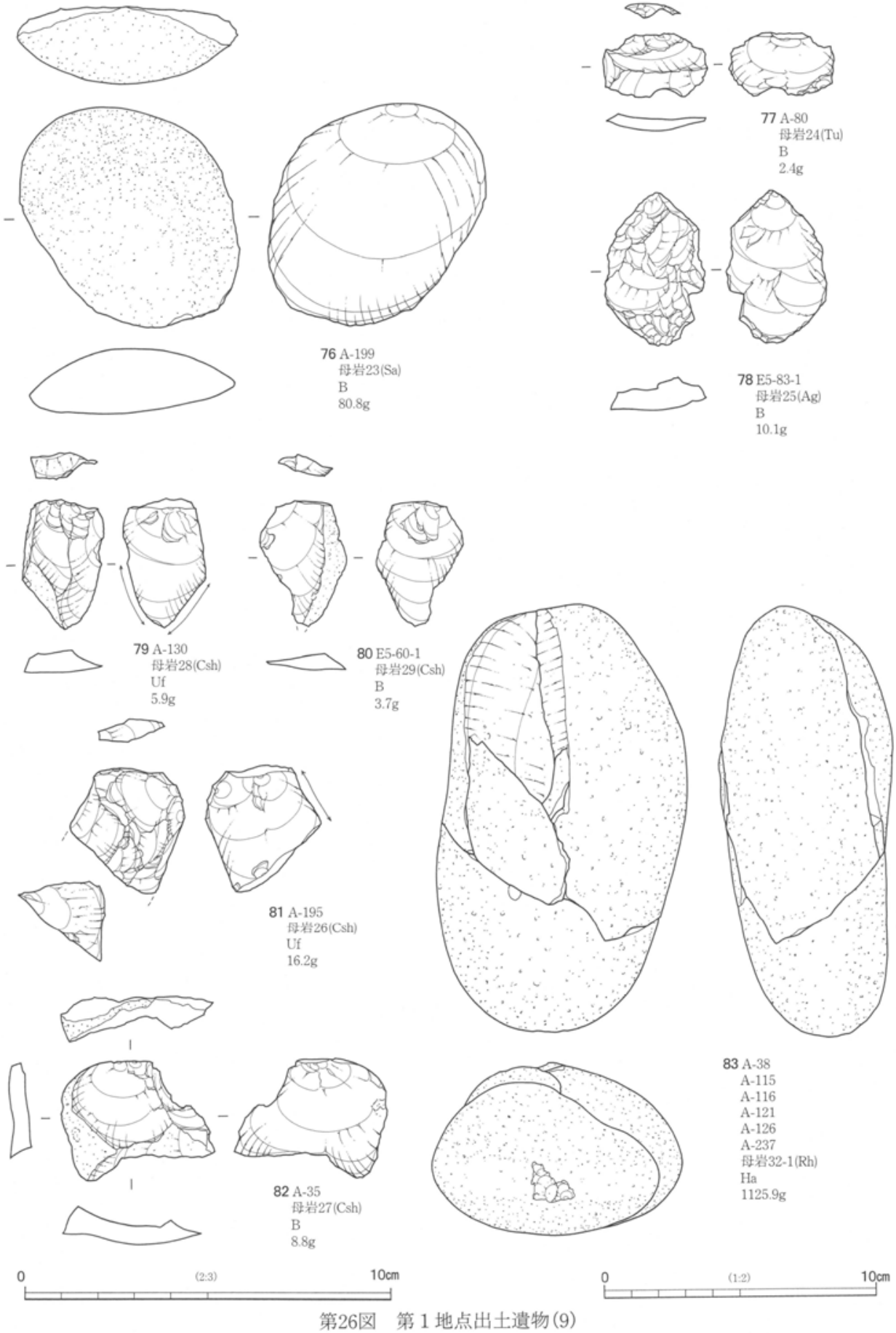


74 A-168
母岩21(Ho)
B
8.4g

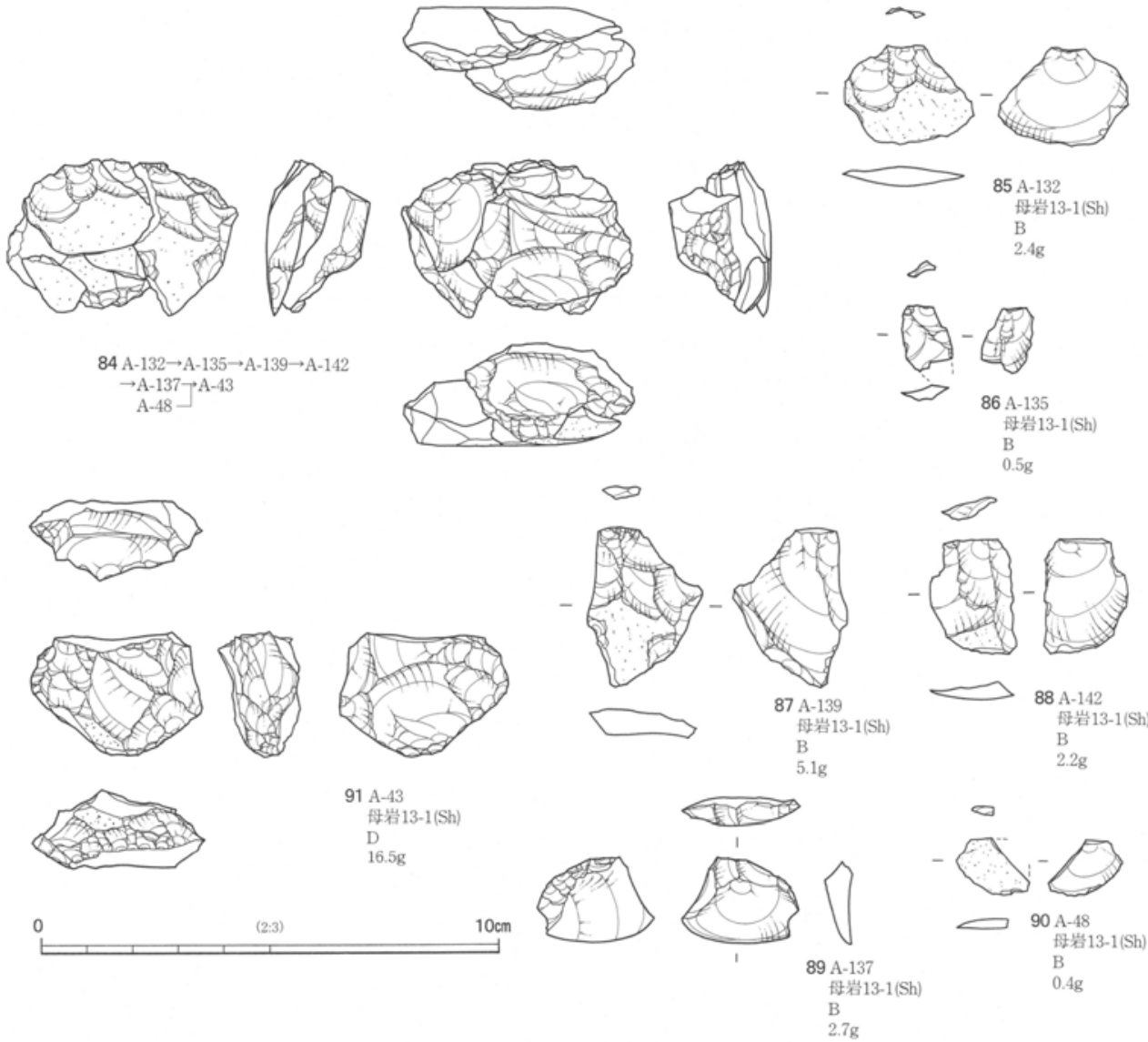


75 A-101
母岩22(Ho)
Ss
14.6g

第25図　第１地点出土遺物(8)



第26図　第１地点出土遺物(9)



第27図　第１地点出土遺物(10)

第４節　第２地点（第28～30図，第３・４表，図版31）

１．ブロックの概要

第２地点は，調査範囲南側のＦ４-96グリッドに位置する。ブロックの立地は，台地の平坦部である。

ブロックの規模と形状は，直径２ｍの円形の範囲に石器５点が散漫に分布する。出土層位はⅦ層とⅨ層の境界付近で，比較的水平に包含されている(第29・30図)。

石器組成は，加工痕ある剥片２点，剥片２点，石核１点の合計５点で，石材は，黒曜石１点，安山岩３点，珪質頁岩１点である。

２．母岩の特徴と内容

・母岩33：黄褐色の嶺岡産珪質頁岩である。剥片１点(0.3ｇ)の単独資料である。

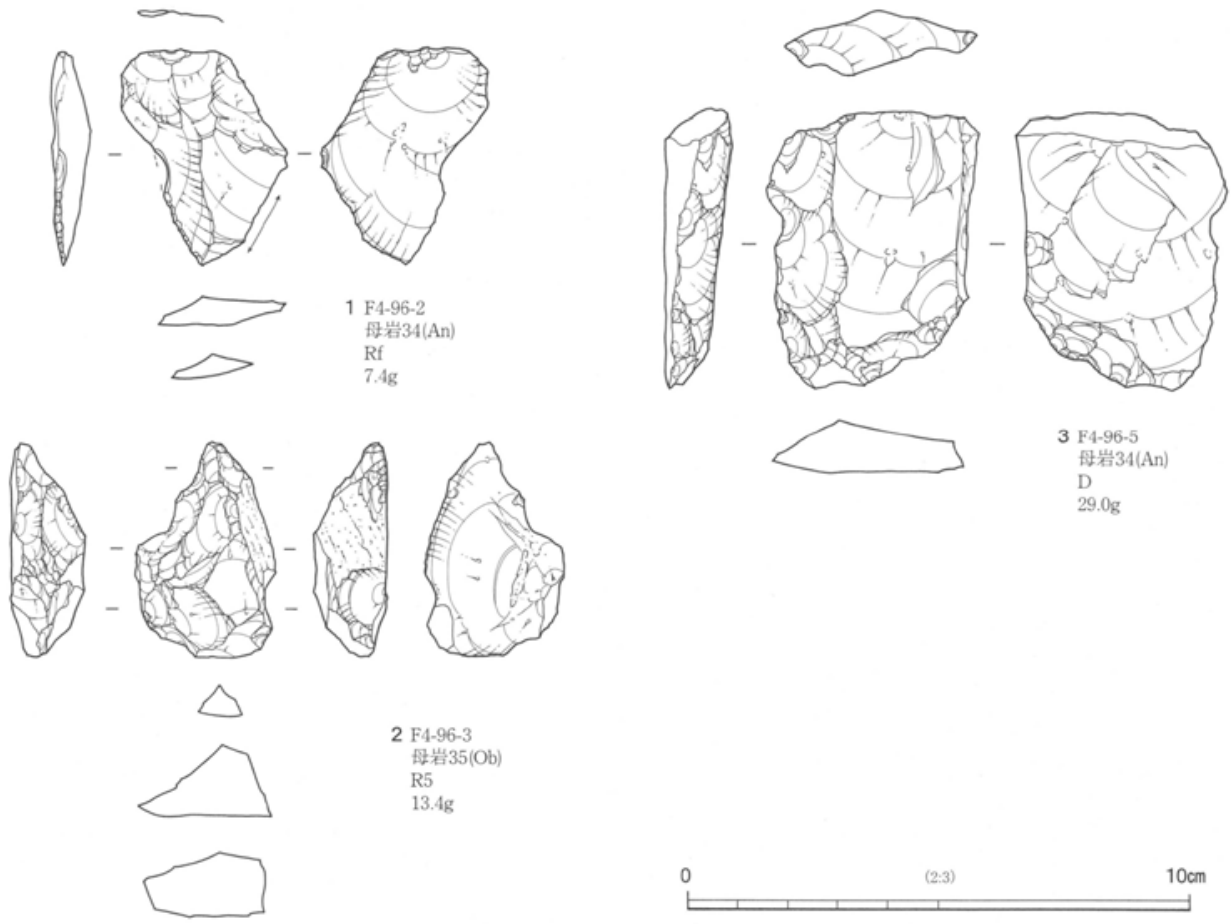
・母岩34：φ0.5㎜以下の細かな粒が多量にみえる灰色の安山岩である。第１地点の母岩４に似る。石器群の内訳は，加工痕ある剥片１点，石核１点の合計２点(36.4ｇ)である。

・母岩35：青みがかった黒灰色の不透明な黒曜石である。φ１㎜ほどの白色の夾雑物を含み，灰色の縞が多数入る。加工痕ある剥片１点(13.4ｇ)の単独資料である。

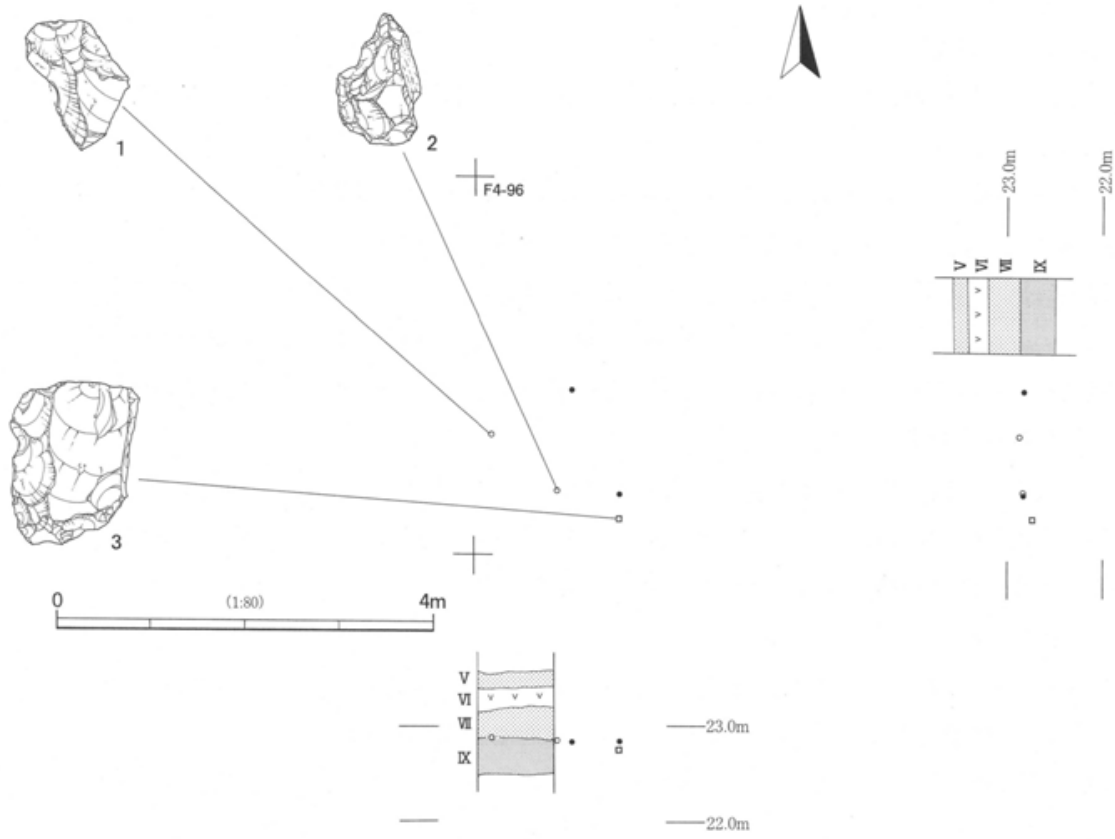
・母岩36：青みがかった黒灰色と黄灰色がまだらになった安山岩である。剥片１点(0.3ｇ)の単独資料である。

３．出土遺物（第28図１～３）

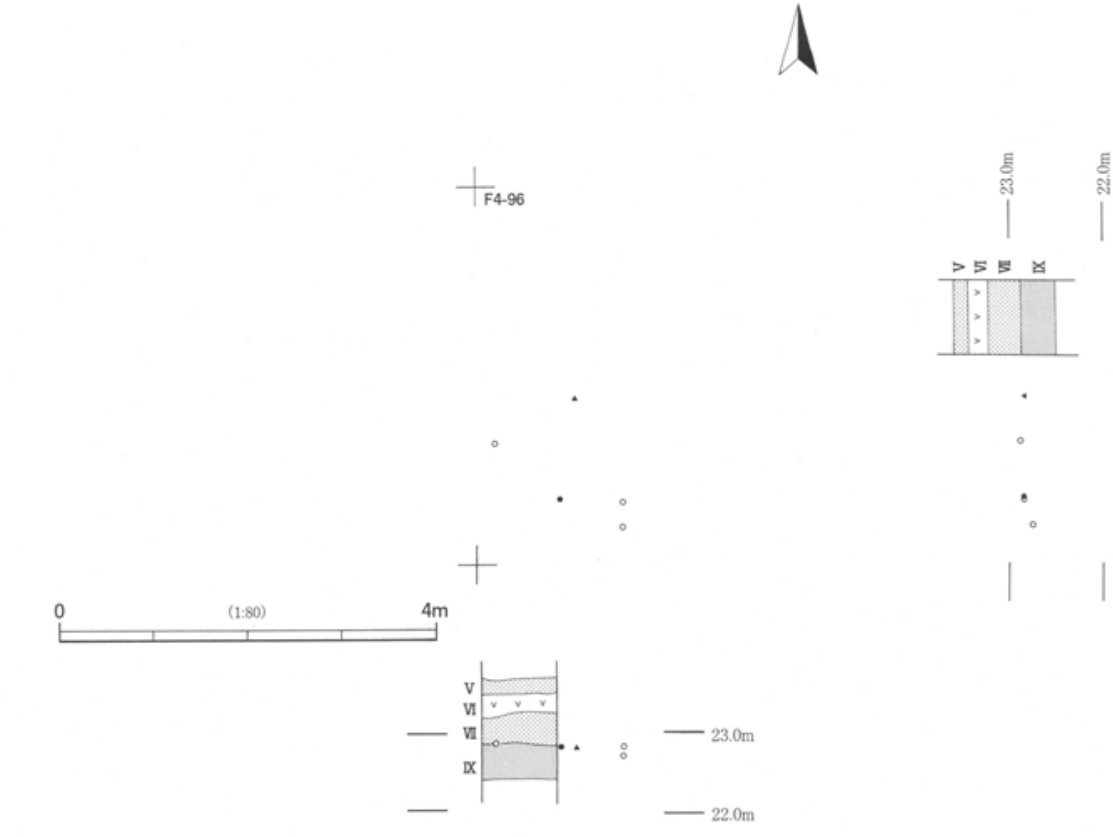
１は，母岩34の安山岩による加工痕ある剥片である。不定型な剥片の先端部に微細な調整加工を施し，加工痕のない鋭利な縁辺には，刃こぼれがみられる。２は，母岩35の黒曜石による加工痕ある剥片である。不定型の剥片を素材とし，左側は表裏から粗い調整を，右側は裏から細かな調整を行っている。石錐に分類すべきかも知れない。３は，母岩34の安山岩による剥片素材の石核である。表面左側から末端側にかけての範囲で，小型不定型の剥片を剥離している。



第28図　第２地点出土遺物



第29図　第２地点石器別分布図



第30図　第２地点石材別分布図

第５節　第３地点ａ（第31～33図，第５・６表，図版31）

１．ブロックの概要

第３地点ａは，調査範囲中央のＦ６-28・38・39グリッドに位置する。ブロックの立地は，台地中央の平坦部である。

ブロックの規模と形状は，直径２ｍの円形の範囲に，石器３点，礫50点が分布する。出土層位はⅢ層の中位を中心に30cmほどの高低差をもって包含されている（第22・23図）。

石器組成は，石錐１点，楔形石器１点，剥片１点，焼け礫50点の合計53点で，石器の石材は，チャート１点，ホルンフェルス１点，メノウ１点，礫の石材は，安山岩３点，流紋岩４点，頁岩５点，チャート23点，砂岩14点，石英１点である。礫は，12点について母岩分類が可能で，９母岩を認識した。

２．母岩の特徴と内容

・母岩37：黒灰色に白い縞の入るホルンフェルスである。剥片１点（7.4ｇ）の単独資料である。

・母岩38：灰褐色の地に黄灰色の斑が入る玉髄である。石錐１点（7.9ｇ）の単独資料である。

・母岩39：青灰色に黒い縞の入るチャートである。楔形石器１点（3.8ｇ）の単独資料である。

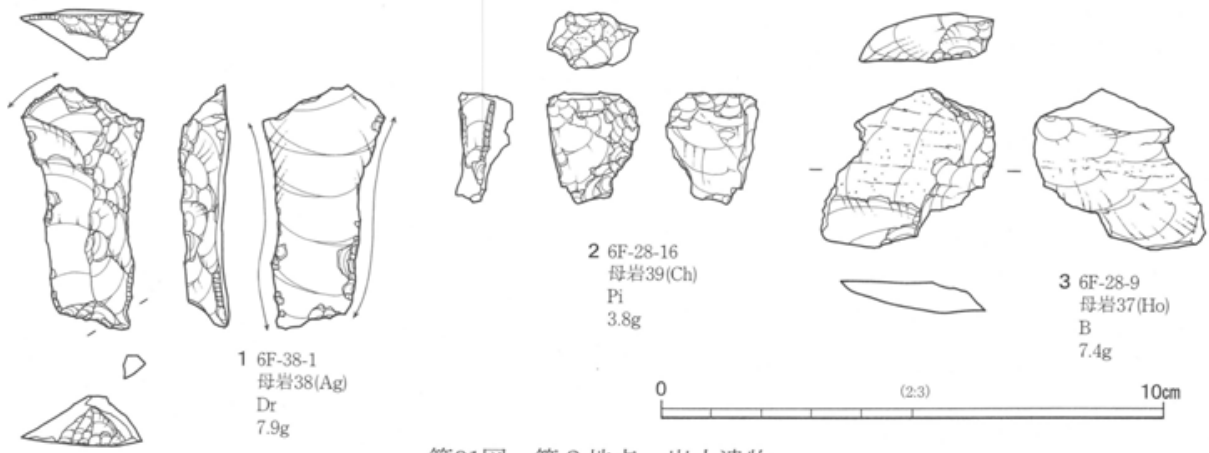
３．出土遺物（第31図１～３）

１は，母岩38の玉髄による石刃を素材とする石錐１点である。表面左側に石核の側面調整痕をもつ。素材の打面は粗い調整によって除去されており，末端は左右からの細かな調整によって尖らせている。両側縁には刃こぼれがみられる。２は，母岩39のチャートによる楔形石器である。表裏の縁辺に細かな潰れがある。３は，母岩37のホルンフェルスによる不定型の剥片である。表面に節理面を広く残す。主要剥離面が大きく湾曲することから，剥片素材の石核から剥離された可能性が高い。

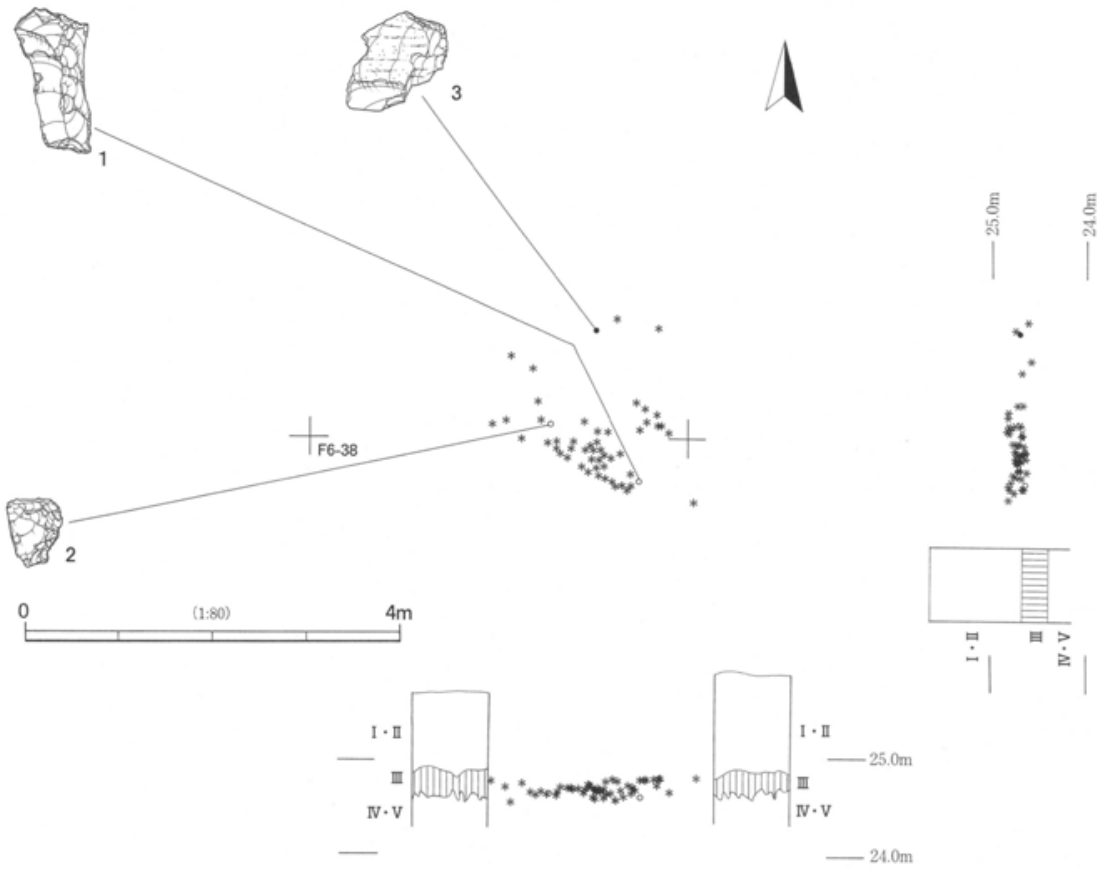
第６節　第３地点ｂ（第34・35図，第７・８表）

１．ブロックの概要

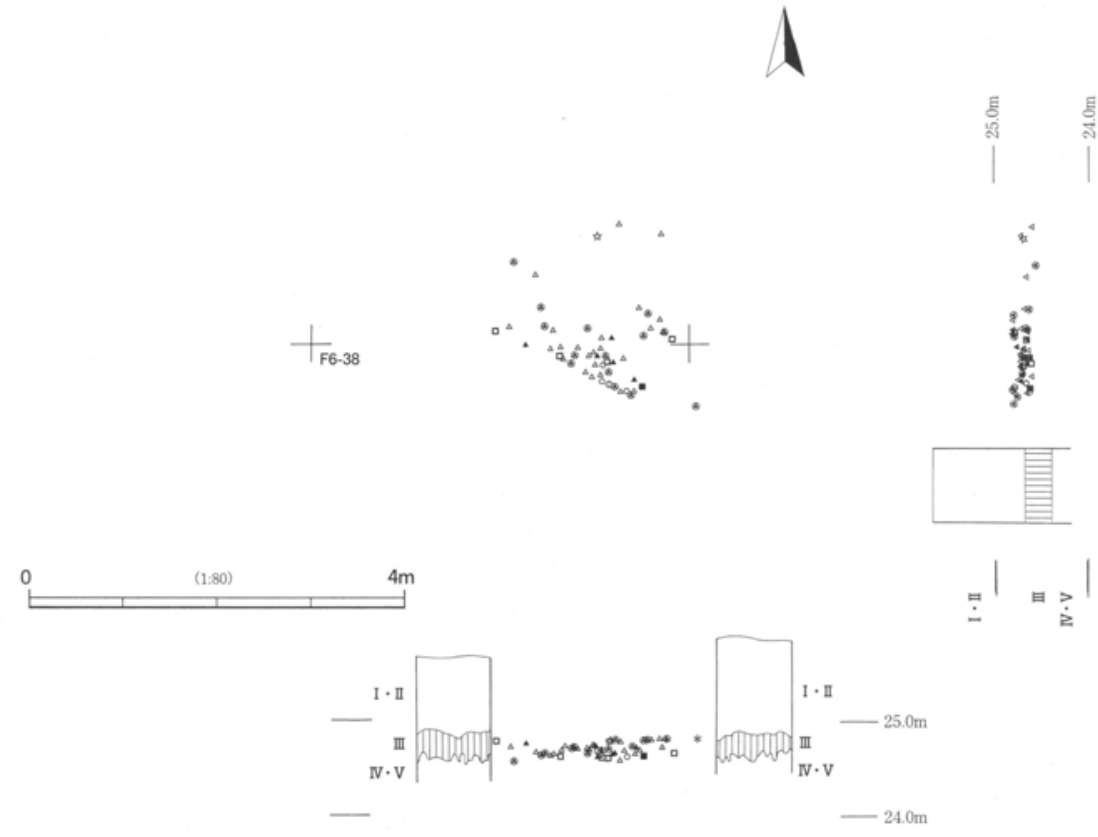
第３地点ｂは，調査範囲東側のＦ６-39・Ｆ７-30グリッドに位置する。ブロックの立地は，台地東側の縁辺部である。



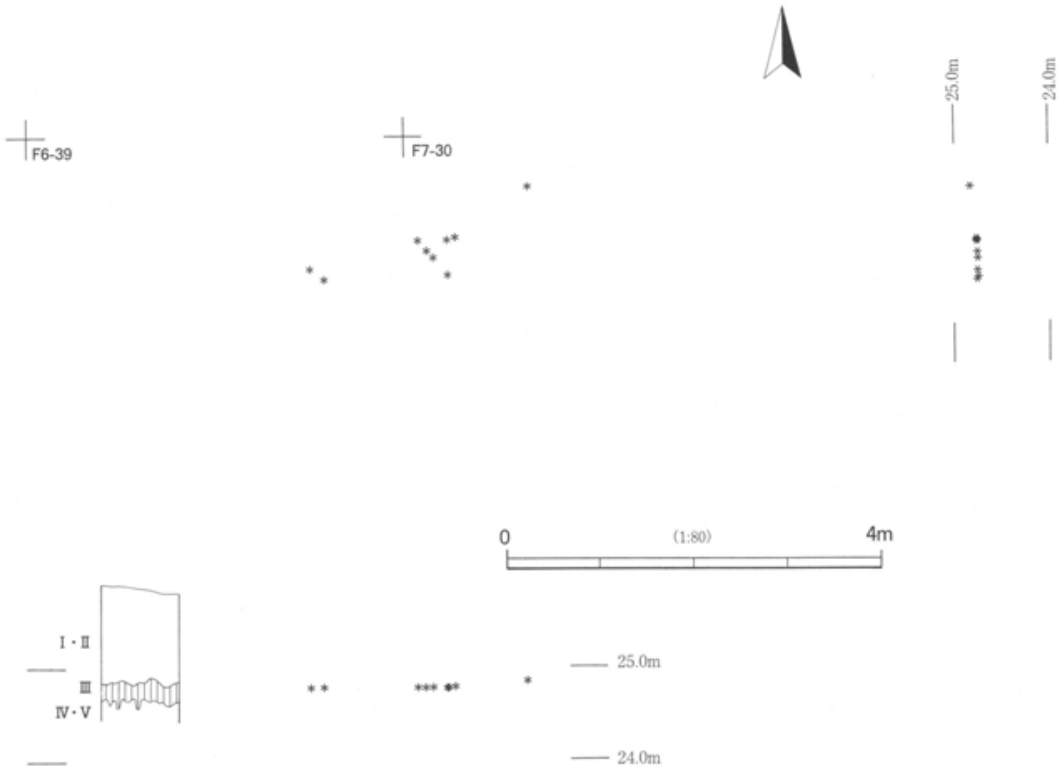
第31図　第３地点ａ出土遺物



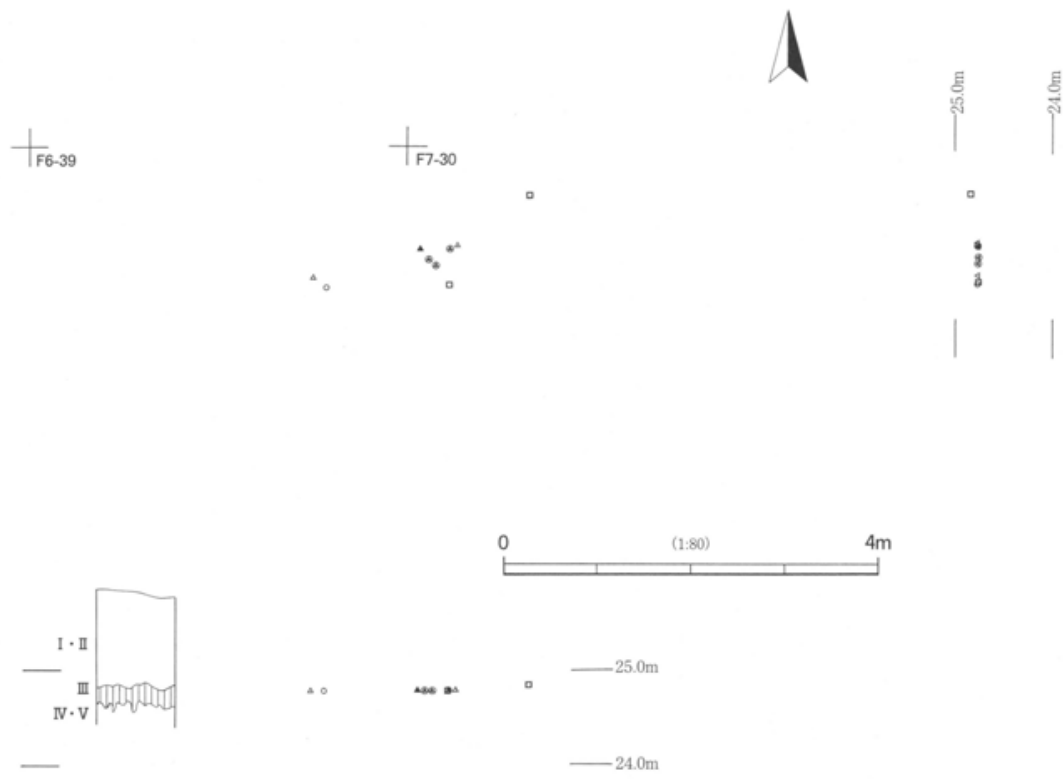
第32図　第３地点ａ石器別分布図



第33図　第３地点ａ石材別分布図



第34図　第３地点ｂ石器別分布図



第35図　第３地点ｂ石材別分布図

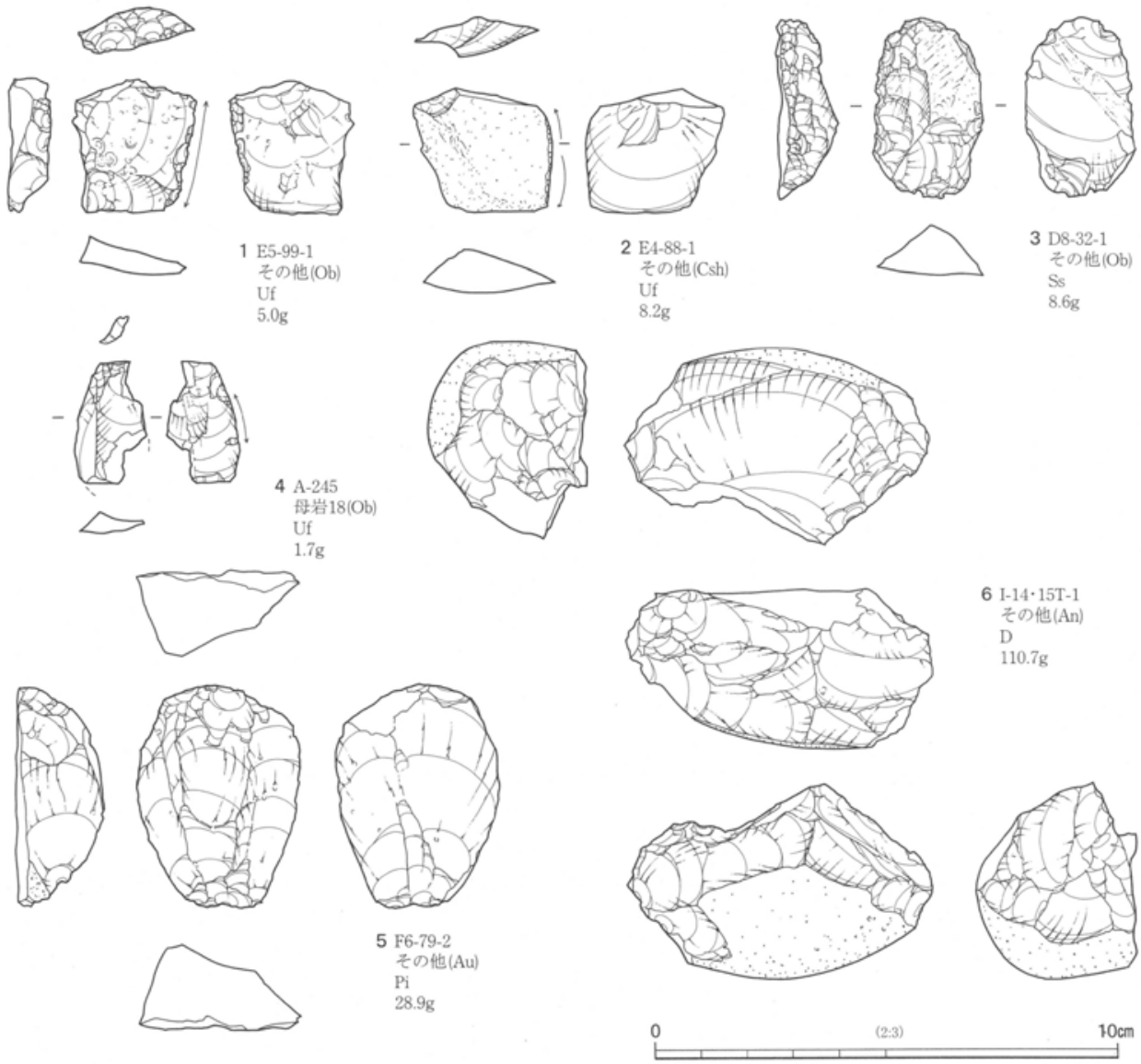
ブロックの規模と形状は，長軸３ｍ，短軸１ｍの楕円形の範囲に焼け礫９点が分布する。出土層位はⅢ層の中ほどで，水平に包含されている(第34・35図)。

礫の石材は，安山岩１点，流紋岩２点，頁岩１点，チャート２点，砂岩３点である。礫は，母岩分類できたものが８点(６母岩)，母岩不明なものが１点である。大きさは，概ね５×３×２㎝ほどである。

第７節　単独出土資料（第36図，図版31）

１は，青みがかった黒灰色不透明の黒曜石を用いた使用痕ある剥片である。不定型の剥片を利用している。表面と主要剥離面の剥離方向は90度異なる。右縁辺に刃こぼれがみられる。Ｅ５-99グリッドⅦ層から出土した。

２は，自然面が黄褐色，内部が黒灰色の珪質頁岩による使用痕ある剥片である。表面が自然面に覆われた不定型の剥片を利用している。右側縁に刃こぼれがある。Ｅ４-88グリッドⅥ層から出土している。



第36図　単独出土遺物

3は，黒色不透明で幅広の灰色の縞が入る良質な黒曜石を用いた削器である。打点が潰れてなくなっていること，打瘤が発達せず，末端に損傷がみられることなどから，両極打撃による剥片を用いた可能性が高い。左側縁に調整加工がある。D８-32グリッドの遺構検出面から出土している。

4は，青みがかった黒灰色不透明の黒曜石を用いた使用痕ある剥片である。裏面右側縁に刃こぼれがある。第１地点外縁部F５-03グリッドのⅨ層から出土している。

5は，黒灰色の安山岩による楔形石器である。表面は主要剥離面と同じ下方向からの剥離面が中心である。上下端は潰れており，打面は線状になっている。F６-79グリッドⅨａ層から出土している。

6は，淡褐色の安山岩にを用いた石核である。拳大の円礫を素材とし，交互剥離によって横長剥片を生産している。

第１表　第１地点　母岩別石器組成表

母岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
1(An)											1											11		2	14		14
2(An)						1																11		1	13		13
3(An)																						4(3)		3(1)	7(4)		7(4)
4(An)									2		1											31(28)	3	3(2)	40(36)		40(36)
5(An)									1		1											32(29)		4(3)	38(34)		38(34)
6(An)									2													2			4		4
7(An)									1													5		1	7		7
8(An)											1														1		1
9(An)									1																1		1
10(An)																								1	1		1
11(An)																						1			1		1
12(An)									1																1		1
13(Sh)																						12(11)		1	13(12)		13(12)
14(Rh)																						1			1		1
15(Rh)																						1			1		1
16(Ob)																						3		1	4		4
17(Ob)											1														1		1
19(Ob)										1															1		1
20(Ob)										1															1		1
21(Ho)																						1			1		1
22(Ho)						1																			1		1
23(Sa)																						1			1		1
24(Tu)																						1			1		1
25(Ag)																						1			1		1
26(Csh)											1														1		1
27(Csh)																						1			1		1
28(Csh)											1														1		1
29(Csh)																						1			1		1
30(Csh)																						2			2		2
31(Csh)																						1	1		2		2
32(Rh)																	8(1)								8(1)		8(1)
その他(An)											1											37	9		47		47
その他(Sh)																						4			4		4
その他(Csh)																						2			2		2
その他(Sa)																						1			1		1
その他(Ho)																						4			4		4
その他(Ag)																						1			1		1
R1－1(Rh)																										2	2
合　計						2			8	2	8						8(1)					172(164)	13	17(13)	230(211)	2	232(213)

第２表　　第１地点　石材別石器組成表

石材	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
黒曜石(Ob)										2	1											3		1	7		7
安山岩(An)						1			8		5											134(127)	12	15(11)	175(164)		175(164)
流紋岩(Rh)																	8(1)					2			10(3)	2	12(5)
頁岩(Sh)																						16(1)		1	17(16)		17(16)
珪質頁岩(Csh)											2											7	1		10		10
凝灰岩(Tu)																						1			1		1
砂岩(Sa)																						2			2		2
ホルンフェルス(Ho)						1																5			6		6
メノウ(Ag)																						2			2		2
合　計						2			8	2	8						8(1)					172(164)	13	17(13)	230(211)	2	232(213)

第３表　第２地点　母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
33(Csh)																						1			1		1
34(An)										1														1	2		2
35(Ob)										1															1		1
36(An)																						1			1		1
合　計										2												2		1	5		5

第４表　第２地点　石材別石器組成表

石　材	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
黒曜石(Ob)										1															1		1
安山岩(An)										1												1		1	3		3
珪質頁岩(Csh)																						1			1		1
合　計										2												2		1	5		5

第５表　第３地点a　母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
37(Ho)																						1			1		1
38(Ag)								1																	1		1
39(Ch)									1																1		1
R2(An)																										2	2
R3(Rh)																										1	1
R4(Rh)																										1	1
R5(Sa)																										2	2
R6(Sa)																										1	1
R7(Sa)																										1	1
R8(An)																										1	1
R9(Qu)																										1	1
R10(Sh)																										2	2
その他(Rh)																										2	2
その他(Sh)																										3	3
その他(Ch)																										23	23
その他(Sa)																										10	10
合　計								1	1													1			3	50	53

第６表　　第３地点a　石材別石器組成表

石　材	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
安山岩(An)																										3	3
流紋岩(Rh)																										4	4
頁岩(Sh)																										5	5
チャート(Ch)									1																1	23	24
砂岩(Sa)																										14	14
ホルンフェルス(Ho)																						1			1		1
メノウ(Ag)								1																	1		1
石英(Qu)																										1	1
合　計								1	1													1			3	50	53

第７表　　第３地点b　母岩別石器組成表

母　岩	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
R10(Sh)																										1	1
R11(Rh)																										1	1
R12(Ch)																										1	1
R13(Ch)																										1	1
R14(Sa)																										3	3
R15(Rh)																										1	1
その他(An)																										1	1
合　計																										9	9

第８表　　第３地点b石材別石器組成表

石　材	Kn	Tr	Ka	Po	Es	Ss	Gr	Dr	Pi	Rf	Uf	Bl	Bls	Mb	Mc	Sp	Ha	Anb	Pe	Ax	他	B	C	D	石器計	礫	合計
安山岩(An)																										1	1
流紋岩(Rh)																										2	2
頁岩(Sh)																										1	1
チャート(Ch)																										2	2
砂岩(Sa)																										3	3
合　計																										9	9

第３章　縄文時代

縄文時代で検出された遺構は，陥穴と炉穴である。竪穴住居跡や土坑などは確認されていない。炉穴の309と316が比較的近接しているが，それ以外は単独の遺構が距離をおいて検出されており，まとまりはない。陥穴は，時期を確定できる出土遺物はないが，周辺の遺跡の類例などから縄文時代草創期から早期にかけての時期が想定される。古墳時代以降の遺構が密集して存在しているため，すでに削平されている遺構もあると思われるが，出土遺物も周辺の遺跡に比べれば少ない。遺構やグリッドから出土した縄文土器のうち図示できたのは20点ほどである。石器は，石鏃や磨石・敲石などがわずかに出土している。狭長な範囲の発掘調査という制約はあるが，本遺跡での縄文時代の遺構・遺物の分布は全体に稀薄である。

第１節　検出された遺構

１　陥　穴

３基が台地の縁辺部寄りから検出された(第37図，第９表，図版６)。調査区の南側で229・239，東側では236が，それぞれ位置している。周辺の縁辺部には，多くの陥穴が存在していた可能性が高いと思われる。平面形態はいずれも溝形である。断面はＶ字形で，239のように長軸方向に底面が抉られている陥穴もある。底面はほぼ平坦で，ピットは設けられていない。長軸方向は，斜面の等高線に沿うものと，直交するようなものがあり一定ではない。

第９表　陥穴一覧　　〈　〉は現存値

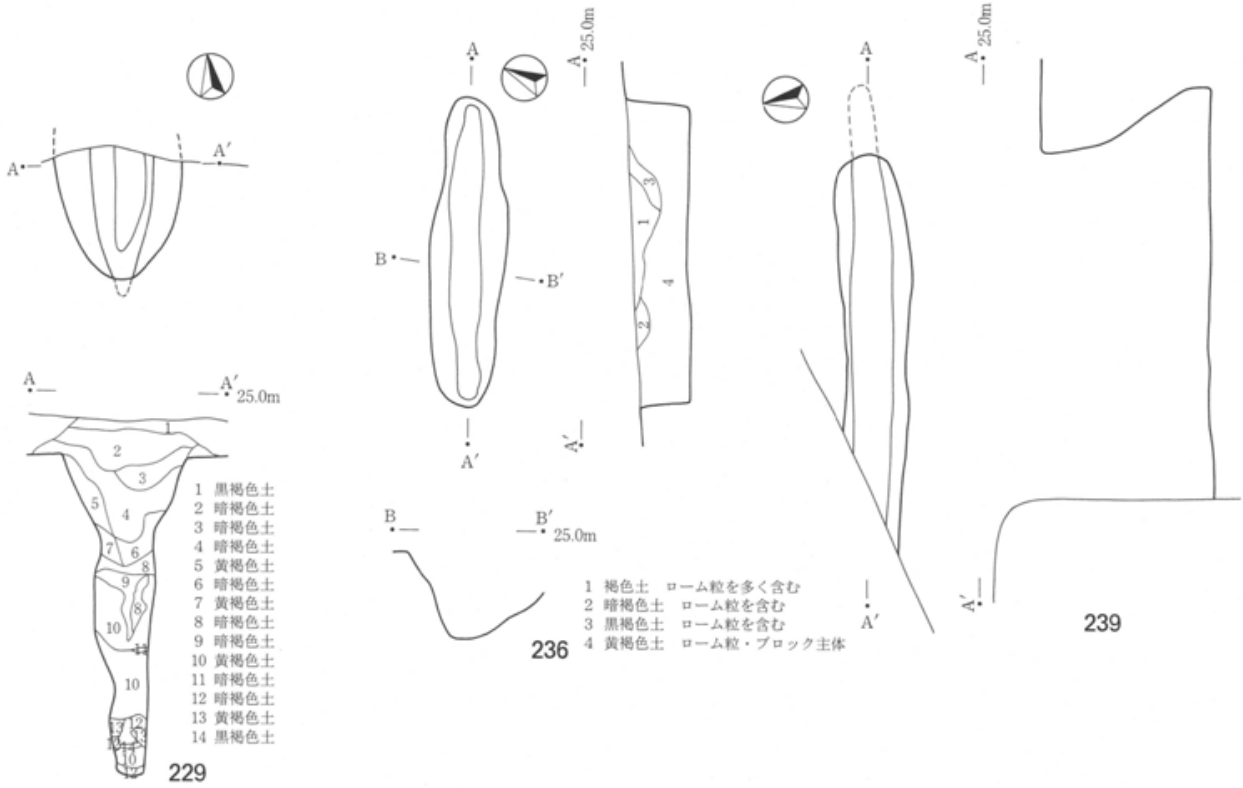
遺構番号	グリッド	平面形態	長軸方位	長軸長×短軸長(m)	深さ(m)	備　考
229	G5-89	溝形	N	〈1.05〉×1.05	2.50	
236	F7-12	溝形	N-65°-E	2.45 ×0.65	0.65	
239	G5-89	溝形	N-70°-W	〈3.15〉×0.60	1.35	

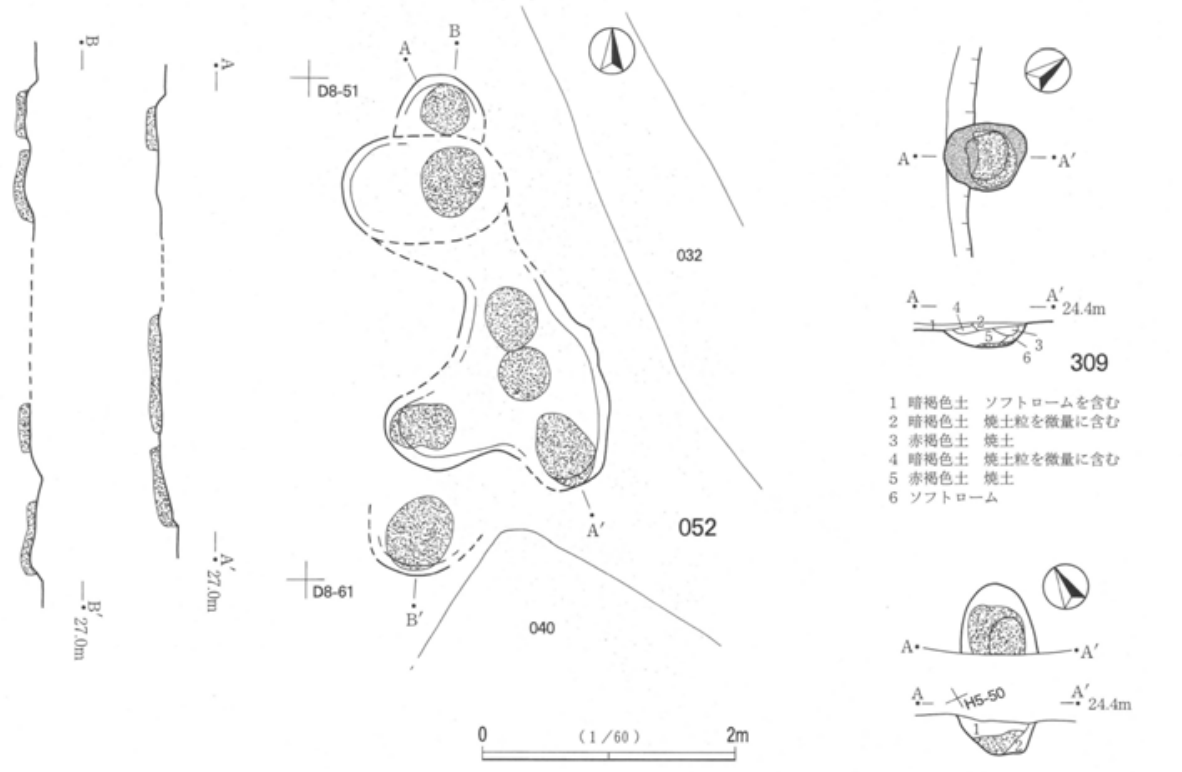
２　炉　穴

052（第37図，図版６）

調査区の北東，Ｄ８グリッドに位置する。上面を大きく削平され，中央部に攪乱も受けており，遺存状態は良好ではないが，７か所に炉床をもっている。

平面形態は，長楕円形の炉穴を南北に複合したような不整形を呈している。長軸長3.5m・短軸長1.8m，深さ５cm～18cmを測る。７か所の炉床(Ａ～Ｇ)のうち，Ｇ(51cm×60cm)は炉穴の範囲から出ているが，この周辺にも別の浅い掘込みが存在していたと思われる。北側に位置するＡ(40cm×42cm)・Ｂ(48cm×60cm)の炉床は，ＢがＡを削平して設けられている。中央部は攪乱を受けており，炉床は検出されていない。南側では４か所に炉床がつくられている。Ｃ(45cm×50cm)・Ｄ(43cm×46cm)・Ｅ(43cm×66cm)は直線的に南北に並んでいるが，Ｆ(35cm×53cm)は西側に設けられている。各炉床の底面はよく被熱し，数回の作り替えが行われていたと考えられるが，新旧関係が判明したのはＡ・Ｂだけである。遺物は少なく，Ｂ・Ｅなどから茅山下層式土器片が出土しているが，図示できるものはない。


A
A′
25.0m
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 黄褐色土
6 暗褐色土
7 黄褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 黄褐色土
11 暗褐色土
12 暗褐色土
13 黄褐色土
14 黒褐色土
229
B
B′
1 褐色土 ローム粒を多く含む
2 暗褐色土 ローム粒を含む
3 黒褐色土 ローム粒を含む
4 黄褐色土 ローム粒・ブロック主体
236
239


B
A
B′
A′
27.0m
D8-51
D8-61
032
040
052
0
(1/60)
2m
24.4m
1 暗褐色土 ソフトロームを含む
2 暗褐色土 焼土粒を微量に含む
3 赤褐色土 焼土
4 暗褐色土 焼土粒を微量に含む
5 赤褐色土 焼土
6 ソフトローム
309
H5-50
1 暗褐色土
2 褐色土
316

第37図　陥穴，炉穴

309（第37図，図版６）

調査区の南端，Ｈ４グリッドに位置する。南西側を溝状遺構293に削平されている。

平面形態は楕円形で，規模は1.05ｍ×1.27ｍを測る。緩やかに38cm掘込まれ，焼土が全体に充満している。南側では炭化物を多く含む黒色土が堆積している。出土遺物はないが，炉穴であろう。

316（第37図，図版６）

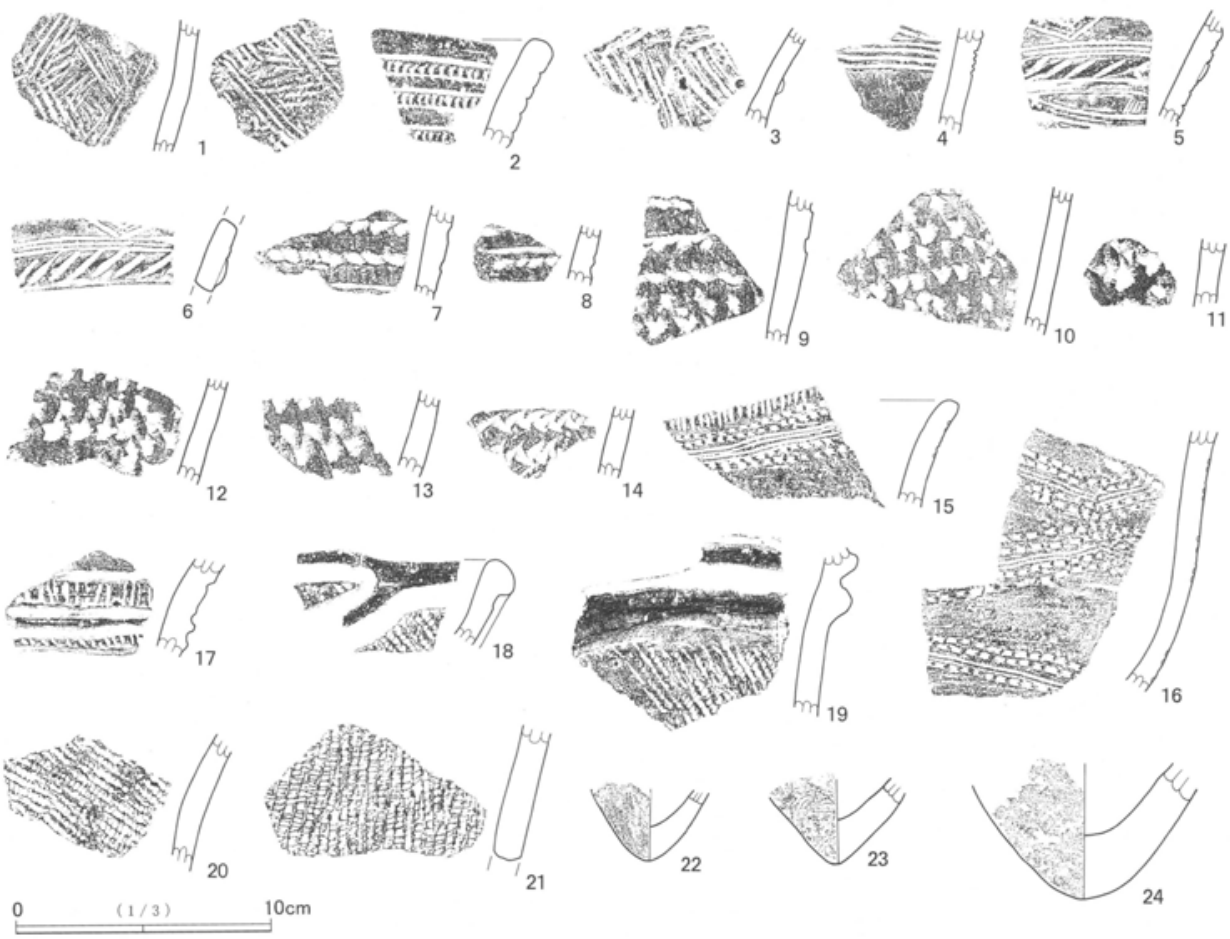
調査区の南端，Ｈ５グリッドに位置する。南側は調査区域外にかかる。

平面形態は楕円形と考えられ，長軸の検出できた長さは64cm，短軸長は67cmである。緩やかに掘込まれ，確認面からの深さは33cmである。焼土が13cmの厚さに堆積し，炉床の底面はよく被熱され硬化していた。出土遺物はないが，周辺から早期の土器片が出土していることから炉穴と考えられる。

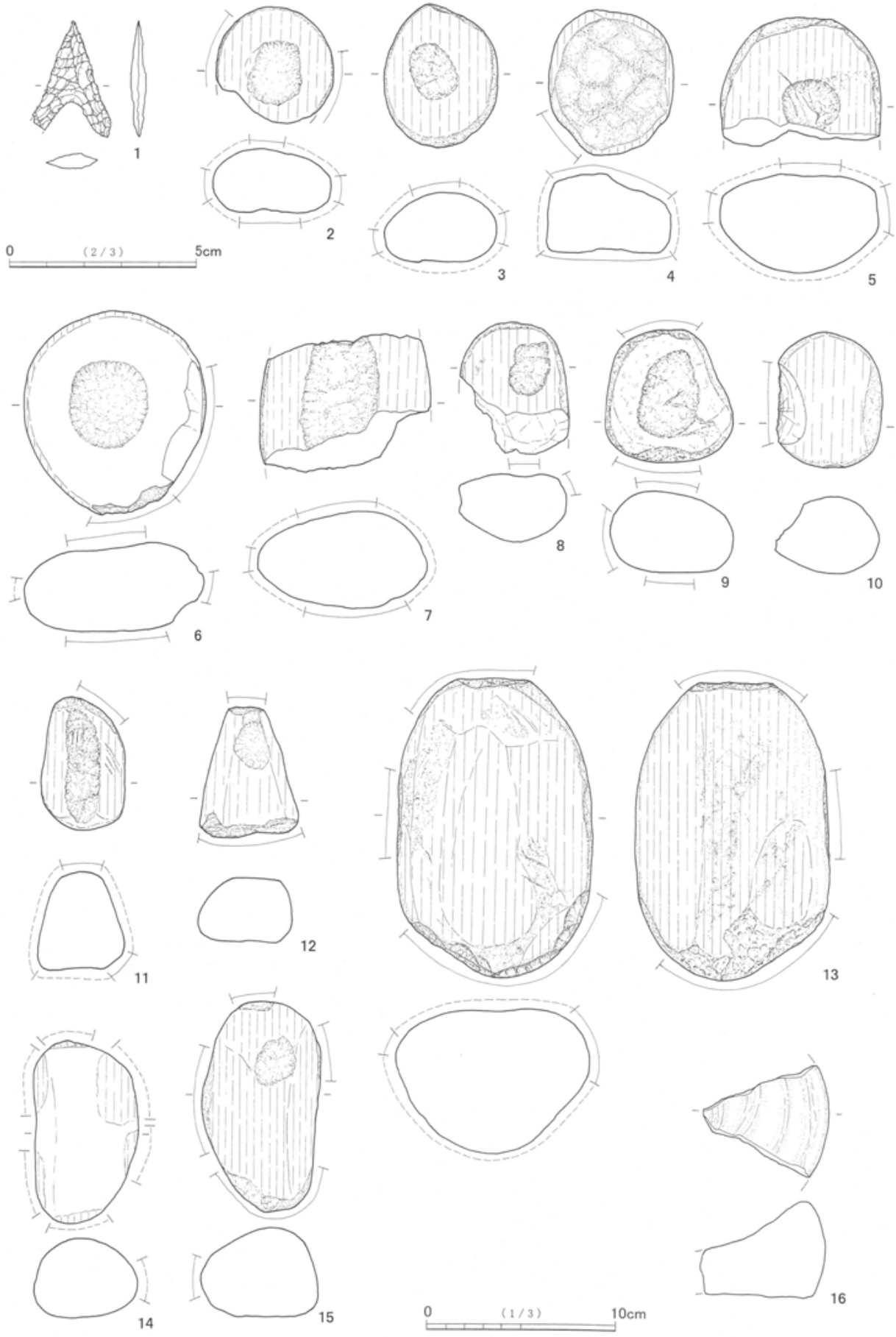
第２節　遺構外出土遺物

確認調査時や，遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する。

縄文土器（第38図，図版32）　１は条痕文系土器の胴部である。両面に条痕が施文されている。早期茅山下層式である。２は前期諸磯ｂ式土器である。波状口縁で，半截竹管による爪形文が施文されている。３は諸磯ｃ式土器である。半截竹管による細い沈線文が斜位に施され，瘤状の貼り付けが２か所にみえる。４は諸磯式から浮島式の土器である。横位に細い沈線文が施文されている。５・６は浮島Ⅰ式土器で同一



第38図　遺構外出土縄文土器



第39図　縄文時代石器

個体であろう。横位の隆帯に接して，半截竹管による平行沈線が撚糸文の地文の上に施文されている。隆帯には斜位の刻みがみられる。７～14は浮島Ⅲ式土器である。７は半截竹管による押引文が連続的に施文されている。８～14は半截竹管による沈線と押引文が大きく施文されている。15・16は興津式土器で，同一個体である。やや胴部が張るような器形であろう。波状口縁を呈し，口縁部外面は半截竹管による刻みが施されている。胴部には半截竹管による平行沈線と押引刺突文がみられる。17は中峠式か。太い横位の沈線で隆帯を区画し，隆帯には細い刻みを加えている。18～20は中期加曽利ＥⅠ式土器である。18・19は同一個体で，口縁部区画内に隆帯を貼り付けている。いずれも地文はＬＲである。21も加曽利Ｅ式土器であるが，ＲＬの地文である。22～24は早期子母口式土器の尖底部分である。胎土には繊維を含んでいる。

石器（第39図，第10表，図版32）　１は頁岩製の石鏃で，凹基式の無茎鏃である。２～15は磨石類である。形状や使用痕から，２～８は磨石，９～15は敲石とした。石材は安山岩製が多く，砂岩や泥岩も使用されている。なかには瑪瑙製（３）や花崗岩製（４）もある。磨石は両面にくぼみをもち，周縁の一部をよく使用しているものが多い。４は周縁を研磨されている。敲石は両端や側縁に敲打痕がみられる。15の表面には，台石にも使用したような痕跡がある。16は白雲母花崗岩製の石皿片である。

第10表　縄文時代石器計測表

〈　　〉現存値

挿図番号	器　種	遺物番号	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備　考
1	石鏃	199A-62	頁岩	30.7	〈21.4〉	3.5	1.28	
2	磨石	271-1	安山岩	〈62.0〉	64.1	34.1	169.55	
3	磨石	66-34	チャート	76.0	61.0	40.1	256.54	
4	磨石	184-5	花崗岩	78.1	67.0	42.5	274.32	周縁研磨
5	磨石	80-137	砂岩	〈69.0〉	85.8	52.4	417.52	
6	磨石	173	安山岩	108.0	97.0	46.5	750.98	
7	磨石	203-46	安山岩	〈74.1〉	91.9	52.4	450.05	
8	磨石	6F-69	安山岩	〈71.0〉	〈58.3〉	42.5	217.47	
9	敲石	016-1	砂岩	71.8	69.0	45.7	348.87	
10	敲石	027-1	泥岩	73.0	57.7	42.0	230.01	
11	敲石	271-120	砂岩	72.0	45.0	52.3	215.89	
12	敲石	E7-22-54	砂岩	70.0	53.7	43.6	211.13	
13	敲石	214A-57	安山岩	99.0	55.0	43.7	359.79	
14	敲石	214A-34	安山岩	113.5	64.0	48.1	472.02	
15	敲石	020-5	安山岩	160.1	105.0	77.7	207.38	台石にも使用
16	石皿	006-16	白雲母花崗岩	〈59.0〉	〈67.0〉	52.1	141.41	

第４章　弥生時代

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡１軒・溝状遺構１条と貝を包含したピットである。いずれも調査区の南側に位置している。それ以外の遺構は現状では確認できなかったが，遺構の状況から他に存在していたと思われる。東南部地区では弥生時代の遺構の検出例は稀少で，中期まで遡る遺構は，有吉遺跡の第４次調査で検出された須和田式終末期の壺１点を伴う竪穴住居跡１軒のみである。有吉遺跡は，赤塚支谷を挟んで本遺跡の北に位置しており，この周辺には弥生時代の遺構がさらに存在していた可能性は高い。

第１節　検出された遺構

１　竪穴住居跡

298（第40図，図版６）

調査区の南西端，Ｇ４グリッドに位置する。上面がすでに失われ，南西側も古墳時代後期の住居跡307に大半を削平されている。炉だけが検出されたが，その内側から弥生時代中期末の土器片が出土したことから当該期の竪穴住居の一部であることが判明した。

平面形態は不明であるが，これまで検出された類例から判断して，長軸方向を北西－南東方向にとる楕円形か隅丸方形と考えられる。柱穴は検出されず規模も不明であるが，炉が住居の北西寄りに位置していたとすると，短軸長は５ｍ前後であろう。

炉(径80cm×95cm，深さ16cm)は楕円形を呈する地床炉で，焼土が多く堆積し炉壁と炉床面はよく被熱していた。甕片が炉の内側を囲うように一部残存している。炉の覆土は，黒褐色土と暗褐色土を主体に，焼土粒やローム粒を混入している。

出土遺物は，炉内から出土した１・２の甕である。１は甕の口縁部で，口唇部は棒状工具により波状に押捺されている。頸部が屈曲し，口縁部が大きく開く形態で，体部外面は刷毛で仕上げられている。炉の中央からの出土である。２は炉の内側から出土した甕の口縁部片である。口唇部が小さく外反する器形で，口唇部は棒状工具により押捺されている。器面はよくナデで仕上げられ，煤が付着している。

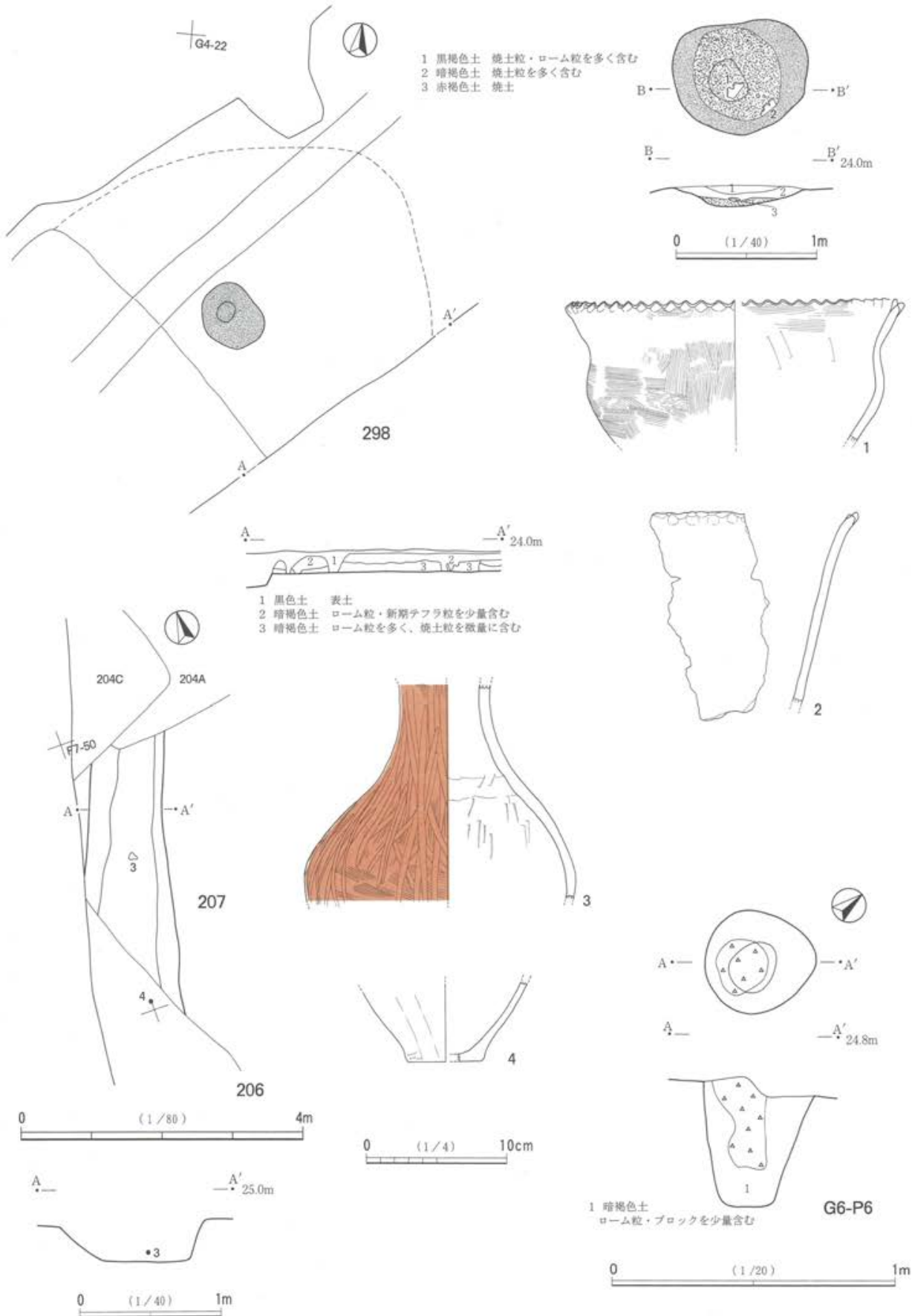
２　溝状遺構

207（第40図，図版６）

調査区の南東，Ｆ７グリッドに位置する。南北方向に走る溝状遺構であるが，南側を206(古墳時代前期)，北側を204Ｃ(奈良時代)の竪穴住居跡にそれぞれ削平されているため，性格や規模等の詳細は不明である。直線上の範囲では溝状遺構は検出されていないことから，方形周溝墓の一部である可能性もある。

検出された長さは，4.0ｍである。幅は，上端で1.0ｍ～1.2ｍ，下端では0.6ｍ～0.8ｍを測る。緩やかに掘込まれ，深さは26cm～30cmである。底面は平坦で，やや軟弱である。覆土は，ロームブロックを含む暗褐色土である。

遺物は，底面直上から３の壺が出土した。長い頸部と丸みをもつ体部が残るが，口縁部と体部下半を欠損する。器面は刷毛で仕上げられた後にミガキやナデを施し，外面は赤彩されている。南側で重複する古墳時代前期の住居跡206から出土した４の壺の底部は，本遺構に本来は伴うものなので，ここに記載した。外面は二次焼成を受けており，煤が付着している。


G4-22
1 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を多く含む
2 暗褐色土 焼土粒を多く含む
3 赤褐色土 焼土
B
B′
24.0m
0 (1/40) 1m
A
A′
298
1
A
A′
24.0m
1 黒色土 表土
2 暗褐色土 ローム粒・新期テフラ粒を少量含む
3 暗褐色土 ローム粒を多く、焼土粒を微量に含む
2
204C
204A
P7-50
207
206
3
4
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm
A
A′
25.0m
0 (1/40) 1m
A
A′
24.8m
1 暗褐色土
ローム粒・ブロックを少量含む
G6-P6
0 (1/20) 1m

第40図　弥生時代遺構

3　ピット

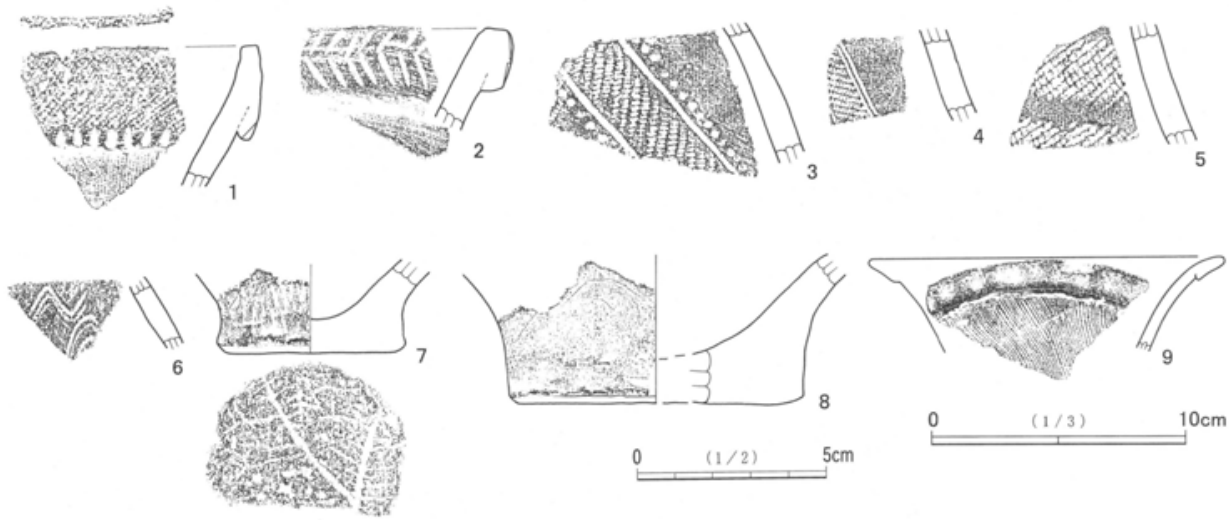
P6（第40図）

調査区の南側，Ｇ６－36に位置するピットである。周辺には時期不明の多数のピットが存在するが，配列は分散しており特に遺構を形成するようなまとまりはない。P6は貝が充満しているピットで，弥生土器片がわずかに含まれていることから，弥生時代のピットと判断した。円形を呈し，規模は径36cm×40cm・深さ46cmを測る。貝類はピット上面から検出され，ピットの中心に35cmの厚さでブロック状に堆積していた。埋土は，焼土粒を多く含む黒褐色土である。貝類の分析結果は付章に記載した。

第２節　遺構外出土遺物

確認調査時や，遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する（第41図）。

１は鉢，２は壺の口縁部である。折り返し状の口縁部に文様が施文されている。１の口縁部はＲＬとＬＲの羽状縄文が充填され，口唇部にもＲＬの細い縄文が施文されている。下端には刺突による刻みがみられる。内面は赤彩され，ミガキで仕上げられている。２の口縁部はヘラ状工具による疑似羽状文が沈線として施文されている。３～６は壺の胴部である。細い沈線で区画し，そのなかを３はＲＬ，４はＬＲの縄文を充填している。無文部は赤彩されている。３は沈線の外側に刺突具による列点がみられる。５は細かいＬＲ縄文を施文している。６は細い半截竹管による波状の沈線文で施文され，器面は赤彩されている。７・８は壺の底部である。７の外面には木葉痕が残る。９は壺の口縁部である。大きく外反する折り返しの口縁で，外面は刷毛で調整されている。古墳時代前期の五領式に近い時期であろう。



第41図　遺構外出土弥生土器

第５章　古墳時代

古墳時代の遺構は，竪穴住居跡132軒（前・中期52軒，後期80軒）・古墳１基・周溝１条で構成されている。これらの遺構は，台地の平坦部を中心に，ほぼ全域に分布していた可能性が高い。集落は，出土土器からみると，古墳時代前期初頭から竪穴住居が構築されはじめ，中期へと次第に集落が形成されていったと考えられる。後期になると台地全域から最も住居跡が多く検出され，集落としての最盛期を迎える。その後は奈良・平安時代まで集落は継続している。ここでは，古墳時代前期から中期と，古墳時代後期に便宜上わけて，検出された遺構について報告を行う。調査区の南側では円墳の周溝が検出されたが，墳丘はすでに大きく削平されており，埋葬施設も確認できなかった。

なお，本遺跡では狭長な範囲の調査のため，多くの遺構は調査範囲外まで広がっており，その全容を把握することは困難である。しかも複雑に重複しており，床面・柱穴・炉など一部が漸く検出できた遺構も多い。なかには，わずかな床面と出土した土器から住居跡と判断したものもある。このような遺構も，その性格が判断可能なものについては，それぞれの種別に含めて報告する。また，一部のみの検出で出土遺物もないために時期の特定ができない遺構については，各章で適宜報告することとした。

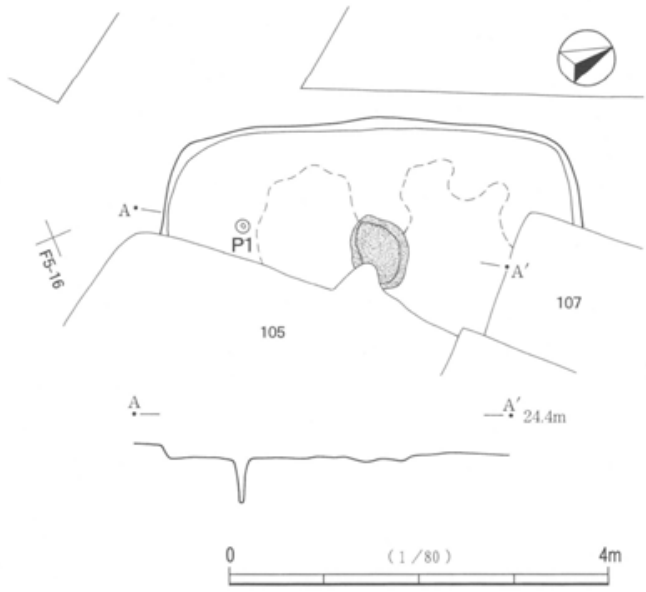
第１節　古墳時代前期から中期の遺構

１　竪穴住居跡

この時期の竪穴住居跡は，台地中央部から東側にかけての範囲に主に分布している。大別すると，中央部から北西側斜面にかけて分布するグループと，東側に主に展開するグループにわけられる。台地の南側や北側では分布は稀薄になる。

001（第42図）

調査区中央，Ｆ５グリッドに位置する。住居跡105・107Ａ・Ｂ（後期）に東側2/3を削平されているが，西側1/3に炉や柱穴の一部が遺存していた。



第42図　001

平面形態は方形を呈し，コーナーはわずかに丸みをもつ。規模は西壁長4.0ｍを測るが，壁は外側へやや張出しながら東側にすすみ，遺存している範囲での最大幅は4.4ｍである。主軸方位はＮ-67°-Ｗである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は15cm前後である。床面は平坦で，炉の周辺がよく踏み固められ堅緻である。遺存している柱穴は２本で，床面南西側からP1が，107の床面からP2の一部が，それぞれ検出された。P1は径12cm×14cm・深さ42.5cmと細いつくりである。P2は攪乱のため一部が確認された程度である。

炉(径58cm×70cm，深さ11cm)は楕円形で，住居の北西側に設けられている。炉床面の周囲がやや低くつくられ，全体によく被熱されている。

遺物は覆土中から土器片が出土しているが，図示できるものはない。

003（第43図，図版33）

調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。南東側2/5を住居跡002(後期)に削平されており，南壁・東壁は一部の遺存である。

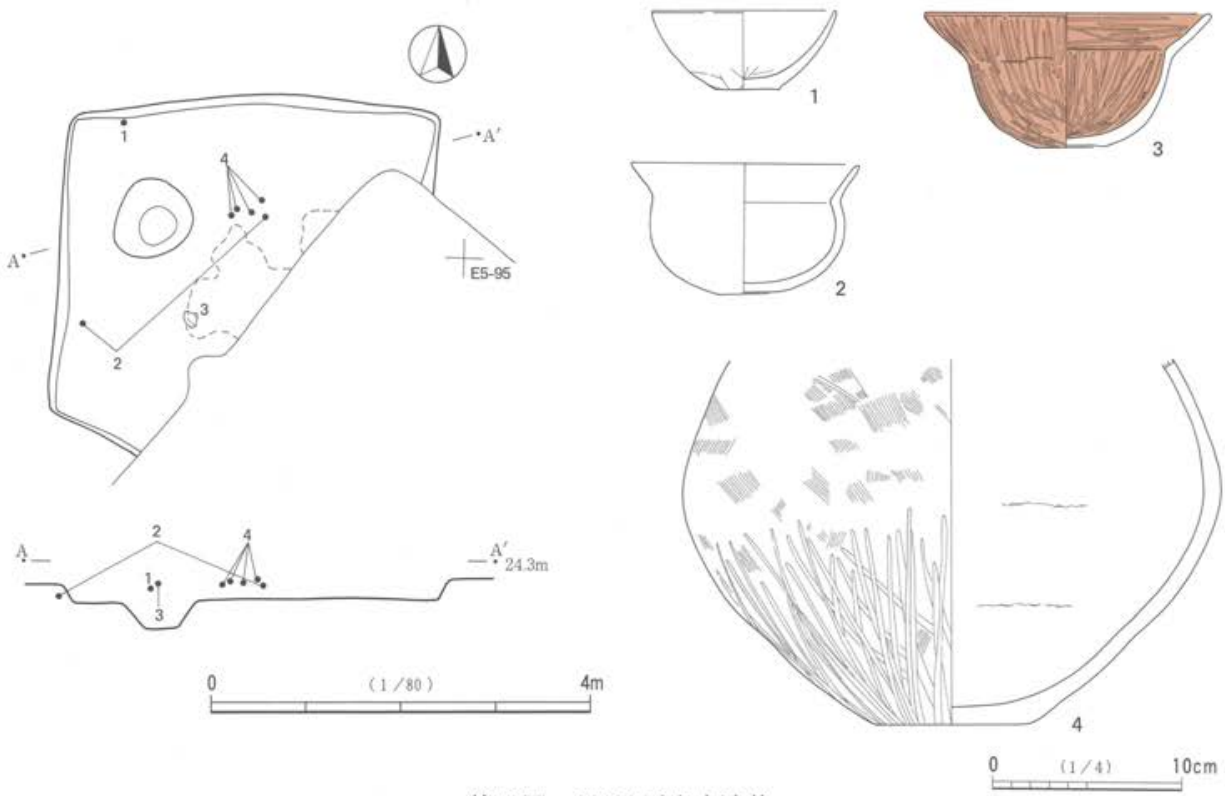
平面形態は方形を基本とするが，南壁が南東方向に延びており，不整方形を呈すると思われる。規模は，北壁長3.86m・西壁長3.12mである。長軸方向はほぼ西方向である。壁は垂直に掘込まれ，壁高は13cm～20cmである。床面は平坦で，中央部に硬化面が広がっている。床面から落ち込みが検出されたが，いずれも木根による攪乱である。炉や柱穴は検出されなかった。覆土は，黒灰色土を主体にローム粒を混在する。

遺物は覆土中層から下層にかけて，１～４の土師器小型鉢・鉢・坩・甕が出土している。１は小型の鉢で，底部が小さくつくられ堅緻である。２は口縁部が大きく開く形態の鉢である。３は大型の坩で，口径は14.2cmもある。内外面に赤彩が施され，全体によく磨かれている。

006（第44図，図版７・33）

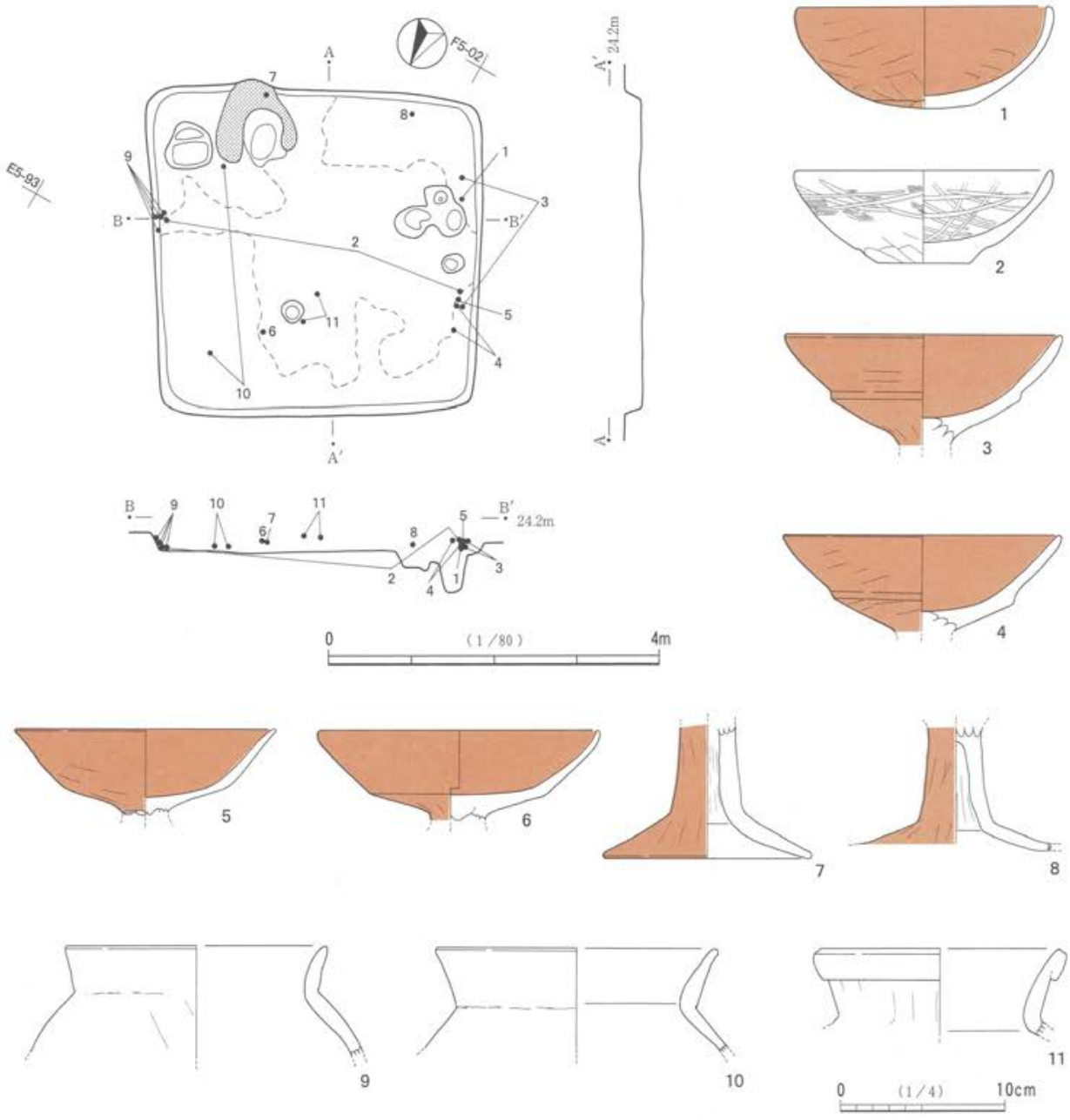
調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。上面を全体に削平されていたが，重複する遺構もなく，遺存状態は良好である。中期に属する土器が出土しているが，カマドが南壁に設けられている。

平面形態は正方形を呈し，規模は3.96m×3.98mを測る。各コーナーはわずかに丸みをもつ。主軸方位はN-27°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は東側では26cm前後であるが，西側は12cm～16cmと次第



第43図　003及び出土遺物

に低くなっている。床面はやや凹凸があり，カマド前面から中央部や西寄りの広い範囲に硬化面が広がっている。壁溝は認められない。柱穴と考えられるピットは，床面をさらに掘下げて確認したが検出できなかった。西壁際中央の床面に４基のピットがまとまって検出されたが，このうちP1～P3は連結している。P3が51cmと最も深く，カマドの対面ではないが，連結した出入り口施設に伴うピットの可能性がある。カマドの北東側には，楕円形の貯蔵穴(径58cm×60cm)が付設されている。深さは5cm程度とかなり浅いつくりであるが，埋土には砂質粘土や焼土が多く堆積している。カマドと貯蔵穴に挟まれた南東コーナー床面には，カマドの構築材である砂質粘土が流出していた。住居覆土は，焼土粒・炭化粒を若干含む暗褐色土が主体である。



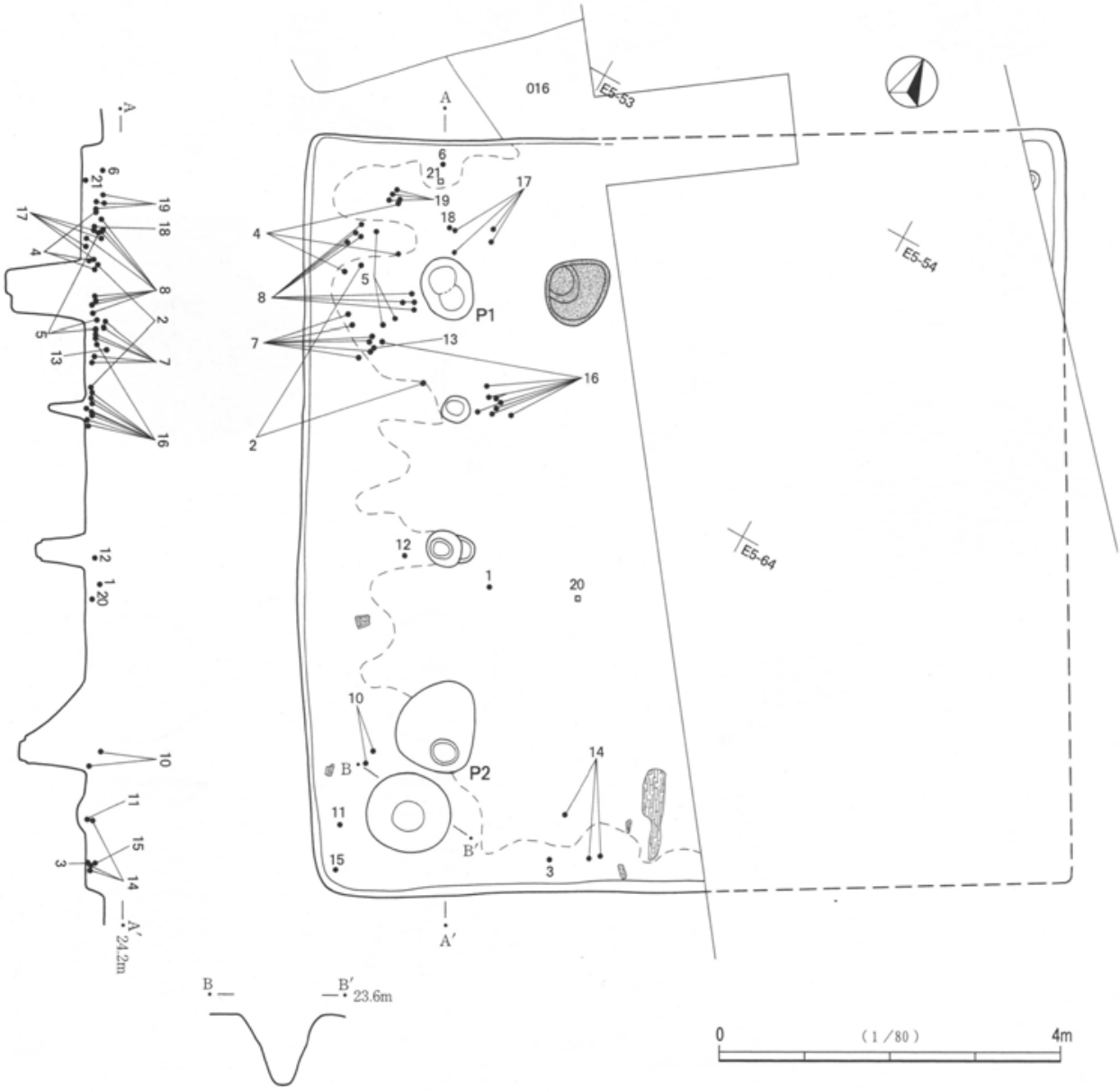
第44図　006及び出土遺物

カマドは南壁中央東寄りに，壁を10cmほど掘込んで設けられている。遺存状態はあまり良好ではなく，すでに天井部は崩落し，右袖部は攪乱のため失われている。左袖部も砂質粘土が周囲に流失しているような状態である。火床は楕円形で，16cm掘窪められている。赤化した内壁の砂質粘土や焼土が堆積していた。

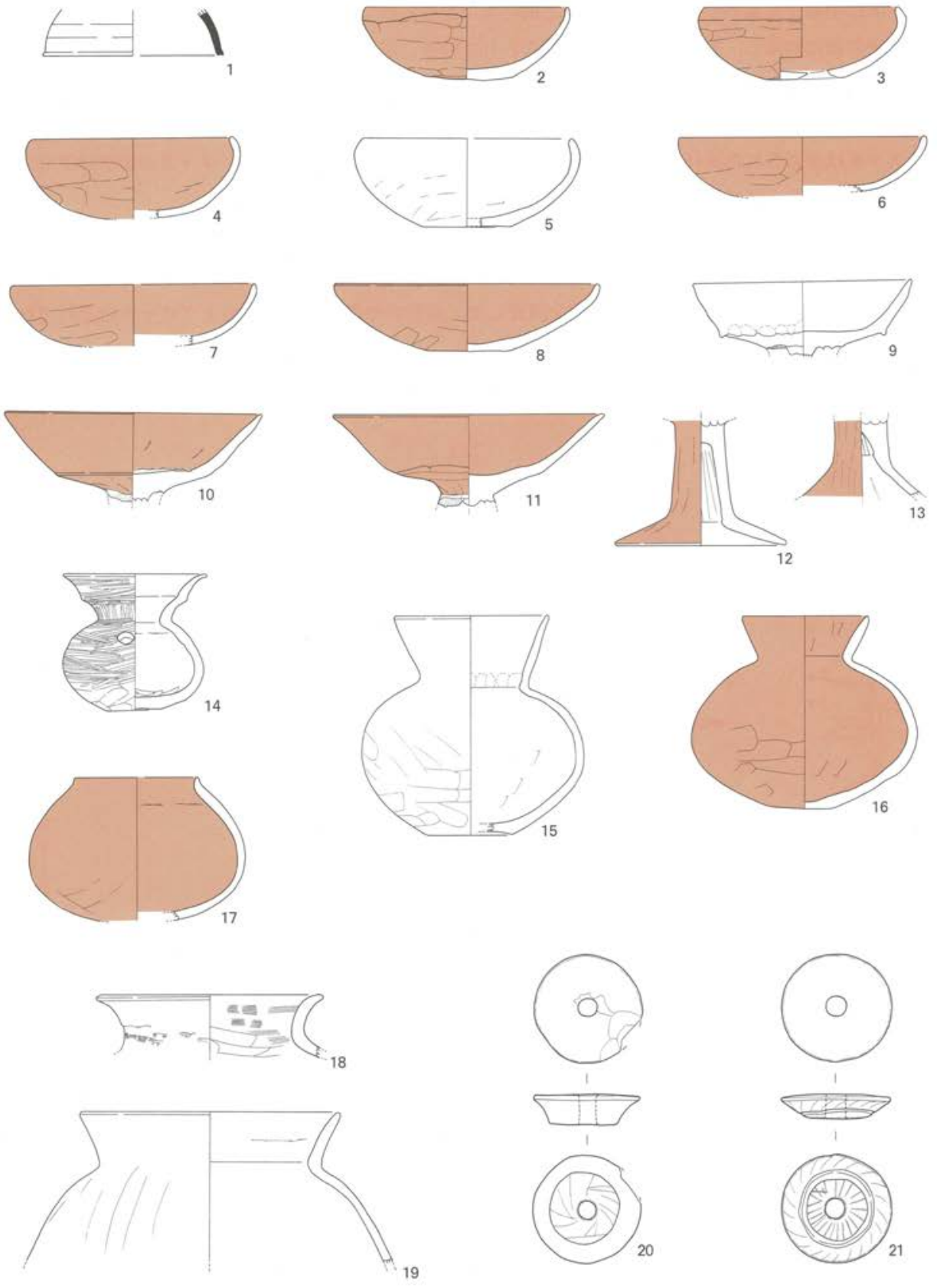
遺物は，土師器杯・高杯・甕・壺が出土している。１・２は杯である。１は内外面に赤彩が施されている。３～８は赤彩された高杯である。３～６は高杯の杯部で，下部に稜をもつ。７・８の脚部は直立し，内部は中空である。11は壺の短い口頸部で二重口縁である。

007（第45・46図，図版７・33・34・60）

調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。中期の大型の住居跡であるが，東側の大半が調査区域外のため，西側1/2と北東コーナー付近を調査した。南北の壁際の床面から焼土ブロックをそれぞれ検出した。南壁際からは炭化材が若干出土している。



第45図　007



第46図　007出土遺物

平面形態は正方形を呈し，規模は完掘できた西壁長で8.9m，一部を調査した北壁長は8.8mを測る。西壁を基軸とした主軸方位はN-26°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は18cm～32cmを測り東側がやや高くなっている。床面はほぼ平坦で，壁際を除いて硬化面が広い範囲で検出された。調査範囲からは，直線的に並ぶ４本のピットを検出した。このうち主柱穴はP1(径60cm×76cm，深さ90cm)・P2(径104cm×110cm，深さ80cm)である。P3・P4はP1・P2に比較して，径が34cm～46cmと小さく，深さも44cm～57cmと浅いことから，補助的な柱穴であろう。楕円形の貯蔵穴(径92cm×100cm，深さ117cm)が南コーナー付近に設けられ，周辺からは２個体の高杯の杯部(10・11)が出土した。貯蔵穴の埋土は，明黄灰色土を主体に黒色土・暗黄灰色土を混入する。住居の覆土には，暗黄褐色土の上に暗褐色土が堆積している。

炉(径72cm×88cm，深さ16cm)は不整楕円形で，P1に隣接して住居の北西側に設けられている。炉床面はよく被熱し，焼土が堆積していた。

約1/2の調査であったが，出土遺物は多い。北西コーナーからP1周辺の範囲に堆積している焼土中を中心に，須恵器蓋，土師器杯・高杯・甕・壺・甑や石製紡錘車などが多数出土している。１は須恵器蓋で，覆土中からの出土である。３から８は杯である。内外面が赤彩されているものが多い。３はヘラケズリで平底をつくりだしている。９～13は高杯である。９を除いて内外面が赤彩されている。杯部の下部に稜をもち，脚部は中空である。14は土師器の甑である。外反する口縁部と短い口頸部をもつ。口縁部から体部下半にかけての外面には，丁寧なミガキが施されている。17は無頸壺であろう。内外面が赤彩されている。20・21は石製紡錘車である。20は滑石製で一部を欠損し，住居中央の床面直上から出土した。径上面3.7cm・下面2.4cm，厚さ1.1cm，孔径7mmを測る。下面には12本の沈線が，粗雑に放射状に巡っている。21は蛇紋岩製で，北壁際の床面からの出土である。やや扁平な形態で，径上面3.8cm・下面2.2cm，厚さ0.9cm，孔径7mmを測る。側面と下面に放射状に沈線が施されている。

009（第47図，図版34・60）

調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。中期の大型の住居跡と思われるが，北側の大半が調査区域外にかかり，しかも東側を住居跡008(後期)に，中央部上面を中近世の溝状遺構011にそれぞれ削平されている。そのため調査できたのは，住居の南壁周辺の一部である。

平面形態は方形を呈し，検出できた南壁の現存長は7.4mである。主軸方位は推定でN-25°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は27cm～33cmである。検出した範囲での床面は，平坦であるがやや軟質である。床面北東側から，008に一部削平されているが柱穴を検出した。P1(径70cm×94cm，深さ89cm)とP2(径40cm×56cm，深さ31cm)の２本の柱穴が設けられているが，このうち主柱穴はP1であろう。覆土は，暗黄褐色土の上に暗褐色土が堆積している。

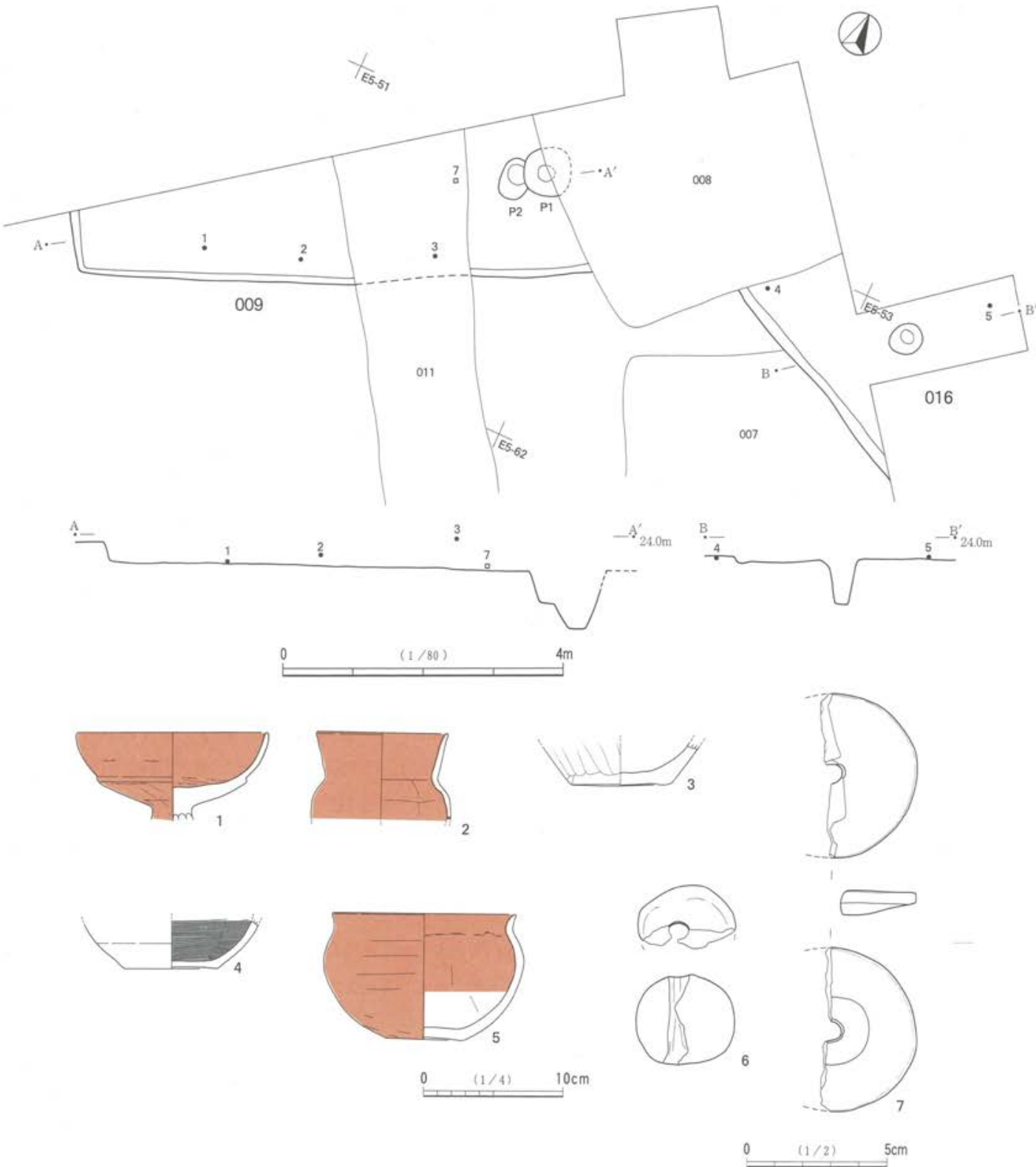
遺物は少ないが，床面や覆土中から１～3,6・７の土師器高杯・壺や石製紡錘車，土玉が出土している。４・５は016からの出土である。１は高杯の杯部で，内湾気味に立上がる。内外面が赤彩され，下部に稜をもつ。６は土玉で，1/2の遺存である。現存径3.5cm・高さ3.2cm・孔径7mmを測る。７は扁平な形態の滑石製紡錘車である。1/2の遺存で，現存径上面5.9cm・下面2.4cm，厚さ0.9cm，孔径8.5mmを測る。

016（第47図，図版34）

調査区中央西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。中期の住居の南西側の一部が検出できたが，大半は調査区域外に延びている。北西側は住居跡008(後期)に，南東側を007(中期)に，それぞれ削平されている。柱穴１本を確認できただけで，住居としての詳細はほとんど不明である。

平面形態は，直線的に延びる南西壁の一部から方形に近い形態と思われる。西壁は1.2mの長さでわずかに遺存している程度である。壁は垂直に掘込まれ，壁高は32cmである。床面はほぼ平坦で，硬化面は確認されていない。床面から柱穴(径42cm×46cm，深さ66cm)と考えられるピットが検出された。

遺物は，壁際や床面から土師器杯・鉢・壺などが出土した。このうち図示できたのは５の鉢と，混入した４の平安時代の黒色土器である。５はほぼ完形で内外面が赤彩されている。



第47図　009，016及び出土遺物

010（第48図）

調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。整地のため壁や床面の大半はすでに削平され，東側を住居跡007（中期）に，西側を溝状遺構011に大きく破壊されている。炉と硬化した床面や柱穴が検出されたことから，住居跡と判断した。出土遺物から前期と考えられる。

平面形態は不明であるが，柱穴や炉などの位置から判断して，長軸方向を北北西にとる方形と考えられる。規模も不明であるが，P1とP2の柱間寸法は2.1ｍである。床面は一部が検出され，炉の東側に硬化面が広がっている。床面と011から計４本のピットが検出されたが，このうち主柱穴と思われるのは，炉との位置関係からみてP1（径34cm×40cm，深さ48cm）・P2（径32cm×40cm，深さ25cm）であろう。P3・P4は，炉やP1・P2との柱間寸法が1.0ｍ～1.4ｍと短いことなどから，主柱穴とは考えがたい。

炉（径66cm×68cm，深さ11cm）は焼土が堆積し，ほぼ円形を呈して住居の南西寄りに設けられていると思われる。

出土遺物は僅少で，図示できたのは１の器台の破片のみである。

012（第48図）

調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。南西側の1/2を，後期や奈良時代の住居跡013～015に削平され，床面北側には後世の攪乱を受けている。出土遺物から中期の住居跡と考えられる。

平面形態は方形になると考えられる。規模は，北東壁長4.9m，部分的に検出できた北西壁・南東壁の現存長は，それぞれ2.1m・3.0mである。北東壁を基軸とした主軸方位はN-41°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は19cm～28cmである。床面は平坦で，壁際近くまで硬化面が広がっている。東コーナー付近には黄灰色の粘土が堆積していた。主柱穴は，床面からP2（径32cm×34cm，深さ70cm）とP3（径36cm×40cm，深さ74cm）が検出されたが，014と013の床面にはP1（径40cm×42cm）とP4（径42cm×56cm）がそれぞれ遺存しており，柱穴間の寸法は，2.8m～3.0mである。P5（径36cm×46cm，深さ27cm）は位置的にみて，出入り口施設に伴うピットであろう。また，南東壁中央近くのピット（径60cm）は72cmと深く，貯蔵穴の可能性もある。覆土は，暗黒褐色土を主体に黒褐色土が混入している。炉は検出されていない。

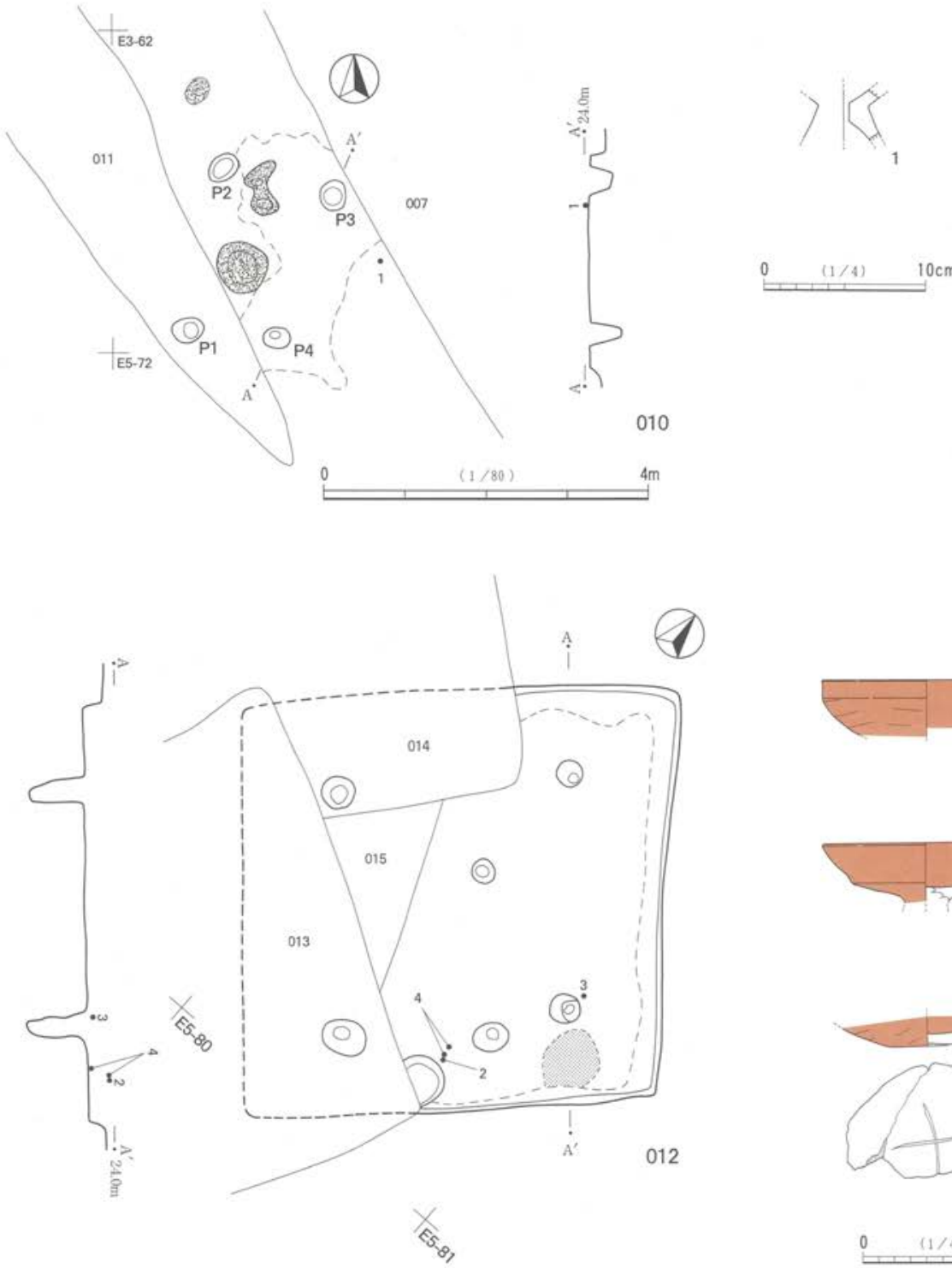
遺物は，土師器杯・高杯・甕などが住居南側を中心に散漫に出土している。２・４は杯である。４の底部には線刻がある。３は高杯の杯部である。いずれも赤彩が施されている。

018（第49図，図版34）

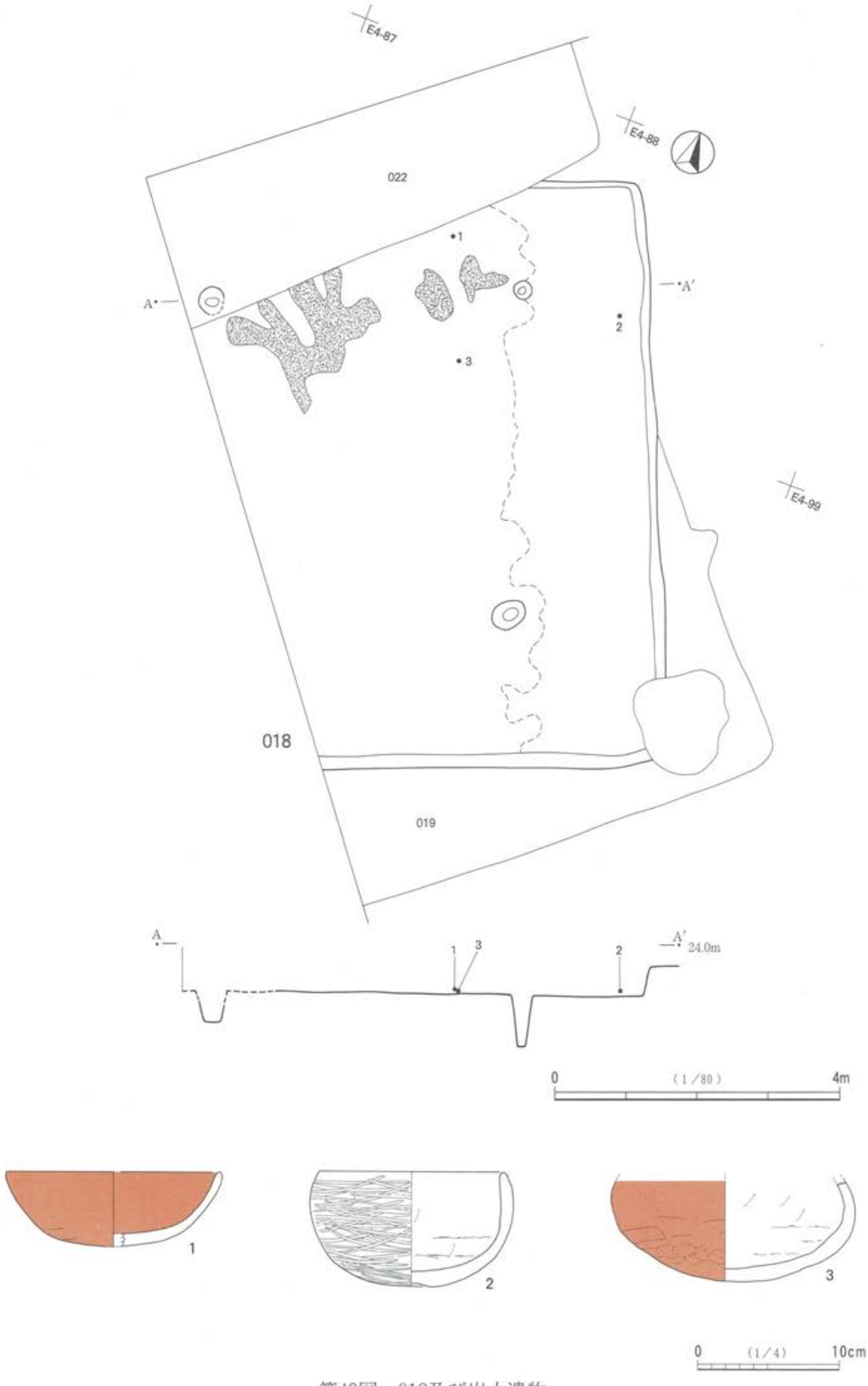
調査区中央西寄り，Ｅ４グリッドに位置する。住居の西側1/4は調査区域外である。後期と奈良時代の住居跡017・019・022と重複し上面の大半を削平されているが，これらの住居跡の床面を除去すると，018の床面が現れてくる。北コーナー周辺の狭い範囲が，削平されずに壁も遺存していた。北西側の床面には焼土の堆積がみられた。出土遺物から中期の住居跡であろう。

平面形態は方形を呈し，規模は北東壁長で8.1ｍを測る。北コーナー付近では壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は33cmである。床面はわずかに凹凸があるが，P2とP3の外側の範囲を除いて全体に堅緻である。床面からは多数のピットを検出した。このうち主柱穴はP1～P3の３本で，P4は調査区域外に位置している。P1（径36cm×40cm，現存の深さ37cm）は022の床面から，P2（径26cm，深さ74cm）とP3（径36cm×50cm，深さ41cm）は床面からそれぞれ検出された。覆土は，暗黄灰色土や暗褐色土が主体である。

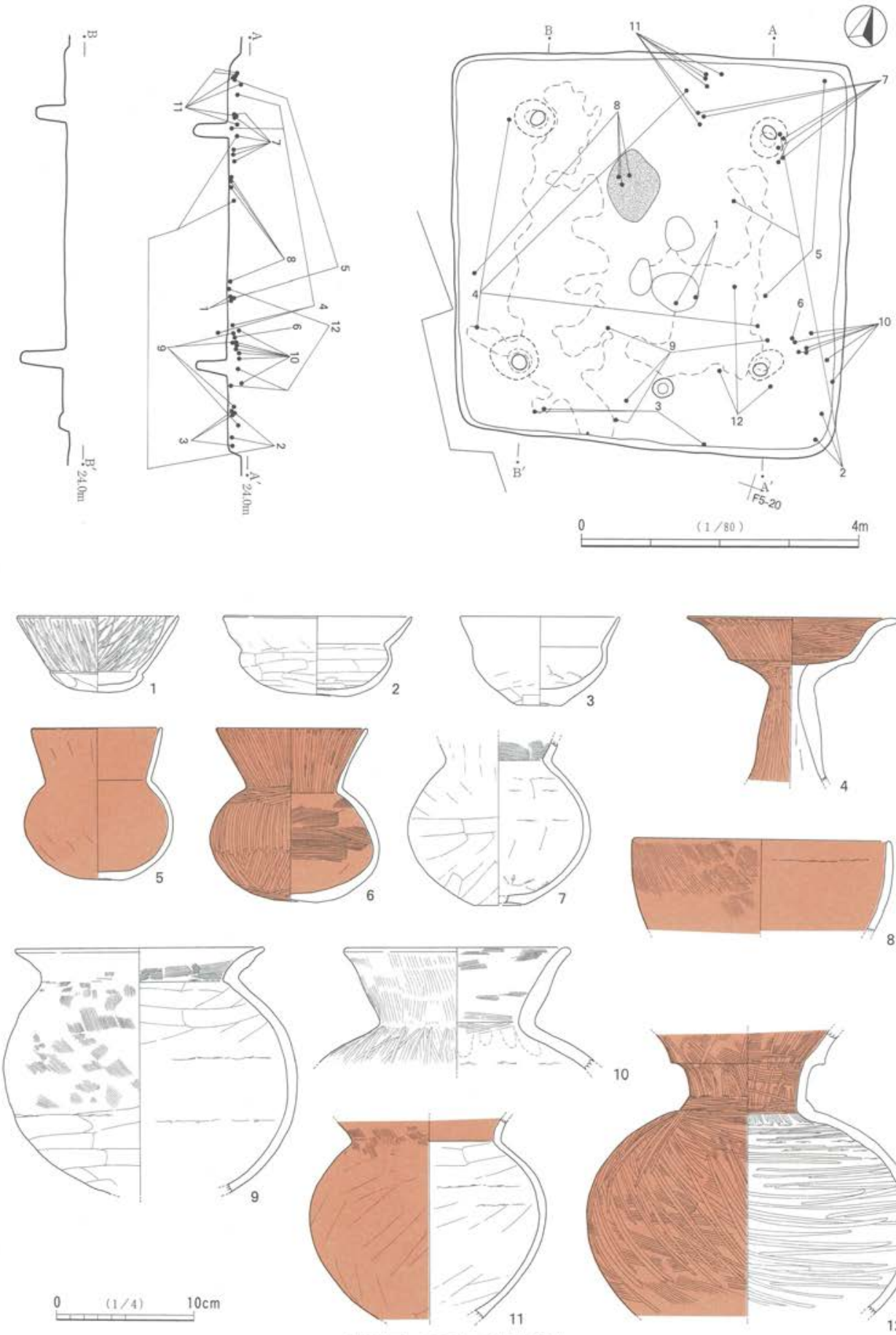
遺物は少なく，北コーナー周辺の床面から土師器杯・高杯・甕などが出土している。１は杯である。内外面に赤彩されている。２・３は鉢である。２は体部外面に横方向のミガキが施されている。３は口縁部



第48図　010，012及び出土遺物



第49図　018及び出土遺物



第50図　020及び出土遺物

を欠損するが，体部外面が赤彩されている。

020（第50図，図版７・34）

調査区中央西寄り，Ｆ４グリッドに位置する。南東コーナー付近で住居跡024(後期)と接し，西側上面が削平されているが，遺存状態は概ね良好で，全体を調査することができた。西壁中央寄りの床面から炭化材が１点出土し，少量の焼土が床面の数か所で検出されている。

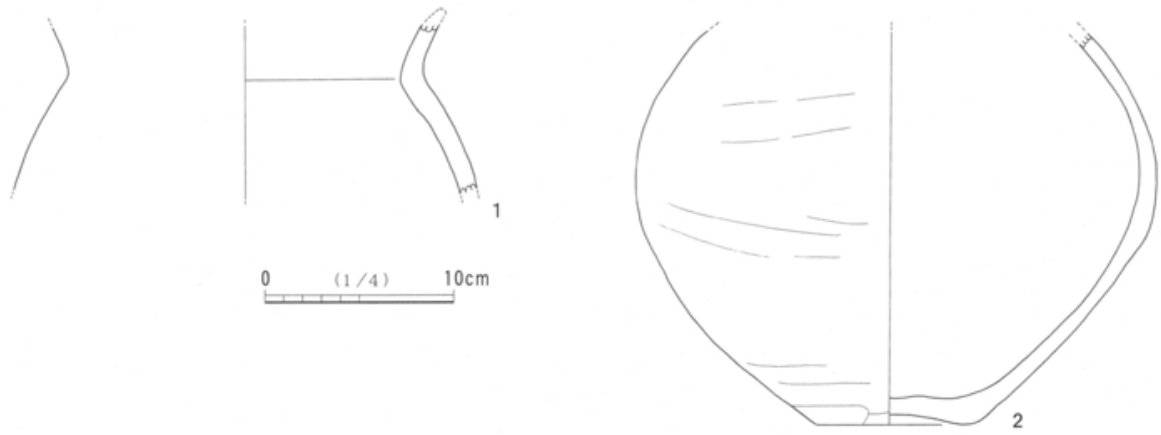
平面形態は方形を呈し，規模は5.76ｍ×5.60ｍを測る。主軸方位はN-15°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は，東側では16cm～23cmを測るが，西側にすすむに従って低くなり，西壁ではわずかに2cm～4cmほどになる。床面は部分的に凹凸があり，中央部には硬化面が広がっている。主柱穴は４本検出されたが，いずれもやや壁寄りに設けられている。楕円形が多く，掘方の径は45cm～70cmと較差がある。深さは，P1(径60cm)～P3(径45cm×52cm)が35cm～45cmであるが，P4(径68cm×70cm)が56cmと最も深い。出入り口施設に伴うピット(径22cm，深さ31cm)は，南壁中央寄りの床面に設けられている。

炉(径76cm×110cm)は長楕円形で，床面中央のやや北寄りに設けられていた。炉ではないが，床面が焼成を受けて赤化している部分が中央の３か所にまとまっている。

遺物は，東側の壁際の床面から土師器坩・器台・甕・壺などが大量に出土している。１・２は坩である。１は小さめの体部に大きく開く口縁部をもつ。口縁部の内外面には丁寧なミガミが施されている。器壁が薄く，丁寧に削られている。住居中央の床面から出土した。３は口縁部がやや開く小型の鉢であろう。南壁際からの出土である。４は高杯で脚部を欠損する。口縁部が大きく外反する形態で，内外面は赤彩されミガキが施されている。杯部と脚部は貫通している。床面に散在して出土した。５～７は小型壺である。住居東側からの出土である。５・６は内外面が赤彩され，６は外面にミガキが施されている。８は鉢である。体部外面に刷毛目が残り，内外面が赤彩されている。主に炉内から出土している。10～12は壺である。12は複合口縁の壺で口縁部と底部を欠損する。口頸部内外面から体部外面が赤彩され，全体にミガキが施されている。P3周辺の床面や覆土下層からの出土である。

021（第51図）

調査区中央やや西寄り，Ｆ５グリッドに位置する。後期の住居跡005の南西にあり，遺物がまとまって出土した。この地点では落ち込みのようなプランが確認され，土坑や貯蔵穴の存在も考えられるが判然としない。１・２の土師器甕は，いずれも内面を上に向けて出土し，全体に被熱のため脆弱である。



第51図　021出土遺物

028A（第52・53図，第18表，図版７・８・34・35・58）

調査区の北西，Ｄ５グリッドに位置する。狭い調査範囲のなかに028Ａ～028Ｃの３軒の住居跡が北東方向に重複している。北側は調査区域外まで遺構が延びており，しかも028Ｂ・028Ｃに削平されているため，調査できたのは南側の1/2である。出土遺物から中期の住居跡と考えられる。

平面形態は方形である。規模は，検出できた南壁長で5.9mを測るため，各壁長も6m前後であろう。南壁から推定した主軸方位はN-13°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は南壁側で27cm前後である。床面は平坦で，中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅16cm～20cm，深さ10cm前後)は，検出された範囲では全周している。床面南側からは２本の柱穴(P1・P2)と，出入り口施設に伴うピット(P3)を検出した。P1(径36cm×50cm，深さ68cm)・P2(径50cm×56cm，深さ83cm)とも掘込みは深く，位置的にみて主柱穴であろう。P3(径18cm～22cm，深さ16cm)の前面には土堤状の高まりが見られる。この高まりの北側に焼土の堆積がみられる。不整楕円形の貯蔵穴(径50cm×56cm，深さ30cm)は，南東コーナーに設けられ，埋土には暗褐色土や黒褐色土が堆積していた。住居覆土は，ローム粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物は，土師器杯・高杯・壺・甕，石製模造品(剣形品)などが南西コーナー付近を中心に多く出土している。１は杯である。内外面が赤彩されている。２～７は高杯である。３の杯部は口縁部が大きく外反し，明瞭な稜をもつ。内外面が赤彩されている。６の脚部は中実である。５は貯蔵穴内からの出土である。８は台付甕の台部である。刷毛で仕上げられている。覆土中から出土した。９は複合口縁の壺の口縁部である。口唇部に沈線をもつ。10～12は甕である。11は南壁際からまとまって出土した。13は土玉で，1/2の遺存である。現存径3.7cm・高さ3.1cm・孔径6mmを測る。14は剣形の石製模造品である。滑石製で，表面に鏑がみられる。南壁寄りの床面からの出土である。

028B（第52図，図版７・８）

北側3/4が調査区域外で，北東側を028Ｃに削平されている。

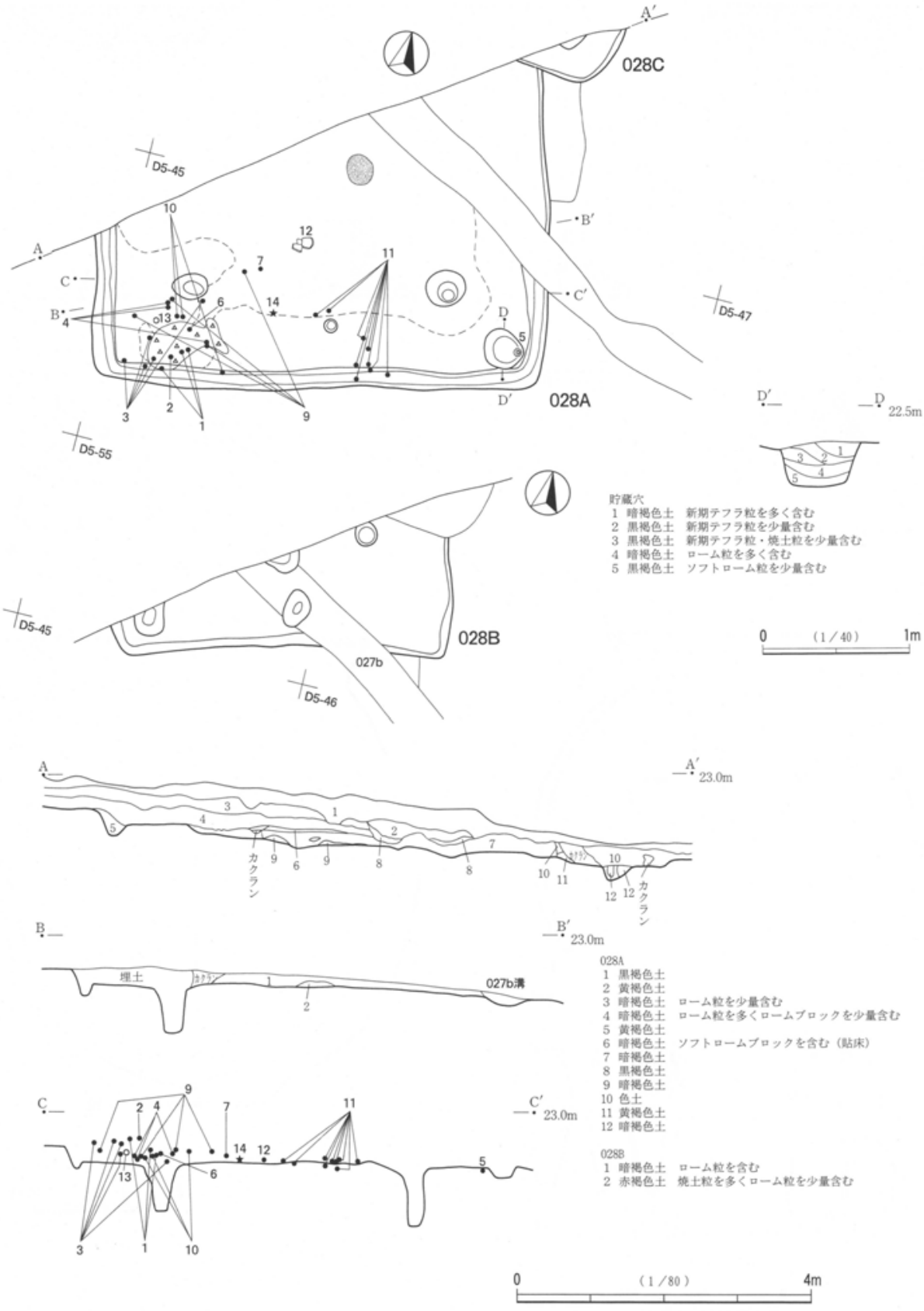
平面形態は方形になると考えられる。規模は，検出できた南壁長で4.4mであることから，各壁長は4.5m前後であろう。南壁から推定した主軸方位はN-14°-Wと，028Ａと同方位である。壁は垂直に掘込まれている。壁高は，南壁では14cm～21cmを測るが，東壁側にすすむに従って低くなり，東壁では3cm～7cmと低くなっている。床面はほぼ平坦で，硬化面は認められない。床面から数基のピットを検出したが，主柱穴と考えられるピットは確認できなかった。P2(径34cm×50cm，深さ10cm)は出入り口施設に伴うピットであろう。覆土には，暗褐色土を主体に黄褐色土や部分的にロームブロックが堆積していた。028Ａよりは新しい遺構であるが，遺物が出土していないので正確な時期は判然としない。

028C（第52図，図版８）

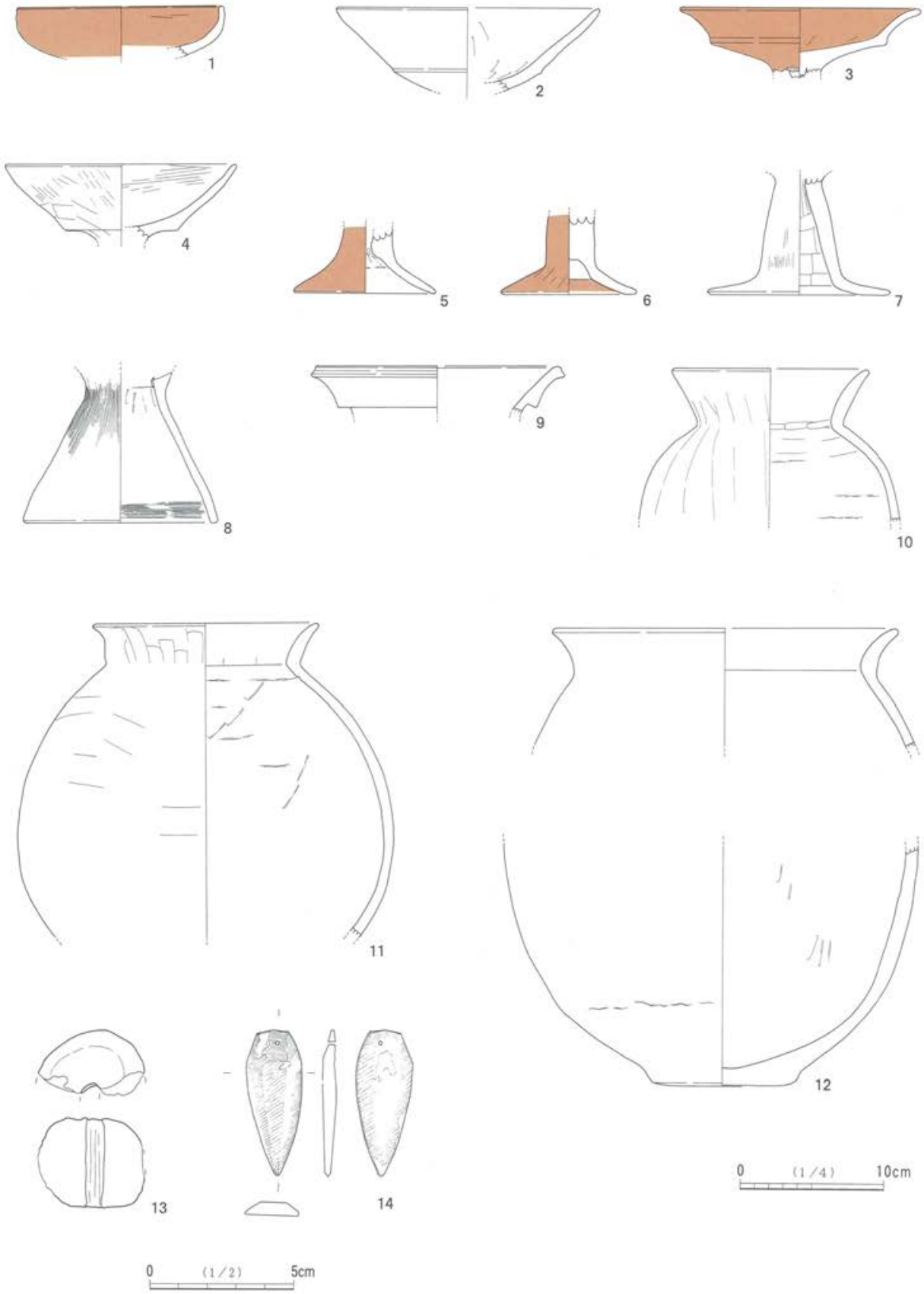
大半が調査区域外のため，南東コーナーがわずかに検出できた住居跡である。コーナーはやや丸みをもつが，平面形態は方形と思われる。コーナーは垂直に掘込まれ，壁高は11cmである。覆土には暗褐色土が堆積していた。028Ｂを削平して構築されているが，出土遺物がないため時期は不明である。

034（第54図，図版35・60）

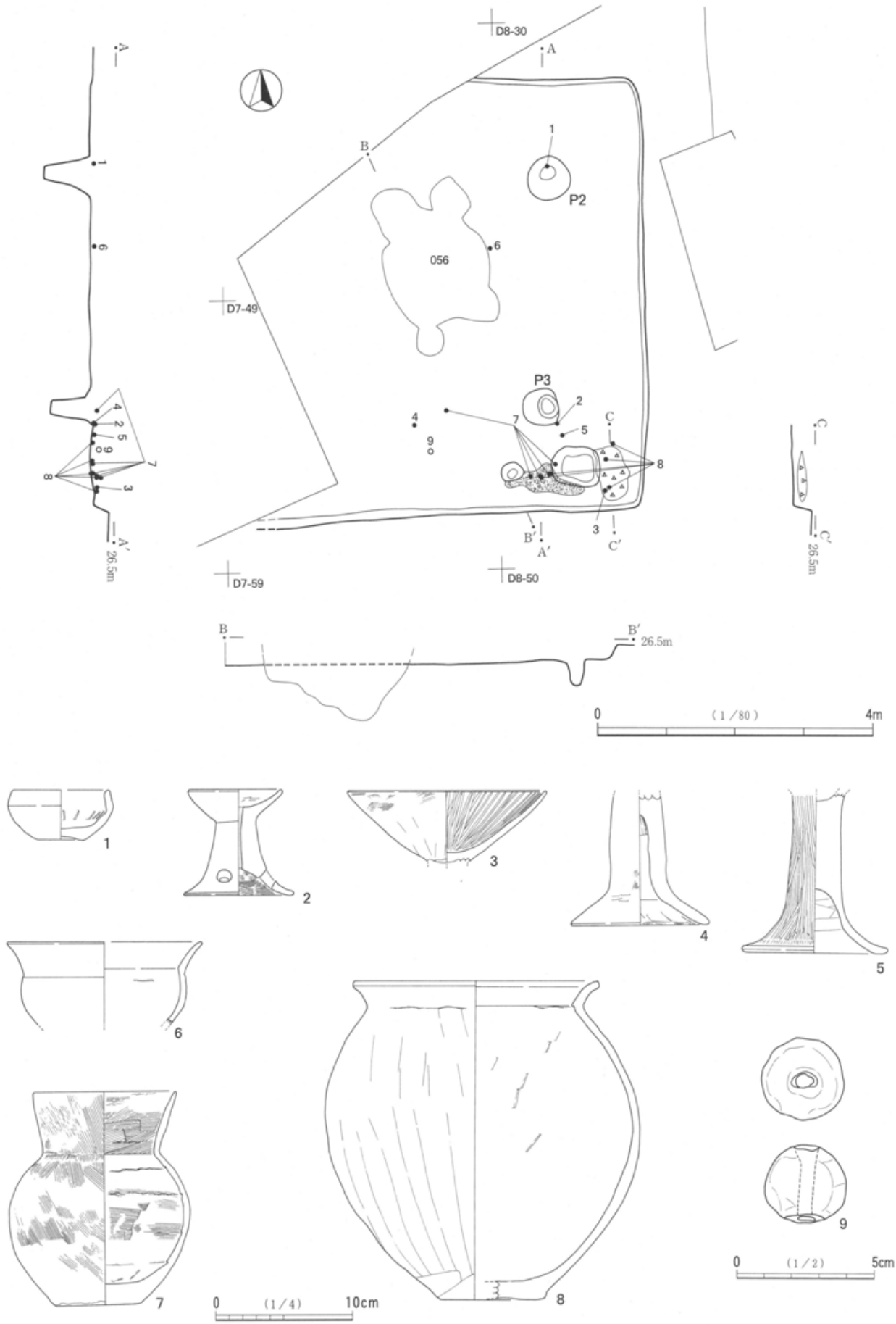
調査区の北東，Ｄ７グリッドに位置する。北壁の1/2から西壁にかけての範囲が調査区域外であるが，全体の3/4を調査できた。床面中央は平安時代の土師器焼成土坑056により掘下げられている。南壁際の貯蔵穴周辺の床面からは，炭化材や焼土がわずかに検出されている。


028C
028A
028B
027b
D5-45
D5-46
D5-47
D5-55
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
22.5m
23.0m
貯蔵穴
1 暗褐色土 新期テフラ粒を多く含む
2 黒褐色土 新期テフラ粒を少量含む
3 黒褐色土 新期テフラ粒・焼土粒を少量含む
4 暗褐色土 ローム粒を多く含む
5 黒褐色土 ソフトローム粒を少量含む
0 (1/40) 1m
カクラン
埋土
027b溝
028A
1 黒褐色土
2 黄褐色土
3 暗褐色土 ローム粒を少量含む
4 暗褐色土 ローム粒を多くロームブロックを少量含む
5 黄褐色土
6 暗褐色土 ソフトロームブロックを含む（貼床）
7 暗褐色土
8 黒褐色土
9 暗褐色土
10 色土
11 黄褐色土
12 暗褐色土
028B
1 暗褐色土 ローム粒を含む
2 赤褐色土 焼土粒を多くローム粒を少量含む
0 (1/80) 4m

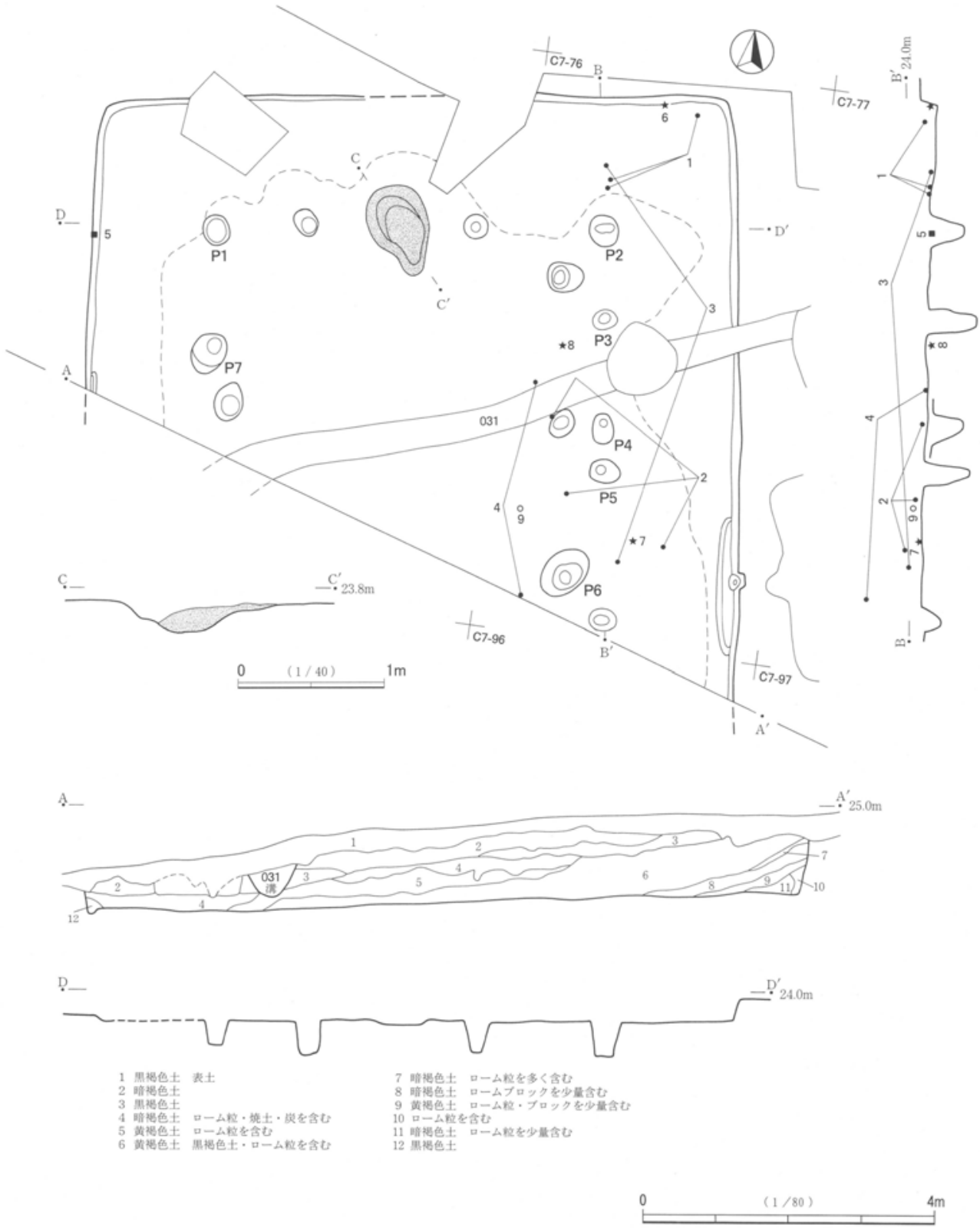
第52図　028A・B・C



第53図　028A出土遺物



第54図　034及び出土遺物



1 黒褐色土　表土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
4 暗褐色土　ローム粒・焼土・炭を含む
5 黄褐色土　ローム粒を含む
6 黄褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む
7 暗褐色土　ローム粒を多く含む
8 暗褐色土　ロームブロックを少量含む
9 黄褐色土　ローム粒・ブロックを少量含む
10 ローム粒を含む
11 暗褐色土　ローム粒を少量含む
12 黒褐色土

第55図　038

平面形態は方形である。規模は，検出できた東壁長で6.3mを測るため，各壁長は概ね6.5m前後であろう。主軸方位はN-3°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は18cm～29cmを測り，南東コーナー周辺が深くなっている。床面は平坦であるが，全体にやや軟弱である。調査範囲の床面からは，P2(径62cm×68cm，深さ71cm)とP3(径54cm×60cm，深さ65cm)の２本の主柱穴が検出された。南東コーナーには方形の貯蔵穴(54cm×68cm，深さ42cm)が設けられている。貯蔵穴の東側の床面からは貝ブロックがまとまって検出されており，分析結果は付章に記載した。覆土は暗褐色土を主体に，黒褐色土が混在している。

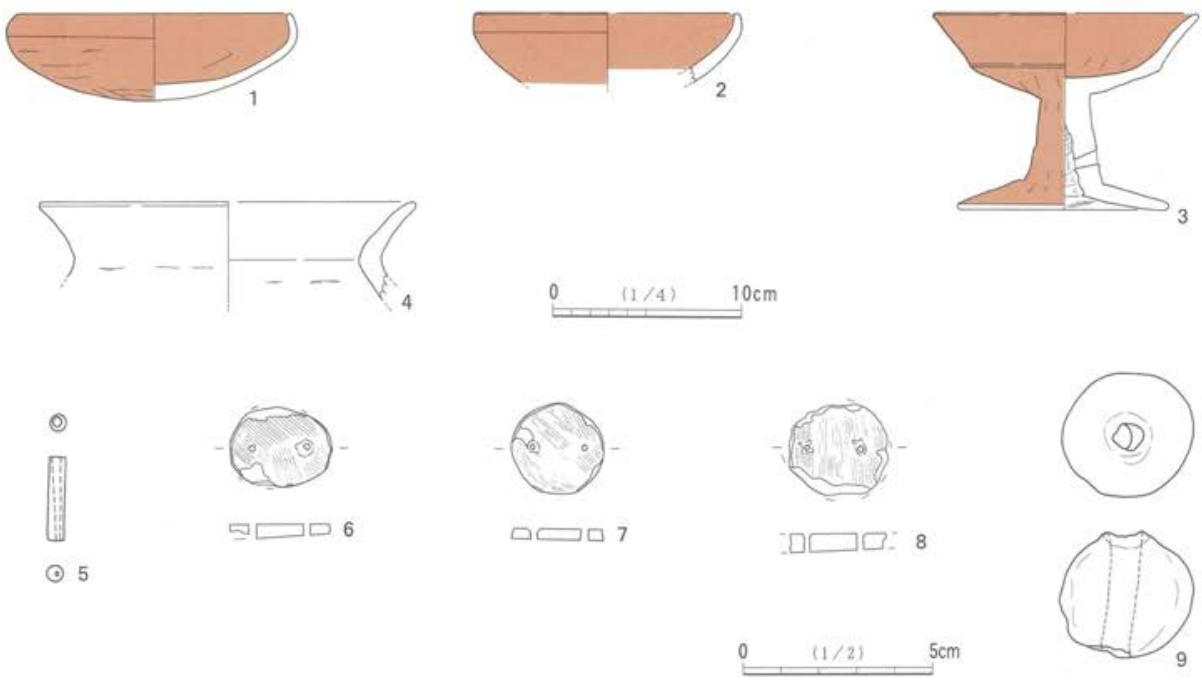
炉はP2の西側床面から検出されたが，056に削平されており詳細は不明である。

遺物は，土師器杯・器台・器台・壺・甕などが，貯蔵穴周辺に集中して出土している。１は杯である。P2の上面から出土した。２は器台である。ほぼ完形で，脚部は柱状に立上がる。裾部の下部に円形の透孔をもつ。P3の南側から出土した。３～５は高杯である。３は杯部で，直線的に開いている。内外面が赤彩されている。５は直立する脚部で，中実である。外面が赤彩されている。ともに貯蔵穴周辺からの出土である。６は鉢，７は壺である。７は内外面が刷毛で仕上げられている。貯蔵穴の西側床面から出土した。９は土玉で，径3.0cm・高さ2.9cm・孔径5mmを測る。

038（第55・56図，第18表，図版８・35・58・59・60）

調査区の北東，Ｃ７グリッドに位置する。北壁の一部で保存樹木のため未調査区域がある。南側は調査区域外であるが，全体の4/5の調査を行った。セクションからみると，重複する遺構も存在したようであるが判然としない。中期の良好な遺物がまとまって出土している。

平面形態は方形を呈し，北壁長は8.5mを測る。東壁長・西壁長は，現存でそれぞれ8.2m・3.9mである。主軸方位はN-8°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は北壁中央周辺が1.5cmとかなり低くなっているが，それ以外の箇所では13cm～49cmで，東壁側が高くなっている。床面は貼床(黄褐色土)が施され，全体に凹凸がある。壁溝(幅12cm，深さ8cm)は，東壁の一部に巡っている。床面からは多数のピットが検出されたが，このうち柱穴と考えられるのはP1～P7で，P1(径40cm×42cm，深さ34cm)とP2(径42cm×47cm，



第56図　038出土遺物

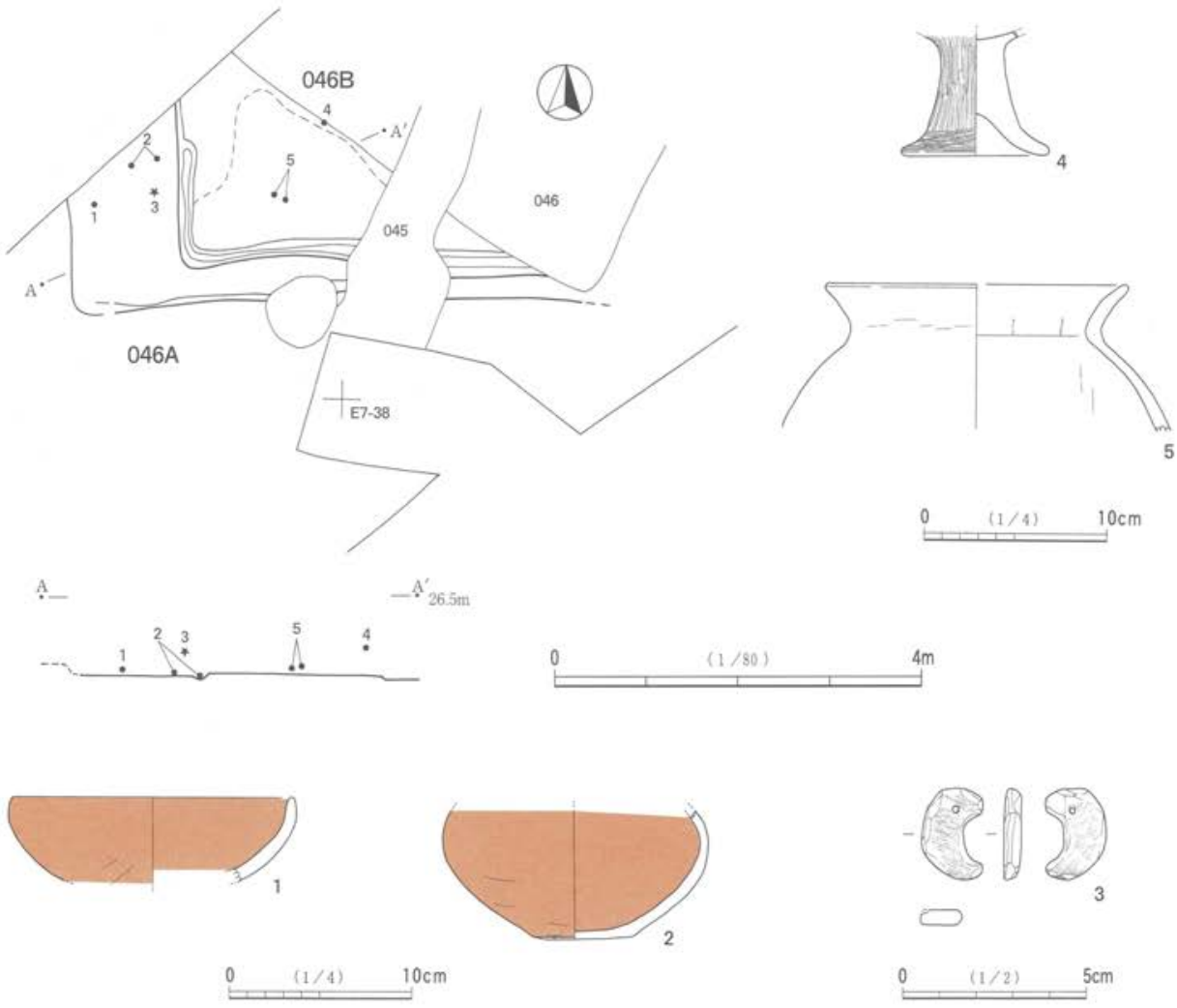
深さ48cm)は主柱穴であろう。P2～P6は直線的に柱穴が並んでいる。P6は深さが24cmと浅いが，P3～P5は深さが52cm～68cmと比較的深く掘込まれている。P4・P6は貼床除去後に検出された。覆土は，暗黄褐色土と暗褐色土が主体であるが，全体にローム粒を多く含んでいる。

炉(径90cm×120cm)は不整楕円形で，床面中央北寄りのP1とP2の間に設けられていた。皿状に10cm掘窪められ，炉床面はよく被熱され焼土が堆積していた。

遺物の出土は多く住居全体に分布しているが，主な遺物は東壁側に集中している。床面と覆土上面など，離れた位置の遺物が接合している。土師器杯・高杯・甕や，石製模造品(有孔円板)，管玉などが出土している。１・２は赤彩された杯である。３は内外面に赤彩が施された高杯で，脚部の下部に円形の透孔をもつ。５は緑色凝灰岩製の管玉である。暗灰緑色を呈し，表面は丁寧に研磨されている。長さ22mm・径4mm×5mm，重量は0.78ｇである。片側から穿孔され，孔径は1mm×2mmである。西壁下からの出土である。６～８は滑石製の有孔円板である。双孔で両面が研磨されている。床面に散在して出土した。９は土玉で，径3.4cm・高さ3.3cm・孔径7mmを測る。

046A・B（第57図，図版35・59）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。北側は調査区域外，南側は住居跡046(後期)と溝状遺構045に大きく削平されているため，規模や形態等の詳細は不明であるが，中期の住居跡であろう。



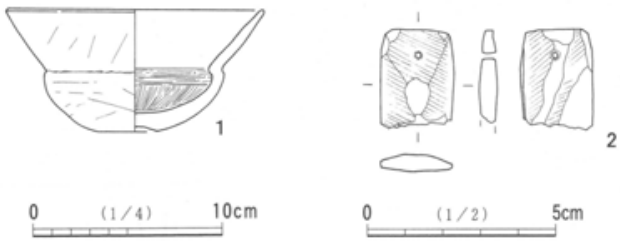
第57図　046A・B及び出土遺物

046Aは，壁高12cmほどの南壁の一部と，踏み固められた床面を検出したことから，住居であることが判明した。柱穴等は確認されていない。遺物は僅少で，土師器杯（1）・壺（2）と石製模造品の勾玉（3）が床面から出土した。2は口縁部を欠損するが，壺であろう。3は滑石製の勾玉で，扁平な形態である。両面を研磨され，長径2.5cm，腹部径0.4cm×1.1cm，孔径1mm～2mmを測る。重量は2.67gである。

046Bは，046Aの床面を除去した際に検出された遺構である。壁溝（幅14cm～18cm，深さ4cm～8cm）の一部と硬化した床面を確認できた。出土遺物は，土師器高杯脚部（4）と甕（5）である。

054B（第58図，第17表，図版58）

調査区の北東，D7グリッドに位置する。054の南東に隣接し，遺構に伴わずに正位の土師器坩と石製模造品（剣形品）が共伴して出土した。中期の住居跡が存在していた可能性がある。1は比較的大型の坩で，口縁部が大きく外反し，体部内面にミガキが施されている。底部外面がくぼんでいる。2は剣形の石製模造品である。滑石製で，下部を欠損する。上部は方形につくられ，鎬がみられる。



第58図　054B出土遺物

063（第59図，図版8・35・60）

調査区の東，E7グリッドに位置する。上面は大きく削平されており，北西側が調査区域外であったが，全体の3/4を調査した。火災を受けた住居で，図示していないが床面から多量の炭化材や焼土を検出した。

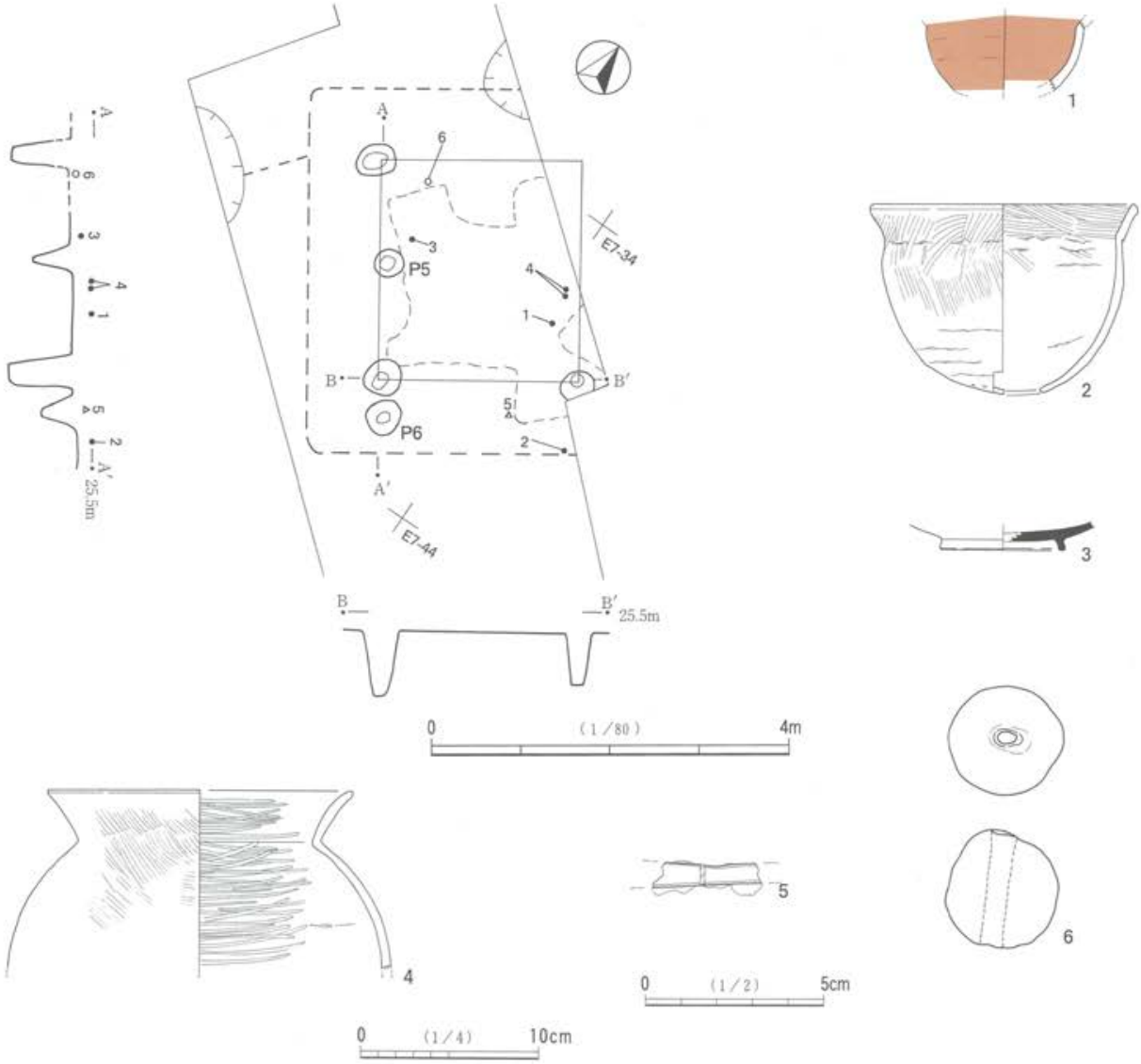
平面形態は方形を呈し，規模は南西壁長で3.6mを測る。現存長で北西壁・南東壁は，それぞれ2.4m・3.1mである。主軸方位はN-30°-Wである。壁高は2cm～3cmを測り，わずかに壁の立上がりを確認できた。床面の中央には凹凸のある硬化面が広がっている。P2以外の3本の主柱穴（径35cm～48cm，深さ50cm～76cm）を検出した。P1は長方形を呈している。P5（径34cm，深さ49cm）は補助的な柱穴であろう。P4に隣接しているP6（径38cm×40cm，深さ39cm）は，規模や位置からみて貯蔵穴ではなく，これも補助的な柱穴と考えられる。覆土は黒褐色土を主体に，炭化粒・焼土粒，暗褐色土や暗黄褐色土などが混在している。炉は確認できなかった。

遺物は，床面や覆土中から中期の土師器坩・甕・甑，土玉などが出土している。1は坩であろう。内外面が赤彩されている。2の甑は特異な形状で，底部に多数の小孔が穿たれている。口縁部内外面や体部外面は，粗い刷毛で仕上げられている。4は甕で，口縁部から体部にかけては刷毛目が残る。いずれも覆土上層からの出土である。5は刀子の茎部分であろう。現存長3cm・幅0.8cmを測る。6は土玉で，径3.2cm・高さ3.3cm・孔径6mmである。3は混入した緑釉陶器の椀である。猿投窯の製品であろう。

066B（第60図）

調査区中央やや北東寄り，E6グリッドに位置する。住居跡066A・069D（後期）に，上面や北側を削平され，北西側は調査区域外に延びている。保存樹木のため中央部は調査できなかった。066Aと重複しているが，これよりも深く掘込まれているため，床面は確認できた。

平面形態は方形を呈し，遺存している南東コーナーはやや丸みをもつ。規模は検出できた南壁長で4.2mを測る。主軸方位はN-2°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存している東壁で5cm～8cmであ



第59図　063及び出土遺物

る。床面は平坦で，中央には硬化面が広がっている。床面からはピットを検出したが，主柱穴と考えられるのは066Aの柱穴と重複しているが，P1(径53cm×67cm，深さ24cm)である。

炉(現存長30cm×52cm)は床面北側中央に設けられているが，069Dに北側を削平されている。

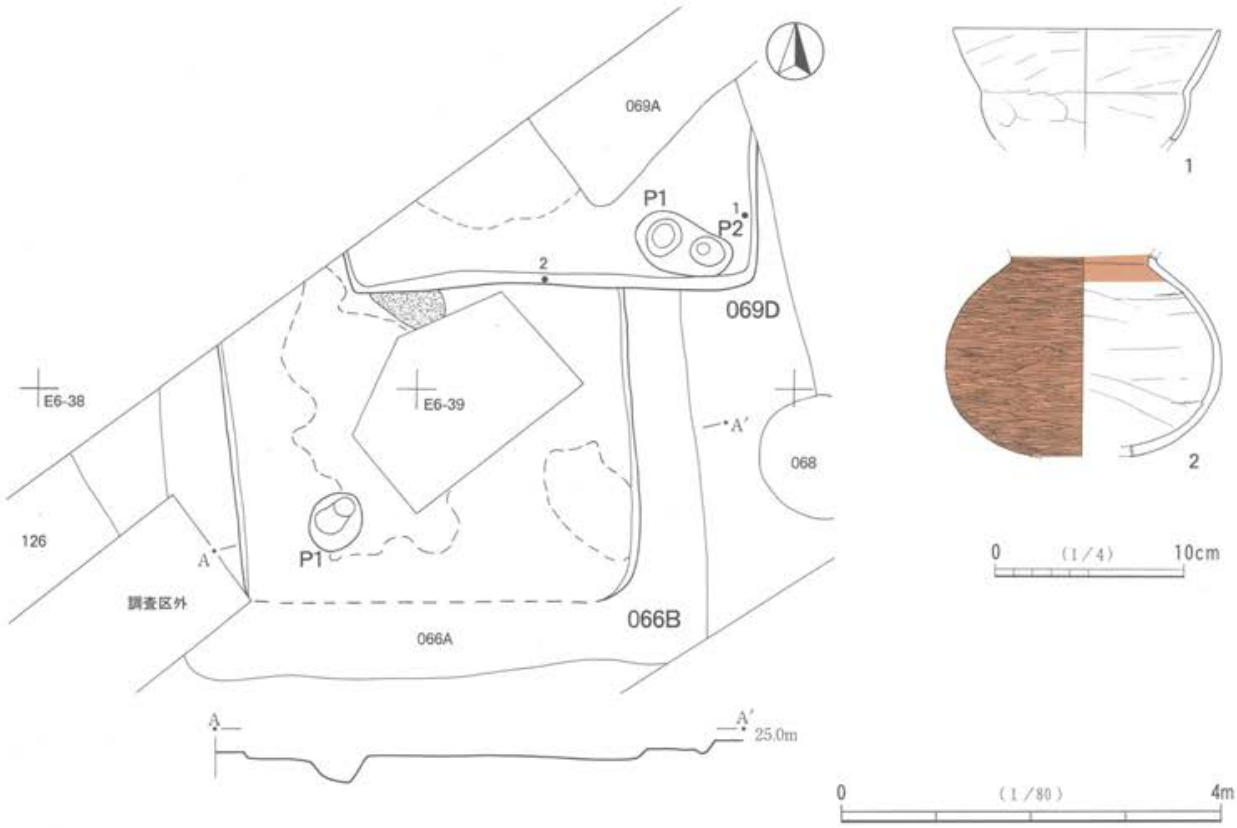
出土遺物は少なく，土師器坩などがわずかに出土している。遺物は，重複する066Aの土器と混在して取り上げており，第２節の066Aの項でまとめて説明する。

069D（第60図，図版35）

調査区中央やや北東寄り，Ｅ６グリッドに位置する。北東側は住居跡069A(後期)に削平され，北側の大半は調査区域外に延びているため，調査できたのは南側1/3である。

平面形態は方形を呈し，南壁長は4.2mを測る。主軸方位は概ねN-1°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は6cm～16cmを測り，東壁側が深くなっている。床面は凹凸があり，硬化面が南側まで広がっている。主柱穴は検出されていないが，南東コーナーの２基が連結したピット(深さP1：41cm，P2：26cm)が柱穴に該当する可能性もある。覆土は，黒褐色土やローム粒を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器坩や壺などが出土している。１は口縁部が大きく開く形態の坩である。２は口縁部と底部を欠損しているが，壺である。口頸部内面から体部外面にかけて赤彩されている。体部外面には丁寧な



第60図　066B，069D及び出土遺物

ミガキが施されている。ともに壁際の床面からの出土である。

071（第61図，図版８・60）

調査区の北西，Ｄ５グリッドに位置する。北西側の大半は調査区域外で，南東側の一部の調査であるが，東壁南側でカマドを検出した。出土遺物から中期の住居跡と考えられる。

平面形態は方形を呈し，検出した規模は，東壁長3.9m・南壁長3.7mである。カマドを中心とした主軸方位はＥ-20°-Ｓである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は南壁側で32cm前後であるが，東壁では北側にすすむに従って15cm～23cmと低くなっている。床面はやや凹凸があり，カマド周辺が部分的に固く踏み締められている。主柱穴は確認されていない。楕円形の貯蔵穴（径59cm×64cm，深さ54cm）は，カマドの南側に設けられている。覆土は，暗褐色土を主体に明黄褐色土・黒灰色土・褐色土などが混在している。

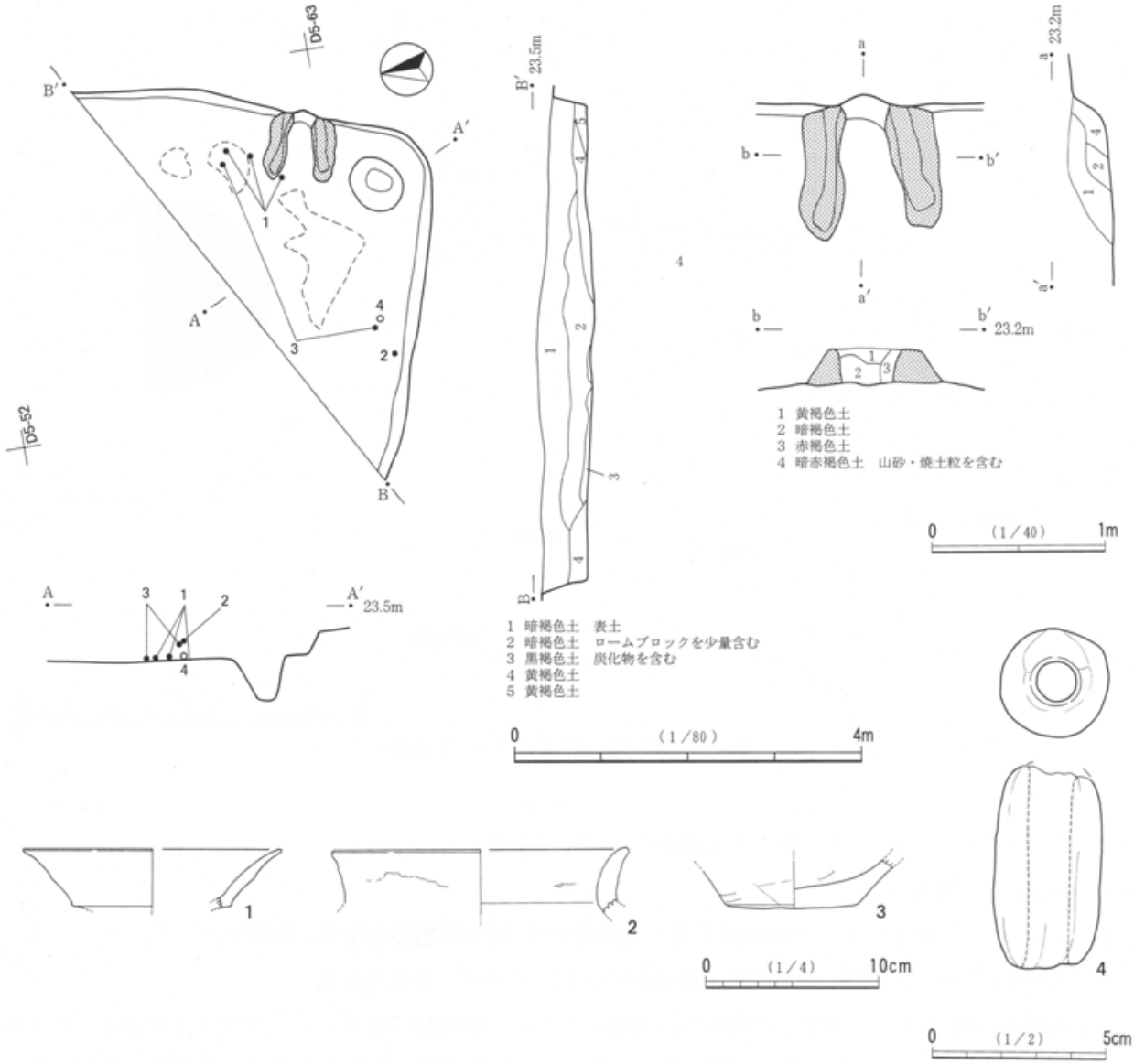
カマドは東壁南寄りに，壁をわずかに掘込んで設けられ，煙道部や緩やかに立上がっている。天井部はすでに崩落し，袖部が攪乱を受けており，全体に遺存状態は良好ではない。火床の掘込みはほとんどなく焼土も堆積していないが，底面は30cm×35cmの範囲がよく被熱されていた。

遺物は，カマド周辺や南壁中央寄りから土師器高杯・甕や土錘などが散漫に出土している。１は高杯の杯部で，杯部下部に稜をもち，口縁部が大きく外反する。２・３は甕の破片である。４は管状の土錘で，面を形成し両端の一部を欠損する。明赤褐色を呈し，長さ5.8cm・径3.1cm×3.2cm・孔径1.1cmを測る。

091（第62図，第18表，図版８・35・36・58・60）

調査区の西，Ｆ４グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかり，北側は後期の住居跡090に削平されているが，北壁の一部がわずかに残る。西側を中心に全体の1/2の調査である。

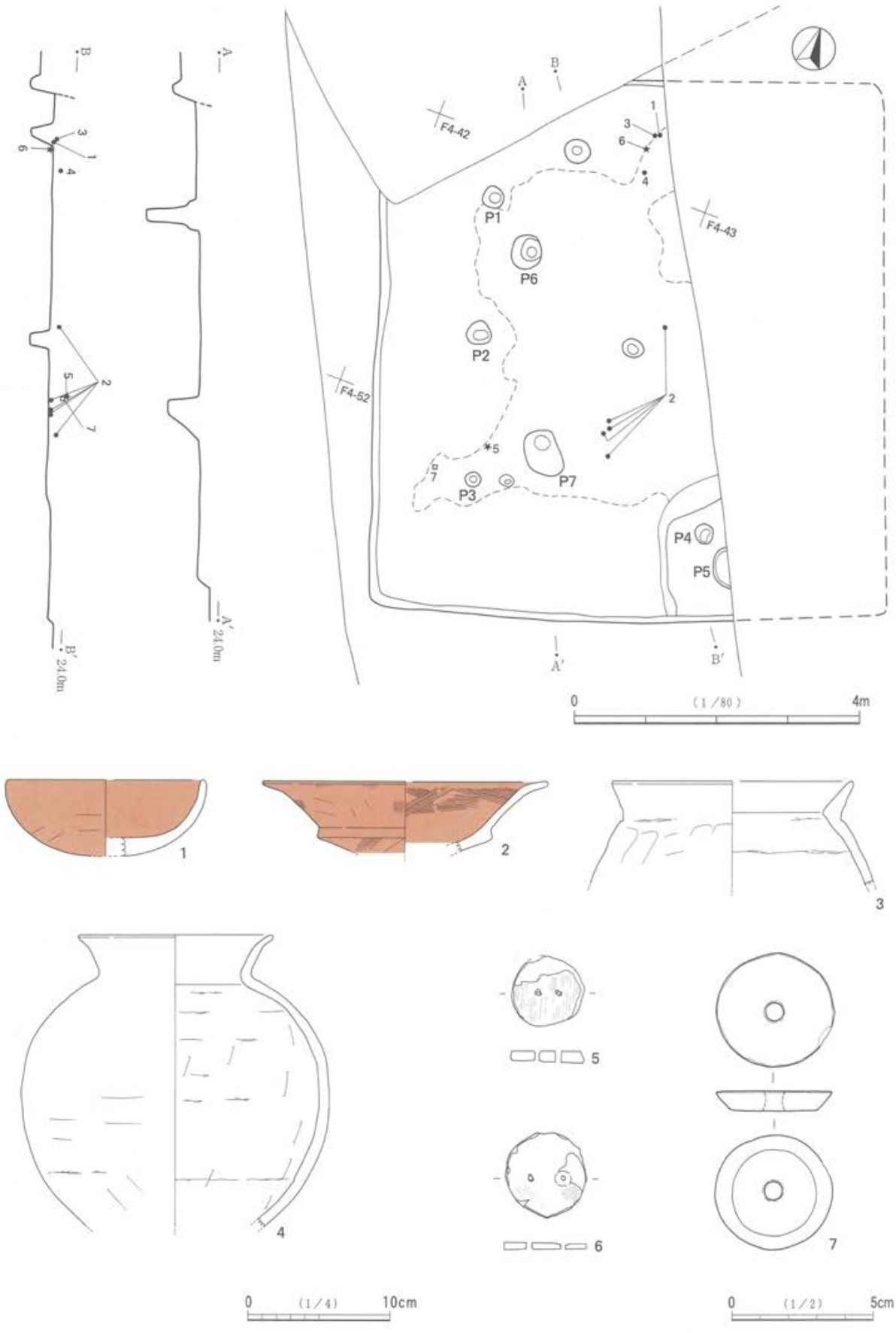
平面形態は方形を呈し，南北方向の長さは7.6mを測る。炉を検出していないが南北方向に主軸をとる



第61図　071及び出土遺物

と，主軸方位はN-19°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は7cm～16cmで南側が高くなっている。床面は平坦で，中央部に硬化面が広がっている。壁溝は検出されていない。床面から数基のピットを検出したが，このうち主柱穴は，P1(径32cm×34cm，深さ36cm)・P2(径32cm×34cm，深さ47cm)・P3(径19cm×21cm，深さ46cm)である。P6・P7は確実に掘込まれているが，別の遺構の柱穴であろう。南壁中央では，床面が現状で95cm×185cmの範囲で6cm～11cm高く構築されている。東側が調査区域外のため判然としないが，この部分にはP4(径26cm×27cm，深さ25cm)とP5(現存径58cm，深さ4cm)が設けられており，出入り口施設の可能性も考えられる。覆土は，黄褐色土の上に黒褐色土が堆積している。

出土遺物は少ないが，中期の土師器杯・高杯・甕，石製模造品(有孔円板)，石製紡錘車などが床面や覆土中から出土している。１の杯，３・４の甕，６の有孔円板は，北壁中央寄りの床面からまとまって出土した。２は高杯の杯部で，杯部下部に明瞭な稜をもち，口縁部は大きく外反する。住居南側の床面や覆土下層から出土した。５の有孔円板はP3の北側の覆土中からの出土である。７は絹雲母片岩製の紡錘車である。扁平な形態で，径上面4.1cm・下面3.0cm，厚さ0.7cm，孔径7㎜を測る。



第62図　091及び出土遺物

092B（第63図，図版36）

調査区の南西，Ｆ４グリッドに位置する。南西側の2/3が調査区域外に延びており，北東側も奈良時代の住居跡092に削平され，調査できたのは南東側の1/5程度である。

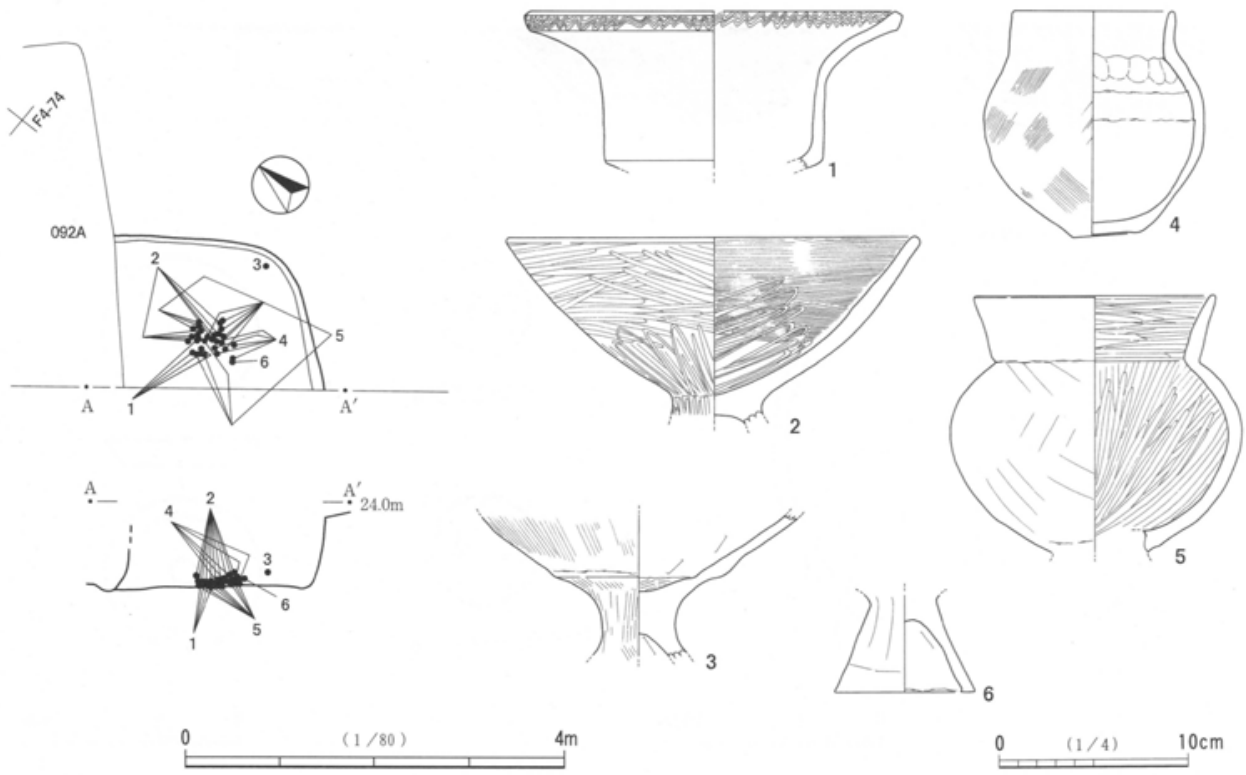
平面形態は，南東コーナーの形態から隅丸方形と考えられるが，検出できた東壁長・南壁長は，現存で1.9m・1.4mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は40cm前後である。床面は全体にやや堅緻で，焼土が堆積していた。調査範囲からは，柱穴や炉などは検出されていない。覆土は，暗黄褐色土や暗黄灰色土が混在している。

遺物は，床面に投棄されていた焼土の中から，土師器高杯・壺などが集中的に出土している。１は特殊な形態で，口縁部が装飾された高杯の杯部である。杯部は直立気味に立上がり，上部で大きく外反する。幅広の口縁部を設け，そのなかに櫛描波状文を充填させ，口縁部内面にも同様の文様を施している。２・３は高杯である。大型の杯部に，高さの低く裾部が広がる形態であろう。４は完形の壺である。５・６は台付甕である。５は内外面に丁寧なナデが施されている。

101（第64図，図版８・36）

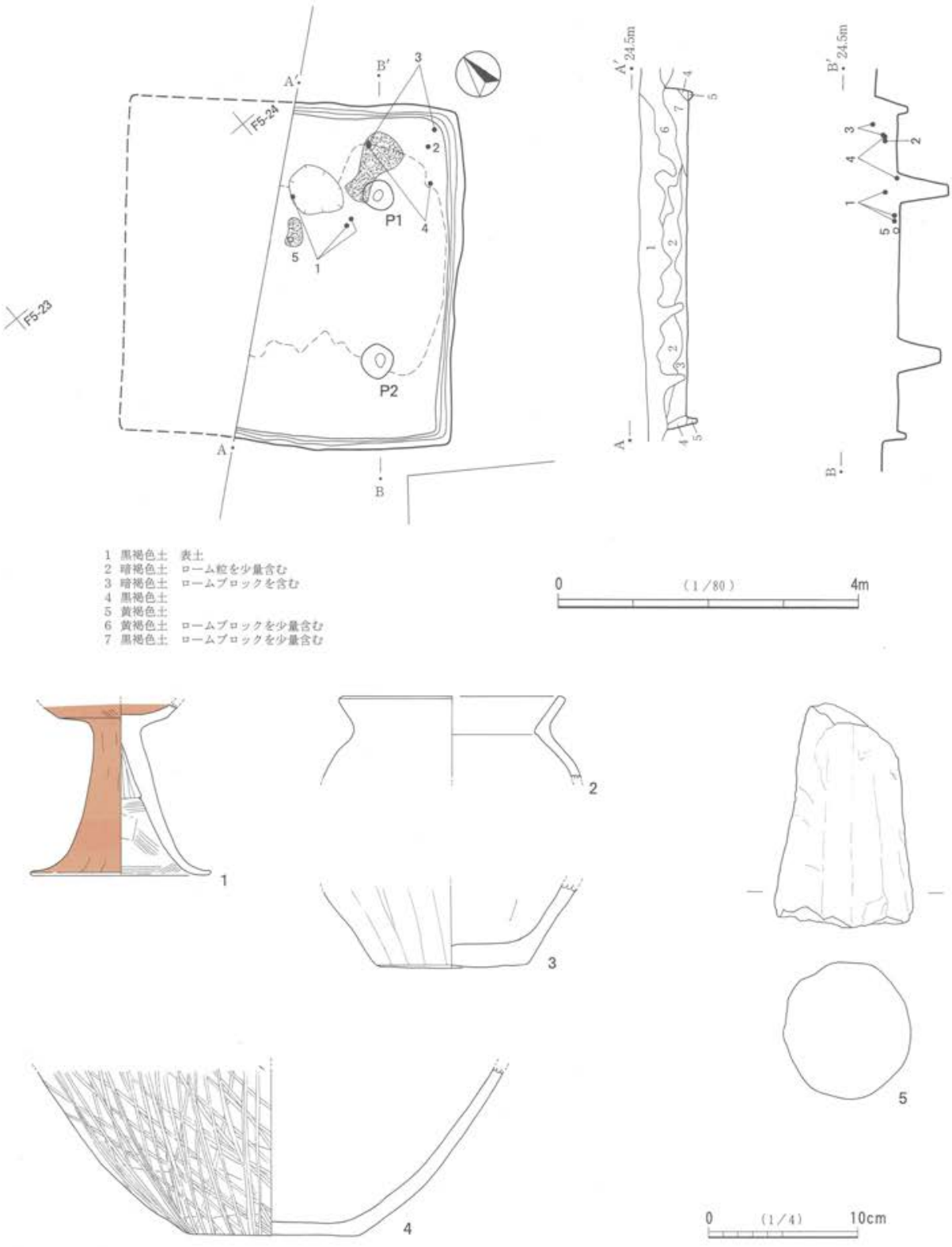
調査区中央やや西寄り，Ｆ５グリッドに位置する。北西側の1/2が調査区域外である。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は4.4mを測る。北東壁長は2.0m，南西壁長では2.9mをそれぞれ検出した。北西寄りに炉が設置されているとすると，主軸方位はN-48°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は19cm～38cmで東側が高くなっている。床面は平坦で，中央部から南東壁際にかけて硬化面が広がっている。壁溝（幅10cm～17cm，深さ7cm～10cm）は調査範囲内では全周する。主柱穴は南東壁側に寄って２本（P1径43cm×49cm・深さ59cm，P2径40cm×45cm・深さ65cm）検出された。北東壁側の床面には焼土が堆積している。覆土は，暗黄褐色土や暗褐色土を主体に，黒褐色土や暗黄灰色土が混在している。



第63図　092B及び出土遺物

遺物は住居北東側の床面や覆土中から，土師器高杯・甕などが出土した。１は高杯で，杯部を欠損する。遺存している部分では，内外面が赤彩されている。２は器面が荒れており調整は判然としないが，胎土や色調から駿東型甕と判断した。覆土中層からの出土である。３・４は甕の底部である。４は縦・横方向のミガキの後にナデで仕上げられている。



第64図　101及び出土遺物

110（第65図，図版８・36）

調査区中央，Ｅ５グリッドに位置する。大半は保存樹木下や調査区域外に延びており，南西壁側も住居跡107(後期)と重複する。調査できたのは，南西壁際と南東壁際の一部である。

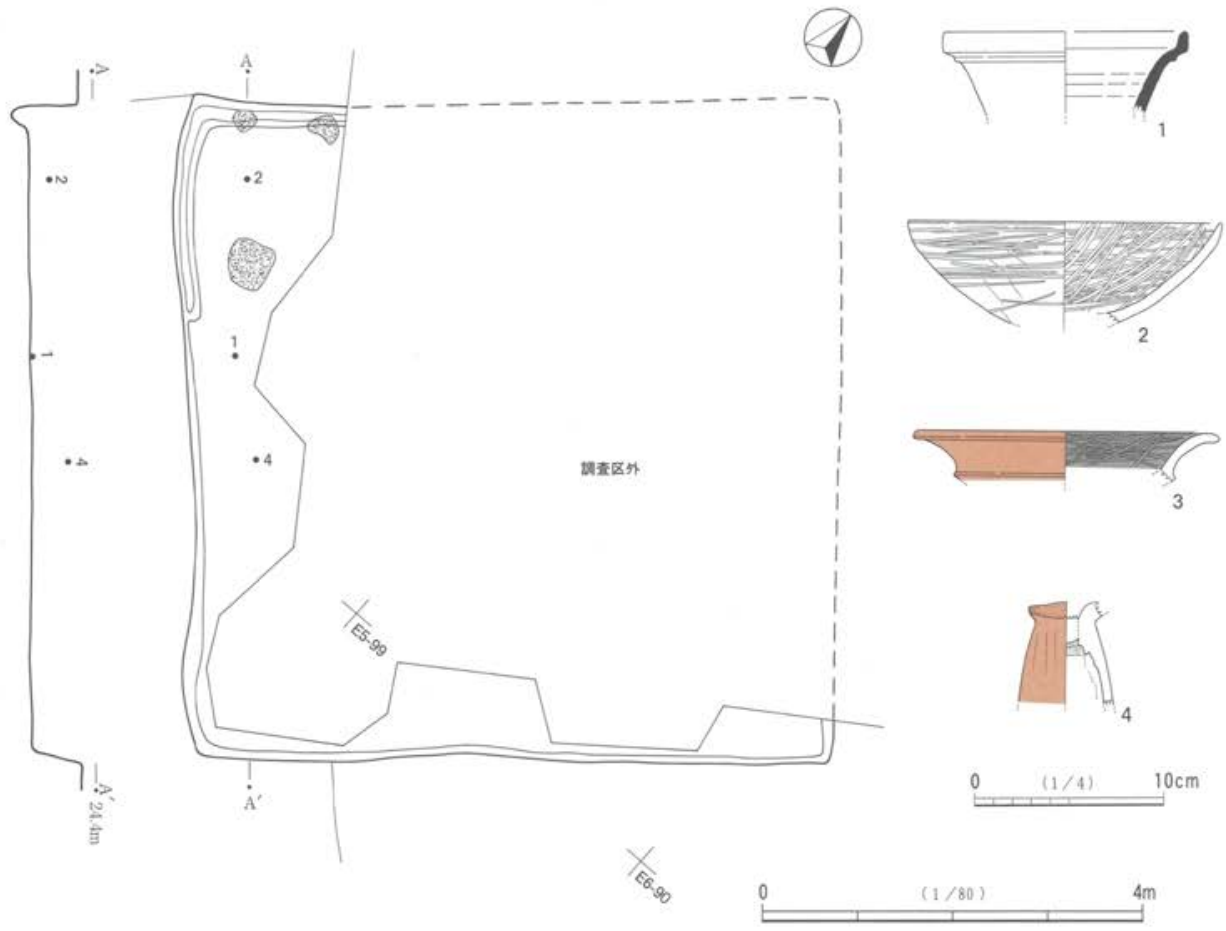
平面形態は方形である。規模は，南西壁長7.1m・南東壁長6.7mを測る。主軸方位は南西壁を基軸とすると，N-42°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は45cm前後である。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～18cm，深さ7cm前後)は，調査範囲では南西壁側を中心に巡っている。北西壁際の西側床面から小規模な焼土ブロックが検出された。柱穴などは確認できなかった。

遺物は，土師器高杯などが壁際の覆土中に散漫に出土している。１は須恵器長頸瓶の口縁部片である。床面直上から出土したが混入であろう。２～４は高杯である。２は杯部で，ミガキが施されている。３の杯部は，外面が黒色処理で，内面は赤彩されている。覆土中の出土である。

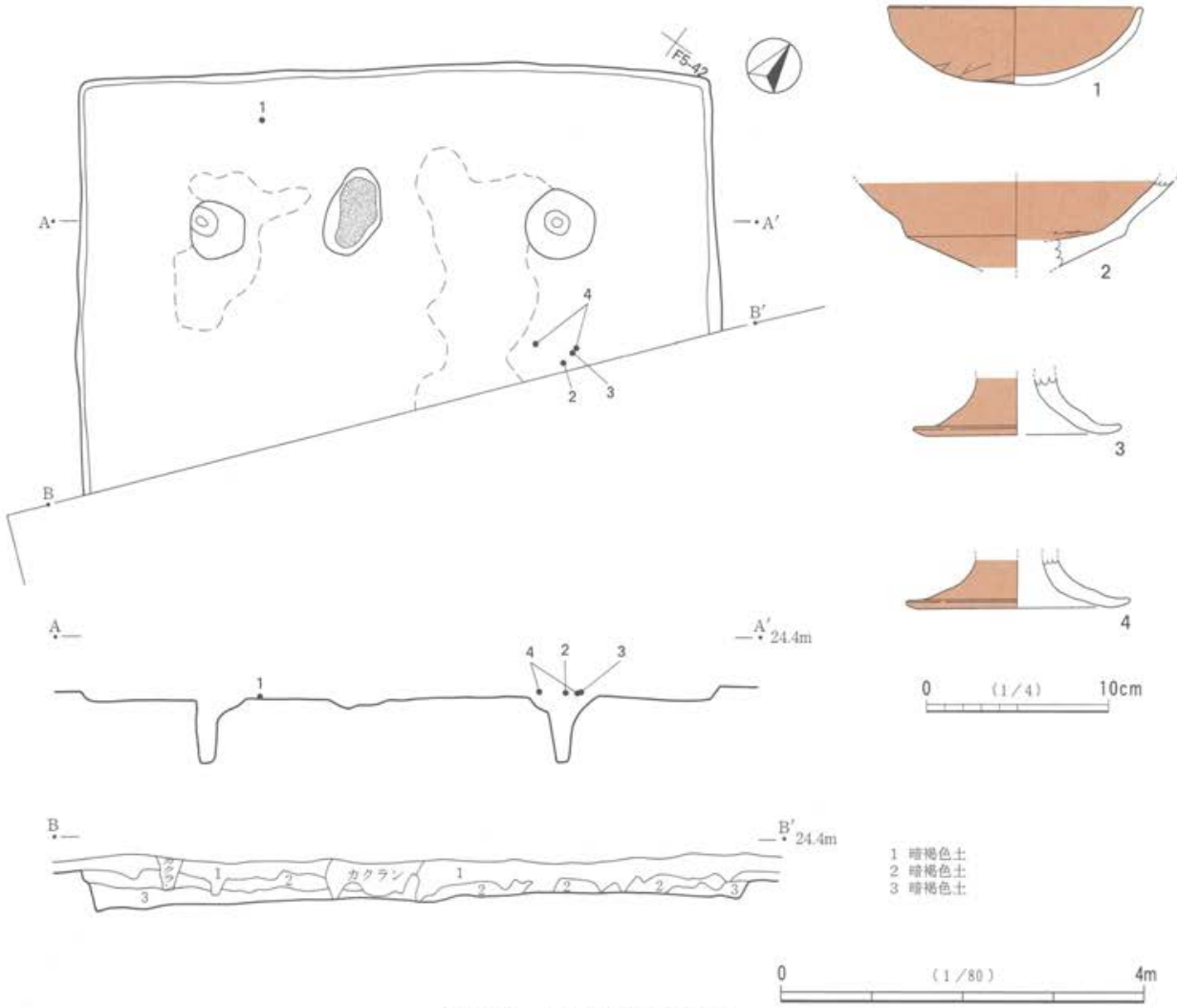
115（第66図，図版36）

調査区中央やや南西寄り，Ｆ５グリッドに位置する。南東側は調査区域外にかかり，南西側は攪乱を受けている。北西側2/5の調査である。出土遺物から中期の住居跡であろう。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は7.0mを測る。北東壁長2.8m・南西壁長3.6mを検出した。壁は垂直に掘込まれ，壁高は9cm～12cmである。主軸方位はN-35°-Wである。床面は凹凸があり，主柱穴の周囲に硬化面が部分的に広がっている。壁溝は検出されていない。主柱穴は，北西側で２本(P1径62cm×68cm・深さ76cm，P2径77cm×79cm・深さ78cm)検出した。２本とも柱のあたり痕が残っている。



第65図　110及び出土遺物



第66図　115及び出土遺物

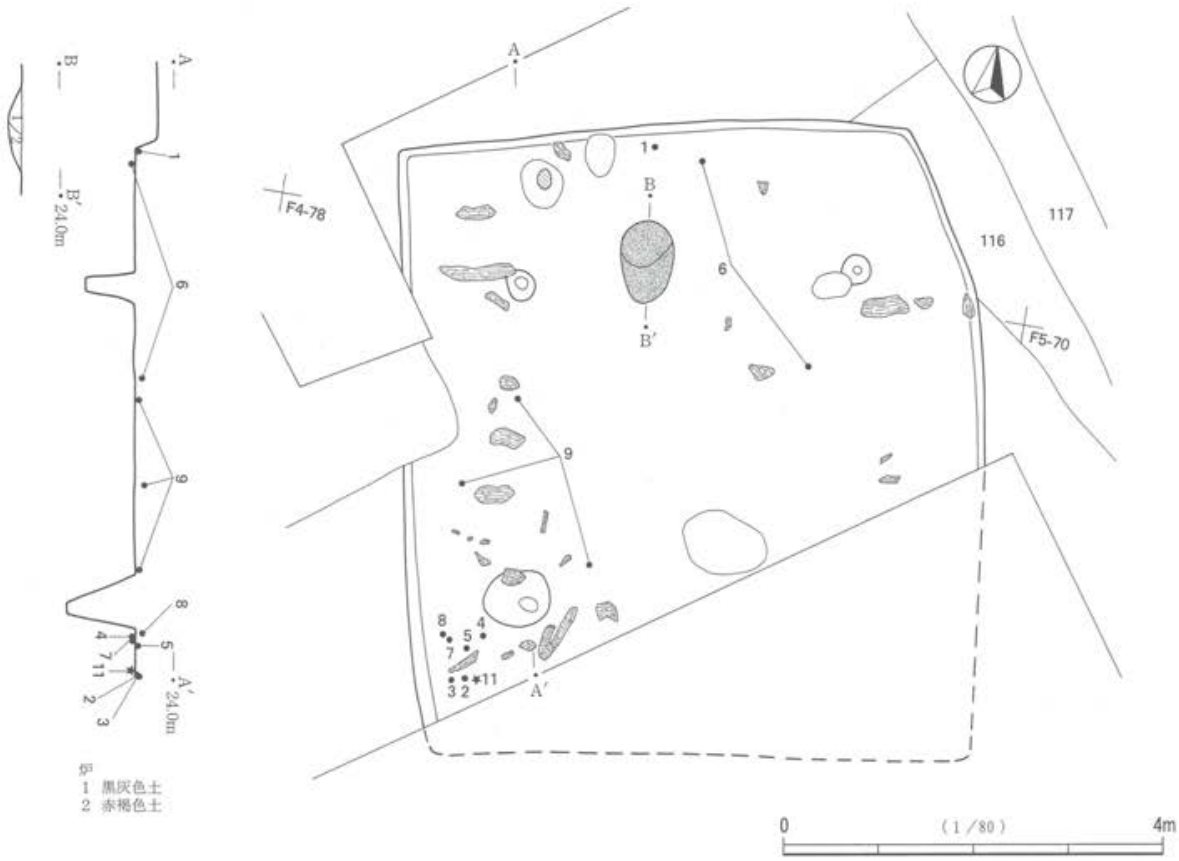
炉(径62cm×100cm，深さ7cm)は長楕円形で，北西側に寄った主柱穴間に設けられている。焼土が堆積し，炉床面はよく被熱されていた。

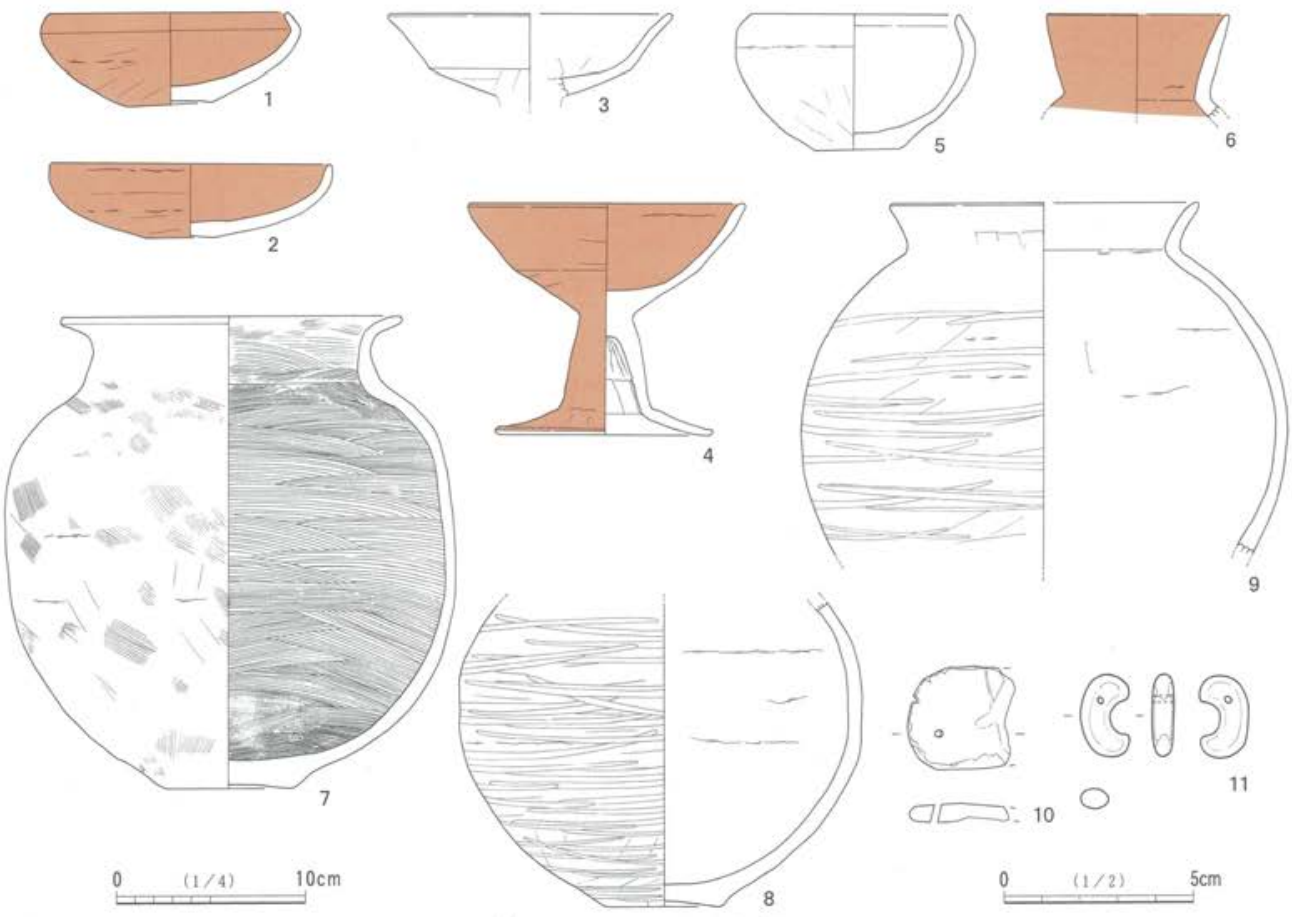
遺物は少なく，赤彩された土師器杯・高杯などが床面から出土している。１は杯である。底部は平底を意識して，ヘラケズリでつくりだしている。２～４は高杯である。２は杯部で，明瞭な稜をもつ。

121（第67図，第18表，図版８・９・36・37・58・59)

調査区の南西，Ｆ４グリッドに位置する。東壁の南半から南西コーナーにかけての範囲は調査区域外である。西壁の中央で122(後期)と，北東コーナー付近では116(後期)と，それぞれ重複し一部を削平されている。西壁側を中心に炭化材が床面から検出されており，火災を受けた中期の住居である。

平面形態は不整長方形を呈し，北壁長は5.4mを測る。西壁長は6.4mと推定される。北東コーナーは重複のため判然としないが，東壁の北側がやや曲線的になっている。主軸方位はN-14°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は13cm～30cmで北東側が高くなっている。床面はほぼ平坦で，全体に堅緻である。壁溝は検出されていない。床面から３本の主柱穴(P1径30cm×35cm・深さ57cm，P2径28cm×40cm・深さ31cm，P3径58cm×73cm・深さ72cm)が検出された。確認できなかった１本は，調査区域外に位置していると思われる。覆土は，黄褐色土と暗褐色土を主体に，黒灰色土・黄灰色土が混在する。





第67図　121及び出土遺物

炉(径58cm×85cm，深さ14cm)は長楕円形で，住居北寄りの主柱穴間に設けられている。

遺物は，床面から土師器杯・高杯・甕や石製模造品(有孔円板)，勾玉などが出土し，２～５・７・８・11は南西コーナー周辺に集中している。１・２は内外面が赤彩された杯で，底部は平底である。１は北壁際の床面から出土した。３・４は高杯である。４はほぼ完形で，内外面が赤彩されている。体部の稜はあまり明瞭ではない。５は鉢で，底部は平底である。６は内外面が赤彩された壺の口縁部である。７～９は甕である。７は内面に刷毛目の痕跡が残る。10の滑石製有孔円板は，やや方形で一部が欠損している。覆土中からの出土である。11は滑石製の勾玉である。淡緑色を呈し，片側から穿孔されている。長径2.2cm・短径1.3cm，腹部径0.6cm×0.7cm，孔径2㎜を測る。重量は2.19ｇである。

138（第68図）

調査区の南，Ｇ５グリッドに位置する。大半が調査区域外のため，北東壁側の一部の調査である。

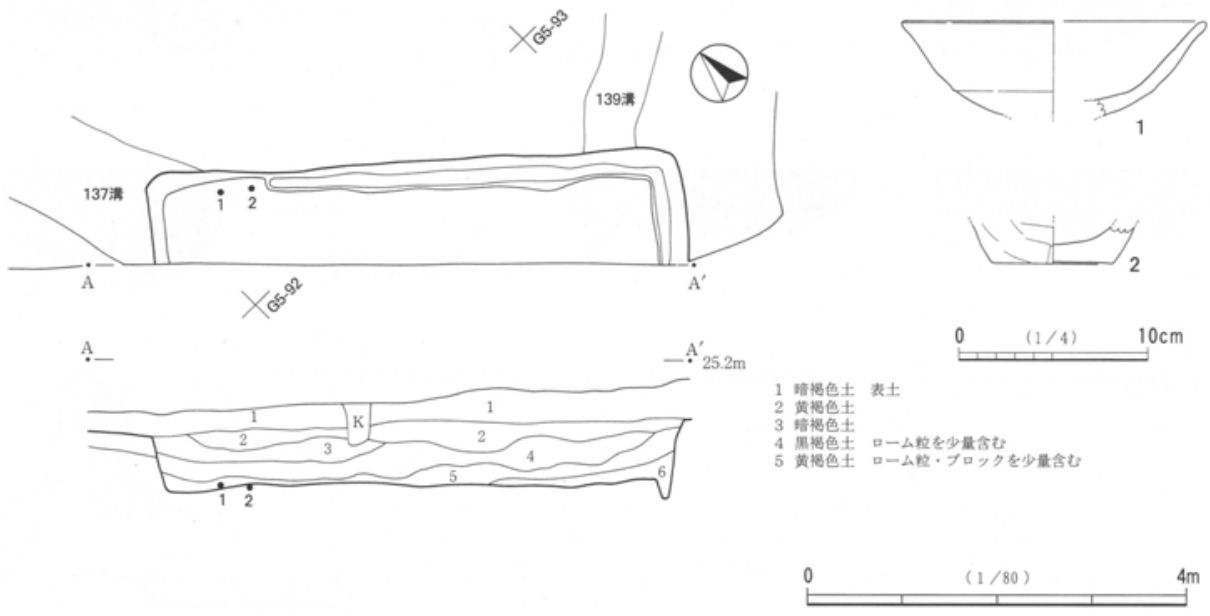
平面形態は方形を呈し，北東壁長は5.5ｍを測る。壁は垂直に深く掘込まれ，壁高は71cm～79cmである。床面は凹凸があり，やや軟弱である。壁溝(幅10cm～25cm，深さ3cm～9cm)は，南側から中央にかけては明瞭であるが，北側では判然としなくなる。柱穴などは確認されていない。覆土は，黄褐色土や黒褐色土を主体に暗褐色土や黄灰褐色土が混在している。

遺物は，北コーナー付近で中期の土師器高杯(１)や，甕の底部(２)などがわずかに出土している。

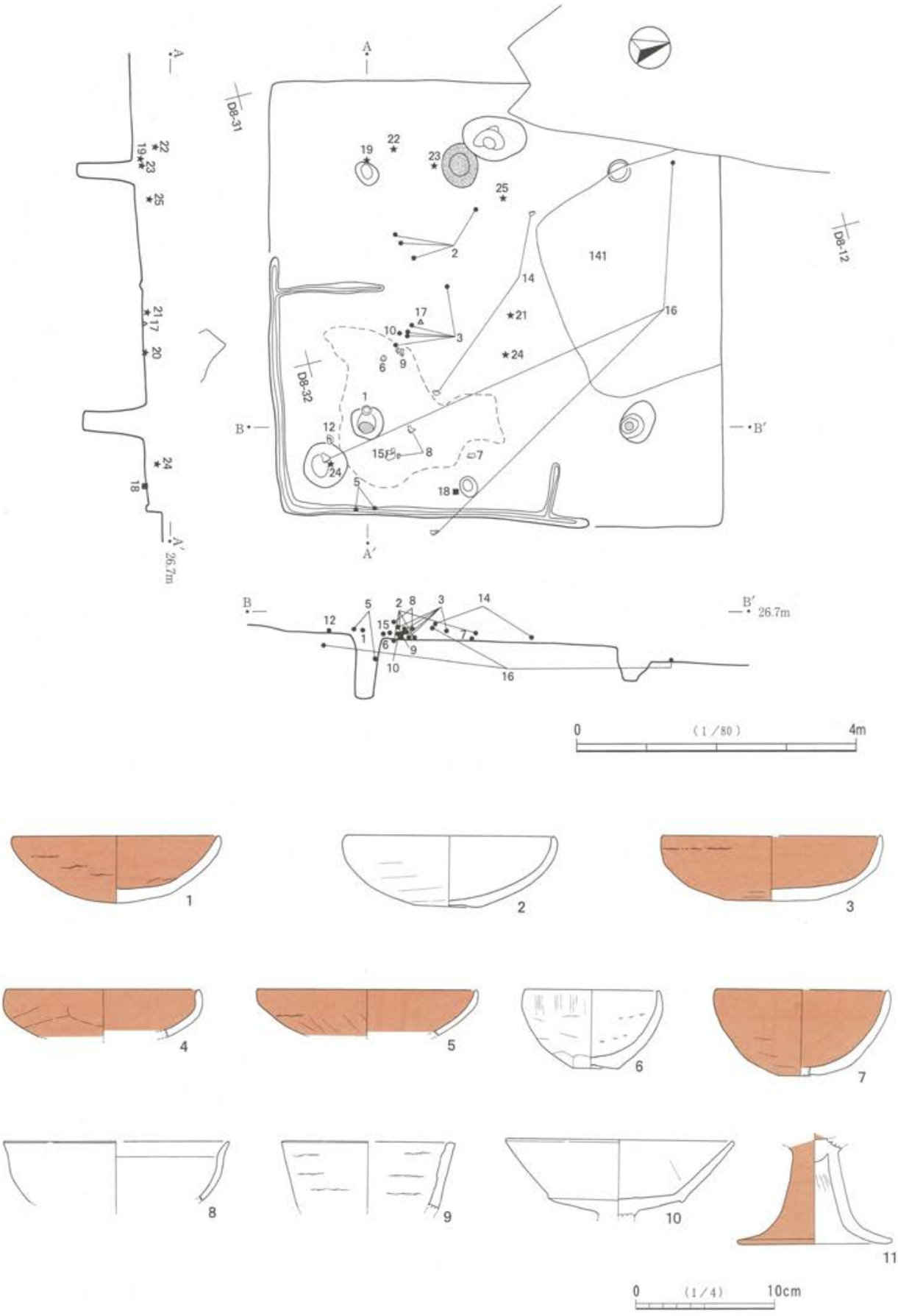
142（第69・70図，第17・18表，図版９・37・58・59・61）

調査区の北東，Ｄ８グリッドに位置する。北側は平安時代の住居跡141と重複し，北西側が調査区域外である。上面を全体に削平され，南東側1/4が壁溝まで検出されたが遺存状態は悪い。なお，昭和63年度に調査された039と同一の遺構であることが判明したため，出土遺物は142に含めてある。

平面形態は方形を呈し，規模は6.3ｍ×6.5ｍと推定される。主軸方位を西方向にとり，概ねW-11°-Nである。南東側の壁は垂直に掘込まれているが，壁高は5cm～16cmである。床面は，南東側でわずかに硬化面が遺存している。壁溝(幅8cm～11cm，深さ6cm～9cm)は南東側で検出したが，ほかの壁での状況は不明である。根太痕跡の溝が，南壁と東壁の中央の壁溝からそれぞれ延びている。床面から多数のピットを



第68図　138及び出土遺物

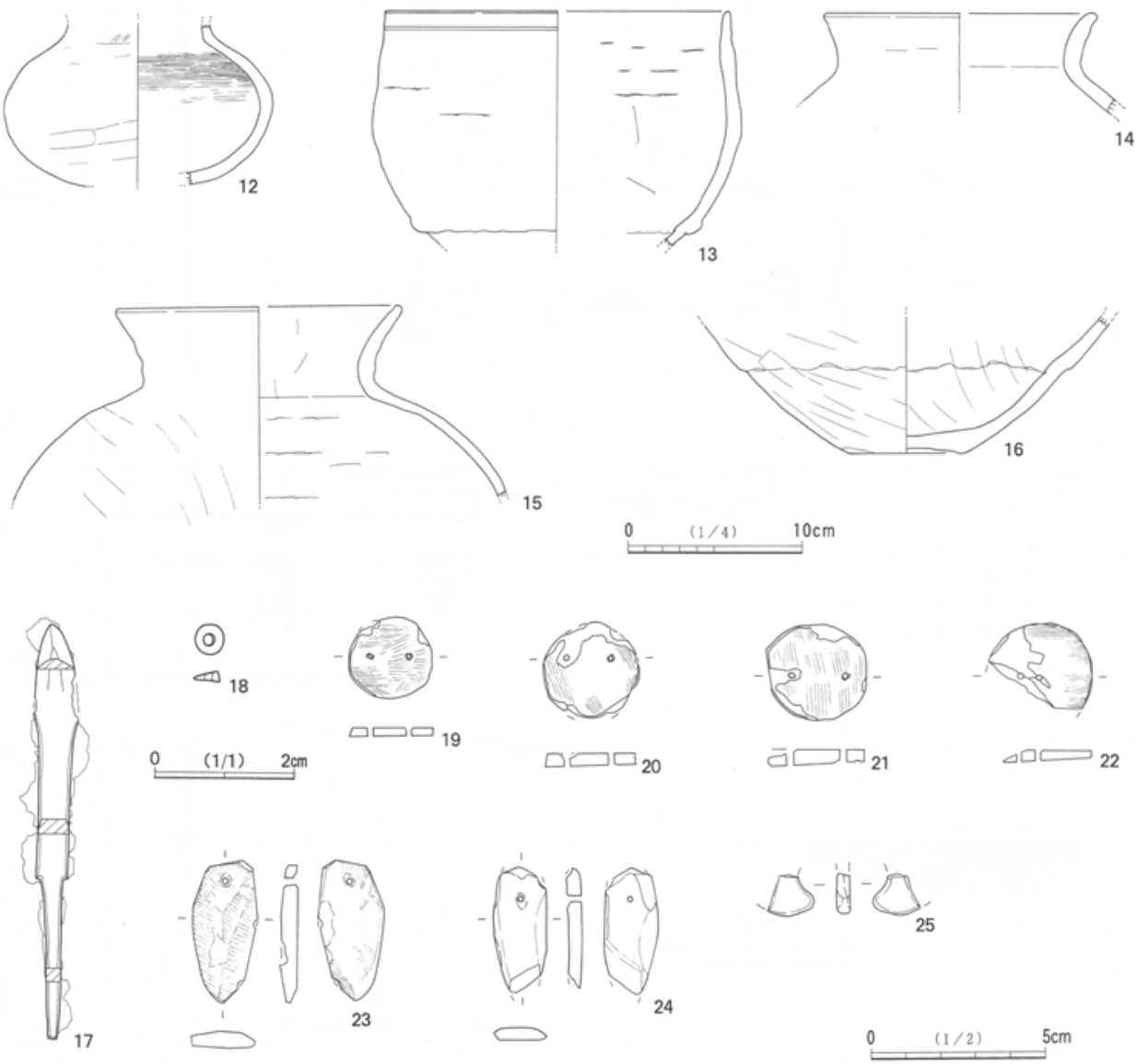


第69図　142及び出土遺物(1)

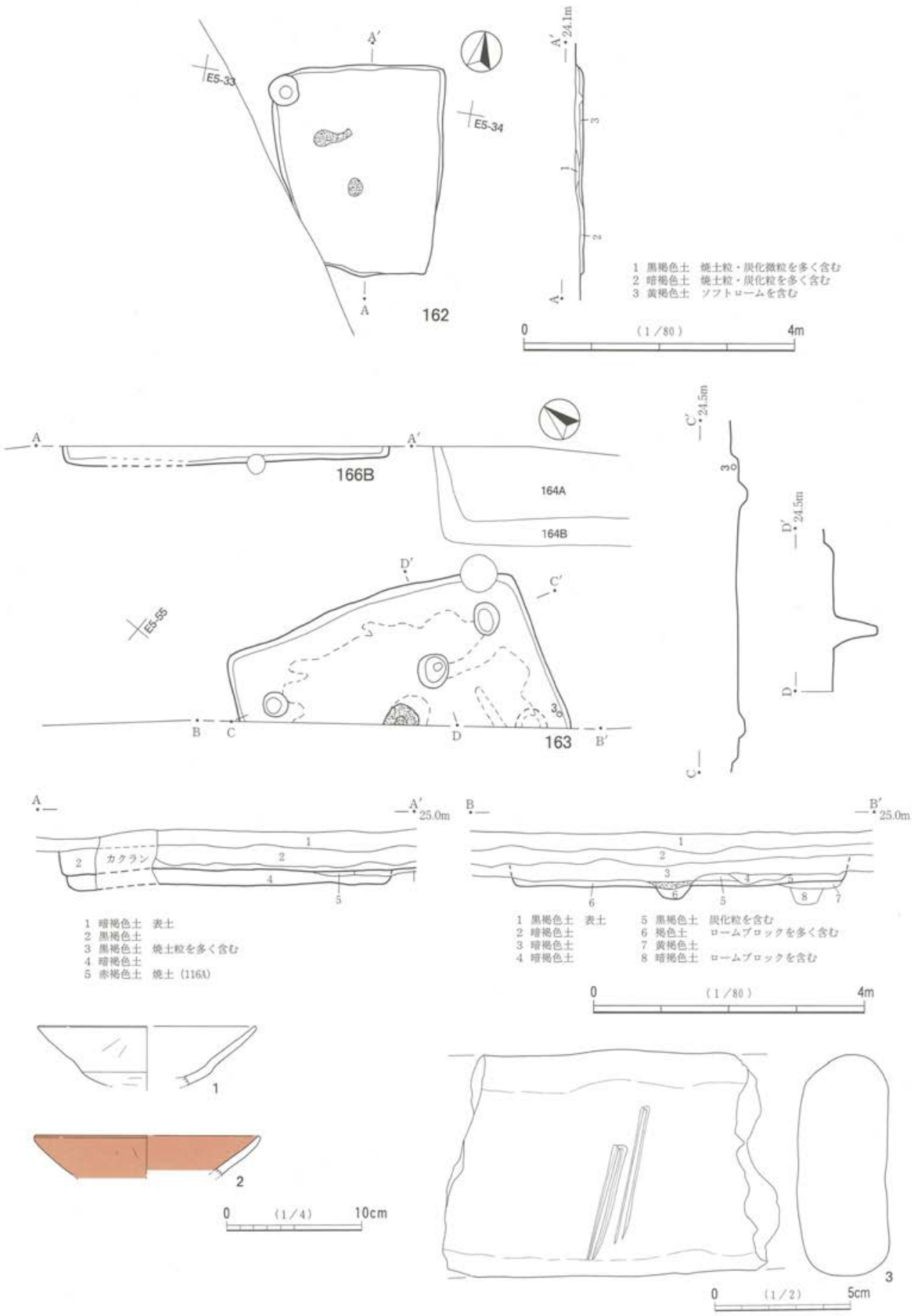
検出したが，このうち主柱穴はP1～P4である(P1径28cm×39cm・深さ84cm，P2径30cm×31cm・深さ85cm，P3径44cm×62cm・深さ42cm，P4径45cm×47cm・深さ91cm)。P3とP4の底面には，柱のあたり痕が認められる。円形の貯蔵穴(径65cm×67cm，深さ99cm)は，南東コーナーに設けられ，土師器甕片が出土している。

炉(径53cm×67cm)は楕円形で，住居西側の主柱穴間に設けられ，炉内には焼土が堆積していた。

遺物の出土は多く，南東側を中心に中期の土師器杯・高杯・鉢・甕や石製模造品(剣形品・有孔円板)，鉄製品(鉇)が出土している。１～５は杯である。２を除いて，内外面が赤彩されている。浅いつくりで，平底が多い。６～９は鉢や椀である。７の鉢は内外面に赤彩が施されている。10・11は高杯である。12は体部が大きく張り出した壺である。刷毛目をナデで消している。13は大型の鉢で，全体に粗雑なつくりである。覆土中から出土した。14～16は甕である。17は鉇(現存長11.9cm)である。方形の茎部(現存長4.6cm・幅0.4cm×0.4cm)は次第に細くなるつくりで，先端を欠損する。刃部(長さ2.8cm・幅1.1cm・厚さ0.3cm)は，銹化のため稜線は不明瞭である。棒状部(長さ4.5cm・幅0.9cm・厚さ0.4cm)は，幅の広いつくりである。床面中央の南寄りで出土した。18は臼玉で，径4.5㎜・厚さ1.2㎜・孔径1.5㎜を測る。滑石製



第70図　142出土遺物(2)



第71図　162，163，166B及び出土遺物

の石製模造品(19～25)は，炉周辺や床面中央付近を中心に出土している。19～22は有孔円板，23・24は剣形品である。25も滑石製品であるが，小片のため形態は判然としない。勾玉の破片の可能性もある。現存値で長さ1.1cm，幅1.1cm，厚さ3.5mm，重量は0.87ｇである。

162（第71図）

調査区のやや北西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。南西コーナー周辺は調査区域外である。167の柱穴と一部が重複する。上面を削平され，南側の遺存状態は良好ではない。

平面形態は長方形を呈し，規模は2.5ｍ×3.1ｍである。長軸方位はN－8°－Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は3cm～6cmである。床面は平坦であるが，全体に軟弱である。炉や柱穴等は検出されていない。床面の２か所に焼土が堆積していた。覆土は，暗褐色土を主体に暗黄褐色土が混在する。

遺物は，覆土中から土師器片がわずかに出土したが，図示できるものはない。

163（第71図，図版９）

調査区中央，Ｅ５グリッドに位置する。南西側は調査区域外で，北東側2/5の調査である。

平面形態は方形を呈し，北東壁長は4.4ｍを測る。壁はやや緩やかに掘下げられ，壁高は10cm～18cmである。床面は凹凸があり，硬化面が壁際を除いて広がっている。床面からは３基のピットを検出した。西側のP1(径35cm×41cm，深さ12cm)と東側のP2(径39cm×48cm，深さ16cm)は，浅い掘方である。P3(径33cm×43cm，深さ64cm)は炉に隣接して位置している。覆土は，褐色土を主体に黒褐色土や暗褐色土が混在している。

炉(現存径50cm，深さ5cm)は，住居中央のやや北寄りに設けられ，1/2が調査区域外にかかっている。炉床面はよく被熱されている。

遺物は少なく，土師器杯片や不明土製品が出土している。３は土製品で，断面は楕円形である。表面に２本の沈線がみられる。用途は不明である。現存長12.2cm・幅8.4cm・厚さ3.3cmを測る。

166Ｂ（第71図）

調査区中央，Ｅ５グリッドに位置する。南西壁の一部を検出したが，ほとんどは調査区域外で，上面は後期の住居跡166Ａに削平されている。平面形態は方形と考えられ，南西壁長は4.3ｍである。壁は，壁高3cm程度がわずかに残っている。壁溝は検出されていない。覆土は黒褐色土である。遺物は，中期の土師器高杯(１・２)の小片が出土している。

170Ａ（第72・73図，図版37）

調査区の北東，Ｃ７グリッドに位置する。北側は緩斜面で調査区域外にかかり，南側1/2の調査である。170Ｂと中央部で重複し，上面を削平している。出土遺物から中期の住居跡であろう。

平面形態は方形を呈し，南壁長は4.5ｍを測る。検出できたのは東壁長2.5ｍ・西壁長2.1ｍである。南北方向に主軸をとるならば，主軸方位はN－17°－Ｅである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は10cm～18cmである。床面は平坦で，壁際まで硬化面が広がっている。壁溝は検出されていない。南側の床面から，２本の柱穴(P1径24cm×30cm・深さ18cm，P2径35cm×40cm・深さ27cm)を検出した。いずれもコーナー付近に寄った位置である。覆土は，黒褐色土を主体に暗褐色土が混在している。

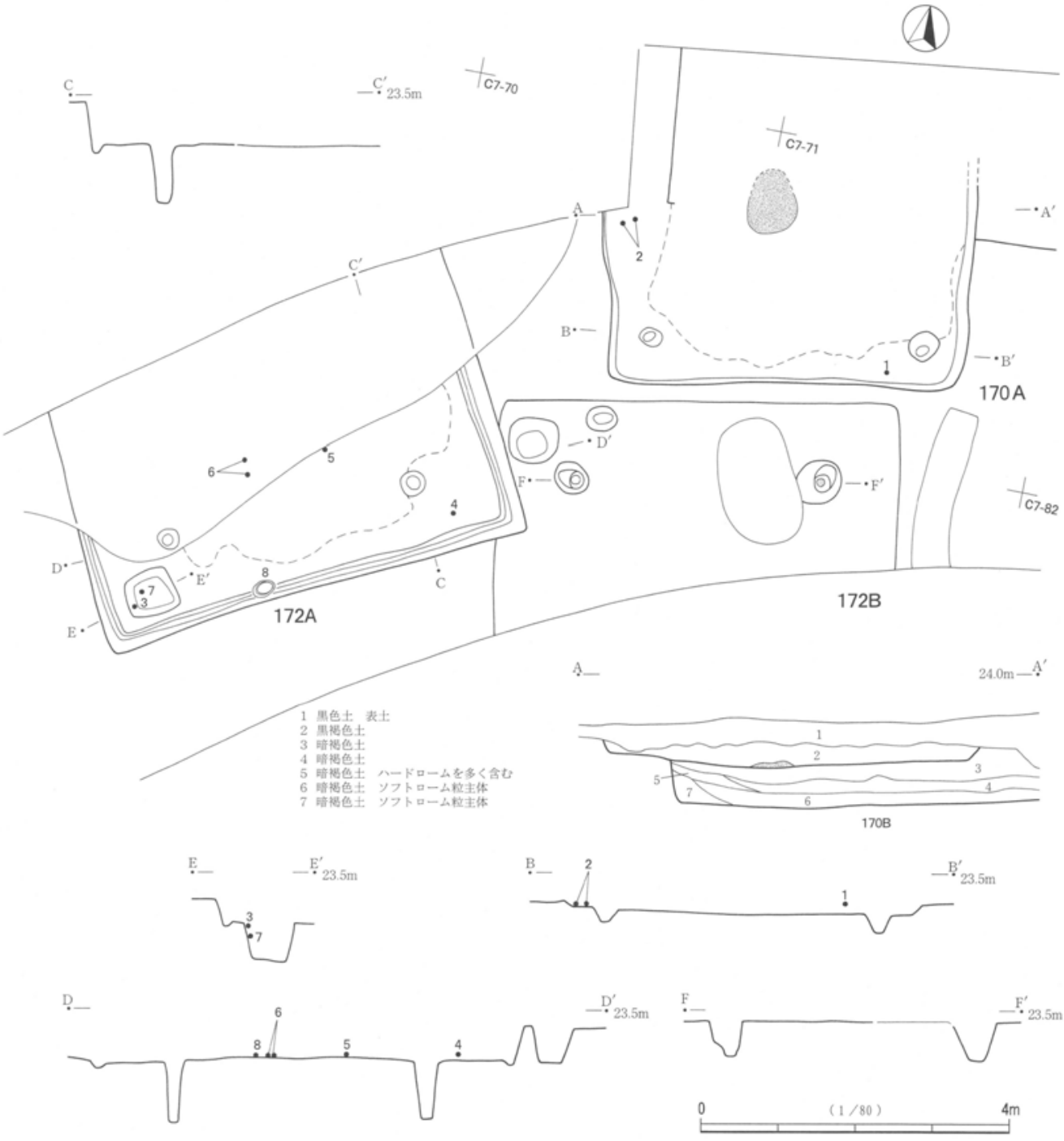
炉(現存径68cm)は中央に位置しているが，北側は調査区域外である。セクションから観察すると，焼土が堆積し炉床面はよく被熱されていた。

遺物は少なく，土師器杯(１)・鉢(２)が出土している。２の鉢は大型の体部に外反する口縁部をもつ。西壁際の床面からの出土である。

172A（第72・73図，図版９・37）

調査区の北東，Ｃ６・Ｃ７グリッドに位置する。北西側は斜面で調査区域外にかかるため，南東側3/5を検出したが，この範囲も斜面の整地のために削平されており，壁や床面は判然としない。十分に検出できたのは，南東側1/3である。出土遺物から中期の住居跡と考えられる。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は5.65mを測る。北東壁長は3.8m，南西壁長は2.0mを検出できた。主軸方位は概ねN-29°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は比較的遺存状態の良好な南東壁で



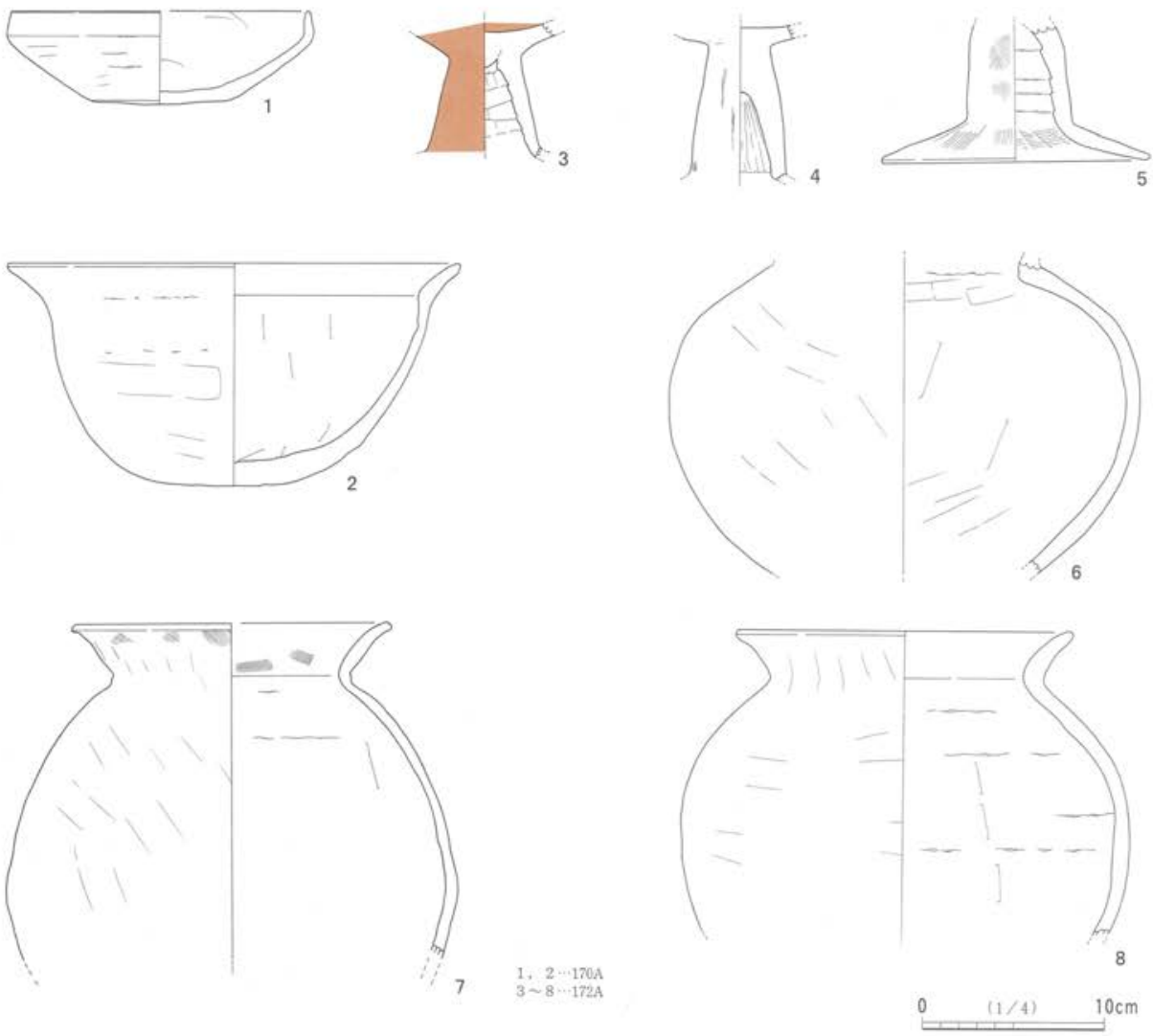
第72図　170A，172A・B

56cm～64cmである。床面は凹凸があり，硬化面が壁際を除いた範囲に広がっている。壁溝(幅10cm～17cm，深さ7cm～9cm)は，調査範囲内では全周する。南側の床面から，２本の主柱穴(P1径27cm×29cm・深さ82cm，P2径31cm×33cm・深さ78cm)が検出された。P1はやや斜面にかかっている。方形の貯蔵穴(62cm×64cm，深さ52cm)は，南コーナーに設けられ，埋土中から３の高杯と７の甕が出土した。埋土は黒褐色土が主体である。住居覆土は黒褐色土が堆積している。

出土遺物は少ないが，土師器高杯・甕などが床面や貯蔵穴から出土している。３～５は高杯で，いずれも中空の脚部である。６～８は甕である。７は堅緻な焼成で，口縁部に刷毛目が残る。

172B（第72図，図版９）

調査区の北東，Ｃ７グリッドに位置する。北側に170Ａ・Ｂ，西側に172Ａが隣接している。南側が調査区域外にかかり，上面を大きく削平されており，柱穴と貯蔵穴の存在から中期の住居跡であることが判明した。平面形態や規模等は判然としないが，柱穴の配置等から一辺５ｍ前後の方形の住居跡と考えられる。２本の柱穴(P1径37cm×45cm・深さ42cm，P2径40cm×52cm・深さ59cm)のうち，P2は底面に柱のあたり痕が確認されている。不整円形の貯蔵穴(60cm×65cm，深さ35cm)は，P1の北西に隣接して設けられている。北西コーナーに貯蔵穴をもつタイプの住居跡である。出土遺物はない。



第73図　170A，172A出土遺物

170B（第74図，図版９・37・38・60）

住居跡北側の大半は調査区域外にかかり，西側の上面を170Aに削平されている。南側1/5の調査である。

平面形態は方形を呈し，南壁長は9.85mを測る大型の住居跡である。東壁長2.2m・西壁長2.1mを検出した。主軸方位は概ねN－7°－Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存状態の良好な東側で45cm～54cmである。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅15cm～25cm，深さ3cm～7cm)は，各壁に部分的に巡っている。床面からは２本の主柱穴を検出した。P1(現存径87cm，深さ111cm)は，北側が調査区域外にかかっているが，複数の柱痕をもっている。P2(径65cm×87cm，深さ104cm)は東側に配置されている。円形の貯蔵穴(径72cm×74cm，深さ89cm)は，南西コーナーに設置されている。覆土は，暗褐色土を主体に黒褐色土が混在している。炉は検出されていない。

遺物は，P1や貯蔵穴の周辺の床面から，中期の土師器杯・高杯・甕や石製紡錘車が出土している。１～５は杯である。１～４は内外面が赤彩され，２・３のように底部が平底に削り出されているのものもある。５は大型の杯で，底部は平底を意識してヘラケズリを行っている。７は甕であるが，内外面が赤彩されている。器面には刷毛目の痕跡が残る。覆土上層から出土した。９は滑石製の紡錘車である。径上面4.3cm・下面2.2cm，厚さ1.0cm，孔径6mmを測る。南壁の立上がり際からの出土である。

181（第75図，図版９・38）

調査区中央，Ｆ６グリッドに位置する。北東側の大半が調査区域外のため，南西側1/3の調査である。

平面形態は方形を呈し，南西壁長は5.4mを測る。壁は垂直に掘込まれているが，壁高は7cm前後と浅い。床面は凹凸があり，中央部寄りがやや堅緻である。床面からは５基のピットが検出されたが，このうち主柱穴は，埋土の状態からP1(径18cm～22cm，深さ47cm)であろう。ほかのピットの埋土は，しまりがなく軟弱である。覆土は，褐色土を主体に暗茶褐色土・暗黄褐色土・黒褐色土・黒色土が混在している。

遺物は少なく，土師器鉢・坩・高杯・甕などが床面から散漫に出土している。１は完形の鉢である。小さい平底の底部から体部が直線的に開いている。口縁部内面に刷毛目の痕跡が残る。２は坩で，内外面が赤彩されている。外面と口縁部内面はよくミガキが施されている。４の甕の底部は穿孔されている。

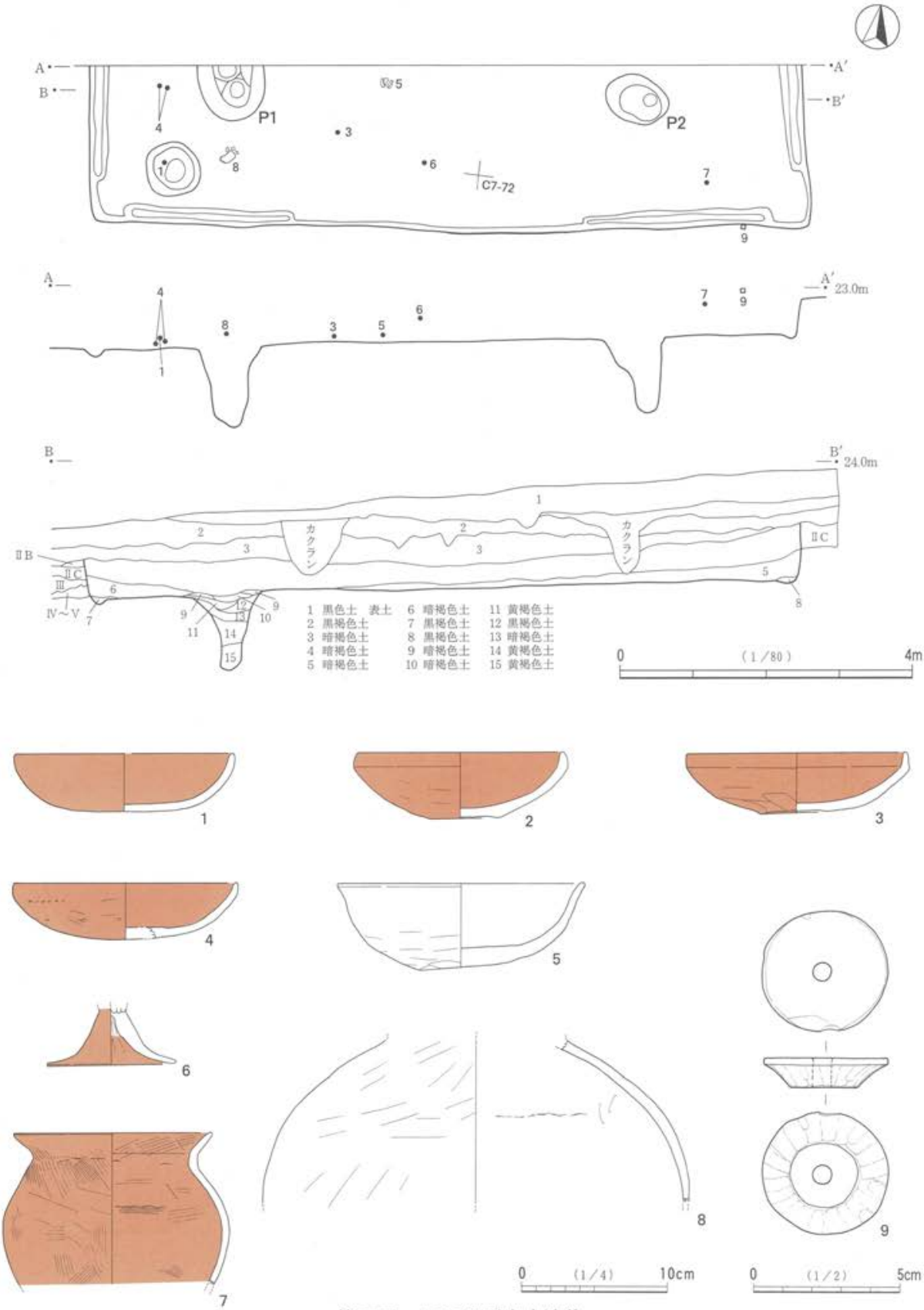
184,，185（第75図，図版10・38）

184は調査区中央，Ｆ６グリッドに位置する。北東側が調査区域外のため，南西側1/3の調査を行った。床面に炭化材や焼土が検出されており，火災を受けた住居である。

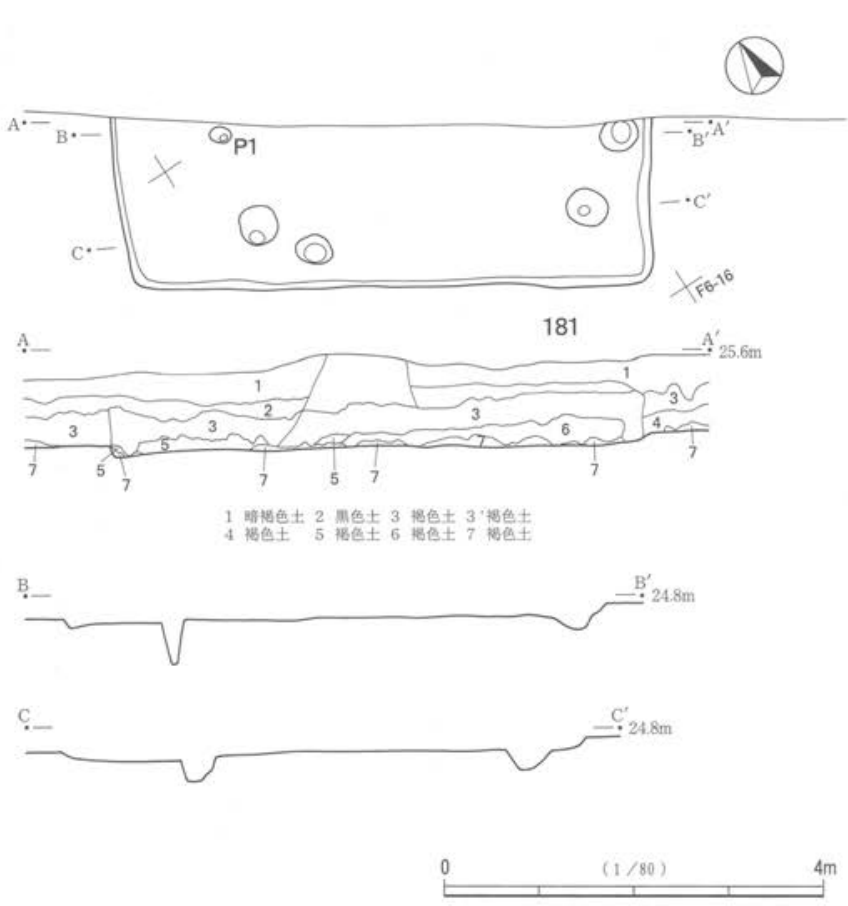
平面形態は，南コーナーの形態から隅丸方形を呈しており，南西壁長は5.0mを測る。壁は垂直に掘込まれ，壁高は13cm～16cmである。床面は凹凸があり，中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅6cm～16cm，深さ2cm前後)は，南西壁に巡っているが，ほかの壁へは連続していない。方形の主柱穴(40cm×45cm，深さ58cm)が，１本検出されている。覆土は，暗褐色土を主体に褐色土が混在している。

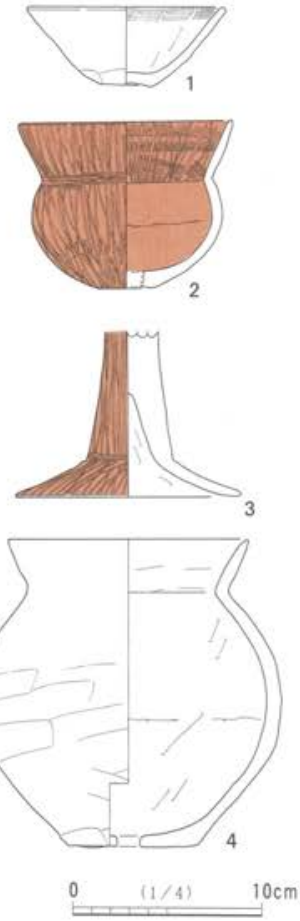
遺物は，床面から土師器鉢・壺などが出土している。６はほぼ完形の鉢で，南西コーナー付近から出土した。底部は平底で，体部は内湾しながら立上がっている。７は壺で，口縁部を欠損する。体部下半はミガキが施されている。主柱穴の上面からの出土である。

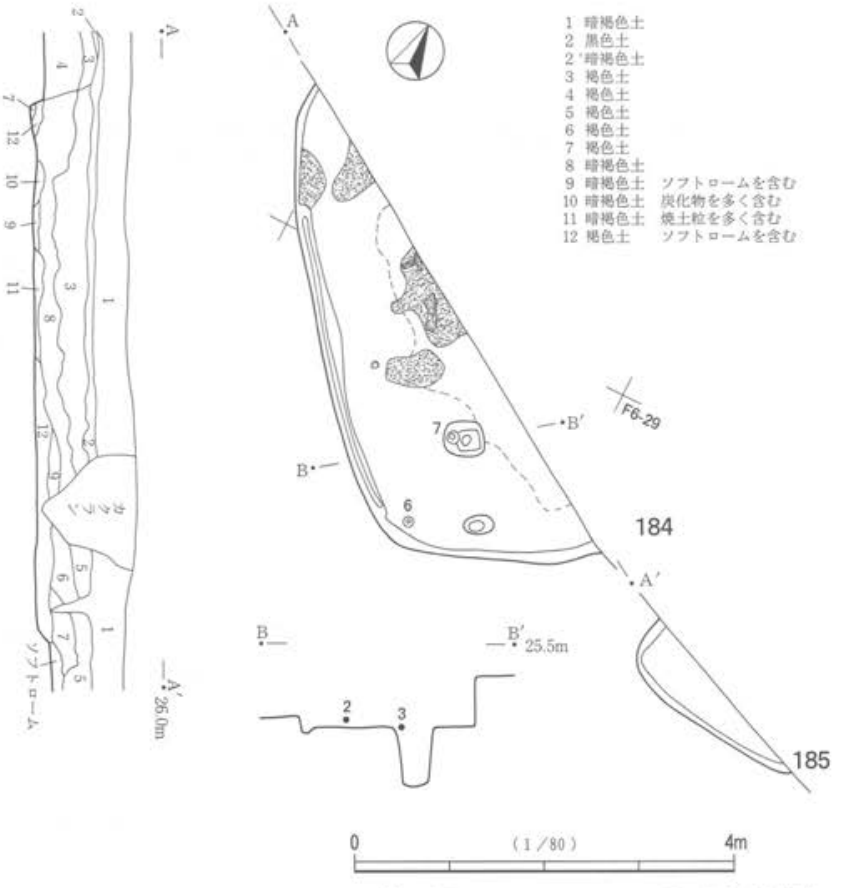
185は184の南東側に隣接する。大半は調査区域外にかかり，南西コーナー周辺の南壁長2.05mと東壁長は0.5mをわずかに検出した。平面形態は隅丸方形であろう。壁は垂直に掘込まれ，壁高は8cm前後である。床面は平坦で，壁際のため硬化面は検出されていない。覆土は暗褐色土が主体である。出土遺物はない。

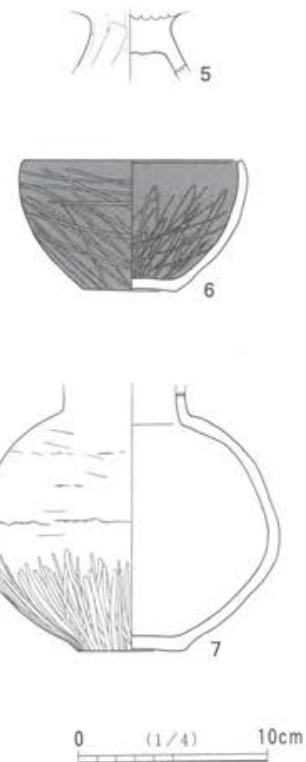


第74図　170B及び出土遺物









第75図　181，184，185及び出土遺物

191（第76図，図版38）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。南東側が調査区域外で，北東側は道路状遺構192に削平されている。南西側も上面が削平されており，遺存状態は良好ではない。中央部から北側の範囲に，焼土が堆積し，南西壁寄りの床面からは炭化材が検出された。

平面形態は方形と考えられ，北西壁長は現存で3.6mである。北西壁は垂直に掘込まれ，遺存している壁高は11cm～15cmである。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。柱穴や炉などは確認されていない。覆土は，黒褐色土を主体に黒色土や焼土粒が混在している。

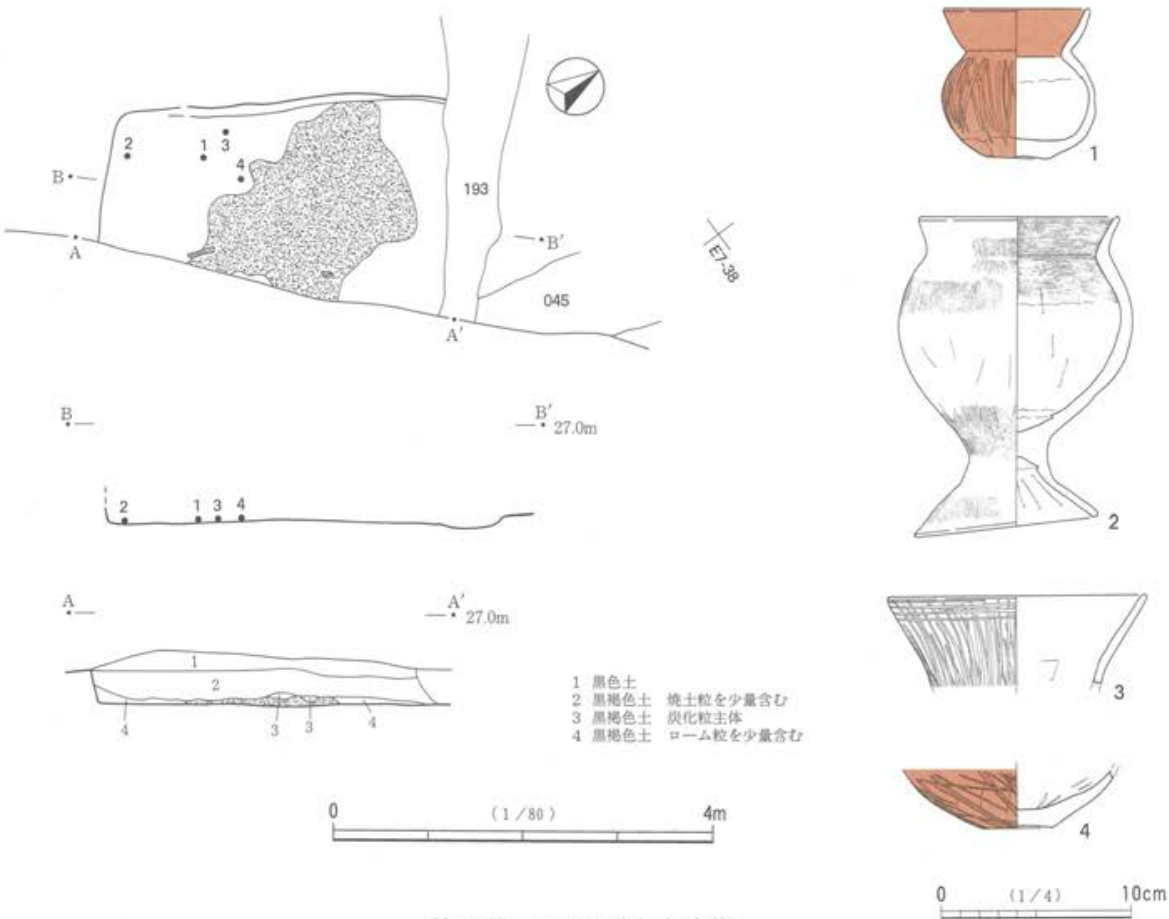
遺物は，北西壁際周辺から土師器坩・台付甕などが出土している。１は坩で，内外面が赤彩され，底部はやや窪んでいる。２は小型の台付甕で，刷毛目の痕跡が残る。３は壺の口縁部である。口縁部には横方向のミガキがみられる。

197（第77図）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。平安時代の土坑208に壁の一部を削平されている。大半は調査区域外にかかり，検出できたのは北西壁長は4.6mである。平面形態は，コーナーが丸みをもつ方形であろう。壁は垂直に掘込まれ，壁高は6cm～11cmで北側が低くなっている。床面は平坦で，やや軟弱である。柱穴などは確認されていない。覆土は，暗褐色土と黒褐色土が混在する。出土遺物はない。

198Ｃ（第77・78図，図版59）

調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。北西側は調査区域外にかかり，南東側の一部を検出した。上面をすでに大きく削平されているが，東壁の一部を確認した。



第76図　191及び出土遺物

平面形態は方形と考えられるが，規模等は不明である。検出した東壁の一部は，やや緩やかに掘込まれ，壁高は20cm～25cmである。床面は全体に軟弱で，柱穴・壁溝は検出されていない。床面の２か所から貝ブロックを検出した。分析結果は付章に記載した。覆土には黒褐色土が主に堆積している。

遺物は，調査区域外との境付近を中心に，土師器・高杯・甕などや管玉が出土している。１・２は高杯である。１は杯部で，やや内湾しながら立上がっている。４は緑色凝灰岩製の管玉である。明緑色を呈し，表面は丁寧に研磨されている。長さ22㎜・径4㎜×4㎜，重量は0.60ｇである。両側から穿孔され，孔径は2㎜～3㎜である。調査区域外の土層断面の上層から出土した。

198D（第77・78図，図版38・61）

調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。上面をすでに大きく削平されており，西壁の一部と床面をわずかに検出できた。南東側の床面には，時期不明の土坑210(径70cm×106cm，深さ28cm)が存在している。

平面形態は方形と考えられるが，規模や主軸方位等は不明である。遺存していた西壁は，垂直に20cm掘込まれている。床面は全体に軟弱で，２基のピットを検出したが，このうちP1(径28cm×34cm，深さ22cm)は柱穴の可能性がある。炉は検出されていない。

遺存状態の悪い住居跡であるが，遺物の出土は多く，床面中央から土師器高杯・坩・壺・甕などがまとまって出土した。５は坩である。口縁部内面から体部外面にかけて赤彩されている。体部内面には刷毛目の痕跡が残る。６～８は高杯の脚部である。外面が赤彩されている。９・10は赤彩された椀である。丸みのある体部に短い口縁部がついている。覆土中層からの出土である。11の壺も赤彩され，住居中央の床面から出土した。12の甕は北壁寄りの床面から破片となって出土している。14は土玉で1/2の遺存である。現存径3.1cm・高さ2.8cm・孔径8㎜を測る。15は鉄製鎌で，基部が遺存していた。基端部の折り返しは錆化のため判然としない。現存長5.5cm・幅3.2cm・厚さ2㎜を測る。覆土上面からの出土である。

199B（第77・78図）

調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。東側が調査区域外で，北側は平安時代の住居跡199Ａと土坑192に削平されている。西壁側から南西部にかけて，1/4の範囲の調査である。

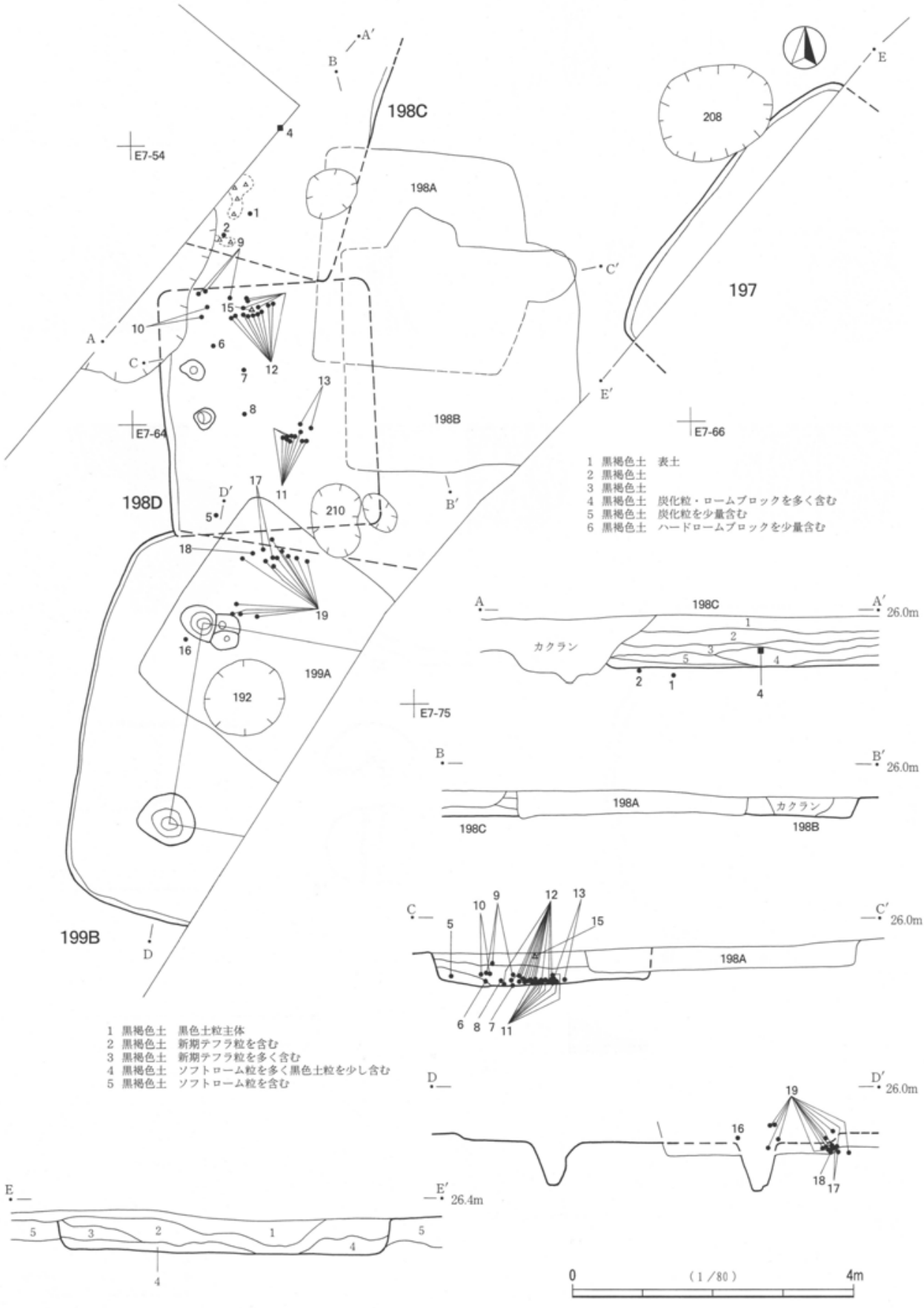
平面形態は隅丸方形を呈し，西壁長は5.2ｍである。主軸方位はN-12°-Ｅである。壁は垂直に掘込まれているが，壁高は6cm～10cm程度である。床面は凹凸があり，P2の北側はやや堅緻である。西側の床面から主柱穴２本を確認できた。P1(径45cm×60cm，現存の深さ55cm)は199Ａの調査後に，P2(径64cm×84cm，深さ63cm)は床面から，それぞれ検出された。覆土は，黒褐色土や暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器高杯・壺などが住居の北側から出土している。16・17は高杯の脚部である。19は二重口縁の壺である。口頸部は短く，体部はヘラケズリ後にナデで仕上げられている。

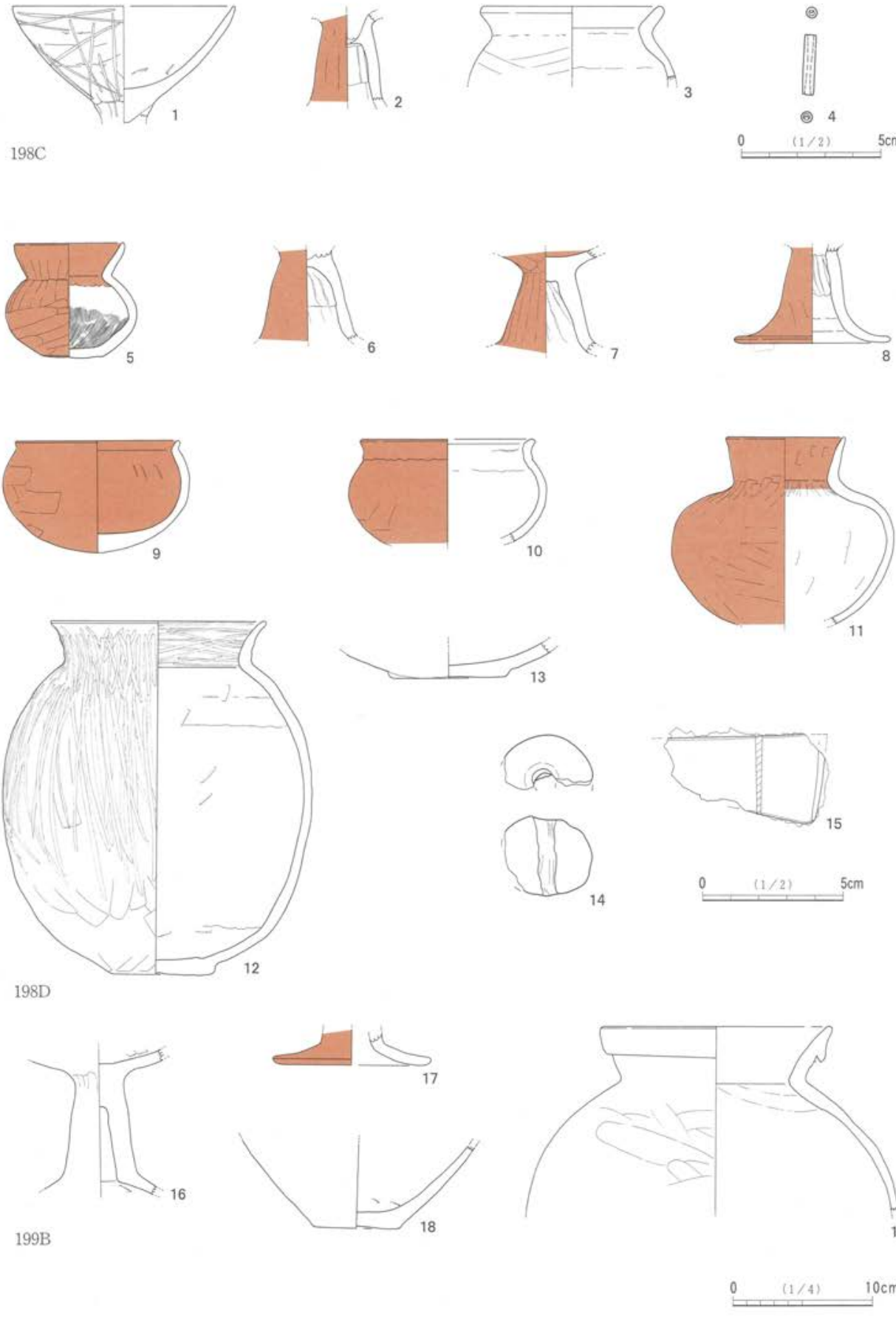
200C（第79図，図版10・38・39・59）

調査区の東，Ｅ７・Ｆ７グリッドに位置する。東コーナー周辺は調査区域外である。北西壁から南西壁にかけての範囲が，住居跡200Ａ・Ｂ(後期)に削平されている。

平面形態は方形を呈し，規模は4.7ｍ×4.9ｍを測る。東西方向に長い形態である。主軸方位はN-31°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は概ね17cm～20cmであるが，南コーナー付近は10cm前後と低くなっている。床面は凹凸があり，中央部には硬化面が広がっている。床面から４本の主柱穴(P1径47cm×49cm・深さ73cm，P2径47cm×60cm・深さ72cm，P3径52cm×63cm・深さ71cm，P4径43cm×47cm・深さ70cm)を検出した。柱間寸法は，南北方向は2.4ｍであるが，東西方向では2.7ｍ前後とやや長くなっている。長



第77図　197，198C・D，199B

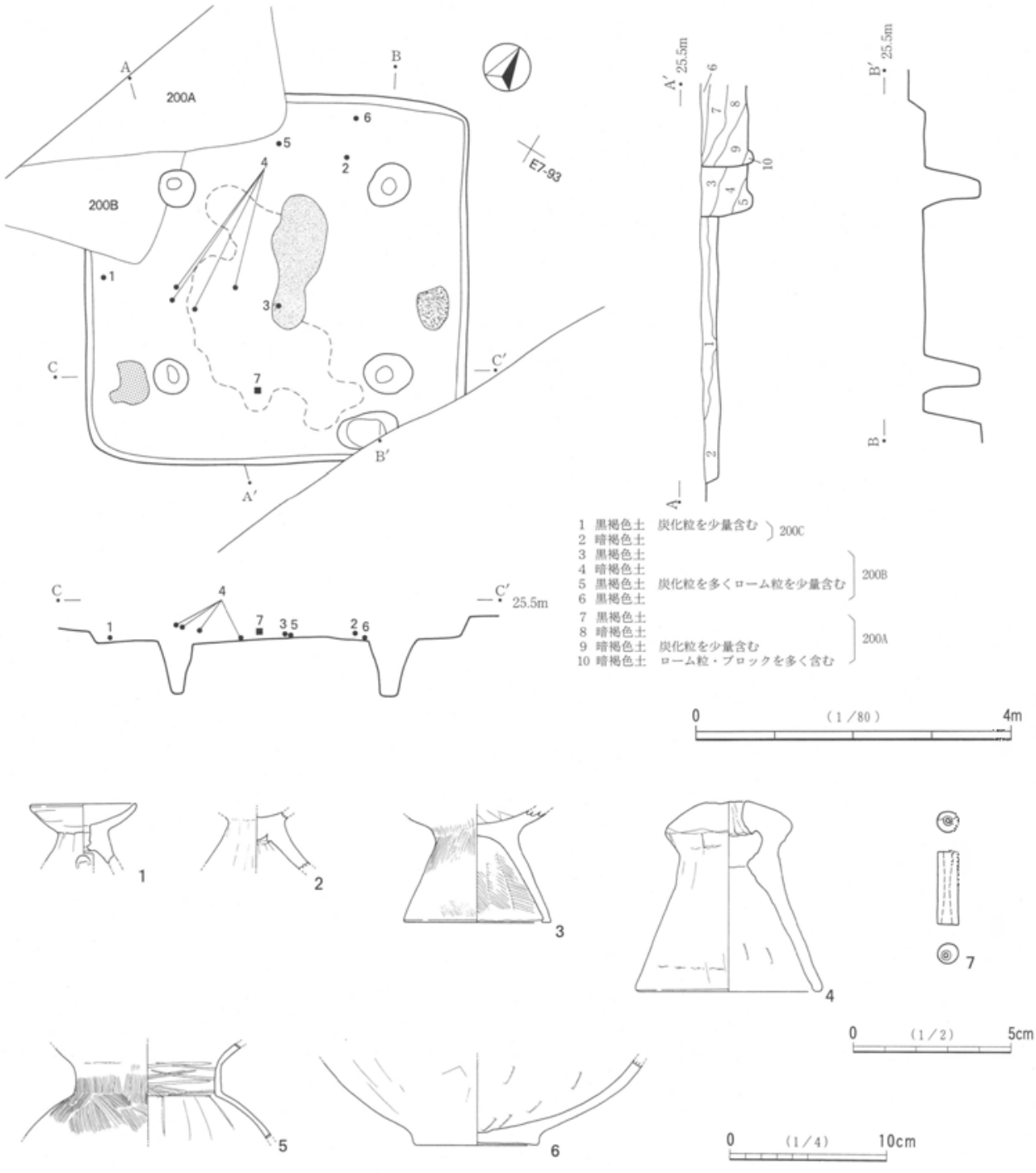


第78図　198C・D，199B出土遺物

楕円形の貯蔵穴(40cm×78cm，深さ71cm)は，一部が調査区域外にかかっているが，南東壁の東壁際に設けられている。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

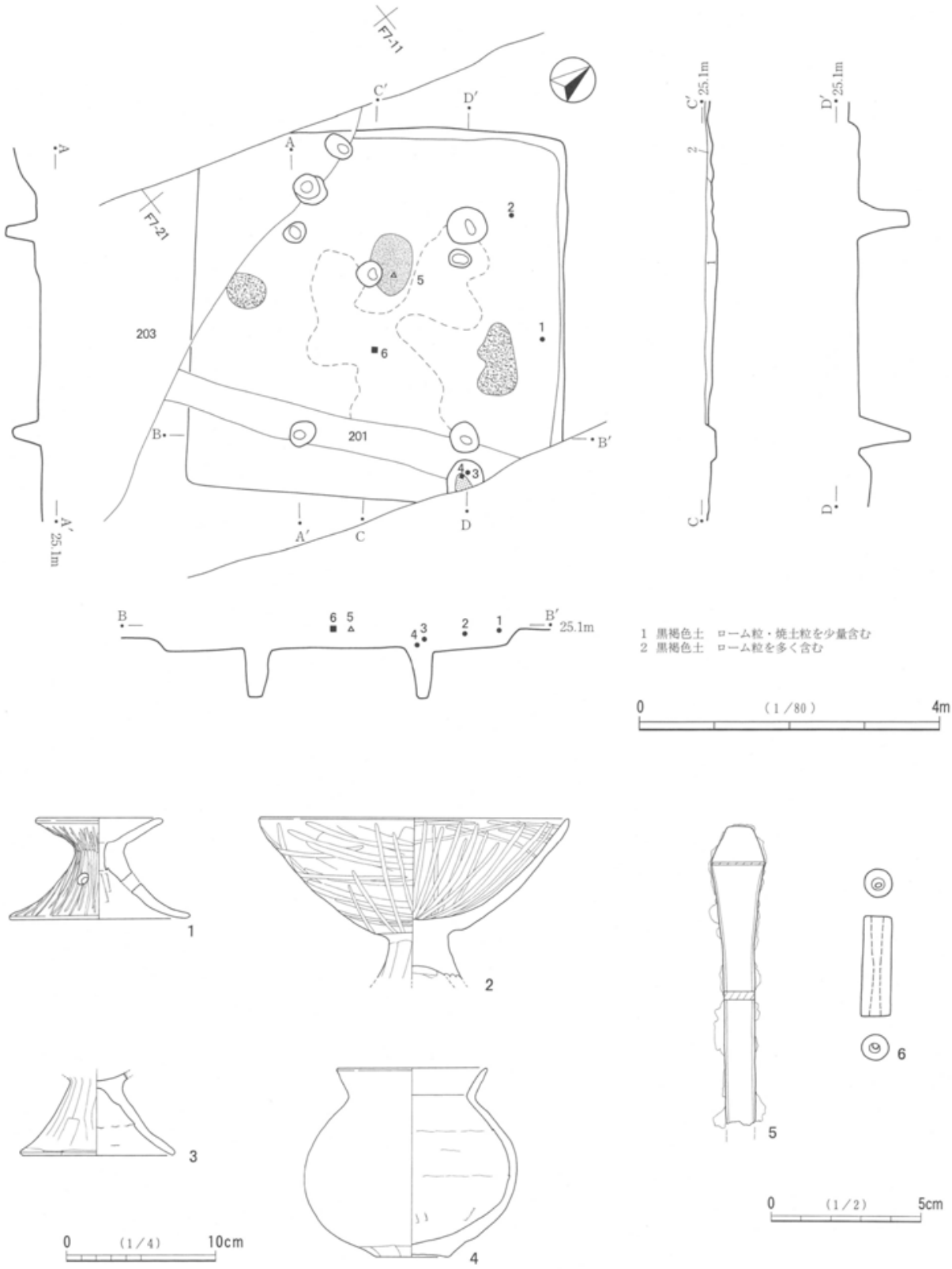
炉(長径170cm，短径32cm～66cm)は，住居中央のやや北側に設けられている。長楕円形で，２基の炉が複合したような形態である。

遺物は，土師器器台・炉器台・甕・壺や管玉などが床面から散漫に出土している。１は器台で，円形の透孔がみえる。西壁際の床面から出土した。２は高杯の脚部の破片である。３は台付甕の台部である。刷毛で仕上げられている。４は炉器台で，脚部を一部欠損する。器受部と脚部の境は指頭痕が残る。床面や



第79図　200C及び出土遺物

覆土中からの出土である。５は壺の口頸部で，刷毛目の痕跡が残る。７は緑色凝灰岩製の管玉である。側面を一部欠損する。明灰緑色を呈し，表面は研磨されている。長さ24㎜・径6㎜×7㎜，重量は1.82ｇである。両側から穿孔され，孔径は3㎜である。住居南側の床面直上から出土した。



第80図　202及び出土遺物

202（第80図，図版10・39・59・61）

調査区の東，Ｆ７グリッドに位置する。南西側は溝状遺構203(中期)に大きく削平されている。東コーナー付近は調査区域外で，溝状遺構201にも上面を削平されている。

平面形態は正方形を呈し，規模は推定で5.0ｍ×5.0ｍ前後である。炉の位置から想定される主軸方位は，N-50°-Wである。壁は，遺存している北西壁から北東壁にかけての範囲では，ほぼ垂直に掘込まれ，壁高は9cm～19cmで北東壁側が高くなっている。床面は凹凸があり，中央部に硬化面が広がっている。主柱穴(径30cm～56cm，深さ39cm～71cm)は４本検出され，P3・P4の掘込みは70cm前後と深くなっている。P3の南東に隣接して貯蔵穴(深さ20cm)が位置しているが，調査区域外にかかるため1/2の検出である。大きさは推定で，40cm×70cmであろう。なかから，土師器高杯脚部(３)・甕(４)が出土した。埋土は，黒褐色土を主体に暗褐色土が混在する。住居覆土は，ソフトローム粒や焼土粒を若干含む黒褐色土である。

炉(径56cm×88cm)は浅い掘込みで，P1とP2の中間に設けられている。上面から５の鉄製品が出土した。

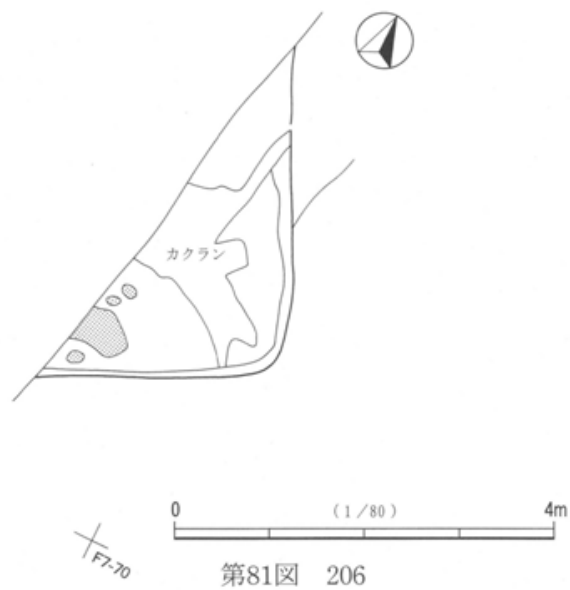
遺物の出土は少ないが，覆土下層から土師器器台や管玉などが出土している。１は器台で，脚部の３か所に円形の透孔がみられる。器面はミガキが施されている。２は高杯の大きな杯部である。下端に稜をもつ。内外面にミガキがみられる。４は小型の甕で，器面はナデでよく仕上げられている。５は用途不明の鉄製品(現存長10.2cm)である。先端部(幅1.8cm・厚さ1mm)は幅広で，薄いつくりであるが刃部ではない。茎のような部分(幅1.0cm・厚さ3mm)は，断面が長方形である。６は緑色凝灰岩製の管玉である。鈍い明灰色を呈し，表面はよく研磨されている。長さ33mm・径9.2mm×9.5mm，重量は5.51ｇである。両側から穿孔され，孔径は3mm～4mmである。住居中央の覆土上層から出土した。

206（第81図，図版10）

調査区の東，Ｆ７グリッドに位置する。西側が調査区域外のため，北東から南東にかけての1/2の範囲の調査を行ったが，中央部に大きく木根が入り込み，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形を呈し，北東壁長は2.6ｍである。南東壁長も2.5ｍほどであり，概ね一辺2.5ｍ前後の規模であろう。壁はほぼ垂直に掘込まれているが，壁高は5cm～16cmで北コーナー付近がやや深くなっている。床面は，攪乱を多く受けているため全体に軟弱である。柱穴や炉等は確認されていない。南コーナー付近の床面から，砂質粘土がまとまって検出された。覆土には黒褐色土が堆積している。

遺物は少なく，土師器片が出土している。住居の形態等から古墳時代前期と想定した。弥生土器の底部が北コーナー付近の床面から出土したが，これは弥生時代中期の溝状遺構207に本来は伴うものである。



第81図　206

212（第82図）

調査区の南東，Ｆ６グリッドに位置する。西側の3/5が調査区域外にかかる。上面を床面まで大きく削平されており，検出できたのは２本の柱穴と貯蔵穴である。これらの配置から，平面形態は方形で規模は一辺6.5m前後と推定される。柱穴は円形で，P1(径63cm×71cm，深さ27cm)は北側に，P2(径45cm×53cm，深さ30cm)は南側に配置されている。楕円形の貯蔵穴(径86cm×97cm，深さ24cm)は，南東コーナーに設けられていたと考えられる。

遺物は，P1の埋土から１の鉄製品が出土している。両端を欠損し，端部が折れ曲がっている。用途は不明である。現存長4.5cm，断面は長方形(3mm×6mm)である。

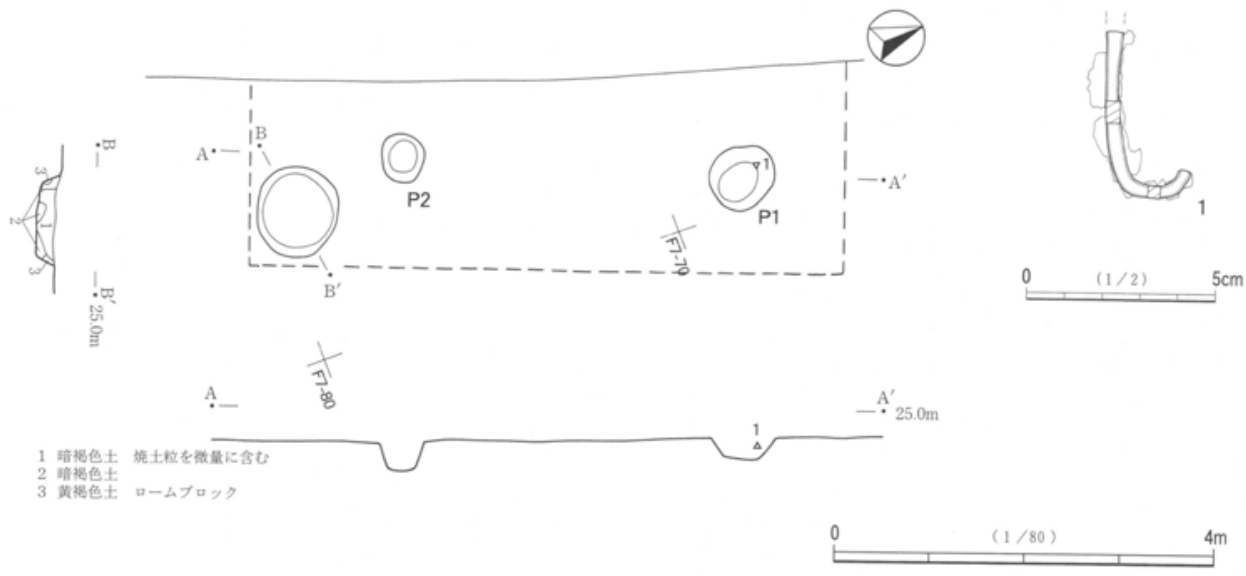
217C，187，218（第83図，図版10）

調査区の南東，Ｇ６グリッドに位置する。北西側は調査区域外である。重複する住居跡は多く，南東側の上面は217Ｂ(後期)，東コーナー付近は平安時代の住居跡217Ａ，北東側は216(後期)，南西側は218(時期不明)に，それぞれ削平されている。隣接する時期不明の住居跡187と218をあわせて報告する。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は推定で8.6mである。北東壁長は2.1mを検出しており，規模は一辺8.5m前後であろう。主軸方位は概ねN-40°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は，遺存状態の比較的良好な北東壁側で36cm～49cmである。床面は凹凸があり，全体に堅緻で中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅23cm～32cm，深さ2cm～5cm)は，幅が広く遺存状態の良好な箇所では巡っている。北東側の壁溝から根太痕跡の溝が柱穴に延びている。床面から複数のピットが検出されたが，このうち主柱穴はP1(径71cm×92cm，深さ85cm)，P2(径67cm×87cm，深さ89cm)と，調査区域外にかかるP3(現存径49cm，深さ76cm)である。P1とP2の底面には柱のあたり痕が確認されている。P4(径55cm×62cm，深さ38cm)は補助的な柱穴であろう。P5(径45cm×66cm，深さ48cm)は出入り口施設に伴うピットである。覆土は，暗褐色土の上に暗黒褐色土や黒褐色土が堆積している。

遺物の出土は少なく，中期の土師器杯などが覆土中から出土している。１はミニチュア土器で，口縁部が小さく開いている。２は杯で，器形の低い形態である。床面直上から出土した。

187は217Ｃの南西に位置し，住居の東側の一部である南東壁長1.6m，北東壁長0.4mを検出した。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は35cmである。覆土は暗黒褐色土や暗褐色土が堆積している。出土遺物はない。

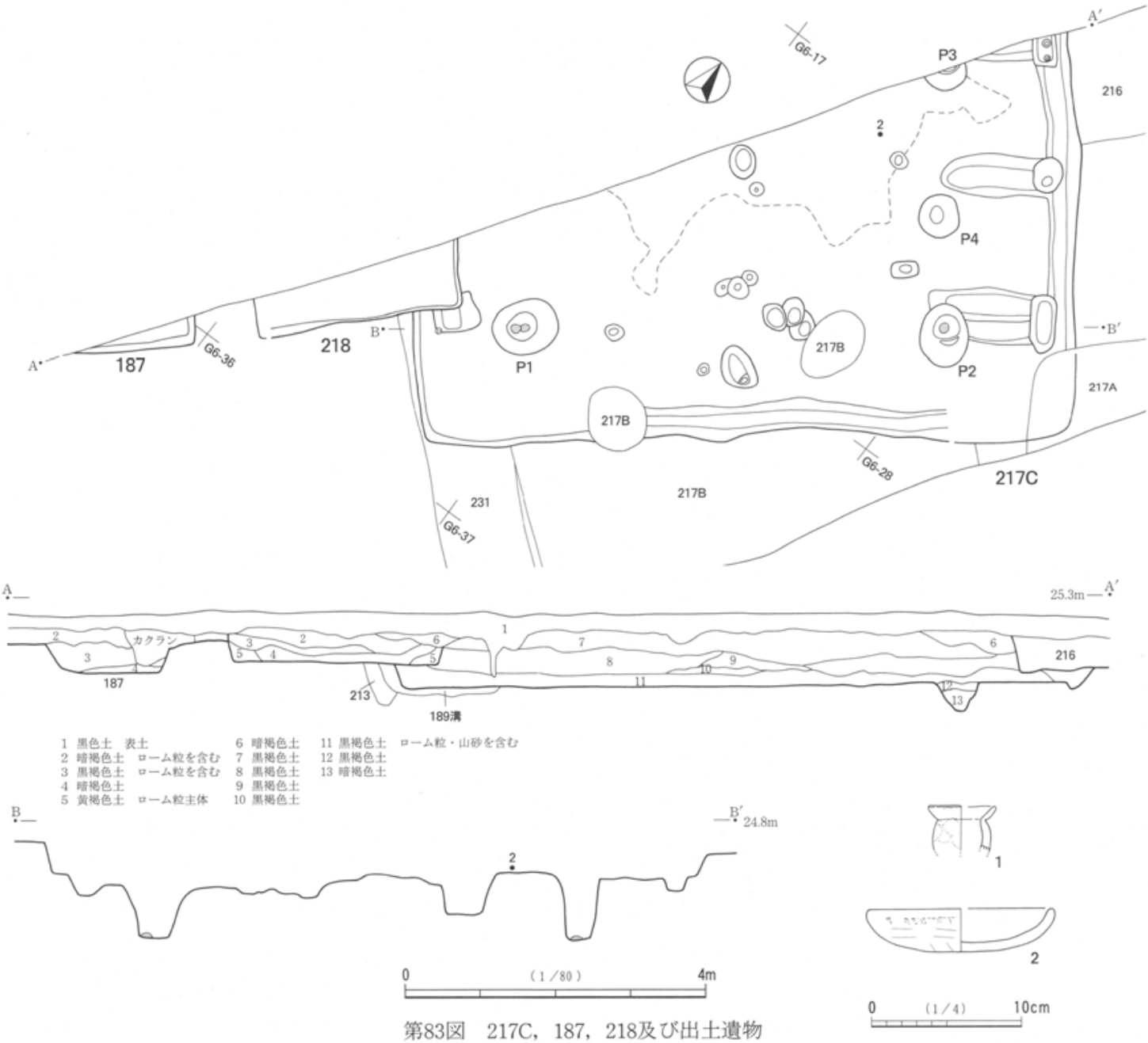


第82図　212及び出土遺物

218は217Cの南西側に位置し，上面を一部削平している。南コーナー付近は木根による攪乱を受けている。住居の南東側1/5を検出した。南東壁長は推定で2.8mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は17cmである。覆土は，暗褐色土と黒褐色土を主体に暗黄褐色土が混在している。出土遺物はない。

267B（第84図）

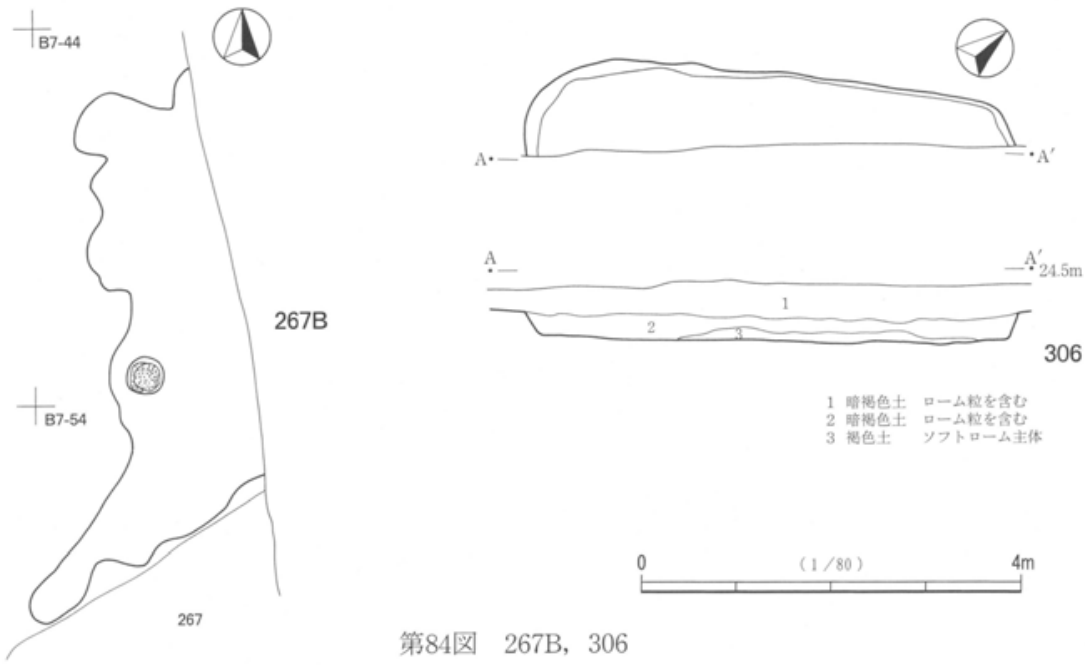
調査区の北端，B7グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかる。すでに上面を大きく削平されており，床面と思われる範囲を図示した。柱穴は確認できなかったが，炉を検出した。ただし，炉と床面の範囲の整合性が不明瞭で，規模等は推定できない。東西方向に主軸方位をとる可能性もある。炉（径35cm×40cm，深さ5cm）は円形で，焼土が全面に堆積している。炉床面はよく被熱されている。出土遺物はないが，前期から中期の時期であろう。



第83図　217C，187，218及び出土遺物

306（第84図）

調査区の南西端，Ｇ４グリッドに位置する。南東側は大半が調査区域外である。北東側に307（後期）が隣接する。北西壁長4.9mを検出できたが，コーナーは丸みをもち平面形態は判然としない。壁は緩やかに掘込まれ，壁高は26cm～33cmである。床面は平坦で，やや堅緻である。柱穴等は検出されていない。覆土は，ローム粒を多く含む褐色土の上に暗褐色土が堆積している。遺物は少なく，覆土中から赤彩された土師器高杯片が出土しているが，図示できなかった。



第84図　267B，306

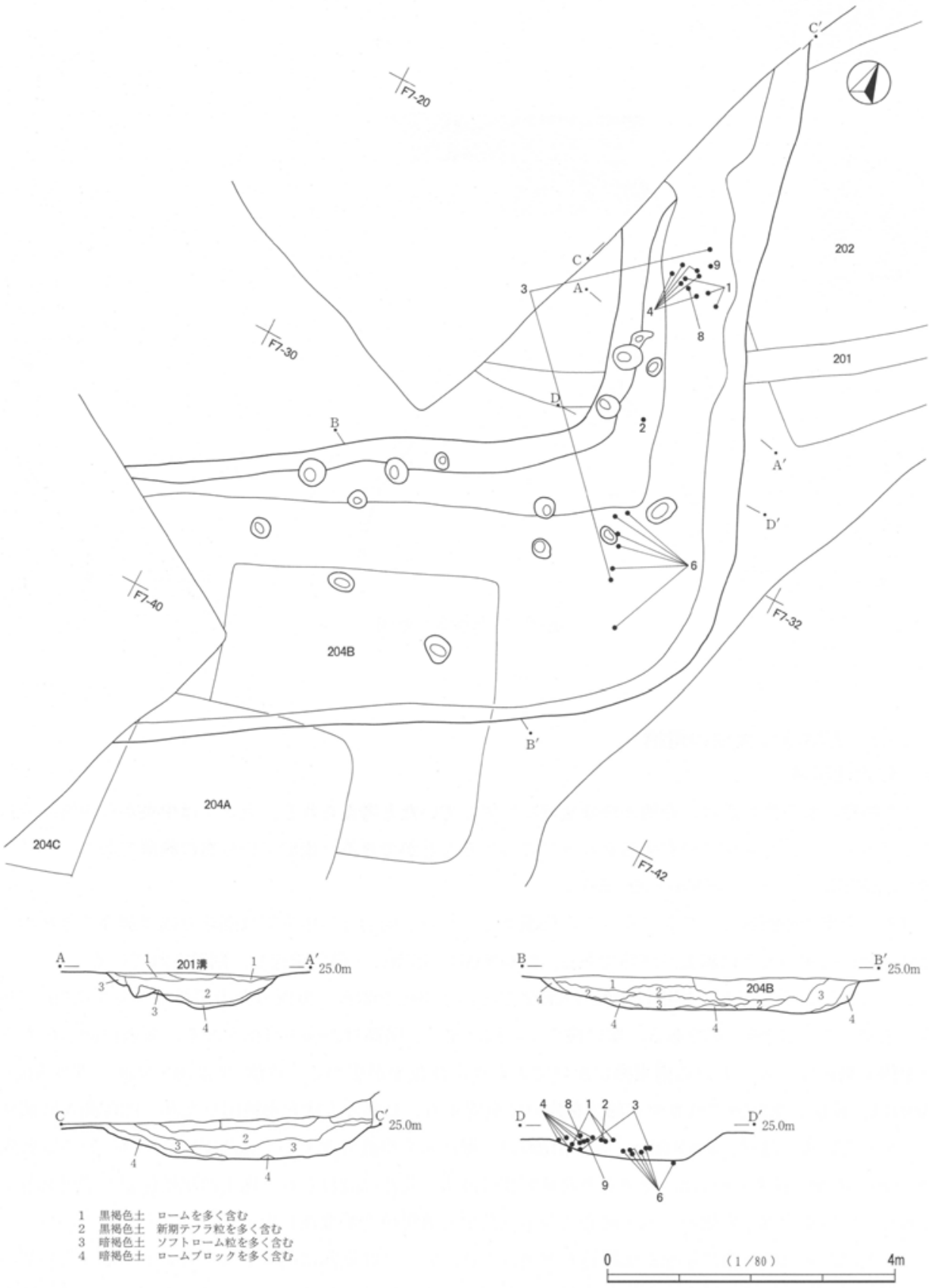
2　周　溝

203（第85・86図，図版39）

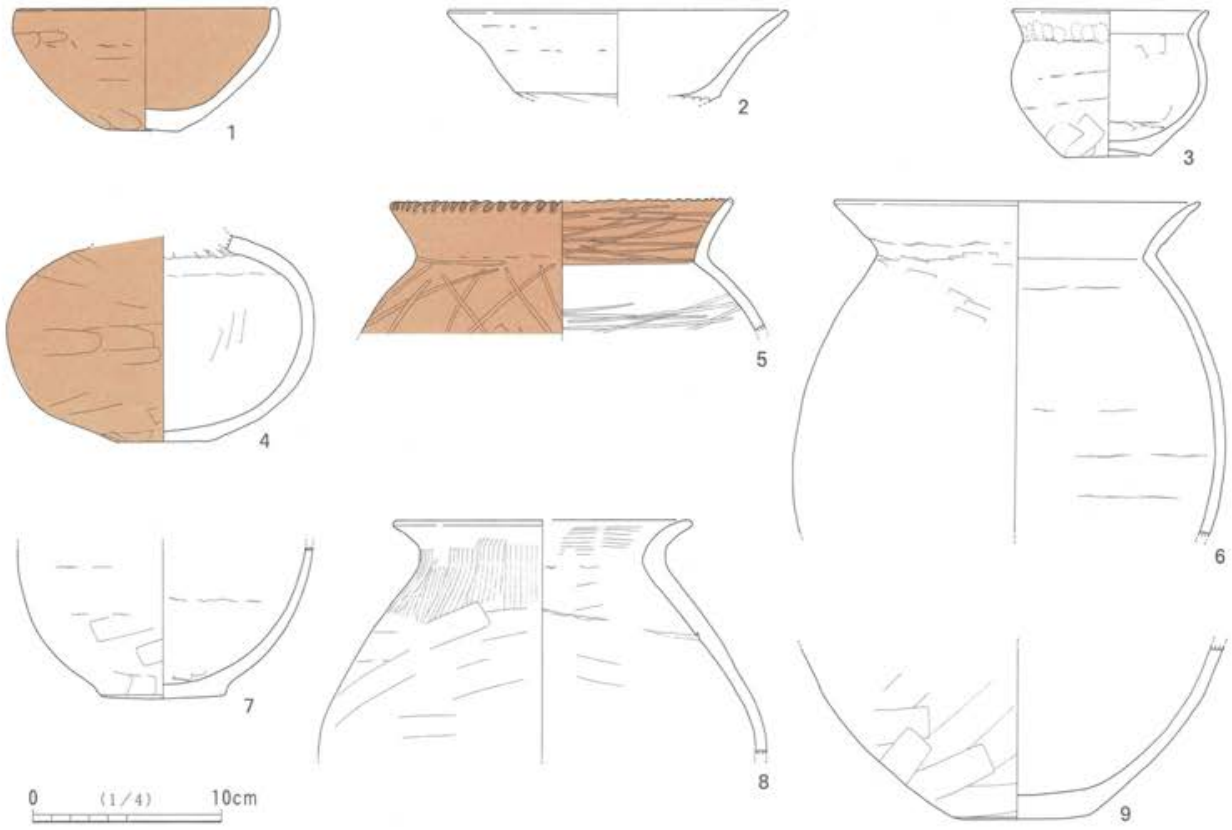
調査区の東，Ｆ７グリッドに位置する周溝の一部である。南東コーナー付近を中心とした範囲を検出したが，周辺の調査区では周溝の部分が検出されていないので，性格・規模等の詳細は不明である。

平面形態は方形の周溝と考えられ，調査範囲での外縁長は，東壁9.0m・南壁7.4mである。南コーナーはやや丸みをもつ。周溝の上端幅は，東壁1.9m・南壁3.9mと南壁側が幅広につくられている。溝底幅は，東壁0.7m～1.0m・南壁2.8m，深さは31cm～45cmである。南壁側の溝底は一定の幅を保っているが，東壁側では広狭がある。周溝の掘込みは緩やかであるが，溝底面はやや凹凸があり，小ピットが内側の立上がりや溝底面から検出された。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

遺物は，東側とコーナー付近の２か所の範囲で，覆土中層から上層にかけて，中期の土師器杯・高杯・甕などが出土している。１は内外面が赤彩された杯である。平底の底部をもつ。３は小型甕で，底部外面が窪んでいる。４は壺であろう。球形の体部外面は赤彩されている。５～９は甕である。５の口唇部には工具により押捺痕がみられる。口縁部内面から体部外面にかけて赤彩され，ミガキが施されている。


C′
F7-20
C
202
3
A
9
1
4
8
F7-30
201
D
B
2
A′
D′
6
F7-40
F7-32
204B
B′
204A
204C
F7-42
A
1
201溝
1
A′ 25.0m
3
2
3
4
B
B′ 25.0m
204B
C
C′ 25.0m
D
4 8 1 2 3
D′ 25.0m
9
6
1 黒褐色土 ロームを多く含む
2 黒褐色土 新期テフラ粒を多く含む
3 暗褐色土 ソフトローム粒を多く含む
4 暗褐色土 ロームブロックを多く含む
0 (1/80) 4m

第85図 203



第86図　203出土遺物

第２節　古墳時代後期の遺構

１　竪穴住居跡

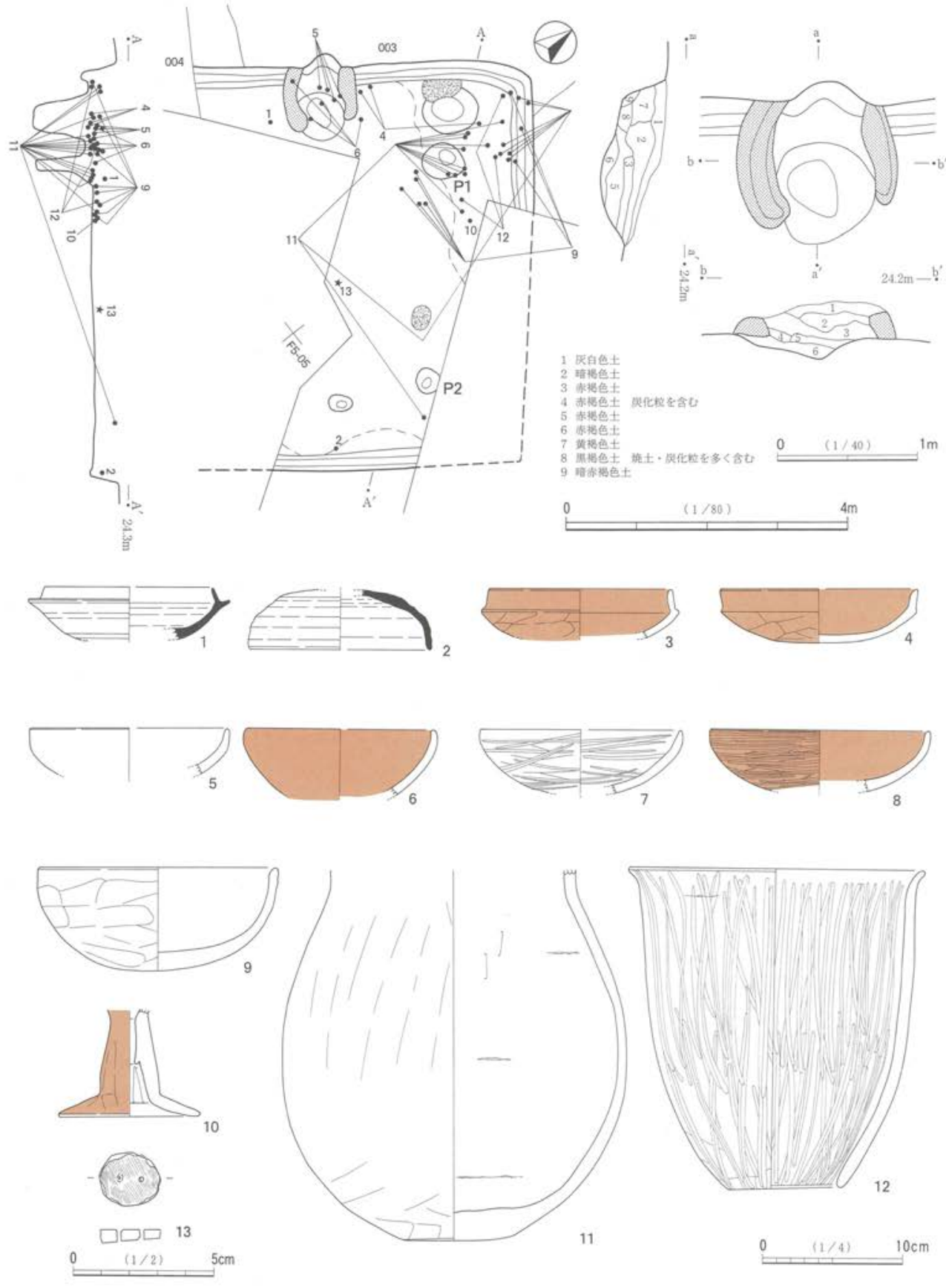
この時期の竪穴住居跡は，台地のほぼ全域に展開していたと考えられる。大きくは中央から西側に分布するグループと，北東側に分布するグループにわけることができる。南側での分布は稀薄である。

002（第87図，第18表，図版10・39・58）

調査区中央やや西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。カマド周辺と，中央部は園路の幅で調査できたが，北東壁側と南側の大半は調査区域外である。住居跡004と西壁の一部で重複し，削平されている。

平面形態は方形を呈し，規模は主軸長（南北方向）で5.8ｍを測る。東西方向の規模は推定で6.0ｍである。主軸方位はN-50°-Wである。壁は緩やかに掘込まれ，壁高は28cm～41cmを測る。床面は凹凸があるが全体に堅緻で，カマドから南東壁にかけての範囲に硬化面が広がる。壁溝（幅20cm～30cm，深さ5cm～11cm）は，検出した範囲ではカマド部分を除いて全周する。２本の主柱穴を検出したが，P2は調査区域外にかかっている。P1（径54cm×60cm，深さ91cm）は，掘込みも垂直に深くつくられている。楕円形の貯蔵穴（径66cm×80cm，深さ84cm）は，カマドの北東側でP1のすぐ北西に設けられ，埋土は暗褐色土と暗灰褐色土である。住居覆土は，炭化粒・焼土粒を含む黒灰色土と黄褐色土が混在している。

カマドは，北西壁中央に壁を25cm掘込んで設けられている。煙道部は角度をもって立上がる。天井部はすでに崩落し，左袖部の遺存もあまり良好ではないが，右袖部が比較的よく残っていた。火床は12cmほど皿状に掘窪められ，底面はよく被熱されていた。カマド内からは，５・６の杯が出土している。



第87図　002及び出土遺物

遺物は，カマド内や住居北側を中心とした範囲から，須恵器杯や土師器杯・高杯・甕・甑，石製模造品(有孔円板)などがまとまって出土している。１・２は須恵器杯である。１の杯はカマド左袖部脇，２の蓋は南東壁際の，それぞれ覆土下層から出土した。３～８は杯である。内外面が赤彩されているものが多い。４はカマド右袖部脇からの出土である。９は椀で，P1周辺や北コーナー付近の床面に散在している。12は甑で，内外面とも粗いミガキが施されている。P1周辺から出土した。13は滑石製の有孔円板である。住居中央の床面直上から出土した。

004（第88・89図，図版10・11・39・40・61）

調査区中央やや西寄り，Ｆ５グリッドに位置する。北西壁のカマド周辺と，柱穴の一部や貯蔵穴を検出したが，南側は調査区域外である。西コーナー付近で住居跡005と重複している。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は現存で5.5mである。主軸方位はN-54°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁溝は8cm～17cmを測り，北コーナー付近がやや深くなっている。床面は調査した範囲では，硬化面は確認されていない。壁溝(幅14cm～20cm，深さ5cm～9cm)は，調査した範囲ではカマド部分を除いて巡っている。床面からは２本の主柱穴を検出した。P1(径116cm，深さ89cm)は調査区域外にかかっているが，柱を抜き取ったような痕跡が認められる。P2(径60cm×86cm，深さ50cm)は楕円形で，底面には径7cmほどの柱のあたり痕が確認されている。P2の北東側に隣接して，貯蔵穴(径92cm×102cm，深さ56cm)が設けられているが，底面は凹凸がある。埋土は，暗黄褐色土や黒褐色土の上に，砂質粘土と焼土を含む黄褐色土が堆積している。床面の３か所に小規模な焼土の集積がみられる。住居覆土は，暗褐色土に明黄灰色土(砂質粘土を含む)や暗黄灰色土が混在している。

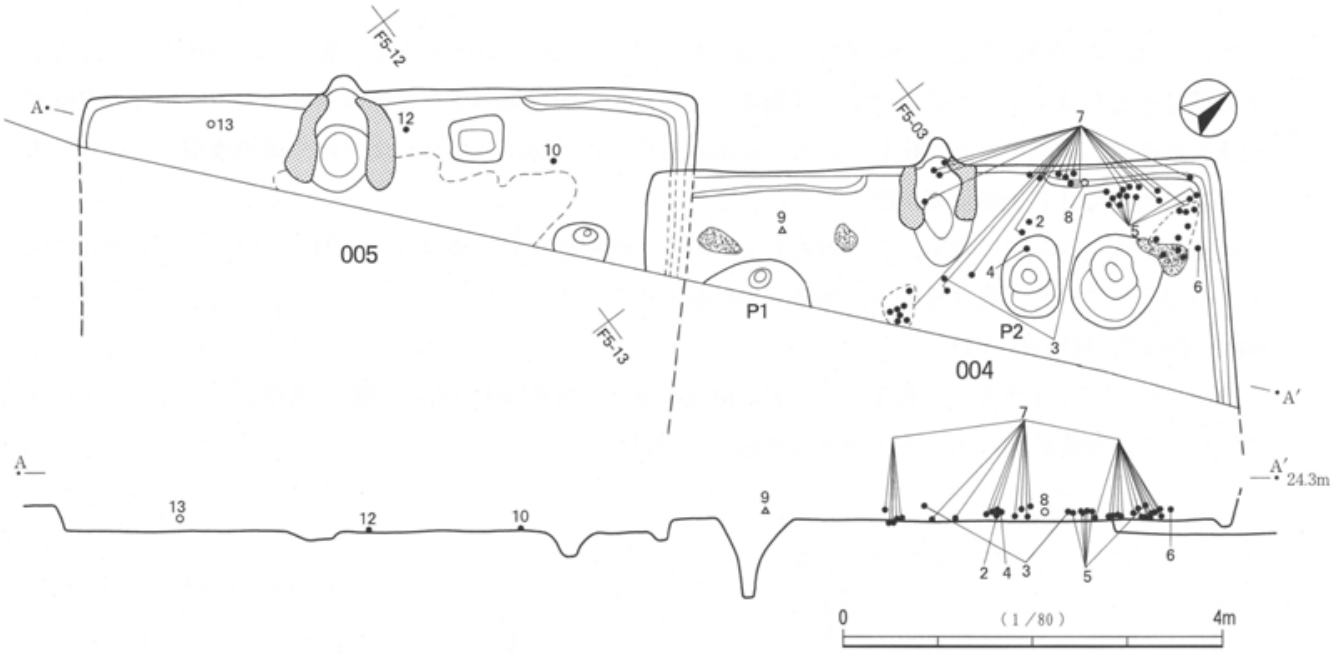
カマドは北西壁に設けられ，壁を35cm掘込んでいる。煙道部の立上がりは緩やかである。天井部は崩落していたが，両袖部の遺存状態は良好である。火床は皿状に8cm掘窪められ，底面はよく被熱され赤化しており，焼土が堆積していた。カマド内からは，土師器甕と支脚が出土している。甕は住居内に広く分布し，ほかの破片と接合している。

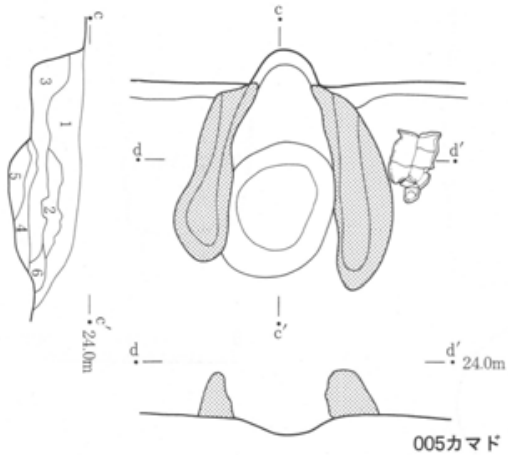
遺物は，北コーナー周辺の床面を中心に，須恵器蓋，土師器杯・甕などが出土している。また，小片のため図示していないが，緑釉陶器の破片が混入している。１は須恵器蓋である。返蓋の形態で，内面のかえりは口縁部よりも下方に短く内傾して突出している。つまみの形状は不明である。２・３は杯で，やや深めの椀に近い形態をとる。４は混入した平安時代の杯である。５～７は甕で，７は特に長胴である。８の支脚は壁溝内からの出土である。９は用途不明の板状の鉄製品で，P1北側の床面直上から出土した。上端が次第に開き，下部を欠損する。刃部はない。現存長8.8cm・最大幅5.2cm・厚さ3mmを測る。

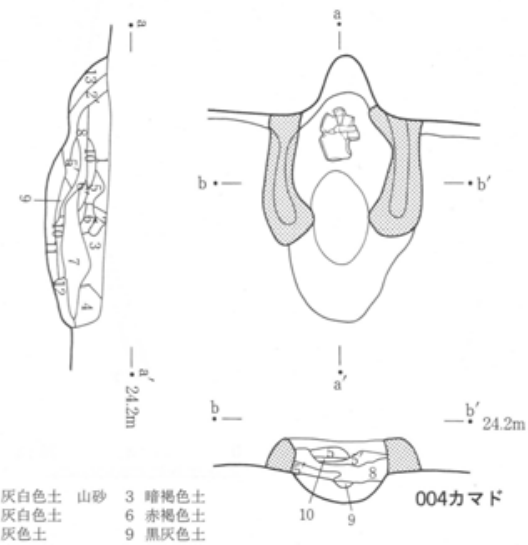
005（第88・89図，図版10・11・40）

調査区中央やや西寄り，Ｆ５グリッドに位置する。北西壁のカマドを中心とした範囲，約1/5の調査である。南側の大半は調査区域外である。北東壁側で住居跡004と重複し，上面を削平されている。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は6.4mを測る。主軸方位はN-54°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は25cm～28cmである。床面は凹凸があるが，カマド全面から北側の範囲では硬化面が認められる。壁溝(幅16cm～24cm，深さ5cm～13cm)は，北東壁から北西壁の一部にかけて巡っているが，カマドの南西側では認められない。床面からピットを検出したが，いずれも浅く柱穴は確認されていない。方形の貯蔵穴(46cm×54cm，深さ60cm)は，カマドの北東側に設けられている。覆土は，暗褐色土や黒色土を主体に，暗黄褐色土や黄灰色土などが堆積している。



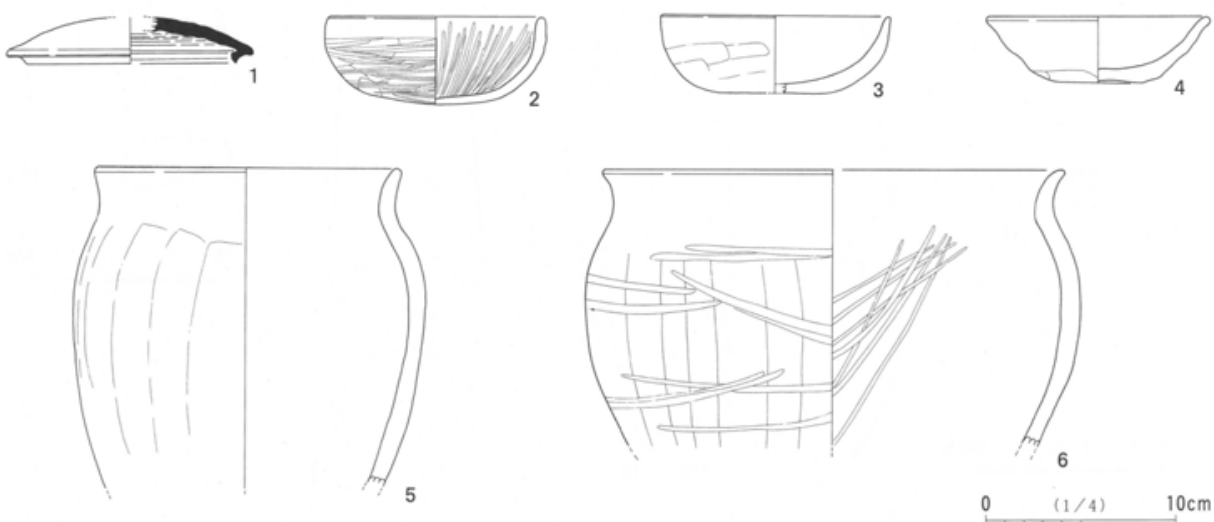




1 暗黄灰色土　山砂
2 黄灰色土　山砂
3 黄灰色土　山砂
4 褐色土
5 暗褐色土　山砂
6 暗黄灰色土　山砂

0　(1／40)　1m

1 暗褐色土　2 灰白色土　山砂　3 暗褐色土
4 灰白色土　5 灰白色土　6 赤褐色土
7 暗褐色土　8 灰色土　9 黒灰色土
10 赤褐色土　11 黄灰色土　12 黄褐色土
13 灰白色土



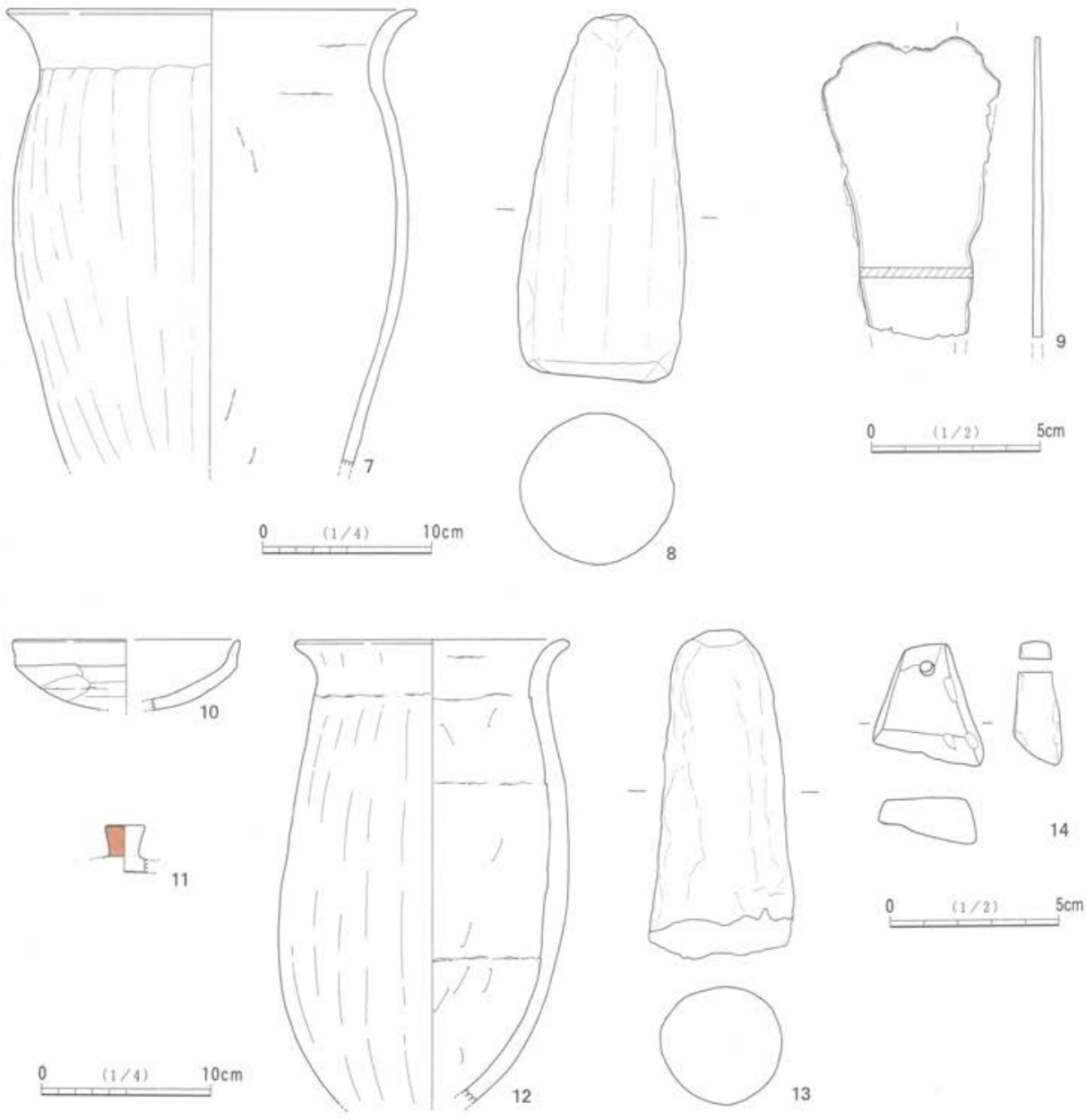
第88図　004，005及び出土遺物(1)

カマドは，北西壁の中央やや南西寄りに設けられている。壁を17cm半円形に掘込み，角度をもって立上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落していたが，両袖部の遺存状態は良好である。袖部の内壁や火床の底面は，被熱のため赤化している。火床は皿状に12cm掘窪められ，炭化粒や灰が堆積していた。カマド右袖脇から３の土師器甕が出土している。

調査可能な範囲が狭いため，出土遺物も少ない。土師器杯(10)・甕(12)・支脚(13)が，カマド周辺の床面から出土している。甕は長胴で，体部下半に最大径をとる。

008（第90図，図版40・61）

調査区中央やや北西寄り，Ｅ５グリッドに位置する。住居跡009・016(中期)と重複している。大半は調査区域外で，調査範囲は南コーナー周辺の約1/4である。



第89図　004，005出土遺物(2)

平面形態は方形を呈し，調査範囲での壁長は，南東壁3.2m・南西壁3.4mである。北側の拡張区ではカマドの構築材である砂質粘土が検出され，カマドは北西壁に設けられていたと考えられるので，主軸方位は概ねN-46°-Wである。壁は緩やかに掘込まれ，壁高は35cm～40cmである。床面は凹凸があるが，中央部は南東壁下までよく踏み固められて堅緻である。壁溝(幅20cm，深さ5cm)は，調査範囲内では全周している。床面からは3基のピットを検出した。このうちP1(26cm×32cm，深さ40cm)・P2(径24cm×30cm，深さ55cm)は，不規則な配置ではあるが柱穴であろう。P3(径70cm×84cm，深さ89cm)は，形態的には貯蔵穴と考えられるが，不安定な位置に配されている。埋土には，暗黄灰色土(ロームブロックを多く含む)や黒褐色土・暗褐色土が堆積している。南東壁の南寄りには，砂質粘土や焼土が堆積している箇所があるが，構造的にカマドとは認められず，構築材を投棄したものであろう。

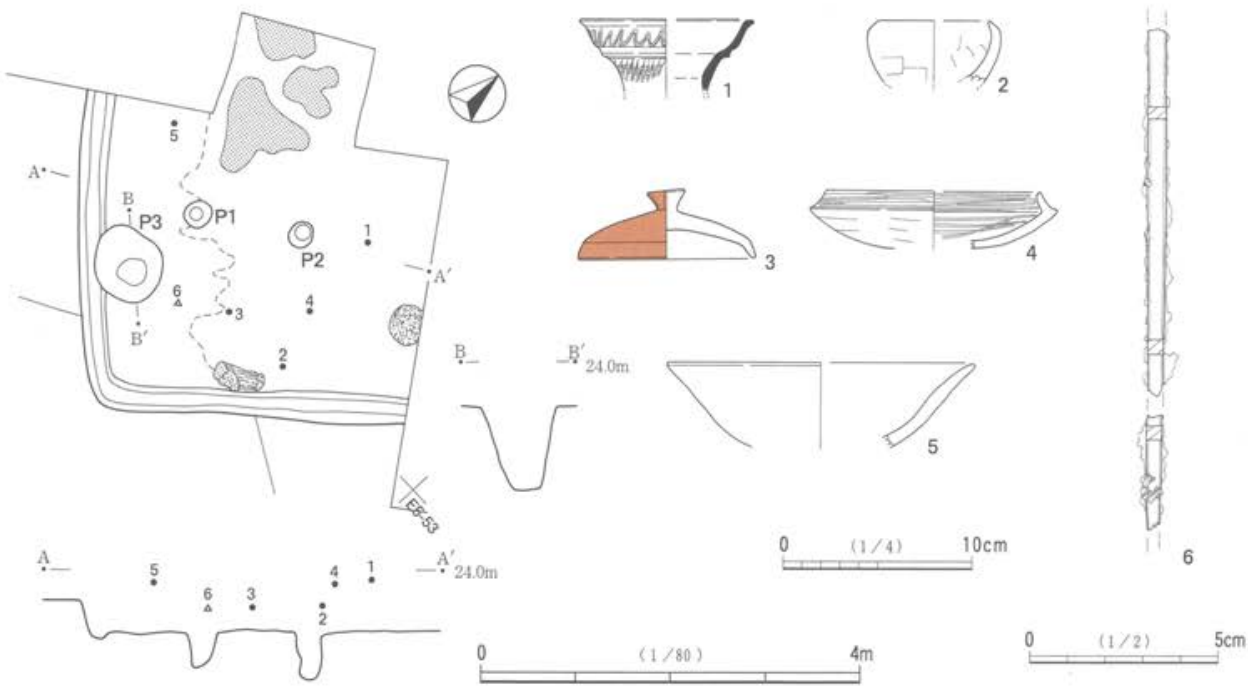
カマドは，砂質粘土の散布状況から，北西壁に設けられていると考えられるが詳細は不明である。

遺物は，須恵器甕，土師器杯や鉄製品などが覆土中層から上層に散漫に分布しいる。1は須恵器甕の口縁部である。口縁部と頸部外面には，櫛状工具による波状文が施されている。暗灰色を呈し，堅緻な焼成である。覆土上層からの出土である。2はミニュチュア土器であろう。3は蓋で，外面が赤彩されている。逆台形状のつまみがつく。5は高杯の杯部である。覆土上層から出土した。6は紡錘車の軸であろう。両端を欠損，下部は次第に幅を減じている。現存長12.7cmを測り，断面(3mm×5mm)は長方形である。

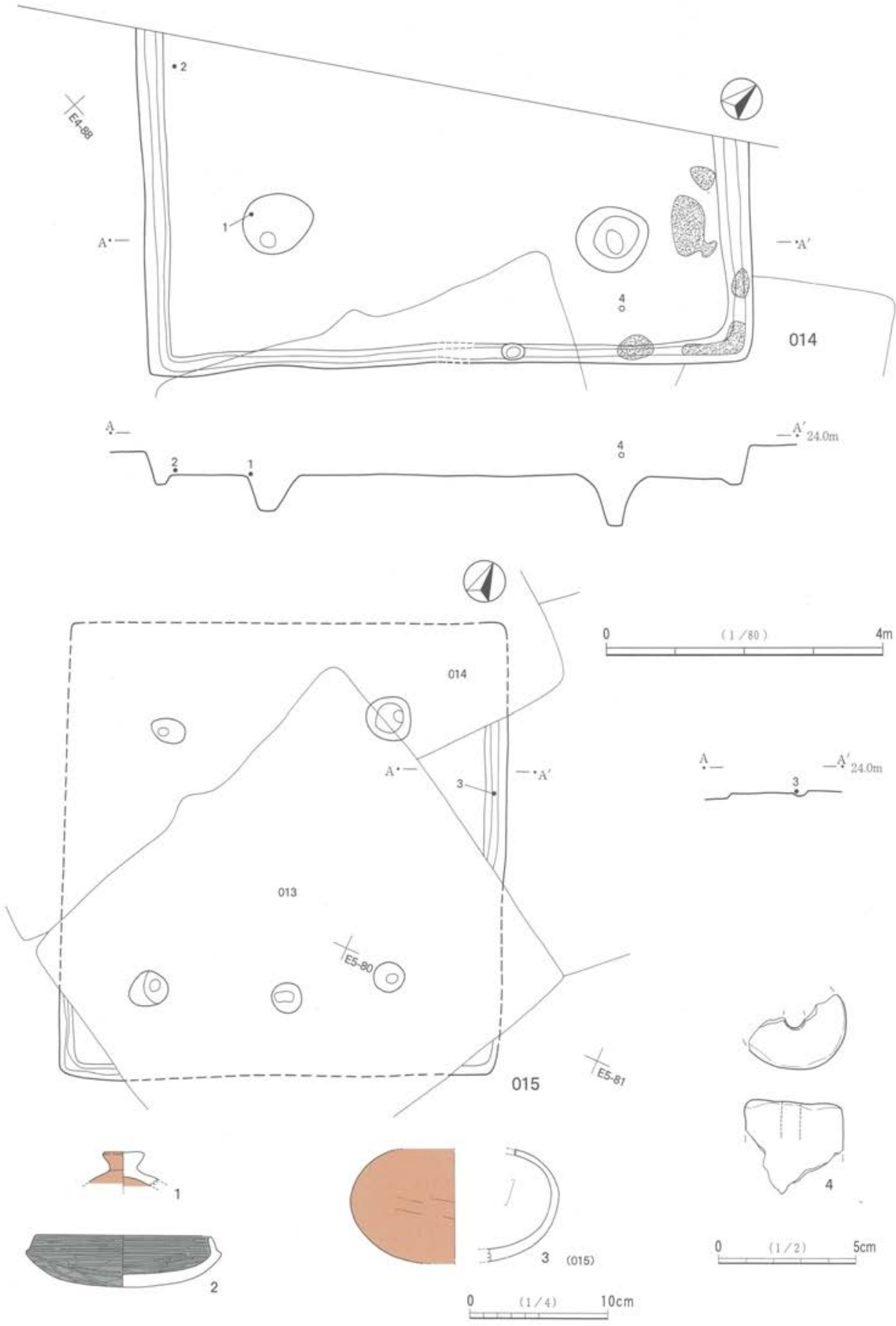
014（第91図，図版40）

調査区の北西，E4グリッドに位置する。大型の住居跡であるが，北側の大半が調査区域外である。住居跡012(中期)・015を削平し，南東側で奈良時代の住居跡013に上面を削平されている。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は8.7mを測る。北西壁にカマドが設けられていると想定して，主軸方位はN-50°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は22cm～48cmで南西壁側が低くなっている。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅18cm～24cm，深さ7cm～12cm)は，調査範囲では全周している。



第90図　008及び出土遺物



第91図　014，015及び出土遺物

南東側の床面からは２本の主柱穴，P1(径90cm×106cm，深さ76cm)・P2(径94cm×104cm，深さ75cm)を検出した。P1の南東側の床面には炭化物がまとまって検出された。主柱穴の埋土にも，周囲から流れ込んだ炭化物を含む黒褐色土が層状に堆積している。これらは，住居を廃絶する際に柱を抜き取り，不用な部材を床で焼却して発生した炭化物の可能性もある。覆土は，暗褐色土とロームブロックを主体とする層に黒褐色土や暗褐色土・黄灰色土などが混在している。

遺物は，東コーナー付近にややまとまりがあるが，全体に散漫な出土である。須恵器蓋，土師器杯などが出土したが，図示できたのはわずかある。１は蓋のつまみである。２は杯で，内外面が黒色処理されている。ともに床面からの出土である。４は管状土錘である。現存長3.3cm・径3.8cm・孔径7㎜を測る。南東壁際の覆土中層から出土した。

015（第91図，図版40）

調査区の北西，Ｅ４グリッドに位置する。014と奈良時代の住居跡013にほとんど削平され，南と東のコーナー付近と北東壁の一部を部分的に調査した。

平面形態は方形と考えられ，南東壁長は推定で6.5mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は南コーナーで31cmである。床面の状態は不明であるが，調査範囲では壁溝は巡っている。カマド・柱穴・貯蔵穴等は確認されていない。

遺物は，北東壁の壁溝内から１の土師器壺が出土した。球形の体部をもち，外面が赤彩されている。

019（第92図，図版11・40）

調査区の西，Ｅ４・Ｆ４グリッドに位置する。南西壁側が調査区域外にかかっているが，全体の90%を調査できた。北東側で住居跡018(中期)を削平している。

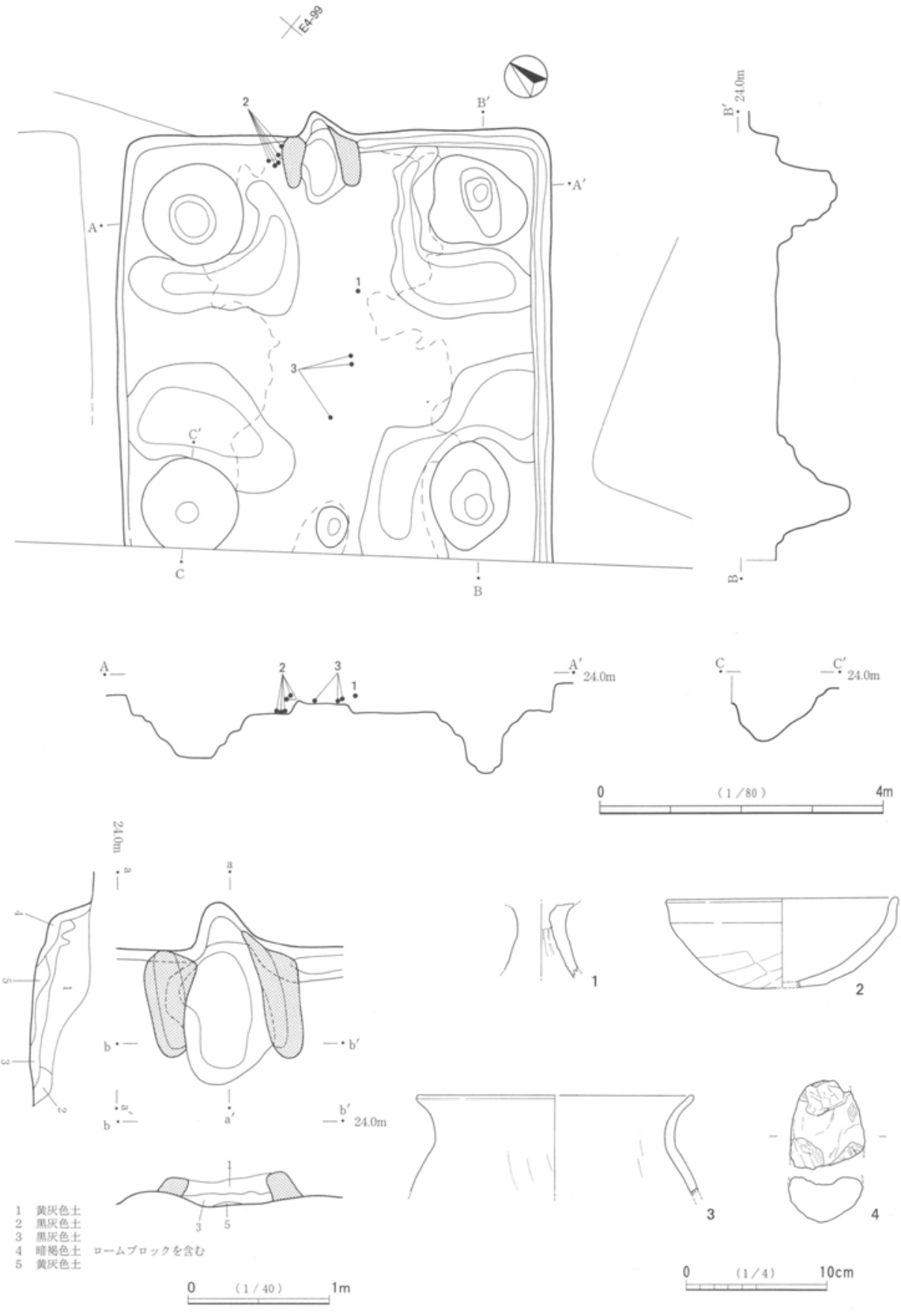
平面形態は方形を呈し，北東壁長は5.9mを測る。北西壁長・南東壁長は現存で，それぞれ5.8m・5.9mである。主軸方位はN-49°-Eである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は18cm～43で北東壁側が高くなっている。床面は凹凸が激しく，カマド前面から南西壁に至る中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅16cm，深さ2cm前後)は，カマドの南東側から南東壁下に巡っている。４本の主柱穴(P1径140cm×144cm・深さ60cm，P2径150cm×160cm・深さ90cm，P3径100cm×146cm・深さ109cm，P4径108cm×120cm・深さ67cm)を検出したが，いずれも掘方上部が大きく開いている。これらの主柱穴の周囲には，床面あるいは床面直上に，表面が被熱のため変色したような多量のロームブロックが残存していた。また，主柱穴の埋土の中層には，炭化物を多く含む黒褐色土が層状に堆積している。以上のことから，柱を抜き取った際の残土を柱の周囲に積んだままにしておき，不用な部材を焼却したことが考えられる。住居覆土は，暗褐色土・暗黄褐色土・黄褐色土・黒色土などが混在している。

カマドは北東壁中央に，壁を35cm掘込んで設けられている。煙道部はほぼ直角に立上がる。天井部は崩落していたが，袖部は良好に遺存していた。火床の掘込みは浅く，底面の被熱は弱い。

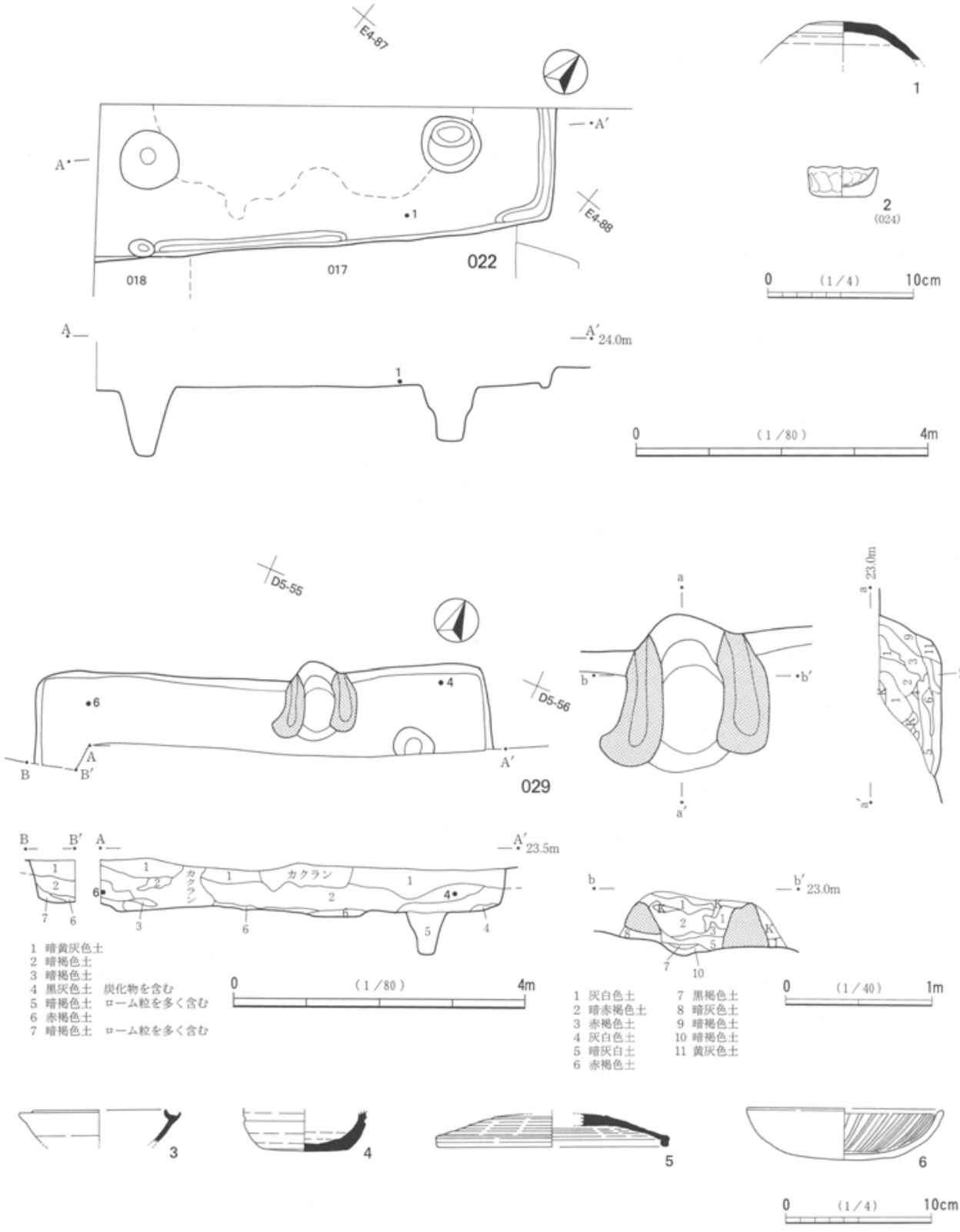
遺物は，中央部付近を中心に，土師器杯・鉢・高杯・甕などやスラグが出土している。１は高杯の脚部で，覆土下層からの出土である。２は鉢である。カマド左袖脇から細かく割れた状態で出土した。

022（第93図）

調査区の西，Ｅ４グリッドに位置する。住居跡018(中期)の一部と重複しているが，上面を奈良時代の住居跡017に削平されている。大半が調査区域外にかかるため，南東側1/5の調査である。



第92図　019及び出土遺物



第93図　022，024，029及び出土遺物

平面形態は方形と考えられ，南東壁長は現存で6.2mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は東コーナー付近で28cmである。床面は凹凸があり，主柱穴の間を中心に硬化面が広がっている。壁溝(幅12cm～18cm，深さ4cm～9cm)は南東壁の一部と北東壁の検出された範囲に巡っている。床面から多数のピットが検出されたが，このなかには重複する遺構のものも含まれており，主柱穴はP1(径70cm×86cm，深さ78cm)と，調査区域外に一部がかかるP2(現存径72cm，深さ73cm)である。覆土は，暗褐色土・暗黄褐色土が主体である。

遺物の出土は少なく，須恵器蓋，土師器杯・甕などの破片が出土している。このうち図示できたのは1の須恵器蓋である。南東壁際の床面から出土した。

024（第93図，図版40)

調査区中央西寄り，Ｆ４グリッドに位置する。住居跡020(中期)と接している。壁の一部(壁高22cm)を検出し，土師器杯などが出土したため，後期の住居跡であることが判明した。ほとんどが調査区域外にかかり，ごくわずかな範囲の検出であるため，詳細は不明である。遺物は，土師器杯・甕・手捏ねが出土したが，図示できたのは2の手捏ねである。

029（第93図，図版40)

調査区の北西，Ｄ５グリッドに位置する。南側の大半が調査区域外にかかるため，カマドがある北壁側1/5の調査である。木根による攪乱を多く受けている。

平面形態は方形を呈し，北壁長は6.0mを測る。主軸方位は概ねN-24°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は24cm～28cmである。調査範囲では壁溝は検出されていない。床面は平坦で，硬化面や壁溝は確認されていない。北側の床面から柱穴を１本(径50cm，深さ61cm)検出したが，調査区域外に1/2がかかっている。覆土は，暗褐色土を主体に暗黄灰色土が混在している。

カマドは，北壁中央やや東寄りに設けられている。壁を半円形に20cm掘込み，角度をもって立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，袖部も先端が残っている程度で，全体に遺存状態は悪い。内壁は被熱され，赤化した袖部のブロックが堆積している。火床は円形に11cm掘窪められているが，被熱は弱く焼土の堆積も少ない。

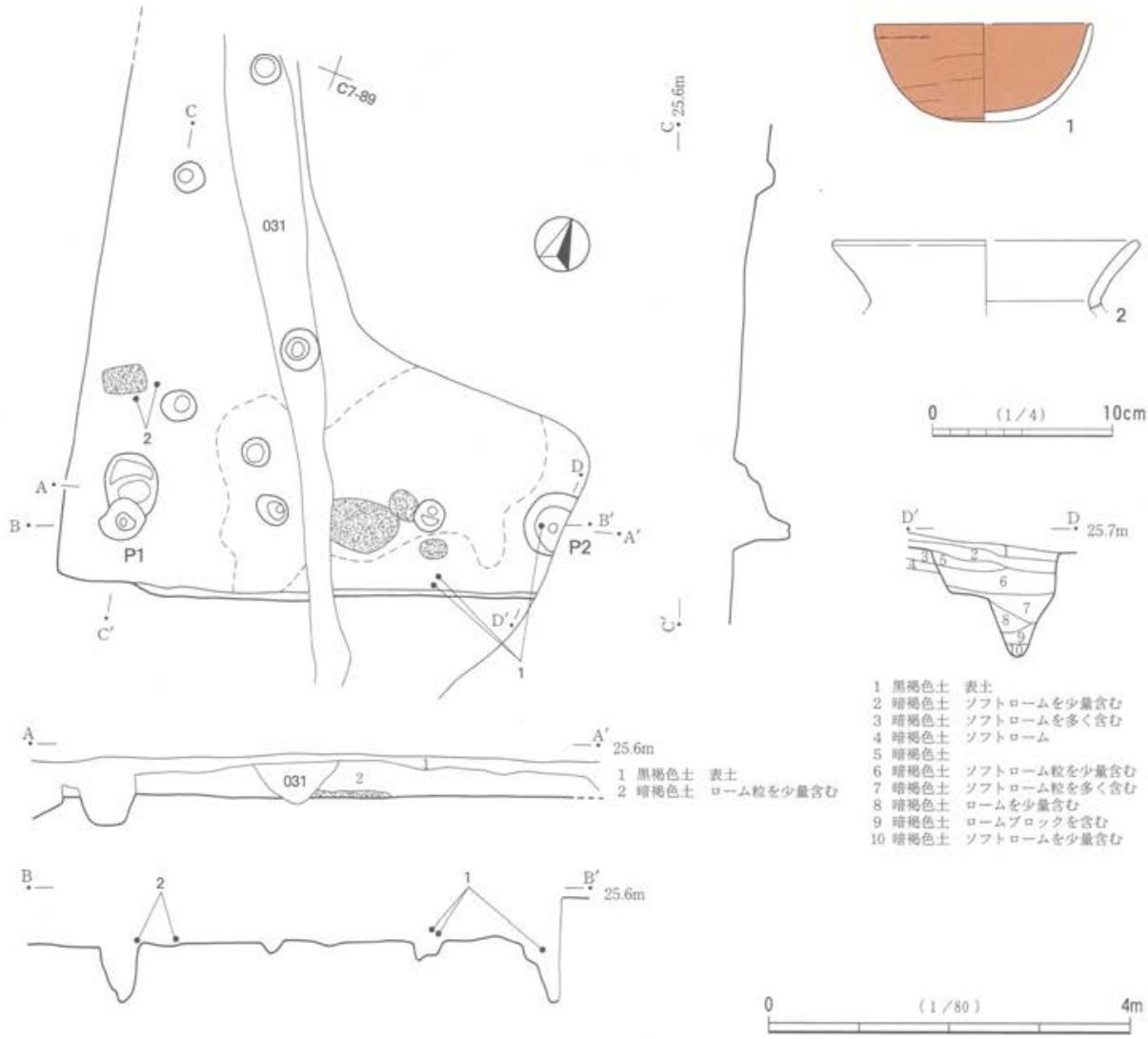
遺物は，北壁際を中心に，須恵器杯・蓋，土師器杯などが出土している。４は須恵器小型椀の底部であろう。北東コーナー付近の覆土中層から出土した。６は土師器杯で，内面に放射状の暗文が施されている。北西コーナー付近の覆土中層からの出土である。

036（第94図，図版11)

調査区の北東，Ｃ７グリッドに位置する。平面形態が判然としなかったため，サブトレンチを設定し精査した。その結果，明瞭な床面を検出し，住居跡であることが判明した。東側は大半が調査区域外にかかり，北壁と西壁は立上がりは判然としない。南壁は比較的明瞭であるが，南コーナー付近は保存樹木のため未調査である。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は現存で2.3mである。推定で一辺7m前後の比較的大型の住居跡であろう。南壁は垂直に掘込まれ，壁高は25cmである。床面は平坦で，全体にやや軟弱である。壁溝は検出されていない。床面から数基のピットを検出したが，このうち主柱穴は配置からみて，P1(径40cm×46cm，深さ38cm)とP2(径36cm，深さ36cm)である。覆土には暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器椀・甕などが出土している。１は内外面が赤彩された椀である。底部は平底を意識してつくられている。南壁際やP2内から出土した。２は甕の口縁部である。



第94図　036及び出土遺物

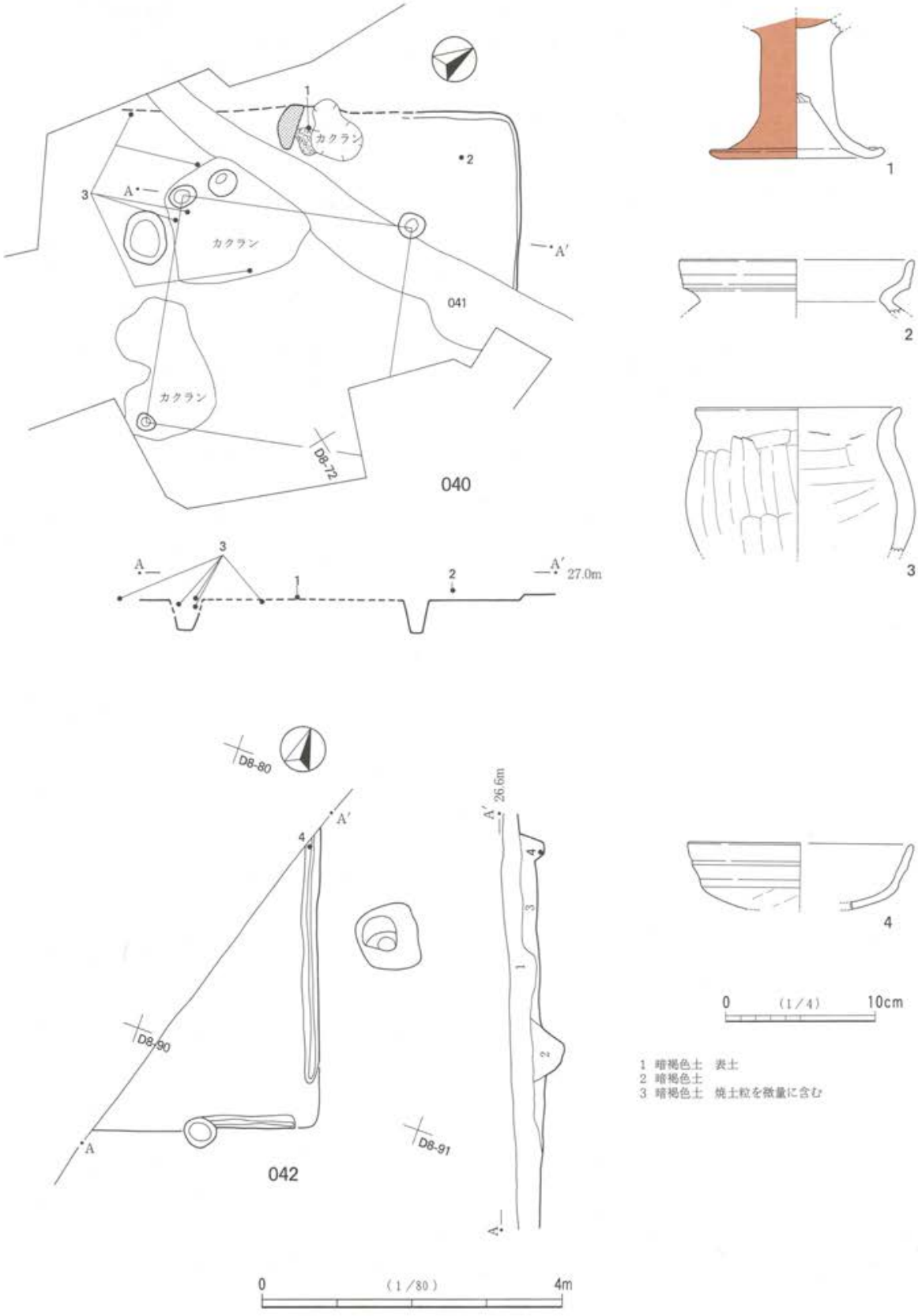
040（第95図，図版40）

調査区の北東，Ｄ８グリッドに位置する。東壁側は調査区域外にかかり，上面は後世に整地されている。溝状遺構041や攪乱により床面の一部も削平されているが，壁やカマドの一部と２本の柱穴を検出した。

平面形態は方形と考えられ，壁の一部とカマドや柱穴から推定して，規模は一辺6m前後と思われる。主軸方位はN-58°-Wである。壁は北コーナー付近が一部遺存し，壁高は現存で3cm～10cmである。床面は整地されており，本来の状態は不明である。床面からは数基のピットを検出したが，このうち主柱穴はP1（径30cm×35cm，深さ38cm）・P2（径30cm×35cm，深さ41cm）・P3（径23cm×26cm，深さ35cm）である。覆土は，暗褐色土を主体に黄褐色土や茶褐色土が混在する。

カマドは西壁に設けられているが，大きく削平されており，左袖部の一部と火床を検出した。火床面は平坦であるが，よく被熱されていた。カマド内からは１の高杯の脚部が正位で出土した。

出土遺物は多く，須恵器蓋，土師器杯・高杯壺・甕などが出土しているが，本遺構に伴わないものも含んでいる。１の高杯の脚部は，外面が赤彩されている。２は壺の口縁部で，小片であるが直立気味に立上がる短い口縁部をもつ。北コーナー付近の覆土下層からの出土である。



第95図　040，042及び出土遺物

042（第95図）

調査区の北東，Ｄ８グリッドに位置する。大半が調査区域外にかかり，調査した範囲も上面を床面まで削平されており，南東コーナー付近の壁溝が部分的に遺存しているにすぎない。

平面形態は方形になると考えられるが，規模や柱穴等は不明である。壁溝（幅20cm，深さ5cm前後）は，北東壁側で3.3m，南東壁側では1.1mが遺存している。南東側の壁溝と重複しているピット（径46cm，深さ93cm）は，すでに削平されたほかの竪穴住居跡の柱穴であった可能性もある。

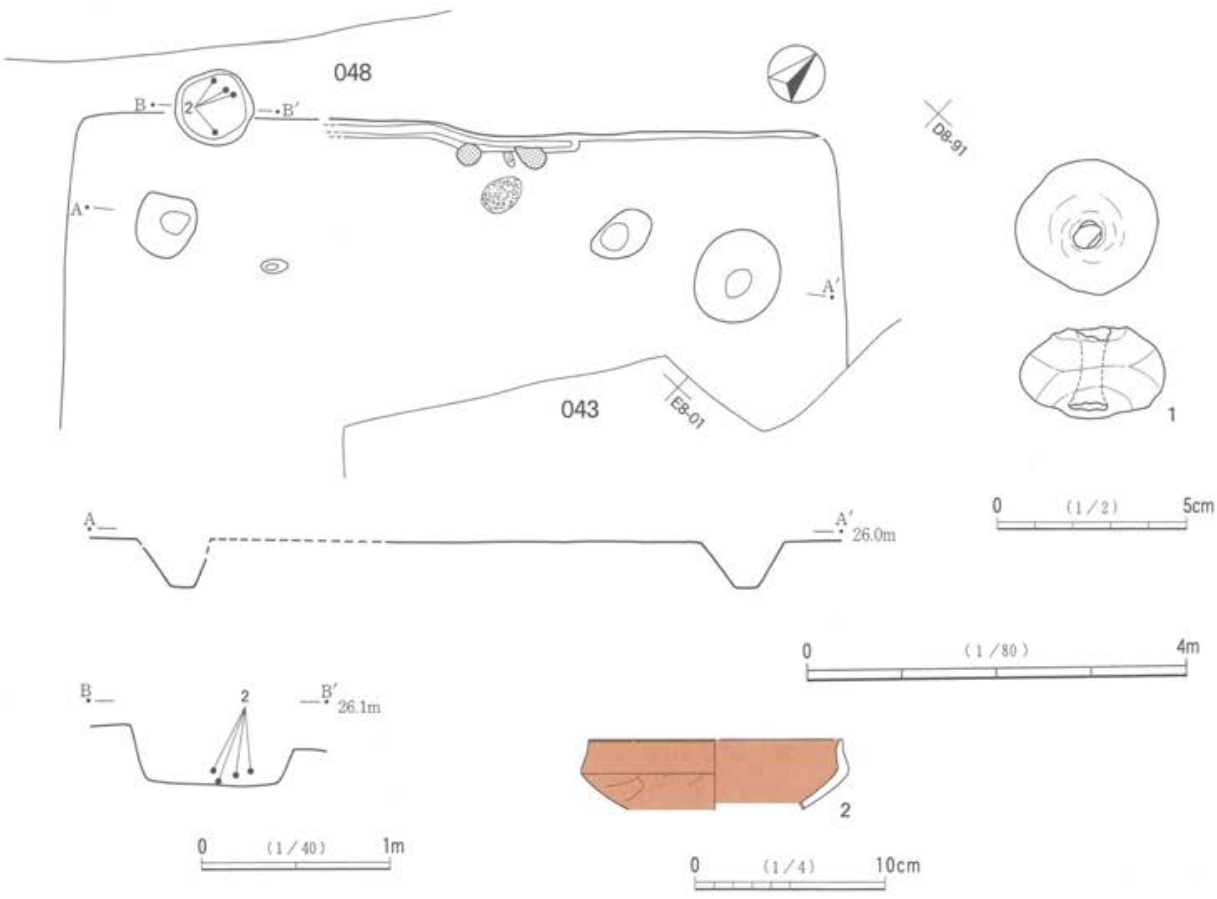
遺物は，４の土師器杯が北東側の壁溝内から出土した。

043，048（第96図，図版40・60）

調査区の北東，Ｅ７・Ｅ８グリッドに位置する。043は，南東側は調査区域外にかかり，調査できた範囲も整地のため上面をほとんど失われており，カマドの下部や壁・柱穴の一部のみの検出である。048は，本来は043を削平しているほかの住居の貯蔵穴であるが，整地されているため詳細は不明である。

043の平面形態は方形になると考えられる。わずかに遺存している北壁から，一辺８m前後の規模が推定される。北壁は7cm前後の高さで遺存している。カマドの前面に残る床面は，平坦でやや堅緻である。カマドの南西側に壁溝が一部遺存しているが判然としない。床面から検出されたピットのうち，主柱穴はP1（径88cm×104cm，深さ54cm）とP2（現存径18cm×28cm，深さ67cm）であろう。P2は攪乱のため，上面が削平されている。

遺物は，土師器甕片などがわずかに出土しているが，図示できたのは１の土玉である。扁平な形態で，径3.8cm・高さ2.4cm・孔径5mm～8mmを測る。



第96図　043，048及び出土遺物

048は，円形の貯蔵穴(径80cm，深さ34cm)で，周囲は攪乱のため上面が削平されている。南東に位置しているP3(径62cm×66cm，深さ53cm)は，048が付設されていた竪穴住居跡の柱穴であった可能性がある。遺物は，覆土中層から土師器片などが出土した。２は土師器杯で，内外面が赤彩されている。

044（第97図）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。整地のため，上面がすでに削平されている。北西コーナー付近をわずかに検出できたが，大半は調査区域外である。

平面形態は方形になると考えられる。規模やカマド等の付属施設については不明である。北西コーナー付近の壁は5cm前後の高さで遺存している。東側に砂質粘土の集積があり，その下から硬化した床面が検出された。ピット(現存径70cm，深さ35cm)は，本住居に伴う柱穴であることも考えられる。

遺物は，土師器片がわずかに出土したが，図示できるものはない。

046（第97図，第17表，図版58・60）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。北西側が調査区域外にかかり，中央部を溝状遺構045に，南西壁側は整地のため，それぞれ削平されている。南西側で住居跡046Ａ(中期)と重複する。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は推定で5.6ｍである。主軸方位は概ねN-58°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は9cm～15cmで北東壁側がやや高くなっている。床面は，南西側が045により大きく削平されているが，そのほかの範囲は全体に堅緻である。壁溝は検出されていない。３本の主柱穴が検出された。このうち，P1(現存径86cm，深さ45cm)とP2(径100cm×104cm，深さ54cm)は，周辺部が削平されているが，柱の抜き取りにより上端が大きく開いている。P3(径66cm×78cm，深さ86cm)の南側に，炭化材が検出された。カマドは，調査区域外の北西壁に設けられたと考えられるが，詳細は不明である。覆土は，暗褐色土を主体に明褐色土が混在している。

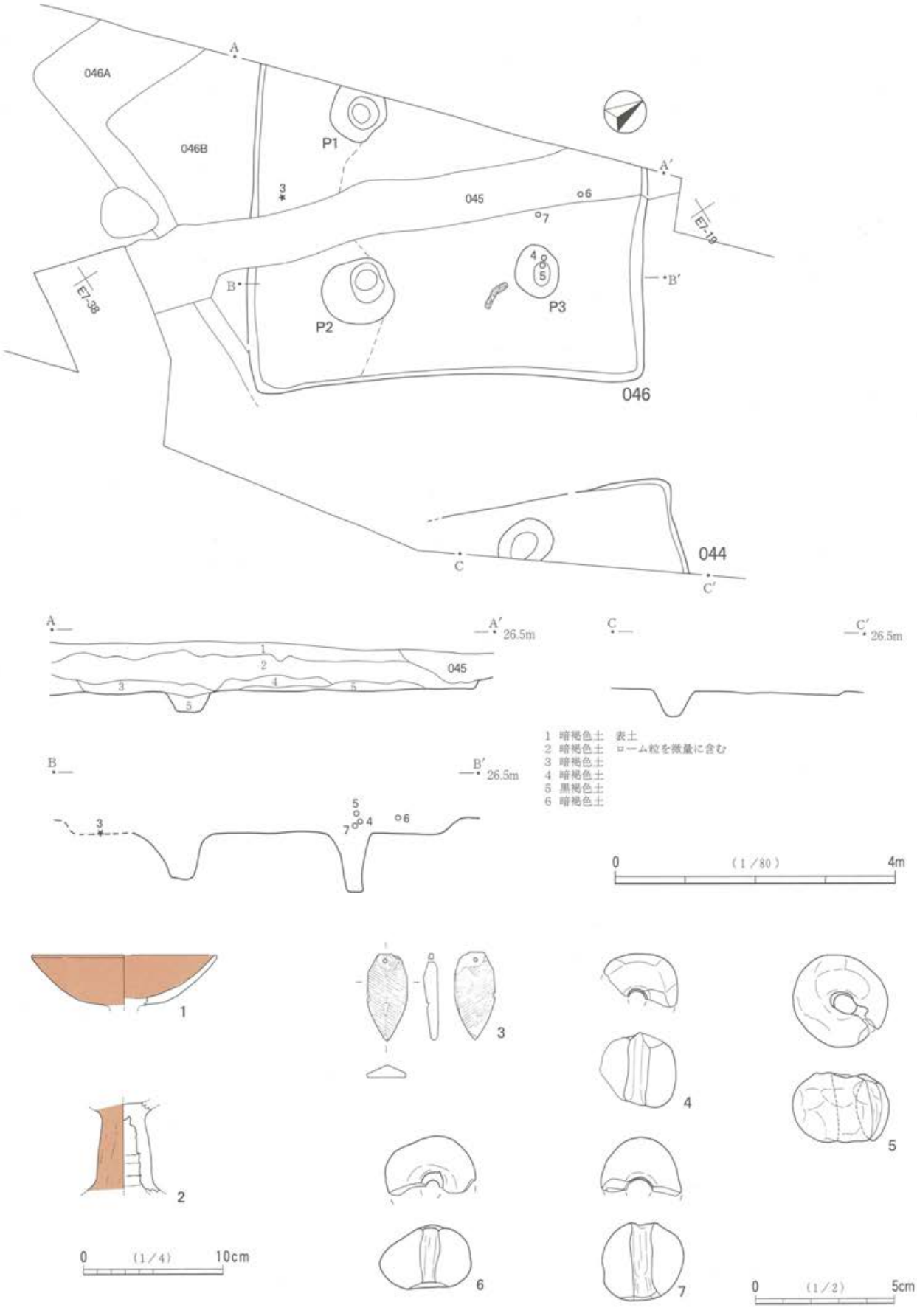
遺物の出土は比較的多く，土師器高杯，石製模造品(剣形)や土玉などが出土している。１・２は高杯の杯部と脚部である。ともに赤彩が施されている。３は滑石製の剣形品である。両面を研磨され，表面には鎬がつくられている。南西壁際の床面から出土した。４～７は土玉である。P3周辺の床面や覆土中からの出土である。５以外は1/2の遺存である。５は径3.5cm・高さ2.5cm・孔径7㎜～10㎜を測る。

054（第98図，第18表，図版11・40・58・60）

調査区の北東，Ｄ７グリッドに位置する。住居中央を南北方向に溝状遺構055に，南東床面を平安時代の有天井土坑051に，それぞれ削平されている。西壁と南壁の一部は，保存樹木のため未調査である。

平面形態は方形を呈し，規模は5.5ｍ×5.8ｍを測る。主軸方位はN-9°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は7cm～33cmを測り，西側にすすむに従って低くなっている。床面は平坦で，カマド前面から南壁にかけての範囲が踏み固められて堅緻である。壁溝(幅12cm～22cm，深さ5cm～9cm)は，東壁中央から北壁の東側にかけて部分的に巡っている。４本の主柱穴が本来は配置されていたが，P3は051内に底面を残してほとんど削平されている。検出された主柱穴(P1径80cm×105cm・深さ96cm，P2径79cm×90cm・深さ73cm，P4径80cm×102cm・深さ93cm)はいずれも掘方上部が大きく開いており，柱を抜き取った痕跡と考えられる。方形の貯蔵穴(45cm×63cm，深さ47cm)は，カマドの東側に付設されている。埋土は，黒褐色土と茶褐色土である。住居覆土は，黒褐色土を主体に暗黄褐色土が壁際に堆積している。

カマドは，半円形に壁を15cm掘り込んで北壁中央に設けられている。直角に立上がり，煙道部を形成する。天井部は崩落し，両袖部の下部が遺存している。袖部の内壁は，部分的に被熱のため赤化していた。



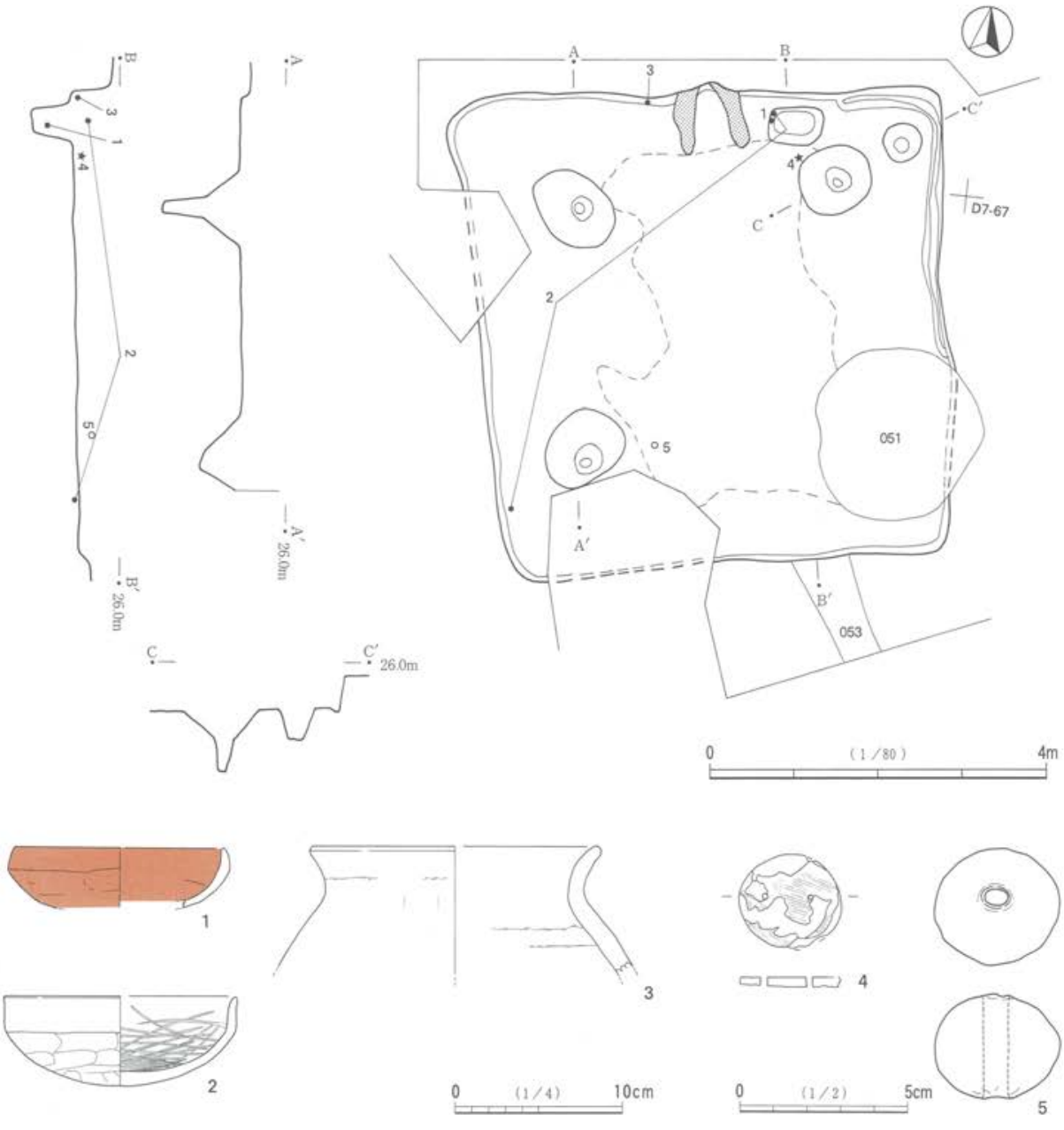
第97図　044，046及び出土遺物

火床は平坦で，底面の被熱は弱い。

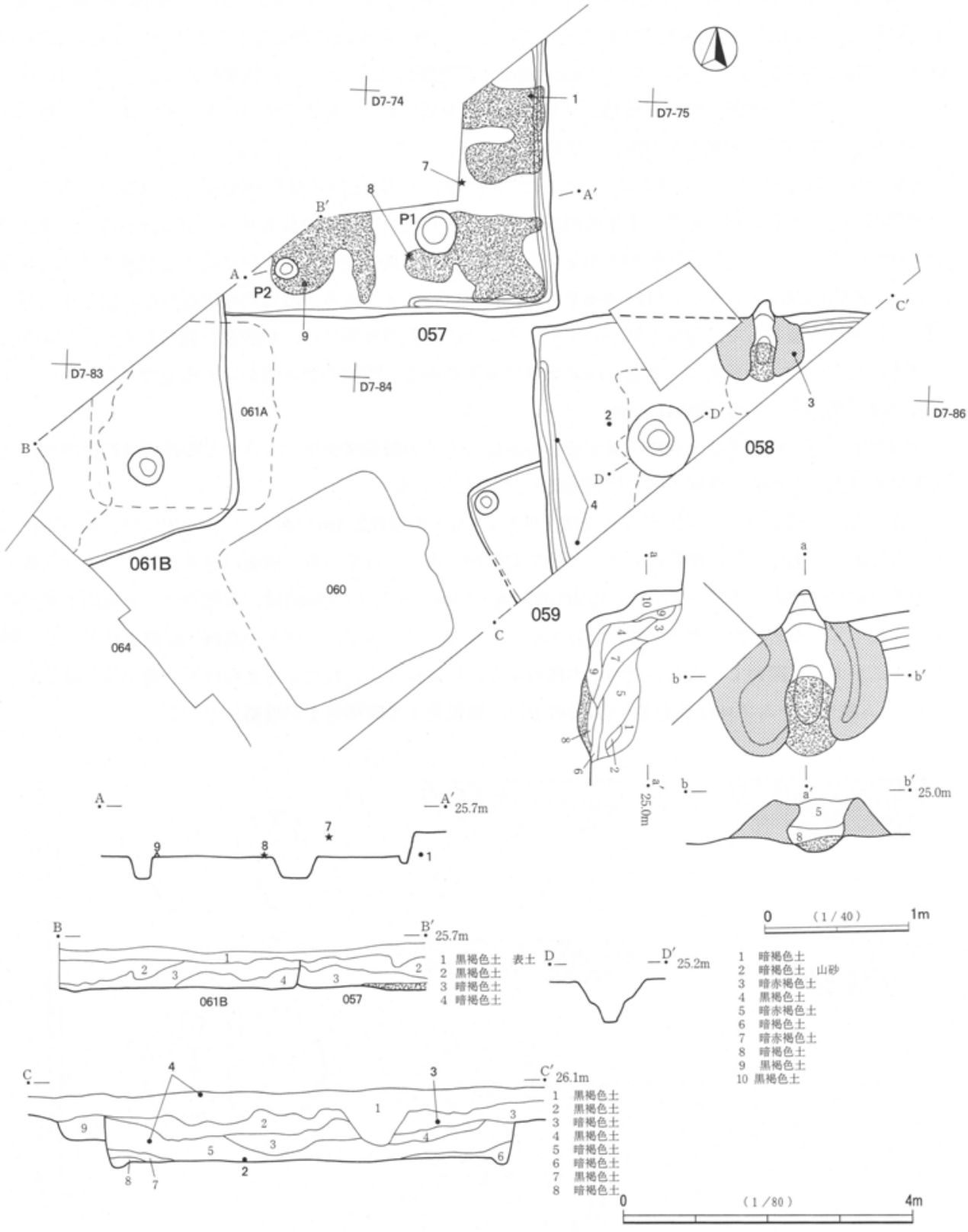
遺物は，住居北東側から南西側にかけての範囲から，土師器杯・甕や土玉，石製模造品(有孔円板)などが出土している。１・２は杯である。１は内外面が赤彩され，貯蔵穴内から出土した。３の甕はカマド左袖部脇の壁際床面からの出土である。４は滑石製の有孔円板で，表面が部分的に剥離している。P2と貯蔵穴の中間の床面から出土した。５は土玉である。径3.7cm・高さ3.1cm・孔径8mmを測る。

057（第99・100図，第17表，図版58・59・61）

調査区の北東，Ｄ７グリッドに位置する。南東コーナー付近を中心に検出したが，北側から西側の大半が，調査区域外や保存樹木のため未調査である。南壁の西側は住居跡061Ｂに削平されている。



第98図　054及び出土遺物



第99図　057，058，059，061B

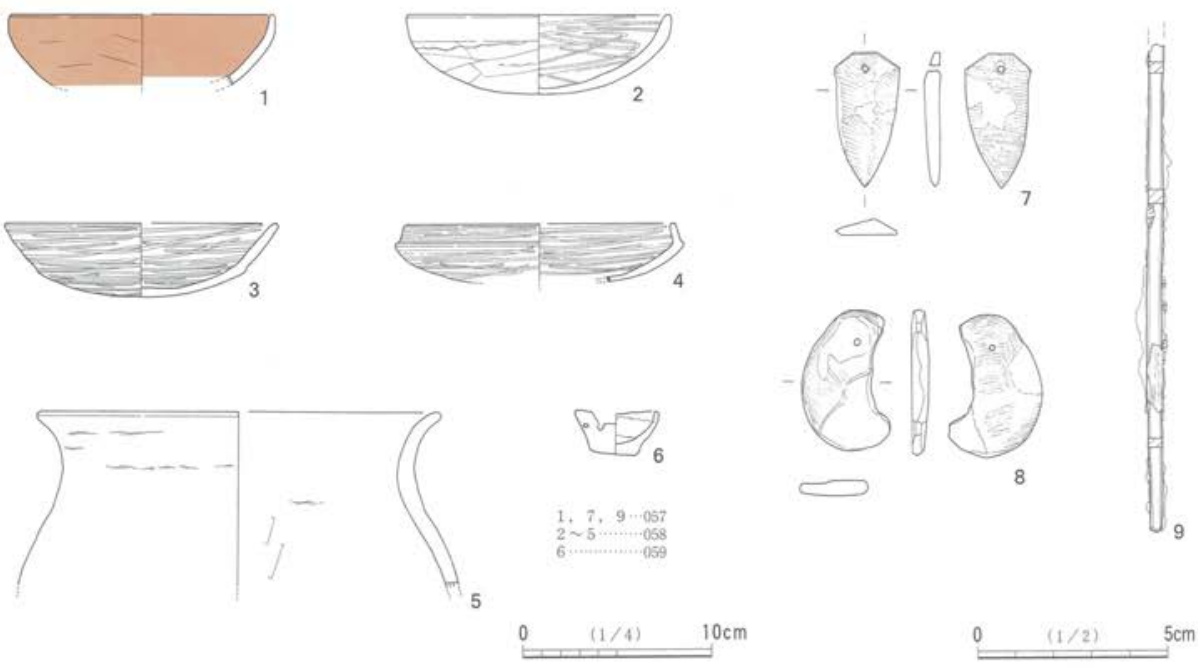
平面形態は方形を呈し，検出できたのは東壁長3.7m・南壁長4.6mである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は33cm前後である。床面は平坦で，南西側で硬化面がわずかに検出された。壁溝(幅20cm，深さ4cm前後)は，東壁から南壁東側にかけて巡っている。床面から検出されたピットのうち，主柱穴はP1(径55cm×62cm，深さ30cm)である。P2(径30cm×33cm，深さ26cm)は，出入り口施設に伴うピットの可能性がある。床面には広い範囲に焼土が堆積しており，火災を受けたことによるものであろう。覆土は，黒褐色土を主体に暗褐色土や赤褐色土が混在している。

遺物の出土は比較的多いが，図示できたのは土師器杯，石製模造品(勾玉・剣形品)，鉄製品である。1は内外面が赤彩された杯である。東壁際の床面から出土した。7の剣形品と8の勾玉は滑石製で，両面はよく研磨されている。勾玉は比較的大型品であるが，腹部の抉りが弱く，半円形に近い形態である。長径3.7cm，腹部径0.4cm×1.9cm，孔径1.8mmを測る。重量は5.27gである。P1周辺の床面からの出土である。剣形品は明瞭な稜をもち，覆土上層から出土した。9の棒状の鉄製品は，紡錘車の軸であろう。上部を欠損する。現存長12.9cmを測り，断面(2mm×4mm)は方形である。P2周辺の床面からの出土である。

058，059（第99・100図，図版11・40）

調査区の北東，D7グリッドに位置する。南東側の大半が調査区域外で，カマドの西側は保存樹木のため未調査である。西側で時期不明の住居跡059を削平している。

平面形態は方形を呈し，検出できたのは北壁長4.7m・西壁長3.4mである。主軸方位はN-6°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は46cm～59cmで北壁側が高くなっている。床面はほぼ平坦で，カマド周辺から中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅10cm～18cm，深さ5cm～9cm)は，北壁のカマド東側と西壁の一部に巡っている。検出できた主柱穴(径98cm，深さ62cm)は1本で，カマドの南西に配置されている。掘方の上部が大きく開いていることや埋土の観察から，柱は抜き取られたと考えられる。覆土は，暗黄褐色土(ローム粒やロームブロックを多く含む)の上に，黒褐色土や暗褐色土が堆積している。



第100図　057，058，059出土遺物

カマドは北壁に設けられている。壁を24cm掘込み，直角に立上がる煙道部を形成している。天井部は崩落していたが，両袖部が遺存していた。袖部の内壁は被熱のため赤灰色に変色している。火床は7cm皿状に掘窪められ，底面はよく被熱し焼土が堆積していた。

遺物は比較的多く，土師器杯・甕などが床面や覆土中から出土している。２～４は杯である。３・４は内外面はよくミガキが施されている。２は床面から，３・４は覆土中層から上層にかけて，それぞれ出土した。５の甕は覆土中からの出土である。

059は，南側や東側が058の削平や調査区域外のため，調査できたのは南西コーナー付近の一部である。平面形態は方形を呈し，検出できたのは北壁長1.1m・西壁長1.7mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は6cmである。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。柱穴や壁溝は，調査範囲からは検出されていない。ピット(径33cm，深さ35cm)が北コーナーに位置しているが，本住居に伴うかどうかは判然としない。遺物は，土師器片が出土したが，図示できたのは６の手捏ねである。体部上面の２か所に小孔をもつ。

061B（第99図）

調査区の北東，Ｄ７グリッドに位置する。南東コーナー付近の調査で，大半は調査区域外である。南東側上面を平安時代の住居跡061Aに，南西側は溝状遺構064にそれぞれ削平されている。

平面形態は方形になると考えられ，検出できたのは東壁長2.6m，南壁長1.8mである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は現状では22cmであるが，セクションでは40cmの高さが確認できた。床面は平坦で，西側に硬化面が遺存しており，住居中央部から壁際まで広がっていたと思われる。壁溝は確認されていない。主柱穴と考えられるピット(径48cm×52cm，深さ63cm)を１本検出した。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が混在しながら堆積している。

遺物は土師器片がわずかに出土したが，図示できるものはなかった。

066A（第101図，図版11・40）

調査区中央やや北東寄り，Ｅ６グリッドに位置する。北西コーナー付近は調査区域外，中央部と西壁南側が保存樹木のため未調査である。住居跡066Ｂ(前期)と重複し，069Aに北側を削平されている。上面を整地されており，カマドも砂質粘土の範囲が確認できた程度で，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形を呈し，規模は4.85m×5.60mを測る。カマドは東壁に設けられ，主軸方位はE-4°-Nである。現存の壁高は5cm～10cmである。床面は凹凸があり，硬化面はカマドの前面を中心に広がっている。壁溝(幅12cm～20cm，深さ3cm前後)は，南壁と東壁の南側に巡っている。床面から数基のピットを検出したが，主柱穴と考えられるのは，P1(径24cm，深さ52cm)とP2(径53cm×67cm，深さ32cm)である。P3(径27cm×30cm，深さ38cm)はカマドの対面に位置しており，出入り口施設に伴うピットであろう。カマドからは離れているが南東コーナー付近から，貯蔵穴と思われる楕円形の土坑(径58cm×70cm，深さ36cm)が検出された。遺構確認面から焼土や炭化材が床面から検出されており，火災を受けた住居である。

カマドは東壁に設けられているが，すでに大きく削平されており，砂質粘土や焼土が残存している程度で詳細は不明である。上面からは土師器甕片が出土している。

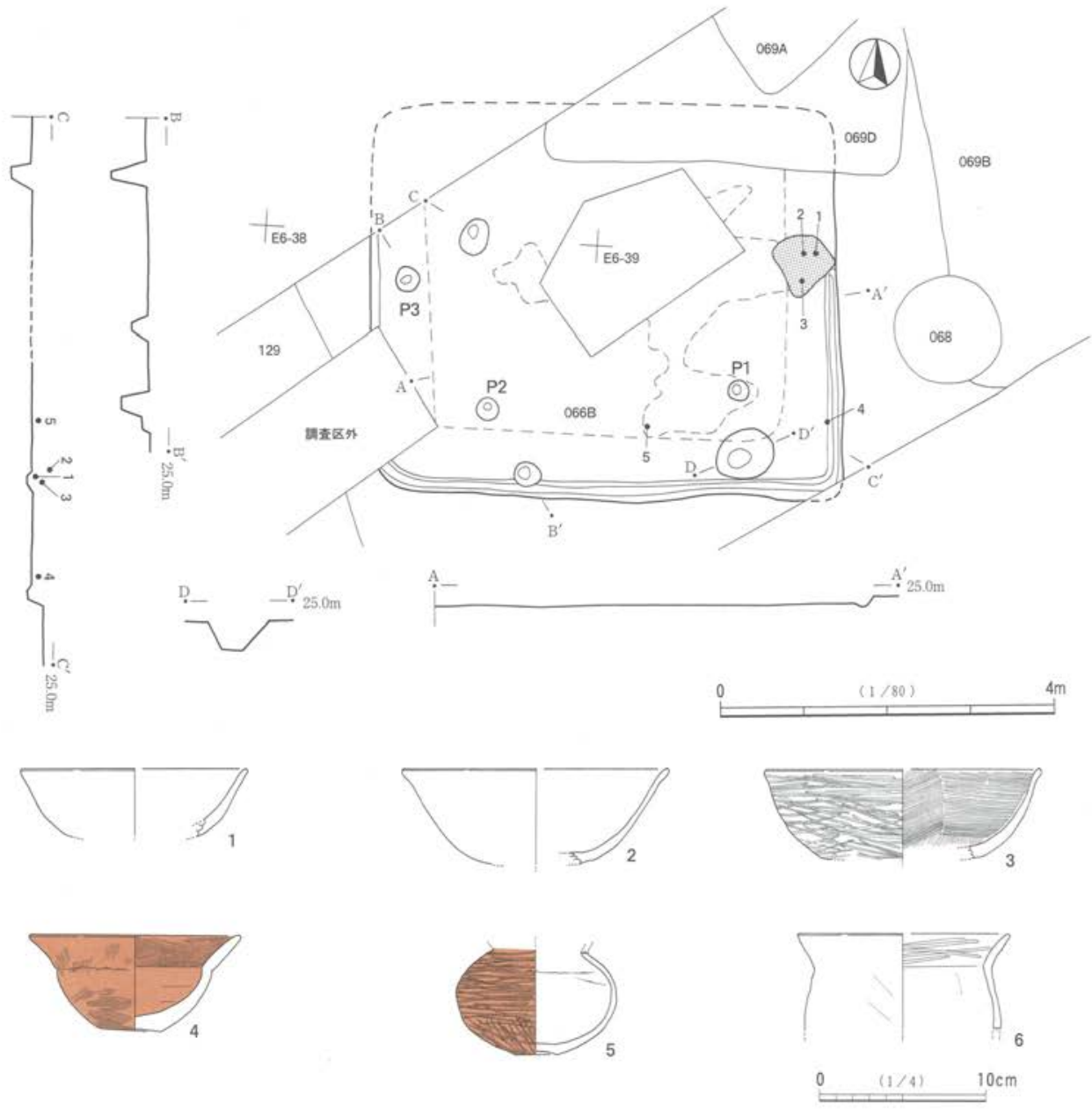
出土遺物は重複する066Ｂと混在しており，ここでまとめて説明する。１～３は土師器杯である。３は内外面がよくミガキが施されている。２・３はやや上層からの出土である。４は内外面が赤彩された鉢である。床面から出土しているが，066Ｂに伴う遺物であろう。５は坩である。体部外面が赤彩されている。

069A（第102・103図，第18表，図版12・40・58・60）

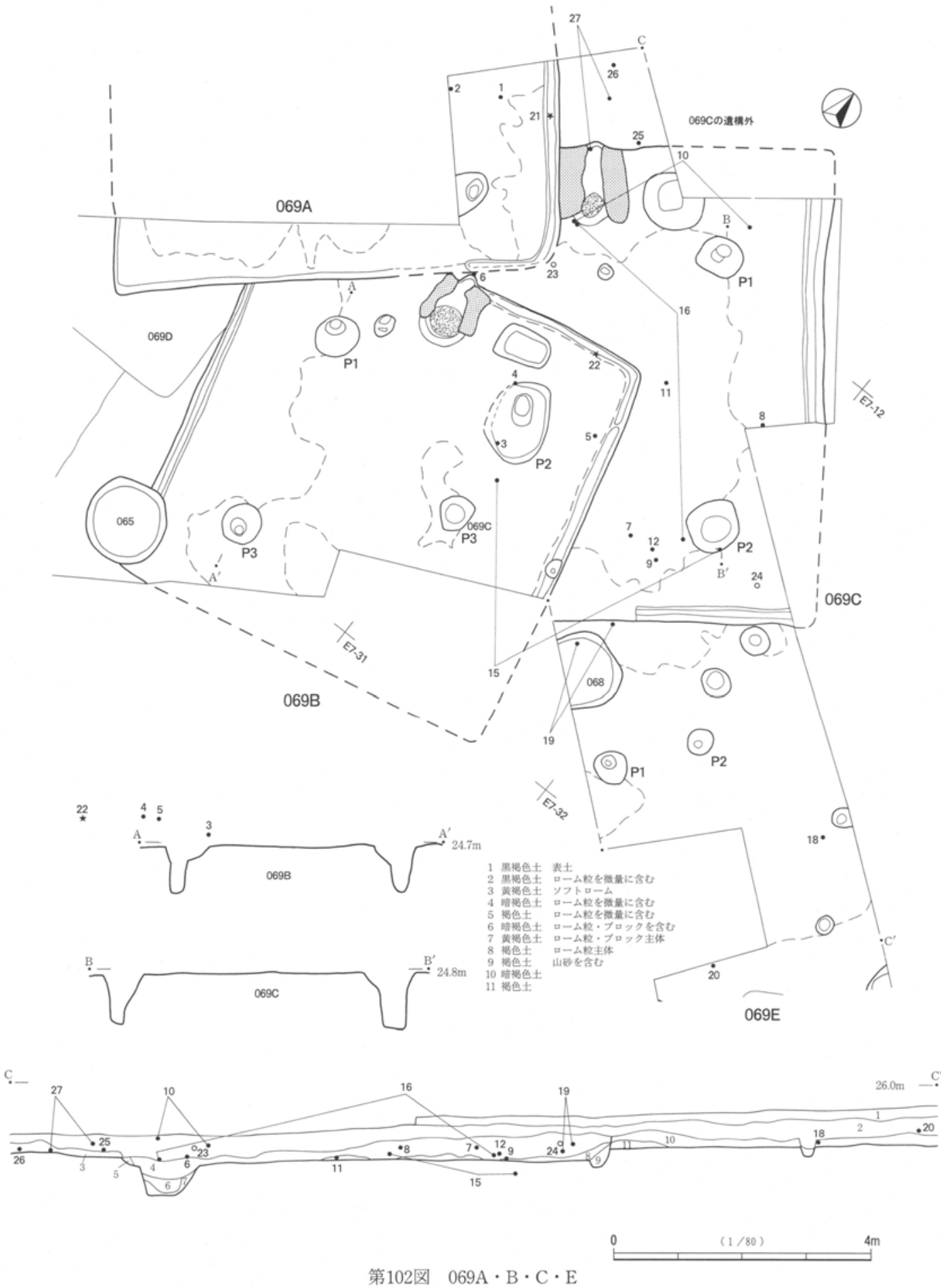
調査区中央やや北東寄り，Ｅ６グリッドに位置する。069Ａ～069Ｅがほかの遺構と重複しながら位置している。北西側の大半は調査区域外にかかるため，南東壁側の一部の調査を行った。住居跡069Ｄ（前期）と069Ｂ・069Ｃを削平している。

平面形態は方形を呈し，南壁長は6.8mを測る。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存のよい東壁の北側では30cm前後である。床面は凹凸があり，南壁や東壁の壁際まで硬化面が広がっている。壁溝（幅14cm～18cm，深さ2cm前後）は，南壁の西側から東壁にかけて巡っている。主柱穴（現存径60cm，深さ79cm）を１本検出したが，南西側が調査区域外のため1/2を調査した。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

遺物は，須恵器器杯・蓋や石製模造品（有孔円板）などが出土している。１は須恵器杯で，平坦な底部をもつ。覆土上層からの出土である。２は須恵器蓋のつまみである。床面から出土した。21は滑石製の有孔円板で，表面を研磨されている。東壁下の壁溝内からの出土である。



第101図　066Ａ及び出土遺物



第102図　069A・B・C・E

069B（第102・103図，第18表，図版12・58）

住居中央部は，保存樹木のため未調査である。北壁西側は069Aに，南西コーナー付近を065土坑（時期不明）にそれぞれ削平され，南側は調査区域外にかかる。北東側で069Cを削平している。

平面形態は方形を呈し，規模は東西長6.4m，南北長は推定で6.3mである。主軸方位はN-13°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は12cm～26cmで，東側が全体に低くなっている。床面は平坦で，住居中央のカマド前面から南壁方向にかけての範囲に硬化面が広がっている。壁溝（幅12cm～23cm，深さ4cm～9cm）は，調査範囲内では全周する。主柱穴のうち，南東の１本を除く３本が検出された。P1（径63cm×74cm，深さ79cm）とP3（径60cm×65cm，深さ75cm）の掘方上部は小さく開いているが，P2（径91cm×132cm，深さ77cm）の掘方上部は南東側に大きく開き，いずれも柱を抜き取った痕跡と考えられる。P1周辺には焼土や炭化物が堆積しており，柱を抜き取った後に不用な部材を焼却ことが考えられる。P3の周囲には，抜き取った際の残土であるロームブロックが堆積していた。カマドの東側には，方形の貯蔵穴（55cm×85cm，深さ48cm）が設けられている。覆土は，暗褐色土の上に黒褐色土が堆積し，黄褐色土が混在している。

カマドは，北壁中央に設けられているが，煙道部側を069Aに削平されている。現存では壁を15cm掘込み，直角に立上がる煙道部を形成している。天井部はすでに崩落し，両袖部が遺存している程度である。火床は皿状に8cm掘窪められ，底面は被熱され焼土が堆積していた。

遺物は土師器などが出土したが，図示できたのはP2周辺の覆土中から出土した土師器杯（３）・高杯の脚部（４）・甕の口縁部（５）などである。22は滑石製の有孔円板で，壁際の覆土から出土した。

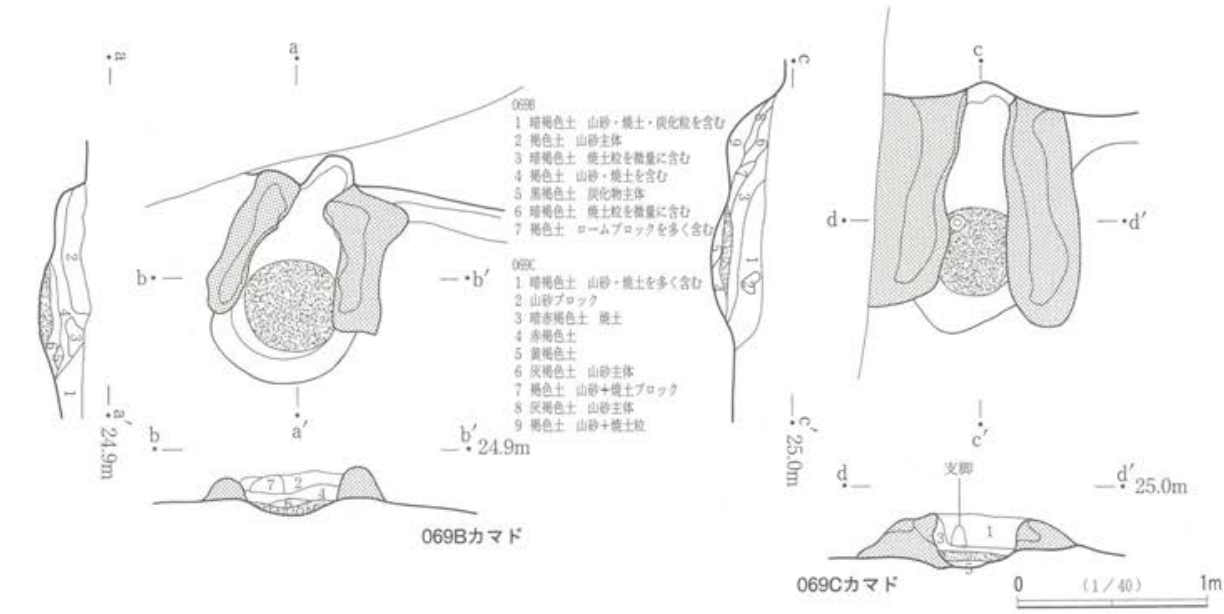
069C（第102～104図，図版12・40・41）

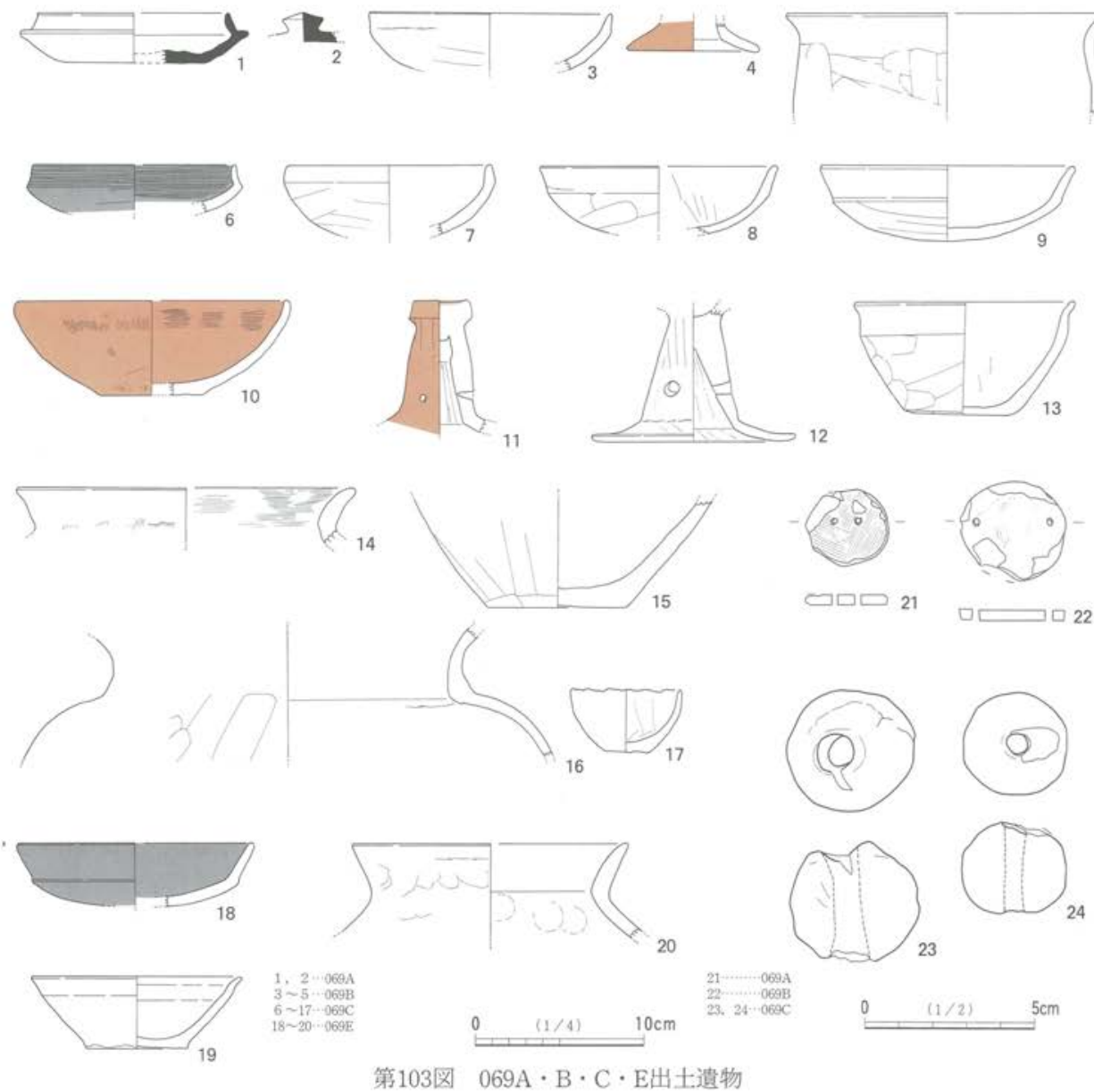
住居の北・東コーナー付近は調査区域外にかかっている。北西側と南西側は069A・069Bに削平されており，調査できたのはカマドから南東にかけての範囲である。

平面形態は方形を呈し，規模は主軸方向の長さで7.5mを測る。主軸方位はN-40°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は比較的遺存のよい北東壁で30cm～37cmである。床面は凹凸があり，主柱穴で囲まれた範囲に硬化面が広がっている。壁溝（幅15cm～25cm，深さ2cm～8cm）は，北東壁と南東壁の調査された範囲では巡っているが，北西壁のカマド北東側では検出されていない。２本の主柱穴（P1径65cm×73cm・深さ78cm，P2径86cm×91cm・深さ88cm）は東側の床面に配置され，P3（現存径50cm×60cm，深さ78cm）は重複する069Bの床面から検出された。カマドの北東側には，不整方形の貯蔵穴（88cm×96cm，深さ55cm）が設けられている。覆土は，黒褐色土と暗褐色土（ローム粒を多く含む）が堆積している。

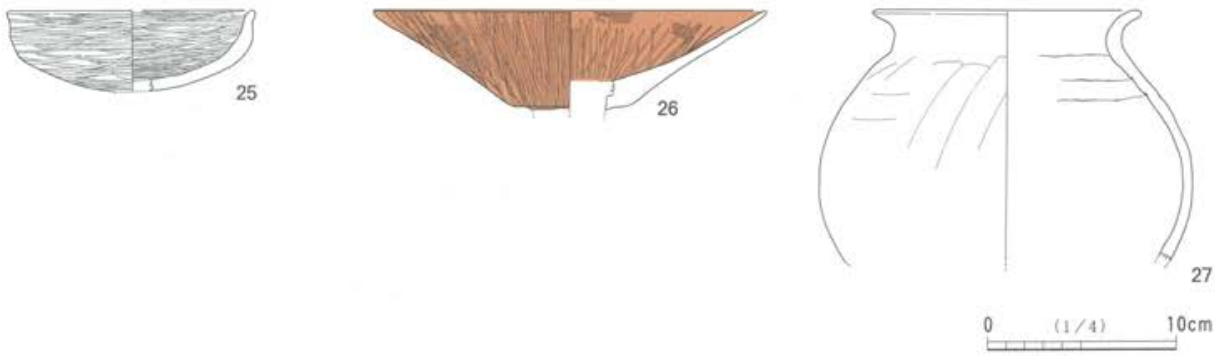
カマドは北西壁に，壁を12cm掘込んで設けられ，緩やかに立上がる煙道部を形成している。天井部は崩落し，左袖部は069Aに削平されていたが，遺存状態は比較的良好である。袖部は砂質粘土と黒褐色土で構築され，内壁はよく被熱されて赤灰色に変色していた。火床は7cm掘窪められ，焼土が5cmの厚さに堆積し，底面は被熱していた。カマド内からは，支脚が出土している。

出土遺物は多く，土師器杯・高杯・鉢・甕・ミニチュア土器や土玉などが出土している。６～９は土師器杯である。６は内外面が黒色処理されている。10は大型の杯で，内外面が赤彩されている。刷毛目がわずかに残る。６～９は覆土下層，10は覆土上層から出土した。11・12は高杯の脚部である。脚部の２か所にそれぞれ円形の透孔が穿たれているが，11は貫通していない。ともに床面直上からの出土である。13は鉢，14～16は甕である。17は鉢か椀のような形態のミニチュア土器である。ほぼ完形で，ナデで仕上げられている。23・24は土玉である。23は径3.8cm・高さ3.5cm・孔径8mm～12mm，24は径3.1cm・高さ2.7cm・





第103図　069A・B・C・E出土遺物



第104図　069C遺構外出土遺物

孔径6㎜を測る。ともに覆土中層からの出土である。25～27は，遺構外のカマドの北側から出土した土師器である。本遺構には伴わないが，まとめて記載した。

069E（第102・103図，図版12・41）

住居の北東と南東側は，調査区域外や保存樹木のため未調査である。北西側は069Cに，南東側は063（中期）と重複する。北西端では平安時代の土坑068に，北西側上面を平安時代の住居跡067・070に，それぞれ床面を削平されている。上面は整地されており，硬化した床面の存在から住居であることが判明した。

平面形態・規模等や，カマドなどの施設は不明である。南東側で5cm程度の段差を確認したが，これが南東壁の下端に該当すると思われる。床面は平坦で，硬化面が北東から南西みかけて広がっている。壁溝は検出されていない。床面から数基のピットを検出したが，このうち柱穴と考えられるのは，P1（径51cm×54cm，深さ43cm）とP2（径40cm×45cm，深さ86cm）である。

遺物は，わずかに土師器片が覆土下層や中層から出土している。18は土師器杯で，内外面が黒色処理されている。20は甕の口縁部である。19は平安時代の土師器杯で，混入品である。

073（第105図，図版60）

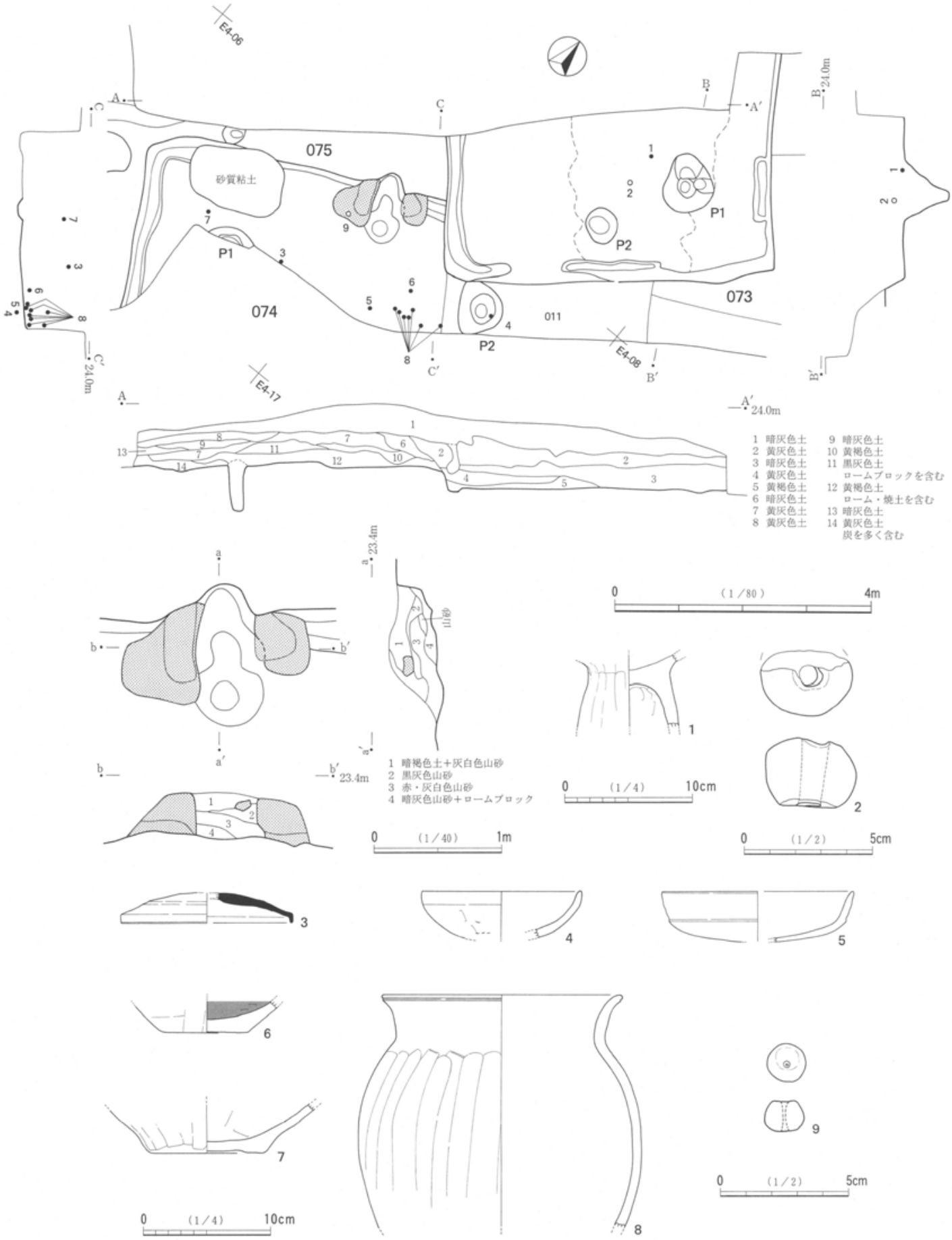
調査区の北西，Ｄ４グリッドに位置する。北西側が調査区域外にかかり，北西-南東方向に走る溝状遺構011に上面を削平されている。南西側では074と重複し，住居の南東側1/2の調査である。

平面形態は方形を呈し，南東壁長で5.2ｍを測る。調査範囲で，北東壁長3.3ｍ・南西壁長2.1ｍを検出した。主軸方位は概ねN-39°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は31cm～58cmと東側が高くなっている。床面は溝状遺構011に削平されているが，遺存している中央部の床面は，南東壁際まで堅緻である。壁溝（幅14cm～30cm，深さ4cm前後）は調査した範囲では全周する。P1（径78cm×92cm，深さ71cm）は北東側の主柱穴で，南西側の主柱穴は溝底を精査したが検出できなかった。P2（径52cm×59cm，深さ25cm）は，出入り口施設に伴うピットである。覆土は，暗褐色土を主体に暗黄褐色土が混在している。カマドは，北西壁に設けられていると考えられる。

遺物はわずかで，図示できたのは床面から出土した，土師器高杯（１）と土玉（２）である。１は高杯の脚部である。２の土玉は1/2の遺存で，径3.5cm・高さ2.7cm・孔径10㎜を測る。

074（第105図，図版41）

調査区の北東，Ｅ４グリッドに位置する。南側は調査区域外で，北東側では073と重複している。北側から西側では075を削平している。調査は北壁中央から南西側にかけての範囲である。



第105図　073，074，075及び出土遺物

平面形態は方形を呈し，検出できたのは北壁長4.65m・西壁長2.5mである。主軸方位は概ねN-27°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存の比較的良好な西壁で12cm～18cmである。床面は軟弱で凹凸がある。壁溝(幅15cm～25cm，深さ2cm～6cm)は，東壁から北壁にかけて一部巡っている。調査範囲からは主柱穴が２本検出された。P1は2/3が調査区域外にかかるため，詳細は不明である。P2(径68cm×84cm，深さ42cm)は不整円形を呈し，埋土中から４の土師器杯が出土した。北壁の西寄りの壁際には，投棄された赤灰色に変色した砂質粘土が堆積している。

カマドは，北壁に設けられている。壁を50cm大きく掘窪め，煙道部は直角に立上がる。天井部は崩落していたが，両袖部が遺存していた。袖部は，黄灰色粘土の土台の上に砂質粘土で構築している。火床は4cmほど浅く掘窪められ，底面の被熱は弱い。

遺物は，土師器杯・甕や玉類などが出土している。４・５は杯である。５はカマド前面の床面から出土した。６～８は甕である。８はカマド前面の床面や覆土中層から散在して出土している。３の須恵器蓋は覆土上面からの出土で，混入品であろう。９は土製の玉である。黒色を呈し，径1.1cm・高さ1.2cm・孔径1mm～3mmを測る。カマド左袖の上面から出土した。

075（第105図）

074の北側から西側にかけての範囲に，軟弱な床面と柱穴が検出された。住居跡の範囲は，遺構の重複や南北の調査区域外のため，詳細は不明である。北側で検出された柱穴(現存径36cm，深さ73cm)の住居内での配置は判然としない。カマド等の施設は検出されていない。

遺物は，土師器甕などがわずかに出土しているが図示できるものはない。

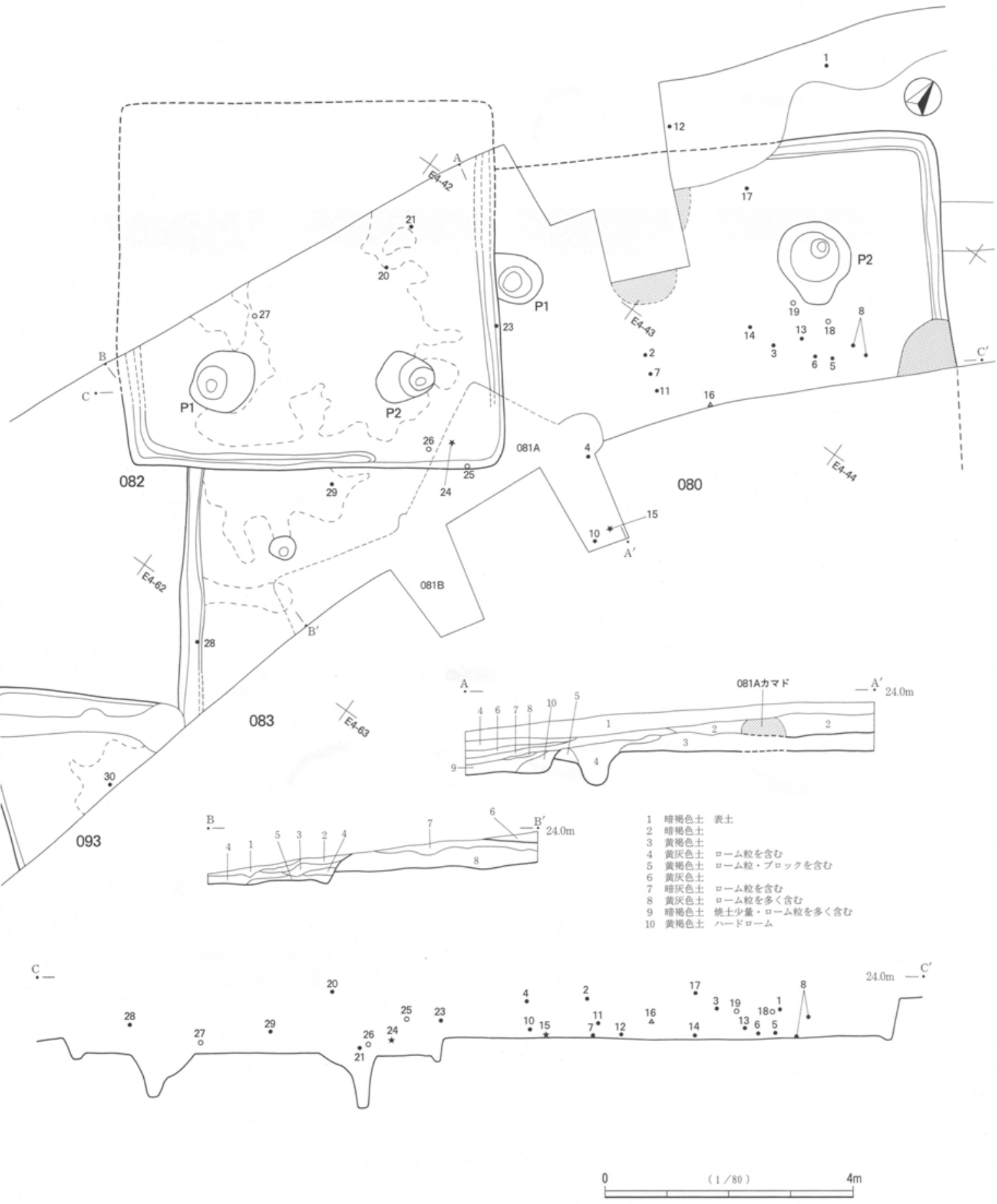
080（第106・107図，第18表，図版12・41・58・60）

調査区の北西，Ｅ４グリッドに位置する。南東側の大半は調査区域外にかかり，北西壁西寄りは保存樹木のため未調査である。南西側は，082と平安時代の住居跡081Ａに削平され，壁は不明瞭である。

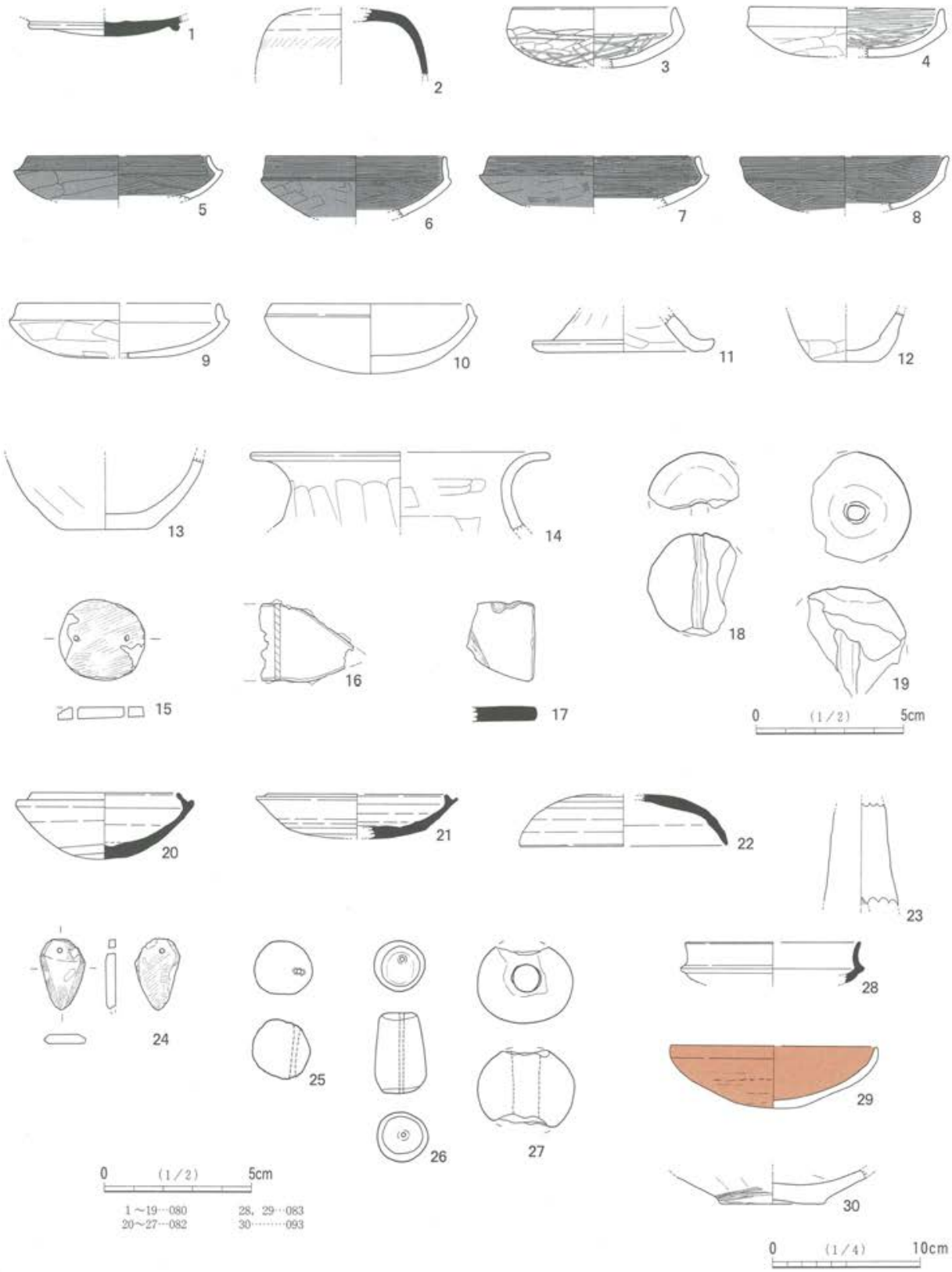
平面形態は方形を呈し，北東壁長は推定で4.4mである。主軸方位はN-42°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は比較的遺存の良い北東壁で45cmである。床面は平坦で，軟弱である。壁溝(幅15cm～21cm，深さ7cm～12cm)は，調査範囲内では全周する。主柱穴は２本検出され，このうちP2(径122cm×131cm，深さ113cm)は，掘方上部の径が大きく柱を抜き取った可能性もある。P1(現存径82cm，深さ75cm)は，上部の南西側が082に削平されている。北東壁には砂質粘土が検出されているが，これは上部に位置する住居のカマドであろう。覆土は，暗黄褐色土や暗褐色土・黄灰色土が堆積している。

カマドは，北西側の未調査区域周辺に堆積している砂質粘土からみて，北西壁に設けられていたと考えられる。本体は保存樹木の下に位置しており，詳細は不明である。

遺物は，床面や覆土中から第107図１～19の須恵器杯，土師器杯・高杯・甕や石製模造品(有孔円板)，土玉などが出土している。１の須恵器高台付杯は，覆土上面から出土した混入品である。３～10は土師器杯である。５～８は内外面が黒色処理されている。３・４以外は床面や床面直上からの出土である。11は高杯脚部，12は手捏ねであろう。13・14は甕の一部である。15は滑石製の有孔円板で，床面から出土した。16の鉄製品は刃部はないが，鎌の基部付近の可能性もある。現存長3.1cm・最大幅2.6cm・厚さ2mmを測る。17は須恵器片を転用した砥石である。側面に擦痕が認められる。18・19は欠損した土玉である。18は現存径3.1cm・高さ3.4cm・孔径3mm，19は現存径3.8cm・高さ3.8cm・孔径6mmをそれぞれ測る。



第106図　080，082，083，093



第107図　080，082，083，093出土遺物

082（第106・107図，第17表，図版12・41・58・60）

080の西に位置している。北西側は調査区域外である。080・083を削平しているが，東コーナー付近の上面には平安時代の住居跡081Ａが位置し，下部は攪乱を受けている。

平面形態は方形を呈し，規模は一辺6.0m前後と推定される。カマドが北西壁に設けられていると想定して，主軸方位はN-37°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は北東壁側で27cm前後である。床面は凹凸があり，中央部に硬化面が広がっている。壁溝（幅12cm～22cm，深さ6cm前後）は，攪乱や判然としない箇所もあるが，調査範囲内では巡っている。南東壁側で２本の主柱穴を検出した。P1（径96cm×113cm，深さ68cm）・P2（径84cm×94cm，深さ89cm）は，ともに掘方の上部が大きく開いており，柱を抜き取った可能性もある。覆土は，暗褐色土の上に黄灰色土を主体とする土層が堆積している。

遺物は，第107図20～27の須恵器杯・蓋，石製模造品（剣形品），土製玉類，土玉などが出土している。20～22は須恵器杯である。20は完形品で，底部外面にヘラ記号が残る。覆土上面から出土した。21は扁平なタイプの杯である。口縁部の立ち上がりは短い。床面直上からの出土である。23は土師器高杯の脚部であろう。24は滑石製の剣形品である。稜は明瞭ではない。東コーナー付近の覆土中層から出土した。25・26は土製の玉類で，ともに完形である。25は球形で褐色を呈し，孔が中心からはずれた位置に穿たれている。径1.9cm・高さ1.9cm・孔径2mmを測る。東コーナー付近の覆土上層からの出土である。26は下部がやや広い管状で，黒色を呈している。穿孔の位置が，上面と下面では大きくずれている。長さ2.7cm・径1.3cm～1.7cm・孔径1.5mmを測る。24の近くで出土した。27は土玉で，一部を欠損する。径3.3cm・高さ2.5cm・孔径9mmを測る。覆土下層からの出土である。

083，093（第106・107図，図版12）

083は082の南東に位置している。周辺の遺構に大半を削平されており，壁の一部や硬化した床面から，住居の存在が判明した。形態・規模や，カマドなどの施設についての詳細は不明である。なお，083の南西に重複する093もあわせて説明する。

南西壁は現存長4.3mが検出された。壁は垂直に掘込まれ，壁高は33cm～45cmである。床面は平坦で，硬化面が広がっているが，平安時代の住居跡081Ａ・Ｂと重複するため明確な範囲は不明である。南西壁側の壁溝（幅17cm～30cm，深さ5cm～10cm）を検出したが，対応する壁溝は確認できなかった。床面からはピット（径38cm×43cm，深さ102cm）が１基検出されている。

出土遺物は少ない。図示できたのは，覆土中から出土した第107図28（須恵器杯）・29（土師器杯）である。29は内外面が赤彩されている。

093は083の南西に位置している。東側は調査区域外にかかり，北側で093と重複し削平されている。084溝状遺構が住居北側の上面を走っている。壁と床面の一部を検出できた。

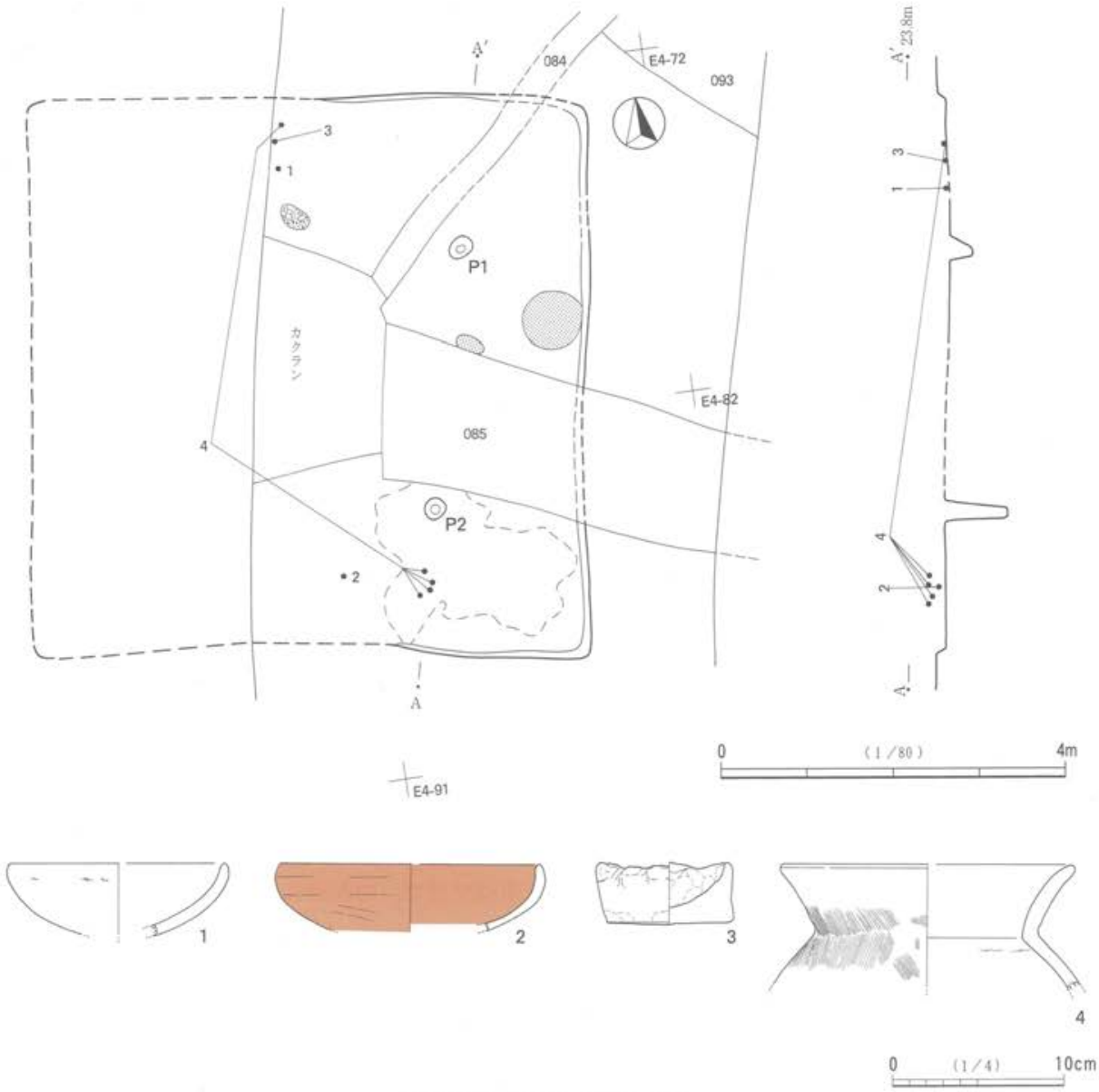
平面形態は方形を呈し，北壁長3.0m・西壁長2.8mを検出できた。西壁はやや北側に湾曲している。壁は垂直に掘込まれ，壁高はわずかに3cm前後である。床面は平坦で，中央部に硬化面が残る。柱穴や壁溝は検出されていない。遺物は少なく，図示できたのは30の土師器甕の底部で，覆土下層からの出土である。

086（第108図，図版12・41）

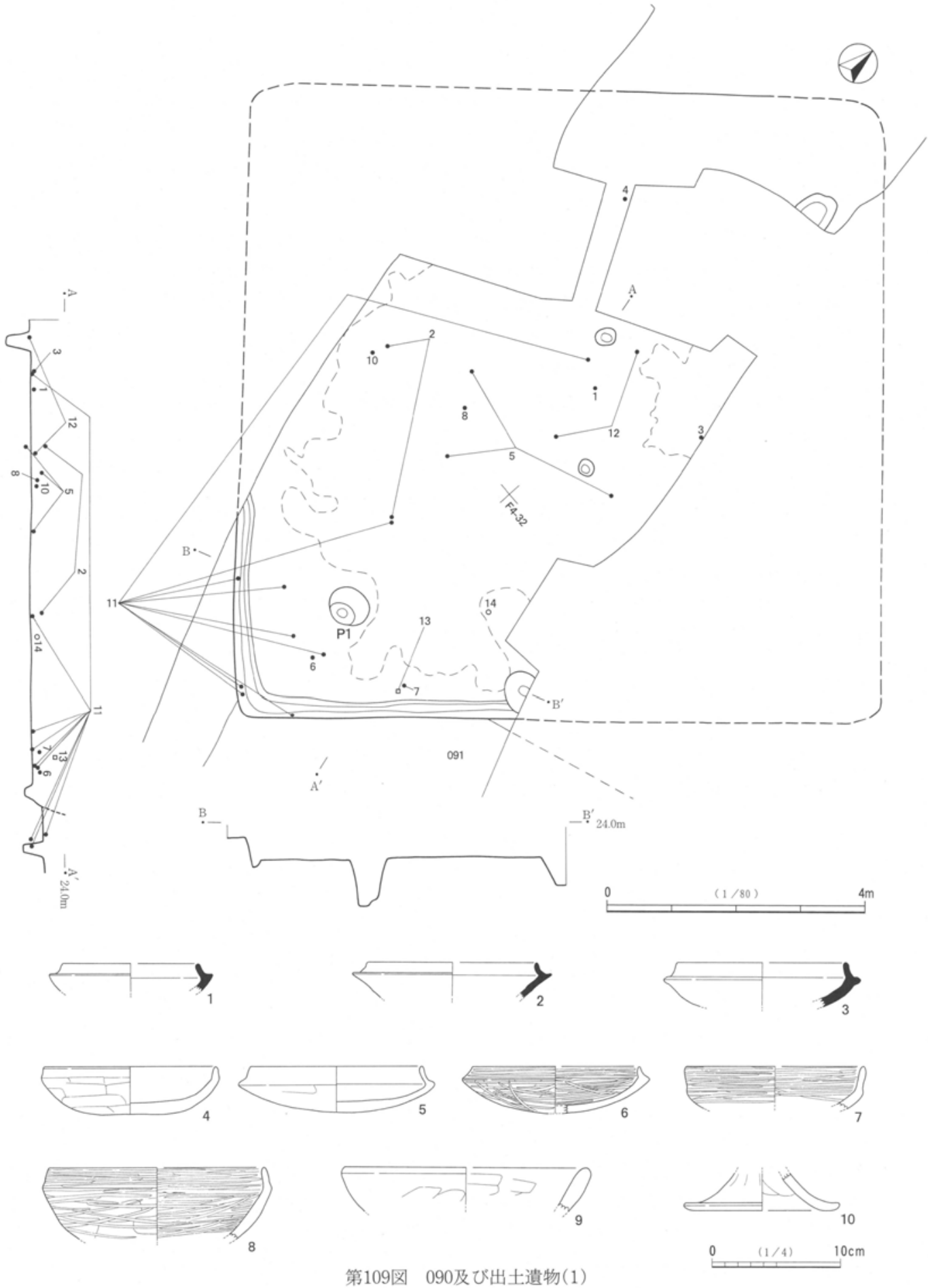
調査区の西，Ｅ４グリッドに位置する。西側の1/2は調査区域外で，中央部や北壁の一部は保存樹木のため未調査である。東西中央に走る溝状遺構085で，東壁中央から中央部が削平されている。

平面形態は方形である。規模は，検出した東壁長6.4mから判断して，一辺6.5m前後と想定される。カマド等の施設が検出できなかったため，主軸方位は不明である。壁はほぼ垂直に掘込まれている。壁高は，比較的遺存の良い南東コーナー付近では18cm～24cmであるが，北壁ではわずかに3cm～7cmと低くなっている。床面は凹凸があり，南東側の床面に硬化面が遺存している。壁溝は検出されていない。東側床面からは，２本の主柱穴(P1径25cm×29cm・深さ26cm，P2径23cm×25cm・深さ77cm)が検出された。覆土は，暗褐色土の単一層である。

遺物は，北壁側と南壁側の床面や覆土下層から土師器杯・甕・手捏ねが出土している。１・２は土師器杯である。２は内外面が赤彩されている。３は手捏ねである。ほぼ完形で，北壁際の床面から出土した。底部外面に木葉痕が残る。４はくの字に屈曲する甕の口縁部で，刷毛で口頸部外面を調整している。



第108図　086及び出土遺物



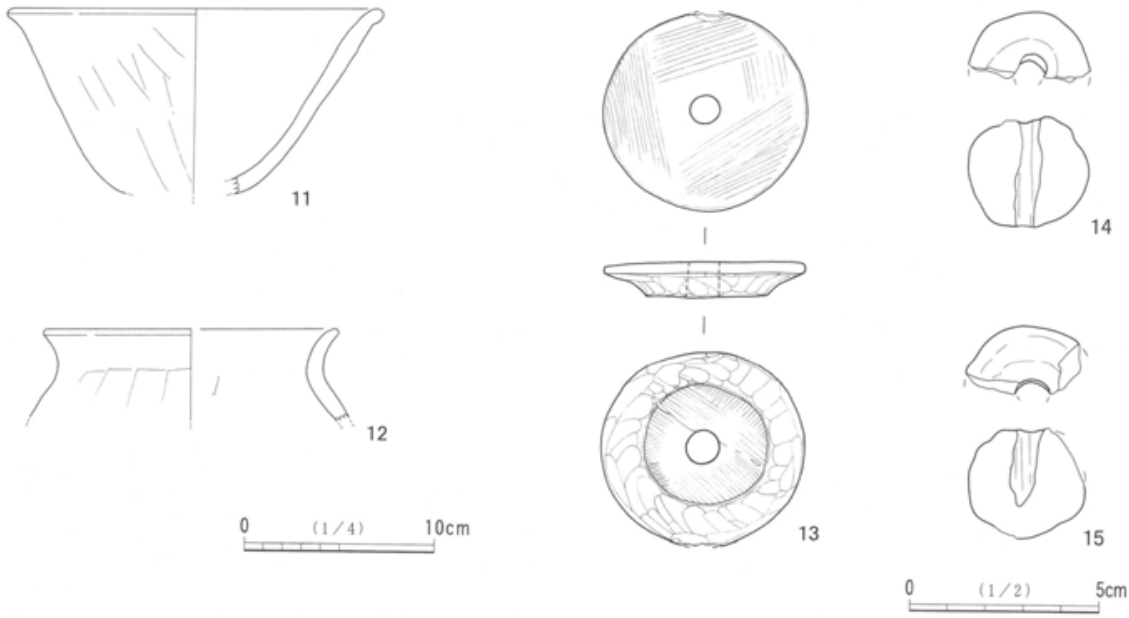
第109図　090及び出土遺物(1)

090（第109・110図，図版13・41・60）

調査区の西，Ｆ４グリッドに位置する。東西両側は調査区域外で，南側では中期の住居跡091を削平している。北側は保存樹木の未調査区域が広がり，北壁側では木根により攪乱されている。そのため住居の明確な範囲は判然としないが，ローム面の観察から範囲を想定した。調査できたのは，中央部から南コーナーにかけての範囲で，南東壁と南西壁の一部を検出した。

平面形態は方形と考えられ，一辺10m前後を想定している。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は比較的遺存の良い南西壁側で34cm～38cmである。床面は平坦で，硬化面が中央部から南東壁際まで広がっている。壁溝(幅12cm～20cm，深さ8cm～11cm)は，明確に検出できた範囲では巡っている。床面から数基のピットを検出したが，主柱穴は南側床面のP1(径57cm×73cm，深さ72cm)である。ほかの主柱穴やカマドは検出されていない。覆土は，黄褐色土の上に暗黄褐色土が堆積している。

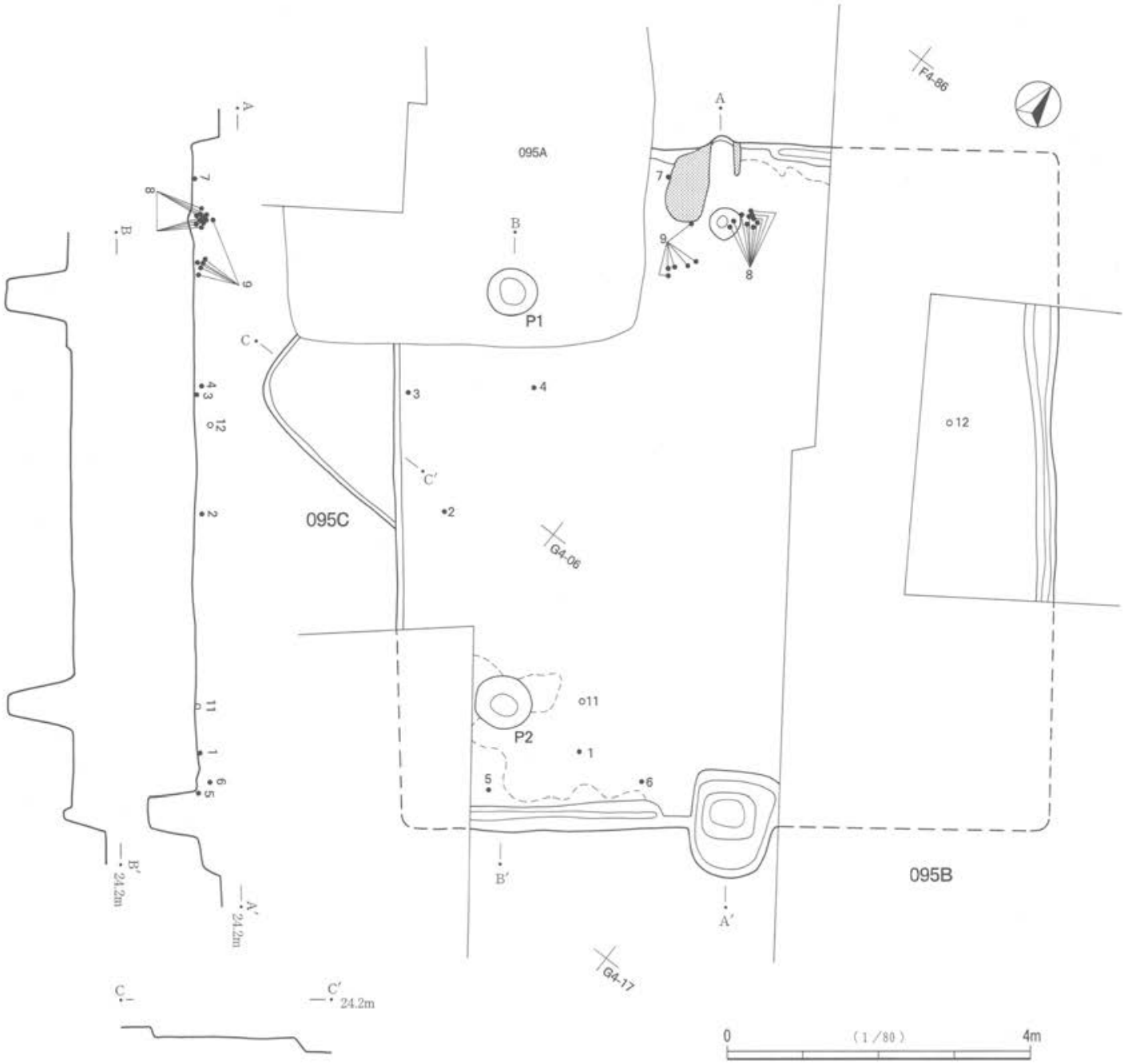
出土遺物は比較的多く，須恵器杯，土師器杯・甕・鉢や石製紡錘車，土玉などが調査範囲のほぼ全面から出土している。１～３は須恵器杯である。１・３は床面から，２は覆土中層からの出土である。４～９は土師器杯で，８・９は大型品である。６～８は内外面がよくミガキが施されている。いずれも床面直上から出土した。10は高杯の脚部である。11は底部を欠損しているが，鉢であろう。南コーナー周辺の床面から散在して出土した。13は滑石製の紡錘車で，ほぼ完形である。扁平な形態をもち，側面に工具痕が残る。径上面5.4cm・下面3.2cm，厚さ1.0cm，孔径8mm～9mmを測る。南東壁際の覆土上層から出土した。14・15は土玉である。ともに1/2の遺存で，14は現存径3.2cm・高さ2.9cm・孔径4mm～6mm，15は現存径3.1cm・高さ2.9cm・孔径6mmをそれぞれ測る。14は覆土下層から出土した。

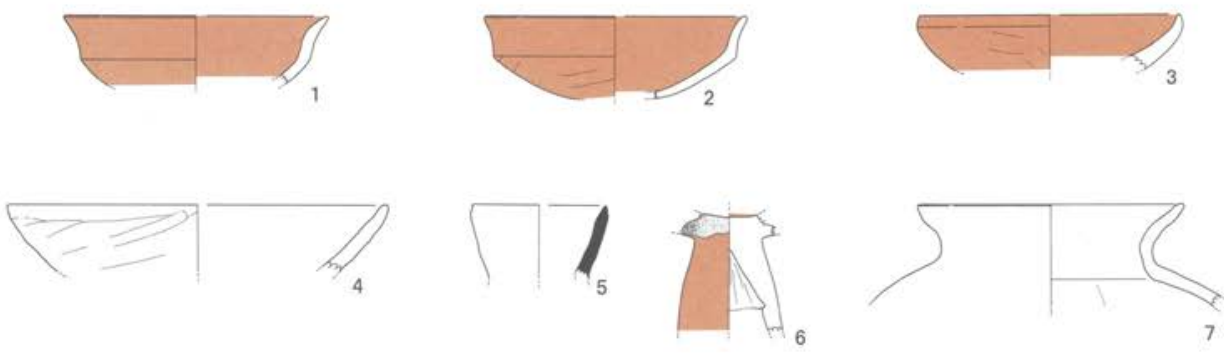


第110図　090出土遺物(2)

095Ｂ（第111・112図，図版13・41）

調査区の南西，Ｆ４・Ｇ４グリッドに位置する。南東壁中央が張り出し，貯蔵穴が設けられている。西側のコーナー付近と，北東側の一部を除いて調査区域外にかかっている。カマドの南西から西コーナーまでは奈良時代の住居跡095Ａに削平され，南西壁中央では095Ｃと重複する。カマドから南東壁にかけての範囲を中心とした，約2/5の調査である。なお，住居の北東側は現地では123として調査を行ったが，その





第111図　095B・C及び出土遺物(1)

後の精査で095Bと同一の住居跡の一部であることが判明したので，095Bとして掲載する。

平面形態は方形を呈し，規模は8.8m×9.1mを測る。主軸方位はN-38°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存の良い北西壁と南東壁で35cmである。床面は平坦で，硬化面は北東側を除いてほぼ全面に広がっている。壁溝(幅15cm～25cm，深さ7cm～11cm)は，調査範囲では南西側を除いて巡っている。主柱穴は，重複する095Aの床面下からP1(現存径65cm×68cm，深さ81cm)が，南側床面からP2(径72cm×79cm，深さ88cm)の２本が検出された。貯蔵穴(110cm×160cm，深さ64cm)はやや丸みをもつ方形で，南東壁張出部に設けられ，前面は土手状に6cmほど高くなっている。覆土は，暗黄褐色土(ロームブロックを多く含む)と黄灰色土の上に，暗褐色土や黒褐色土が堆積している。

カマドは北西壁に設けられ，壁を32cm掘込んで直角に立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，右袖部もほとんど失われ遺存状態は良好ではない。火床は円形に10cmほど掘窪められ，焼土が堆積していた。

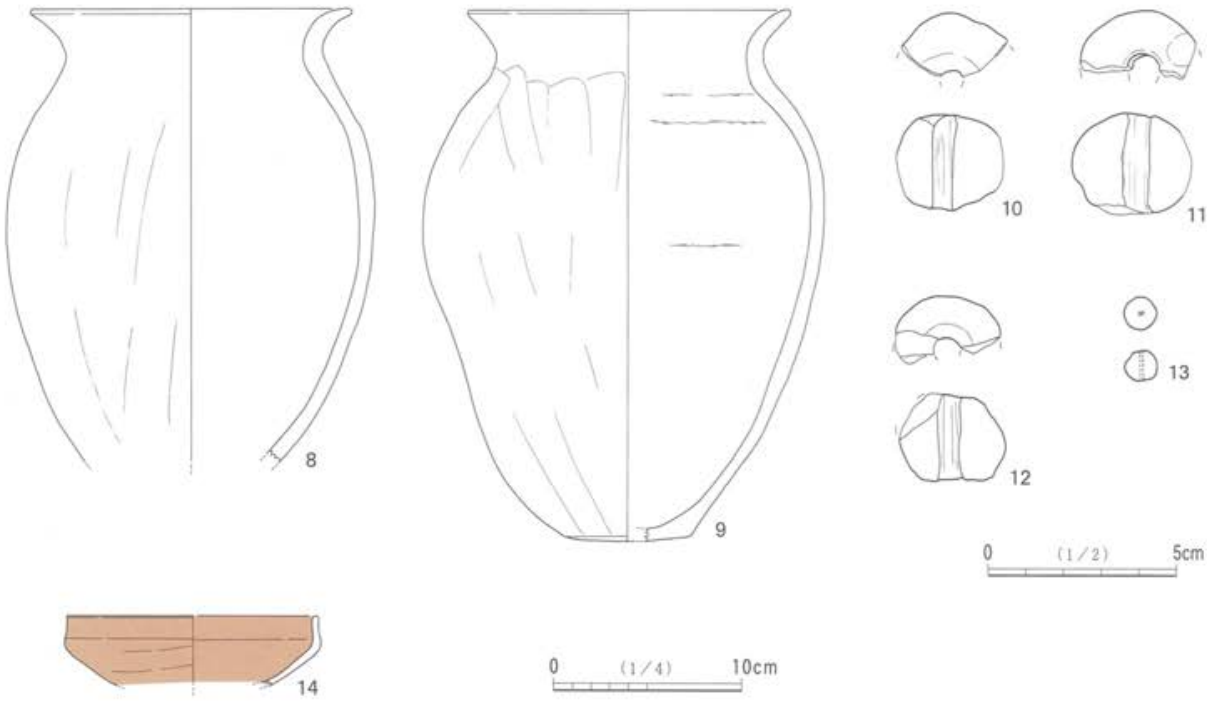
遺物は，カマド周辺や西側から，土師器杯・甕，土製玉類，土玉などが出土している。１～４は土師器杯である。１～３は内外面が赤彩されている。床面や床面直上からの出土である。５は須恵器壺の口頸部である。７～９は甕である。８・９は長胴の器形で，胴部はヘラケズリで調整している。いずれもカマド周辺から集中して出土している。10～12は土玉で，1/3～1/2の遺存である。10は現存径2.8cm・高さ2.5cm・孔径5mm，11は現存径3.1cm・高さ2.7cm・孔径6mm，12は現存径2.8cm・高さ2.3cm・孔径6mmをそれぞれ測る。13は土製の玉である。黒褐色を呈し，径9mm・高さ8mm・孔径1mmを測る。

095C（第111・112図）

095A・Bに大半を削平され，南西コーナー周辺の南壁と西壁の一部を検出した。

平面形態はやや丸みをもつ方形と考えられる。検出できたのは南壁長2.7m・西壁長0.9mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は15cmである。検出した床面は，平坦であるが全体に軟弱である。カマド・柱穴・壁溝等は検出されていない。

遺物は，覆土中から14の土師器杯が出土した。内外面を赤彩されている。



第112図　095B・C出土遺物(2)

096A（第113・114図，図版13・41）

調査区の南西，G４グリッドに位置する。096Bと重複し，南東側を大きく破壊されている。南西壁側は調査区域外である。上面を全体に削平されており，壁高は低い。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は推定で3.4mである。主軸方位は概ねN-46°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は7cm前後と浅い。床面は凹凸があり，カマド前面から中央に硬化面が広がっている。柱穴や壁溝は検出されていない。覆土は黄灰色土の単一層である。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁への掘込みはなく，煙道部は緩やかに立上がる。上面を削平されているため天井部は崩落し，両袖部が低く遺存していた。火床の掘込みは浅く，被熱も弱い。

遺物は土師器高杯（３・４）などが，カマド周辺の床面直上から出土している。３は丸みのある杯部をもつ高杯で，杯部の内面はミガキが施されている。

096B（第113・114図，図版13・41）

北東壁側と南西壁側は調査区域外である。北西側で096Aと，南東側では097と，それぞれ重複し破壊している。上面は全体に削平され，壁高はやや低くなっている。カマド前面と床面中央に攪乱を受けており，全体の4/5の調査である。

平面形態は方形を呈し，主軸長は5.9mを測る。主軸方位はN-42°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれている。壁高は，遺存状態の良好な南東壁の南側で32cm前後である。床面は凹凸があり，硬化面がカマド前面から南東壁際まで広がっている。壁溝（幅17cm～24cm，深さ4cm～7cm）は，調査範囲ではカマド部分を除いて巡っている。４本の主柱穴を検出した。P4（径72cm×87cm，深さ76cm）以外は調査区域外にかかっているため，正確な規模の測定はできないが，概ね径80cm・深さ53cm～61cmである。いずれも掘方上部が開き，柱を抜き取った可能性がある。P5（径25cm）は出入り口施設に伴うピットである。覆土は，黄褐色土（ローム粒を多く含む）の上に暗褐色土が堆積している。

カマドは北西壁に設けられている。前面に攪乱を受け，両袖部と火床の一部が削平されている。壁を33cm大きく掘込み，煙道部は緩やかに立上がる。上面を削平されているため，天井部や袖部の遺存は良好ではない。火床の状態は不明であるが，埋土内に赤化した内壁の一部が堆積していることから，全体によく被熱されていたと考えられる。

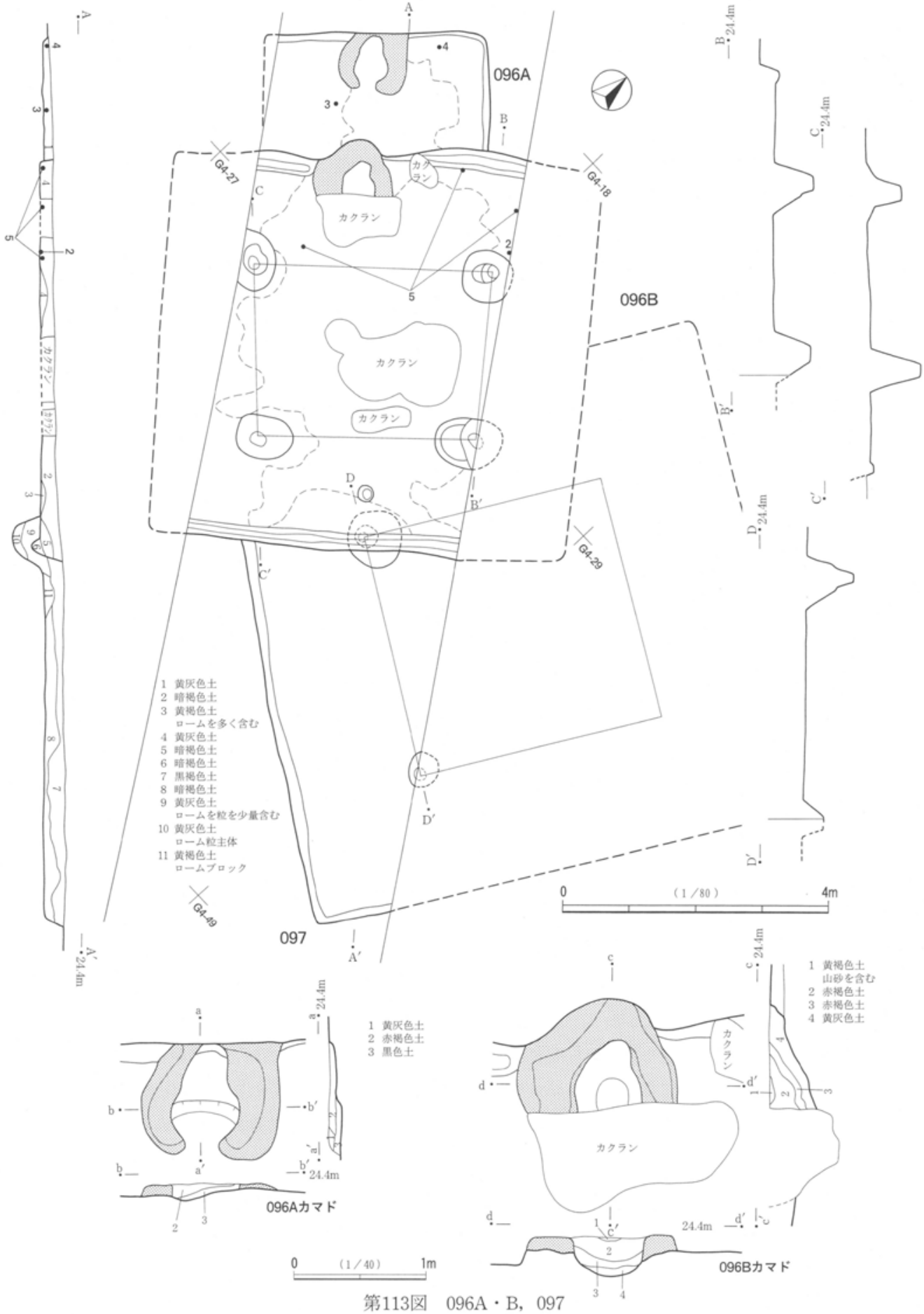
遺物は，床面や覆土下層から須恵器杯，土師器甕などが出土している。１は須恵器杯，２は須恵器蓋であろう。５・６は土師器甕である。５は長胴の形態で，口頸部と体部との境に緩い稜を形成する。

097（第113・114図，図版60）

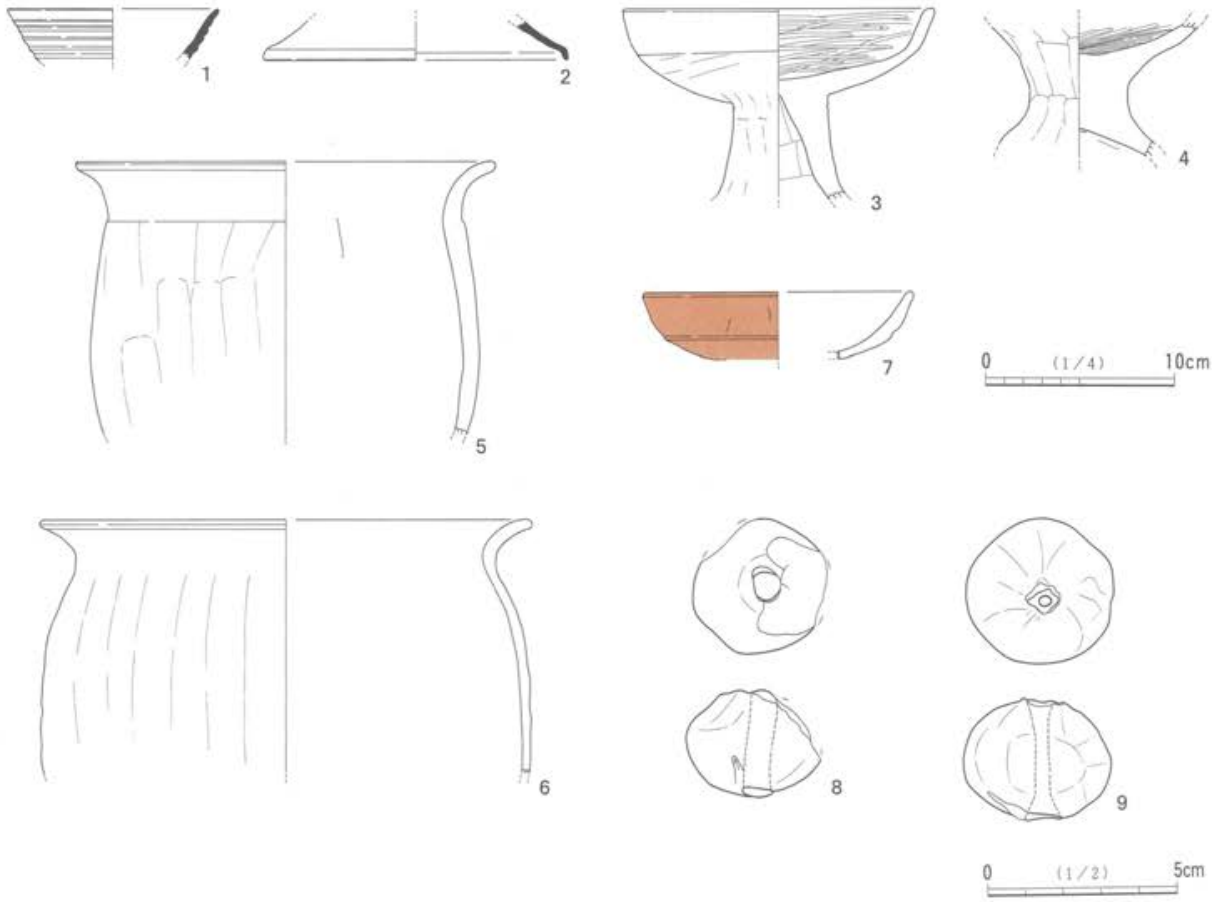
北東側の大半は調査区域外にかかり，北西側は096Bに削平されている。南西壁側1/4の調査である。

平面形態は方形を呈し，壁や柱穴から推定した規模は一辺7.6mである。主軸方位は概ねN-58°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は31cm～37cmである。床面は平坦で，柱穴間を中心に硬化面が広がっていたと考えられる。調査範囲からは壁溝は確認されていない。２本の主柱穴を確認したが，このうちP1（径84cm×89cm，深さ74cm）は096Bの南東壁下から検出された。掘方上部が開き，周囲の床面にはロームブロックが堆積していることから，柱を抜き取った痕跡と考えられる。P2（現存径58cm）は，調査区域外にかかるため詳細は不明である。カマドは確認されていない。覆土は，黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土が混在している。

遺物の出土は少なく，土師器杯や土玉が出土した。７は体部下半に稜をもち，外面が赤彩されている。



第113図　096A・B，097



第114図　096A・B，097出土遺物

器面が磨滅しており判然としないが，内面も赤彩されていた可能性がある。８・９は土玉である。８は現存径3.3cm・高さ2.8cm・孔径7mm，９は径3.9cm・高さ3.3cm・孔径4mm～9mmをそれぞれ測る。

100（第115図，図版41）

調査区の北西，Ｄ４グリッドに位置する。精査の結果，床面の平坦な硬化面の広がりや砂質粘土の検出し，土師器片の分布状況を確認して，住居跡の存在を想定した。周辺の整地のため全体を大きく削平されており，住居跡としての実態は不明である。この範囲から数基のピットを検出したが，このうち柱穴と考えられるのは，P1(径74cm×93cm，深さ18cm)とP2(径55cm×74cm，深さ54cm)であろう。

遺物は，土師器甕や砥石などが出土した。１・２は土師器甕である。P1の南側からまとまって出土した。１は長胴の形態で，口縁部が短く外反する。３は凝灰岩製の砥石で，下半と裏面を欠損する。現存長4.5cm・幅4.1cm・厚さ5mm～12mmを測る。

102（第116図，図版41）

調査区中央やや南西寄り，Ｆ５グリッドに位置する。南東側が調査区域外にかかり，全体の1/2の調査である。カマドや前面の床面は木根により攪乱を受けている。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は3.85mを測る。北東壁長2.8m，南西壁長は1.1mをそれぞれ検出した。主軸方位はN-57°-Wである。壁は，西側では垂直に掘込まれているが，北側ではやや緩やかである。壁高は13cm～29cmを測り，北東側が高くなっている。床面は凹凸があり，硬化面は西コーナー付近などの一部を除いて広がっている。壁溝(幅10cm～22cm，深さ4cm前後)は，北東壁から北西壁の一部まで巡って

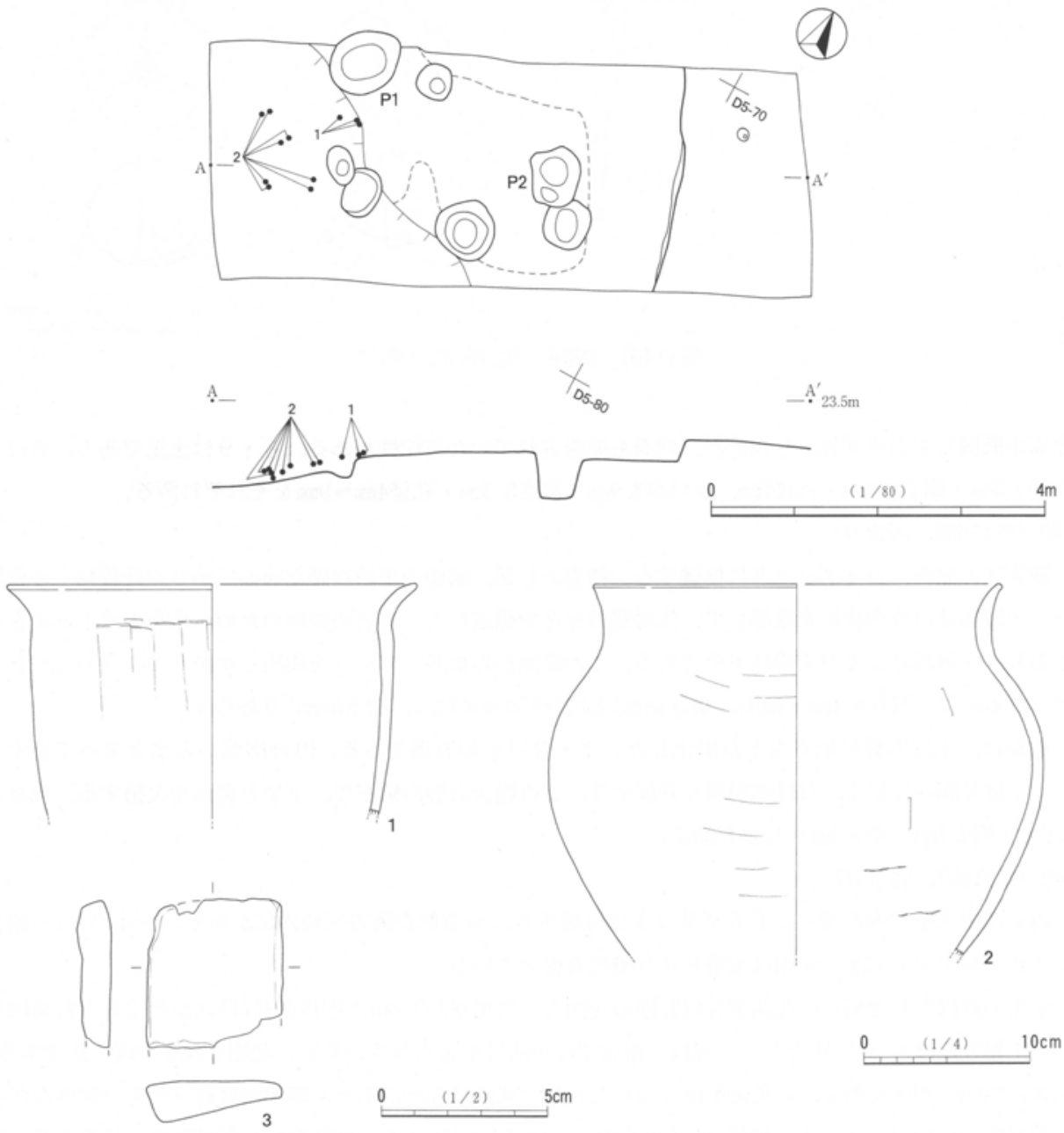
いる。柱穴は検出されていない。覆土は，暗黄褐色土の上に暗褐色土が堆積している。

カマドは北西壁中央に設けられている。木根による攪乱を受け，遺存状態は悪い。砂質粘土が集積していたが，袖部の形状等も判然としないので想定できる範囲を図示した。壁への掘込みはなく，火床の底面は被熱でわずかに硬化していた。カマド内からは支脚が出土している。

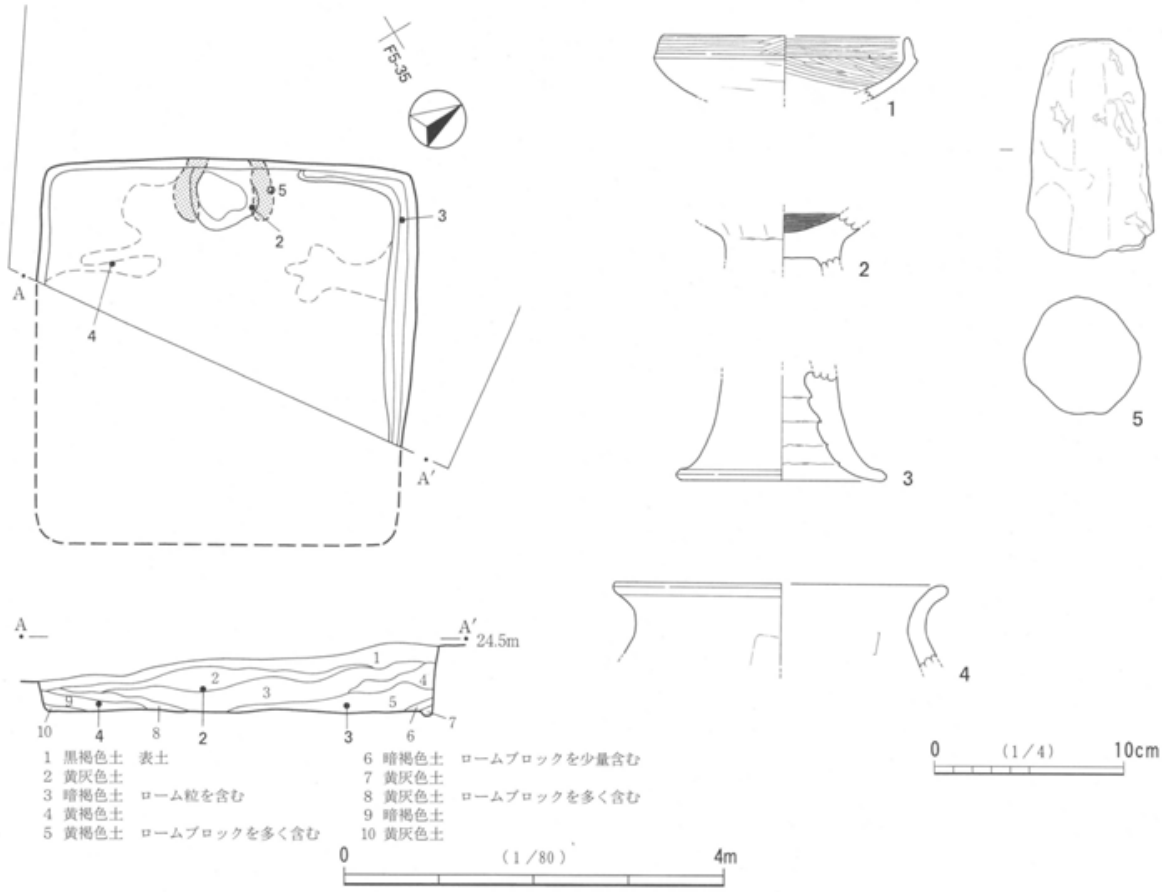
遺物の出土は少なく，土師器杯・高杯・甕などが覆土下層や中層から出土した。１は土師器杯，２・３は高杯，４は甕である。２は杯部の内面が黒色処理されている。器面が二次焼成を受けており，カマドの上面から出土した。３と同一個体の可能性もある。５の支脚は，カマド右袖脇からの出土である。

103（第117・118図，図版13・41・42）

調査区中央，Ｆ５グリッドに位置する。南東側は，調査区域外や保存樹木の未調査範囲である。北東側を105や平安時代の住居跡104に削平されている。住居西側を中心とした調査である。



第115図　100及び出土遺物

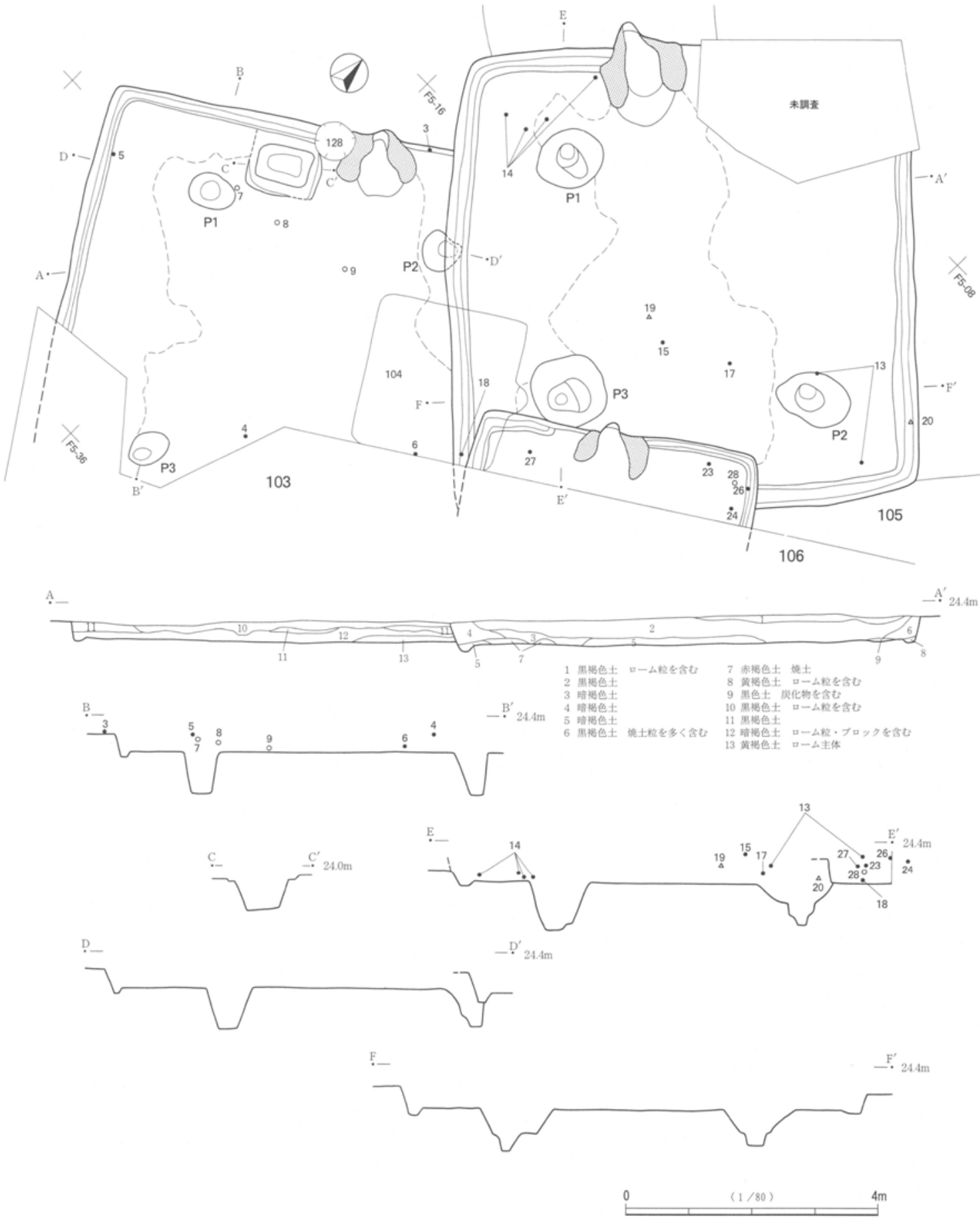


第116図　102及び出土遺物

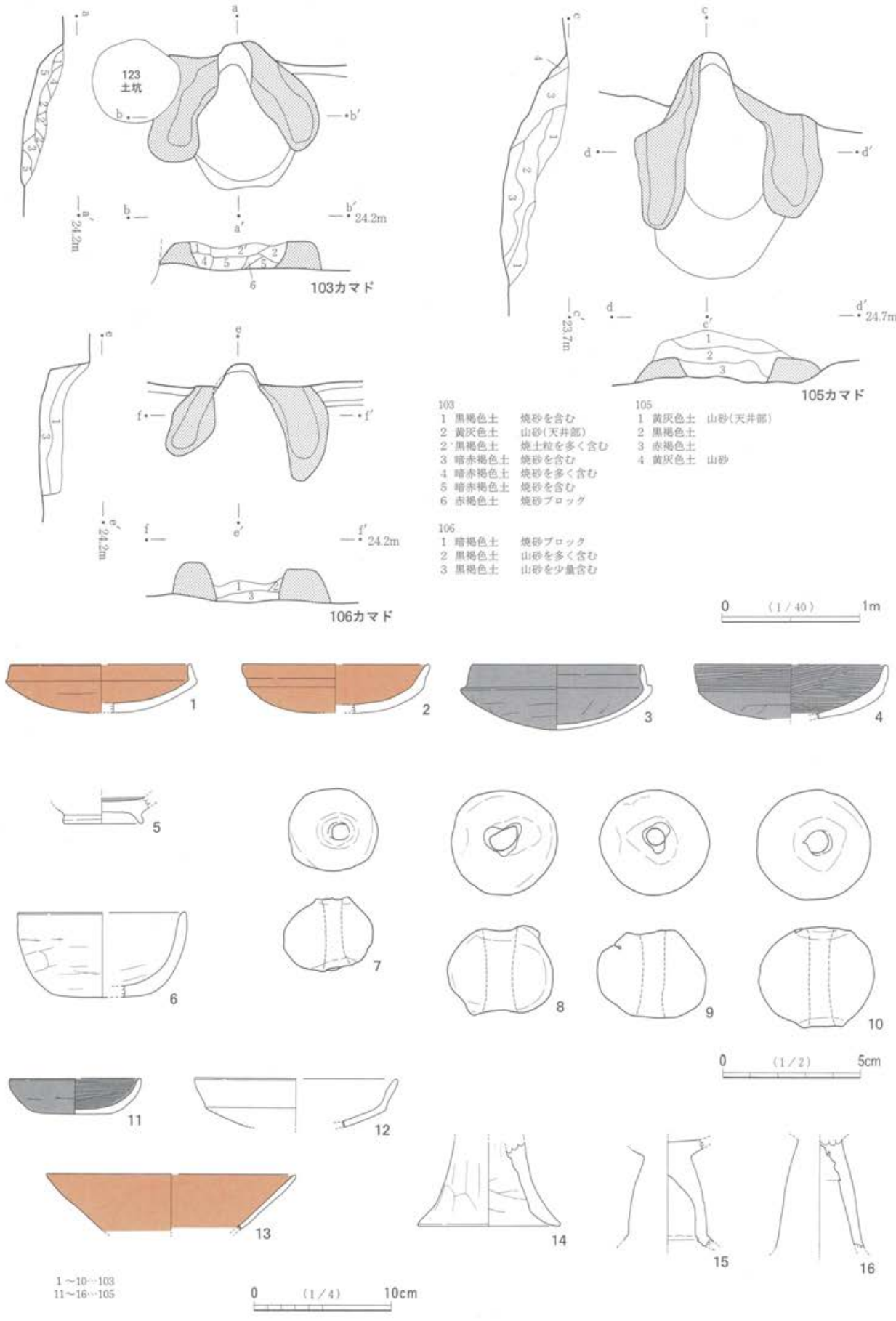
平面形態は方形を呈し，北西壁長は現存で5.45m，南西壁長は3.9mを検出した。一辺8.5m前後の規模が想定される。主軸方位はN-32°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は18cm～31cmで北側が次第に高くなっている。床面は平坦で，カマド前面から南東側中央の広い範囲によく踏み締められた硬化面が広がっている。壁溝(幅13cm，深さ5cm～9cm)は，調査範囲ではカマドの西側から南西壁にかけて巡っている。主柱穴は３本(P1径58cm×75cm・深さ67cm，P3径46cm×65cm・深さ69cm)が検出され，いずれも柱のあたりを確認した。このうちP2(現存径65cm，深さ62cm)は，105に一部削平されている。方形の貯蔵穴(62cm×88cm，深さ55cm)は，カマドの西側に設けられている。周囲を床面より3cmほど下げて段をつくり，平場を形成している。覆土は，黒褐色土(ローム粒やロームブロックを多く含む)に暗褐色土が混在している。

カマドは北西壁に設けられ，平安時代の土坑128に左袖部の一部を破壊されている。壁を14cm掘込んで，緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，両袖部の遺存状態もあまり良好ではない。火床の掘込みは浅いが，底面はよく被熱していた。

出土遺物は少なく，１～10の土師器杯や土玉が覆土中から出土している。１～４は土師器杯である。内外面が，１・２は赤彩，３・４は黒色処理されている。３・４は覆土上面からの出土である。５は混入した平安時代の高台付杯である。６の椀は東側の床面から出土した。７～10は土玉である。カマド周辺の床面や覆土中層から出土している。７は径3.3cm・高さ2.6cm・孔径6mm，８は径3.8cm・高さ3.2cm・孔径9mm～12mm，９は径3.9cm・高さ3.2cm・孔径8mm，10は径4.2cm・高さ3.7cm・孔径7mmをそれぞれ測る。



第117図　103，105，106



第118図　103，105出土遺物(1)

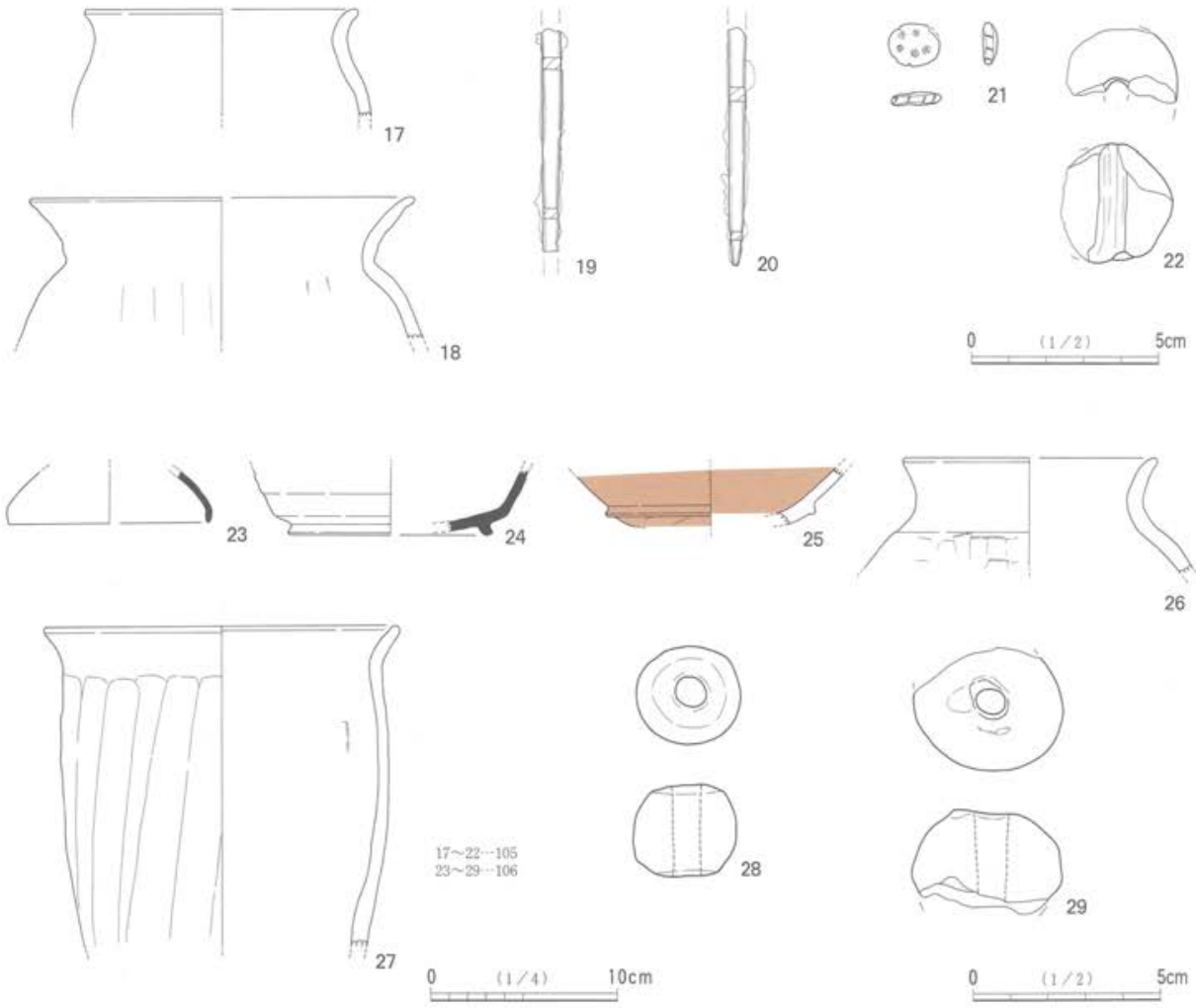
105（第117～119図，図版13・42・61）

調査区中央，Ｆ５グリッドに位置する。北側の一部は保存樹木のため未調査である。001・103と重複しているが，南側は106や104に削平されている。全体の4/5の調査である。

平面形態は正方形を呈し，規模は6.4m×6.4m前後と推定される。主軸方位はN-43°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は，遺存のよい東西のコーナー付近で39cm～48cmである。床面は平坦で，硬化面はカマド前面から南東壁にかけての柱穴間に広がっている。壁溝（幅14cm～29cm，深さ4cm～9cm）は，調査範囲内では全周する。床面から３本の主柱穴（P1径98cm×114cm・深さ78cm，P2径82cm×121cm・深さ65cm，P3径117cm×128cm・深さ62cm）を検出した。いずれも掘方上部が大きく開いており，柱を抜き取った可能性がある。検出されなかった１本は保存樹木下であろう。焼土が北東壁側の３か所に堆積している。覆土は，黒褐色土を主体に暗褐色土が混在している。

カマドは北西壁中央やや西寄りに設けられている。壁を40cm掘込み，緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部の砂質粘土は崩れてはいたが，上部に位置している。両袖部は側面が流れていたが，下部は比較的良好に遺存していた。火床の掘込みは浅いが，底面から煙道部にかけてよく被熱されていた。

出土遺物は多く，11～22の土師器杯・高杯・甕や鉄製品，土玉などが住居全面から出土している。11・12は土師器杯である。11は小型品で，内面は黒色処理されている。13～16は高杯である。13は高杯の杯部



第119図　105，106出土遺物（2）

であろう。内外面が赤彩されている。17・18は甕である。18は南西壁下の壁溝から出土した。19・20は鉄鏃の茎であろう。20は端部が残る。19は現存長5.9cm・幅4mm～5mm・厚さ3mm，20は現存長6.4cm・幅3mm～5mm・厚さ2mm～3.5mmをそれぞれ測る。21はボタン状の土製品である。暗褐色で楕円形を呈し，上面に細い管状の工具による５か所の刺突がみられる。側面には７か所に細かい刻みが施されている。長径134mm・短径114mm・厚さ3.4mmを測る。22は土玉である。1/2の遺存で，現存径2.9cm・高さ3.1cm・孔径7mmを測る。

106（第117・119図，図版13・42・60）

南東側の3/4が調査区域外である。北西側で105と重複している。カマドのある北西壁側を中心に，1/4を調査した。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は4.55mを測る。全体では一辺4.5m前後の規模が想定される。主軸方位はN-36°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は26cm～35cmである。床面は凹凸があり，全体にやや堅緻である。壁溝(幅14cm～20cm，深さ5cm～9cm)は，調査範囲内ではカマド周辺を除いて全周する。柱穴等は検出されていない。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁を15cm掘込んで，角度をもって立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，袖部の遺存状態もあまり良好ではない。火床の掘込みは浅く，被熱は弱い。

遺物の出土は少なく，23～29の須恵器蓋，土師器高杯・甕や土玉などが覆土中から出土している。23は須恵器蓋，24は須恵器高台付杯である。25は高杯の杯部で，下端に稜をもち内外面が赤彩されている。26・27は土師器甕である。27は長胴の形態で，口縁部が短く外反する。28・29は土玉である。28は完形で，径2.7cm・高さ2.4cm・孔径7mmを測る。29は一部を欠損しており，現存径4.0cm・高さ2.6cm・孔径9mmを測る。

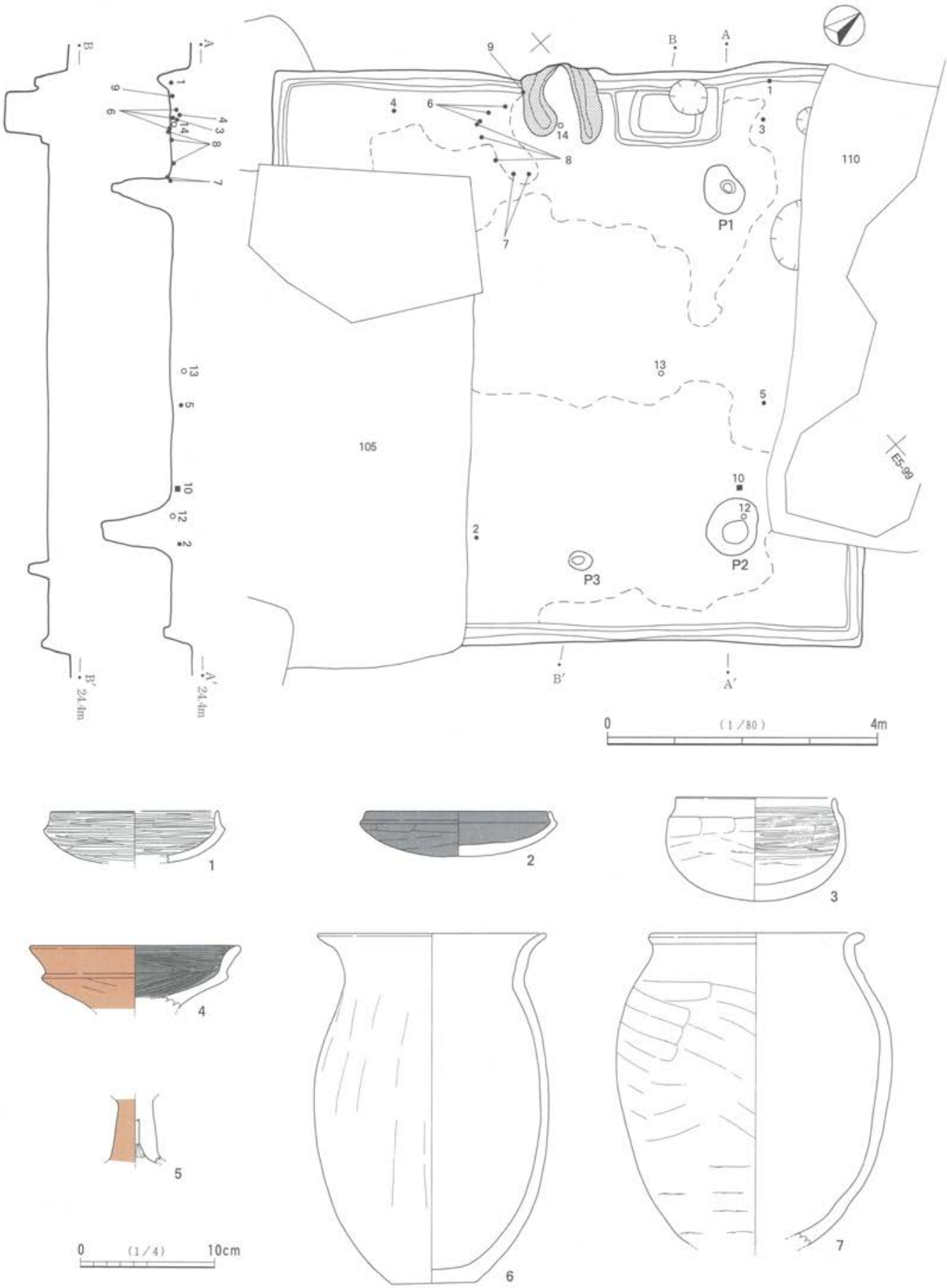
107（第120・121図，第18表，図版13・42・58・59・60）

調査区中央，Ｅ５・Ｆ５グリッドに位置する。南西側は105に大きく削平されている。110(中期)と北東側で重複しているが，深度のある110を先行して調査を行ってしまったため，この部分は失われている。

平面形態は方形を呈し，主軸長は8.5mを測る。規模は8.5m×8.8mと想定される。主軸方位はN-49°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は24cm～34cmで南東側が高くなっている。床面は平坦で，中央部を除くカマド側と南東側に硬化面が広がっている。壁溝(幅10cm～22cm，深さ12cm～17cm)は，調査範囲内では全周し，比較的深くつくられている。主柱穴は，北東側の床面から２本(P1径57cm×77cm・深さ95cm，P2径77cm×86cm・深さ112cm)が検出された。P1には柱のあたりが認められる。P3(径30cm×35cm，深さ32cm)出入り口施設に伴うピットである。方形の貯蔵穴(74cm×117cm，深さ61cm)は，カマドの北東側に設けられている。周囲の床面から8cmほど下げて段をつくり，平場(幅10cm～20cm)を形成している。

カマドは北西壁中央やや西寄りに設けられている。壁を22cm掘込み，直角に立上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落し，左袖部の遺存状態もあまり良好ではない。火床の掘込みはほとんどなく，被熱も弱い。カマド内からは支脚が出土している。

遺物はカマド周辺を中心に，土師器杯・高杯・甕，管玉，石製模造品(有孔円板)，土玉などが，床面や覆土下層から出土している。１・２は土師器杯で，丁寧なミガキが施されている。２は内外面が黒色処理されている。１は北西壁下の壁溝から出土した。３は椀である。貯蔵穴周辺の床面からの出土である。４・５は高杯で，外面は赤彩されている。４の杯部は下部に明瞭な稜をもち，内面が黒色処理されている。６～９は甕である。いずれもカマド左袖の周辺からまとまって出土した。長胴の形態が多いが，９は



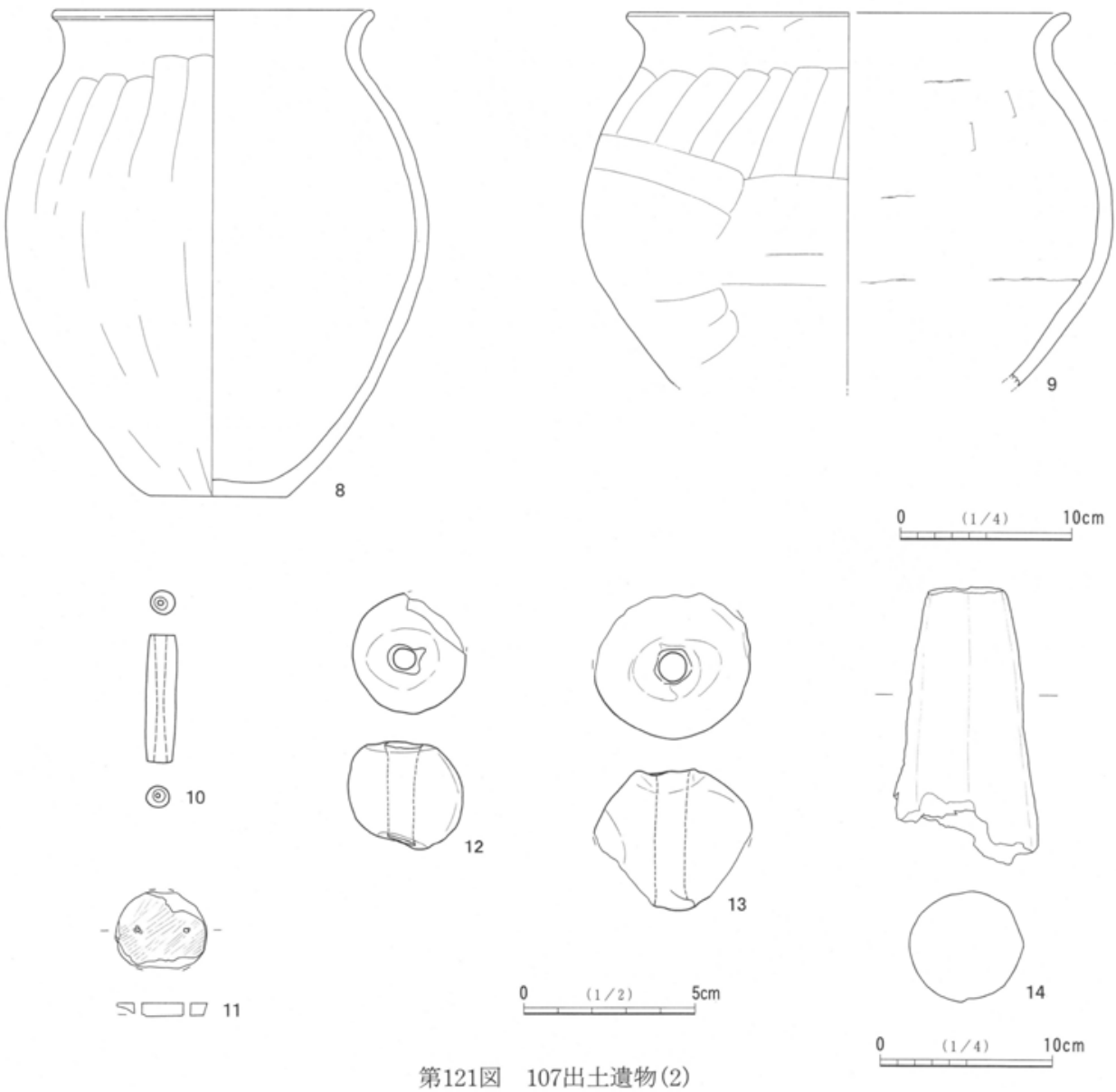
第120図　107及び出土遺物(1)

口径が広く，体部が丸みをもつ形態である。10は緑色凝灰岩製の管玉である。淡灰緑色を呈し，表面は丁寧に研磨されている。長さ37㎜・径6㎜×7㎜，重量は4.08ｇである。両側から穿孔され，孔径は2㎜～4㎜である。P2北側の床面直上から出土した。11は滑石製の有孔円板である。双孔で両面を研磨されている。12・13は土玉である。12は径3.3cm・高さ3.2cm・孔径8㎜，13は現存径4.6cm・高さ4.2cm・孔径9㎜をそれぞれ測る。12はP2の埋土上面から出土した。14の支脚はカマド内からの出土である。

111（第122図，図版13・42）

調査区中央，Ｅ６・Ｆ５グリッドに位置する。南東側の4/5が調査区域外である。カマドのある北西壁側を中心とした1/5の調査である。

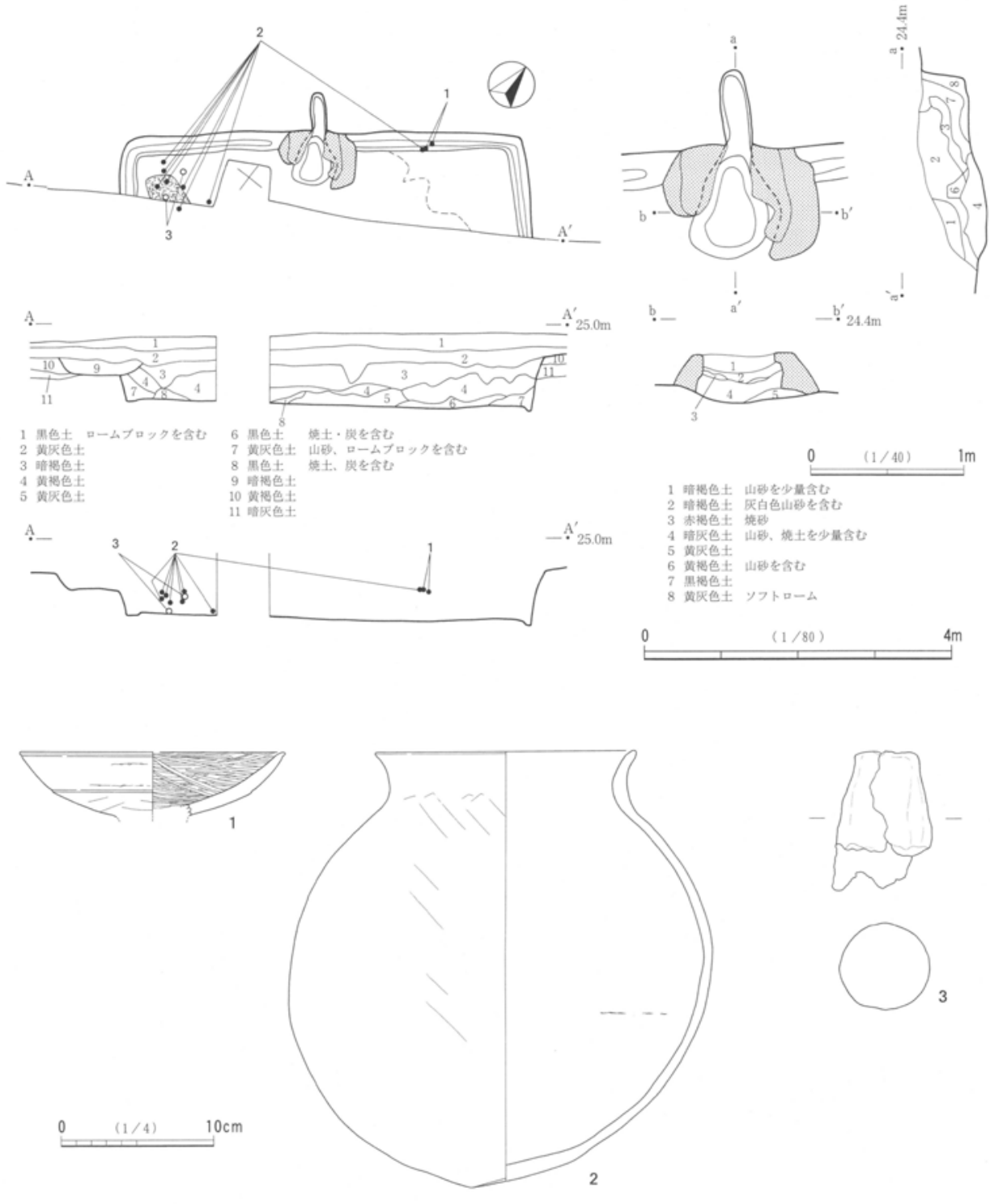
平面形態は方形を呈し，北西壁長は5.2ｍを測る。全体では一辺５ｍ規模の住居が想定される。主軸方位はN-38°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は29cm～38cmで北側が高くなっている。床面は平坦で，カマド前面に硬化面が認められる。壁溝（幅10cm～16cm，深さ4cm～9cm）は，調査範囲内ではカマド部分を除いて全周する。柱穴等は検出されていない。部分的に炭化材や焼土が堆積している。覆土は，黄褐色土と暗褐色土を主体に黄灰色土や黒色土が混在している。



第121図　107出土遺物(2)

カマドは北西壁中央に設けられている。壁を52cm長楕円形に細長く掘込み，角度をもって立上がる煙道部を形成する。煙道部は被熱のため側面が赤化していた。天井部は崩落していたが，袖部は比較的良好に遺存していた。火床は楕円形に6cm掘窪められ，底面はよく被熱していた。

遺物は，土師器高杯(1)・甕(2)などが壁際から出土している。1は高杯の杯部で，内面がよくミガキが施されている。北西壁際の覆土中層から出土した。甕と支脚(3)は，西コーナー付近の床面直上や覆土下層からまとまって出土した。



第122図　111及び出土遺物

114（第123図）

調査区中央，Ｅ６グリッドに位置する。奈良時代の住居跡112と重複し，大半は調査区域外と保存樹木のため，調査できたのは南東壁側の一部である。

平面形態は方形を呈すると考えられ，南東壁の長さ1.75ｍの部分を検出した。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は33cmである。床面は平坦で，調査範囲では硬化面は認められない。壁溝（幅8cm～12cm，深さ4cm前後）が検出されている。P1（径25cm×35cm，深さ18cm）は出入り口施設に伴うピットであろう。

遺物は少なく，覆土中から土師器杯（１）と高杯の脚部（２）が出土している。

116（第123図，図版14・42）

調査区の南西，Ｆ５グリッドに位置する。住居の南西側を，北西壁-南コーナー方向に走る近世の溝状遺構117に削平され，南西壁側で121と重複している。上面が大きく整地されているが，住居のほぼ全体を調査することができた。

平面形態はほぼ正方形を呈し，規模は5.6ｍ×5.7ｍを測る。主軸方位はＮ-50°-Ｗである。壁は垂直に掘込まれているが，壁高は3cm～9cmと全体に低くなっている。床面は平坦で，硬化面は住居北側や南西側に部分的に認められる。壁溝（幅5cm～20cm，深さ10cm前後）は，南コーナーと東コーナーを中心とした範囲に限定的に巡っている。住居北側では確認されていない。住居のやや内側に寄った位置で，４本の主柱穴（P1現存径50cm・深さ34cm，P2径38cm×48cm・深さ41cm，P3径33cm×39cm・深さ39cm，P4径31cm×52cm・深さ22cm）を検出した。P5（径38cm×43cm，深さ19cm）は出入り口施設に伴うピットである。不整円形の貯蔵穴（径67cm×74cm，深さ66cm）は，カマドの北東側に隣接して設けられている。埋土にカマドの砂質粘土が多く流れ込み，土器片の出土も多かった。

カマドは北西壁中央に設けられている。上面を大きく削平され，遺存していた袖部の基底部から，その範囲を確認できる程度である。火床は，楕円形に8cmほど掘窪められているが，被熱は弱い。

遺物はカマド周辺を中心に出土しているが，全体での出土量は少ない。主に床面から土師器杯・甕などが出土している。３～８は土師器杯である。３・６は内外面が丁寧なミガキが施されている。６は体部下半に稜をもち，口縁部は大きく開く形態である。７・８は平底に近く，体部はヘラケズリやナデで仕上げられている。９は甕の底部，10は支脚である。

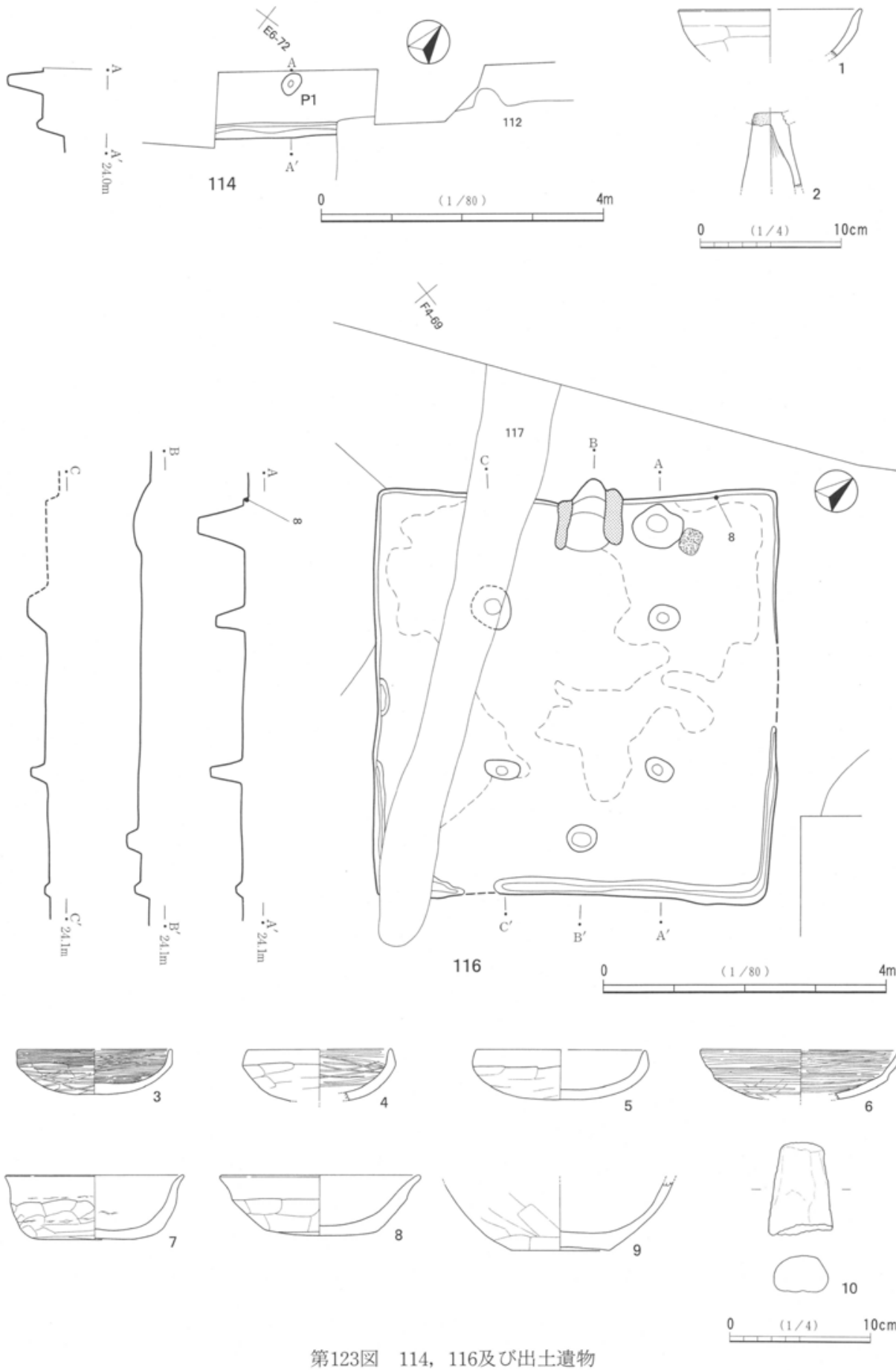
118（第124図，図版42）

調査区の南西，Ｆ５グリッドに位置する。北東側1/2が調査区域外である。南西壁の２か所に掘立柱建物跡の柱穴が位置している。

平面形態は方形を呈し，南西壁長は3.75ｍを測る。規模は一辺3.8ｍ前後と推定される。主軸方位はＮ-56°-Ｗである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は10cmである。床面は凹凸があり，カマド前面から中央にかけて硬化面が広がっている。壁溝（幅12cm～19cm，深さ3cm～8cm）は，調査範囲内では全周する。南西側の床面から，２本の主柱穴（P1径23cm×27cm・深さ44cm，P2径23cm×29cm・深さ39cm）を検出した。覆土は，暗黄褐色土と黒褐色土の上に黄灰色土が堆積している。

カマドは北西壁に設けられている。煙道部の一部に攪乱を受け，右袖部は調査区域外である。壁を20cm円形に掘込み，緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，遺存状態はあまり良好ではない。火床は円形に10cm掘窪められ，底面はよく被熱されていた。

遺物の出土は少なく，１の浅い半球形の体部をもつ土師器杯が，P1西側の床面から出土した。



第123図　114，116及び出土遺物

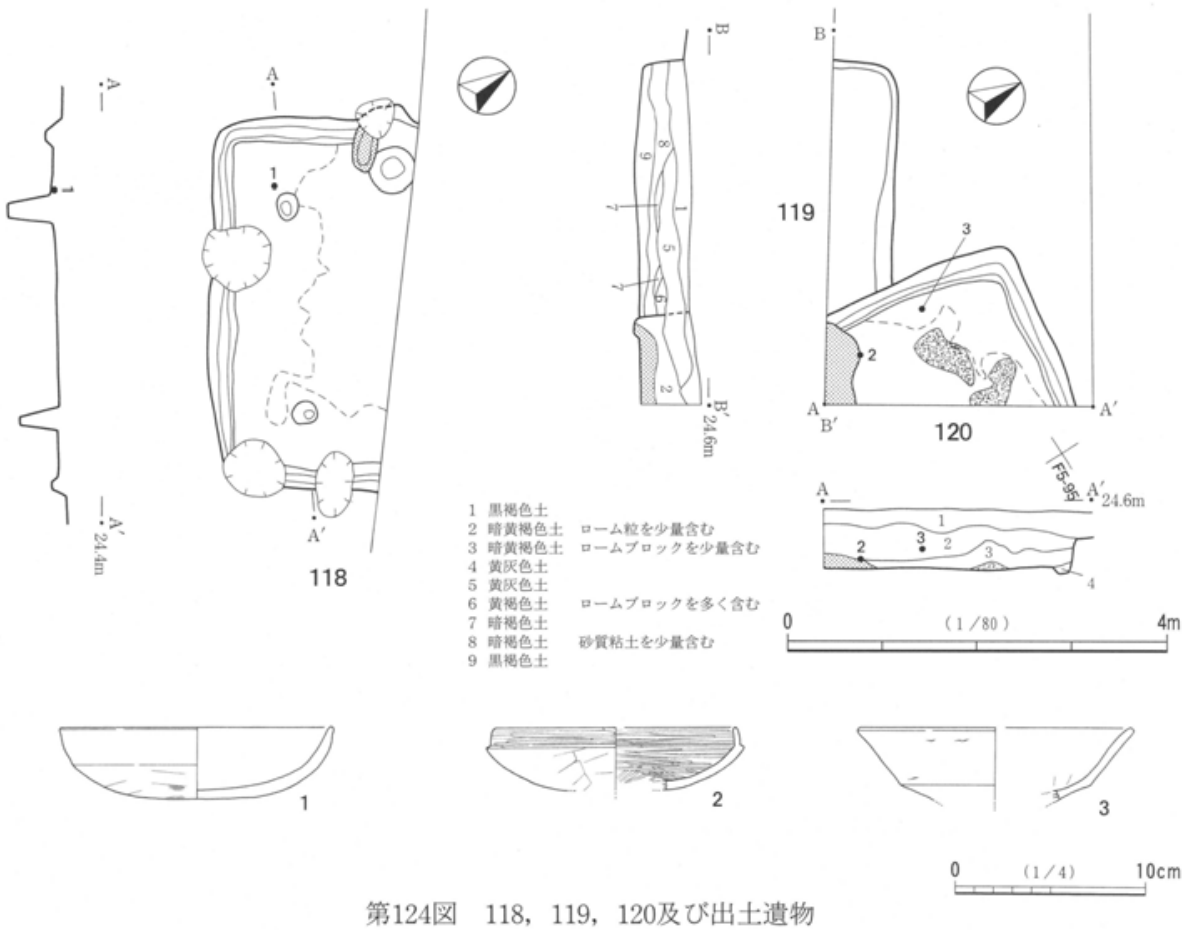
119，120（第124図）

調査区の南西，Ｆ５グリッドに位置する。２軒の住居が重複しているが，南東側と南西側が調査区域外であり，住居のわずかな範囲を調査した。

119は方形の住居跡で，南東側を120に削平されている。北コーナー付近を中心に，北東壁2.4ｍを検出した。北西壁側に砂質粘土が確認されており，この周辺にカマドが存在している可能性がある。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は27cmである。床面は軟弱で，柱穴や壁溝は検出されていない。覆土は，暗褐色土と黒褐色土の上に黄灰色土が堆積している。出土遺物はない。

120は住居の北西側1/5を検出した。北西コーナー周辺で検出できたのは，北壁長1.7ｍ・西壁長2.0ｍである。方形の住居跡で，西壁の南側にカマドの一部を確認した。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は29cmである。床面はコーナー付近を除いて硬化面が広がる。壁溝（幅10cm～15cm，深さ6cm）は，調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていない。覆土は，暗黄褐色土を主体に焼土粒や黄灰色土が混在している。

遺物は，覆土中層から土師器杯・高杯の破片が出土している。２の杯の内面は，丁寧なミガキが施されている。３は高杯の杯部で，下端に明瞭な稜をもつ。



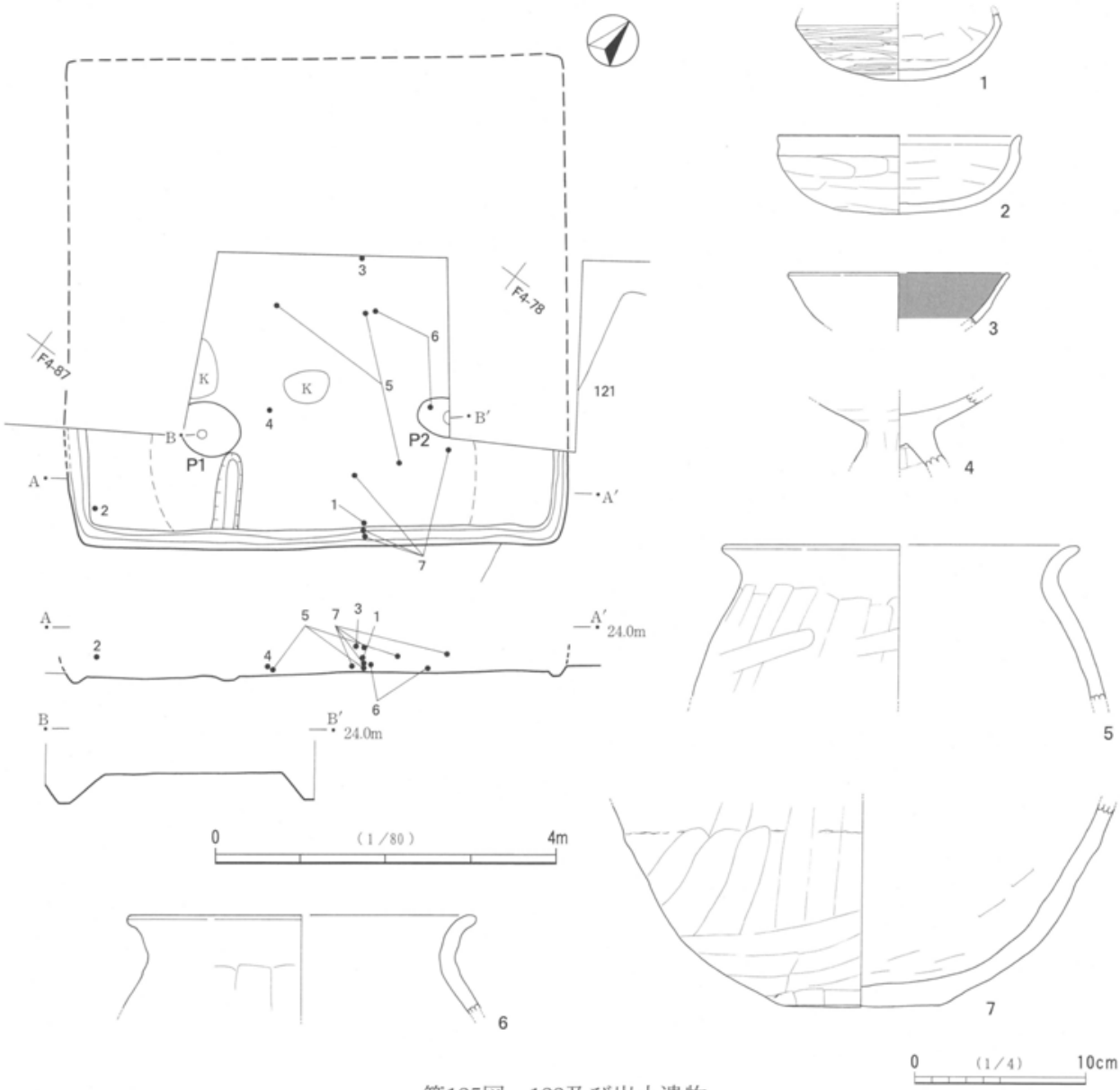
第124図　118，119，120及び出土遺物

122（第125図，図版14・42・43）

調査区南西，Ｆ４グリッドに位置する。北西側の3/5は調査区域外にかかり，東側では121(中期)と重複している。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は5.75ｍを測る。規模は一辺６ｍ前後と推定される。壁は垂直に掘込まれ，壁高は26cmである。床面は凹凸があり，北東壁と南西壁の壁際を除いた中央部には硬化面が広がっている。壁溝(幅12cm～18cm，深さ5cm～8cm)は，調査範囲内では全周する。南東壁の壁溝とP1を，根太痕跡の溝が結んでいる。南東側の床面から２本の主柱穴(P1現存径62cm・深さ35cm，P2現存径47cm・深さ33cm)が検出されたが，いずれも一部が調査区域外にかかっている。カマドは，北西壁に設けられていると考えられる。

遺物は床面や覆土中から，土師器杯・高杯・甕などが出土している。１・２は杯である。２はやや丸底の底部をもち，口唇部はわずかに外反する。３は混入した平安時代の杯で，内面の黒色処理は雑である。４は高杯の杯部下端から脚部にかけての部分である。５～７は甕の口縁部と底部の破片である。



第125図　122及び出土遺物

124（第126図，図版14・43）

調査区中央やや北東寄り，Ｅ６グリッドに位置する。北側は調査区域外にかかり，南西コーナー付近から中央部にかけての範囲に，保存樹木のための未調査区域が延びている。東側では125と重複し，全体では2/5の調査である。

平面形態は方形である。南壁長は推定で5.4m，検出できた東壁長は3.7mである。規模は，一辺5.5m前後と推定される。主軸方位は概ねN-16°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は49cm～54cmである。床面は凹凸があり，硬化面が中央部に広がっている。壁溝(幅20cm～29cm，深さ8cm前後)は，調査範囲内では全周する。幅が広く特徴的である。主柱穴は，南東側の床面から１本(径50cm×67cm，深さ72cm)が検出された。カマドは，北壁に設けられていると考えられる。中央部床面に焼土が堆積している。覆土は，暗褐色土を主体に黒褐色土や明褐色土が混在している。

出土遺物は多く，北側を中心とした範囲の覆土中層から，須恵器杯・蓋，土師器杯・高杯・甕などが出土している。１・２は須恵器杯，３・４は蓋である。４は天井部にヘラ記号が残る。南壁際の床面から出土した。５～８は土師器杯である。７は内外面が赤彩されている。南壁際の床面直上からの出土である。９・10は鉢，11は高杯の脚部である。12・13は甕である。12は底部中央が内面から穿孔されている。14は壺の口縁部である。二重口縁のような稜をもち，内外面は丁寧にミガキが施されている。

125（第126図，図版14）

北西側は大半が調査区域外にかかり，南西側は124に削平されている。東コーナーを中心とした南東側の一部を調査した。方形の住居跡で，検出できたのは北東壁長1.0m・南東壁長2.8mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は17cmである。床面は凹凸があり，硬化面が壁際まで広がっている。壁溝は確認されていない。床面からは２基のピットが検出された。P1(現存径40cm，深さ64cm)は，124に西側を削平されているが柱穴であろう。P2(径47cm×52cm，深さ42cm)は，柱穴よりは出入り口施設に伴うピットの可能性が高い。覆土は暗褐色土が堆積している。土師器高杯片が１点出土したが，図示できなかった。

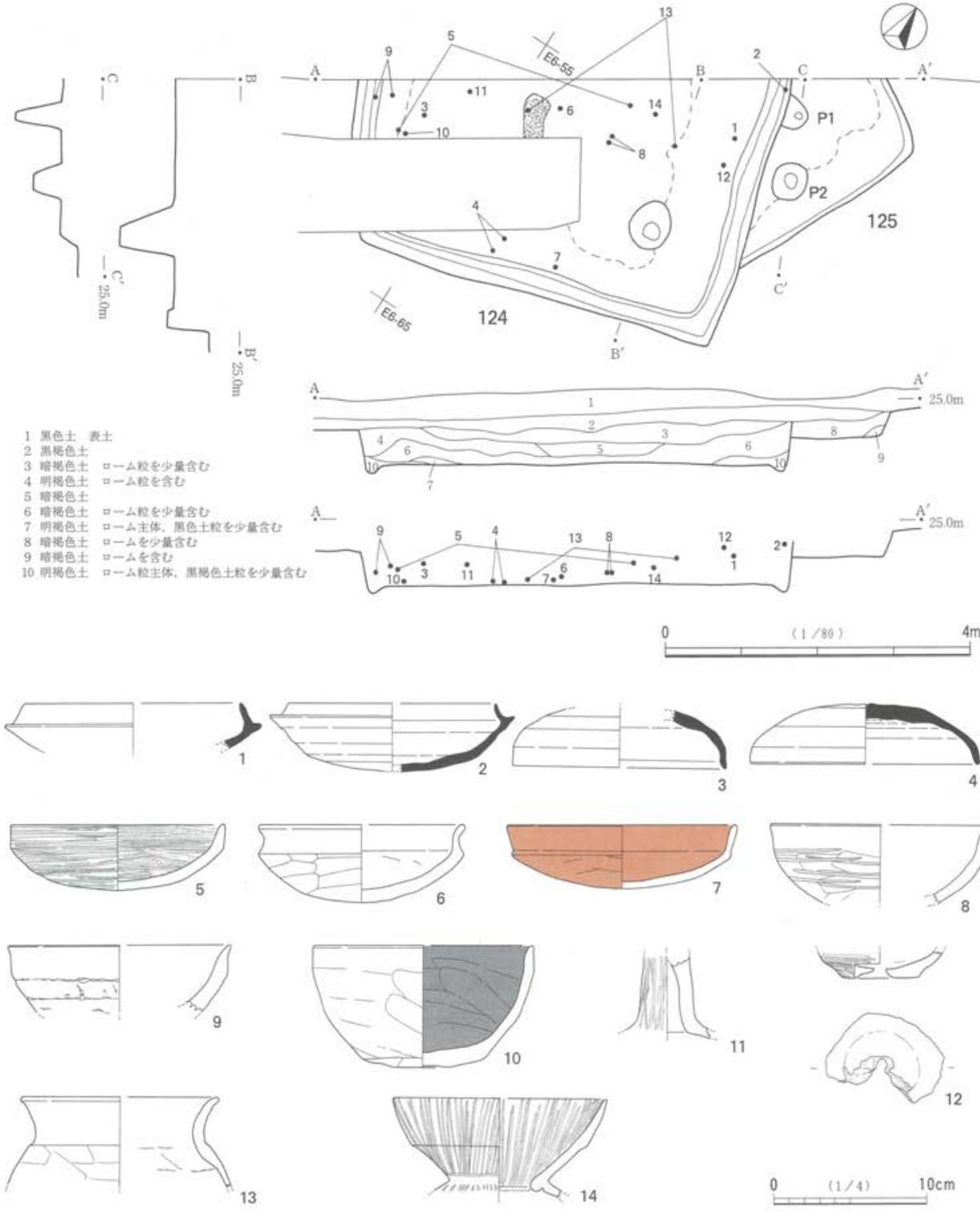
126A・B（第127・128図，第17表，図版14・43・58・60・61）

調査区中央やや北東寄り，Ｅ６グリッドに位置する。南東側は調査区域外にかかり，北・西コーナー周辺は保存樹木のため未調査である。北側は129と，南西側では127と，それぞれ重複している。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は推定で6.4mである。全体の規模は，一辺6.5m前後であろう。主軸方位はN-29°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は最も遺存状態の良好な箇所で44cmである。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅12cm～20cm，深さ2cm前後)は，調査範囲内では全周する。南西壁中央では，根太痕跡の溝が床面に延びている。２本の主柱穴(P1径53cm×62cm・深さ55cm，P2径66cm×69cm・深さ60cm)が，北西寄りの床面から検出された。方形の貯蔵穴(56cm×73cm，深さ67cm)は，カマドからやや離れた北東側に設置されている。焼土ブロックが壁際の床面直上の３か所に，7cm前後堆積しているが炭化材の検出はない。覆土は，暗褐色土を主体に黒褐色土が混在している。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁への掘込みはわずかで，煙道部は直角に立上がっている。天井部は崩落していたが，袖部が比較的良好に遺存していた。火床の掘込みは5cmと浅いが，焼土が7cmの厚さに堆積している。左袖部の外側から支脚が出土した。

遺物は床面や覆土中層から，須恵器杯・蓋，土師器杯・高杯・甕や石製模造品(剣形品)などが出土している。１・２は須恵器杯・蓋である。１は口縁部のたちあがりが短く内傾し，受部は上方にのびる。P2周



第126図　124，125及び出土遺物

辺の床面から出土した。３～６は土師器杯である。３は内外面がよくミガキが施され，４は内外面が赤彩されている。７～９は高杯である。７の杯部と８の脚部は外面が赤彩されている。10は鉢である。丸みをもつ体部に短く外反する口縁部がつき，内外面が赤彩されている。11の甕は住居中央の床面から出土した。15は滑石製の剣形品である。扁平なつくりで稜はなく，表面はよく研磨されている。P1周辺の床面から出土した。17～19は土玉である。17は径2.6cm・高さ2.0cm・孔径5mm～7mm，18は径3.8cm・高さ3.6cm・孔径8mm～12mm，19は大形で径4.1cm・高さ4.0cm・孔径9mmをそれぞれ測る。20は扁平な形態の土製品である。文様はない。1/2の遺存で，現存径3.5cm・高さ1.5cm・孔径6mmを測る。21の支脚は左袖上面から出土した。

126Bは，大半が126Aに削平され，カマドと北東壁の一部(2.7m)が遺存している。規模や主軸方位等は不明である。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は50cmである。壁溝(幅14cm～26cm，深さ3cm～7cm)が検出されたが，上端が曲線的な部分がある。検出された範囲での床面は凹凸がある。２本の主柱穴(P3径21cm×24cm・深さ24cm，P4径25cm×27cm・深さ15cm)が，126Aの床面から検出された。方形の貯蔵穴(現存長97cm，深さ55cm)が，カマドから離れた北コーナー付近に設けられているが，保存樹木下に大半が位置しているため詳細は不明である。覆土は，明褐色土の上に暗褐色土が堆積している。

カマドは129の覆土を掘込んで，北西壁に設けられていた。袖部の一部が検出されたが，遺存状態は悪い。緩やかに立上がる煙道部を確認した。

遺物は，土師器甕(12)と刀子(16)が壁際の覆土上層から出土した。16の刀子は一部欠損するが，完形に近い。全長15.0cmを測る。身部(長さ10.2cm・幅15mm・厚さ2mm)は，刃部の一部と刃関の部分を欠損する。棟関は明瞭に遺存している。茎(長さ4.8cm・幅8mm・厚さ3mm)の先端は，やや丸みをもつ。

127（第127・128図）

南東側は調査区域外にかかり，北東側は126Aに大きく削平されている。西コーナーを中心とした北西側の一部を調査した。方形の住居跡で，検出できたのは北西壁長1.5m・南西壁長1.7mである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は14cm～19cmである。床面は平坦で，硬化面や壁溝は検出されていない。床面から２基のピットを検出したが，このうち柱穴はP1(径22cm×24cm，深さ27cm)であろう。覆土は，暗褐色土と明褐色土が堆積している。

遺物は，須恵器や土師器片などが出土しているが，図示できたのは13の須恵器杯である。

129（第127・128図，図版43）

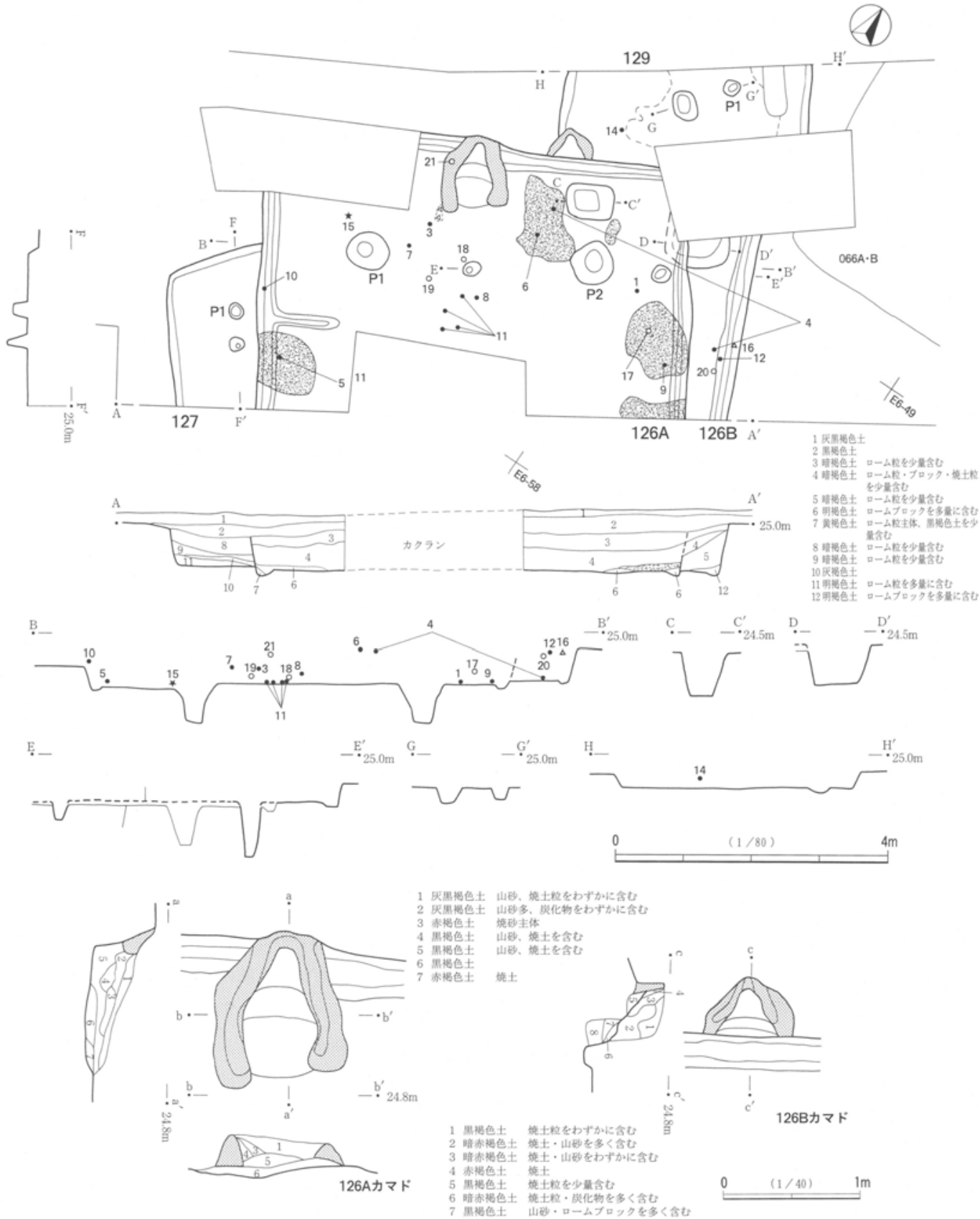
北西側は調査区域外にかかり，南東側は126A・Bに削平されている。住居の中央部の調査である。方形の住居跡と考えられ，検出できたのは北東壁長1.0m・南西壁長0.8mである。壁は緩やかに掘込まれ，壁高は18cmである。床面は平坦で，中央に硬化面が広がっている。床面から２基のピットを検出したが，位置からするとP1(径25cm×27cm，深さ21cm)が柱穴であろう。覆土は，暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器片がわずかに出土している。14は土師器椀で，内外面が赤彩されている。

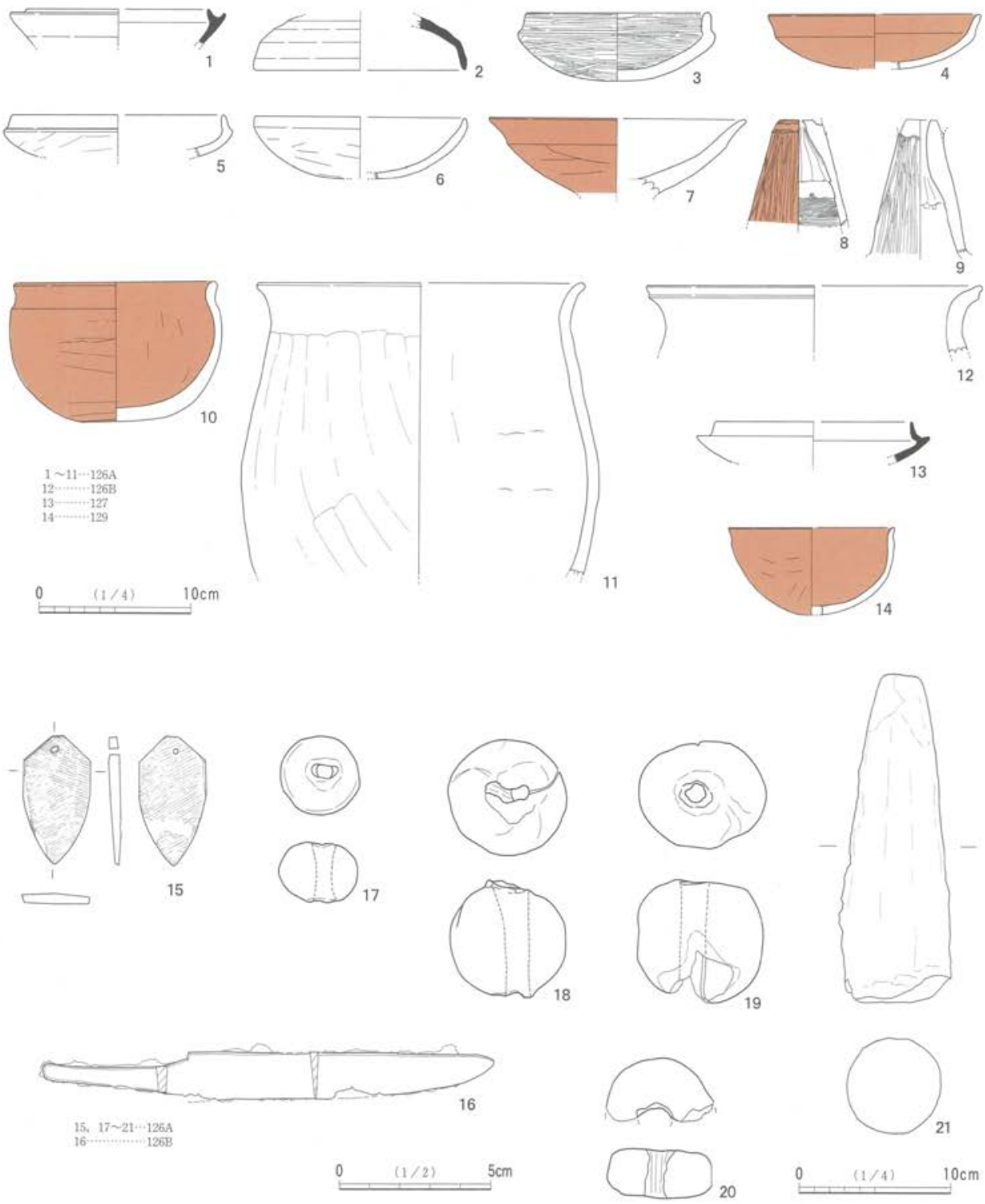
161B（第129図，図版14・43）

調査区の北西，Ｅ５グリッドに位置する。この範囲は狭長ではあるが遺構の密集度が高く，161A(平安時代)と161D(奈良時代)を含めて，161B～161Lまでのほぼ同時期の住居跡が複雑に重複している。

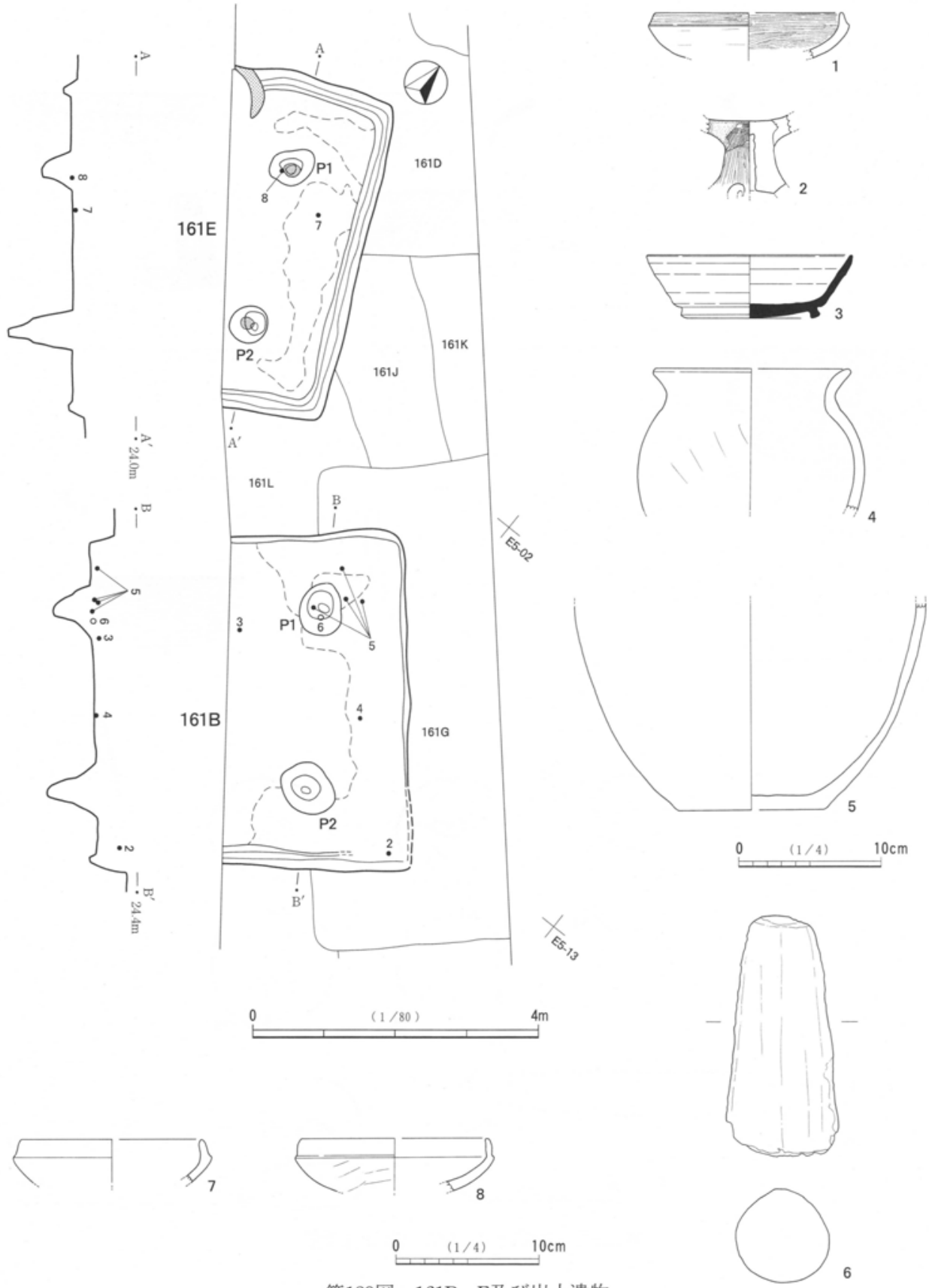
南西側は調査区域外にかかり，161G・Ｉと重複する。北東側1/2の調査である。平面形態は方形を呈し，北東壁長は4.7mを測る。検出できたのは北西壁長2.4m・南東壁長2.6mで，規模は一辺5m前後と推定される。カマドは検出されていないが，北西壁側に設けられていると考えられ，主軸方位は概ねN-39°-



第127図　126A・B，127，129



第128図　126A・B，127，129出土遺物



第129図　161B・E及び出土遺物

Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は南西壁側で45cmである。床面はやや凹凸があり，硬化面が中央部を中心に南北の壁際まで広がっている。壁溝(幅8cm～18cm，深さ8cm)は，南西壁側で検出された。北東側の床面から，２本の主柱穴(P1径61cm×77cm・深さ56cm，P2径62cm×81cm・深さ67cm)を検出した。いずれも底面に柱のあたり痕が認められる。覆土は，暗褐色土を主体に褐色土が混在している。

遺物はP1周辺の床面を中心に，１～６の土師器杯・甕や支脚が出土している。１は土師器杯である。口縁部外面と内面にミガキが施されている。２は高杯の脚部で，南東コーナー付近の覆土上層から出土した。３は須恵器高台付杯である。底部が高台よりわずかに突出している。床面直上からの出土である。４・５は甕である。５はP1周辺に散在して出土した。６の支脚はP1の埋土上面からの出土である。

161E（第129図，図版14）

161Bの北西に位置する。南西側は調査区域外にかかり，161D・I・Jと重複する。

平面形態は方形を呈し，北東壁長は4.6mを測る。検出できたのは北西壁長2.3m・南東壁長1.4mで，規模は一辺５m前後と推定される。主軸方位はN-25°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は比較的遺存状態のよい東コーナー周辺で39cm～46cmである。床面は凹凸があり，硬化面が壁際の一部を除いて広範囲に広がっている。壁溝(幅15cm～19cm，深さ6cm～9cm)は，調査範囲内では全周する。北東側の床面から，２本の主柱穴(P1掘方径50cm×64cm・深さ41cm，P2掘方径54cm×57cm・深さ61cm)を検出した。いずれも床面での検出時には径が15cm～22cmと小さく，底面に柱のあたり痕が認められる。覆土は，暗褐色土と黒色土を主体に褐色土が混在している。

カマドは北西壁に，壁をわずかに掘込んで設けられているが，右袖部側が調査区域外である。左袖部の遺存状態も悪く，火床に堆積していた焼土を検出した。

遺物の出土は少なく，７・８の土師器杯が床面から出土している。

161G（第130・131図，第18表，図版14・43・58）

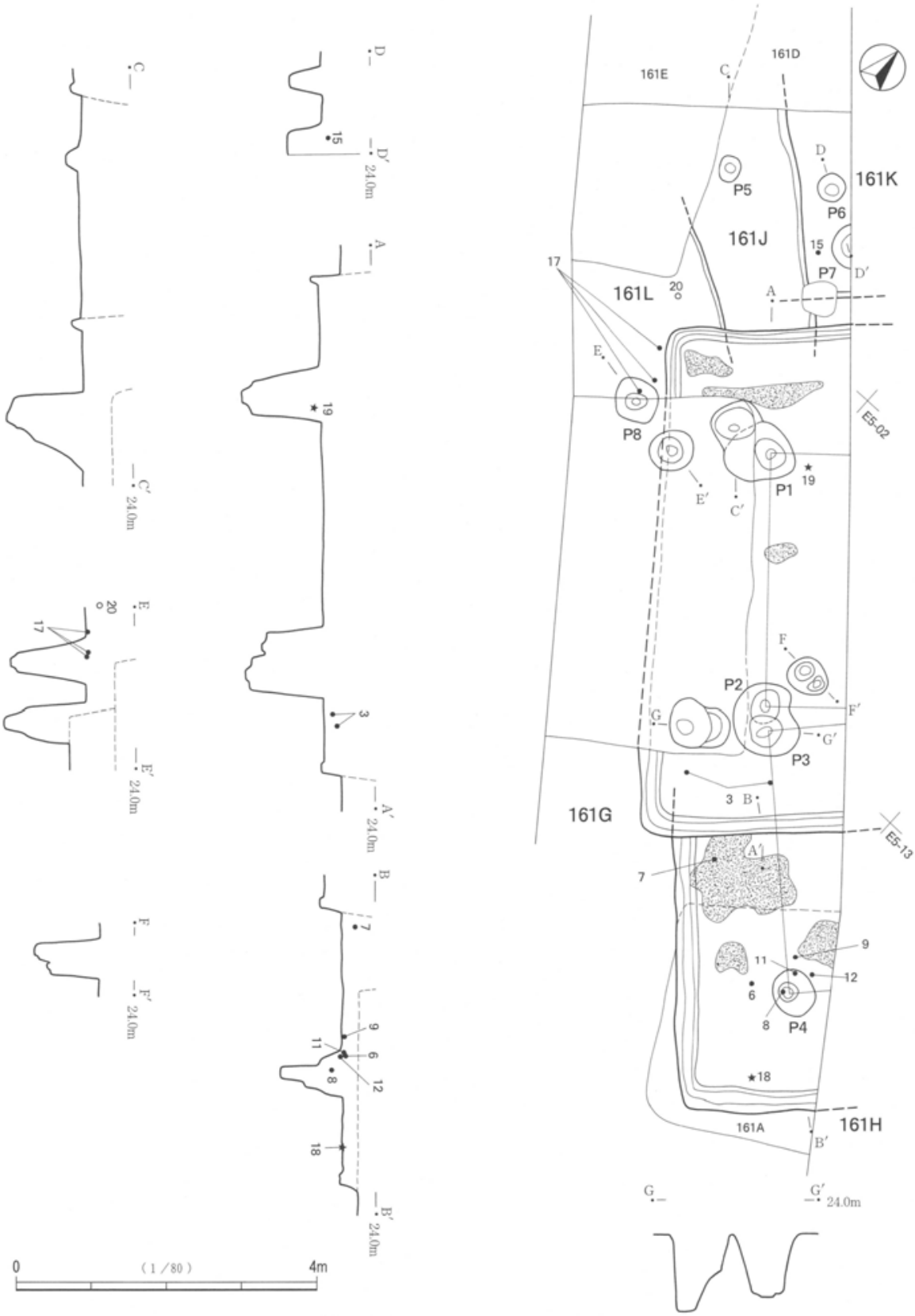
北東側は調査区域外にかかり，南西側の上面を161Bに削平されている。北西・南東側で，161H・J・K・Lとそれぞれ重複しており，全体の2/5の調査である。

平面形態は方形を呈し，南西壁長は6.8mを測る。全体の規模は一辺７m前後と推定される。カマドが北西壁に設けられているとするならば，主軸方位は概ねN-43°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は北西壁側で31cmである。床面は凹凸があり，硬化面は確認されていない。壁溝(幅12cm～20cm，深さ4cm～8cm)は，検出された範囲内では全周する。床面からは重複する住居跡の柱穴も含めて，複数のピットが検出されている。このうち本住居の主柱穴は，P1(現存径75cm，深さ93cm)とP2(現存径74cm，深さ70cm)である。いずれも底面に柱のあたり痕が認められる。焼土が西壁コーナー付近の床面に堆積している。覆土は，暗褐色土と褐色土を主体に赤褐色土と黄灰色砂土が部分的に混在している。

遺物の出土は少なく，１～４の須恵器杯，土師器高杯などや，19の石製模造品(有孔円板)が床面や覆土下層から出土している。１・２は須恵器杯で，覆土中から出土した。３の土師器高杯の脚部は南側床面直上からの出土である。４は手捏ねである。19は滑石製の有孔円板である。P1東側の床面から出土した。

161H（第130・131図，図版14・43・59）

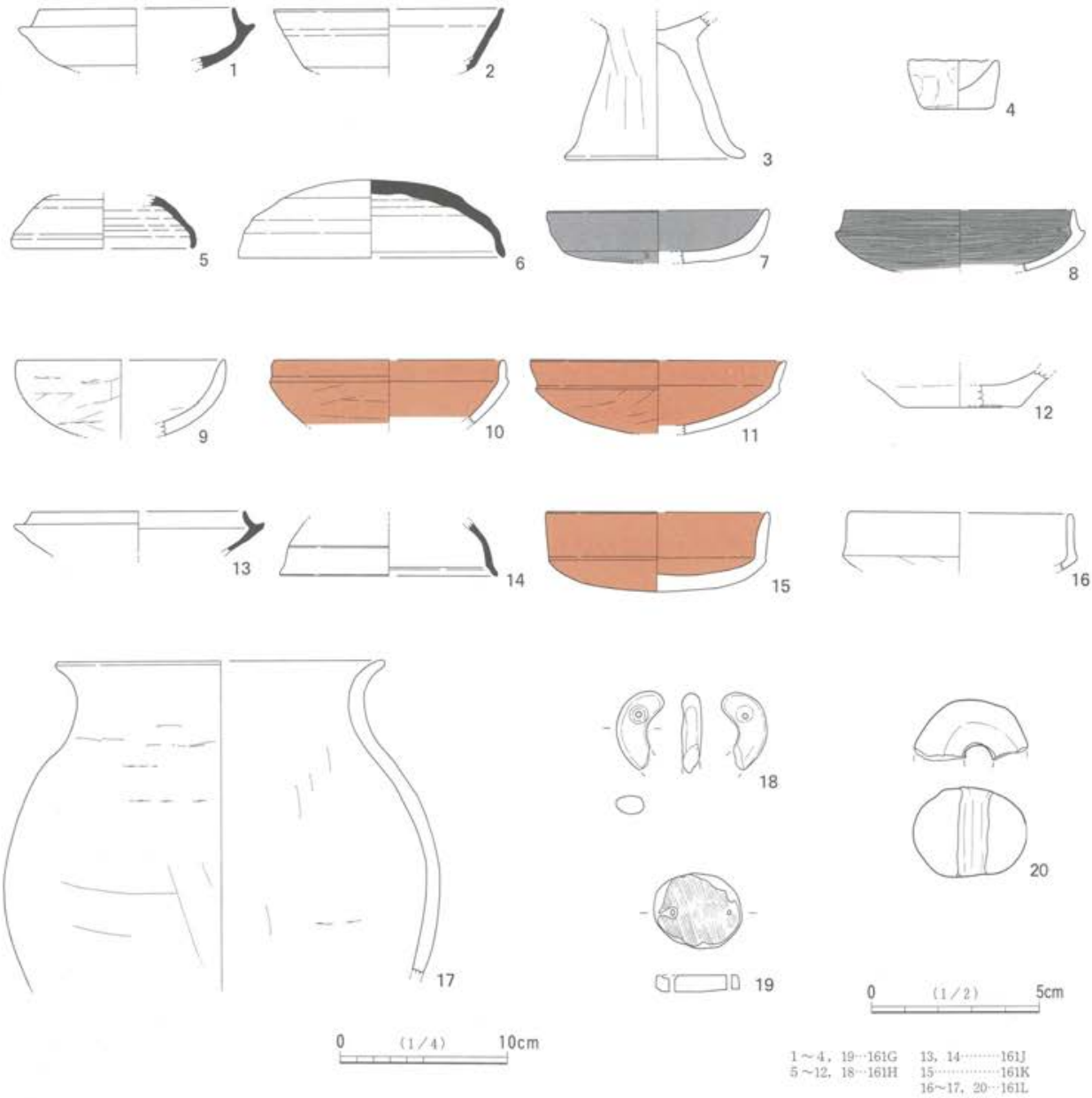
北東側は調査区域外にかかり，上面を161A(平安時代)に，北西側は161Gに，それぞれ削平されている。住居南西部の部分的な調査である。平面形態は方形の住居跡で，検出できたのは南東壁長1.8m・南西壁長3.6mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は30cm～35cmである。床面は凹凸があるが，全体に堅緻



第130図　161G・H・J・K・L

である。壁溝(幅15cm～25cm，深さ6cm～11cm)は，調査範囲内では全周する。主柱穴は床面からP4(径55cm×65cm，深さ83cm)が，検出された。P3(現存径81cm，深さ84cm)は161Gの床面下から確認された。焼土が北西側の床面に堆積している。覆土は暗褐色土が主体である。

出土遺物は比較的多く，5～12の須恵器蓋，土師器杯や18の滑石製勾玉が，住居南側の床面やP1周辺から出土している。5・6は須恵器蓋である。7～11は土師器杯である。内外面が，7・8は黒色処理，10・11は赤彩されている。18の勾玉は尾部を欠損する。片側穿孔で，孔の周囲は円形にくぼんでいる。現存の長径2.3cm・短径1.3cm，腹部径0.60cm×0.85cm，孔径2mmを測る。重量は2.18gである。



第131図　161G・H・J・K・L出土遺物

161J・K・L（第130・131図）

北東側と南西側は調査区域外にかかり，北西側と南東側は重複する住居跡に大きく削平された狭長な範囲に，３軒の住居跡が遺存していた。住居跡の平面形態や規模等は判然としないが，浅い壁と柱穴や焼土の堆積などから，それぞれの住居を判断した。

161Jは中央に位置し，161K・Lとは4cm～8cm程度の浅い壁で区画される。軟弱な床面から浅いピット(P5径30cm×34cm，深さ16cm)を検出したが，掘方が浅いことから柱穴の可能性は低い。遺物は少なく，13・14の須恵器杯・蓋の破片が出土している。

161Kは北東側に位置し，焼土が床面に若干堆積していた。床面から２基のピット(P6径33cm×37cm・深さ41cm，P7現存径58cm・深さ47cm)を検出した。出土遺物は少なく，図示できたのは15の内外面が赤彩された土師器杯で，口縁部が直立している。

161Lは南西側に位置し，床面から方形の柱穴を検出した(P8：52cm×56cm，深さ103cm)。出土遺物は少ないが，土師器杯(16)・甕(17)や土玉が床面から出土している。17の甕はP8周辺から散在して出土した。20の土玉は覆土中層からの出土である。1/2の遺存で，現存径3.4cm・高さ2.7cm・孔径9mmを測る。

164A・B・C（第132図，図版15・43・44）

調査区中央，Ｅ５グリッドに位置する。３軒の住居跡が重複し，北西側は大半が調査区域外である。新旧関係は，164C(旧)→164B→164A(新)の順である。

164Aは，164Bの内側に入り込むように位置している。方形の住居跡で，南西壁長は4.9mを測る。壁の掘込みは判然としないが，北側での壁高は39cmである。床面は凹凸があり，検出した範囲では硬化面がほぼ全面に広がっている。壁溝は検出されていない。南コーナー付近の床面からピット(径29cm×33cm)を検出したが，掘込みは6cm程度と浅い。164Aのものではないが，位置的に164Cの柱穴の可能性もある。覆土は，暗褐色土を主体に暗黄褐色土が混在している。

遺物は南コーナー付近の床面を中心に，須恵器杯や土師器杯が出土している。１は須恵器杯である。口縁部のたちあがりは短く，受部はやや上方にのびる。２・３は土師器杯で，内外面が黒色処理されている。４の甕は164B出土の破片と接合するが，こちらに掲載する。

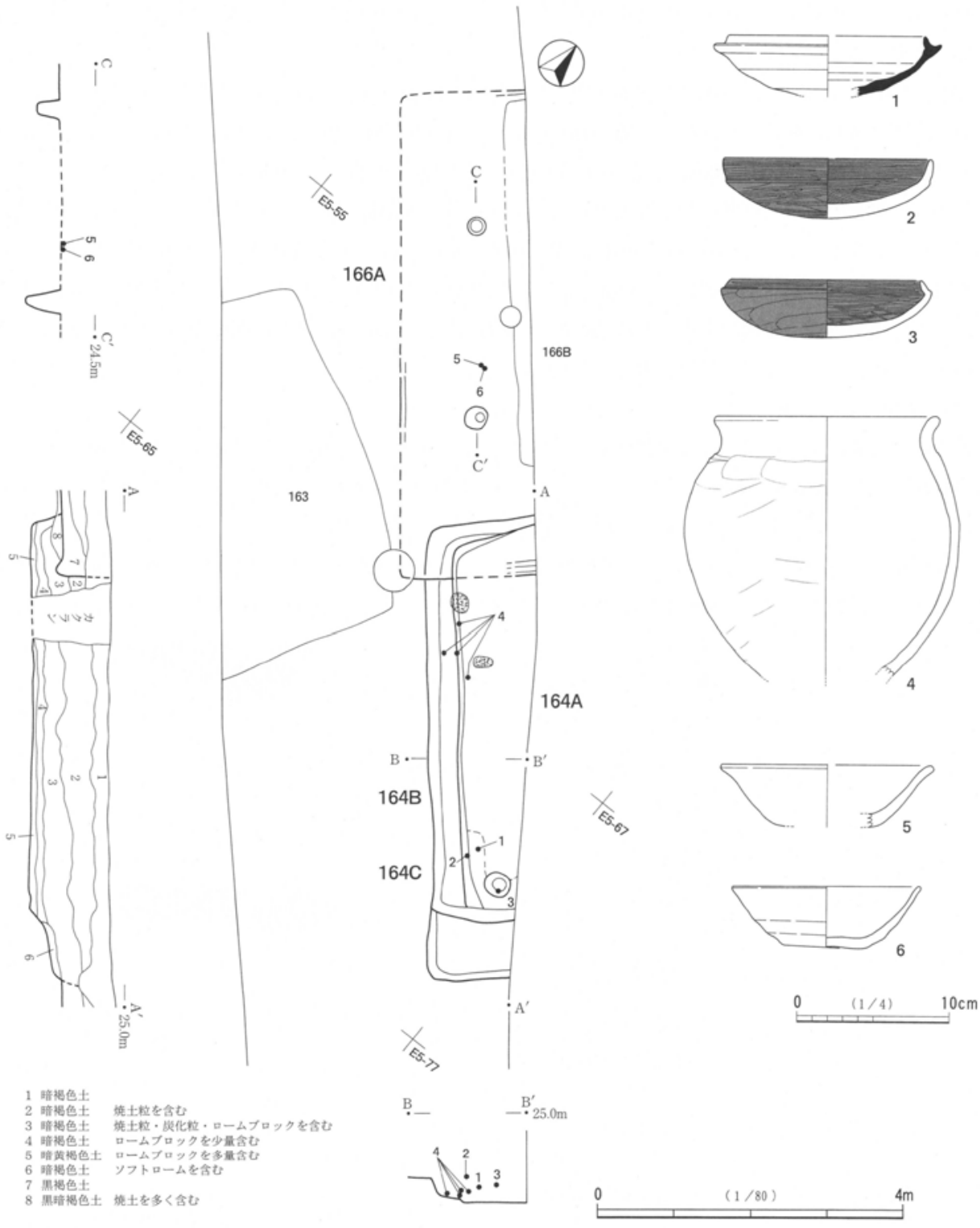
164Bは，164Aの外側に位置する方形の住居跡で，南西壁長は5.1mを測る。壁は緩やかに掘込まれ，壁高は18cm～27cmである。遺存している床面は凹凸があり，柱穴や壁溝は検出されていない。遺物は南西壁際から，164Aの破片と接合する４の土師器甕片が出土している。

164Cは，南コーナー付近の一部を検出した。方形の住居跡であるが，規模等は不明である。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は7cm～12cmである。柱穴や壁溝は検出されていない。出土遺物はない。

166A（第132図，図版44）

調査区中央，Ｅ５グリッドに位置する。166B(中期)と164Aの上面を削平して構築されている。上面は整地のため壁や床面は不明であるが，調査区域外のセクションから一辺６m前後の規模と推定される。主軸方位は164Aとほぼ一致しており，ほぼ同時期の住居跡であろう。セクションには，ほぼ平坦で部分的に硬化面がみられる床面や，垂直に掘込まれた壁(壁高27cm～33cm)と，壁溝(幅17cm，深さ5cm～8cm)が観察される。南側の床面には焼土の薄い堆積がみられる。主柱穴は２本(P1径24cm×27cm・深さ29cm，P2径29cm×33cm・深さ43cm)が検出された。覆土は，黒暗褐色土の上に黒褐色土が堆積している。

遺物は，床面直上から伴うものではないが，５・６の平安時代の土師器杯が出土している。本住居の上に平安時代の住居跡が存在していた可能性が高く混入品である。



第132図　164A・B・C，166A及び出土遺物

200A・B（第133図，図版15・44）

調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。東側の200Ｃ(前期)と重複し，東側コーナー付近を削平している。２軒の住居跡が重複して検出されたが，西側の大半が調査区域外にかかり，ともに東側のコーナー付近を部分的に調査した。全体の規模は不明で，柱穴・カマド等は検出されていない。覆土は，いずれも暗褐色土と黒褐色土が混在している。

200Ａは北側の住居跡で，200Ｂの北側を削平している。検出できたのは北東壁長2.2m・南東壁長3.5mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存状態の良好な北側で52cmである。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～20cm，深さ2cm～5cm)は，調査範囲内では全周する。

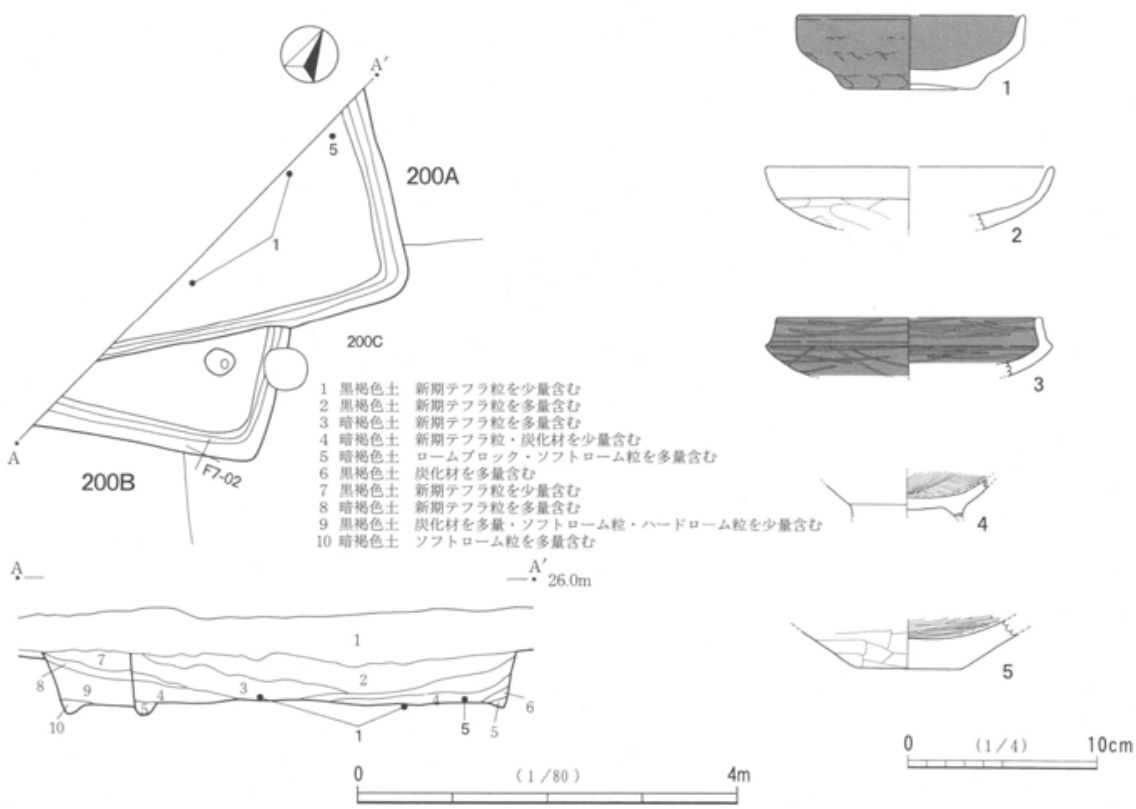
遺物は，覆土中から土師器杯などが出土した。１～３は土師器杯である。１は特異な形態で，平底の底部に木葉痕が残る。１・３は内外面が黒色処理されている。４は混入した平安時代の杯の破片である。

200Ｂは東壁長1.5m・南壁長2.3mを検出した。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は南側で51cm前後である。床面は平坦で，堅緻である。壁溝(幅8cm～18cm，深さ7cm前後)は，調査範囲内では全周する。遺物はわずかに出土したが，図示できるものはない。

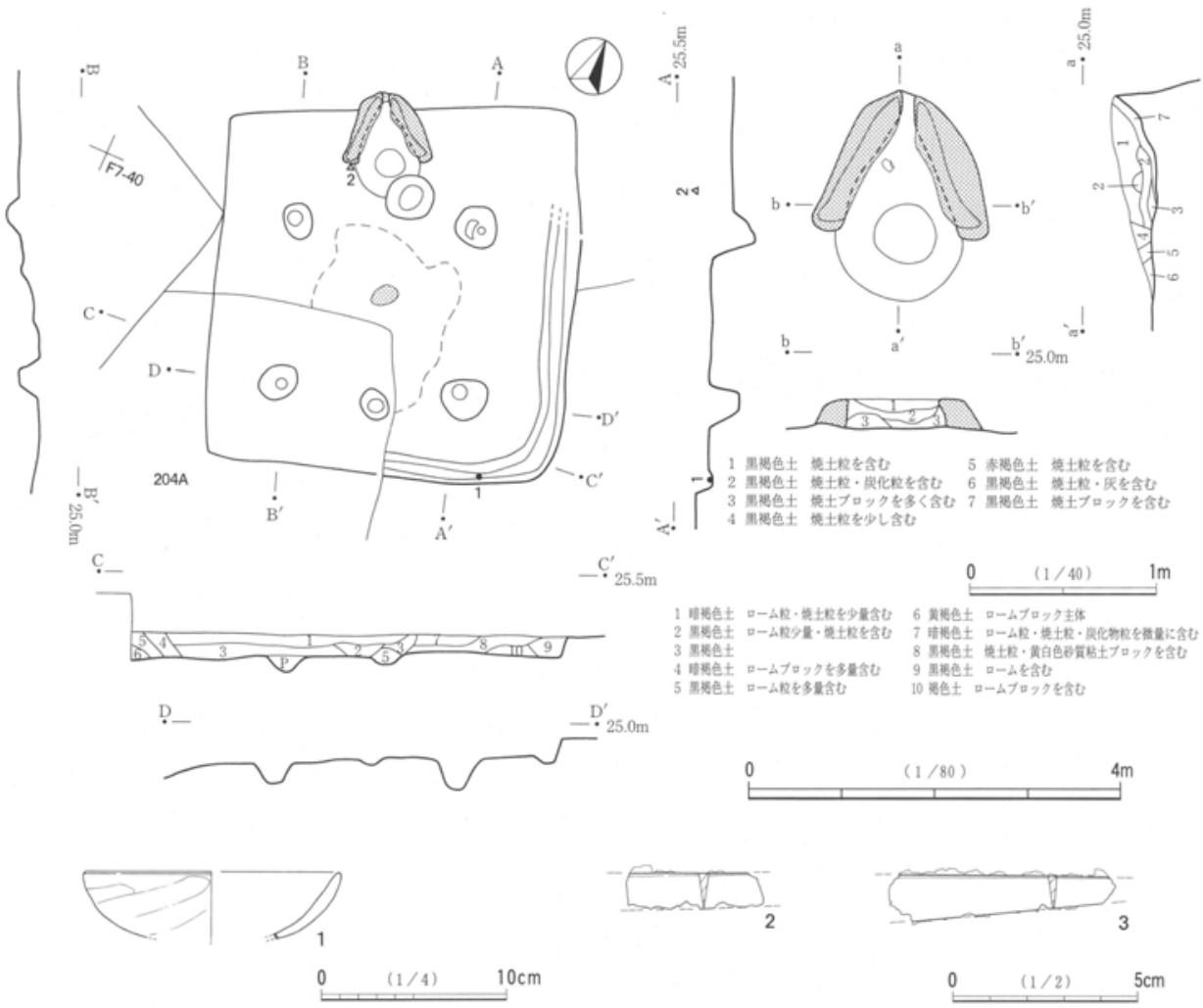
204Ｂ（第134図，図版61）

調査区の南東，Ｆ７グリッドに位置する。全体に上面を整地のため削平されている。南西側は奈良時代の住居跡204Ａと重複し，床面まで失っている。北側は重複する203(中期)を先行して調査したため，カマドの一部や，壁，床面等は不明である。壁は，南壁と東壁の一部で遺存している。

平面形態は方形を呈し，規模は3.9m×4.0mと推定される。主軸方位はN-19°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は比較的遺存状態の良好な東壁側で21cmである。床面は凹凸があり，柱穴に囲まれた



第133図　200A・B及び出土遺物



第134図　204B及び出土遺物

範囲に硬化面が広がっている。壁溝(幅17cm～23cm，深さ5cm～9cm)は，南壁から東壁の一部で遺存していた。主柱穴の４本のうち，P1(径31cm×41cm，深さ37cm)・P2(径45cm×50cm，深さ44cm)・P3(径45cm×50cm，深さ35cm)は床面から，P4(現存径38cm×48cm，深さ22cm)と出入り口施設に伴うピットP5(現存径28cm×35cm，深さ16cm)は204Ａの床下から，それぞれ検出された。

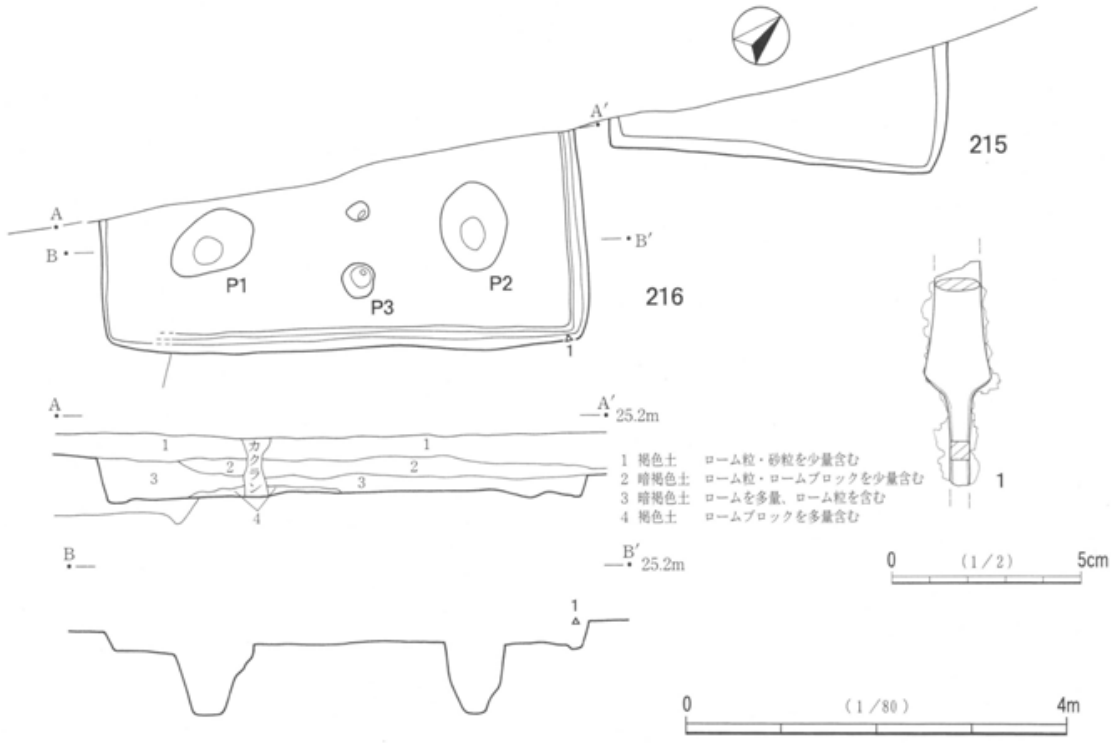
カマドは北壁中央に設けられている。煙道部は緩やかに立上がり，袖部が開くように遺存していた。袖部の内壁はよく被熱され赤化している。火床は円形に4cmほど掘窪められ，焼土が堆積していた。

遺物の出土は少なく，土師器杯(１)や刀子(２・３)が出土している。１は浅い皿状の杯で，南壁下の壁溝内から出土した。２・３は刀子の身部である。２は身部の中央で，現存長3.7cm・幅9mm・厚さ3mmを測る。３は切先と関部を欠損する身部で，現存長6.1cm・幅7mm～12mm・厚さ2mmを測る。

216，215（第135図，図版15・61）

調査区の南東，Ｇ６グリッドに位置する。北西側は調査区域外にかかり，南西側で217Ｃ(中期)の上面を削平している。住居の南東側2/5の調査である。北東に隣接する215(時期不明)もあわせて報告する。

平面形態は方形を呈し，南東壁長は5.1ｍを測る。北東壁長2.2ｍ，南西壁長は1.3ｍを検出した。カマドが北西壁に設けられていたとすると，主軸方位は概ねＮ-49°-Ｗである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は



第135図　216，215及び出土遺物

22cm～27cmである。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅12cm～17cm，深さ4cm前後)は，重複する南西側で不明瞭になるが，そのほかの箇所では全周する。南東側の床面から，長楕円形の２本の主柱穴(P1径62cm×96cm・深さ77cm，P2径69cm×95cm・深さ79cm)を検出した。P3(径33cm×38cm，深さ44cm)は，出入り口施設に伴うピットである。覆土は，暗褐色土を主体に茶褐色土が混在する。

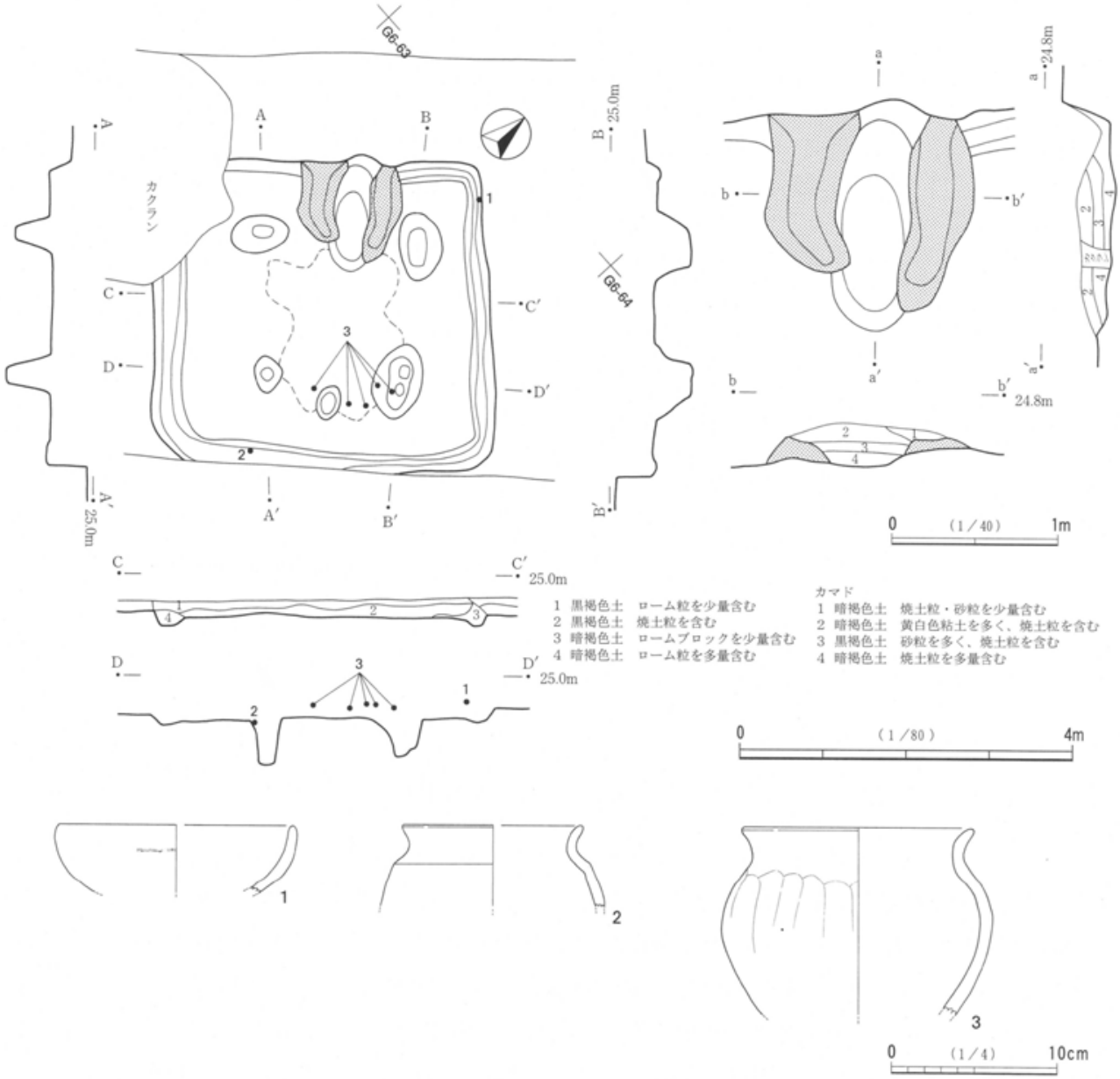
出土遺物は少なく，土師器甕片や鉄鏃が覆土上層から出土している。１は鉄鏃である。鏃身の先端と茎の下半を欠損する。鏃身の形態が判然としないが，鏃身関部が山形関に近いかたちを呈することから，柳葉鏃群に含まれるであろう。現存長は5.9cmを測る。鏃身は両丸造で現存長3.1cm・幅1.4cm・厚さ3.5mm，茎は断面方形で現存長2.8cm・幅5mm・厚さ5mmを測る。東コーナー付近の覆土上層から出土した。

215は216の北東側に隣接し，南東側の一部を検出した。方形の住居跡で，南東壁長は3.4mを測る。壁は垂直に掘込まれ，壁高は5cmである。床面は凹凸があり，柱穴等は検出されていない。出土遺物はない。

222（第136図，図版44）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。上面がすでに整地のため削平されている。南東壁の上面が調査区域外にかかり，西コーナー付近は木根による攪乱を受けている。

平面形態は方形を呈し，規模は3.7m×4.05mである。主軸方位はN-47°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は遺存の比較的良好な箇所でも15cm程度である。床面は凹凸があり全体に堅緻で，特に中央部はよく踏み固められている。壁溝(幅14cm～29cm，深さ3cm～7cm)は全体に幅が広く，カマド部分を除いて検出した範囲内では全周する。床面から複数のピットを検出したが，このうち主柱穴はP1～P4である。P1(径42cm×70cm，深さ36cm)，P2(径52cm×80cm，深さ42cm)，P3(径60cm×92cm，深さ49cm)は，いずれも長楕円形で底面の形態が方形である。P4(現存径35cm×40cm，深さ58cm)は，浅い土坑内に位置してい



第136図　222及び出土遺物

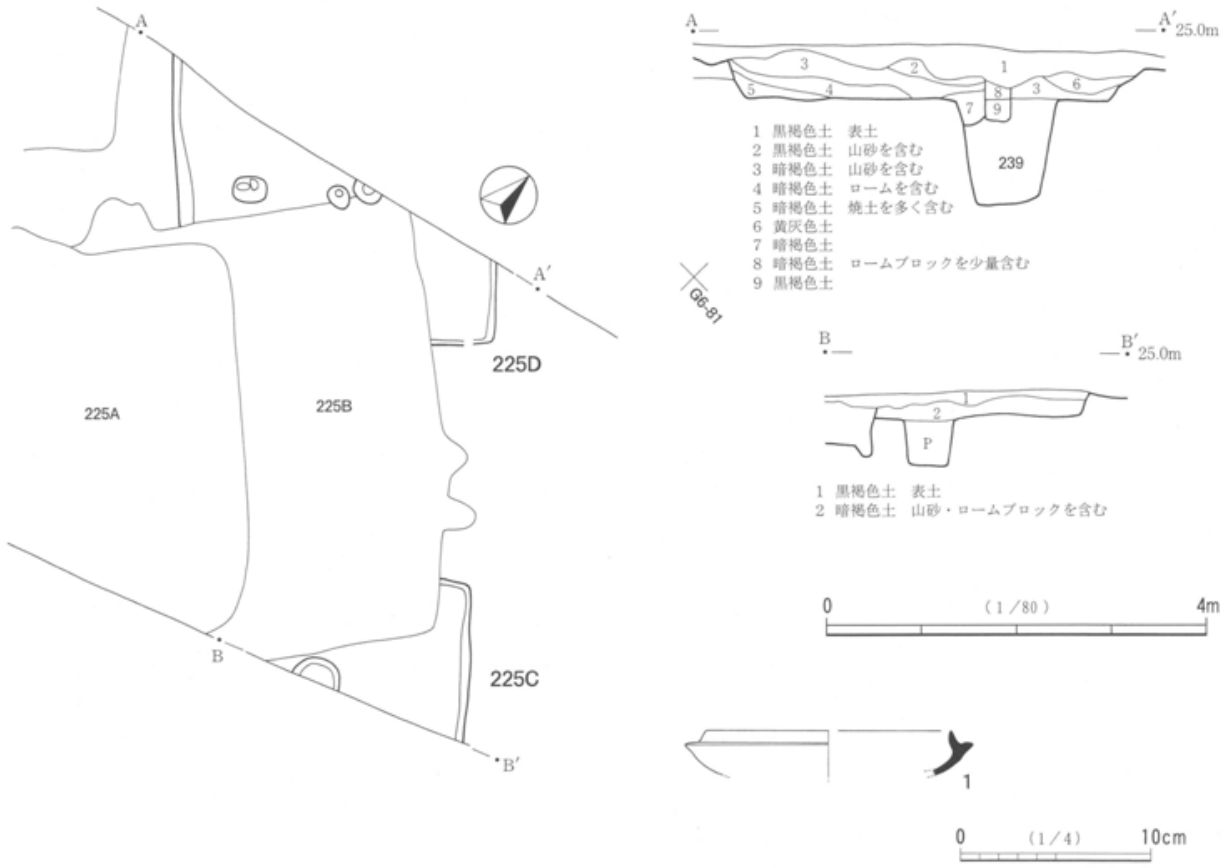
る。P5(径28cm×42cm，深さ8cm)は，出入り口施設に伴うピットであろう。覆土は，暗褐色土と黒褐色土が混在している。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁を10cm掘込んで，緩やかに立上がる煙道部を形成する。煙道部の内壁には上面からピットが掘込まれている。天井部は崩落し，袖部の遺存状態もあまり良好ではない。火床の掘込みは浅いが，焼土が堆積していた。

遺物は南東側を中心に，土師器杯・甕などが出土している。１の杯は北コーナー付近の覆土中層からの出土である。２・３は甕である。２は南東壁下の壁溝内，３はP3周辺の覆土下層からそれぞれ出土した。

225C・D（第137図）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。225Ｃは南東側は調査区域外にかかり，西側は平安時代の住居跡225Ｂに削平されている。北コーナーを中心とする住居の北東側を部分的に調査した。平面形態は方形と考えられ，検出できた北東壁長は1.7ｍである。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は12cmである。床面は



第137図　225C・D及び出土遺物

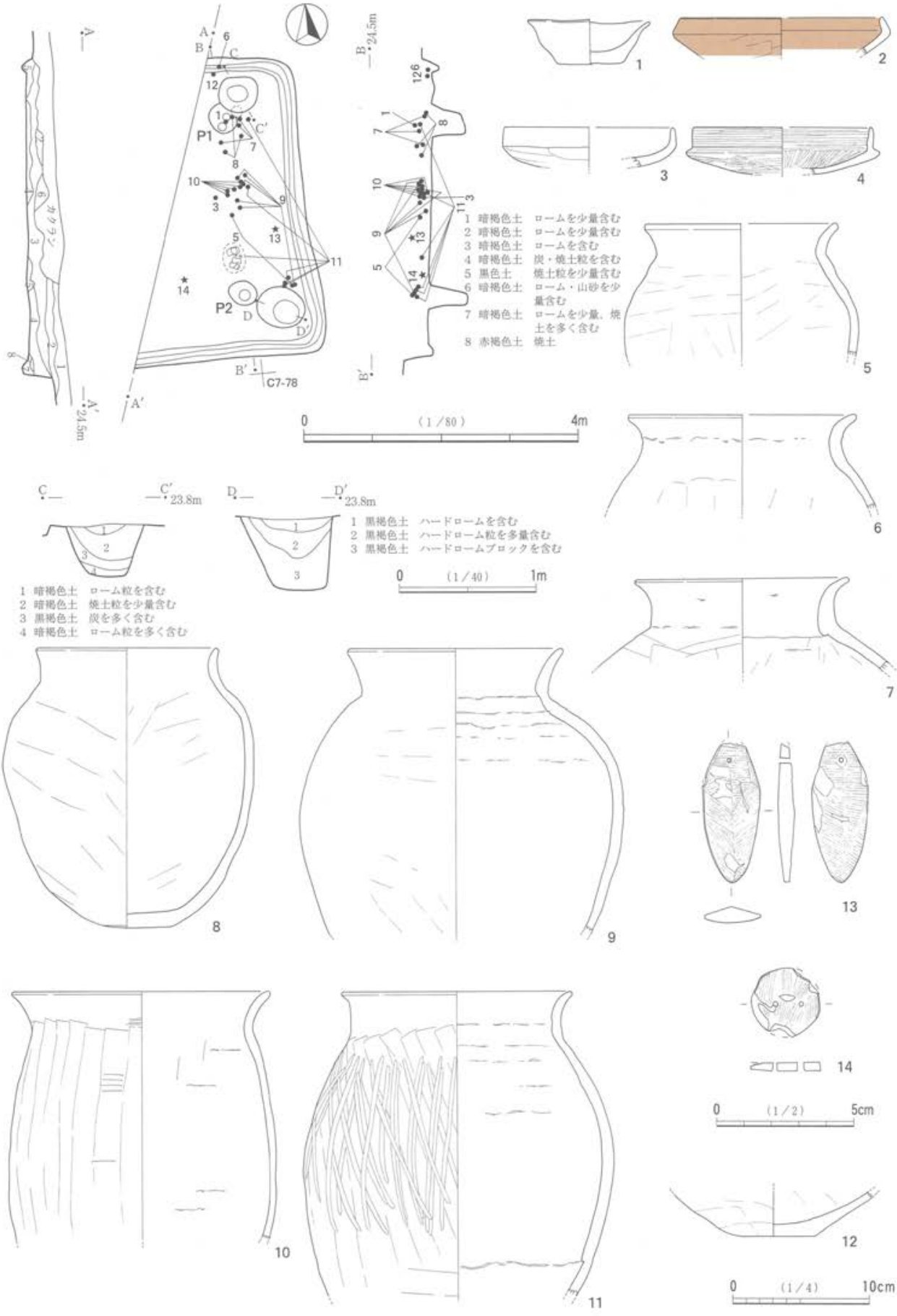
凹凸があり，全体に軟弱である。柱穴や壁溝は検出されていない。覆土は黒暗褐色土が堆積している。遺物は，１の須恵器杯などが覆土中から出土している。

225Dは北西側が調査区域外にかかり，南東側は225Bに削平されている。中央部で縄文時代の陥穴239を削平している。東コーナー周辺と西側の一部を調査した。平面形態は方形で，北西壁を部分的に1.6m検出できた。推定で一辺3.4m前後の規模であろう。壁は垂直に掘込まれ，壁高は20cmである。床面はほぼ平坦である。床面からピットが検出されたが，柱穴ではない。覆土は，暗黒褐色土・暗黄褐色土を主体に，黒色土やローム粒が混在する。出土遺物は少なく，図示できるものはない。

253（第138図，第17・18表，図版15・44・58）

調査区の北，Ｃ７グリッドに位置する。住居跡の西側は調査区域外にかかり，東側2/5の調査である。

平面形態は方形を呈し，東壁長は4.3mを測る。北壁長1.2m，南壁長2.8mを検出し，一辺4.5m前後の規模が推定される。主軸方位を南北方向にとる。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は19cm～36cmで南側が高くなっている。床面は凹凸があり，全体に堅緻である。壁溝（幅10cm～14cm，深さ4cm～8cm）は，調査範囲内では全周する。東側の床面から２本の主柱穴（P1径38cm×46cm・深さ51cm，P2径39cm×43cm・深さ55cm）を検出した。２基の楕円形の貯蔵穴は，住居の２か所のコーナーに設けられている。北東コーナーの貯蔵穴（径51cm×58cm，深さ39cm）は，P1と連結している。埋土には，暗褐色土を主体に黒褐色土が混在する。底面や埋土下層から，土師器甕片などが出土した。南東コーナーの貯蔵穴（径61cm×72cm，深さ58cm）は，ハードロームを多く含む黒褐色土が堆積している。埋土上層からは，土師器杯が出土した。住居覆土は，暗褐色土を主体に黒色土がわずかに混在する。



第138図　253及び出土遺物

遺物は多く，東壁側の床面直上から土師器杯や甕を中心に出土している。滑石製の石製模造品(剣形品・有孔円板)は覆土中からの出土である。１～４は土師器杯である。１は全体をナデで調整している，手捏ねのような杯である。２は内外面が赤彩されている。４は丁寧なミガキが内外面に施されている。５～12は甕である。９～11のように柱穴周辺や中間の床面から，まとまって出土しているものが多い。７・11の口頸部は，体部から直立し口縁部が小さく外反する形態である。11の器面はタテ方向にナデが加えられている。８の口頸部も短く，全体に雑なつくりである。10は長胴のタイプで，口縁部はくの字状に外反する。13の剣形品は，両端の一部を欠損する。両面が研磨され，表面には低い稜が形成されている。覆土上層からの出土である。14も平滑に研磨されている。床面直上から出土した。

257（第139図，図版15・44）

調査区の北，Ｃ７グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかり，北側は奈良時代後半の住居跡258に削平されている。北西コーナー周辺は攪乱を受けており，調査できたのは住居南西の2/5である。

平面形態は方形を呈し，西壁長は推定で5.0ｍである。南壁長は部分的に2.7ｍを検出しており，住居跡の規模は一辺５ｍ前後であろう。壁は，ほぼ垂直に掘込まれている。壁高は2cm～19cmを測り，北側にすすむに従って低くなっている。床面は平坦で，全体に軟弱である。壁溝(幅10cm～16cm，深さ3cm前後)は，調査範囲内では全周する。住居西側から２本の主柱穴を検出した。南西側の床面からはP2(径52cm×54cm，深さ36cm)を検出したが，P1(現存径29cm×33cm，深さ9cm)は258の床面に下部が遺存していた。覆土は，ローム粒を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は南側の床面から，須恵器杯，土師器杯・甕などが出土している。１は須恵器杯である。やや内傾する短い口縁部のたちあがりと，水平にのびる受部をもつ。２は内外面が赤彩された土師器杯である。ともにP2の北側床面から出土している。３～８は平安時代の土器で混入品である。

261（第139図，図版16）

調査区の北，Ｃ７グリッドに位置する。西側は調査区域外にかかるため，東側2/5の調査である。

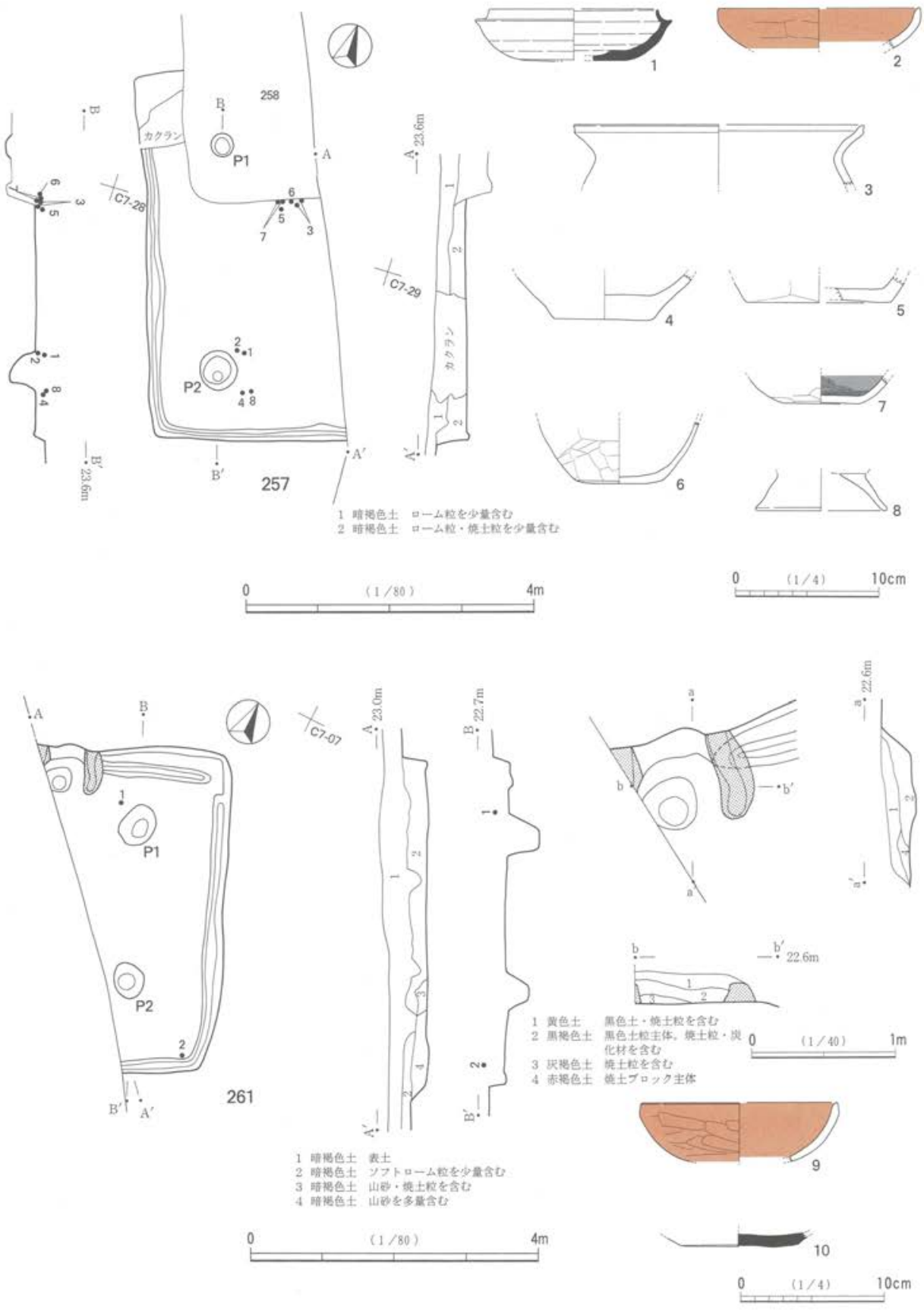
平面形態は方形を呈し，東壁長は4.4ｍを測る。北壁長2.6ｍ・南壁長1.1ｍを検出できた。規模は，一辺4.5ｍ前後と推定される。主軸方位はＮ-25°-Ｗである。壁はほぼ垂直に掘込まれている。壁高は，12cm～34cmで東壁側を除いては低くなっている。床面は平坦で，カマド周辺から柱穴に囲まれた範囲は堅緻であるが，壁際周辺はやや軟弱である。壁溝(幅12cm～18cm，深さ3cm前後)は，北コーナーで一部途切れているが，そのほかは調査範囲内では全周する。２本の主柱穴(P1径46cm×60cm・深さ44cm，P2径42cm×54cm・深さ32cm)が，東側で検出された。覆土は暗褐色土が主体である。住居中央の覆土中層に，砂質粘土が投棄されて堆積している。

カマドは北壁に設けられているが，左袖部は大半が調査区域外にかかっている。壁への掘込みは6cm程度と浅く，煙道部の立上がりは緩やかである。天井部は崩落し，右袖部が遺存していた。火床は皿状に8cm掘窪められ，灰や焼土が堆積していた。

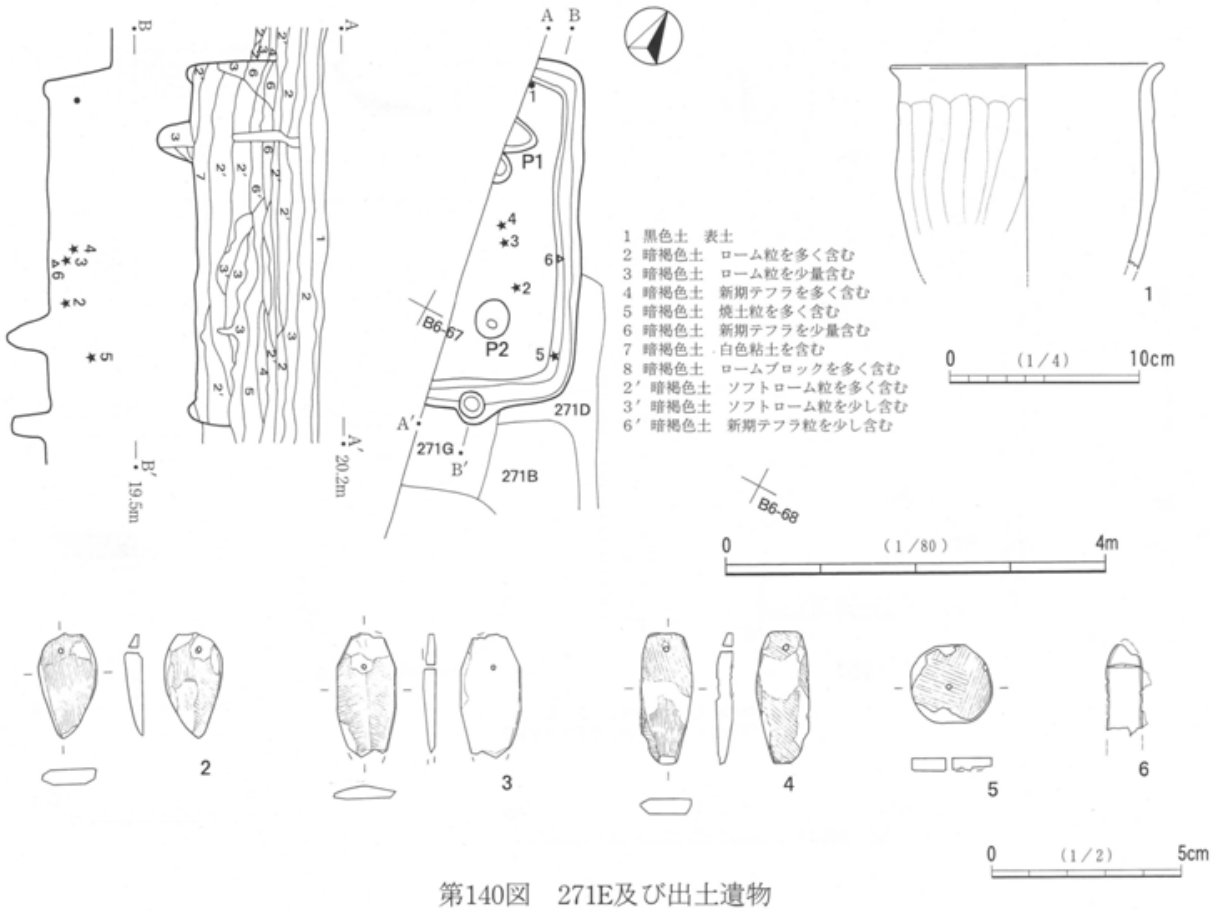
遺物は少なく，土師器杯などが出土している。９は土師器杯で，内外面が赤彩されている。P1周辺の覆土下層から出土した。10は混入した奈良時代の須恵器杯の底部である。

271Ｅ（第140図，第17・18表，図版58・61）

調査区の北端，Ｂ６グリッドに位置する。西側は緩斜面で調査区域外にかかり，平安時代の住居跡271Ａ～Ｇが複雑に重複している区域である。住居の東側1/3の調査である。



第139図　257，261及び出土遺物



第140図　271E及び出土遺物

平面形態は，南東コーナーが丸みをもつ方形である。東壁長は3.4mを測り，南壁長は1.5mを検出した。規模は一辺3.5m前後と推定される。壁は緩やかに掘込まれ，壁高は65cm～71cmである。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅11cm～21cm，深さ2cm～5cm)は，幅が広く調査範囲内では全周する。２本の主柱穴(P1現存径41cm・深さ31cm，P2径37cm×42cm・深さ51cm)が検出されたが，P1は西側が調査区域外にかかっている。P1の南側の床面には粘土ブロックが10cmの厚さで堆積していた。覆土は，ソフトローム粒を多く含む暗褐色土が主体である。

遺物は住居全面から，土師器甕，石製模造品(剣形品・有孔円板)，鉄鏃などが出土している。１の甕は長胴で口縁部がわずかに外反する。北壁際の覆土中層から出土した。２～４は剣形品，５は単孔の有孔円板である。表面を研磨されているが，つくりは全体に雑である。剣形品は，柱穴間の覆土中層にまとまって出土している。６は鉄鏃の鏃身で，先端と下部を欠損する。片丸造である。現存長2.2cm・幅0.9cm・厚さ1mmを測る。形態から長頸鏃群の鉄鏃であろう。東壁際の床面直上から出土した。

283（第141図，図版16・44・45）

調査区の南西，Ｇ４グリッドに位置する。北東側に098の周溝が巡っているが重複はなく，住居跡全体を完掘できた。

平面形態は方形を呈し，規模は3.05m×3.15mである。主軸方位はN-47°-Wである。壁は北東壁では垂直に掘込まれているが，そのほかの掘込みは緩やかである。壁高は26cm～35cmで北側が高くなっている。床面は凹凸があり，南西側を除いた広い範囲がよく踏み固められ堅緻である。壁溝(幅8cm～17cm，深さ4cm前後)は，カマド部分を除いて全周する。柱穴は確認できなかったが，出入り口施設に伴うピット

(径20cm×24cm，深さ13cm)を南西壁際から検出した。このピットの北西側に隣接して，浅い楕円形の土坑(径38cm×70cm，深さ7cm)が設けられ，軽石１点が出土した。住居の中央から北東壁にかけての範囲に，焼土が広く堆積していた。焼土は床面から10cmほど上の覆土中層から堆積しており，住居廃絶後に周辺から投棄されたと考えられる。また，東コーナー付近には焼土の下から砂質粘土のブロックが検出された。覆土は，褐色土を主体に暗褐色土が混在している。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁を15cm小さく掘込み，煙道部は緩やかに立上がる。遺存状態は比較的良好で，左袖部の上部にわずかではあるが天井部の痕跡も残っている。左袖部の側面にはロームを固く締めて貼り付けている。火床は10cmほど掘窪められ，底面はよく被熱されていた。土師器甕がなかから出土している。

出土遺物は多く，住居北東側の床面から焼土中にかけて，須恵器杯，土師器杯・甕などが出土している。１は須恵器杯である。口縁部のたちあがりは短く内傾している。受部はやや上方にのびる。底部外面にヘラ記号が残る。北東壁際の覆土上層からの出土である。２～７は土師器杯である。４～６は内外面が黒色処理されている。７は器面が磨滅しているため判然としないが，黒色処理されていた可能性もある。４はほぼ完形で，住居中央の覆土中層から出土した。８の器台は混入品である。受部から貫通孔が通る。脚部には円形の透孔が三方に設けられている。９・10は高杯の杯部である。丸みをもって立ち上がり，中位で稜を形成し口縁部は外反する。内外面はミガキで仕上げられている。11～14は甕である。11は住居中央に散在して出土した。13は器面に斜方向のミガキが施されている。

286（第142図，図版16)

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。北東側の大半が調査区域外にかかり，南西壁側をわずかに検出した。南西壁の北側の一部を，溝状遺構280に削平されている。

平面形態は方形になると考えられ，南西壁長は4.4ｍを測る。北西壁長1.0ｍを検出できた。壁は，北側では垂直に掘込まれているが，南側では緩やかである。壁高は23cm～26cmである。床面は凹凸があり，やや軟弱である。壁溝(幅14cm～23cm，深さ4cm)は，南西壁の南側に巡っている。柱穴は検出されていない。覆土は，褐色土と暗褐色土を主体に暗黄褐色土が混在する。

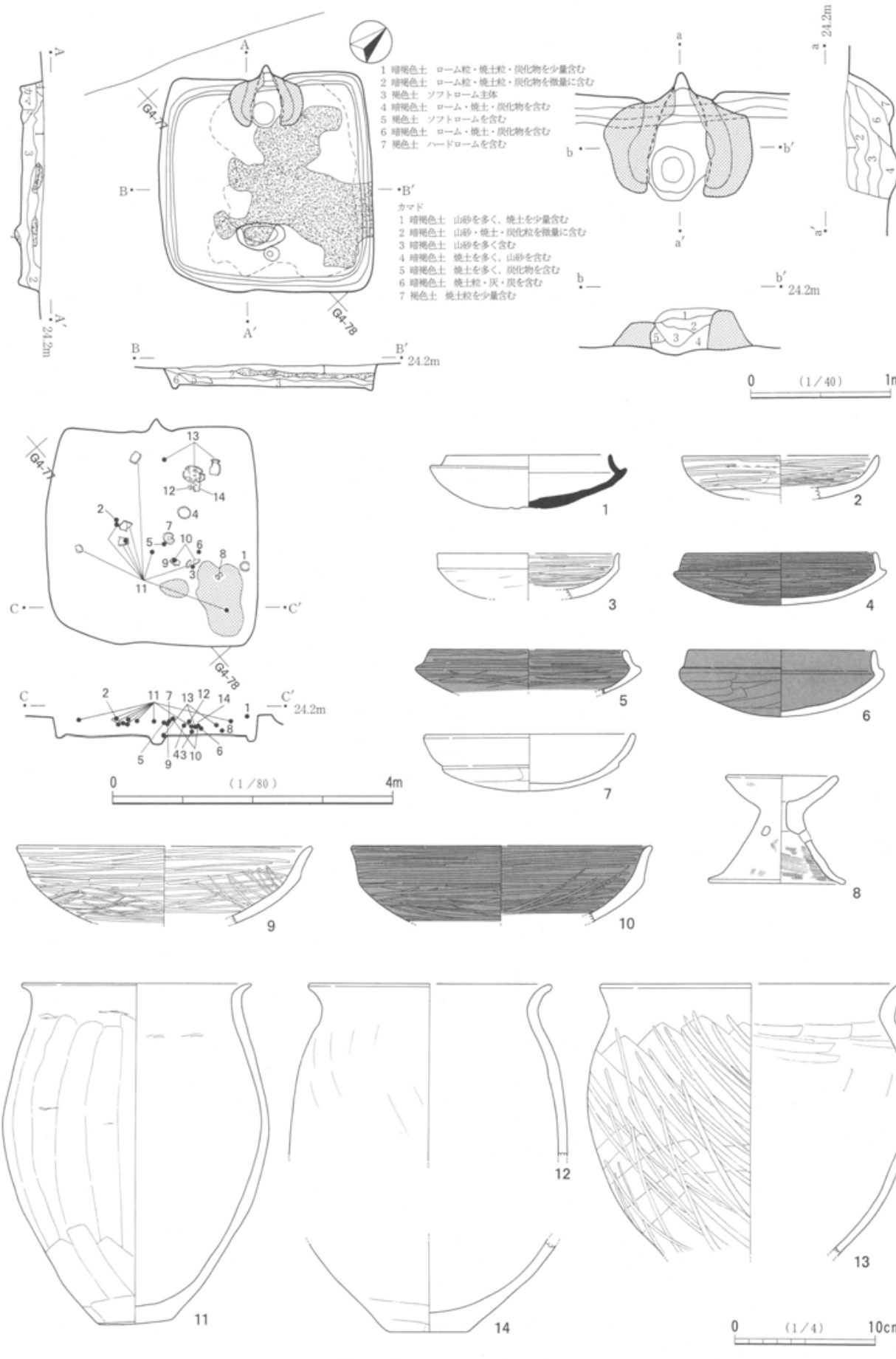
遺物は，北側の床面から須恵器杯・甕片などがわずかに出土しているが，図示できるものはない。

287（第142図，図版16)

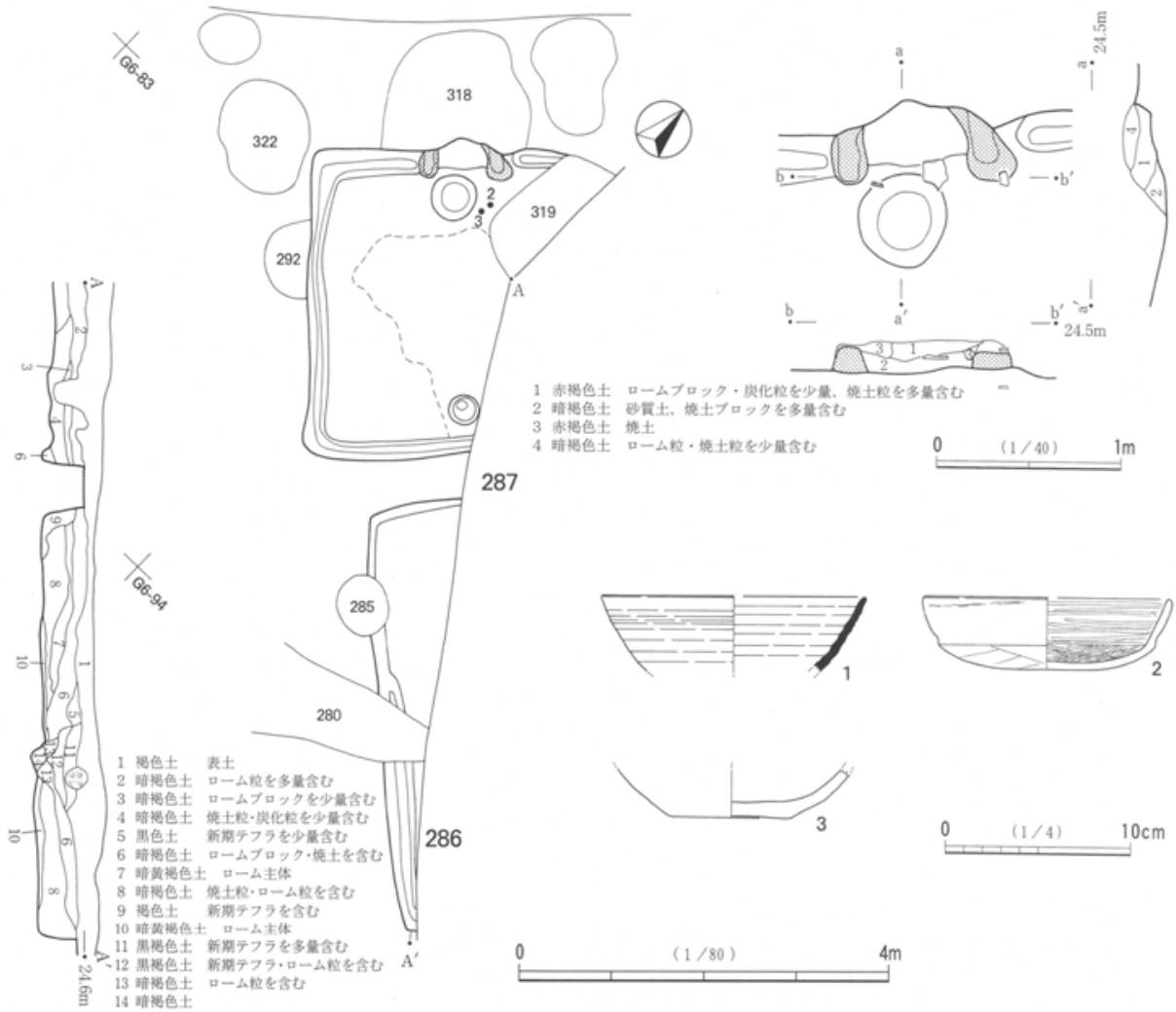
286の北西に隣接する。北東側は調査区域外にかかり，壁や床面の一部を，重複する平安時代の土坑292・318・319に，それぞれ削平されている。

平面形態は方形を呈し，南西壁長は3.3ｍを測る。北西壁長2.7ｍ，南東壁長は1.8ｍを検出できた。規模は，一辺3.5ｍ前後と推定される。主軸方位はN-42°-Wである。壁は，部分的にやや緩やかに掘込まれ，壁高は17cm～32cmで西側が高くなっている。床面は凹凸があり，全体に堅緻で特に中央部には硬化面が広がっている。壁溝(幅10cm～19cm，深さ4cm～8cm)は，カマド部分を除いて調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていないが，出入り口施設に伴うピット(径32cm×33cm，深さ9cm)が，南東壁際中央の床面から検出され，底面にあたり痕が確認された。覆土は，暗褐色土に黒色土や暗黄褐色土が混在する。

カマドは北西壁に付設されている。上面は土坑318に削平されており，遺存状態は良好ではない。天井部は崩落し，両袖部がわずかに遺存していた。壁を17cm掘込み，煙道部はほぼ直角に立上がる。両袖間は56cmと幅広で，火床部が広く設けられている。火床の掘込みは浅いが，焼土が広く堆積していた。カマド



第141図　283及び出土遺物



第142図　286，287及び出土遺物

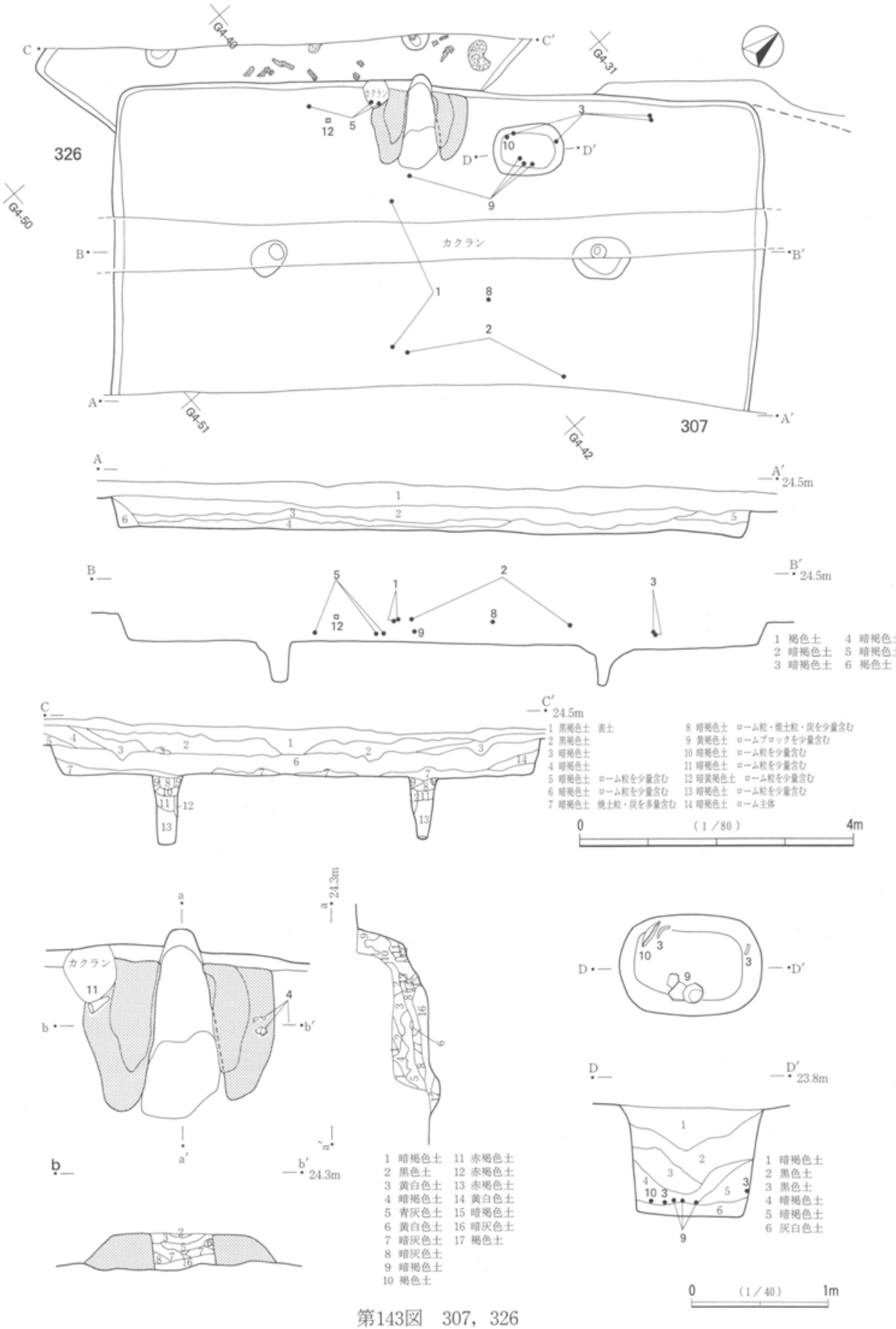
内からは，図示できなかったが土師器甕片が出土している。

出土遺物は少なく，土師器杯・甕などが出土している。２は土師器杯である。口縁部と体部との境に段が形成されている。口縁部は開くように立上がる。内面はミガキで仕上げられている。３は甕の底部である。２・３はカマド火床周辺の床面から出土した。１の須恵器杯片は混入品である。

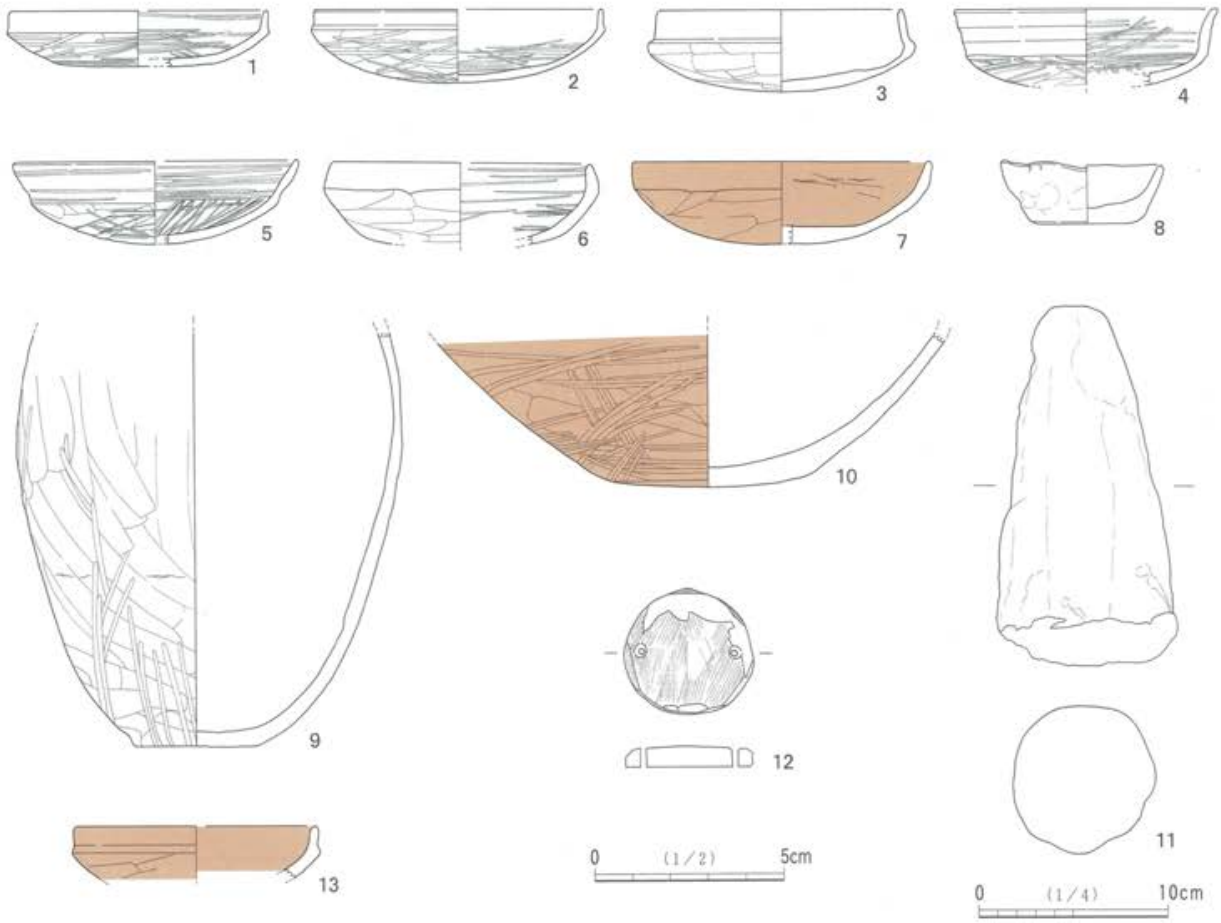
307，326（第143・144図，第18表，図版16・45・58）

調査区の南西，Ｇ４グリッドに位置する。南西側は次第に緩斜面になっている。南東側は調査区域外にかかり，住居の北西側1/2の調査である。調査範囲の中央を北東-南西方向にケーブルの埋設による攪乱を受けている。北西側は326(後期)と重複しており，あわせて報告する。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は9.3mを測る。北東壁長4.5m，南西壁長4.4mを検出できた。規模は，一辺9.5m前後と推定される。主軸方位はN-47°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は11cm～38cmを測り，南西側が高くなっている。床面はほぼ平坦で，堅緻な面はほとんど確認されていない。壁溝は調査範囲では検出されていない。主柱穴は北西側の床面から２本(P1現存径42cm×58cm・深さ69cm，P2現存径84cm・深さ62cm)が検出されたが，ともに上部が攪乱を受けている。方形の貯蔵穴(75cm×104cm，深さ84cm)は，カマドの北東側に設けられている。内部からは土師器杯・甕がまとまって出土した。カマドの



第143図　307，326



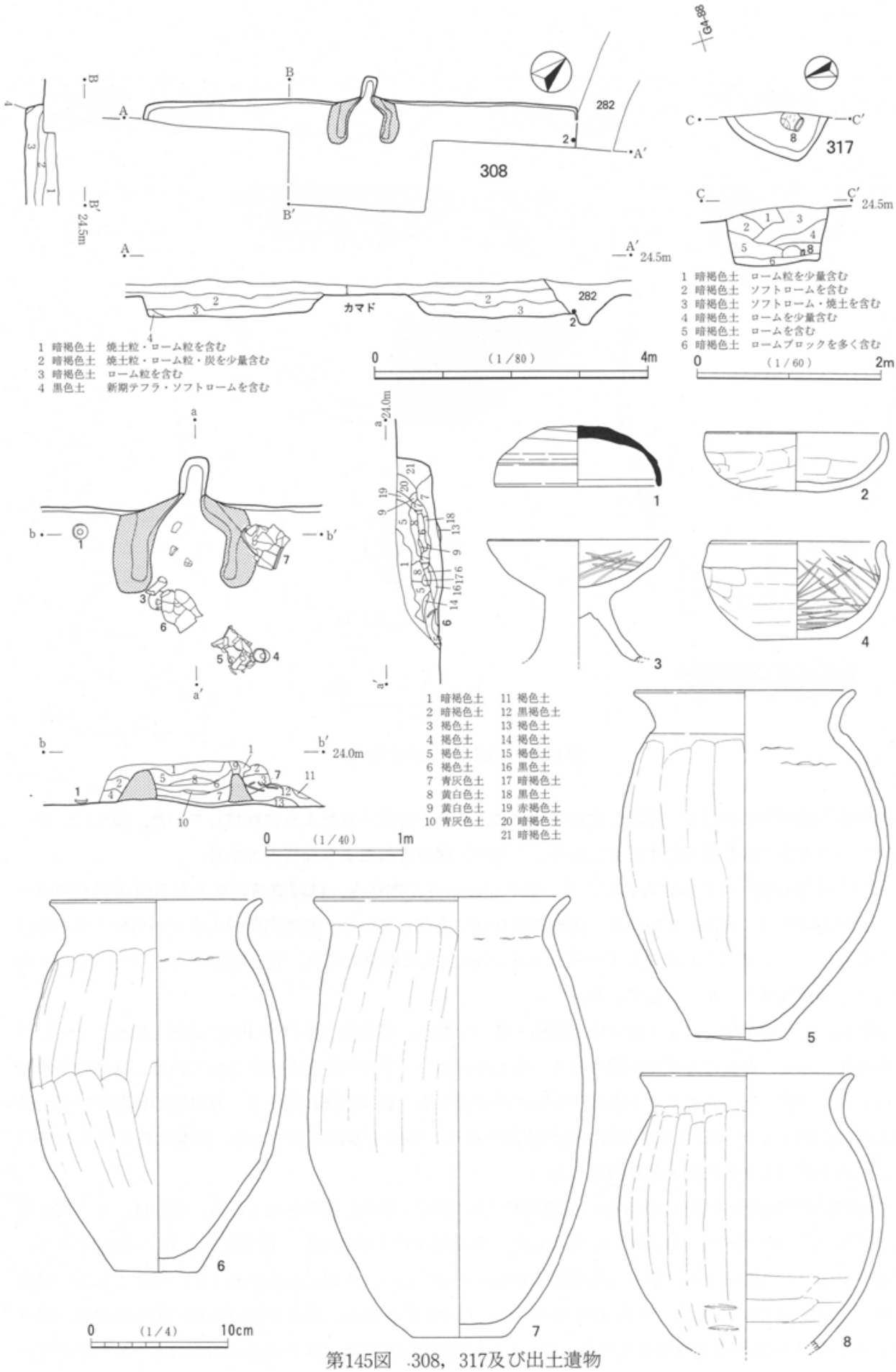
第144図　307，326出土遺物

南西側から南西壁にかけての壁際と北西壁中央に，焼土が投棄されたように堆積していた。覆土は，ロームブロックを多く含む暗褐色土が主に堆積しており，埋戻されたような状況である。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁を15cm小さく掘込み，ほぼ直角に立上がる煙道部を形成する。天井部はすでに崩落していたが，両袖部は良好に遺存していた。袖部内壁の火床側から煙道部にかけての範囲は，よく被熱され赤化している。火床は8cm皿状に掘窪められ，底面は被熱していた。カマド内からは土師器甕片などが出土している。

遺物は，南西側を中心に１～12の土師器杯・甕や手捏ね，石製模造品(有孔円板)が出土した。１～７は土師器杯である。器面にミガキが施されているものが多い。７は内外面が赤彩されている。３は貯蔵穴や周辺の覆土下層から，４はカマド右袖上からの出土である。８は手捏ねである。９は甕の体部下半で，貯蔵穴内から出土した。10は弥生土器の壺の底部である。外面を赤彩されている。貯蔵穴内に混入していた。11の支脚はカマド左袖上から出土した。

326は北西側が調査区域外にかかり，南東側の大半が307と重複し削平されている。調査は，その間の帯状の区域と，南西コーナー周辺について行った。平面形態は方形を呈し，南壁長は5.3mと推定される。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は南西側で35cm～40cmである。床面は凹凸があるが，堅緻である。壁溝は検出されていない。検出された主柱穴のうち，P1(現存径45cm，深さ104cm)とP2(現存径42cm，深さ89cm)は，調査区域外に北西側が入り込んでいる。P3(径35cm×37cm，深さ75cm)は307の床下から検出され



第145図　308，317及び出土遺物

た。床面には，中央部から北東壁にかけて炭化材が分布している。焼土の検出は少ないが，火災を受けた住居であろう。覆土は，暗褐色土(ソフトロームを多く含む)を主体に黒褐色土が混在している。

出土遺物は少なく，土師器杯・甕片が覆土中からわずかに出土している。このうち図示できたのは，13の土師器杯である。内外面を赤彩されている。

308（第145図，図版16・45）

調査区の南西，Ｇ４グリッドに位置する。北コーナー付近を310に削平されている。南東側はほとんど調査区域外にかかっている。北西壁側の遺物が多く出土したカマド周辺を中心に，調査を行った。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は6.4ｍを測る。主軸方位は概ねＮ-46°-Ｗである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は27㎝～31㎝である。カマド前面の床面は，ほぼ平坦で堅緻である。柱穴や壁溝は検出されていない。覆土は，暗褐色土を主体に黒色土が一部混在する。

カマドは，北西壁中央に壁を30㎝縦長に掘込んで設けられ，煙道部はほぼ直角に立上がる。天井部は崩落していたが，両袖部は比較的良好に遺存し内壁は被熱していた。火床の掘込みは浅く，被熱は弱い。カマドの内部から前面や右袖部にかけての範囲に，土師器甕や高杯などが集中して出土している。

遺物はカマド周辺から，１～７の須恵器蓋や土師器杯・高杯・椀・甕が出土している。１は須恵器蓋である。天井部は平坦にヘラケズリされている。カマド左袖脇の床面から出土した。２の土師器杯は，282溝状遺構と重複する位置からの出土である。カマドの前面からは，高杯(３)，椀(４)，甕(５・６)がまとまって出土した。７の甕は，カマド右袖に沿うような出土である。

317（第145図，図版45）

調査区の南西，Ｇ４グリッドに位置する。南西側が調査区域外にかかる。調査時には，住居跡の西コーナー付近にあたる部分を検出したと考えていた。しかし，北コーナーが丸みをもって南東方向に延びていることや規模から，貯蔵穴である可能性が高い。周辺にはこれに該当する住居跡は検出されていない。

平面形態は，北コーナーが丸みをもつ方形になると考えられる。北西側は0.96ｍを測り，規模は0.8ｍ×1.0ｍと推定される。ほぼ垂直に掘込まれ，深さは50㎝である。底面は平坦である。埋土は，暗褐色土が主に堆積している。下層ではローム粒やロームブロックを多く含み，締まりも弱いことから，埋戻されたと考えられる。底面の10㎝上から，底部を欠損した土師器甕(８)が出土した。

２　古　墳

098（第146図，図版17・45）

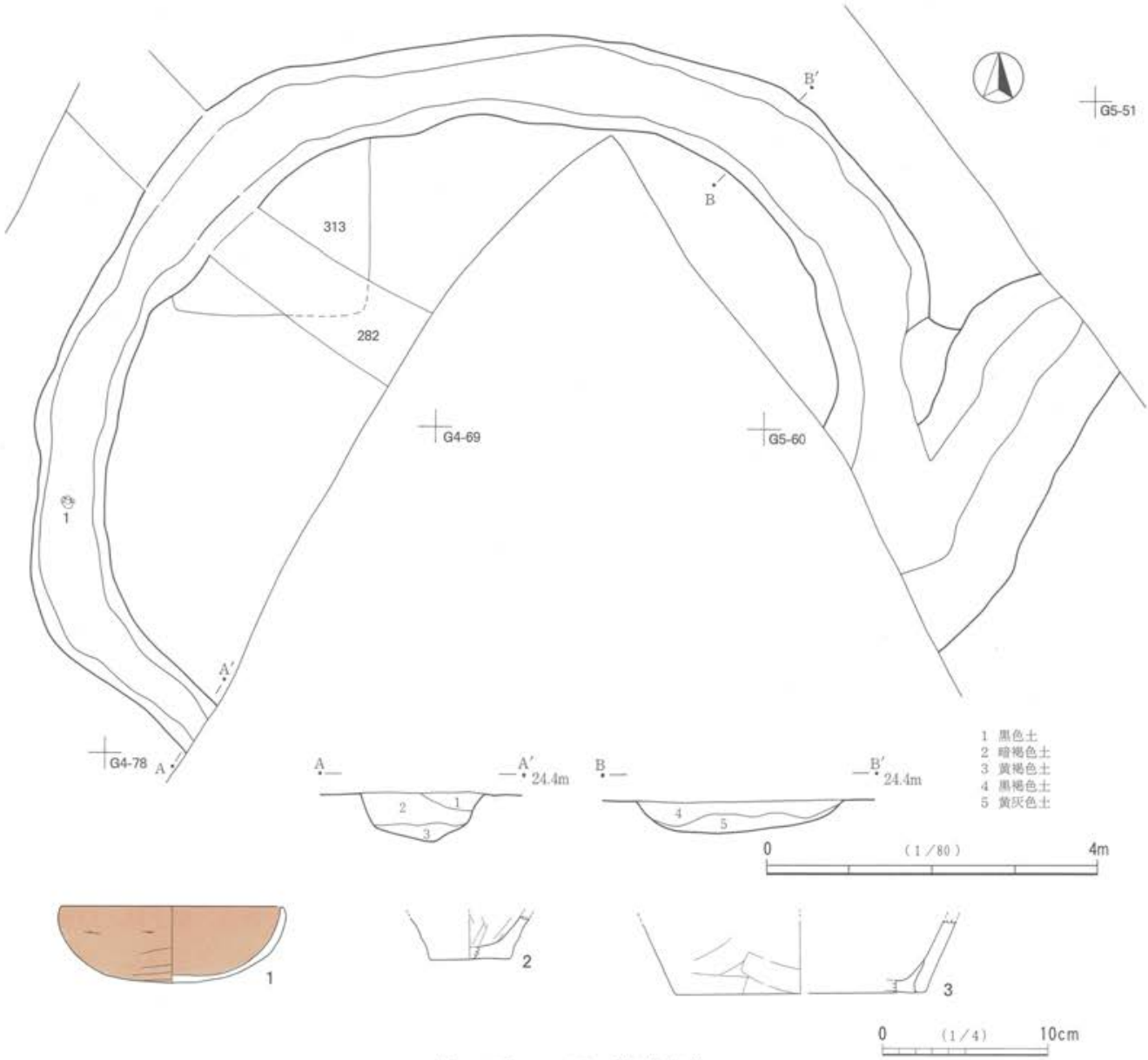
位置と現況

調査区の南西，Ｇ４グリッドに位置する。支谷を南に臨む台地の平坦地である。南側は調査区域外にかかり，北西側の上面を平安時代の住居跡313と溝状遺構282に削平されている。調査は，昭和63年度に北東側1/4を，西側は平成４年度に実施している。主に周溝の調査であり，埋葬施設は調査区域外の墳丘内に存在していると思われる。

墳形と周溝

円墳である。南西側の周溝の一部が，幅が狭く直線的になるほかは，やや楕円形を呈している。

周溝は全周すると考えられ，外縁径・内縁径は東西で11.3ｍ・9.1ｍを測る。南北は10ｍ前後で，東西に長い楕円形と推定される。上端幅は0.65ｍ～1.35ｍを測り，北側から北東側が広くなっている。溝底幅は0.4ｍ～0.95ｍで北東側が最も広いが，北側から南西側にかけては次第に狭くなっている。底面はほぼ



第146図　098及び出土遺物

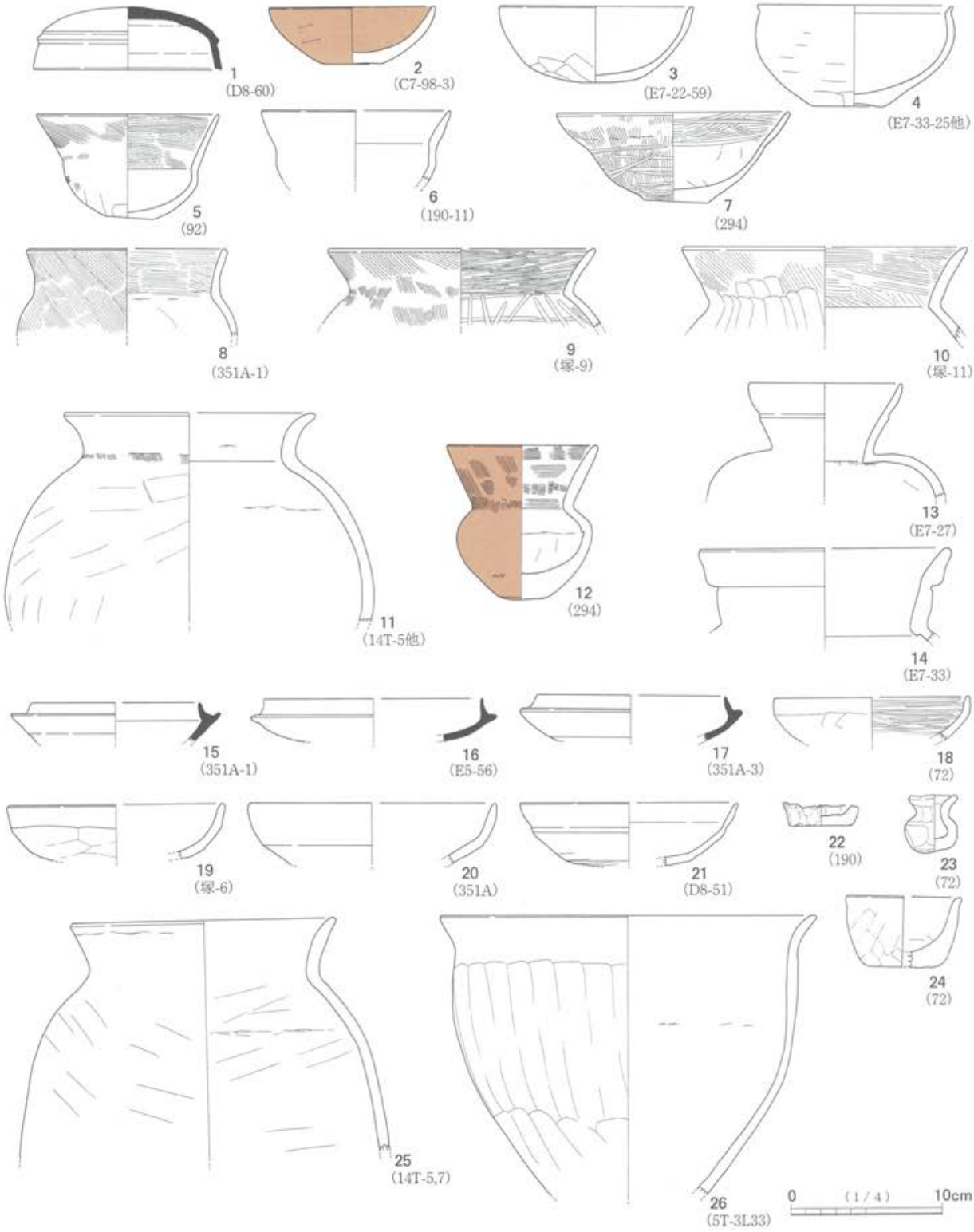
平坦である。掘込みは全体的に緩やかで，深さは12cm～28cmである。西側が比較的深いほかは，全体に浅くなっている。覆土は，暗褐色土と黒褐色土を主体に褐色土や暗黄灰色土が混在している。

周溝の出土遺物

遺物は，周溝内から土師器杯・甕の破片がわずかに出土している。１は，西側周溝の覆土中から出土した土師器杯である。内外面が赤彩されている。２・３は混入した甕や甑の底部である。

第３節　遺構外出土遺物

確認調査時のトレンチ，城ノ台行人塚の盛土や，遺構に伴わずにグリッドから出土した遺物をまとめて報告する(第147～149図，第17・18表，図版46・58～60)。

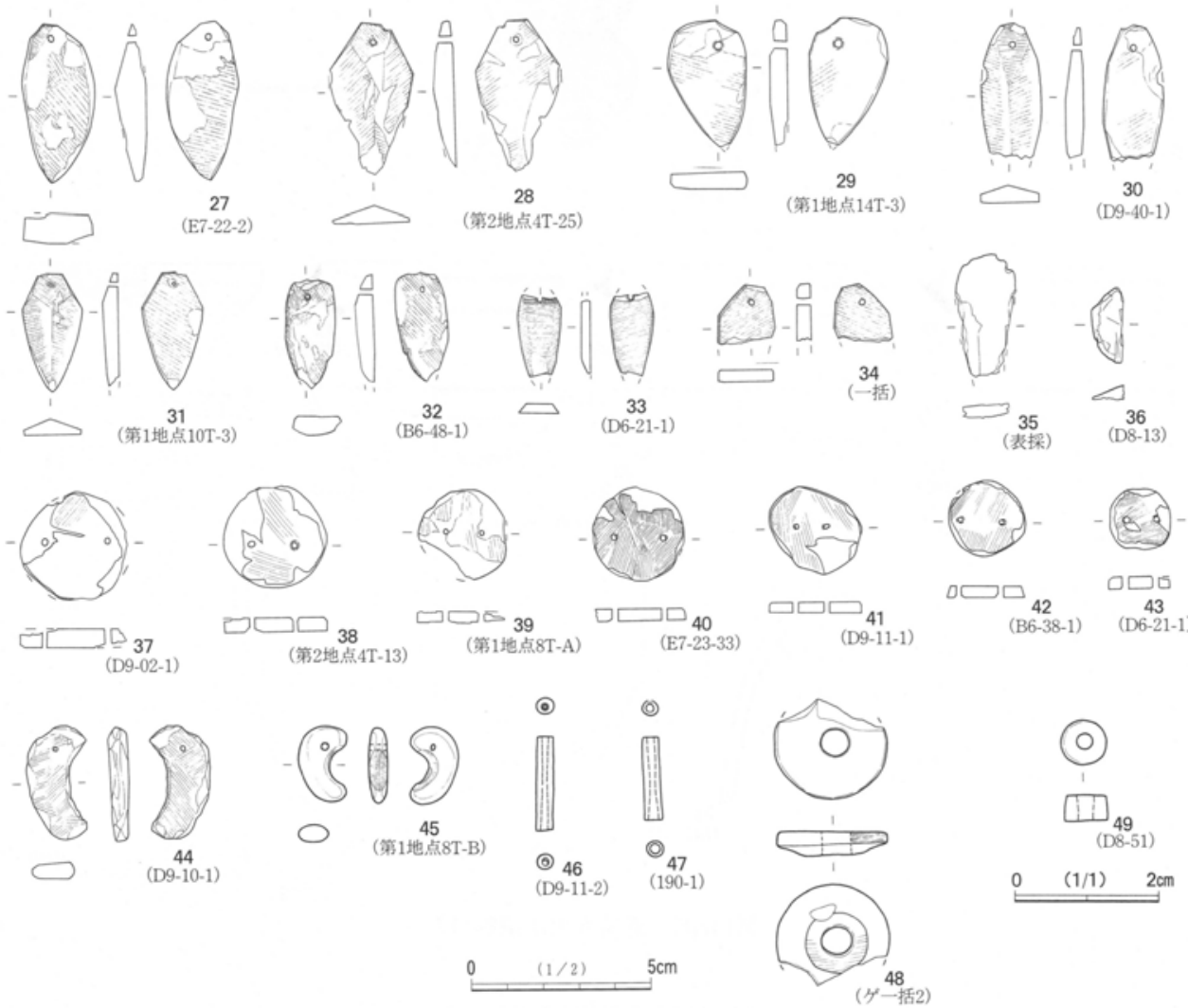


第147図　遺構外出土遺物(1)

1～14は古墳時代前・中期に属する土器類である。1は須恵器蓋である。天井部はやや丸みをもち，天井部と口縁部との境は，突出して稜を形成する。口縁部はやや開いている。2・3は土師器杯で，底部が平底である。2は内外面が赤彩されている。4は椀である。平底で口縁部がわずかに外反する。5・6は坩である。5は口縁部内外面に刷毛目が残る。7は大きく開く口縁部をもつ鉢である。外面と口縁部の内面は，刷毛で調整された後にミガキで仕上げられている。8～11は甕で，口縁部や体部上半は刷毛で調整されている。12～14は壺である。12は口縁部に刷毛目が残る小型壺である。13の口縁部は，中位に段を形成している。14は二重口縁で，口縁部を貼り付けている。

15～26は後期に属する土器類である。15～17は須恵器杯である。扁平な形態で，口縁部のたちあがりは短く内傾し，受部はやや上方にのびる。15～21は杯である。21は口縁部と体部との境に段が形成されている。22～24は手捏ねやミニチュア土器である。23は壺のミニチュア土器で，指頭により成形されており，部分的に指頭痕が残る。24は小型鉢であろう。25は甕，26は甑である。

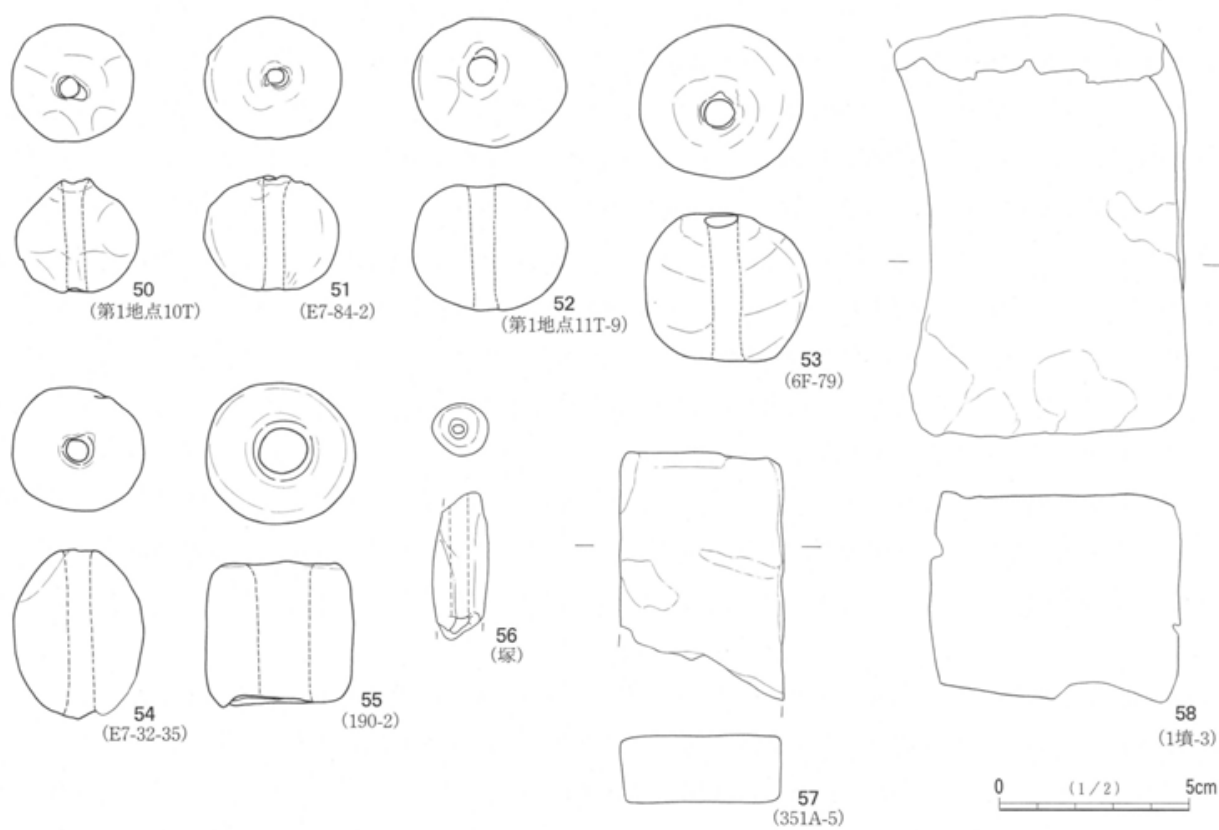
27～44は滑石製の石製模造品である。内訳は，剣形品(27～36)・有孔円板(37～43)・勾玉(44)である。剣形品のうち，36は基部に穿孔もみられず，両面が研磨されていないことから，未成品と考えられる。形態的には，基部が台形を呈し，身部との境が明瞭で鎬の稜線が形成されているもの(28・31・35)，基部が



第148図　遺構外出土遺物(2)

方形で身部との境が不明瞭だが鏡の稜線が明瞭なもの(32・34)が多いが，30のように基部は台形だが身部との境が不明瞭なものや，形態が変化し粗雑なつくりで鏡の稜線のないもの(27・29)もある。有孔円板はいずれも双孔で，両面を研磨されている。形態は円形であるが，41のように楕円形を呈しているものもある。大きさは，径3cm(37)から径1.7cm(43)までと不揃いである。44の勾玉は完形である。扁平なつくりで両面を研磨されている。長径3.2cm・短径1.7cm，腹部径0.5cm×1.2cm，孔径1.5mmを測る。重量は3.91gである。45は滑石製の勾玉で，全体に丸みをもつ。両面は粗く研磨されている。長径2.1cm・短径1.3cm，腹部径0.55cm×0.80cm，孔径2mmを測る。重量は1.84gである。46・47は緑色凝灰岩製の管玉で，淡灰緑色を呈している。46は完形で，長さ26mm・径4mm×5mm，重量は1.05gである。両側から穿孔され，孔径2.0mm～2.5mmである。表面の研磨はやや粗い。47は一部を欠損するが，表面は丁寧に研磨されている。長さ23mm・径4.0mm×4.5mm，重量は0.85gである。両側から穿孔され，孔径2.5mm～3.0mmである。48は滑石製の紡錘車で，側面の一部を欠損する。扁平な形態で，径上面3.2cm・下面1.7cm，厚さ0.7cm，孔径7.5mm～8.5mmを測る。49は滑石製の臼玉である。径1.3cm・高さ7mm・孔径4.5mmを測る。

50～53は土玉である。50は径3.2cm・高さ3.0cm・孔径5mm，51は径3.6cm・高さ3.0cm・孔径5mm，52は径4.1cm・高さ3.3cm・孔径6mm，53は径4.3cm・高さ4.0cm・孔径7.5mmをそれぞれ測る。54～56は管状土錘である。54は卵形に近い形態で，一部を欠損する。長さ4.6cm・径3.2cm×3.4cm・孔径7mmを測る。55は円筒状を呈し，長さ3.7cm・径3.7cm×3.9cm・孔径14mmを測る。56は細い管状で，両端を欠損する。現存長3.9cm・径1.4cm×1.5cm・孔径4.5mmを測る。57・58は砥石である。ともに凝灰岩製である。57は下部を欠損する。全面がよく研磨されている。現存長6.4cm・幅4.3cm・厚さ1.8cmを測る。58は上端と下部を欠損する。側面がよく研磨され，一部が二次焼成を受けている。現存長11.2cm・幅7.4cm・厚さ5.5cmを測る。



第149図　遺構外出土遺物(3)

第６章　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は，竪穴住居跡55軒・掘立柱建物跡５棟・地下式土坑２基・粘土採掘坑６基・土師器焼成坑６基・土坑18基などで構成されている。これらの遺構は，台地の北端から南側にかけての台地縁辺部を中心に分布している。集落は古墳時代後期から引き続いているが，遺構数は次第に減少する。これらのなかで特に注目されるのは，同一遺跡内から土器生産に関連する土師器焼成坑と粘土採掘坑が検出されたことである。また，複数の遺構から緑釉陶器の破片が出土しており，未調査の範囲に重要な遺構が存在していたことも考えられる。

なお，前章でも記載したように，本遺跡では狭長な範囲の調査のため，床面・柱穴・炉など一部が漸く検出できた遺構についても，その性格が判断可能なものは，それぞれの種別に含めて報告する。

第１節　奈良時代の遺構

１　竪穴住居跡

この時期の竪穴住居跡は15軒と少ないが，台地中央部から東側にかけての範囲に主に分布している。大別すると，中央部から北西側斜面にかけて分布するグループと，東側に主に展開するグループにわけられる。台地の南側や北側では分布は稀薄になる。

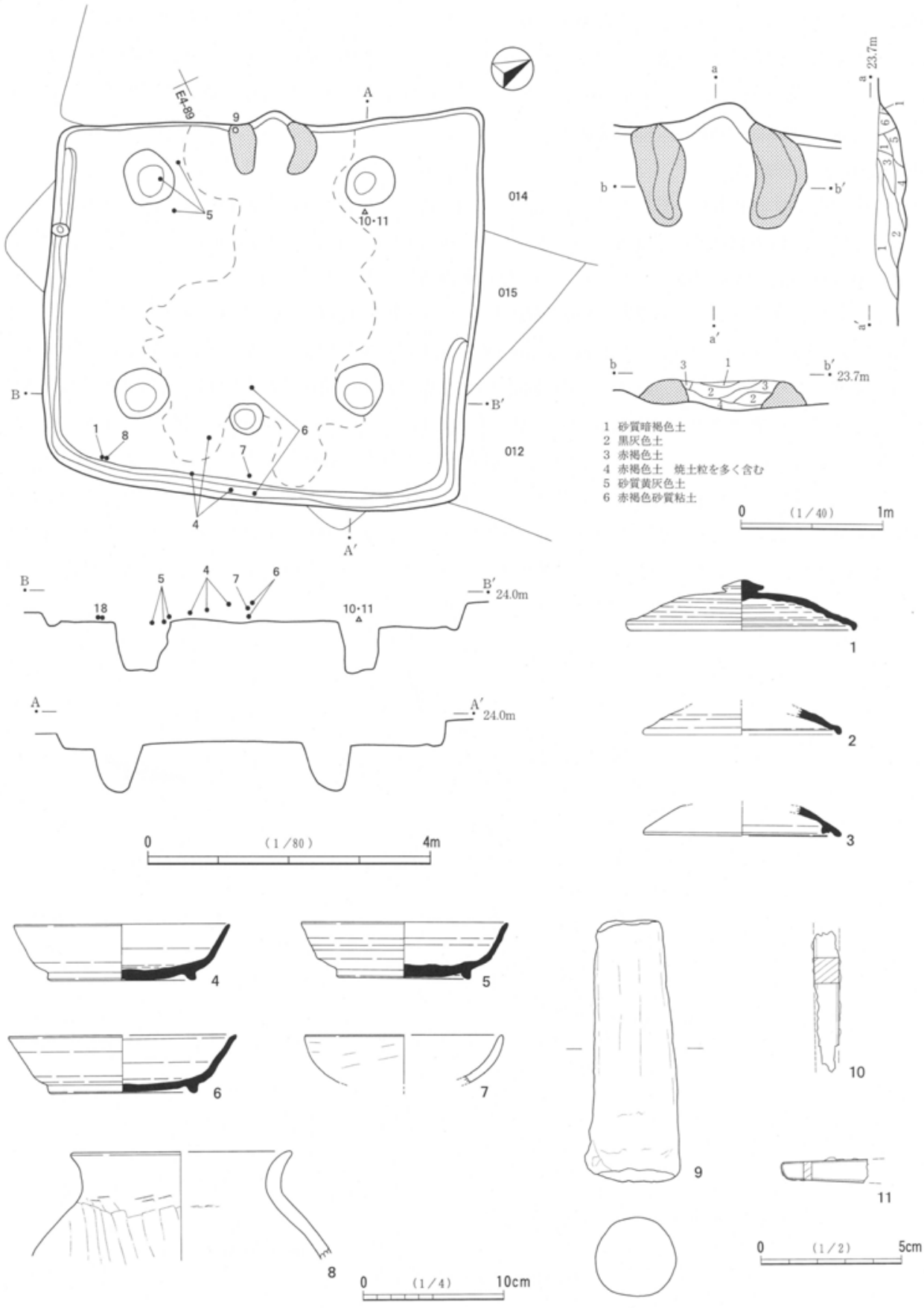
013（第150図，図版17・46）

調査区中央やや北西寄り，Ｅ４グリッドに位置する。上面が全体に削平されており，特に北西側では壁が低くなっている。住居跡012・014・015(古墳時代)と重複し，各遺構を削平している。

平面形態は横長の方形を呈している。規模は5.4m×6.2mを測り，主軸方向が短くつくられている。主軸方位はN-61°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は20cm～37cmを測り，北東側が比較的良好に遺存し高くなっている。床面は平坦で，カマド前面から南東壁際までの中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅14cm～20cm，深さ5cm～8cm)は，南東壁から南西壁までは全周しているが，北東壁では東側の一部まで巡っている。北西壁では検出されていない。床面から検出された主柱穴は，深さが一定しているP1からP4である(P1径71cm×75cm・深さ70cm，P2径55cm×60cm・深さ72cm，P3径cm67×78cm・深さ76cm，P4径69cm×74cm・深さ72cm)。P5(径38cm×53cm)は，出入り口施設に伴うピットであろう。主柱穴の埋土は一様で，ロームブロックを多く含む黄灰色土の上に暗褐色土が堆積している。住居の覆土は，暗褐色土を主体に暗黄灰色土や黒褐色土が混在する。

カマドは北西壁中央に設けられているが，上面を削平されており赤化した袖部内壁が露呈している。壁を12cmほど円形に掘込んで，緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，袖部も裾が押し潰されたように左右に広がっている。火床は8cm掘窪められ，被熱で赤褐色に変色した内壁や黒灰色土が堆積していた。

遺物は，須恵器杯・蓋，土師器杯(７)・甕(８)や鉄製品が，床面直上や覆土中から出土している。１～３は須恵器蓋である。１は完形で，宝珠形の低いつまみをもつ。南東壁際の床面から８の甕とともに出土した。３は内側にかえしが付いている。口縁部の下方までは突出していない。４～６は須恵器高台付杯である。底部が高台とほぼ同じ高さにつくられている。高台の断面形は方形に近い形態である。底部は全面



第150図　013及び出土遺物

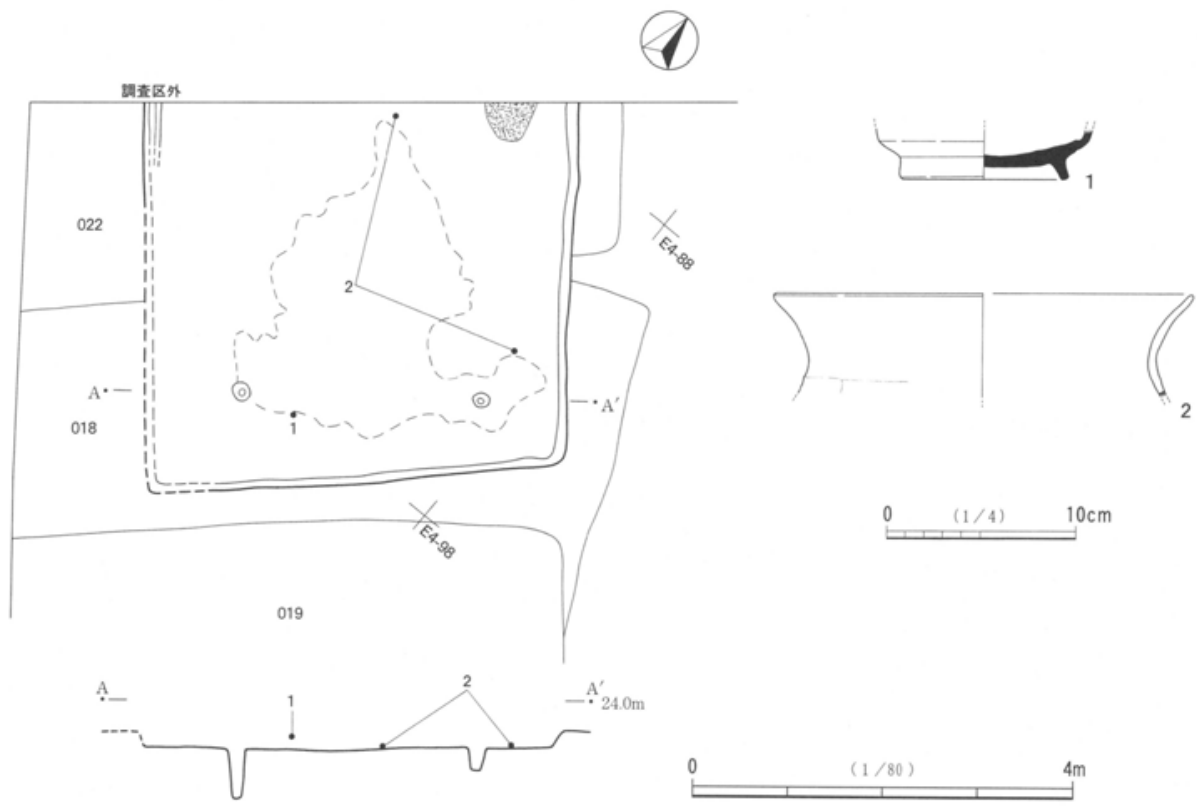
回転ヘラケズリである。床面直上から覆土上層にかけて分布している。９の支脚はカマド左袖部の上面からの出土である。10・11の鉄製品はP2に隣接して出土した。10は棒状の工具の一部で，両端を欠損する。現存長5.0cm・断面は正方形(9㎜×9㎜)である。11は刀子の茎の一部であろう。身部側を欠損している。現存長3.1cm・幅6㎜～8㎜・厚さ3㎜を測る。

017（第151図，図版17）

調査区中央やや北西寄り，Ｅ４グリッドに位置する。北西側が調査区域外にかかり，カマドの構築材である砂質粘土が調査範囲内の床面まで流出している。018・022と重複し一部を削平しているが，018の覆土中に南東壁と南西壁が構築されているため，壁の範囲等は判然としない。

平面形態は方形を呈し，北東壁長3.8mが検出できた。南東壁長は現存で3.7mであろう。規模は，一辺4.5m前後と推定される。主軸方位は概ねN-40°-Wである。北東壁は垂直に掘込まれ，壁高は17cm前後である。床面はやや凹凸があり，硬化面が中央部から南東壁にかけて検出された。特に南東壁側では東西に広がっている。壁溝は検出されていない。主柱穴と思われるピットは，南東側で２基(P1径18cm×21cm・深さ52cm，P2径15cm×18cm・深さ23cm)が検出されたが，北西側では確認できなかった。覆土は，暗褐色土を主体に暗黄褐色土や暗黄灰色土が混在する。カマドは北西壁に設けられているが，詳細は不明である。

出土遺物は少なく，図示できたのは須恵器高台付杯(１)と土師器甕(２)である。１は体部下端に稜をもち，高台は断面方形である。床面直上からの出土である。２は甕の口縁部片で，床面から出土した。



第151図　017及び出土遺物

092A（第152図）

調査区の南西，Ｆ４グリッドに位置する。南西側は調査区域外にかかり，南東側で092Ｂを削平している。調査できたのは住居の北東側3/5である。カマドが北西壁と北東壁の２か所から検出されたが，北西壁側のカマドＡの方が新たに付設されたものである。

平面形態は方形を呈し，北東壁長は5.6ｍを測る。北西壁長2.9ｍ・南東壁長3.4ｍを検出した。規模は，一辺5.5ｍ前後と推定される。主軸方位はN-44°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は36cm～39cmである。床面は凹凸があり，中央の東側を除いて硬化面が広がる。壁溝（幅8cm～21cm，深さ8cm～12cm）は，カマド部分を除いて調査範囲内では全周する。主柱穴は，北東側で２本（P1径44cm×51cm・深さ60cm，P2径75cm×95cm・深さ69cm）が検出された。覆土は，暗黄灰色土を主体に暗黄褐色土や黒褐色土が混在する。

カマドは２か所に付設されていた。カマドＡは北西壁に設けられているが，南西側が調査区域外にかかるため，右袖側を調査した。壁を20cm掘込んで，角度をもって立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，右袖部が残っているが遺存状態はあまり良好ではない。火床の掘込みは浅く，被熱は弱い。カマドＢは，北東壁中央に壁を35cm大きく掘込んで付設され，直角に立上がる煙道部が遺存していた。袖部はすでに除去されており，皿状に10cm掘窪められた火床が確認できた。

遺物は，住居のほぼ全面から出土しているが，特に須恵器甕，土師器甕，土玉などが北コーナー周辺にまとまっている。１は須恵器杯である。住居南側の床面から出土した。２は須恵器甕の口縁部であろう。明灰色を呈し，内面に自然釉がかかっている。３・４は甕である。４は長胴のタイプで，口縁部は大きく外反する。５は土玉である。1/2の遺存で，現存径3.4cm・高さ2.8cm・孔径7㎜を測る。

095A（第153図，図版17・46）

調査区の南西，Ｆ４グリッドに位置する。北西側は調査区域外にかかり，南東側は095Ｂと重複する。

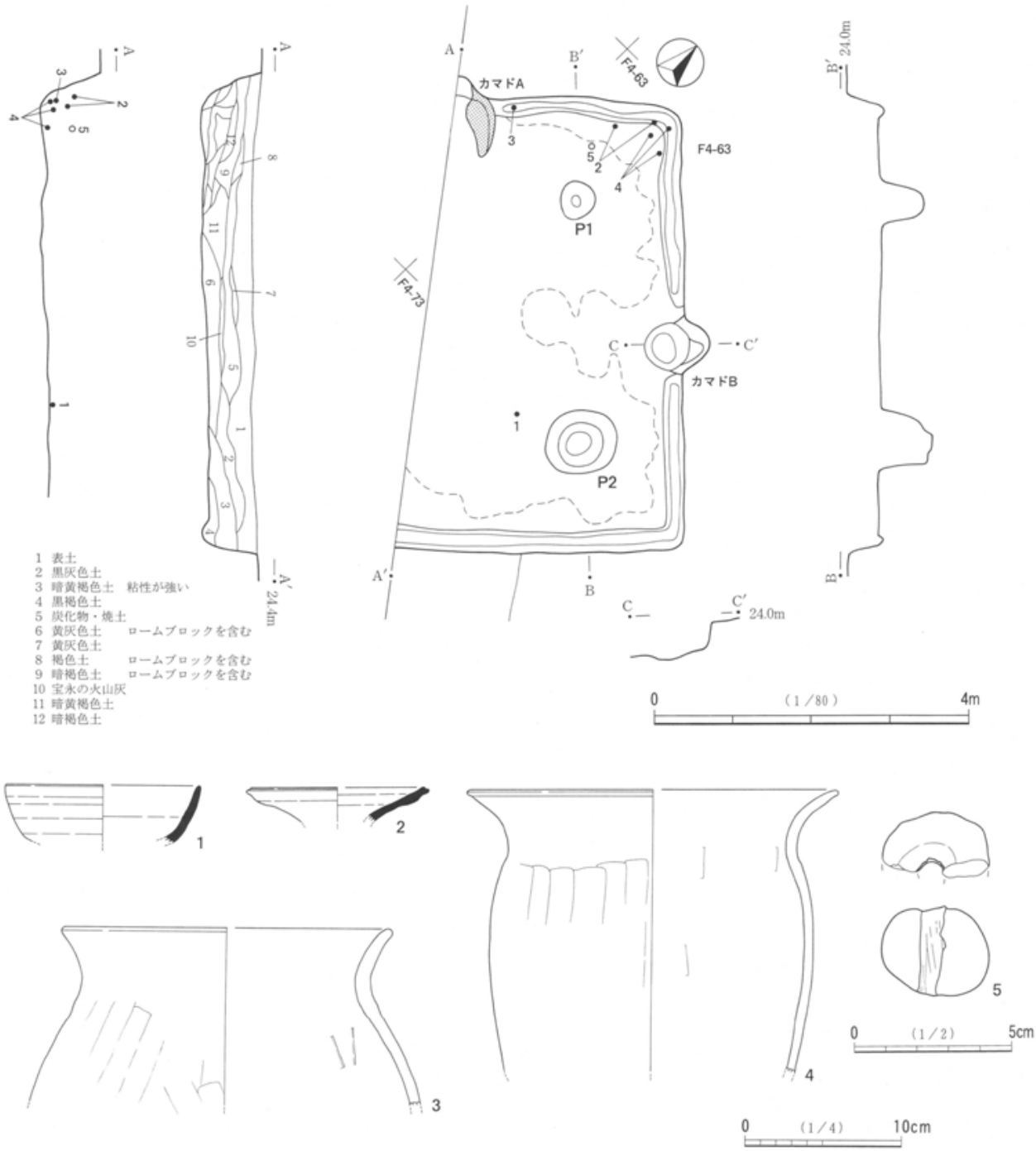
平面形態は方形を呈し，北東壁長4.55ｍ・南東壁長4.35ｍを測る。北西壁長は2.85ｍを検出した。規模は，一辺4.5ｍ前後と推定される。主軸方位はN-39°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存の良い北コーナー周辺で34cmである。床面は平坦で，P1から南東側に硬化面が広がっている。壁溝は検出されていない。主柱穴は，北東側から２本（P1径51cm×64cm・深さ61cm，P2径40cm×48cm・深さ57cm）と，南西側からP3（径71cm×72cm，深さ52cm）が検出された。P1とP3の底面には柱のあたり痕が確認されている。

カマドは北西壁に設けられている。壁を13cm小さく掘込み，緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落していたが，袖部が遺存していた。内壁も崩れており遺存状態は良好ではない。火床は10cm掘窪められ，黒灰色土が堆積していた。カマド煙道部上面からは土師器甕（５）が出土している。

遺物はカマド周辺から，土師器甕を中心に出土している。１は球形の体部をもつ口径15cm前後の中型の甕で，口縁部と体部との境には明瞭な稜が残る。カマドの東側から出土した。２～５は口径21cm前後の長胴の甕である。くの字状に外反する口縁部をもつ。４は，体部の器面に凹凸が著しい。カマド前面の床面から出土した。カマド煙道部上面から出土した５は，薄い器厚のつくりである。

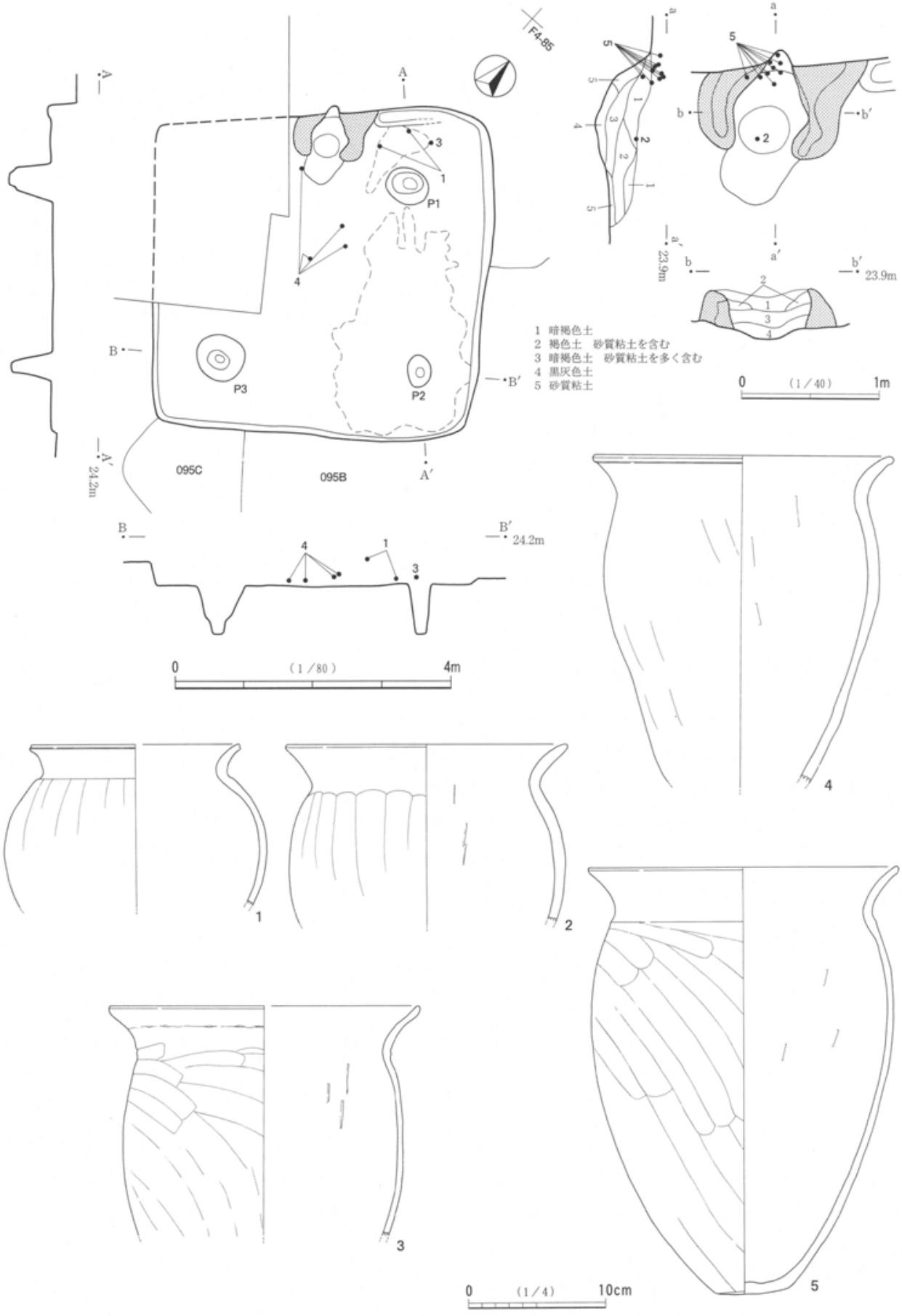
112（第154図，図版17・46・60）

調査区中央，Ｅ６グリッドに位置する。北西壁の西側が保存樹木のため未調査である。114と西側で重複し，一部を削平している。カマドが北西壁と北東壁の２か所から検出されたが，北西壁側のカマドＡの方が新たに付設されている。

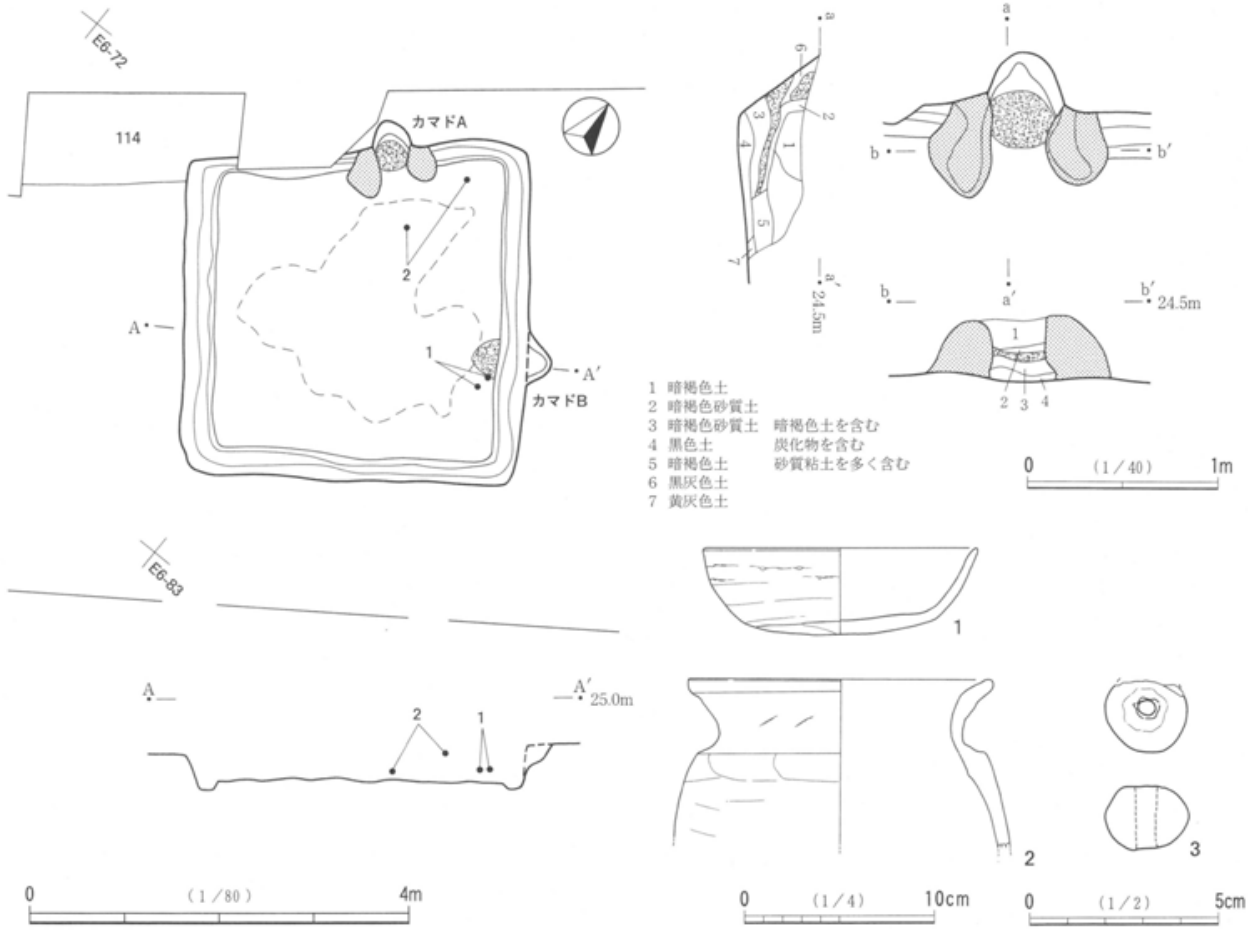


第152図　092A及び出土遺物

平面形態は正方形を呈し，規模は3.60m×3.65mである。主軸方位はN-38°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は34cm～38cmである。床面は凹凸があり，中央部が良く踏み固められ堅緻である。壁溝(幅13cm～23cm，深さ5cm～12cm)は，比較的幅が広くつくられており，カマドAの部分を除いて調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていない。南西壁際中央の床面から，弧状を呈する5cmほどの浅い窪みが検出された。これは旧カマドBの対面に位置していることから，当初の出入り口施設に伴うピットであろう。覆土は，黒褐色土を主体に暗褐色土や黄暗褐色土が混在する。



第153図　095A及び出土遺物



第154図　112及び出土遺物

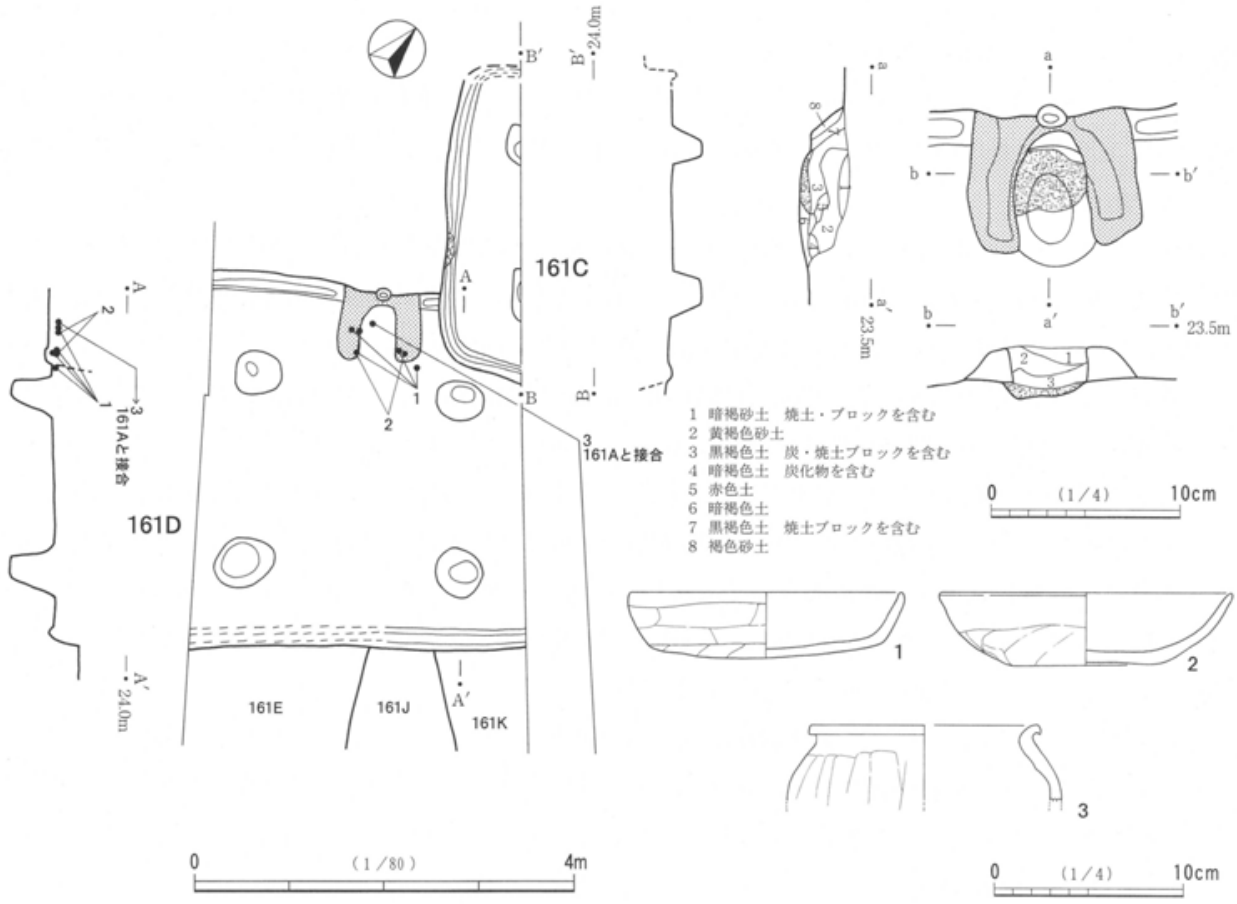
カマドは２か所に付設されていた。カマドＡは，北西壁中央のやや北寄りに設けられている。壁を27cm円形に大きく掘込み，緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落していたが，両袖部が遺存していた。袖部内壁の一部は被熱で赤化している。火床の掘込みは浅く，被熱も弱い。底面には炭化粒と砂質粘土が堆積していた。カマドＢは，北東壁やや南寄りに設けられていた。カマドＡと同様に，壁を30cm円形に大きく掘込み，緩やかに立上がる煙道部を形成している。火床は壁溝に削平されていたが，よく被熱した底面が確認された。

遺物は，土師器杯・甕，土製丸玉などが住居の北東側を中心に出土している。１は完形に近い杯である。底部はやや丸みをもつが，平底を意識してヘラケズリされている。カマドＢ前面の床面直上からの出土である。２の甕は，口縁部と体部との境に明瞭な稜をもつ。カマドＡ周辺から出土した。３は土製の丸玉で，両端が平坦なつくりである。明褐色を呈し，径2.2cm・高さ1.7cm・孔径5mmを測る。

161Ｃ・Ｄ（第155図，図版17・46）

調査区の北西，Ｄ５グリッドに位置する。各時代の住居跡が狭長な範囲に密集している。北東壁と南西壁は調査区域外にかかり，北側で161Ｃ(時期不明)に削平されている。南東側では161Ｅ・Ｊ・Ｋと重複する。161Ｃは出土遺物がないため正確な時期は不明であるが，ほぼ同時期か平安時代の住居跡である。重複しているので，あわせて報告する。

161Ｄの平面形態は方形を呈し，北西壁長2.4m・南東壁長1.5mを検出できた。規模は，一辺4.0m前後と推定される。主軸方位は概ねN-38°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は20cm～30cmである。床面



第155図　161C・D及び出土遺物

は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～14cm，深さ2cm～5cm)は，検出した範囲では巡っている。主柱穴は４本(P1径50cm×53cm・深さ58cm，P2径45cm×48cm・深さ43cm，P3径50cm×54cm・深さ51cm，P4径55cm×64cm・深さ72cm)が検出できた。P4の底面に柱のあたり痕が確認された。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土が主体である。

カマドは北東壁に設けられている。壁をわずかに5cm掘込み，楕円形の煙道部を形成している。煙道部は底面から段をつくりながら，角度をもって立上がる。天井部は崩落し，内部から被熱で赤化した内壁の破片が検出された。袖部は良好に遺存しており，内壁は被熱している。火床は8cm掘窪められ，底面はよく被熱されて焼土が堆積していた。左袖部の内壁寄りに出土した土師器甕の口縁部(３)は，161Ａの砂質粘土中から出土した破片と接合した。

遺物は，カマド周辺から土師器杯などが出土している。１・２は土師器杯で，カマド内から出土した。１は平底に近い底部から，明瞭な稜を形成しながら口縁部が立上がる。２は平底の底部を大きく削りだしている。３の甕の口縁部は，端部が折り返されてような形態である。

161Ｃは161Ｄの北側に位置している。北東側の大半は調査区域外で，南西側1/4の調査である。平面形態はコーナーがやや丸みをもつ方形を呈し，南西壁長は3.2ｍを測る。規模は一辺3.3ｍ前後と推定され，小型の住居跡である。壁は垂直に掘込まれ，壁高は15cm～18cmである。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～13cm，深さ3cm～8cm)は，検出された範囲内では全周する。２本の主柱穴(P1現存径45cm・深さ32cm，P2現存径55cm・深さ24cm)が検出されたが，いずれも調査区域外にかかっている。覆土は，黒色土を主体に暗褐色土が混入する。出土遺物はない。

204A（第156図，図版18・46・47）

調査区の南東，Ｆ７グリッドに位置する。北西コーナーの一部が調査区域外である。西壁の大半は同時期の204Ｃに削平されている。204Ｂと北側で重複し，削平している。カマドを南東コーナーにもつ特異な住居跡である。

平面形態はコーナーが丸みをもつ方形を呈し，東壁長3.25m・南壁長3.3mを測る小型の住居跡である。壁は垂直に掘込まれ，壁高は23cm～27cmである。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅13cm～23cm，深さ5cm前後)は，検出された範囲ではカマド部分を除いて全周する。床面から３基のピットが検出された。連結しているP1(径46cm，深さ17cm)とP2(径42cm，深さ12cm)は，カマドの対面に位置しているが，いずれも浅い。P3(径13cm×15cm，深さ11cm)は，出入り口施設に伴うピットであろう。カマドの前面の床面から，厚さ17cmの砂質粘土のブロックが検出された。覆土は，黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

カマドは南東コーナーに設けられている。煙道部の一部にピットによる攪乱を受けている。壁を20cm張出すように，直角に立上がる煙道部をつくりだしている。内壁が被熱で赤化した天井部は崩落していたが，袖部はよく遺存していた。火床の掘込みは浅く，被熱も弱い。カマド内からは須恵器杯(２)と土師器甕(４)が出土し，カマド周辺の破片と接合している。

遺物の出土は少なく，南側から須恵器杯・蓋，土師器甕などが出土している。１は須恵器蓋で，胎土に雲母を多く含む。２は須恵器杯である。底部を回転ヘラ切り後，多方向の手持ちヘラケズリを行っている。４は土師器甕で，口縁部がくの字状に外反し，小さめの底部がつく。器厚が全体に薄いつくりである。

204C（第156図，図版18）

北西側の大半は調査区域外にかかり，東壁長2.4mと南壁長1.9mを検出した。壁は垂直に掘込まれ，壁高は24cm～28cmである。床面は，凹凸があり堅緻である。壁溝は検出されていない。柱穴(径21cm×27cm，深さ29cm)は西寄りに１本のみ検出された。覆土は，褐色土と黒褐色土を主体に暗褐色土が混在する。

出土遺物は少なく，図示できたのは３の須恵器杯の破片である。

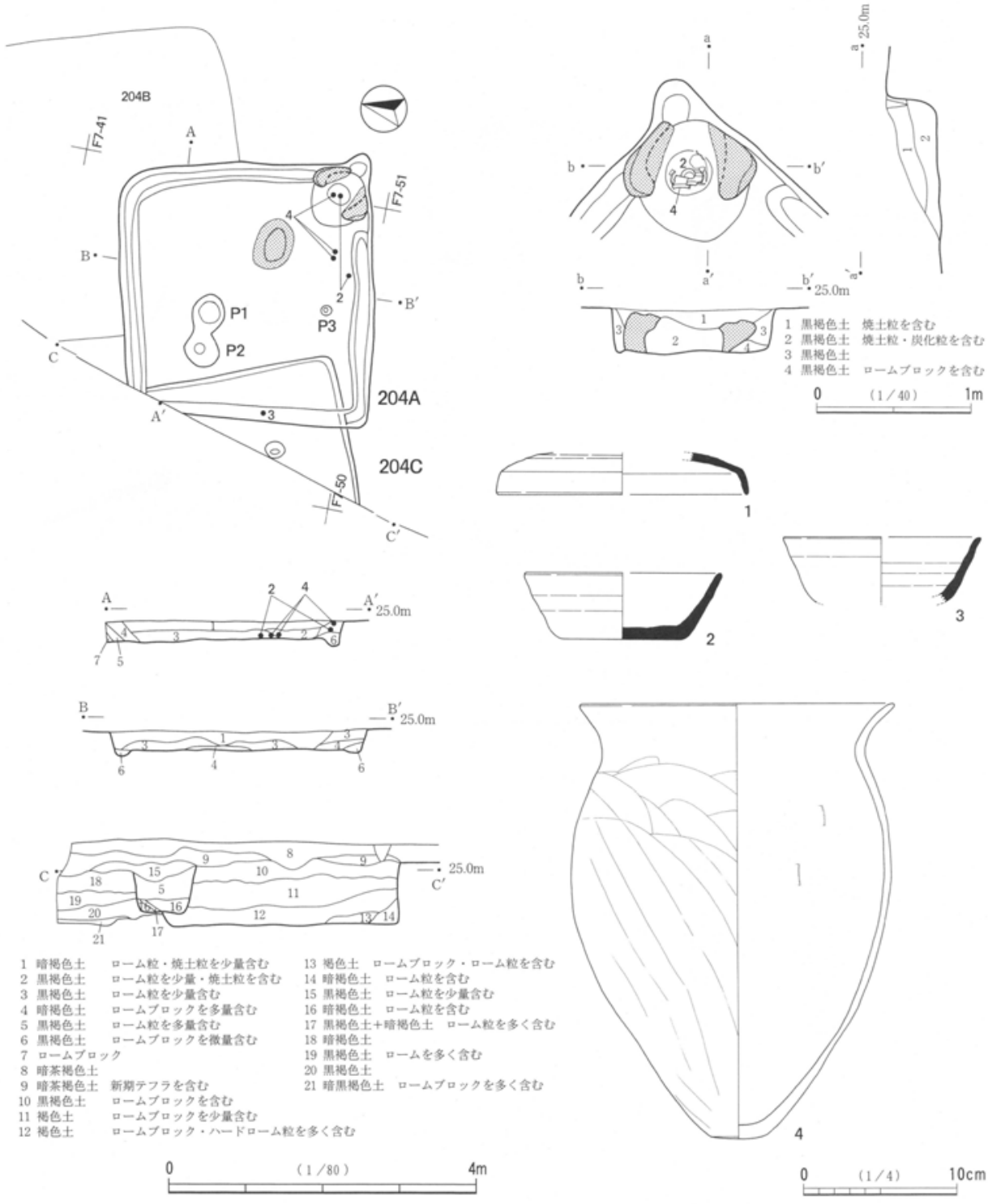
214A，238（第157図，図版18・47・61）

調査区の南東，Ｆ６グリッドに位置する。南東側は調査区域外である。３軒の住居跡が重複し，北西側で214Ｃを削平している。北側で同時期の214Ｂと重複し，壁の上面を削平されているが，壁溝や床面は遺存していた。住居の北西側1/3の調査である。貼床下から検出された土坑238もあわせて報告する。

平面形態は方形を呈し，南西壁長は5.7mを測る。検出できた北東壁長は0.7m，南西壁長は2.7mである。主軸方位はN-40°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存状態の良好な西コーナー付近で52cmを測る。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅14cm～25cm，深さ4cm～7cm)は，カマド部分を除いて調査範囲内では全周する。床面から２本の主柱穴を検出した。P1(径83cm×102cm，深さ50cm)は完掘できたが，P2(現存径77cm，深さ58cm)は1/2が調査区域外にかかっている。覆土は，暗褐色土を主体に暗灰褐色土と黒褐色土が混在する。

貼床除去後に，カマド前面から土坑238(長径1.7m，深さ20cm)を検出した。浅い土坑で，東側が調査区域外へ延びている。北西寄りにさらに方形の土坑(52cm×70cm，深さ28cm)をもつ。カマドの前面に位置することになるため，貯蔵穴の可能性は低いと思われる。

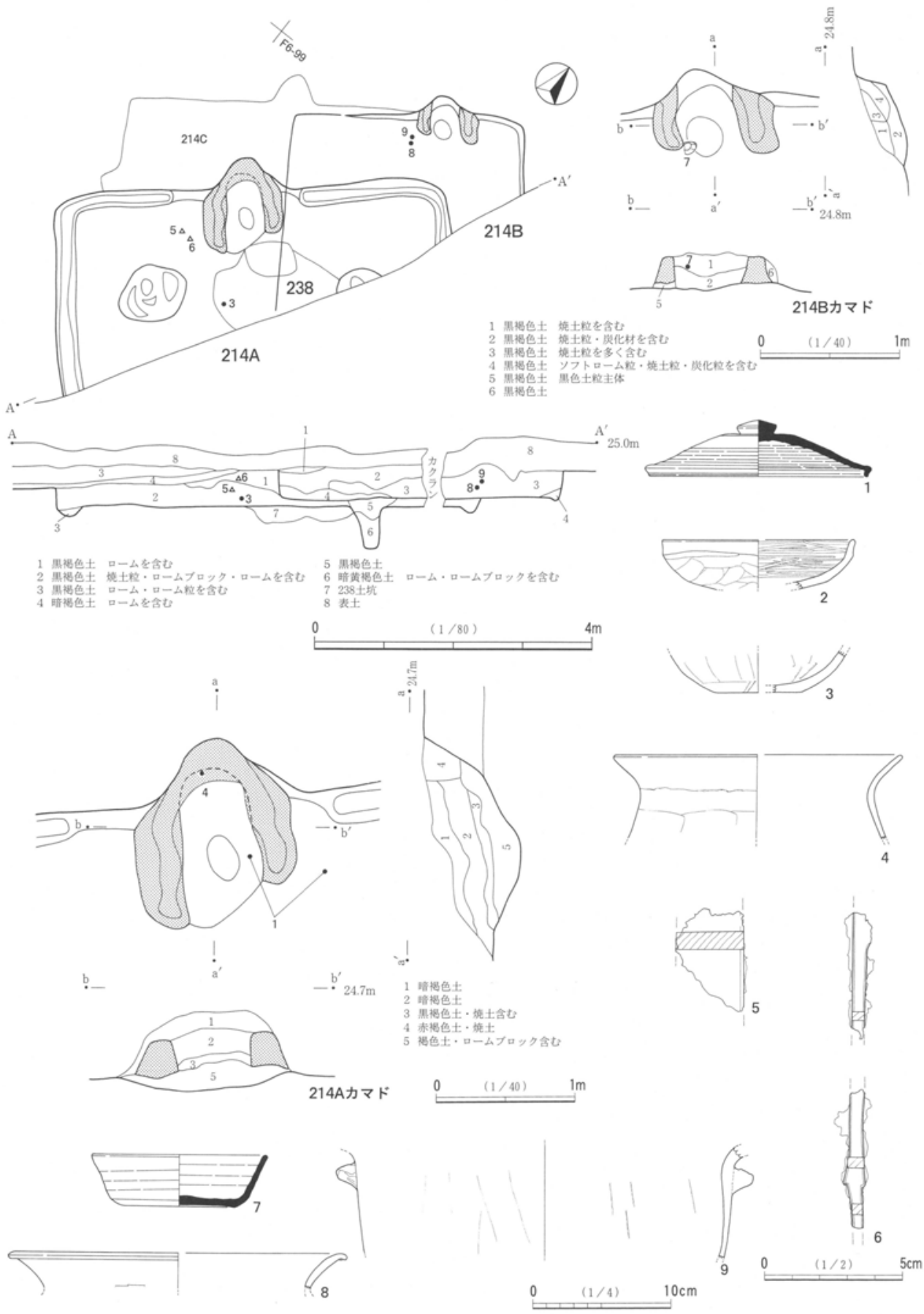
カマドは，北西壁中央に214Ｃの覆土を40cm掘込んで設けられている。天井部は崩落していたが，袖部は良好に遺存し内壁は一部被熱のため赤化している。火床の掘込みは浅く，焼土ブロックを含む黒褐色土



第156図　204A・C及び出土遺物

が堆積している。カマド内から１の須恵器蓋の破片が出土した。

遺物は，須恵器杯・蓋，土師器杯・椀・甕，鉄製品などが覆土中から出土している。１は須恵器蓋で，宝珠形のつまみがつく。２は土師器杯，３は椀の底部である。４の甕の口縁部はくの字状に外反し，器厚は薄い。カマド煙道部付近から出土した。５は不明鉄製品である。現存長3.7cm・幅2.5cm・厚さ7mmを測る。６は鉄鏃の篦被から茎の部分である。接合はしないが，同一個体である。現存長は２個体で9.5cm・幅4mm～6mm・厚さ3mm～4mmを測る。覆土中層から上層にかけての出土である。



第157図　214A・B，238及び出土遺物

214B（第157図，図版18・47）

214Aの北側に位置し，重複する３軒の住居跡のなかでは最も新しいが，南西側は214A・Cを先行して調査したため，壁や床面の状況などは不明である。南東側は調査区域外にかかり，検出できたのは北側の1/4である。

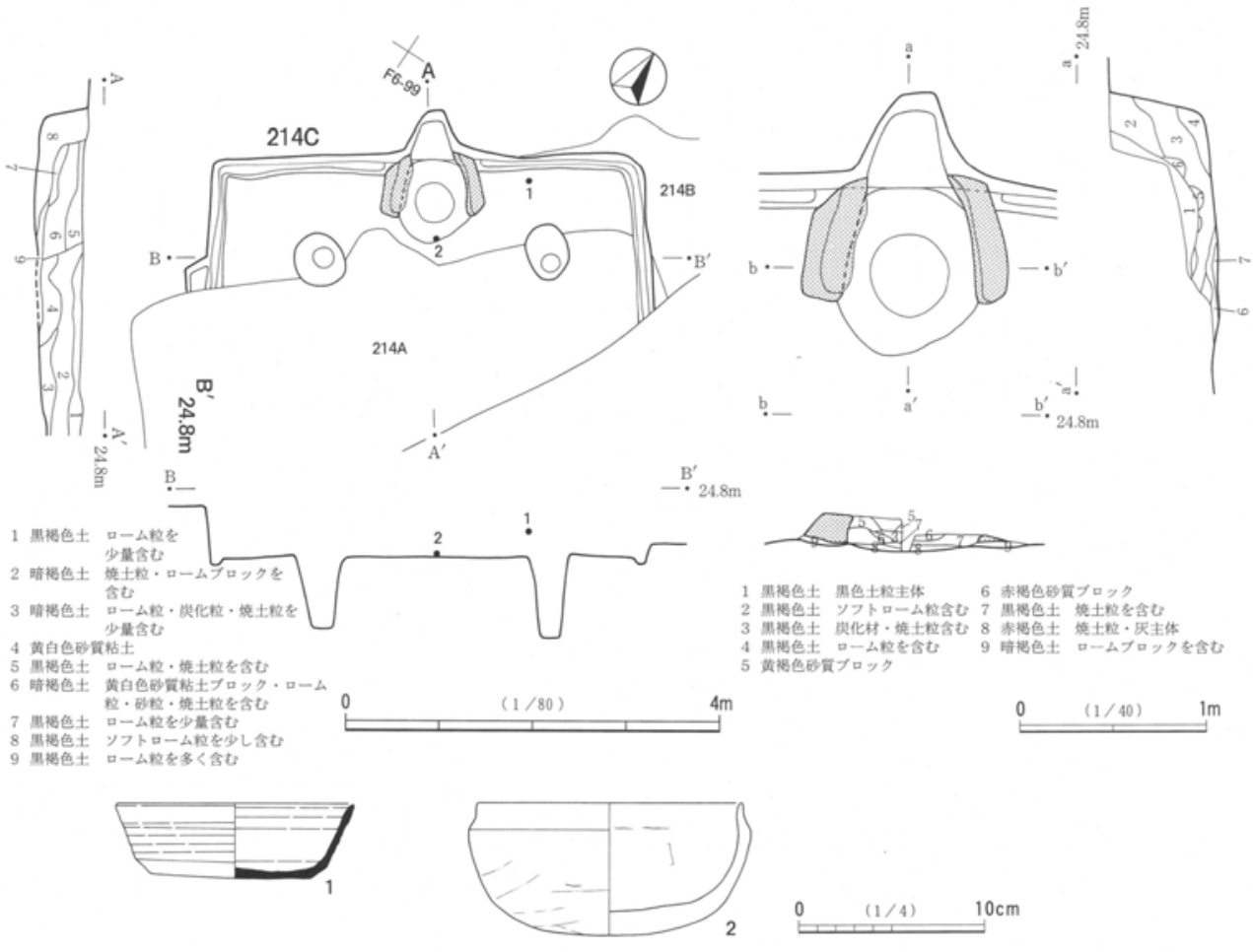
平面形態は方形と考えられる。北西壁は214Cのカマドの東側を削平していることから，推定で長さ3.3mである。規模が一辺3.5m前後の比較的小型の住居跡と想定される。主軸方位はN-36°-Wである。北側の壁は垂直に掘込まれ，壁高は39cmである。床面は平坦で，カマド前面から中央部にかけて硬化面が遺存している。柱穴や壁溝は確認されていない。覆土は，黒褐色土を主体に暗褐色土が混在する。

カマドは北西壁中央やや北寄りに設けられている。壁を25cm掘込み，徐々に立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落していたが，両袖部が遺存していた。袖部の内壁は被熱のため赤化している。火床の掘込みは浅いが，底面はよく被熱していた。カマド内からは須恵器杯が出土している。

出土遺物は少なく，須恵器杯や土師器甕（８）・甑（９）などが，カマド周辺の床面直上から，わずかに出土している。７の須恵器杯は，口径に対して底部が大きいつくりで，底部全面と体部下端は回転ヘラケズリで仕上げられている。明灰色を呈し，内外面に火襷痕が残る。カマド左袖付近からの出土である。

214C（第158図，図版47）

調査区の南東，Ｆ６グリッドに位置する。北東側と南西側を214A・Bと重複し，それぞれ削平されて



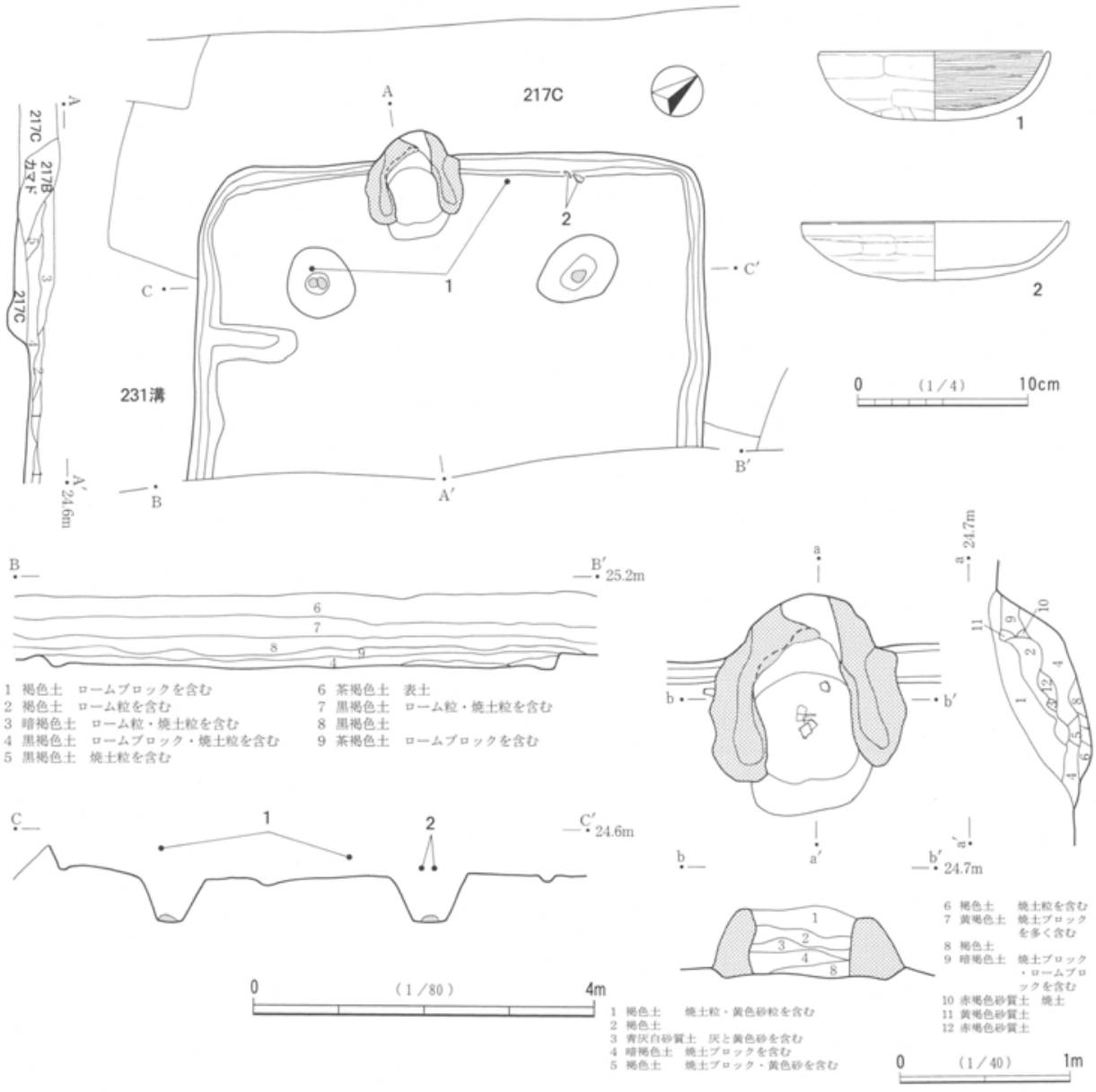
第158図　214C及び出土遺物

いる。北東側はカマドの右袖部上面まで削平されているが，壁の下部や壁溝，床面は遺存していた。住居の北西側1/3の調査である。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は4.5mを測る。検出できた北東壁長は1.6m，南西壁長は1.4mである。主軸方位はN-33°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれている。壁高は，遺存状態の良好な北西壁側で51cm～56cmである。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅8cm～15cm，深さ6cm～10cm)は，調査範囲内では全周する。２本の主柱穴(P1径50cm×58cm・深さ79cm，P2径45cm×62cm・深さ90cm)は，214Aと重複する位置で検出した。覆土は，黒褐色土を主体に暗褐色土が混在する。

カマドは北西壁中央に，壁を40cm大きく掘込んで設けられ，ほぼ直角に立上がる煙道部を形成している。中央から北東側は214Bに上面を削平され，右袖部は基部が残存している程度である。左袖部の内壁はよく被熱され，赤化している。火床は4cm皿状に掘窪められ，焼土が堆積していた。

遺物の出土は少ない。１は須恵器杯である。底部は，ヘラ切り後に体部下端から底部全面を回転ヘラケ



第159図　217B及び出土遺物

ズリで調整している。北西壁際の覆土中層から出土した。カマド前面の床面からは，２の土師器椀が出土している。丸みのある体部に短い口縁部が直立する。

217B（第159図，図版18・47）

調査区の南東，Ｇ６グリッドに位置する。南東側は調査区域外にかかり，北西側では古墳時代中期の住居跡217Ｃと重複し上面を削平している。南東側は北東-南西に走る近世の溝状遺構189に床面まで削平されている。住居の北西側3/5の調査である。

平面形態は西コーナーが丸みをもつ方形を呈し，北西壁長は5.5ｍを測る。北東壁長3.3ｍ，南西壁長は3.5ｍを検出した。主軸方位はN-52°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は遺存状態の良好な北側で36cm～40cmである。床面は平坦で，全体にやや軟弱である。壁溝（幅11cm～27cm，深さ5cm前後）はカマド付近を除いて，調査範囲内では全周する。南西側の壁溝から根太痕跡の溝がP1の近くまで延びている。北西側の床面から２本の主柱穴（P1径77cm×84cm・深さ49cm，P2径77cm×105cm・深さ46cm）を検出した。いずれも底面に柱のあたり痕が認められる。覆土は，黒褐色土を主体に褐色土が混在している。

カマドは北西壁中央やや南西寄りに設けられている。壁を37cm大きく掘込んで，角度をもって立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落していたが，袖部は比較的良好に遺存していた。火床は10cmほど掘窪められ，焼土粒や焼土ブロックを含む層が堆積していた。

出土遺物は多く，床面から覆土上層まで土師器杯などが出土しているが，図示できるものは少ない。１・２は土師器杯である。内面に丁寧なミガキが施されている。覆土中層から出土した。２は浅く扁平な形態の杯である。北西壁下の壁溝内からの出土である。

258（第160図，図版18・47・61）

調査区の北，Ｃ７グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかり，中央部が保存樹木のため未調査である。南側では257と重複している。西側1/2の調査を行った。

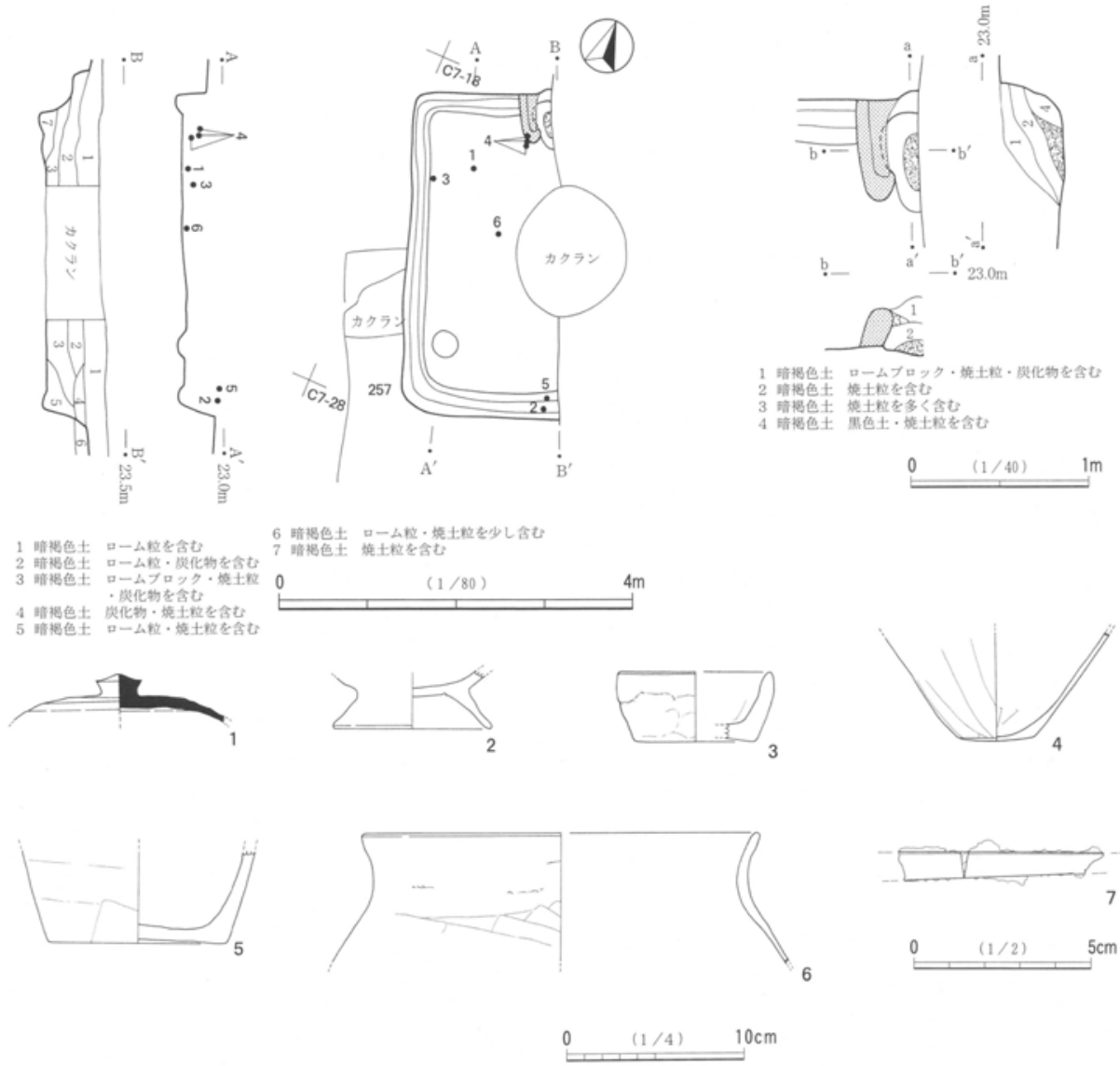
平面形態は方形を呈し，西壁長は3.6ｍを測る。北壁長1.5ｍ・南壁長1.7ｍを検出できた。規模は推定で一辺3.7ｍ前後であろう。主軸方位はN-21°-Wである。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は30cmである。床面は平坦で，全体にやや軟弱である。壁溝（幅12cm～22cm，深さ3cm～8cm）は比較的幅が広く，カマド部分を除いて調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていない。覆土は，ロームブロックを多く含む暗褐色土が主に堆積している。

カマドは北壁に設けられているが，東側の1/2が調査区域外である。壁を10cm掘込んで角度をもって立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，遺存状態の良好な左袖部を検出できた。袖部の内壁は被熱のため上部が赤化している。火床は5cmほど楕円形に掘窪められているが，焼土の堆積はない。カマド内からは土師器杯の破片が出土している。

遺物は，床面直上や覆土中から須恵器蓋や土師器高台付椀・甕，鉄製品が出土している。１は須恵器蓋である。宝珠形のつまみがつく。床面直上からの出土である。３は手捏ねである。４・６は甕である。６の口縁部は全体に器厚が薄いつくりである。２の高台付椀と５の甕の底部は，覆土上面から出土しており，混入であろう。７は刀子の身部で，両端を欠損する。現存長5.8cm・幅0.6cm～0.8cm・厚さ2㎜を測る。

262（第161・162図，図版18・47）

調査区の北，Ｂ７・Ｃ７グリッドに位置する。南西側の1/10が調査区域外である。北東コーナーにカマドが付設されている。

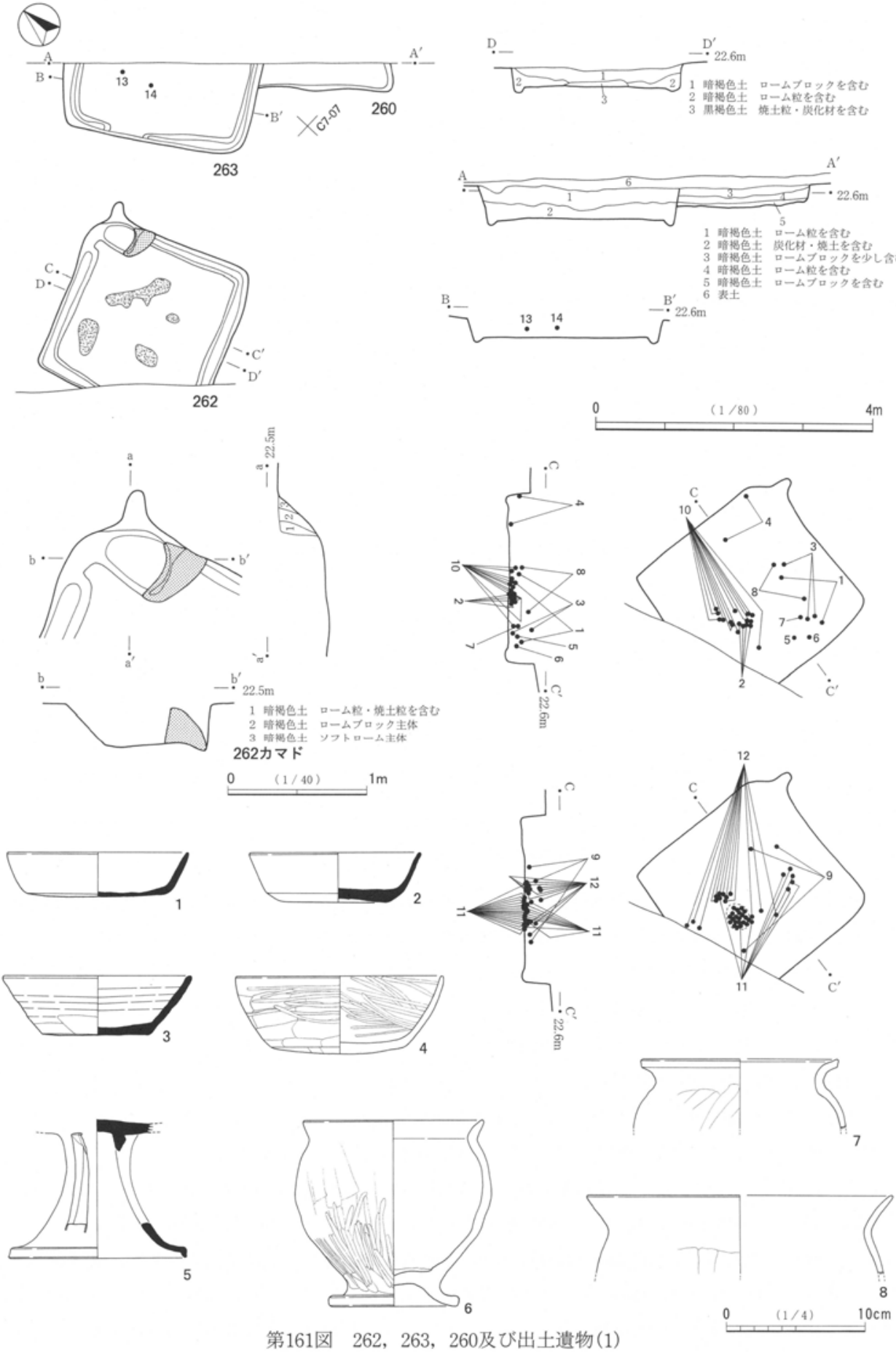


第160図　258及び出土遺物

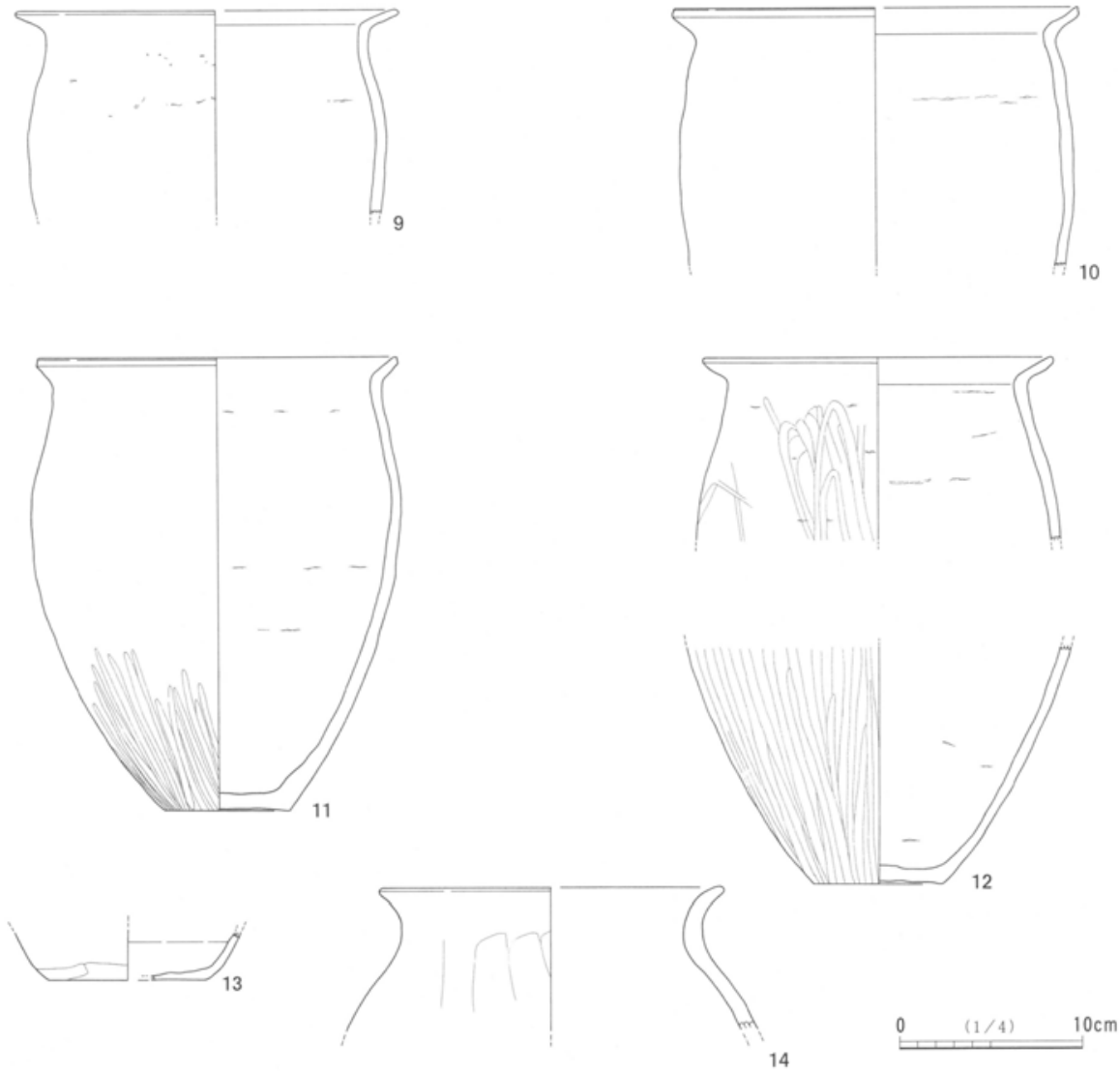
平面形態は方形を呈し，規模は南北長2.5m，東西長は推定で2.6mの小型の住居跡である。壁は垂直に掘込まれ，壁高は27cm～39cmを測り南側が高くなっている。床面は凹凸があり，中央部がやや堅緻である。壁溝(幅15cm～20cm，深さ3cm前後)は幅が広く，カマド部分を除いて調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていない。カマド前面から中央部にかけての範囲の床面に，焼土や炭化粒のブロックが堆積していた。覆土は，暗褐色土に黒褐色土(焼土粒や炭化粒を含む)が混在する。

カマドは北東コーナーに設けられている。壁を20cm長楕円形に掘込んで，緩やかに立上がる煙道部を形成する。遺存状態は良好ではなく，右袖部が残存している程度である。火床の掘込みは浅いが，底面はよく被熱していた。

小型の住居跡ではあるが，出土遺物は多い。須恵器杯，土師器杯・甕などが床面や焼土中から出土している。１～３は須恵器杯である。１は器高が低く，底部が全面回転ヘラケズリである。灰白色を呈し，内外面に火襷痕が残る。２の底部は，回転ヘラ切り後に底部全面と体部下端を手持ちヘラケズリで調整している。３は胎土に長石や雲母を多量に含み，底部全面と体部下端は手持ちヘラケズリである。焼成が甘



第161図　262，263，260及び出土遺物(1)



第162図　262，263出土遺物（2）

く，暗灰茶褐色を呈する。４は土師器椀である。やや丸みのある底部に，内湾しながら立上がる体部をもつ。内外面はミガキが施されている。５は須恵器高盤あるいは高杯の脚部で，３方に透孔が長方形に切り取られている。６は台付甕である。台部は低く，全体に雑なつくりである。７～12は土師器甕である。９～12は同タイプの甕で，口縁部がくの字状に短く外反し，体部下半にヘラミガキが施されている。住居中央の床面から破片の状態でまとまって出土した。

263，260（第161・162図，図版18）

調査区の北，Ｂ７グリッドに位置する。北東側が調査区域外にかかり，南東側2/5を調査したがカマドは検出されていない。南東側で重複している260(時期不明)は，ここで報告する。

263の平面形態は方形を呈し，南西壁長は2.6mを測る。北西壁長0.9m，南東壁長1.3mを検出できた。規模は一辺2.8m前後と推定される小型の住居跡である。壁は，南西壁では垂直に掘込まれているが，北東壁では緩やかである。壁高は26cm～30cmである。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。壁溝(幅8cm～18cm，深さ3cm)は，南西壁で途切れているが，そのほかでは巡っている。柱穴は検出されていない。覆土は，焼土粒や炭化粒を若干含む暗褐色土の上に，ハードローム粒を多く含む暗褐色土の層が堆積している。

遺物は少なく，土師器杯(13)・甕(14)が床面直上から出土している。

260は，南コーナー付近から南西壁の一部を検出できた。方形の住居跡で，検出できた南西壁長は1.95mである。壁は垂直に掘込まれているが，上面を削平されているために，壁高は3cm～5cmが遺存していた。床面は検出範囲では軟弱である。柱穴や壁溝は検出されていない。出土遺物はない。

第2節　平安時代の遺構

この時期の竪穴住居跡は39軒で，台地の東側を中心に分布している。大きくは北東から北側のグループと南側のグループにわけられる。特に北側では，粘土採掘坑と土師器焼成坑が検出され，明確な痕跡は確認できなかったが，周辺の住居跡が土器生産の工房として使用された可能性が高い。

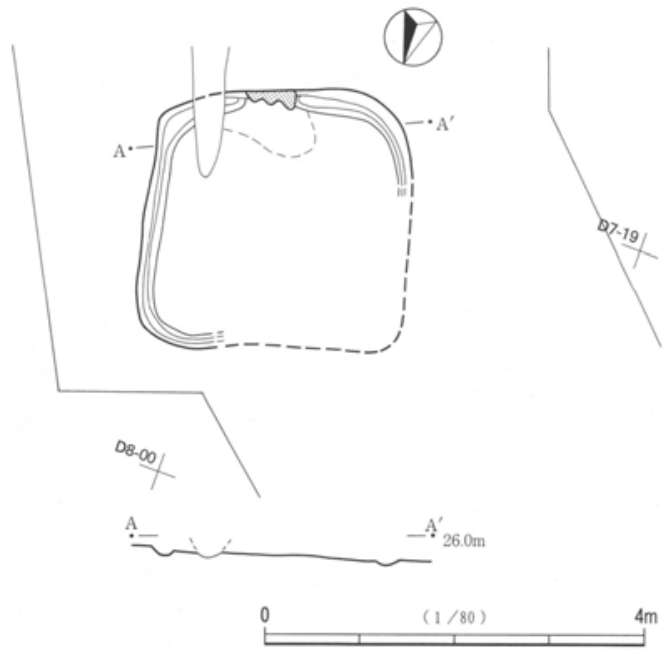
1　竪穴住居跡

035（第163図，図版19）

調査区の北東，D7・D8グリッドに位置する。

すでに上面を大きく削平されており，壁溝の検出により，住居跡の存在が判明した。

平面形態は方形を呈し，規模が一辺2.7m前後の小型の住居跡と推定される。床面は南側で一部確認され，硬化面がわずかに遺存している。柱穴は検出されていない。壁溝(幅8cm～16cm，深さ3cm前後)は，検出できた範囲内では南壁中央を除いて巡っている。この南壁中央部に砂質粘土がまとまって検出されていることから，カマドがこの部分に存在していた可能性もある。出土遺物はない。

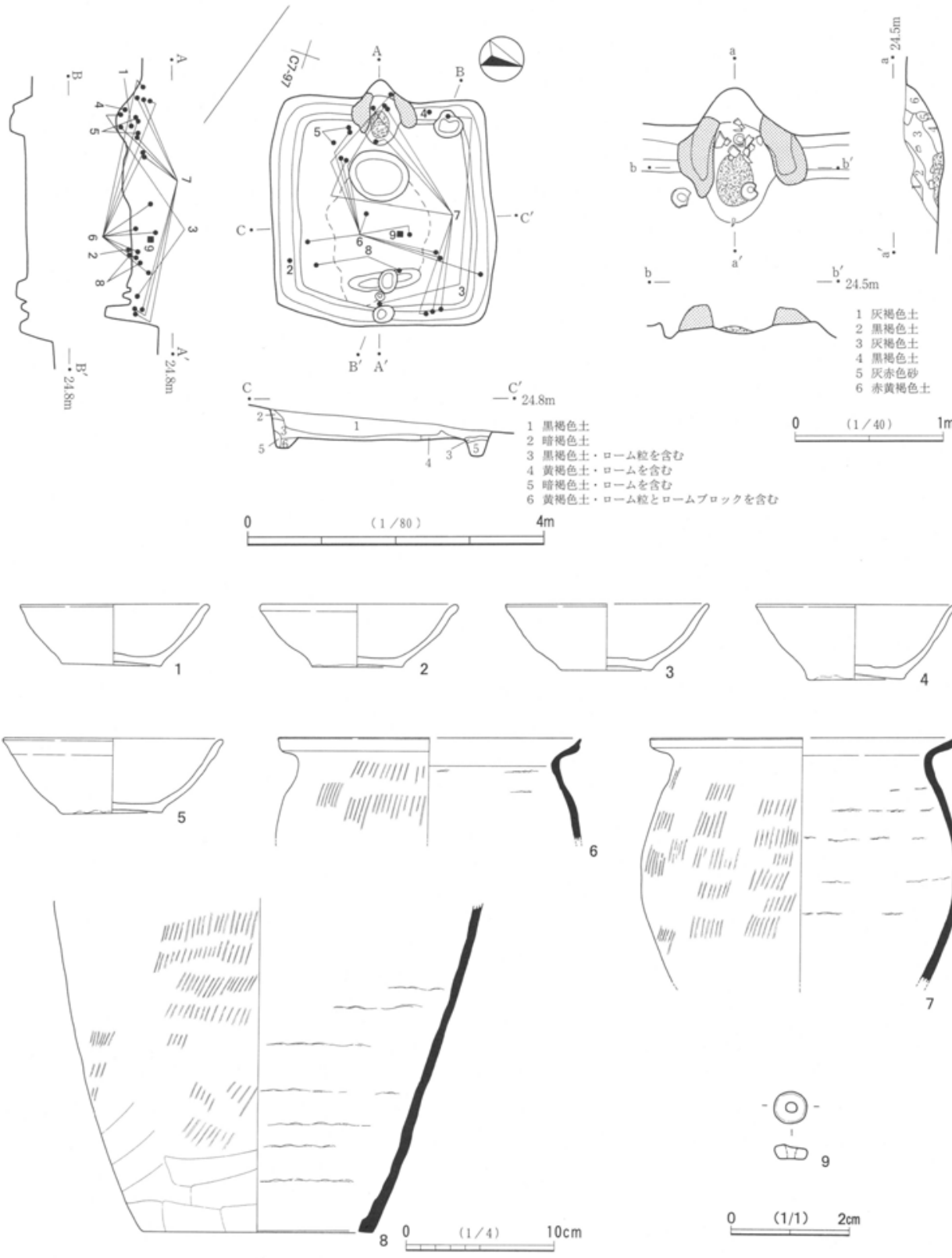


第163図　035

037（第164図，図版19・47・48）

調査区の北東，C7グリッドに位置する。重複する遺構もなく，完掘できた住居跡である。

平面形態は方形を呈し，規模は3.05m×3.10mである。カマドが西壁に設けられ，主軸方位はW-18°-Sである。壁は多くは垂直に掘込まれているが，部分的に緩やかな箇所もある。壁高は13cm～43cmを測り，北側が削平されて次第に低くなっている。床面は平坦で，全体に堅緻である。特に，中央部では固く踏み締められている。壁溝(幅20cm～25cm，深さ15cm～20cm)は全周し，幅が広く比較的深くつくられている。一部には壁の板材の痕跡も確認されている。主柱穴は検出されていない。出入り口施設に伴うピットは3基である。P1(径26cm×34cm，深さ16cm)は浅い溝状の窪み(23cm×104cm，深さ4cm)の中央に設けら，P2(径13cm×14cm，深さ9cm)は，P1と壁溝の間に位置している。P3(径23cm×27cm，深さ39cm)は壁溝内に



第164図　037及び出土遺物

穿たれ，P2・P3はカマドを通る中心線上に配置されている。P4(径30cm×43cm，深さ20cm)は，北西コーナーに設けられ，埋土中から土師器杯・甕片が出土している。埋土には，砂質粘土や灰が堆積しており，貯蔵穴の可能性もある。P5(径70cm×80cm，深さ10cm)は，カマド前面の浅い土坑である。覆土は，黒褐色土が厚く堆積し，暗褐色土や黄褐色土が混在する。

カマドは西壁中央に設けられている。壁を33cm掘込んで，煙道部は緩やかに立上がっている。天井部は崩落していたが，両袖部が遺存していた。袖部の内壁は，被熱のため赤化している。火床の掘込みは浅いが，底面は広く被熱していた。カマド内からは，土師器杯(１)・甕片などが出土している。

出土遺物は多く，カマド周辺や南東側コーナー付近の床面から，土師器杯，須恵器甕などが散在して出土している。１～５は土師器杯で，底部は回転糸切り無調整である。６～８は須恵器甕で，体部はタタキ後にナデで仕上げられている。９は滑石製の臼玉である。径5.5㎜・高さ1.5㎜～2.5㎜・孔径2㎜を測る。

060（第165図，図版19・48）

調査区の北東，Ｄ７グリッドに位置する。南西壁の北側から西コーナーにかけての範囲は，保存樹木のため未調査である。同時期の061Ａと北西側で重複している。

平面形態は方形を呈し，規模は2.60ｍ×2.65ｍである。主軸方位はＮ-59°-Ｅである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は9cm～24cmを測り西側は次第に低くなっている。床面は平坦で，中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅8cm～15cm，深さ3cm前後)は，カマド部分と南西壁の一部を除いて巡っている。主柱穴は確認できなかったが，出入り口施設に伴うピットP1(径24cm×25cm，深さ20cm)を検出した。床面中央には土坑(径81cm×84cm，深さ50cm)が設けられ，セクションの観察等から本住居に伴うものであることが判明した。埋土の中層には硬化した床面の一部が堆積していることから，土坑の立上がり部分は貼床が施され，住居廃絶時に硬化面を一部壊したものと考えられる。埋土は，締まりの弱い黄褐色土の上に黒褐色土が堆積している。住居覆土は，黒褐色土と暗褐色土を主体に暗黄褐色土が混在する。

カマドは北東壁中央に設けられ，壁を20cm掘込んで緩やかに立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落し，左袖部の遺存状態も悪い。火床の掘込みはないが，底面はよく被熱されていた。カマド内からは，２個体の小型の甕や支脚が出土している。

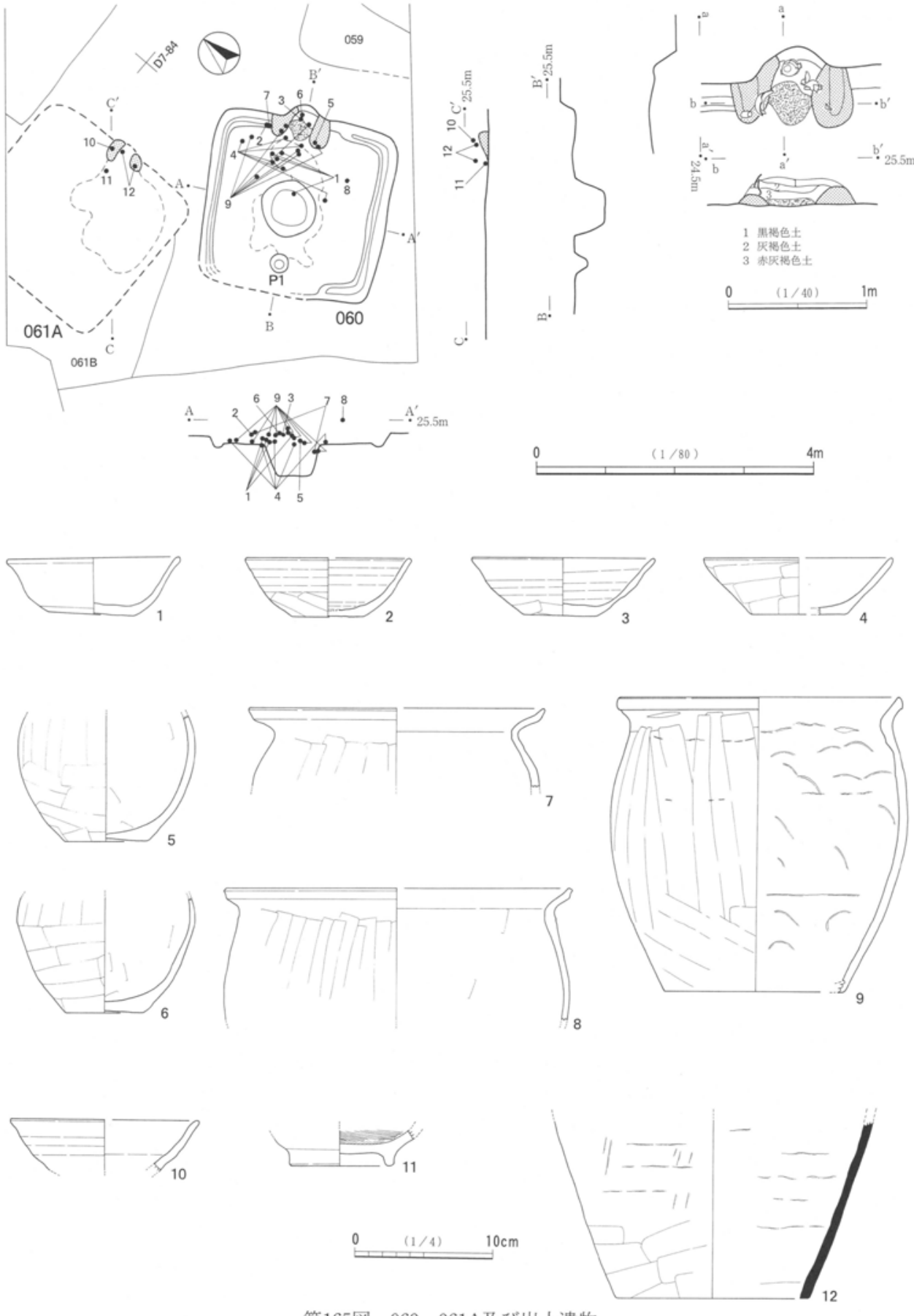
遺物はカマド周辺の床面を中心に，土師器杯・甕が出土した。１～４は土師器杯である。１は底部は回転糸切り後に周縁と体部下端に回転ヘラケズリを行っている。２・３の底部と体部下端は手持ちヘラケズリである。４は体部をヘラケズリで調整している。５・６は小型甕の体部である。口縁部を欠損する。７～９は甕である。９は器高に比べて底径の大きな形態で，体部はヘラケズリで仕上げられている。

061Ａ（第165図，図版19・48）

061Ｂ(古墳時代後期)の調査中に，上部で硬化した床面を検出した。そのため，周辺を精査したところ東側で袖部の痕跡や焼土を検出し，本住居跡の存在が判明した。南東側を060に削平されている。

平面形態や規模等は不明である。柱穴も検出されていない。カマドは東壁に設けられ，両袖部の基部に使用された砂質粘土の痕跡を検出した。火床の掘込みはなく，被熱も弱い。焼土ブロックの堆積範囲が火床であろう。

遺物は，カマド周辺から土師器杯(10)・高台付杯(11)，須恵器甑(12)などがわずかに出土している。12は底部を欠損しているが，孔部は五孔の形態であろう。

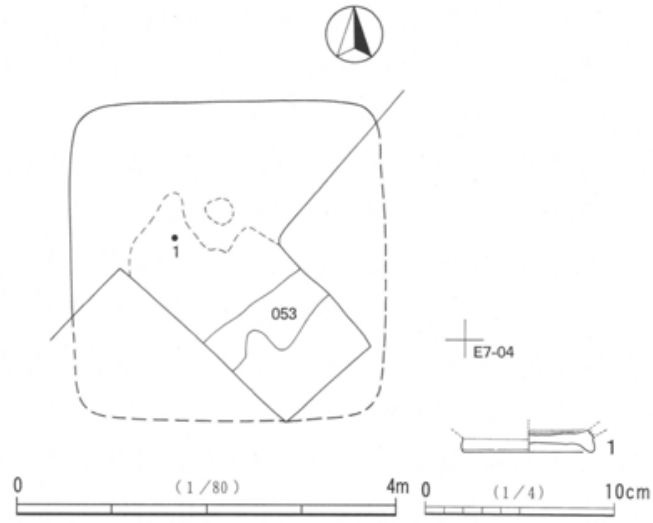


第165図　060，061A及び出土遺物

062（第166図）

調査区の北東，Ｄ７・Ｅ７グリッドに位置する。上面を大きく削平され，北側を除いた範囲が調査区域外にかかる。中央部を053溝状遺構が横断する。平坦な硬化面と遺物の出土から住居跡の存在が判明したが，規模・柱穴・カマド等の詳細については不明である。

遺物は床面からわずかに出土しているが，図示できたのは１の高台付杯である。内面によくミガキが施されている。

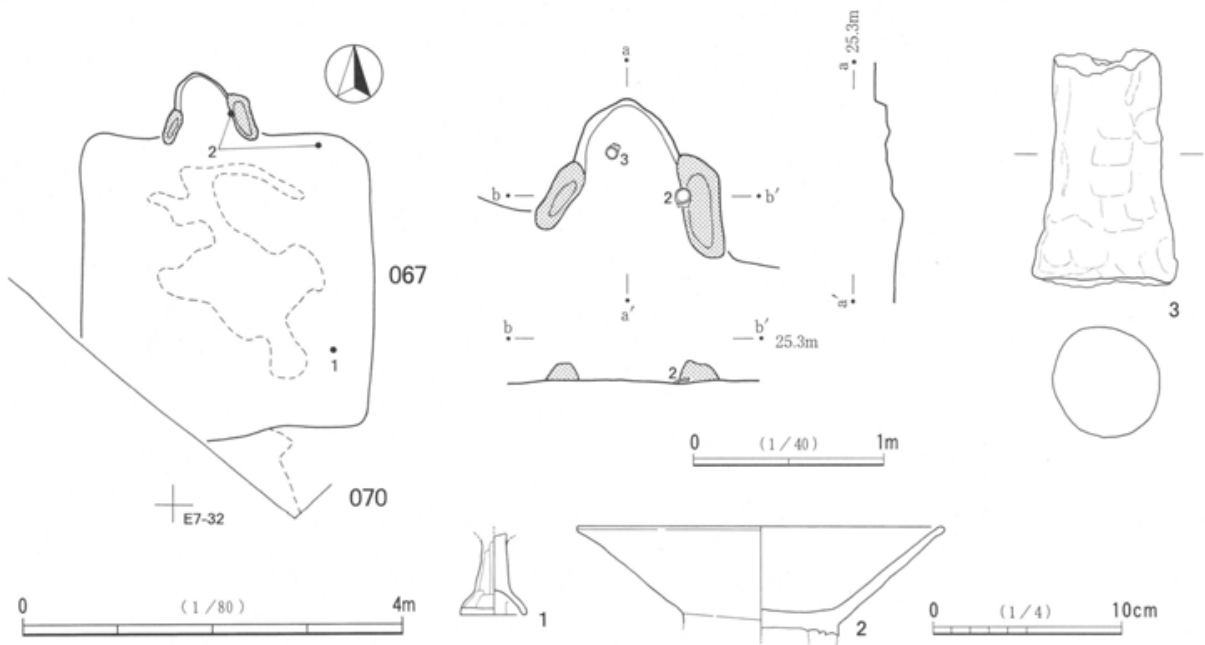


第166図　062及び出土遺物

067，070（第167図，図版19・48）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。複雑な重複から上面を大きく削平してしまい，南西側の一部は調査区域外にかかる。硬化した床面とカマドの砂質粘土から，概略の範囲を想定した。069Ｅの上面に重複している。なお，南側で重複し床面のみが検出された070(時期不明)もここで報告する。

067の平面形態は正方形を呈し，規模は3.05m×3.10mと推定される。主軸方位はN－1°－Wである。壁の状態はセクションで観察する限り，やや緩やかに掘込まれ壁高は25cmである。壁溝は検出されていない。床面は凹凸があり，硬化面が中央部に不整形に広がっている。調査時に柱穴は確認できなかったが，下面に重複する069Ｅの床面から数基のピットが検出された。このうち，P1(径45cm×50cm，深さ16cm)は本住居の柱穴の可能性がある。覆土は明褐色土が堆積している。



第167図　067，070及び出土遺物

カマドは，北壁中央に壁を68cm大きく掘込んで設けられている。袖部は掘込みの内壁に遺存していた。火床の掘込みはなく，被熱も確認されていない。カマド内からは，支脚(３)と右袖部の内壁から高台付椀(２)が出土している。

出土遺物は少ない。１はミニチュア土器である。形態から，高杯の脚部と考えられる。２は高台付椀の大きく開く体部である。底部に糸切り痕がわずかにみえる。

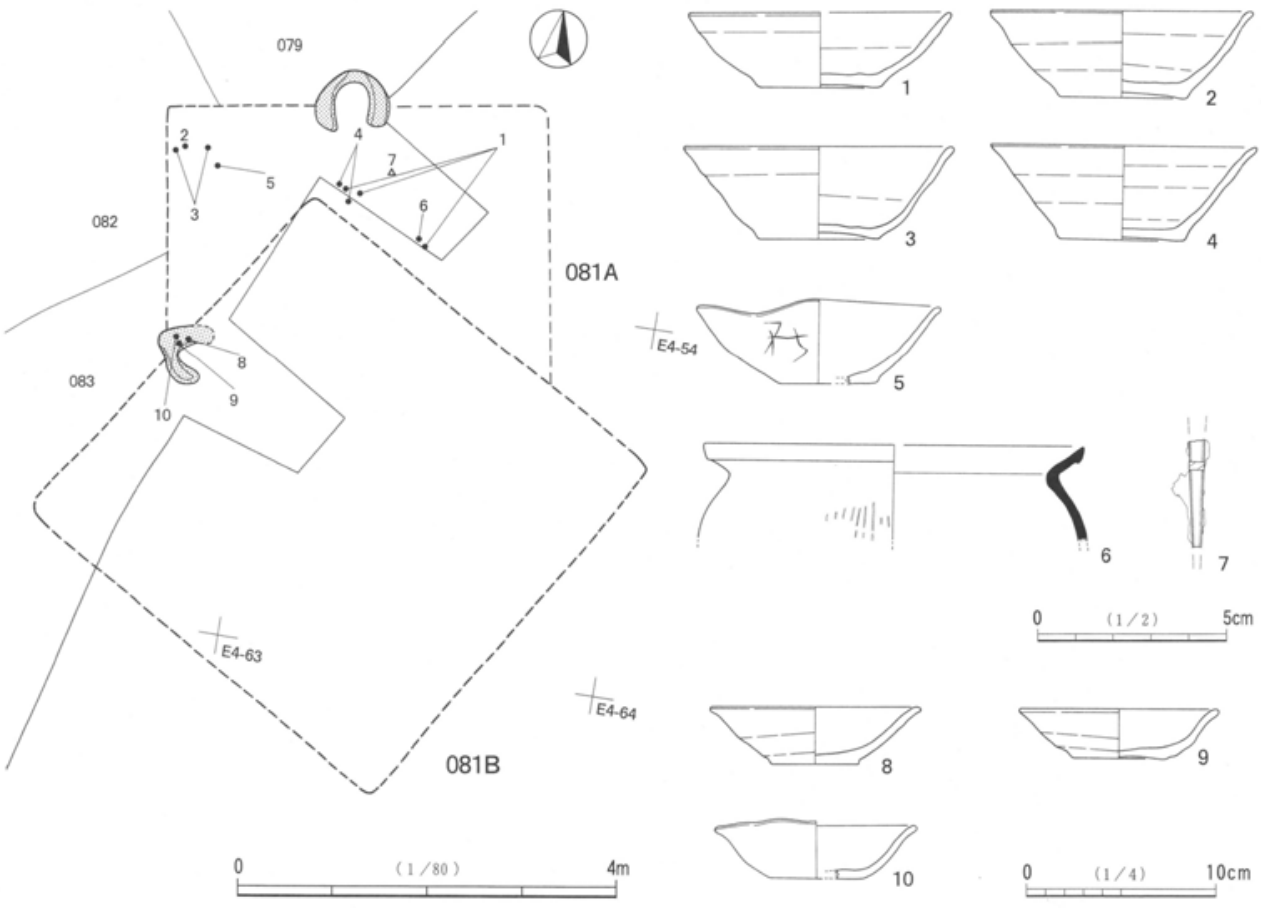
070は，067の南側に接して硬化した床面が検出したことから，その存在が判明した。南西側は調査区域外であるが，セクションには067に削平された070の床面が明瞭に観察される。正確な時期は不明であるが，古墳時代後期の069Ｅよりは新しいことがわかる。覆土には黒褐色土が堆積している。出土遺物はない。

081Ａ（第168図，図版48）

調査区の北西，Ｅ４グリッドに位置する。081Ｂや古墳時代の住居跡082などと複雑に重複している。カマドを検出し，遺物も出土したことから住居跡の存在が判明したが，上面をすでに削平しており住居の規模や床面の状態等は不明である。南側は081Ｂと重複し，調査区域外にかかっている。

平面形態は方形と考えられ，一辺４ｍ前後と推定される。壁の状態は不明で，柱穴等は確認されていない。カマドは北壁に設けられ，両袖部の基部の砂質粘土が遺存していた。火床の状態は不明である。

遺物は，カマドの南側や西側の床面から，土師器杯，須恵器甕や鉄製品などが出土している。１～５は杯である。底部は，回転糸切りで切り離したままの無調整である。５の体部外面には線刻があるが，判読不明である。５の甕は体部外面にタタキ目がわずかに残る。７は鉄鏃の茎であろう。現存長2.8cmを測り，断面は方形(2mm×4mm)である。



第168図　081A・B及び出土遺物

081B（第168図，図版48）

081Aの南側に位置し，南東側の大半は調査区域外である。081Aと同様の状態で，カマドの検出から住居跡の存在が判明した。

平面形態は方形と考えられ，一辺4.5m前後と推定される。カマドの位置から，主軸方位は081Aよりは大きく西方向に振れている。カマドは北西壁に設けられ，袖部に使用された砂質粘土がわずかに遺存していた。火床は掘込みは浅いが，底面は被熱していた。

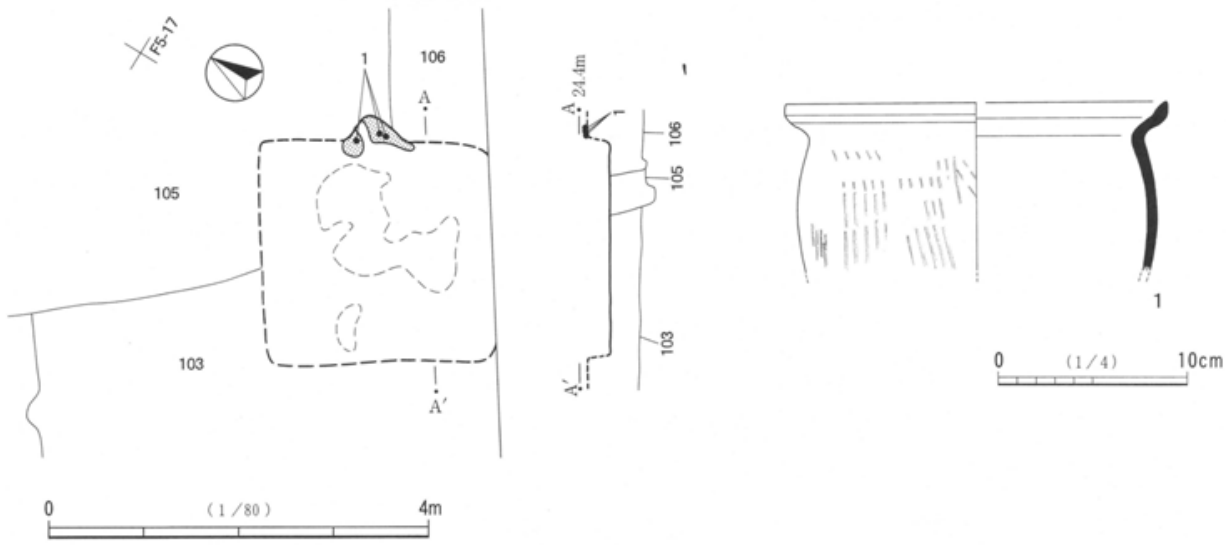
遺物は，カマド袖部から８～10の土師器杯が出土している。いずれも小型の扁平な形態で，底部は回転糸切り無調整である。法量は，口径10.4cm～10.9cm・底径4.5cm～4.8cm・器高2.6cm～3.0cmとまとまっており，杯と小皿の中間的な大きさである。８の底部は高台を意識してつくりだされており，小皿により近い形態をとっている。杯から小皿へ変化する過渡的な時期の様相が考えられる。

104（第169図）

調査区中央，Ｆ５グリッドに位置する。南東側は調査区域外にかかり，古墳時代の住居跡103・105の上面に構築されている。カマドの砂質粘土と硬化した床面の検出から，住居跡の存在が判明した。上面はすでに大きく削平されており，正確な様相は不明である。

平面形態は方形と考えられ，一辺2.5m前後と推定される小型の住居跡である。カマドや床面の位置から，主軸方位は東に大きく振れている。床面は，硬化面がカマド前面から南側に広がっている。カマドは北東壁に設けられ，構築材の砂質粘土が遺存し，火床の被熱部分もわずかに確認できた。

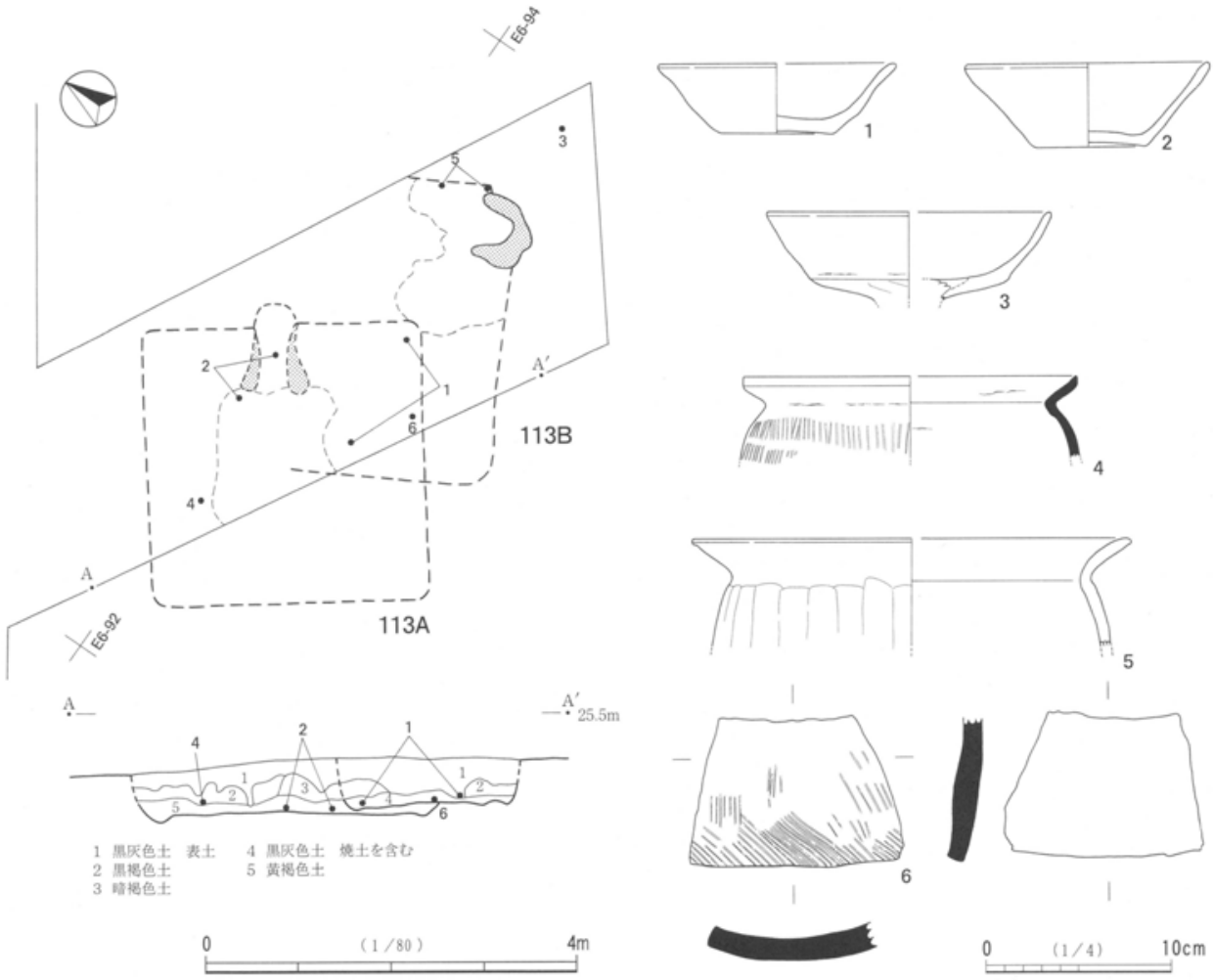
遺物はカマドや床面から，土師器杯・甕，須恵器甕の破片が出土しているが，図示できたのは１の須恵器甕である。体部にタタキ目が残る。



第169図　104及び出土遺物

113A・B（第170図，図版48）

調査区中央，Ｅ６グリッドに位置する。上面を大きく削平された狭長な範囲から，カマドの砂質粘土と硬化した床面の検出や遺物の出土から，２軒の住居跡の存在が判明した。調査区域外まで住居跡は延びているが，全容は不明である。



第170図　113A・B及び出土遺物

113Aは方形の住居跡で，規模は一辺３m前後と推定される。カマドや床面の位置から，主軸方位は東に大きく振れている。床面は，カマドから中央部に硬化面が広がっている。セクションの観察から壁溝が巡っていたことがわかる。カマドの両袖部の砂質粘土が比較的長く延びており，掘方内壁の部分も含んでいる可能性もある。煙道部の下部は被熱されていたが，火床は判然としない。

遺物はカマドや床面から，土師器杯，須恵器甕や須恵器転用砥石などが出土している。１・２は土師器杯である。底部は回転糸切り無調整である。２はカマド内から出土している。６は須恵器甕の体部の破片を転用した砥石である。断面が擦られた痕跡が残る。３は遺構外から出土した，古墳時代後期の土師器高杯の杯部である。体部下端に明瞭な稜をもつ。

113Bはセクションの観察から，113Aの上面を削平して構築されていることがわかる。方形の住居跡で，一辺5.5m前後と推定される。カマドを南東壁に付設した，主軸方位を南東方向にもつ住居である。カマド前面の床面には硬化面が広がっている。セクションには浅い壁溝が観察される。カマドの砂質粘土が半円形に広がり，袖部の基部は観察できるが，煙道部の立上がりは不明である。火床は7cmほど掘窪められているが，被熱は弱い。

遺物はカマドや床面から，土師器杯・甕などがわずかに出土しているが，図示できたのは５の土師器甕の口縁部の破片である。

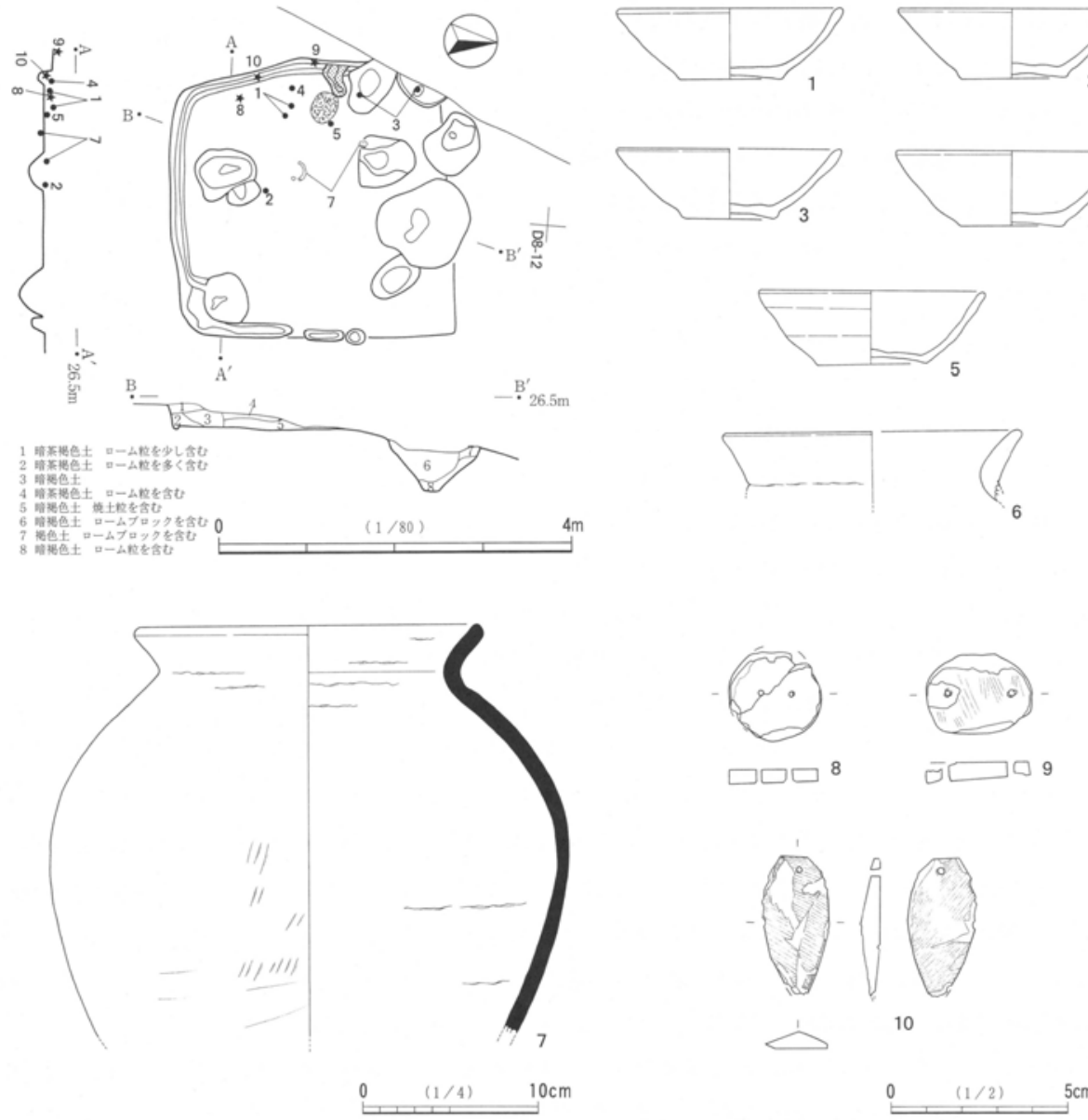
141（第171図，第17・18表，図版19・49・58）

調査区の北東，Ｄ８グリッドに位置する。上面を全体に削平され，古墳時代中期の住居跡142と重複している。さらに北側の2/5が削平されており，遺存状態は悪い。

平面形態は方形を呈し，東西3.1ｍを測る。規模は一辺３ｍ前後と推定される。カマドが西壁に設けられ，主軸方位はW-7°-Ｓである。壁の掘込みや床面の状態は，判然としない。壁溝（幅8cm～13cm，深さ3cm～9cm）は，南東コーナーでは途切れているが，そのほかでは巡っている。床面や周辺からは多数のピットを検出したが，柱穴と考えられるピットは確認できなかった。

カマドは，西壁を浅く掘込んで設けられている。遺存状態は悪く，両袖部の砂質粘土がわずかに確認できた程度である。火床は8cm掘窪められ，底面は被熱されていた。

遺物は床面から，土師器杯・甕，須恵器甕などが出土している。３点の石製模造品は混入品である。１～５は土師器杯である。口径は12.6cm前後で，底部は回転糸切り無調整である。カマド周辺の床面から



第171図　141及び出土遺物

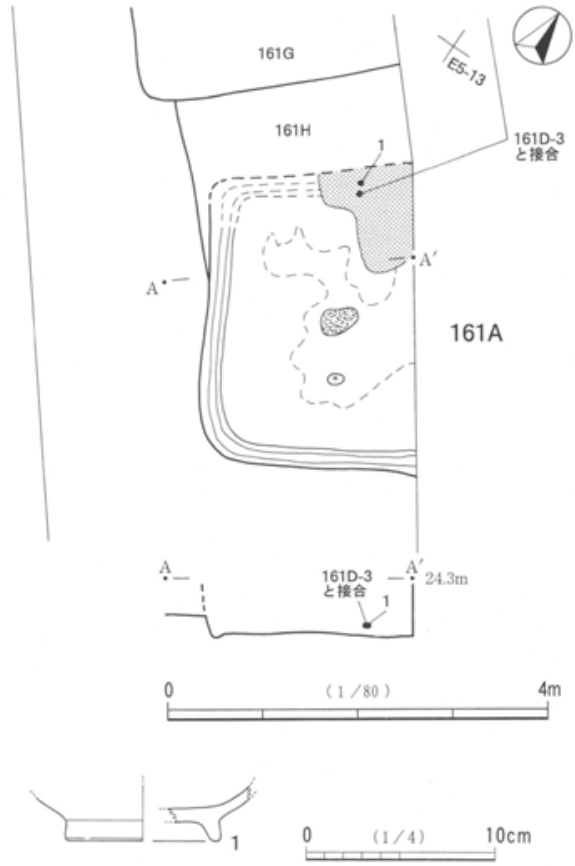
出土している。７は須恵器甕である。体部はタタキ後にナデで仕上げられ，内面にあて道具の痕跡が残る。焼成が十分でないため，色調は褐色系である。８～10は滑石製の有孔円板と剣形品である。両面を研磨され，10の表面には鏨がみえる。

161A（第172図，図版20）

調査区の北西，Ｅ５グリッドに位置する。複雑に重複する住居跡群の南端に位置し，古墳時代後期の住居跡161Ｈを削平している。北東側は調査区域外にかかり，調査は全体の2/3である。

平面形態は方形を呈し，北壁側が重複のため判然としないが，規模は一辺3.2m前後と推定される。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は19cm～23cmである。床面は凹凸があり，北東側から中央部にかけての範囲に硬化面が広がる。特に中央部の一部はよく踏み固められている。壁溝（幅10cm～15cm，深さ2cm～5cm）は，調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていない。覆土は，暗褐色土を主体に暗黄褐色土が混在する。北東側の床面から流失した砂質粘土が検出されたが，カマドの位置は不明である。

出土遺物は少なく，土師器高台付杯・甕などが床面直上から出土している。なお，砂質粘土中から出土した甕の口縁部片は，161Ｄ出土の破片と接合した。実測図は161Ｄに掲載してある。１は高台付杯の底部である。内面は丁寧にナデで仕上げられている。



第172図　161A及び出土遺物

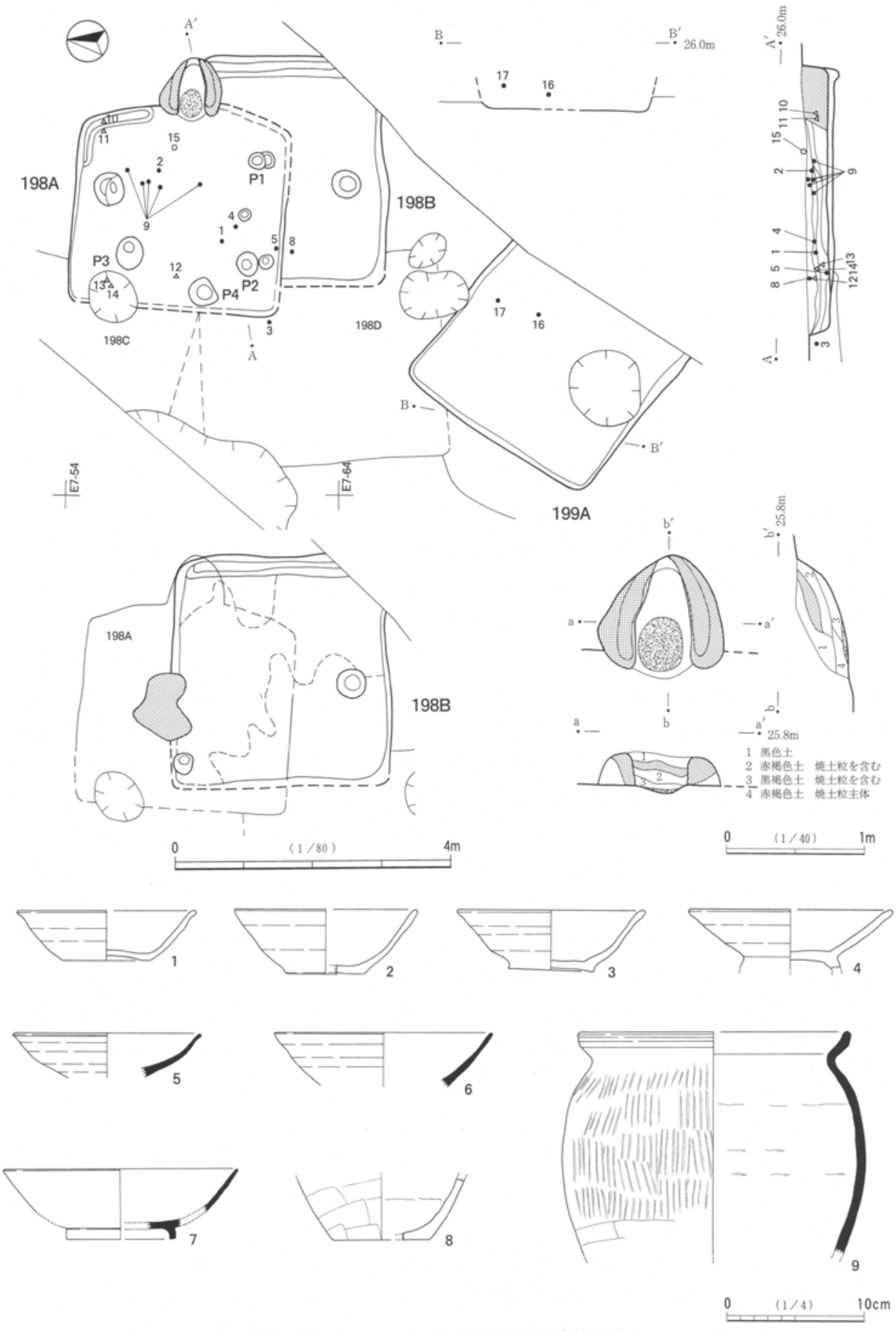
198A（第173・174図，図版49・60・61）

調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。古墳時代前期の住居跡198Ｃや198Ｂの上面を削平している。調査時に床面を掘下げてしまったため，壁や床面の状態は判然としない箇所が多い。

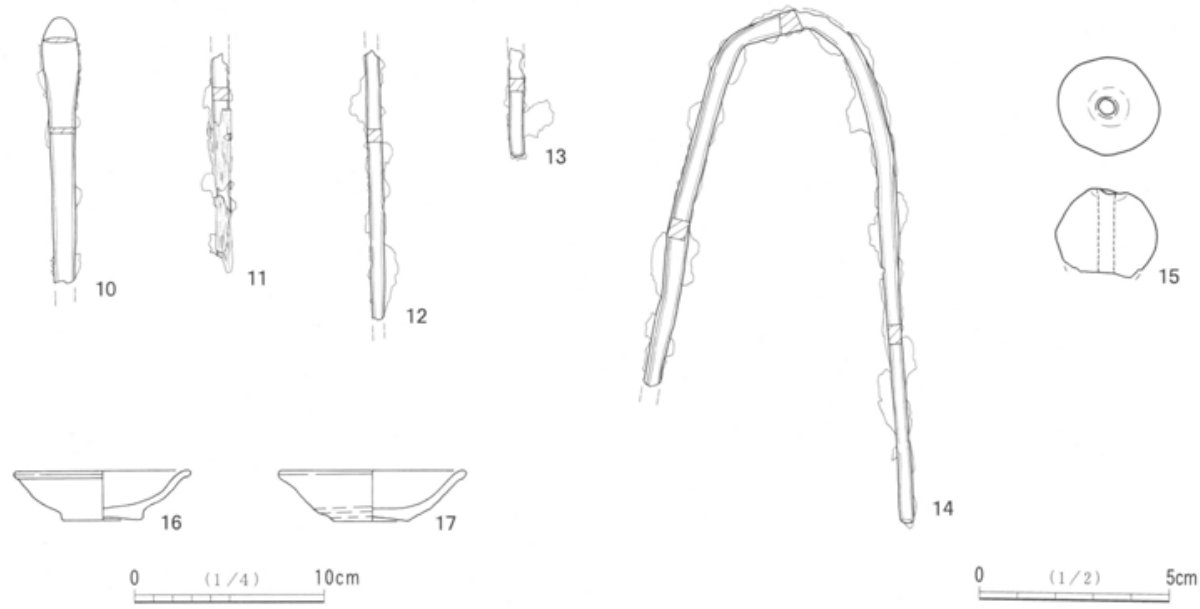
平面形態は方形を呈し，規模は3.0m×3.1mと推定される。カマドは東壁に設けられ，主軸方位はＥ-３°-Ｓである。壁はセクションの観察から，ほぼ垂直に掘込まれ，壁高は32cm～37cmである。壁溝（幅14cm，深さ3cm）は，北東コーナー周辺で巡っている。床面からは複数のピットが検出されたが，このうち主柱穴は，P1（径23cm×24cm，深さ15cm），P2（径32cm×35cm，深さ16cm），P3（径37cm×39cm，深さ48cm）である。P4（径37cm×47cm，深さ22cm）は，出入り口施設に伴うピットである。覆土は黒褐色土が堆積している。

カマドは東壁中央に設けられている。壁を72cm大きく掘込んで，徐々に立上がる煙道部を形成する。天井部は崩落していたが，袖部は掘込みの内壁によく遺存していた。袖部の内壁は被熱で赤化している。火床は5cm掘窪められ，底面は被熱していた。カマド内からは，土師器杯・甕が出土している。

出土遺物は少ないが，土師器杯，須恵器甕のほか，緑釉陶器・灰釉陶器の皿や椀の破片が，主に覆土中層から出土している。また，北西壁に掘り込まれた土坑からは，鉄鏃や鎹などの鉄製品が出土した。１～



第173図　198A・B，199A及び出土遺物（1）



第174図　198A，199A出土遺物（2）

3は土師器杯で，底部は回転糸切り無調整である。4は足高高台付椀の体部で，直線的に大きく開いている。5・6は灰釉陶器の体部片である。5は皿，6は椀であろう。5の施釉は漬け掛けである。光ヶ丘窯の製品であろう。7は緑釉陶器の椀である。体部と底部は接合はしないが，同一個体であろう。高台は角高台で，トチンの跡が内面にみえる。淡灰緑色を呈し，施釉はハケ塗りで緻密な胎土である。9世紀末から10世紀初頭の猿投窯の製品であろう。9は須恵器の甕で，器面にタタキ目が残る。10～13は鉄鏃である。10は長頸鏃で，鏃身から篦被にかけての部分である。鏃身（鏃身長1.6cm・身幅0.9cm・身厚1.5mm）は，両丸造りである。鏃身関部は不明瞭で，篦被（断面1.5mm×7mm）へ連続する。現存長7.0cmを測る。11は茎の一部で，矢柄の木質が付着している。現存長5.8cm，断面（3mm×5mm）は方形である。12・13は茎の一部であろう。12は現存長7.1cm・断面3.5mm×4mm，13は現存長2.8cm・断面3mm×4mmを測る。14は鏃である。先端を欠損している。全長は現存で25.6cmであるが，端部から中央部までは現存で13.6cmを測る。断面（4mm×5mm）は方形である。15は土玉である。完形で，径2.7cm・高さ2.2cm・孔径4mmを測る。

198B（第173図）

198Aの南側に位置し，上面を削平されている。南東コーナーは調査区域外である。

平面形態は方形を呈し，規模は南北3.2m，東西は推定で3.5mである。カマドの痕跡が北壁で検出され，主軸方位はN－1°－Wである。壁はセクションでは垂直に掘込まれ，壁高は30cmである。床面は凹凸があり，北壁から南東側の範囲に硬化面が広がっている。壁溝（幅18cm～25cm，深さ6cm～11cm）は幅が広く，西壁から南壁の東側まで巡っている。柱穴は確認できなかったが，南壁際の床面から出入り口施設に伴うピット（径37cm×40cm，深さ22cm）を検出した。覆土は暗褐色土と黒褐色土が混在する。

カマドは，北壁中央やや西寄りに設けられている。砂質粘土と焼土が検出された程度で，正確な状態は不明である。平面図には概略の範囲を図示した。出土遺物は少なく，図示できるものはない。

199A（第173・174図，図版20・49）

調査区の東，E7グリッドに位置し，198A・Bの南西1.0mに隣接する。南東側の一部は調査区域外にかかるが，住居の4/5を調査した。古墳時代前期の住居跡199Bの上面に位置し，北側は上面を整地のため削平されている。床面の南西側に同時期の土坑192が設けられている。

平面形態は方形を呈し，北西壁長は3.0mを測る。検出できたのは北東壁長2.5m，南西壁長2.6mである。規模は，一辺3.1m前後と推定される。調査範囲内でカマドが検出されていないが，南東壁側か南・東コーナーに設けられていたと思われる。壁は，遺存している箇所ではほぼ垂直に掘込まれている。壁高は10cm～31cmを測り，北東側が高くなっている。床面は平坦で，全体に軟弱である。柱穴や壁溝は検出されていない。

出土遺物は少なく，覆土中から１・２の土師器小皿などが出土している。いずれも底部は回転糸切り無調整で，器高は2.6cm前後と浅い形態である。

211（第175図，図版20・49）

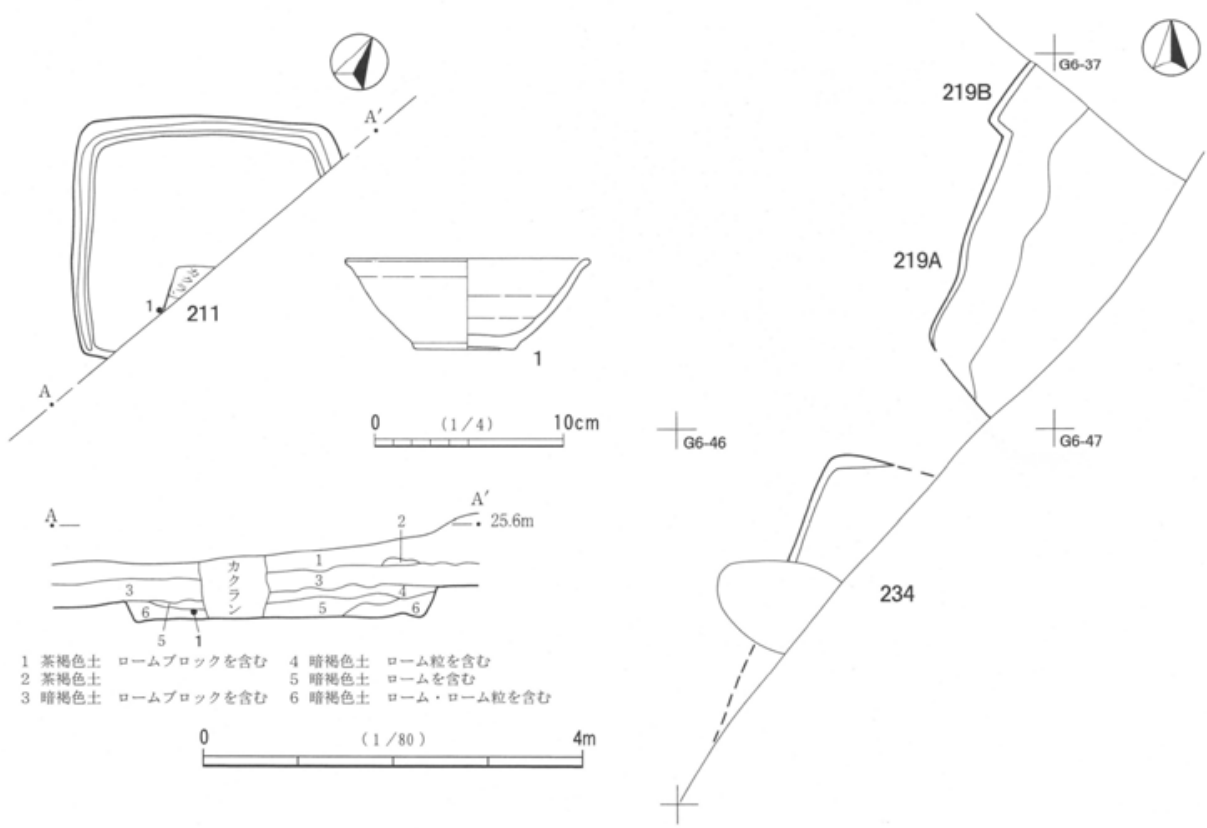
調査区の南東，Ｆ７グリッドに位置する。中央部に攪乱を受けている。北東壁から南東壁にかけての東側部分は調査区域外にかかり，調査できたのは住居の3/5である。

平面形態は方形を呈し，北西壁長2.6m・南西壁長2.4mを測る。壁は垂直に掘込まれ，壁高は16cm～26cmである。南側が次第に低くなっている。床面は平坦で軟弱である。壁溝(幅9cm～14cm，深さ4cm)は，調査範囲内では全周する。柱穴は検出されていない。カマドは検出されていないが，東側に設けられていたと思われる。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

出土遺物は少なく，南側の床面から１の土師器杯が出土している。杯の底部は回転糸切り無調整である。

219A・B，234（第175図）

調査区の南東，Ｇ６グリッドに位置する。出土遺物がわずかなため時期の特定は判然としないが，形態等から平安時代の住居跡と思われる。隣接しているので合わせて報告する。



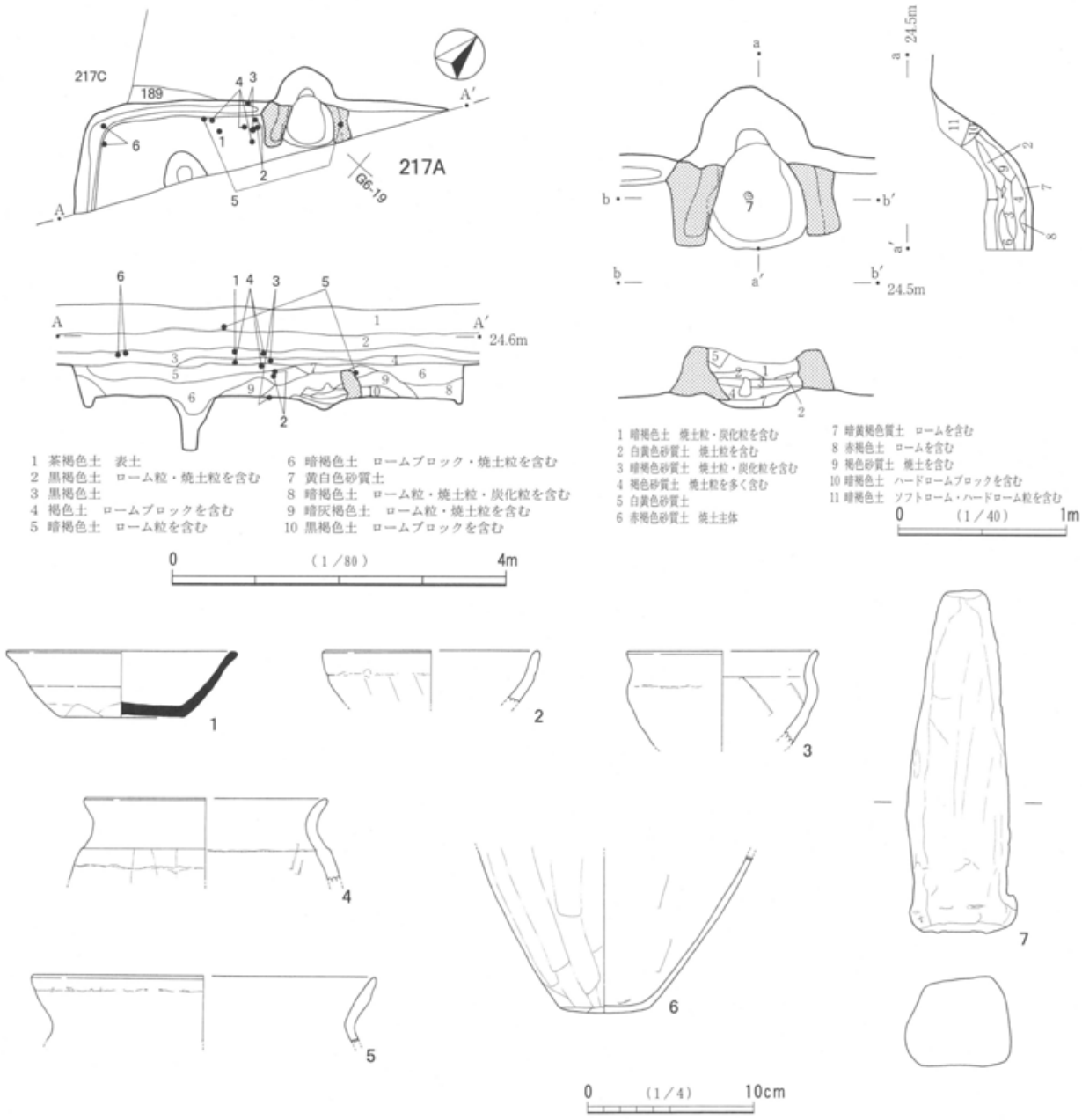
第175図　211，219A・B，234及び出土遺物

219A・Bは，壁の形状から２軒の住居が重複している。南東側が調査区域外にかかり，床面は整地による削平を受けている。北側は溝状遺構231に削平され，検出できたのは西側の壁と床面の一部である。平面形態は，ともに方形になると考えられる。規模等は不明である。壁は垂直に掘込まれており，遺存している壁高は7cm～11cmである。床面は平坦で，特に硬化した面は検出されていない。床面には炭化材がわずかに遺存していた。遺物は，覆土中から土師器片がわずかに出土したが，図示できるものはない。

234は北西コーナー周辺をわずかに検出した。大半は調査区域外にかかり，南側は235溝状遺構に削平されている。平面形態は方形と考えられる。壁は垂直に掘込まれ，壁高は5cm前後が遺存している。床面は平坦である。覆土は，褐色土や暗褐色土・暗黄褐色土が混在している。出土遺物はない。

217A（第176図，図版49）

調査区の南東，Ｇ６グリッドに位置する。カマドが設けられている北西壁と南西壁の一部を検出できたが，大半は調査区域外である。



第176図　217A及び出土遺物

平面形態は方形を呈し，北西壁長4.2m，南西壁長は1.2mを検出した。規模は，一辺5.2m前後と推定される。主軸方位は概ねN-40°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は遺存状態の良好な北西壁側で50cmである。床面は平坦で，セクションの観察では貼床が施され，調査範囲内は全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～14cm，深さ7cm)は，カマドの南側から南西壁にかけて巡っている。南西側の床面から主柱穴(現存径53cm，深さ65cm)が1本検出されたが，一部は調査区域外にかかっている。覆土は，暗褐色土を主体に暗灰褐色土や黒褐色土が混在する。

カマドは，北西壁を42cm大きく掘込んで設けられている。煙道部の立上がりは緩やかである。天井部は崩落していたが，内壁が被熱で赤化した袖部は良好に遺存していた。火床は浅いが，広範囲に被熱されている。カマド内からは支脚(7)が置かれたままの状態で出土した。

狭長な範囲であるが，出土遺物は比較的多い。須恵器杯，土師器杯・甕などが，床面やカマド周辺の覆土中から出土している。1は須恵器杯である。底部全面と体部下端は手持ちヘラケズリで仕上げられている。覆土上層からの出土である。4～6は土師器甕である。4は小型甕で，口縁部と体部との境に明瞭な稜をもつ。6は器壁が薄く，武蔵型甕であろう。覆土中層から上層にかけて出土した。

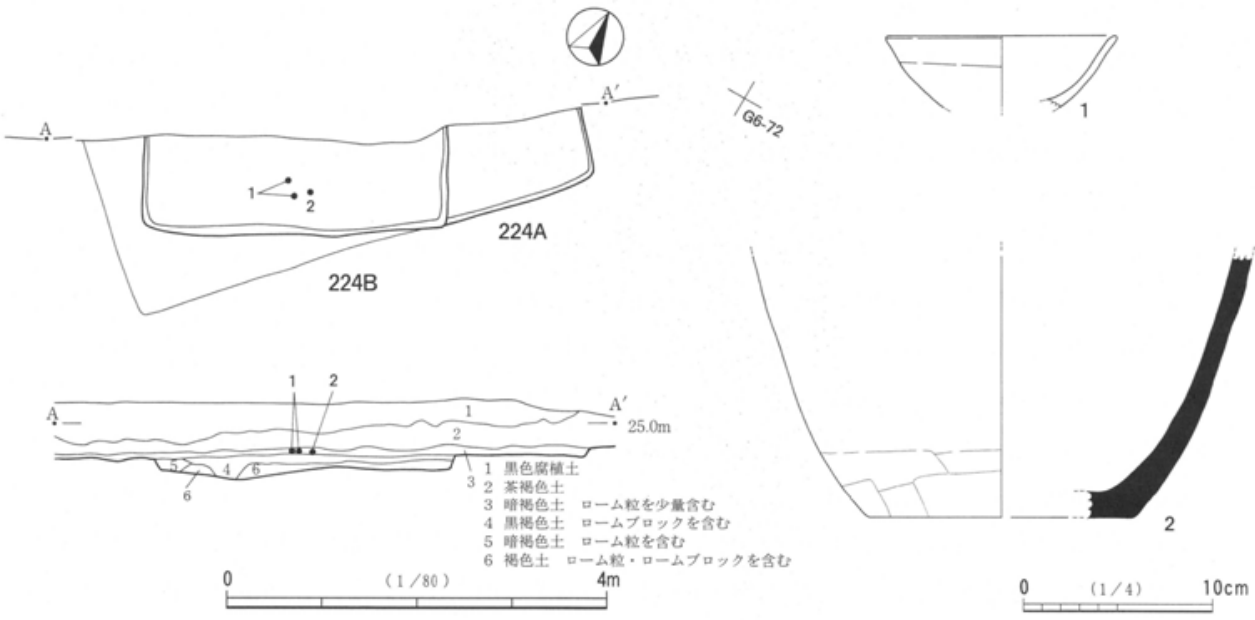
224A・B（第177図，図版20・49）

調査区の南側，G6グリッドに位置する。2軒の住居跡が重複し，ともに北西側は調査区域外にかかる。

224Bは，224Aの南西側を掘込んで構築されている。平面形態は方形を呈し，南西壁長は3.2mを測る。検出できた北東壁長は1.05m，南西壁長は0.95mである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は17cmである。床面は凹凸があり軟弱で，柱穴や壁溝は検出されていない。カマドは北西壁に設けられていると考えられる。

遺物は，床面から土師器杯(1)や須恵器甕(2)などの破片が，わずかに出土している。

224Aは方形で掘込みが4cm程度と浅く，224Bと重複する南側からは壁も判然としなくなる。床面も軟弱で，柱穴や壁溝は検出されていない。時期は不明である。



第177図　224A・B及び出土遺物

225A（第178図，図版20・49・61）

調査区の南，Ｇ５グリッドに位置する。南東側は調査区域外にかかり，225Ｂと重複している。北東側の壁は重複のため判然としない。

平面形態は方形を呈し，規模は推定で3.8m×4.0mである。主軸方位はN-50°-Wである。遺存している西側の壁は緩やかに掘込まれ，壁高は30cm～36cmである。床面は凹凸があり，カマド周辺から中央部に硬化面が狭い範囲で検出された。壁溝(幅15cm，深さ8cm)は，カマドの南西側で部分的に巡っている。柱穴は，北西側の床面から２本(P1径44cm×48cm・深さ43cm，P2径48cm×55cm・深さ41cm)が検出された。覆土は，暗褐色土を主体に褐色土が混在する。

カマドは，北西壁を35cm半円形に掘込んで設けられている。煙道部は緩やかに立上がる。天井部は崩落していたが，両袖部が遺存していた。袖部の内壁は被熱で赤化している。火床の掘込みは浅いが，底面は被熱し焼土が堆積していた。カマド内から前面にかけて，土師器杯・甕などがまとまって出土している。

遺物は，住居の床面直上や覆土中のほぼ全面から，須恵器杯・皿・甕，土師器甕や，鉄製品などが出土している。１は須恵器皿である。ほぼ完形で，底部は回転糸切り無調整である。覆土中層からの出土である。２・３は須恵器杯である。２は部分的な破片であるが，底部は一定方向の手持ちヘラケズリ，体部下端は手持ちヘラケズリである。３はカマド右袖部上から出土した。器面の磨滅が著しく，調整は判然としないが，底部は回転糸切り無調整である。４の須恵器甕は，カマド内から前面にかけての範囲に散在して出土した。５～７は土師器甕である。５・７は口縁部に緩い段をもち，口唇部がわずかに立上がる。８は穂摘具である。円形の孔が１か所あるが，釘は脱落している。1/2の遺存で，現存長5.3cm・幅2.1cm・厚さ1.5mmを測る。北コーナー付近の覆土中層からの出土である。９は不明鉄製品である。先端部はわずかに折れ曲がっている。現存長6.2cm・最大幅2.0cm・厚さ1mmを測る。覆土中層から出土した。

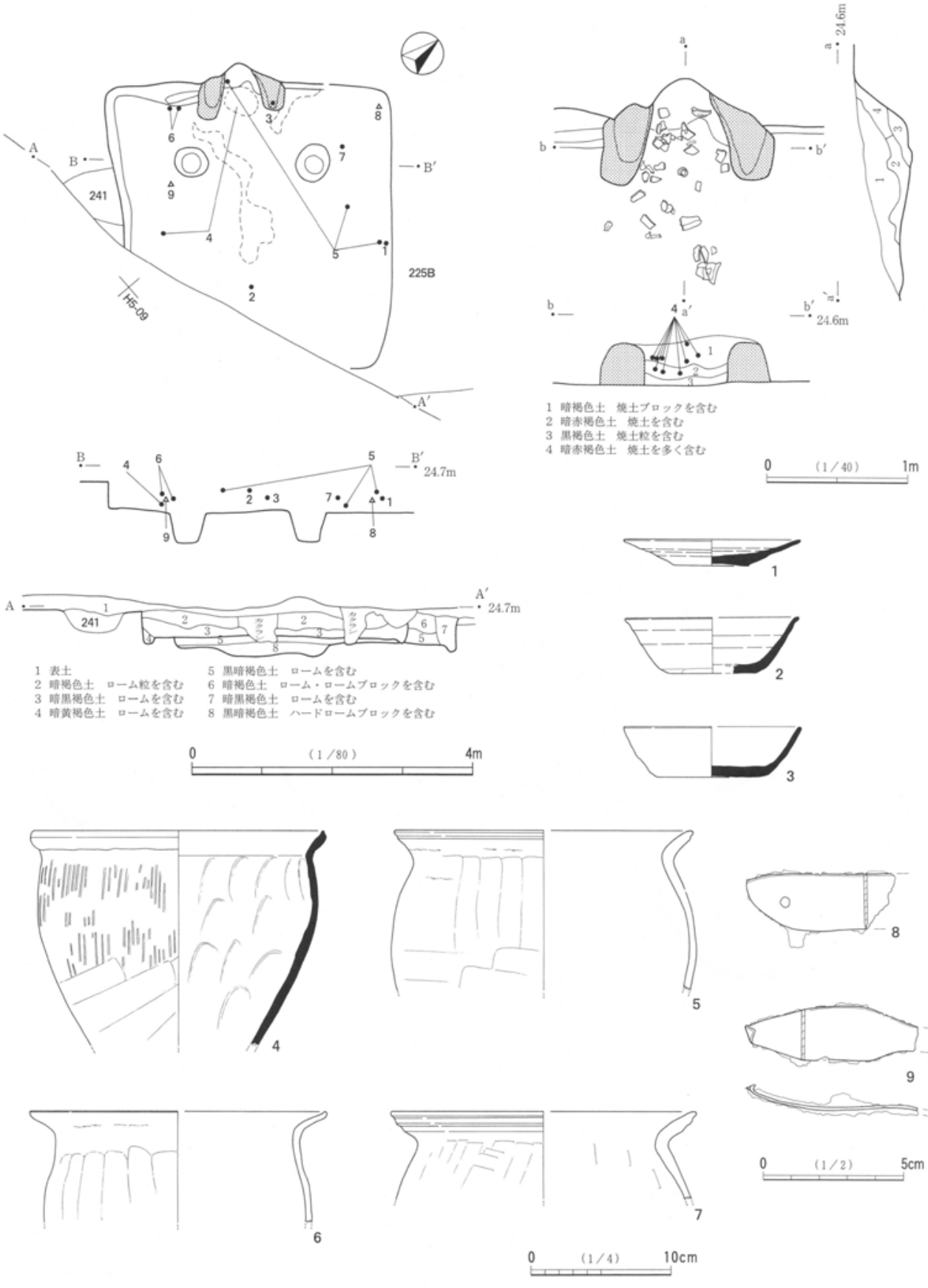
225B（第179図，図版20・49・61）

225Aの下部に重複し，古墳時代後期の住居跡225Ｃ・Ｄを削平している。南東側が調査区域外である。

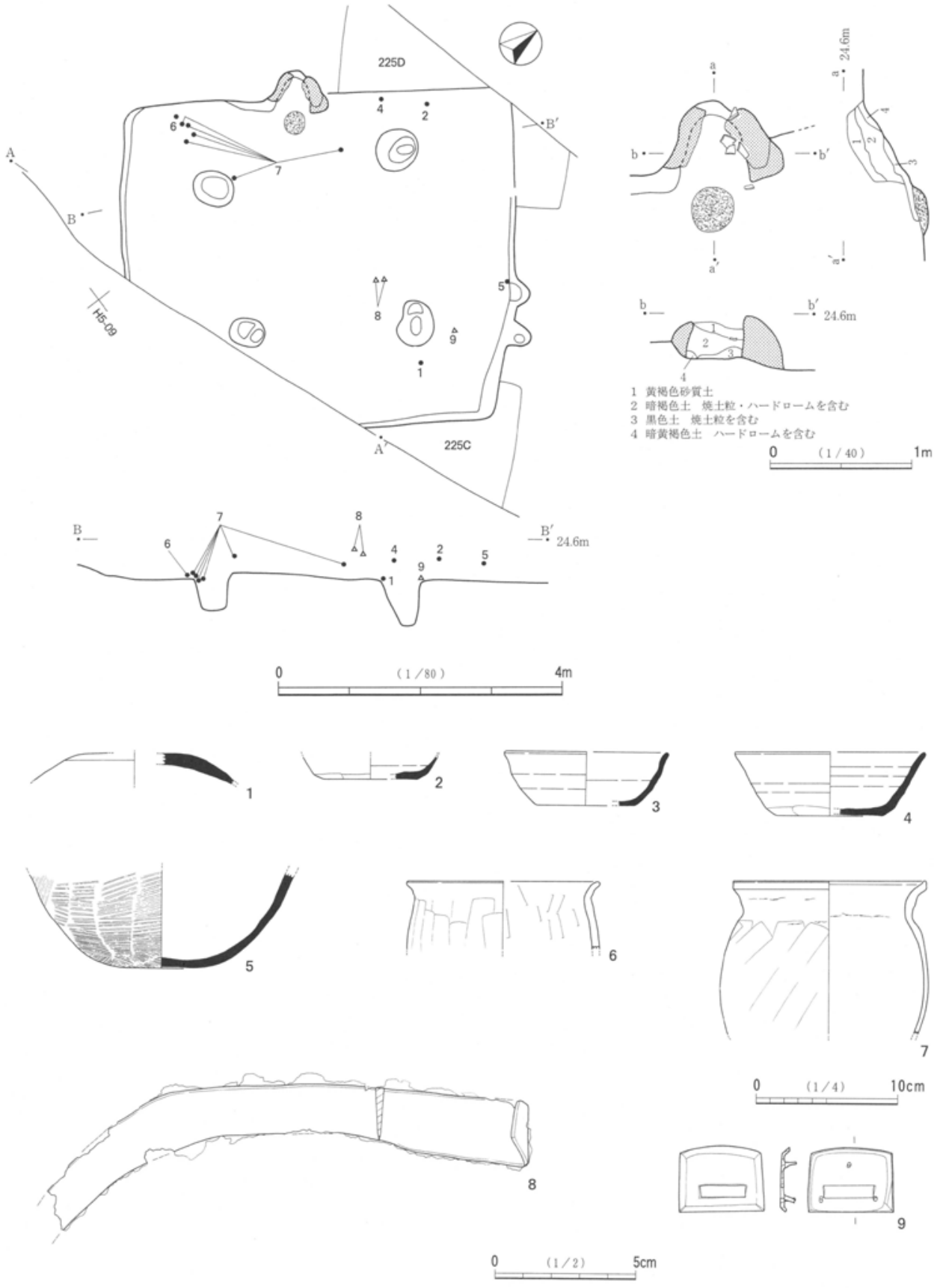
平面形態は横長の長方形を呈し，規模は推定で4.7m×5.6mである。主軸方位はN-56°-Wである。壁の掘込みは緩やかで，壁高は北東壁側で45cmである。床面は凹凸があり，全体に堅緻である。壁溝は検出されていない。床面からは複数のピットが検出されたが，主柱穴はP1からP4の４本である(P1径48cm×54cm・深さ39cm，P2径58cm×64cm・深さ60cm，P3径53cm×68cm・深さ63cm，P4径41cm×52cm・深さ42cm)。覆土は，黒暗褐色土の上に暗褐色土が堆積している。

カマドは北西壁に設けられている。壁を37cm掘込んで，煙道部は緩やかに立上がる。天井部はすでに崩落し，カマドの構築材である砂質粘土が掘込みの内側から袖部に遺存している。火床の位置から考えると，袖部は床面側にさらに延びていたと思われる。火床の掘込みは浅いが，底面はよく被熱されていた。カマド内からは，土師器甕や須恵器甕などの破片が出土している。

出土遺物は少ないが，須恵器杯・甕，土師器甕などが床面や覆土中から出土している。銅製銙帯金具の巡方はP3近くの床面から，鉄製鎌は覆土中からの出土である。１は須恵器蓋，２～４は須恵器杯である。２・４の底部から体部下端は，手持ちヘラケズリが施されている。５は須恵器甕の底部で，タタキ目がよく残る。６・７は土師器甕で，カマド周辺の床面や覆土中層から出土している。８の鎌は刃部が湾曲し，先端を欠損する。全体に細身のつくりである。現存長17.1cm・幅1.5cm～2.2cm・厚さ3mmを測り，基端部に折り返しをもつ。覆土上層からの出土である。９は巡方の表金具である。裏金具は出土していない。上



第178図　225A及び出土遺物



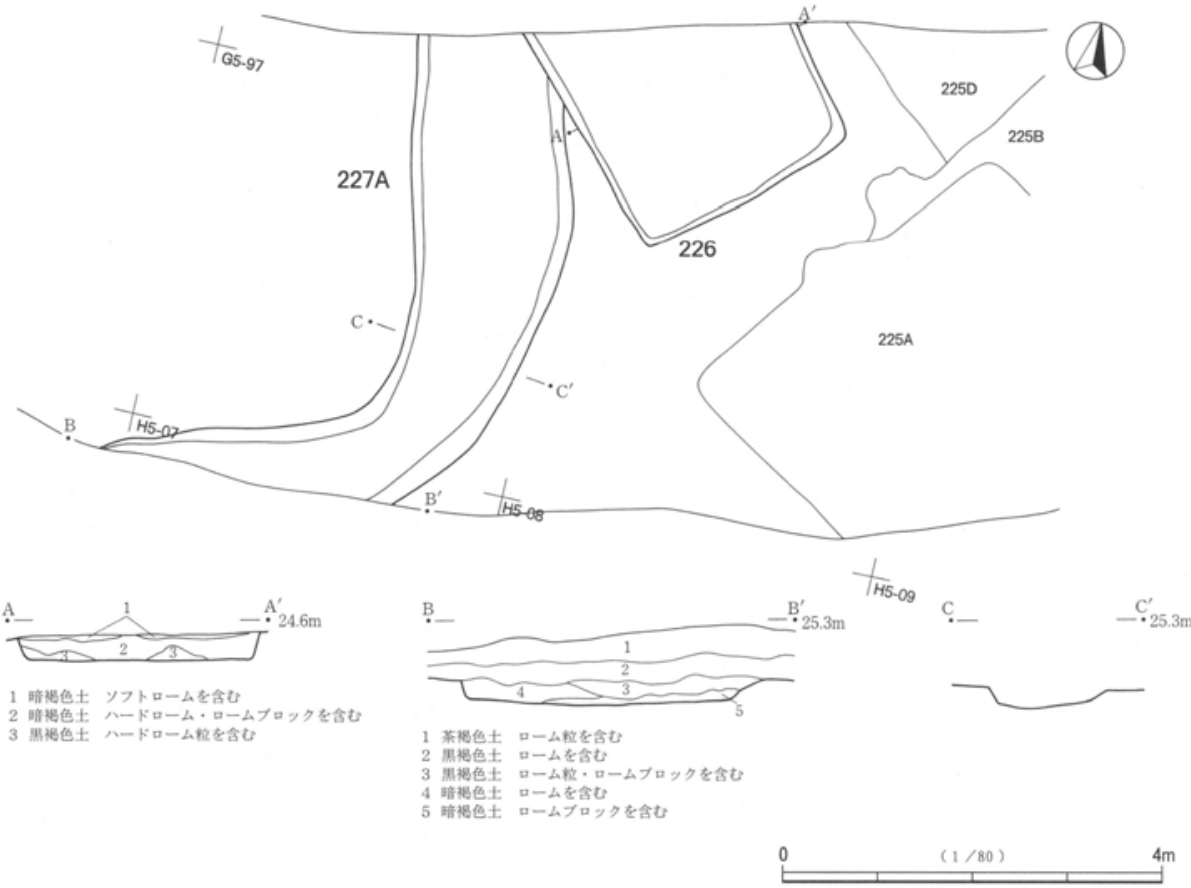
第179図　225B及び出土遺物

辺がわずかに弧をえがいており，山形巡方の系統であろう。上辺側の横幅がやや狭いつくりである。周縁は斜めに面取されている。透孔(4㎜×16㎜)をもち，寸法は横幅2.90cm～3.05cm・縦幅2.05cm～2.35cm・高さ3㎜・厚さ1㎜である。内面は粗面のままで，透孔下端の横幅方向に２足，上部に１足の計３足の鋲足を鋳出する。鋲足(長さ4㎜)の先端は欠損している。P3周辺の床面から出土した。

226，227A（第180図）

226は調査区の南，Ｇ５グリッドに位置する。北側は調査区域外にかかる。西壁側が判然としないが，平面形態は方形と考えられる。規模は一辺2.6m前後と推定される。壁はほぼ垂直に掘込まれ，東側の壁高は17cm～21cmである。床面は平坦であるが，硬化面は認められない。カマドや柱穴等は検出されていない。覆土は，暗褐色土を主体に黒褐色土が混在する。出土遺物はわずかで，図示できるものはない。

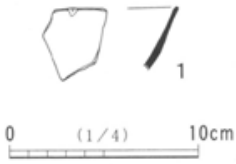
227Aは226の西側に位置する溝状遺構である。上辺の一部を226に削平されている。調査範囲の中央では南北方向に走るが，南側では西方向に方向を変えている。幅1.04m～1.7mを測る。逆台形状に掘込まれ，溝底面は平坦で，深さ28はcmである。土師器甕片が出土したが，図示できるものはない。



第180図　226，227A

240（第181図）

調査区の南東，Ｆ６グリッドに位置する。表土除去中に，緑釉陶器片が出土したため周辺を精査したが，出土遺構の平面形態は確認できなかった。隣接する調査区域外の断面に落ち込みを検出し，240の遺構番号を付して，緑釉陶器が帰属する遺構とした。遺構の種別は，住居跡か土坑であろう。覆土は，暗褐色土と黒色土が堆積している。暗褐色土には焼土ブロックや砂質粘土が混在する。



第181図　240出土遺物

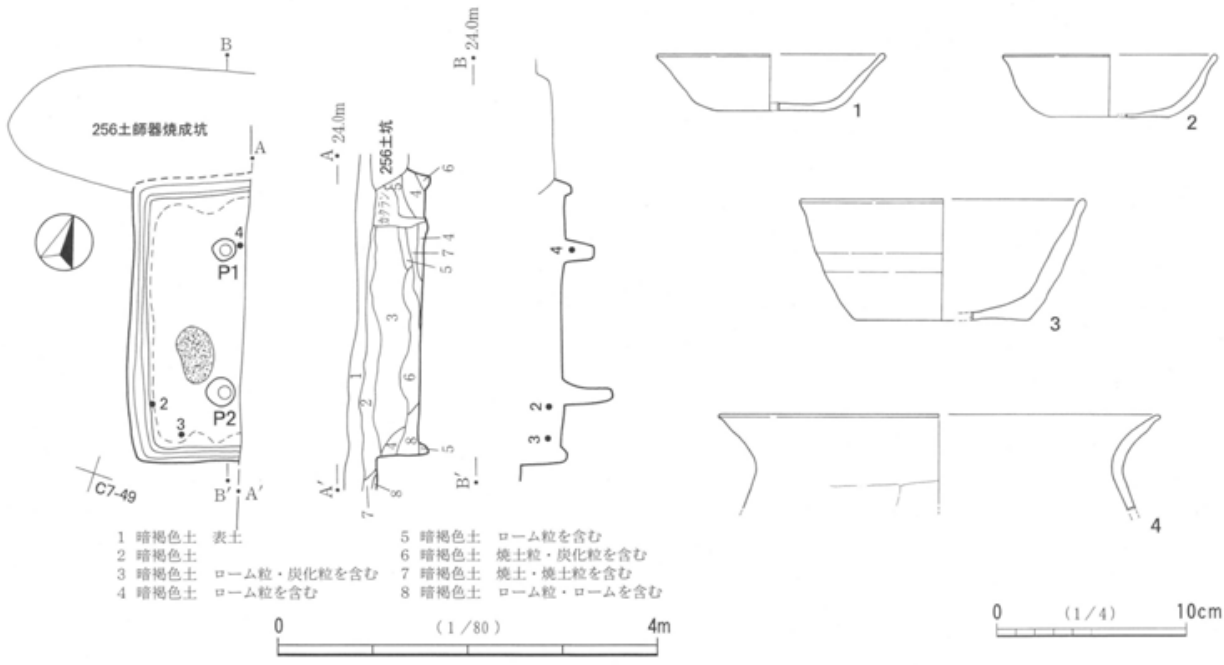
１は緑釉陶器の口縁部片である。透明感のある緑色を呈し，部分的に斑点状の釉の溜まりがみえる。ヘラで押さえた輪花が認められ，輪花椀であることが判明した。器形は直線的に開く体部をもち，口縁部はやや外反する。９世紀末頃の猿投窯を中心とした東海地方の製品であろう。

255（第182図，図版21・49）

調査区の北，Ｃ７グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかり，北壁の上辺を土師器焼成坑256に削平されている。住居の2/5の調査である。

平面形態は方形を呈し，西壁長は3.0ｍを測る。検出できたのは，北壁長1.2ｍ・南壁長1.0ｍである。カマドは検出されていないが，北壁側に設置されていたと考えられ，その場合の主軸方位は概ねN-19°-Wである。壁は垂直に掘込まれ，壁高は32cm～41cmである。床面は，壁際を除いて硬化面が広範囲に広がっている。壁溝（幅9cm～16cm，深さ5cm～8cm）は，調査範囲内では全周する。床面からは２本の主柱穴（P1径25cm×27cm・深さ36cm，P2径32cm×34cm・深さ54cm）が検出された。P2の北側の床面直上には，焼土の堆積がみられる。覆土は，ローム粒を含む暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物は多く，特に南西コーナー付近の床面直上から，土師器杯・椀がまとまって出土している。また，南西コーナー付近から出土した土師器椀（３）は，256で焼成された椀と接合している。床面からは38cm上の覆土上層からの出土である。１・２は杯で，底部は回転糸切り無調整である。４は甕の口縁部で，くの字状に外反する。P1に隣接して出土した。３は256にも掲載してある。



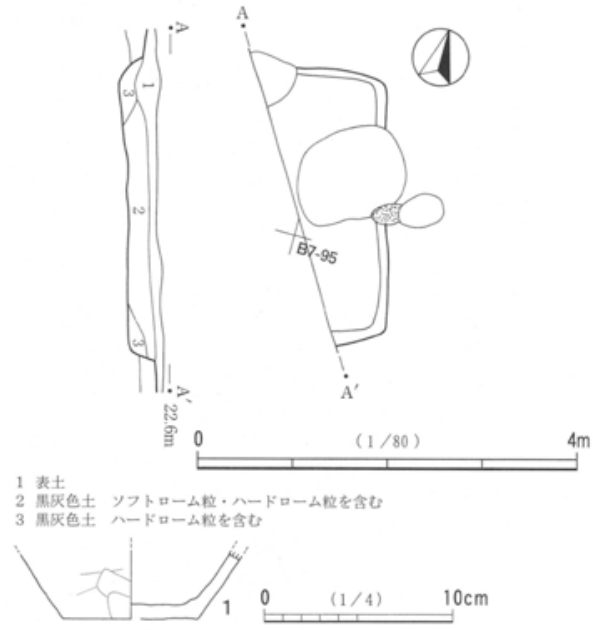
第182図　255及び出土遺物

264（第183図）

調査区の北端，Ｂ７グリッドに位置する。西側は調査区域外にかかる。西側2/5を検出できたが大きく攪乱を受けており，遺存状態は良好ではない。

平面形態は方形を呈し，東壁長は2.65ｍを測る。北壁長・南壁長は，それぞれ0.95ｍ・0.55ｍを部分的に検出した。壁はほぼ垂直に掘込まれ，壁高は6cm～18cmを測り北側が低くなっている。床面は凹凸があり，全体に軟弱である。柱穴や壁溝は検出されていない。カマドは東壁に設けられていたと考えられるが，攪乱のため焼土がわずかに確認できた程度である。覆土は，黒褐色土が堆積している。

遺物は少なく，１の土師器甕などが覆土中から出土している。



第183図　264及び出土遺物

266（第184図，図版21・49・50・60）

調査区の北端，Ｂ７グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかる。上面を整地のため削平され，南側と北側は267・269によりそれぞれ破壊されている。壁の一部や床面を確認したが，カマドや柱穴等は検出されず，全体に遺存状態は悪い。

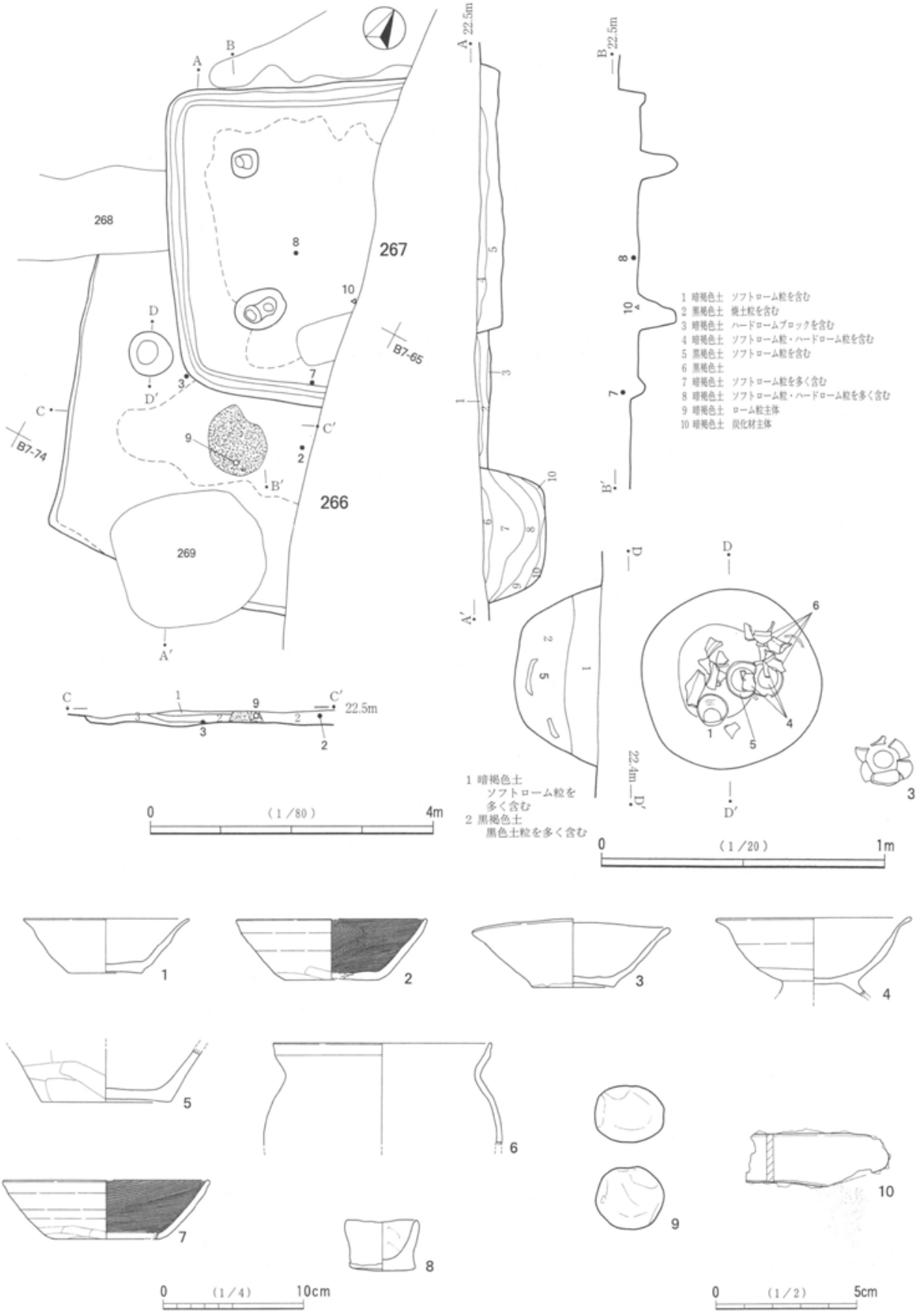
平面形態は方形になると考えられ，南壁長3.5ｍ・西壁長3.9ｍを検出したが，正確な規模は不明である。壁は5cm～9cmの高さで遺存している。床面は平坦で，中央部にやや堅緻な部分が広がり，焼土ブロックが堆積している。北西側の床面に貯蔵穴と思われるピット（径63cm×65cm，深さ26cm）が設けられ，埋土下層からは土師器杯（１）・足高高台付椀（４）や甕の底部（５）などがまとまって出土した。覆土は暗褐色土と黒褐色土が堆積している。

出土遺物は少ないが，床面から土師器杯・甕や土製品などが出土している。１～３は土師器杯である。１・３は堅緻な焼成で，底部は回転糸切り無調整である。２は黒色土器で，内面が黒色処理されている。底部は回転糸切り無調整で，体部下端は手持ちヘラケズリである。４は足高高台付椀の体部である。口唇部が短く外反し，体部はやや丸みをもつ。９は球状の土製品で，穿孔はない。径2.4cm・高さ2.0cmを測る。

267（第184図，図版21・50・61）

調査区の北端，Ｂ７グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかる。266・268（溝状遺構）を削平して構築されている。南壁側の床面には土坑265が配置されている。カマドは北壁で検出されていないので，東壁側に設けられていると考えられる。全体の7/10の調査である。

平面形態はコーナーがやや丸みをもつ方形を呈し，西壁長は4.1ｍを測る。検出できたのは北壁長3.15ｍ・南壁長1.9ｍである。規模は，一辺4.5ｍ前後と推定される。カマドが東壁に設けられている場合，主軸方位はＮ-59°-Ｅである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は，遺存状態の良好な北壁側で28cm～35cmを測る。床面はほぼ平坦で，硬化面が広範囲に広がっている。壁溝（幅10cm～20cm，深さ5cm～8cm）は，調査範囲内では全周し，北壁側と南壁側に計３基の小ピット（径14cm～20cm，深さ10cm～17cm）が穿たれてい



第184図　266，267及び出土遺物

る。主柱穴は西側の床面から２本検出された。P1(径40cm×41cm，深さ57cm)は，不整方形で単独の柱穴である。P2(径54cm×75cm)は長楕円形で，底面には２本の柱痕(深さ49cm，深さ51cm)が確認された。覆土は，黒褐色土の上に暗褐色土(ソフト・ハードローム粒を多く含む)が堆積している。

遺物は，床面から土師器杯・甕片や鉄製品が出土しているが，図示できたものは少ない。７は内面が黒色処理された土師器杯である。底部をほとんど欠損しているが，体部下端は手持ちヘラケズリである。覆土上層から出土した。８は完形のミニチュア土器で，口径と底径の差がない。10は板状の鉄製品で，刃部はない。現存長4.9cm・幅1.7cm・厚さ2.5mmを測る。８・10は床面直上からの出土である。

271A・B・C・D・F・G（第185・186図，第17・18表，図版21・50・51・58・61）

調査区の北端，Ｂ６グリッドに位置する。古墳時代後期の住居跡271Ｅをはじめとして，７軒の住居跡が複雑に重複している区域である。西側は緩斜面で，調査区域外にかかっている。各住居跡の基本的な平面形態は方形を呈し，規模等の数値は遺存し検出できた範囲のものである。また，出土遺物の帰属は地点やレベルなどの分析を基にしているが，重複している部分では判断が困難な遺物もある。新旧関係は判然としない部分もあるが，概ねＣ・Ｄ(旧)→Ｂ→Ｇ→Ｆ→Ａ(新)の順と考えられる。

271Ａは，規模が一辺3.3m前後と推定される。東壁は垂直に掘込まれ，壁高は40cmである。床面は平坦で，全体に堅緻である。壁溝(幅10cm～17cm，深さ3cm)は，東壁と南壁の一部に巡っている。南側の壁溝は，重複する271Ｆの床面を先行して調査したため確認できなかった。柱穴は検出されていない。カマドは形態から，壁を掘込まずに東壁の内側に設けられていたと考えられる。砂質粘土が半円形に巡り，掘込みの浅い火床に焼土が堆積している。火床の底面はよく被熱されていた。カマド内からは，土師器杯(９・13・14)や甕(26)などが出土している。出土遺物は多く，カマド周辺や東壁際から土師器杯・甕などがまとまって出土した。

271Ｂは北コーナー部分を検出した。壁溝(幅10cm～14cm，深さ4cm)が巡っている。コーナーには貯蔵穴(径58cm×61cm，深さ31cm)が設けられ，埋土から土師器高台(30)や甕片が出土した。遺物は，貯蔵穴周辺や床面から土師器杯・甕などや鉄製品が出土している。36の石製模造品は混入品である。

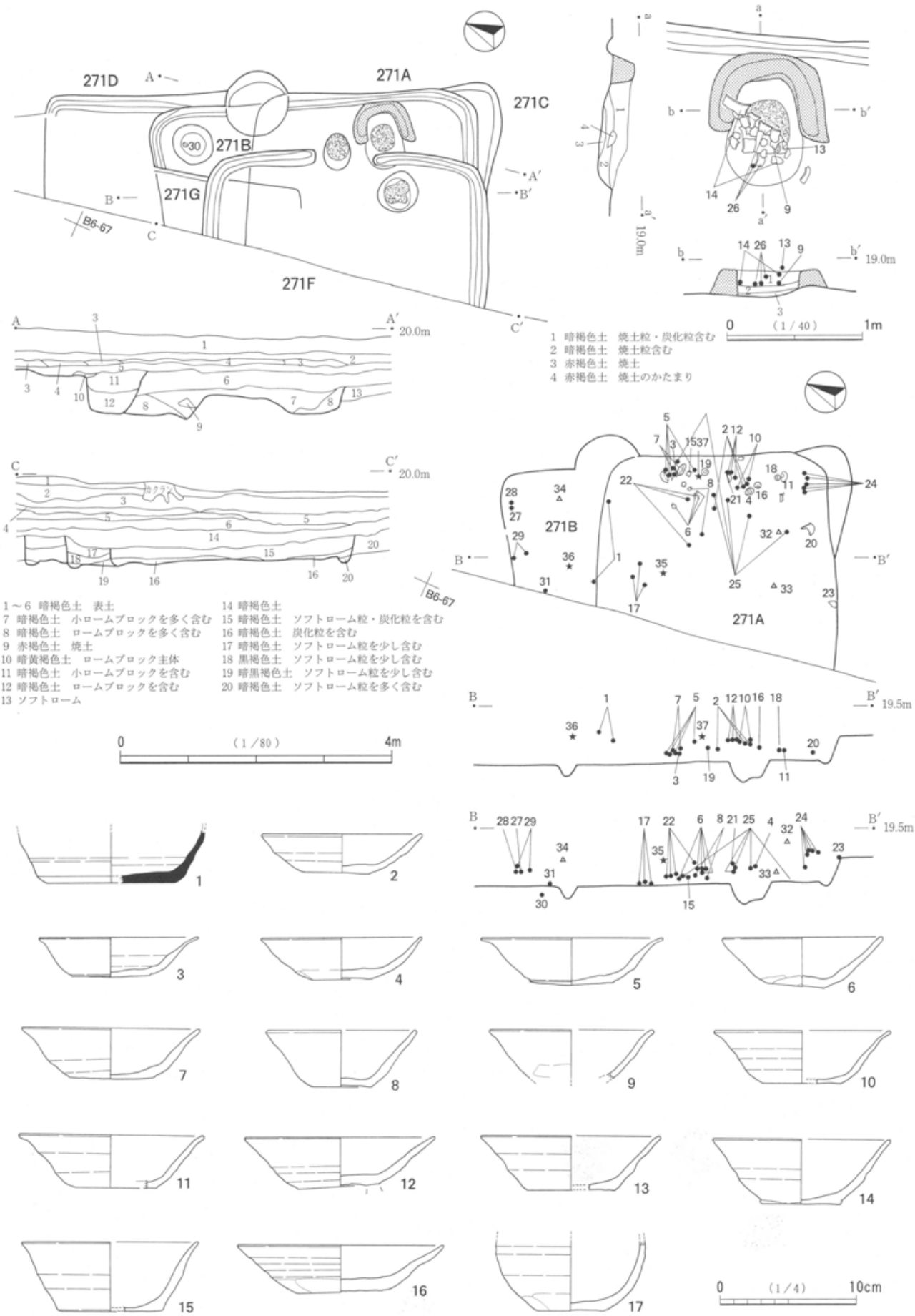
271Ｃは南東コーナー部分を検出した。壁は垂直に掘込まれ，壁高は28cm～34cmである。柱穴や壁溝は検出されていない。出土遺物はない。

271Ｄは，東壁の一部2.6mと壁溝(幅10cm～17cm，深さ5cm)を検出した。壁高は43cmである。北側では古墳時代後期の住居跡271Ｅと重複し，床面の状態等は判然としない。出土遺物はない。

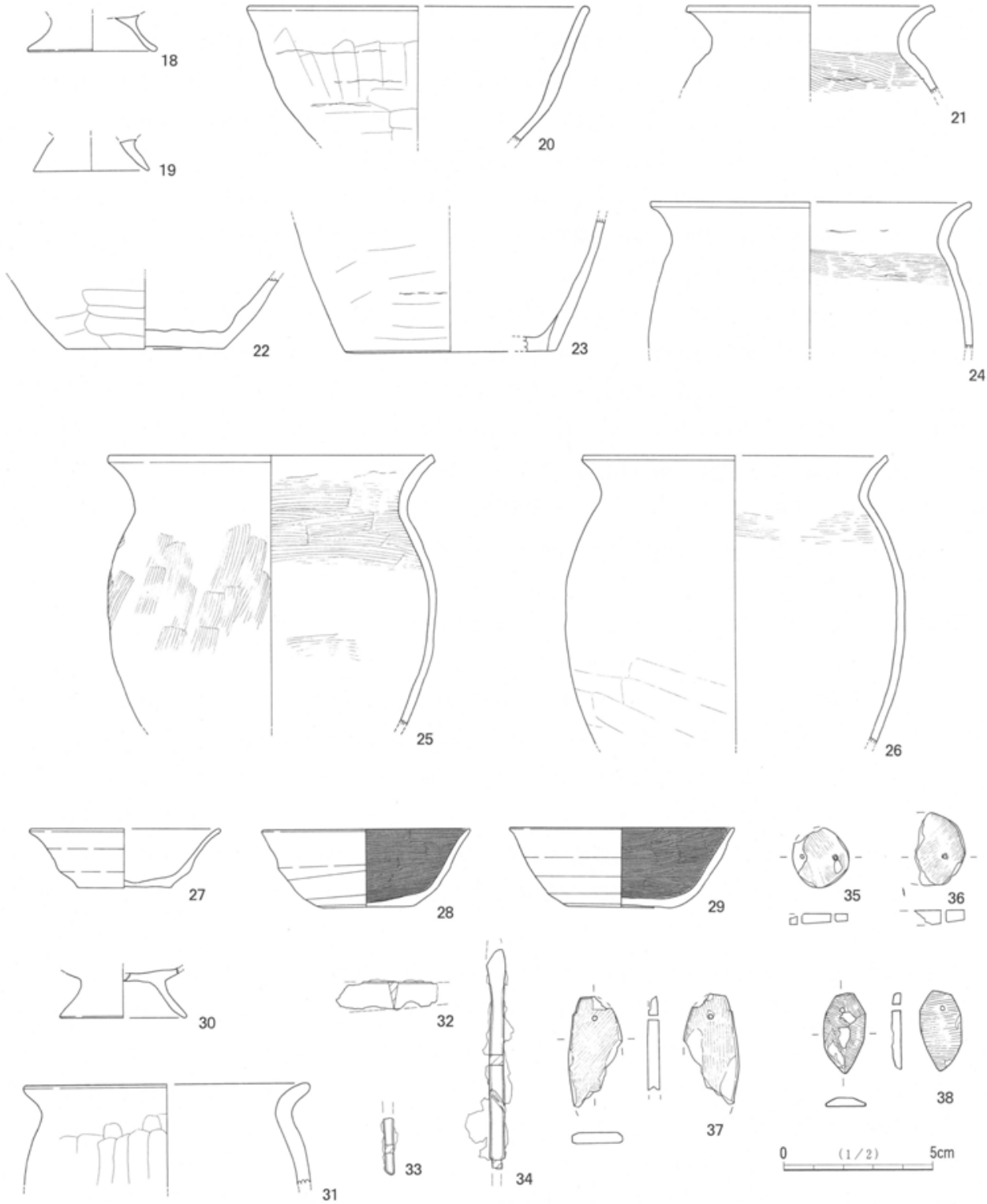
271Ｆは271Ａの西側に位置し，南壁の一部やカマドの火床等を検出できた。271Ａと重複しており，カマドの袖部も削平されていることから271Ａが後出する住居と思われる。壁はやや緩やかに掘込まれ，遺存状態の良好な箇所で壁高は31cmである。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅8cm～15cm，深さ3cm～6cm)は，検出できた範囲ではカマド部分を除いて全周する。柱穴は検出されていない。カマドの南側に円形の貯蔵穴(径59cm×63cm，深さ25cm)が検出され，内部には焼土が堆積していた。カマドは袖部はすでに削平されていたが，10cmほど掘窪められよく被熱した円形の火床が検出された。

271Ｇは，271Ｂの床面で検出した2cmほどの段差から，南東コーナー部分を検出し平面形態の一部が確認できた住居跡である。出土遺物はない。

各住居跡から出土した遺物は第185・186図に掲載した。１～26，35・37は271Ａから，27～34・36は271Ｂからそれぞれ出土したが，271Ａは271Ｆと重複しており遺物が混在している可能性がある。また，時期



第185図　271A～D・F・G及び出土遺物（1）



第186図　271A～D・F・G出土遺物（2）

の異なる周辺の遺構から混入した遺物も含まれているが，まとめて記載した。

2～13は土師器杯である。口径に比較して器高の低い形態のものが多い。底部は静止糸切り無調整がほとんどである。このようなタイプの杯は土師器焼成遺構256から多く出土しており，その関連性が注目される。6・8は体部下端から底部全面を手持ちヘラケズリしており，ほかの杯とは技法が異なっている。12・16は高台付椀の体部である。高台部分が剥落している。15は椀である。小型であるが，形態的には256出土の椀と類似する。16は皿のような扁平な形態であるが，底部に高台が剥離した痕跡がみられることから，足高高台付椀であろう。底部は静止糸切り痕無調整で，体部下端は手持ちヘラケズリで仕上げられている。18・19は椀や杯の高台部分である。体部との接合部分に糸切り痕が残る。20は鉢，21～26は甕である。甕は，頸部の内面を粗い刷毛で調整しているものが多い。須恵器杯(1)，滑石製の有孔円板(35)・剣形品(37)は混入品である。

27の土師器杯は堅緻な焼成で，体部下半に稜を形成する。底部は回転糸切り無調整である。28・29は黒色土器である。内面が黒色処理されている。底部は静止糸切り無調整で，体部下端は手持ちヘラケズリで仕上げられている。30は高台付椀の高台，31は甕の口縁部である。30は貯蔵穴内から出土した。32～34は鉄製品である。32は刀子の身部片である。現存長3.4cm・幅0.9cm・厚さ3mmを測る。33は鉄鏃の茎部であろう。現存長1.9cm，断面(3mm×3mm)は正方形である。34は鉄鏃である。鏃身の先端と茎部を欠損する。錆化のため鏃身の形態は判然としないが，長頸鏃群の長三角形鏃に近い形態であろう。現存長7.4cmを測る。篦被は5.8cmで，断面(4mm×5mm)は方形である。関を角関につくる。

272（第187図，図版21・51）

調査区の北端，C6・7グリッドに位置する。北側に焼成土坑289が隣接する。

平面形態は正方形を呈し，規模は3.15m×3.20mである。主軸方位はN-48°-Eである。壁は垂直に掘込まれている。壁高は4cm～47cmで，西コーナー付近が上面を削平され低くなっている。床面は平坦で，カマド前面から中央部に硬化面が広がっている。壁溝(幅6cm～16cm，深さ3cm前後)は，カマド部分を除き住居の北東側に巡っている。柱穴等は検出されていない。覆土は，暗褐色土を主体に黒褐色土が混在する。

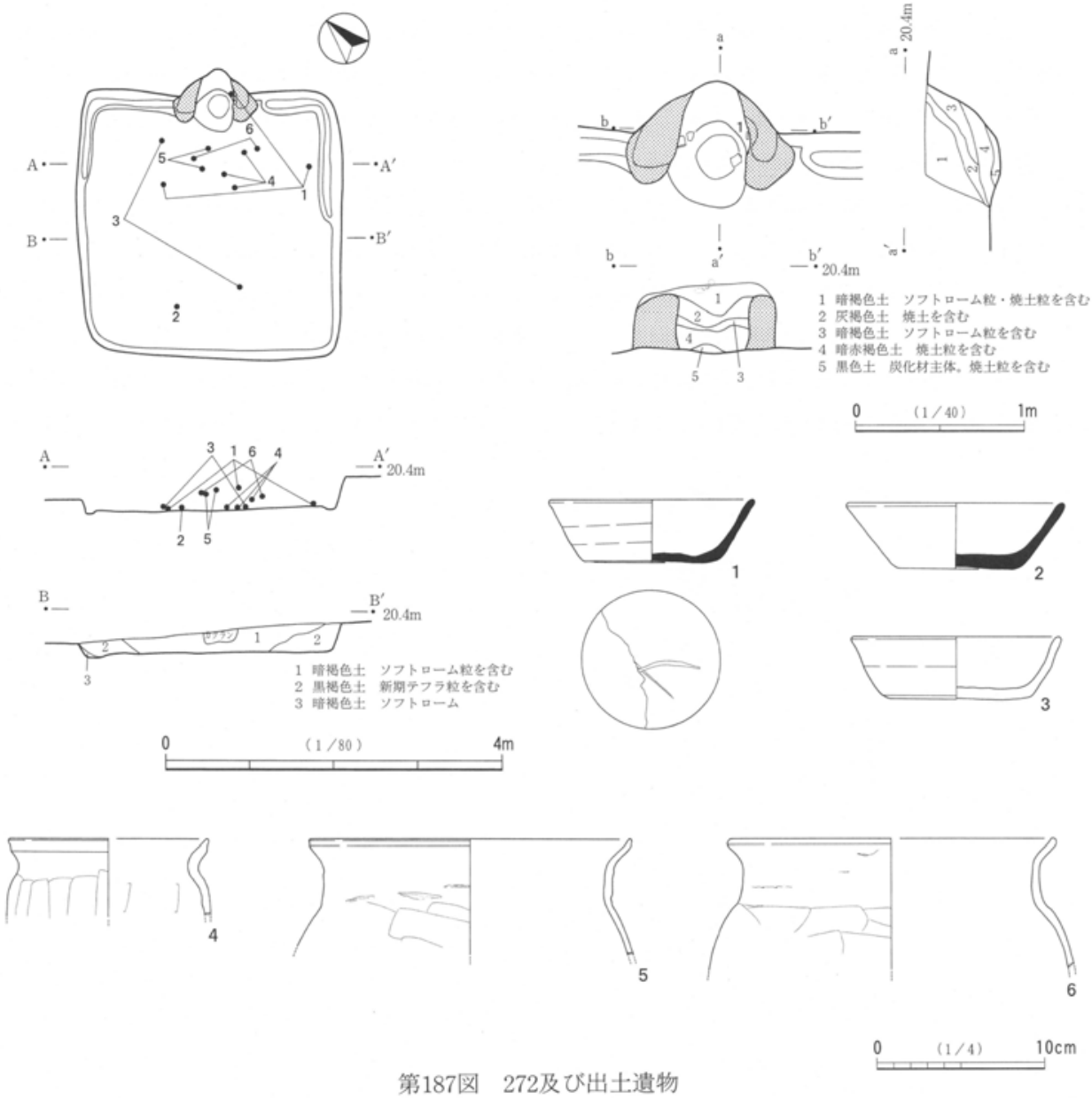
カマドは，北東壁中央やや東寄りに設けられている。壁を円形に32cm大きく掘込み，煙道部は緩やかに立上がる。天井部は崩落していたが，両袖部が良好に遺存していた。袖部の内壁は，よく被熱されて赤化している。火床は6cm掘窪められ，焼土粒や炭化粒を多く含む層が堆積していた。カマド内からは土師器甕などが出土している。

遺物はカマド前面の床面を中心に，須恵器杯や土師器杯・甕などが出土している。全体に器面が荒れている。1・2は須恵器杯である。1は底部は全面多方向の手持ちヘラケズリが施され，外面にはヘラ記号が残る。3の土師器杯は，底部全面から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施されている。4～6は土師器甕である。4は口径11.5cm前後の小型甕で，口唇部が短く立上がる。5・6の甕の口縁部はコの字状で，器厚の薄いつくりである。いずれもカマド前面の床面から覆土下層にかけて出土した。

275，276（第188図，図版21・61）

調査区の南端，H6グリッドで，東向きの緩斜面上に位置する。北東側は調査区域外で，276(時期不明)の上面に重複しており，276もあわせて報告する。全体の2/3を調査できた。

275の平面形態は方形を呈し，南西壁長は3.3mを測る。検出できた北西壁長は2.1m，南東壁長は2.3mである。規模は一辺3.5m前後と推定される。主軸方位はN-59°-Wである。壁は垂直に掘込まれている。



第187図　272及び出土遺物

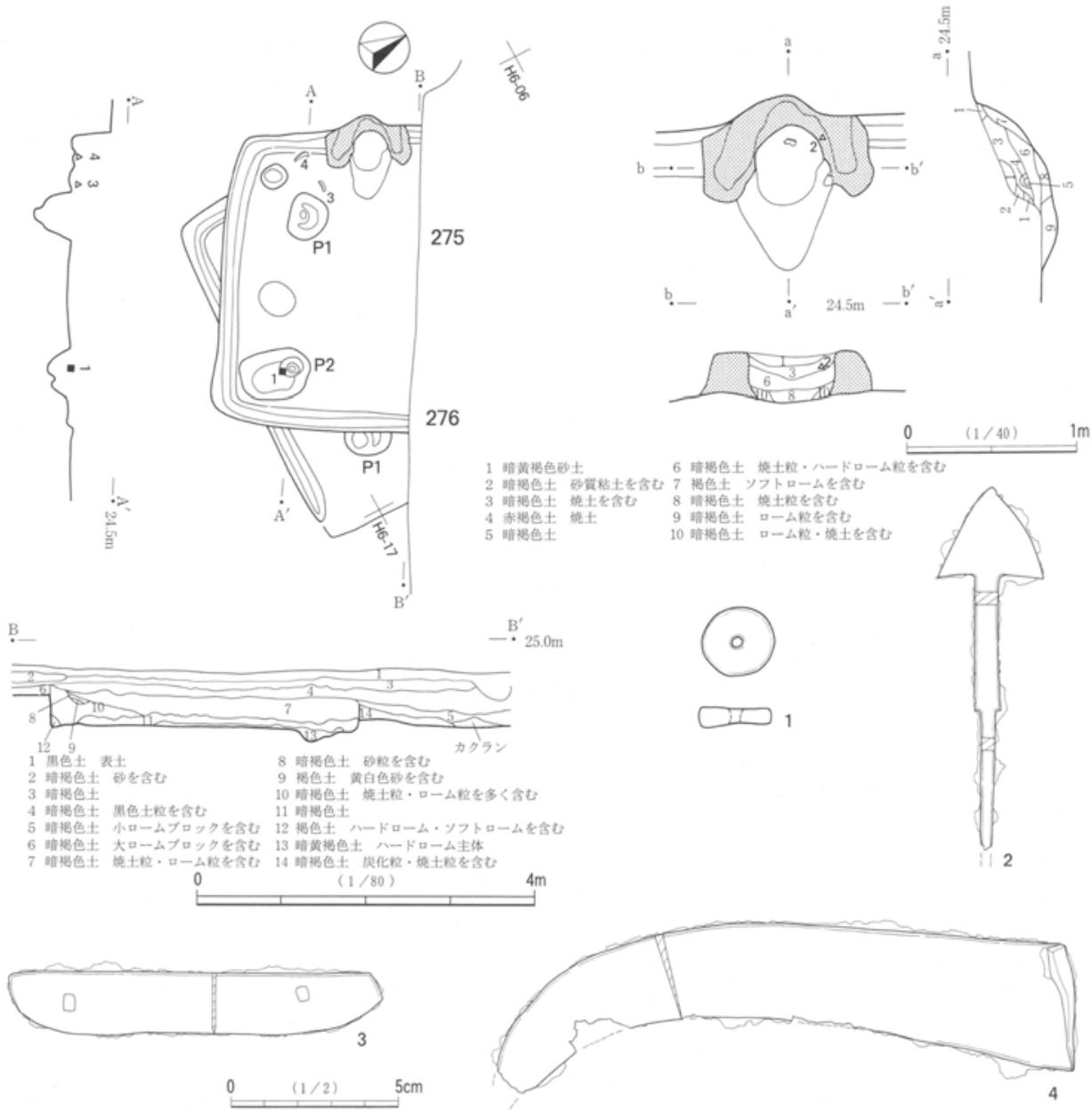
壁高は20cm～41cmを測り，遺存状態の良好な北西側が高くなっている。床面は凹凸があり，南西壁側の柱穴間がよく踏み固められ堅緻である。壁溝(幅12cm～22cm，深さ3cm～6cm)は，カマド部分を除いて調査範囲内では全周する。南西側の床面から主柱穴が２本検出され，ともに底面に柱のあたり痕が確認された。P1(径44cm×53cm，深さ45cm)は単独で北西側に配置されているが，P2(径25cm×27cm，深さ26cm)は浅い土坑(58cm×84cm，深さ19cm)内に設けられている。床面からはわずかに焼土と炭化材が検出された。覆土は，暗褐色土を主体に褐色土や暗黄褐色土が混在している。

カマドは，北西壁を15cm掘込んで設けられている。煙道部は緩やかに立上がる。天井部はすでに崩落していたが，両袖部が遺存していた。内壁はよく被熱され，特に右袖側の上部は赤化していた。火床は9cm掘窪められ，底面はよく被熱されていた。カマド内からは２の鉄鏃や土師器甕片が出土している。

出土遺物は少ないが，カマド南側の床面から鎌や穂摘具が出土している。１は滑石製の臼玉で，暗灰褐色を呈する。両面は研磨され，径2.1cm・高さ0.4cm～0.6cmを測る。両側から穿孔され，孔径3mm～4mmを

測る。２は三角形鏃(現存長10.8cm)であるが，錆化のため遺存状態は良好ではない。鏃身が広がり，鏃身幅(3.2cm)が鏃身長(2.7cm)より長い形態である。逆刺は認められず，錆化のため鏃身の造りは判然としない。篦被(長さ4.0cm・幅7mm・厚さ4mm)と茎(現存長4.2cm・幅4mm・厚さ4mm)が遺存し，関は角関である。３は穂摘具である。右側の端部を欠損する。方形の孔が２か所に認められるが，釘は脱落している。現存長11.1cm・幅1.9cm・厚さ1mmを測る。４は鎌で，刃部の先端を欠損する。刃部は直線的に延び，先端付近で内湾する。基端部に折り返しをもつ。現存長17.2cm・幅1.9cm～3.6cm・厚さ3mmを測る。

276は北側が調査区域外で，上面は275に大きく削平されている。方形の住居跡で，南壁長は3.8mを測る。西壁は，わずかに0.7mの長さを検出できたが，東側は斜面にかかるため判然としない。壁は，南西コーナーでは緩やかに掘込まれ，壁高は21cmである。床面の状態は不明である。壁溝(幅10cm～17cm，深さ3cm～7cm)は明瞭に検出された範囲では巡っている。主柱穴は南壁側の２本である。P1(径40cm×45cm，

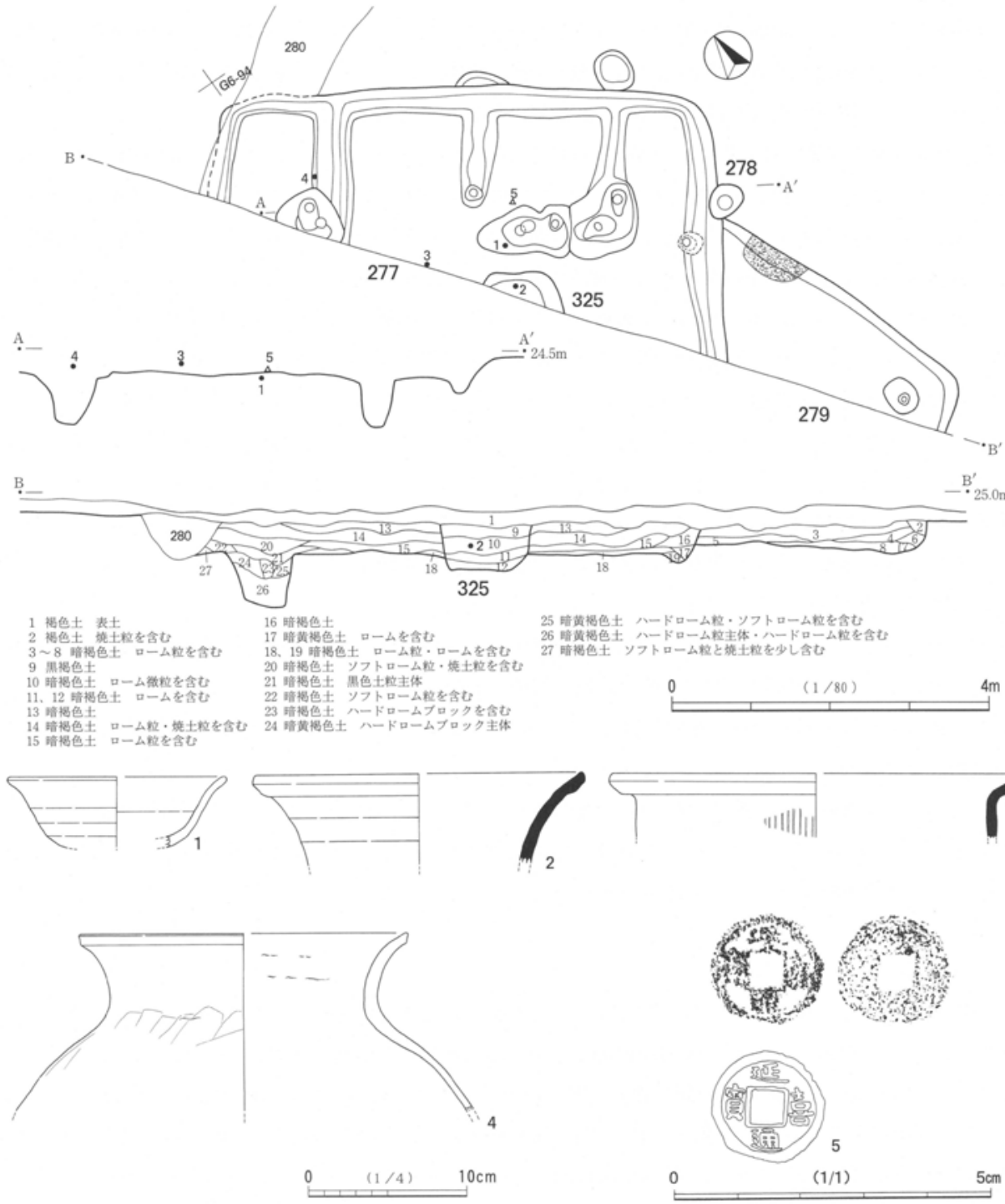


第188図　275，276及び出土遺物

深さ21cm)は，275の床面下から検出された。P2(現存径55cm，深さ54cm)は，275の南東壁に一部削平されている。覆土には暗褐色土が堆積している。出土遺物はない。

277，278，279，325（第189図，第11表，図版22・59）

調査区の南端，Ｇ６・Ｈ６グリッドに位置する。南西側は調査区域外である。北端の上面を溝状遺構280に削平され，中央部の床面には土坑325が位置し，南東側で279(時期不明)と重複している。279と325もあわせて報告する。南東壁の一部はピット278(径36cm×50cm，深さ38cm)に削平されている。調査は住居の北東側側2/5である。



第189図　277，278，279，325及び出土遺物

277の平面形態は方形を呈し，北東壁長は6.0mを測る。北西壁長1.1m・南東壁長3.3mを検出できた。カマドは検出されていないが，北西壁に設けられていると考えられる。その場合，主軸方位はN-57°-Wである。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は20cm～23cmである。床面は凹凸があり，特に北側はやや高くなり凹凸が激しい。壁際は軟弱な部分があるが，全体に堅緻である。壁溝(幅14cm～30cm，深さ3cm～10cm)は幅が広く，調査範囲内では全周する。床面から複数のピットが検出されたが，このうち主柱穴はP1(現存径74cm，深さ62cm)とP2(径82cm×116cm，深さ62cm)である。同一の掘込み内の底面にも別の柱のあたり痕が認められることから，建替えが行われていたと考えられる。根太痕跡の溝は壁溝とP1・P2を結び，さらに北東壁の中央から小ピットに延びている。覆土は，ローム粒をわずかに含む暗褐色土が主体である。

出土遺物は少なく，土師器杯(1)・甕(4)，須恵器甕(3)などの破片や銭貨(5)が，床面や覆土下層から出土している。特に注目されるのは，5の延喜通寶(初鋳907年)である。表面の摩耗が激しく，縁も削り取られており，遺存常態は良好ではない。計測値は第11表に記載した。

279は西側が調査区域外にかかり，北側は277に削平されている。方形の住居跡で，東壁の一部3.7mが遺存している。規模は一辺4.5m前後と想定される。壁はやや緩やかに掘込まれ，壁高は13cm～18cmである。床面は凹凸があるが，全体に堅緻である。壁溝は検出されていない。柱穴は方形で，東側の床面から2本が検出され，底面には柱のあたり痕が確認された。P1(27cm×28cm，深さ34cm)は，277の床面下から検出され，P2(38cm×45cm，深さ61cm)は南東コーナーに寄って配置されている。東壁際からは焼土の堆積が検出された。覆土は，ローム粒をわずかに含む暗褐色土に褐色土が混在する。

出土遺物は少なく，土師器片が出土しているが図示できるものはない。

325は，277の覆土上層から掘込まれた土坑である。大半は調査区域外にかかり，北東側の一部を検出した。平面形態は隅丸方形と考えられ，規模は床面で検出された北東壁長は75cmであるが，セクションからは東西長1.2m前後が想定される。壁は緩やかに掘込まれ，掘込みの深さは60cmである。埋土は，ローム粒をわずかに含む暗褐色土で，中層から2の須恵器甕の口頸部が出土した。

313（第190図，図版22）

調査区の南西，G4グリッドに位置する。上面を大きく削平され，溝状遺構282が中央部を走る。カマドの袖部と床面の一部が確認できる程度で，遺存状態は悪い。

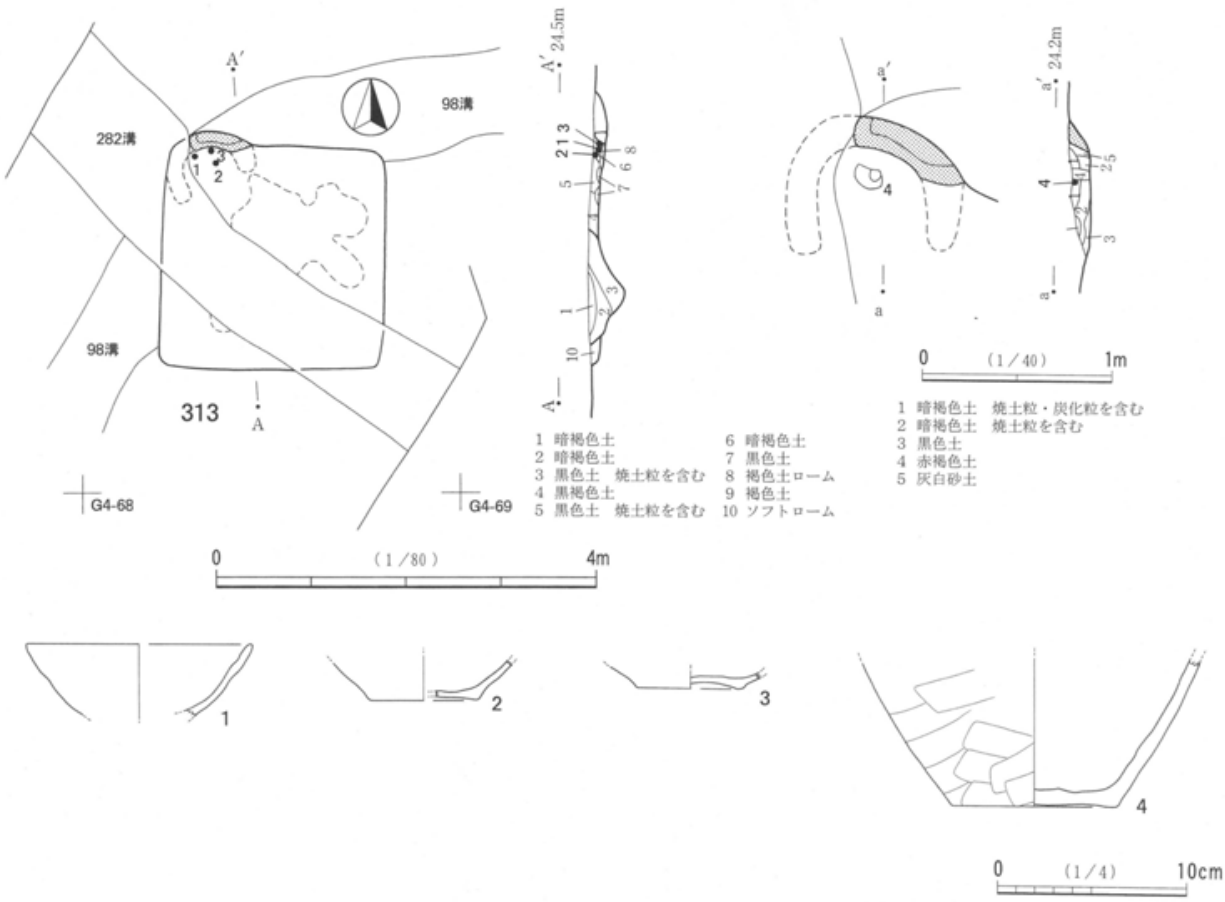
平面形態は正方形と考えられ，規模は推定で2.4m×2.4mである。中央部に硬化面が残る。柱穴や壁溝は検出されていない。

カマドは，右袖部の一部の遺存状態から，北西コーナーに設けられていたと考えられる。煙道部や火床の状態は不明である。カマド内からは1～3の土師器杯や4の土師器甕が出土している。2・3の底部は，回転糸切り無調整である。1も同様であろう。

2　掘立柱建物跡

131（第191図）

調査区のほぼ中央，F5グリッドに位置する。北西側が調査区域外にかかり，柱穴の一部が古墳時代の住居跡101・103と重複している。建物は西側に44度大きく振れているが，東西方向3間(4.3m)，南北方向2間以上(2.5m以上)の東西棟の側柱建物と推定される。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.2m～1.7m，梁間(南北)方向では1.7m以上を測る。柱穴は径25cm～87cmの楕円形で，深さは40cm～60cmである。南隅の柱穴は建て替えが行われており，掘方は比較的大きなつくりになっている。出土遺物はない。



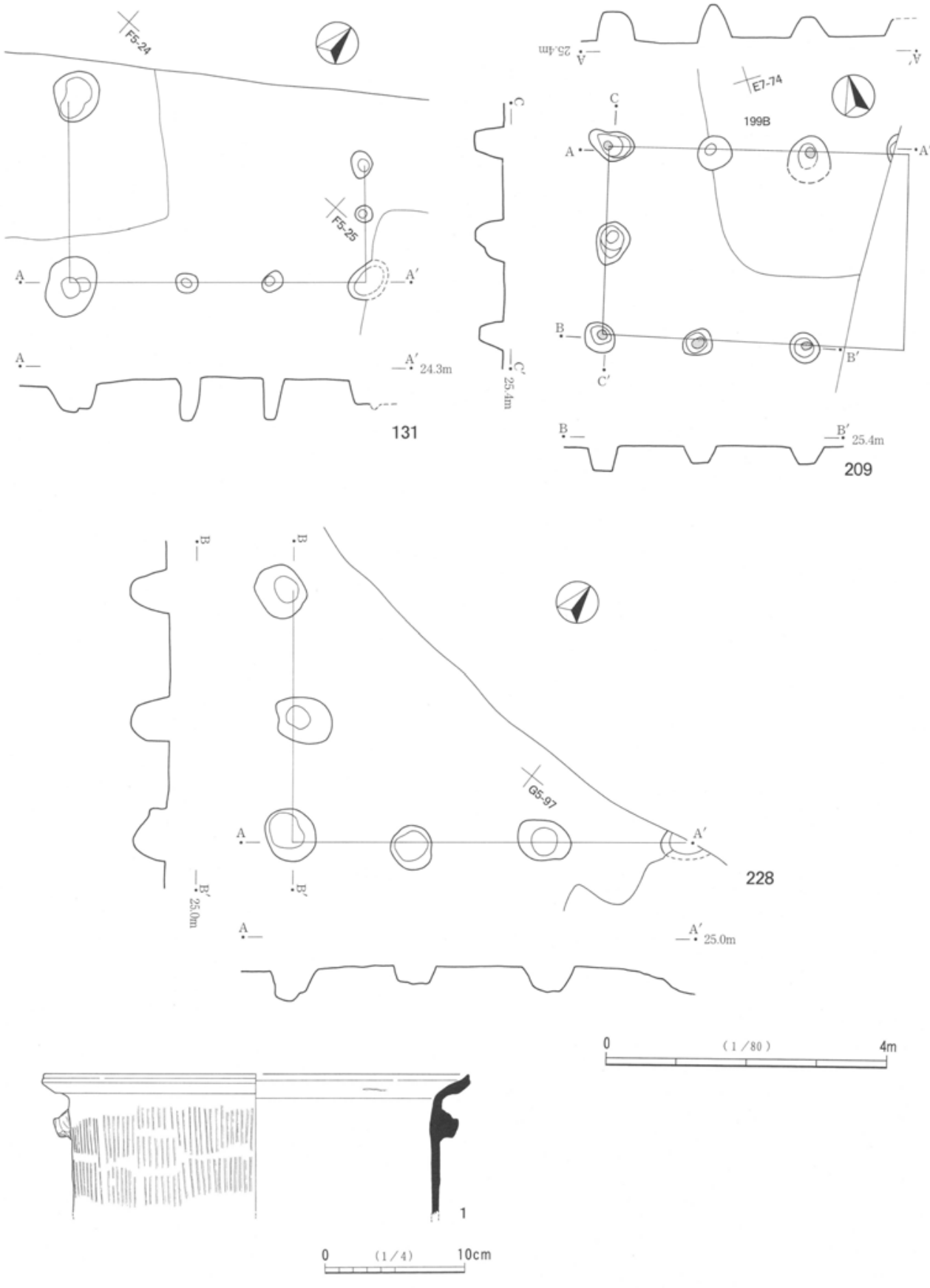
第190図　313及び出土遺物

209（第191図）

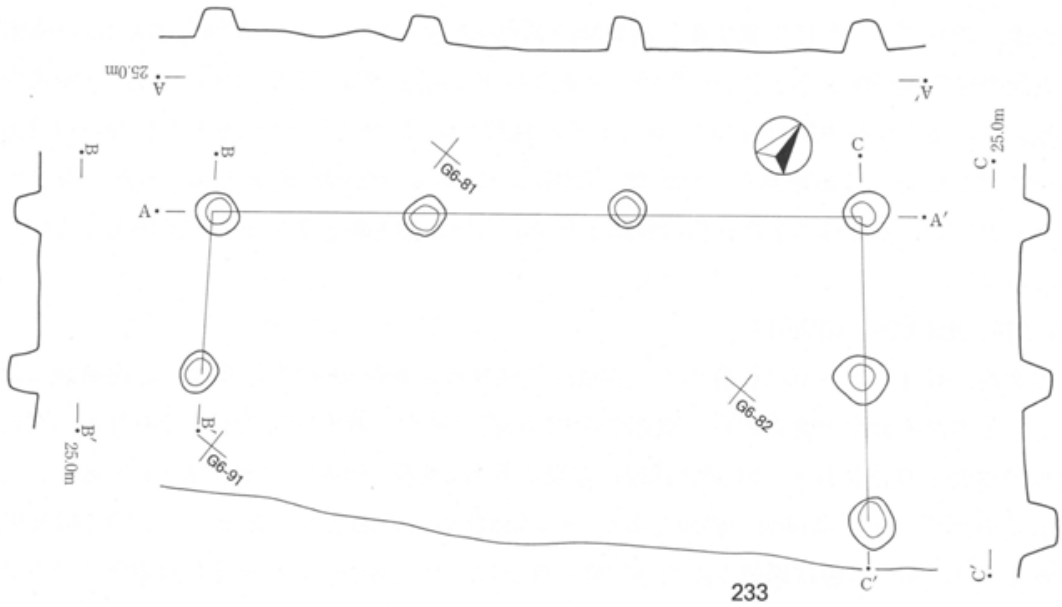
調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。古墳時代前期の住居跡199Ｂと，北側桁行方向の柱穴が重複する。東側が調査区域外にかり，桁行方向の柱穴が検出できなかった箇所もあるが，東西３間以上(4.0m以上)，南北２間(2.7m)の東西棟の側柱建物と推定される。桁行方向はN-19°-Ｅである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.40m～1.55m，梁間(南北)方向では1.3m～1.4mを測る。柱穴は径35cm～62cmの楕円形である。深さは19cm～58cmと差があるが，40cm代の深さのものが多い。柱のあたり痕(径12cm～18cm)が確認できた柱穴も多い。掘方埋土は黒褐色土を主体に，暗褐色土がわずかに混在する。出土遺物はない。

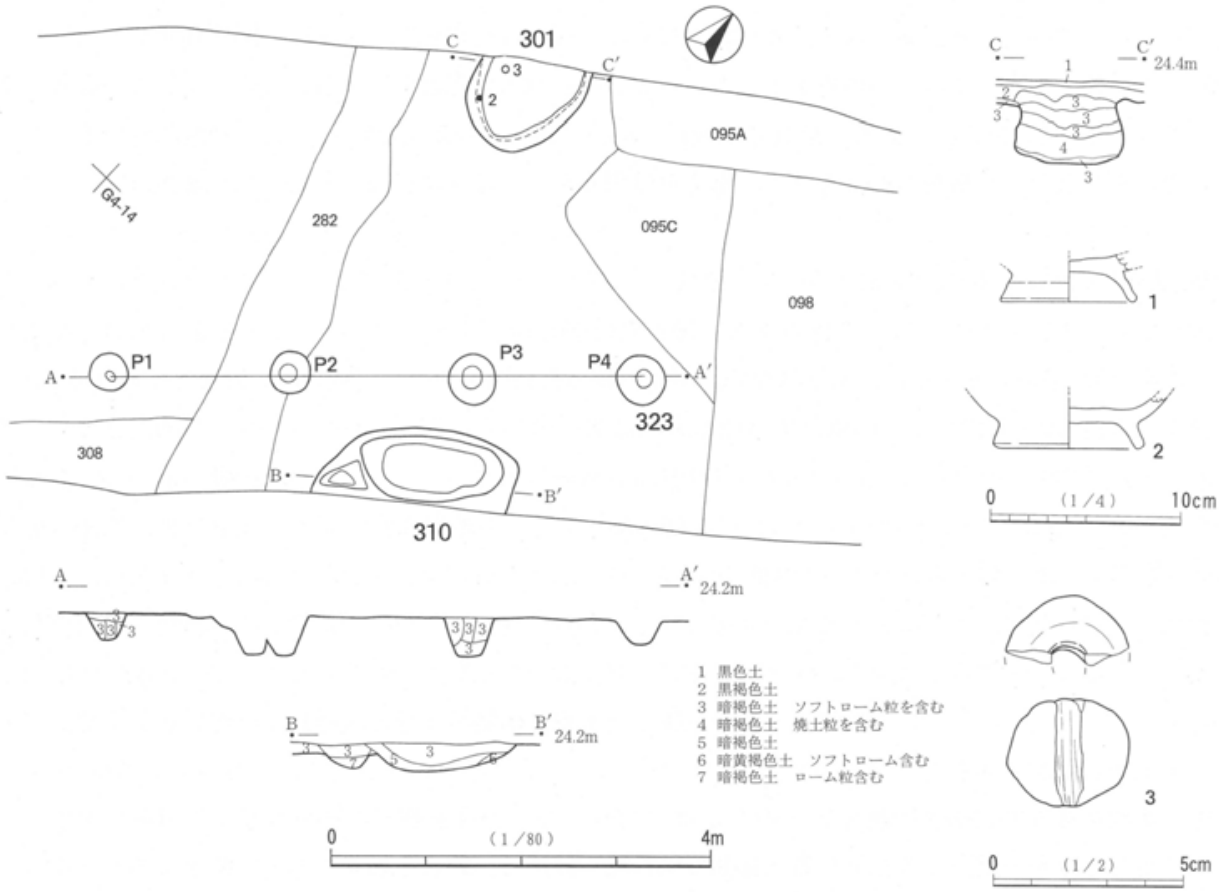
228（第191図）

調査区の南，Ｇ５グリッドに位置する。北側が調査区域外にかかるため，桁行方向の柱穴は検出できなかったが，東西３間以上(5.9m以上)，南北２間(3.6m)の東西棟の側柱建物と推定される。桁行方向はN-38°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で1.8m～2.0m，梁間(南北)方向では1.8mを測る。柱穴は径60cm～80cmの楕円形で，深さは24cm～56cmである。柱のあたり痕は確認されていない。掘方埋土からは，土器片や鉄製品が出土しているが，図示できたのは１の須恵器甑である。体部はタタキしめられ，内面はナデで仕上げられている。口縁部下に甕に掛ける台形状の突起がつくりだされている。



第191図　掘立柱建物跡(1)





第192図　掘立柱建物跡(2)，301，310

233（第192図，図版22）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。南東側が調査区域外にかかり，北西側では224Ｂと隣接する。南側桁行方向の柱穴列が検出できなかったが，東西３間(6.9m)，南北２間以上(3.3m以上)の東西棟の側柱建物と推定される。桁行方向はN-38°-Wである。柱間寸法は，桁行(東西)方向で2.2m～2.5m，梁間(南北)方向では1.6m～1.7mを測る。柱穴は，径36cm～58cmの楕円形や隅丸方形である。深さは30cm～35cmとほぼ一定している。柱のあたり痕は確認されていない。掘方埋土から土器片が出土しているが，図示できるものはない。

323，301，310（第192図，図版51）

調査区の南西，Ｇ４グリッドに位置する。古墳時代後期の住居跡308などと重複し，南東側が調査区域外にかかる。そのため検出できたのは，東西３間(2.8m)である。南北方向は不明であるが，周辺の状況から東西棟の建物と推定される。柱間寸法は，北側の桁行(東西)方向で1.8m～1.9mである。柱穴は径42cm～54cmの円形で，深さは14cm～43cmである。P4は皿状の浅い掘込みである。P1・P3には柱痕がセクションに残る。柱のあたり痕は確認されていない。埋土は，ソフトローム粒を含む暗褐色土である。掘方埋土から土器片が出土しているが，図示できるものはない。

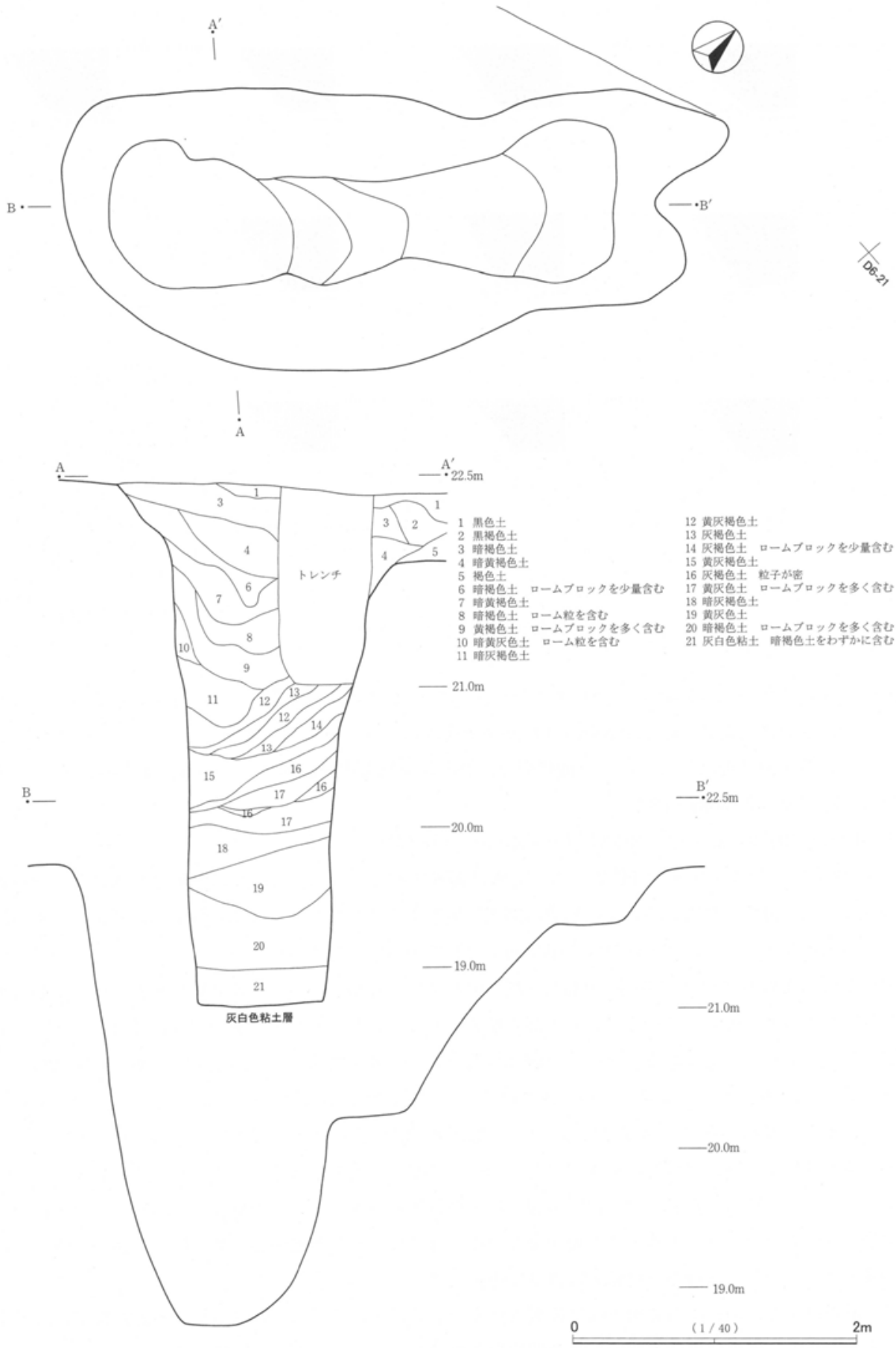
周辺からは２基の土坑が検出されているので，あわせて説明する。301は平安時代の土坑で，北側が調査区域外にかかるため，南側1/2の調査である。平面形態は楕円形を呈していると考えられ，長軸長側は50cmを検出した。調査範囲での短軸長は57cmを測る。底部は外側に抉り込むように掘込まれ，ややオーバーハングしている。確認面からの深さは35cmである。埋土は暗褐色土を主体に，黒褐色土やローム粒が混在する。埋土中から１～３の遺物が出土した。１は高台付椀の高台部である。２は高台付椀の底部である。３は土玉で1/2の遺存である。現存径3.2cm・高さ2.9cm・孔径7mmを測る。310は時期不明の土坑である。楕円形を呈し，長軸長は80cmを測る。掘込みは緩やかで，深さは15cmである。出土遺物はない。

３　地下式土坑

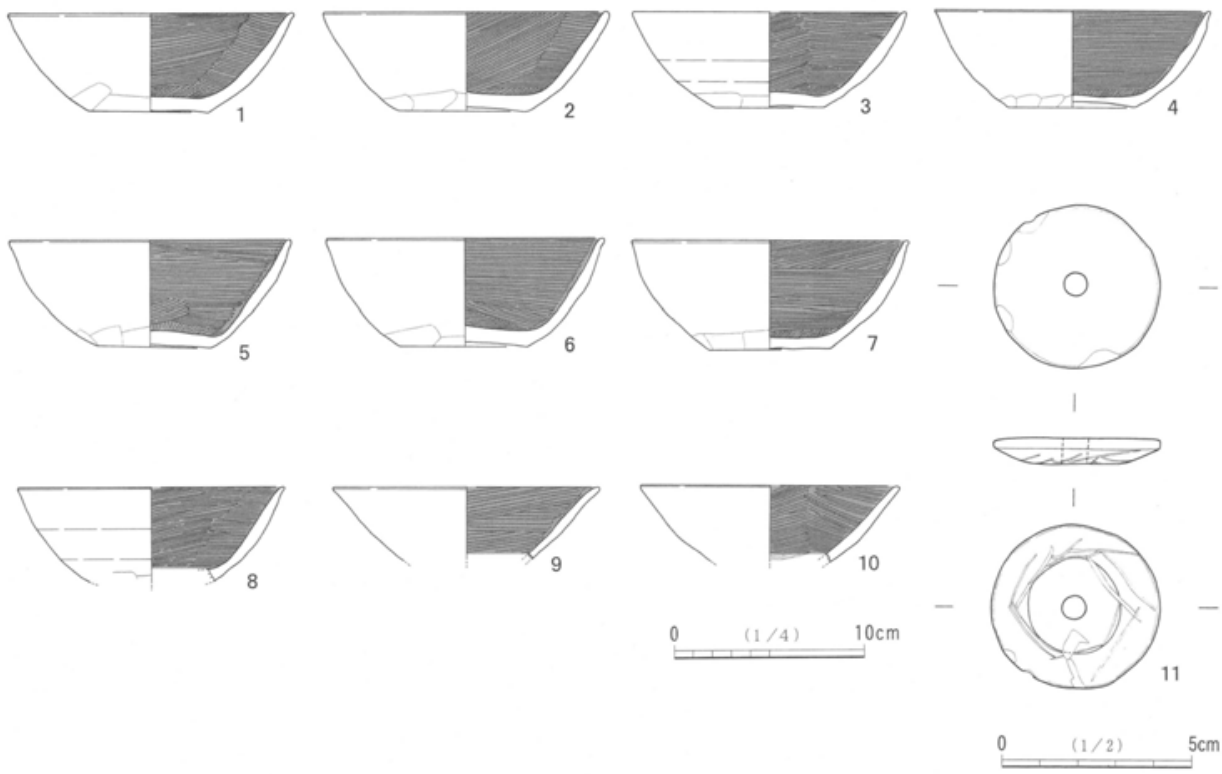
023（第193・194図，図版22・51・60）

調査区の北側，Ｄ６グリッドに位置する。確認面は整地のため，ハードローム上面まで削平されている。西側に025が接しているが，重複はない。平面形態は長楕円形を呈し，規模は1.95m×4.15mを測る。長軸方位はN-42°-Eである。北東側から南西方向に掘込まれている。上面から41cm～43cm掘込まれ，平坦面(47cm×112cm)を形成し，さらに傾斜しながら131cm掘り下げる。そこで平坦な中場(42cm×68cm)を再び形成する。ここでオーバーハングしながら241cm掘り下げ，平坦な底面に至る。底面は灰白色粘土層で鉄分が沈着し，水分がしみ出たような痕跡が確認された。南西側はほぼ垂直に立上がる。埋土は，上層に暗褐色土や暗黄褐色土を主体とする層が堆積し，ここから平安時代の黒色土器などの土器類が多数出土している。中層は，灰褐色土やロームブロックを多く含んだ層が互層をなしている。ここでの遺物の出土は減少する。下層は，ハードロームブロックを主体とする層と暗褐色土や灰白色粘土が混在して堆積し，遺物の出土はわずかである。

出土遺物は多いが，覆土一括として取り上げている。１～10は黒色土器杯である。内面を黒色処理され，丁寧なミガキで仕上げられている。底部の切り離し技法は，静止糸切りである。無調整のものが多いが，底部周縁に手持ちヘラケズリが施されているもの(１・２)もわずかに存在する。体部下端はすべて手持ちヘラケズリである。出土した土器の分類は第８章に述べるが，023では形態や径高指数から１～３(Ⅰ


A′
B
B′
D6-21
A
A
A′
22.5m
トレンチ
21.0m
B
B′
22.5m
20.0m
19.0m
21.0m
20.0m
19.0m
灰白色粘土層
1 黒色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗黄褐色土
5 褐色土
6 暗褐色土　ロームブロックを少量含む
7 暗黄褐色土
8 暗褐色土　ローム粒を含む
9 黄褐色土　ロームブロックを多く含む
10 暗黄灰色土　ローム粒を含む
11 暗灰褐色土
12 黄灰褐色土
13 灰褐色土
14 灰褐色土　ロームブロックを少量含む
15 黄灰褐色土
16 灰褐色土　粒子が密
17 黄灰色土　ロームブロックを多く含む
18 暗灰褐色土
19 黄灰色土
20 暗褐色土　ロームブロックを多く含む
21 灰白色粘土　暗褐色土をわずかに含む
0
(1/40)
2m

第193図　023



第194図　023出土遺物

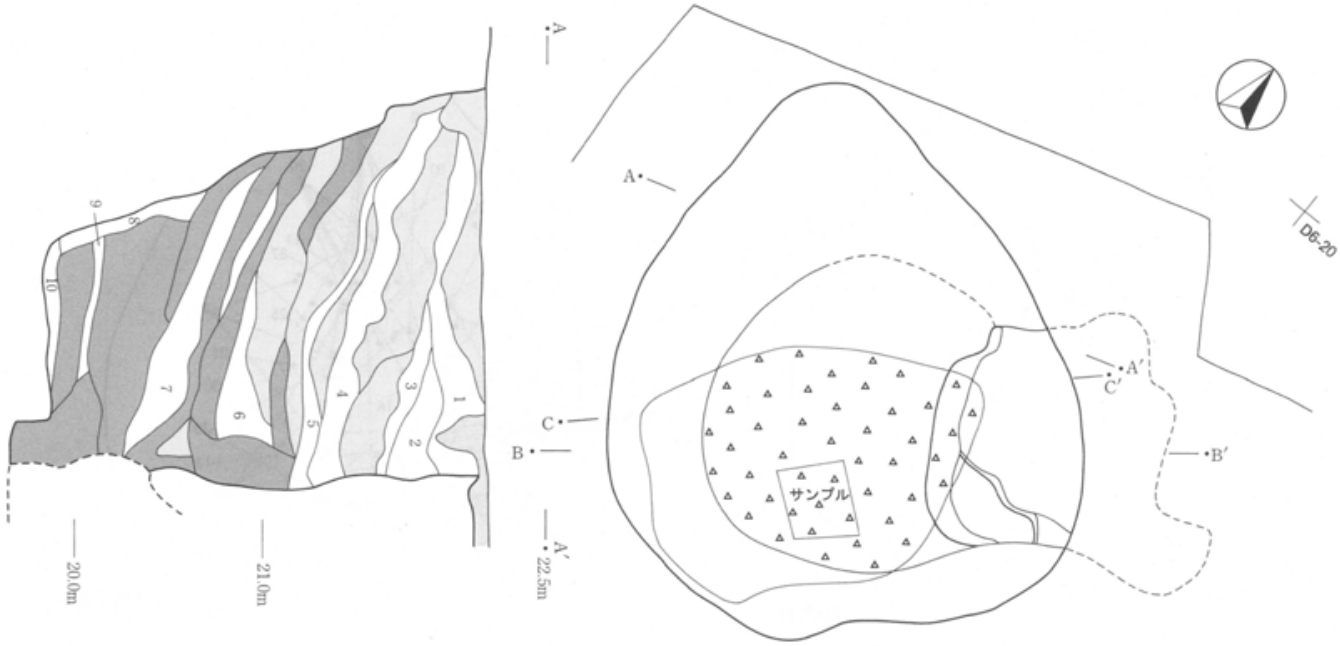
類)・4～6(Ⅱ類)・7(Ⅲ類)に，それぞれ分けられる。023ではⅠ・Ⅱ類が多く，Ⅲ類の出土点数は少ない。また，Ⅱ類は，器高から5.3cm前後(4)と5.6cm前後(5・6)のものに細分できる。11は滑石製の紡錘車である。埋土中に混入していた。ほぼ完形で，側面に粗雑な沈線が刻まれている。径上面4.4cm・下面2.4cm，厚さ7mm，孔径6mmを測る。

025（第195～199図，第18表，図版22・51～54・58・60・61）

023の西側で，D5グリッドに位置する。北側は調査区域外にかかる。竪坑の底面には横に掘込まれた小規模な空間が付設されている。この施設は調査区域外まで延びており，崩落の危険があるため全体の調査までは至らなかったが，地下式坑の主室である可能性が高いと考えられる。

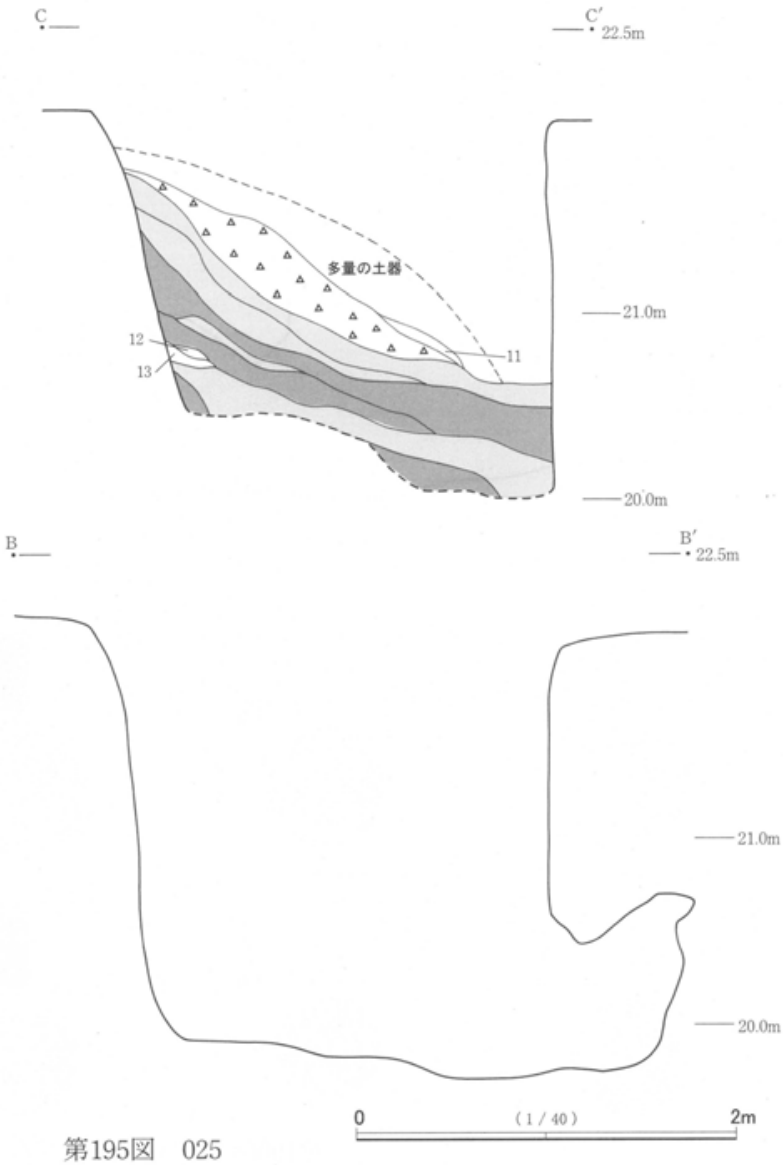
主軸方位は概ねN-46°-Eである。023の長軸方位とほぼ一致している。竪坑は東西径2.58m，南北は現状で1.95mと大きく開口している。竪坑下部の埋土にロームブロックが多く堆積していることから，上面は崩落して広がったと思われる。竪坑の西側は角度をもって掘込まれているが，主室のある東側は垂直である。深さは2.3mを測り，底面はほぼ平坦である。開口部は幅1.1m，高さは55cm，主室底面との段差は20cmである。主室の調査は，開口部から1.4mの地点まで掘り進んだところで終わっているので，全体の様相は不明である。開口部付近の天井部が奥に向かうに従って次第に高くなっているので，アーチ型の形態であったことも考えられる。埋土は，上層では黄褐色土と暗褐色土が互層をなしているが，中層以下では次第にロームブロックを主体とする層が多くなる。貝ブロックが南側から投棄され，中層から下層にかけて検出されている。貝類の分析結果は付章に掲載した。

出土遺物は多く，南西から北東方向に投棄されている。貝層とほぼ同じ層位から土師器杯類が多数出土し，その直上の土層には黒色土器の杯類や椀類が多数含まれていた。土師器杯類とほかの器種には，投棄

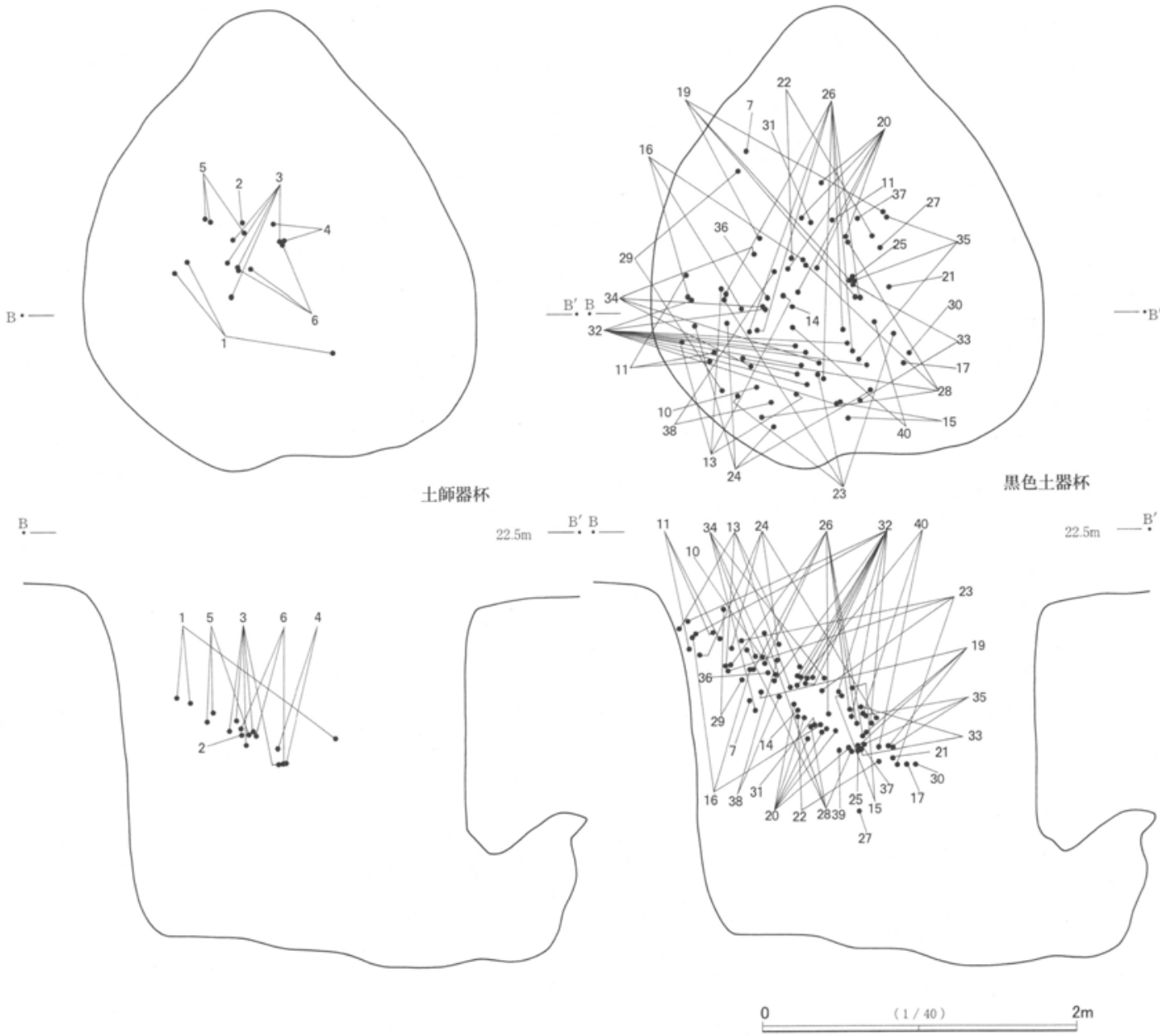


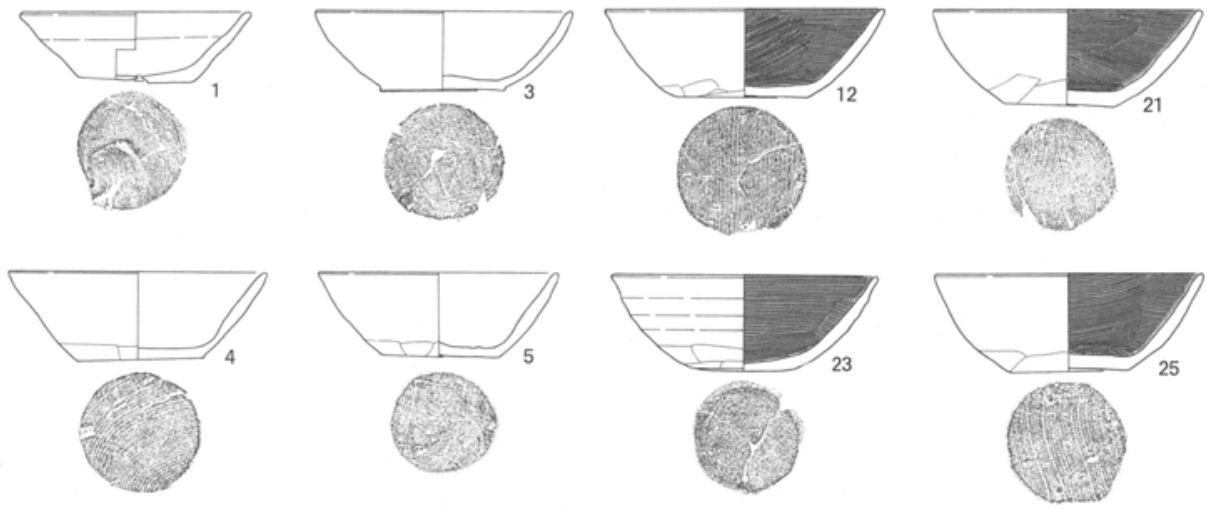
1 褐色土　ロームブロックを多く含む
2 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
3 黄褐色土　ロームブロックを含む
4 黄褐色土　ローム粒をわずかに含む
5 黄褐色土　ロームブロックを多く含む
6 黄褐色土　ローム粒、小ロームブロックを含む
7 暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む
8 黄褐色土
9 暗黄褐色土
10 灰褐色粘質土
11 黒褐色土　炭化粒を含む、土器片多数出土
12 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
13 黄褐色土　ロームブロックを多く含む

暗褐色土を主体とする層
ロームブロックを主体とする層

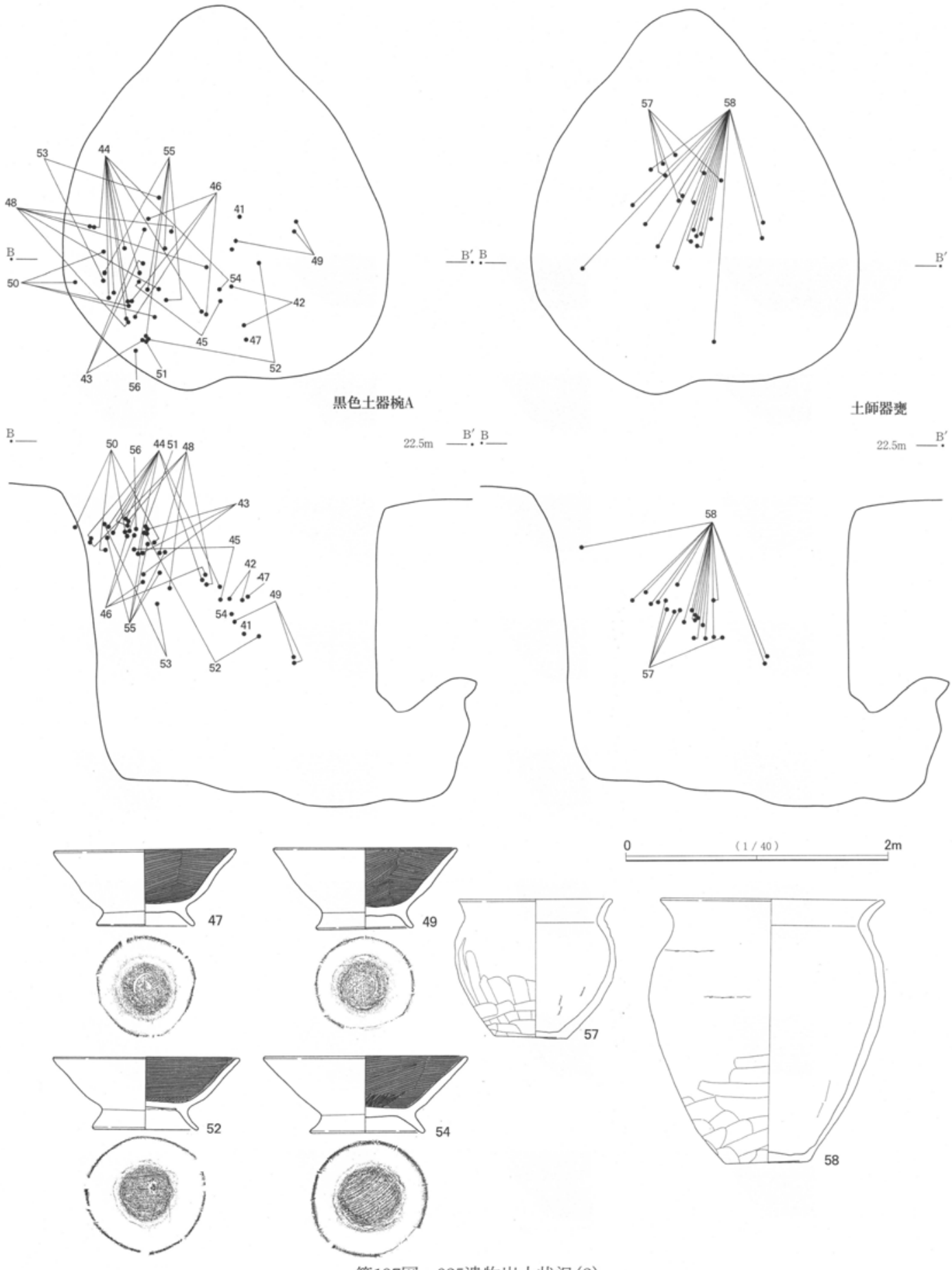


第195図　025

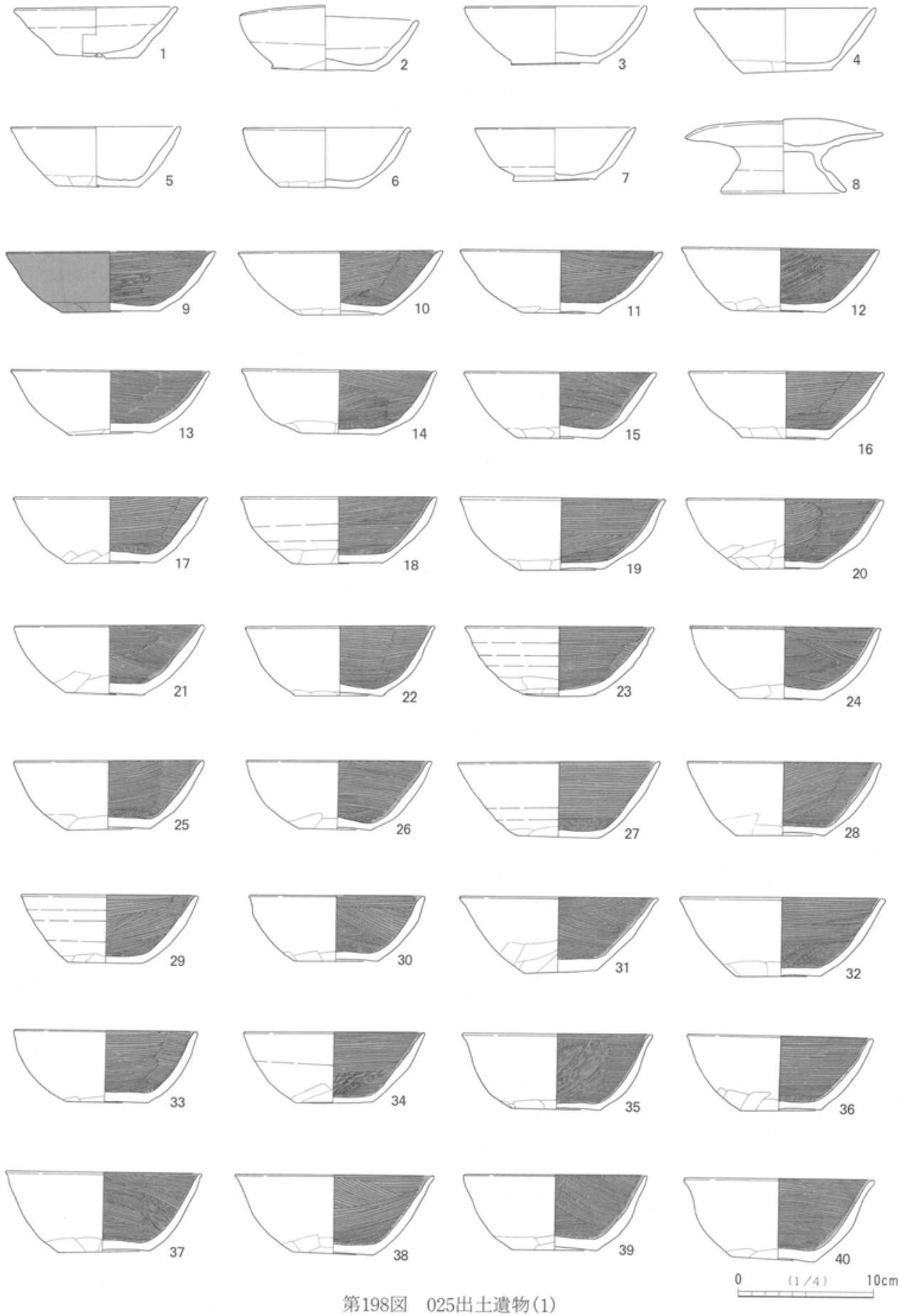




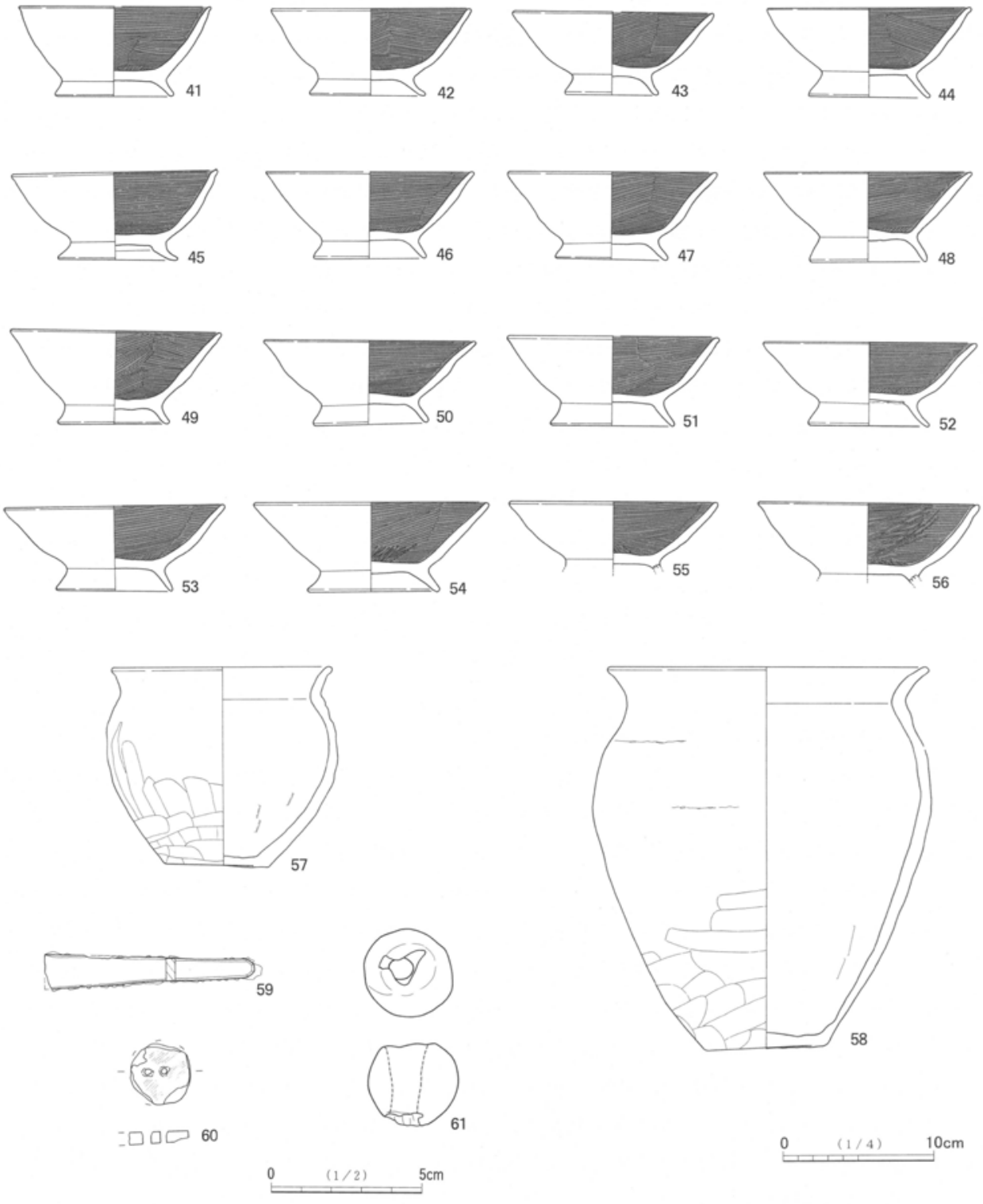
第196図　025遺物出土状況(1)



第197図　025遺物出土状況(2)



第198図　025出土遺物(1)



第199図　025出土遺物(2)

の時間差がわずかにみられるが大差ではない。１～７は土師器杯である。体部が直線的に立ち上がる杯Ａ（１～３，径高指数29～32）と，体部下位が張り出し緩い稜を形成する杯Ｂ（４～６，径高指数36前後）に分類できる。底部の切り離し技法は，静止糸切りがほとんどであるが，１は回転糸切り無調整である。８は足高高台付皿で，体部が大きく焼き歪んでいる。高台は底径9.1cm，高さ3.0cmと比較的大きく。中位に稜を形成し，高台Ｃに類似している。出土位置が判然としないため，ほかの土器との関連性は不明である。９～40は黒色土器杯である。主に内面に黒色処理が施され，丁寧なミガキで仕上げられている。９は外面も黒色処理されているが，ミガキで仕上げられていない。底部の切り離し技法は，ａ類の静止糸切り無調整が多いが，切り離し後に周縁あるいは全面を手持ちヘラケズリで調整しているもの（ｂ類）もある。形態や径高指数から，浅い形態のⅠ類（９～18，径高指数33～35），Ⅱ類（19～30，径高指数36～39），深椀に近い形態のⅢ類（31～40，径高指数40～43）に分類できる。Ⅱ類の出土点数がやや多い。切り離し技法との関連では，Ⅰ類はほとんどがａ類であるが，口径14cm前後のⅡ類ではｂ類が次第に増加し，Ⅲ類になるとａ類とｂ類の出土比率は同じになる。41～56は，黒色処理が内面に限定されている黒色土器椀Ａである。ハの字状に開く1.5cm前後の低い高台が付けられている。体部がやや椀に近い口径13cm代のⅠ類（41～51）と，14cm～15cm代のⅡ類（52～54）に大別できるが，多くはⅠ類に分類される。器高は口径の大きさにかかわらず6cm前後のものが多く，同時に出土した黒色土器杯に比較して全体に小振りにつくられていることがわかる。底部の切り離し技法は，静止糸切り無調整のものもみられるが，ほとんどはナデで調整されている。57・58は土師器甕である。57は体部の張る小型甕で，口径に比べて器高の低い形態である。58は甕Ⅱ類としたタイプで，焼成遺構256から多く出土している。59は刀子の茎である。現存長7.0cm・幅6mm～12mm・厚さ3mmを測る。60は滑石製の石製模造品（有孔円板）である。両面を研磨され，２孔が中央に偏っている。61は土玉である。径3.0cm・高さ2.7cm・孔径8mmを測る。

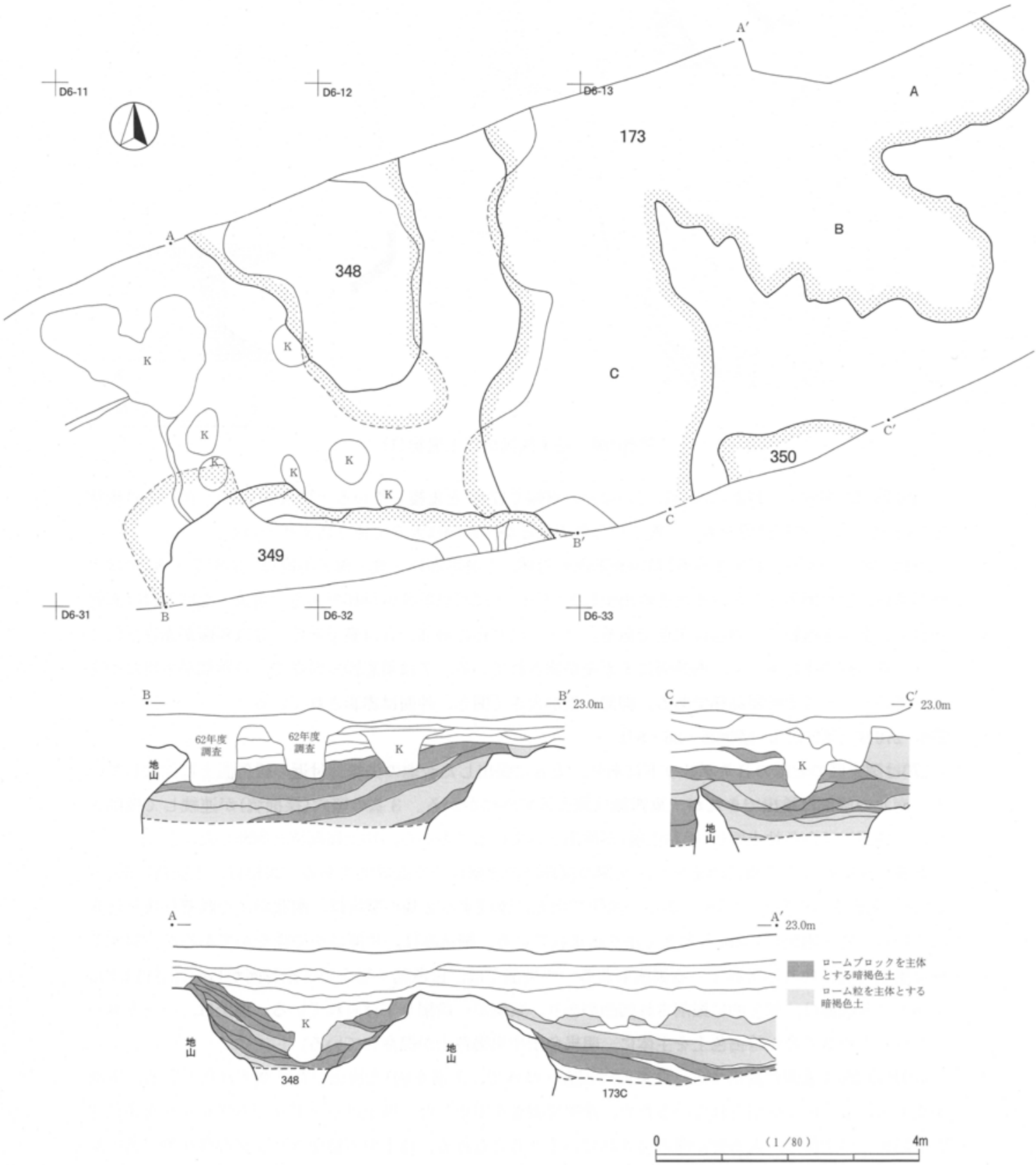
４　粘土採掘坑

173，348，349，350（第200・201図，図版25・26・54）

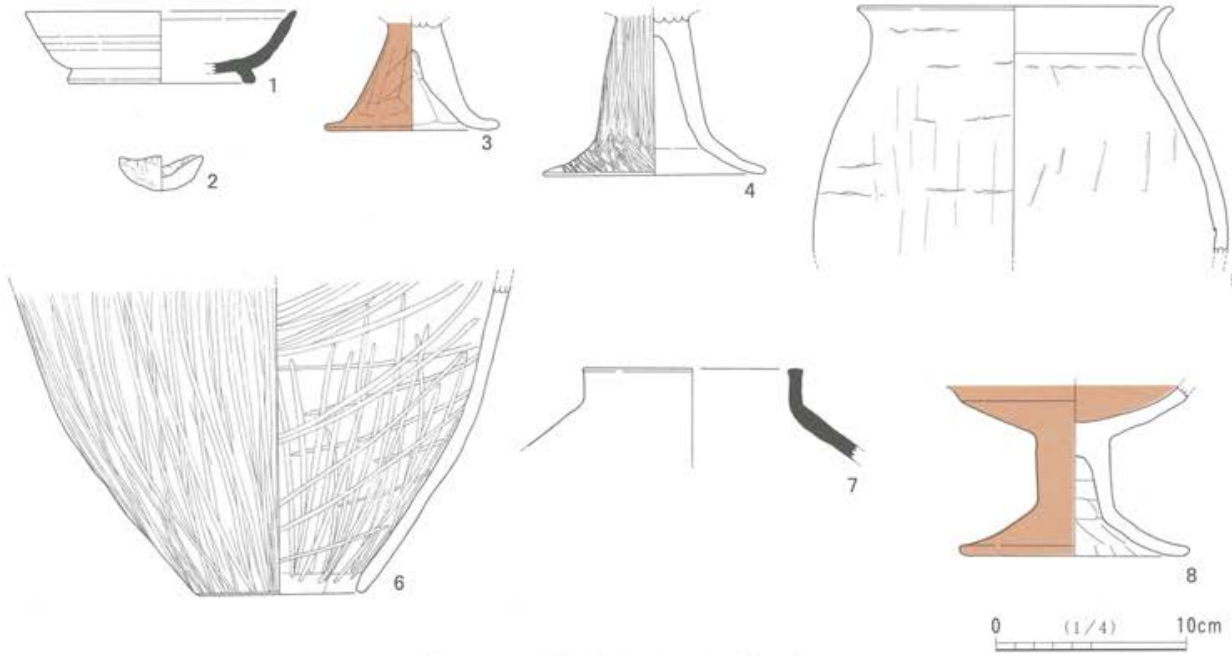
調査区の北，Ｄ６グリッドに位置する。北西から侵入する小支谷を北側に臨む，標高23.5m前後の緩斜面上から検出された。173の周辺からは同様の遺構である348・349・350が検出されている。南北の両側が調査区域外にかかり限定的な範囲での調査のため，それぞれの遺構の関連性が不明である。斜面を臨む連続した同一の遺構の可能性もあるが，ここでは個々の遺構として説明する。これらの遺構は，斜面上から緩やかに２m以上掘込まれているため，安全対策上それ以上の掘削は中止しており，基底面までは検出していない。白色粘土層はその下部に存在すると思われる。掘込み面や基底面の状態は不明であるが，東南部地区では御塚台遺跡の粘土採掘坑が類似した様相であることから，本遺構も同様の粘土採掘坑と考えられる。埋土は，ハードロームブロックを主体とする層が中心で，人為的に排土を埋め戻したと思われる。

173は最も規模の大きな採掘坑で，東西方向の幅7.8m，奥行きは現存で6.4mである。竪坑の広がりからＡ・Ｂ・Ｃに細分したが，このうち最も奥まで長く延びているのは173Ｃである。西壁の一部を抉り込みながら水平方向や下部へ採掘をすすめている。350は173Ｃの東側に位置しているが，調査区域外で連続している竪坑の可能性がある。

348は173の西側に位置し，東西幅3.45m，奥行きは現状で3.2mである。南側は70cm抉り込むように掘下げているが，東西方向の掘込みは緩やかで下部は次第に狭くなっている。



第200図　粘土採掘坑(1)



第201図　粘土採掘坑出土遺物(1)

349は348の南側で，斜面には面していない。東側で173Cと重複している。東西幅6.0m，奥行きは現状で1.6mである。東側は段をもって掘下げられているが，西側は大きく抉り込まれている。

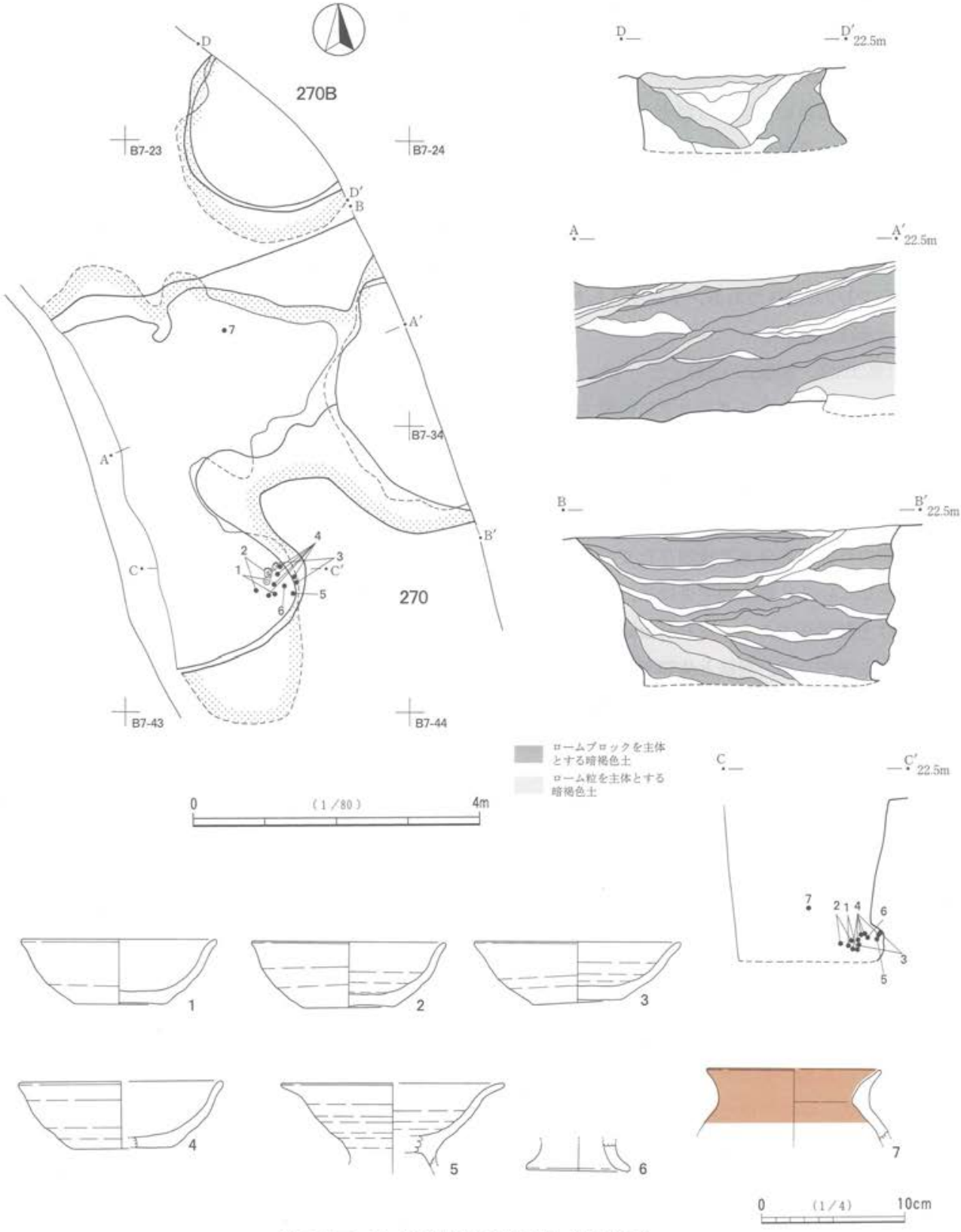
遺物は埋土中から，173(1～6)は須恵器高台付杯，土師器高杯・甕・甑・手捏ね，349(7・8)では土師器高杯，須恵器壺などが，それぞれ出土している。1は須恵器高台付杯である。角張った貼り付け高台が付く。2は手捏ねで，内面は黒色である。3・4は高杯の脚部，5は甕である。3は外面が赤彩されている。6は甑の体部下半で，内外面にミガキが施されている。7は須恵器短頸壺で，口唇部が平坦につくられている。8は土師器高杯である。脚部の裾が大きく開き，外面は赤彩されている。

270，270B（第202図，図版25・26・54）

270は調査区の北端のB7グリッドにあり，支谷に張出した台地の先端部付近の緩斜面上に位置している。南北の端部は検出できたが，東西側は調査区域外にかかる。3基の竪穴(採掘坑)が連続して掘削され，基底面には白色粘土層(常総粘土層)が検出されていることから，粘土採掘坑と判断した。

3基の採掘坑は不整楕円形を呈し，北側の採掘坑の北壁はやや直線的である。規模は，上面径2.5m～4.0m，基底面は3.3m～3.5mである。西側で南北に連続する2基の竪坑は，南北側にそれぞれ抉り込まれている。特に南側は1.2mも大きく抉り込まれている。掘込みは，片側はやや緩やかであるが，対する壁は垂直に近く抉り込まれている箇所もある。中央部では，白色粘土層までの確認面からの深さは1.8mである。基底面は，部分的に掘削され凹凸があり，東側が一段掘り下げられている。埋土は，ハードロームブロックを多く含む暗褐色土を主体に，明褐色土や黒褐色土が混在している。

270Bは270の北側に隣接する。北東側は調査区域外で，上面を約1/2検出した。掘下げたところ，現地表面からは2m以上掘削されているため，途中で調査を中止した。埋土はハードロームブロックを多く含む暗褐色土が主体で，人為的に埋め戻されていると考えられる。埋土中の粘土ブロックの存在や，途中から抉り込むように掘削していることなどから，270と同様の粘土採掘坑と判断した。270とは斜面側で連続している可能性がある。上面の平面形態は円形と考えられ，径2.6mを測る。北側は確認面から1mまで



第202図　粘土採掘坑(2)及び出土遺物(2)

は垂直に掘込まれているが，南側は大きく抉り込まれている。現状では2.8mの奥行きがある。

遺物は，南側の採掘坑基底面から土師器杯・足高高台付椀がまとまって出土している。これらの土器は完形に近い製品もあり，粘土採掘後にこの位置に置かれており，儀礼的な行為を意味していると考えられる。この区域の最終的な採掘が，南側採掘坑であったことも想定される。小片のため図示できなかったが，東側採掘坑の土器片は埋土上層からの出土である。

1～4は土師器杯である。杯BⅡに分類した一群の土器で，体部下位が張り出し稜を形成する特徴的な形態である。口径13.4cm～14.0cm，底径6.0cm～7.2cm，器高4.6cmは前後を測る。径高指数は34前後にまとまっている。底部の切り離し技法は，回転糸切り無調整である。胎土には石英粒が多く含まれている。5は足高高台付椀である。高台部を欠損する。体部はロクロ目が強く，口縁部が大きく外反している。6は高台で1/2の遺存である。7は混入した古墳時代の甕の口縁部で，外面と口縁部内面が赤彩されている。

5　土師器焼成坑

320（第203図，図版25・54）

調査区の南側，G6グリッドに位置する。ハードロームに床面をもつが，上面を削平されているため浅い掘込みになっている。平面形態は，南北方向に長軸をとる隅丸方形を基本とし，西側の壁はやや直線的になっている。規模は長軸長1.32m，短軸長1.06mを測る。壁の掘込みは全体的に緩やかで，現状の深さは最も深い中央部で15cmである。床面は，中央から東側の範囲が広く被熱のため硬化しており，特に東側では壁の外側の部分まで被熱されていた。床面中央から北側の壁面には焼土が堆積し，焼成した土師器片も出土している。埋土の中央には，焼土粒を含む黒色土が赤褐色土の上に堆積していた。

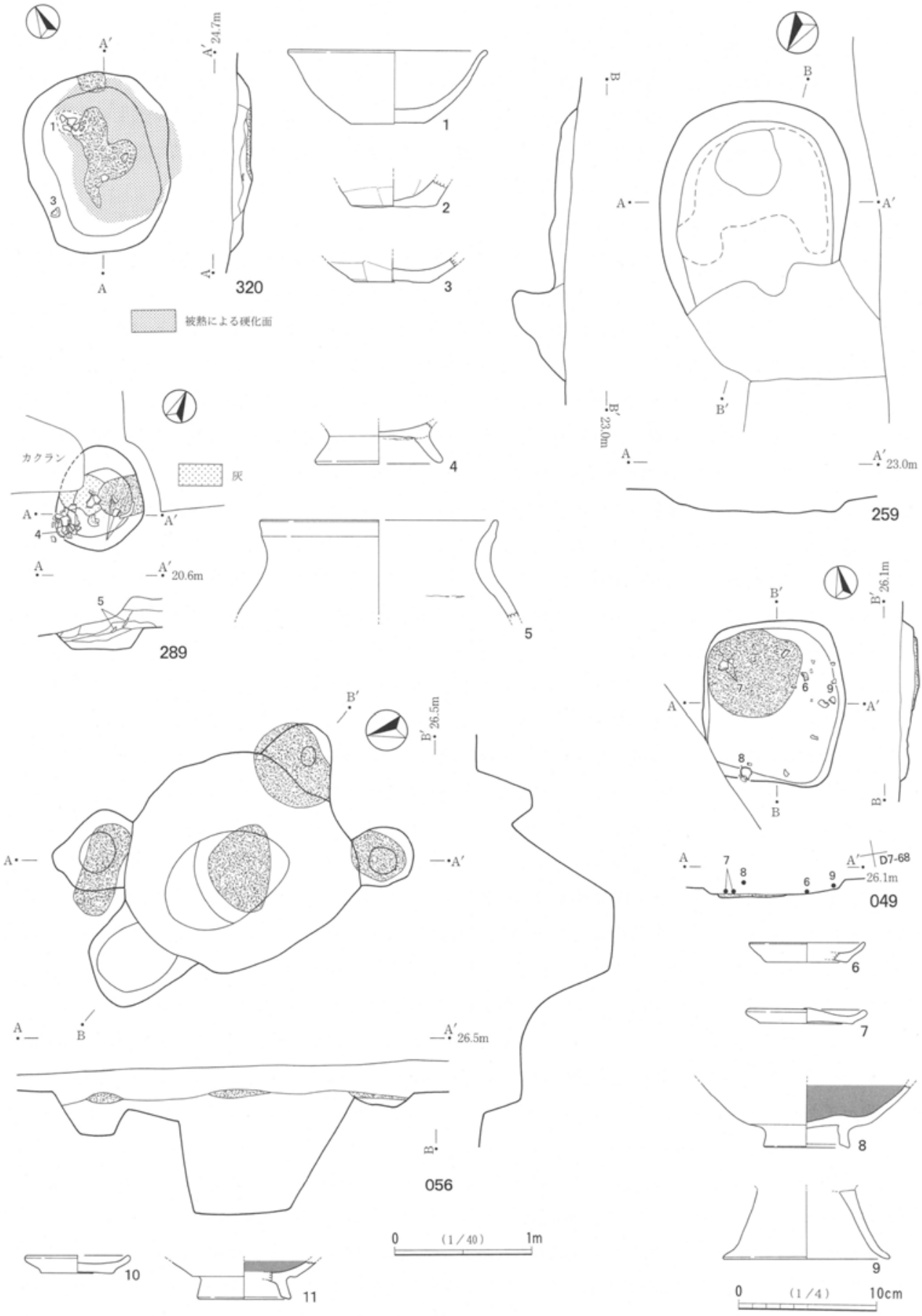
1は土師器杯である。底径5.3cmの底部から，体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部の切り離し技法は回転糸切りで，周縁と体部下端に手持ちヘラケズリを行っている。径高指数は37.7と大きく，深めの形態である。胎土には砂粒や石英粒を含み，焼成は堅緻である。第8章の分類では，杯AIaとした土器である。2・3は甕の底部である。堅緻な焼成で，3の底部は回転糸切り無調整である。

259（第203図，図版25）

調査区の北端C7グリッドで，256の北西6mに位置する。上面を削平され北側が攪乱を受けており，遺存状態は良好ではない。床面の被熱状態から土師器焼成坑と判断した。平面形態は南北方向に長軸をとる楕円形で，奥壁側はやや直線的であるが，全体に丸みをもつ。規模は，長軸方向は推定で2.0m，短軸方向は1.5mである。皿状に浅く掘込まれ，深さは最も深い箇所で19cmである。床面中央から南側の1/2が被熱のため赤色に硬化しているが，壁面は被熱されていない。床面の焼土の上に，炭化粒がわずかに認められる。埋土はハードロームブロックを少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。

289（第203図，図版25・54）

調査区の北端，B7グリッドに位置する。南側に平安時代の住居跡272が隣接し，西側の一部に攪乱を受けている。平面形態は南北方向に長軸をとる楕円形で，径63cm×76cmを測る。壁の掘込みは緩やかで，中央部の最深部でも16cm程度である。床面中央の西側に焼土粒や灰を含む黒色土が，東側には焼土が主に堆積している。床面の中央部は楕円形に低くなっており，床面は被熱のためかなり硬化していたが，壁面はあまり焼成を受けていない。埋土中から，焼成した土師器高台付椀・甕がまとまって出土したが，図示できたのは4・5である。



第203図　土師器焼成坑

4は，高台付椀の体部下半から高台にかけての部分である。ハの字状に大きく開き，底径は約9cmである。高台の高さは2cm前後で，256から出土した高台Bと同タイプであろう。5は甕の口縁部で，口頸部の屈曲は弱い。口唇部は直立気味に立ち上がり，外面が面取りされている。256から大量に出土した甕類とは，口頸部の屈曲や焼成などで相違点があるが，口唇部外面の面取りなどの細かい技法は類似している。以上のことから，289は256と同時期の焼成坑であろう。

049（第203図，図版22・54）

調査区の北東，D7グリッドに位置する。南西コーナーを溝状遺構050に削平されている。上面は整地されており，全体に浅くなっている。平面形態は，南北方向に長軸をとりコーナーが丸みをもつ方形を呈し，東壁はやや外側に張り出す。規模は長軸長1.17m・短軸長1.03mを測る。壁の掘込みは緩やかで，深さは3cm～6cmである。床面は広く平坦である。床面の中央から北西寄りには，径63cm×71cmの範囲で被熱された面が広がっているが，焼成は弱い。壁面は被熱されていない。遺物は，土師器小皿・黒色土器椀・足高高台付椀の高台部などが壁際寄りから出土している。埋土には，焼土粒を含む黒色土が堆積している。

6・7は小皿である。口径8cm前後・器高1.2cm前後の扁平な皿状の形態で，底部は回転糸切り無調整で厚くつくられている。口唇部を斜め上方に小さく引き出し，焼成は堅緻である。分類では小皿Aとした土器である。8は内外面が黒色処理された黒色土器椀Bである。内面のミガキなどの処理は雑である。高台は断面が角張った形態で，底径は6cmと小さい。口縁部を欠損しているが，体部は大きく開く形態である。9は足高高台付椀に付く高台Dである。底径12cm・高さは5.1cmもあり，踏ん張るように開いている。

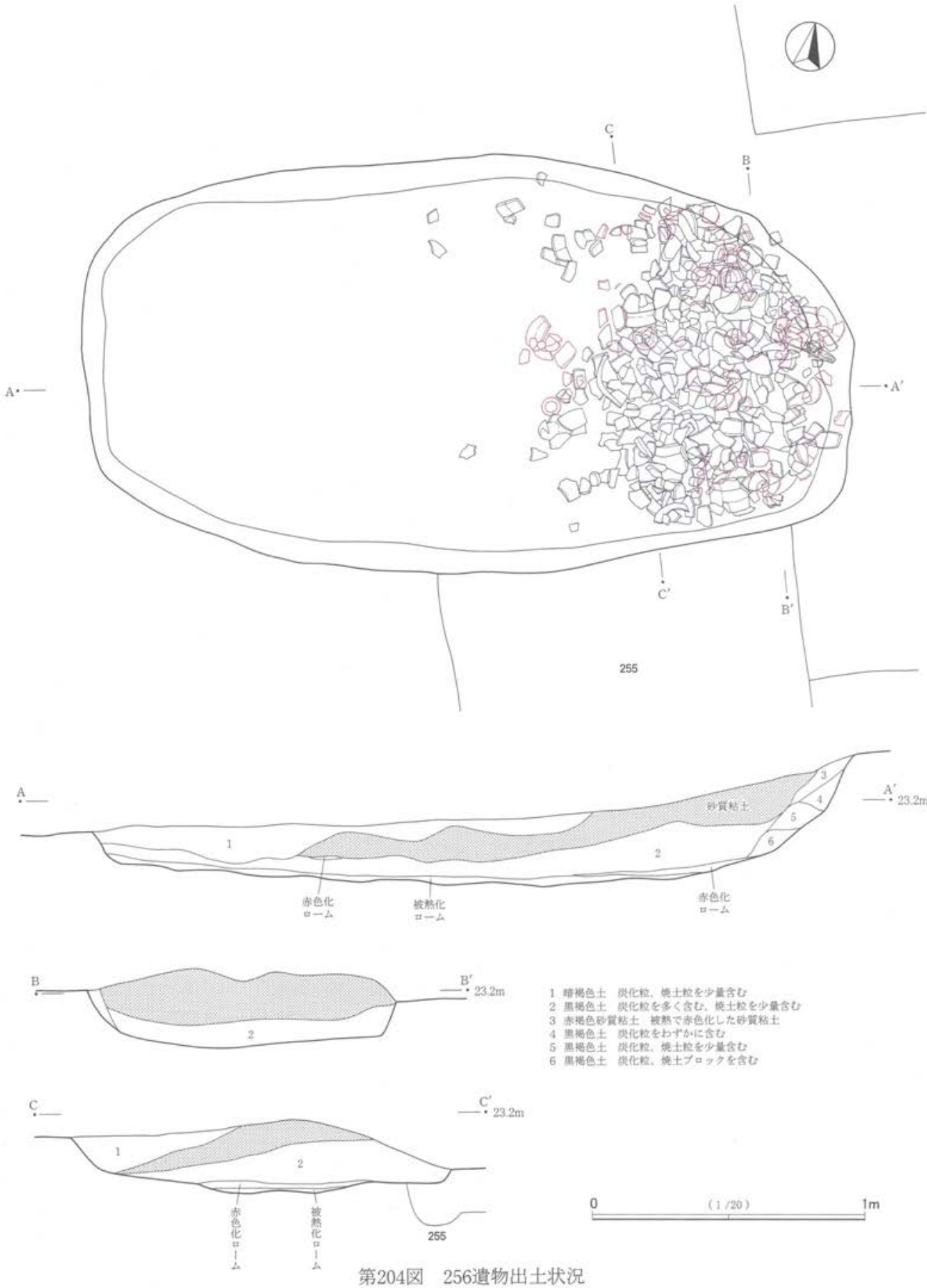
056（第203図，図版25・54）

調査区の北東，D7グリッドに位置する。古墳時代前期の住居跡034の床面を掘込んで土坑が構築されている。この土坑の上面で焼土が検出され，出土した土師器小皿や高台から，土師器焼成坑と判断した。土坑の平面形態は楕円形で，規模は1.50m×1.65mを測る。壁の掘込みは緩やかで，深さは92cmである。土坑の南北側の4か所に，焼土（厚さ6cm～10cm）が上面に堆積したピット（径38cm～54cm，深さ11cm～43cm）が位置している。これらの焼土は，土坑埋土の上面に並んでおり，埋土内へは落ち込んでいない。土師器が出土した中央部でも，土器片は埋土上面に止まっており，土坑が埋没してから土器を焼成した可能性がある。そのため，土坑との関係や本来の形態は明らかではないが，焼土の分布から，楕円形の浅い床面に複数の焼成面をもつ土師器焼成坑の存在や，焼成坑の重複関係が想定される。ほかの焼成坑とは異なる特異な形態であり，時期差等も考慮される。遺物は，中央部の焼土内から，土師器小皿・黒色土器椀が出土している。10は小皿である。口径7cm・器高2cmの扁平な皿状の形態である。底部は回転糸切り後に，部分的にナデで調整している。049の6と類似した形態で，小皿Aに分類できる。11は破片であるが，黒色土器椀Bである。内外面が黒色処理されているが，049の8と同様にミガキは雑である。高台の断面は角張っており，底径は6.5cm前後である。体部との境に明瞭な稜が形成されている。

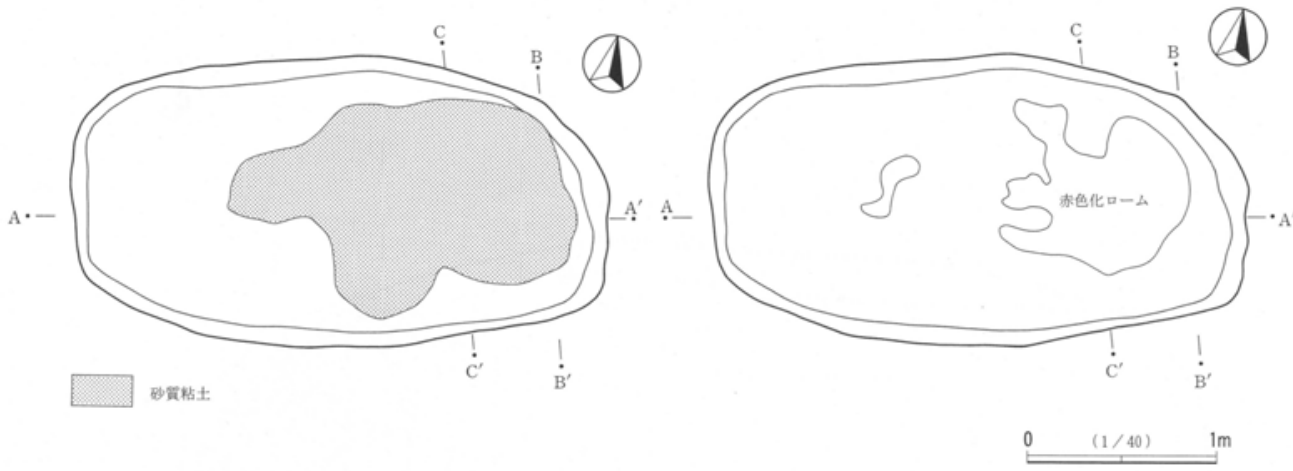
256（第204～208図，図版23・24・54～57）

調査区の北端，C7グリッドで東側は次第に緩斜面にかかる位置である。南側に隣接する平安時代の住居跡255の北壁側を一部削平している。本遺跡内では，最も出土遺物の多い土師器焼成坑である。

平面形態は長楕円形で，部分的に直線の箇所もある。規模は長軸長2.85m・短軸長1.50mを測る。長軸方位はN-78°-Eと，大きく東側に振れている。壁は緩やかに掘込まれ，深さは12cm～28cmである。床面は平坦で，ほぼ全面が被熱で硬化していたが，特に中央部から奥壁にかけての2/3の範囲が強い被熱のた



第204図　256遺物出土状況



第205図　256粘土及び赤色化ローム範囲

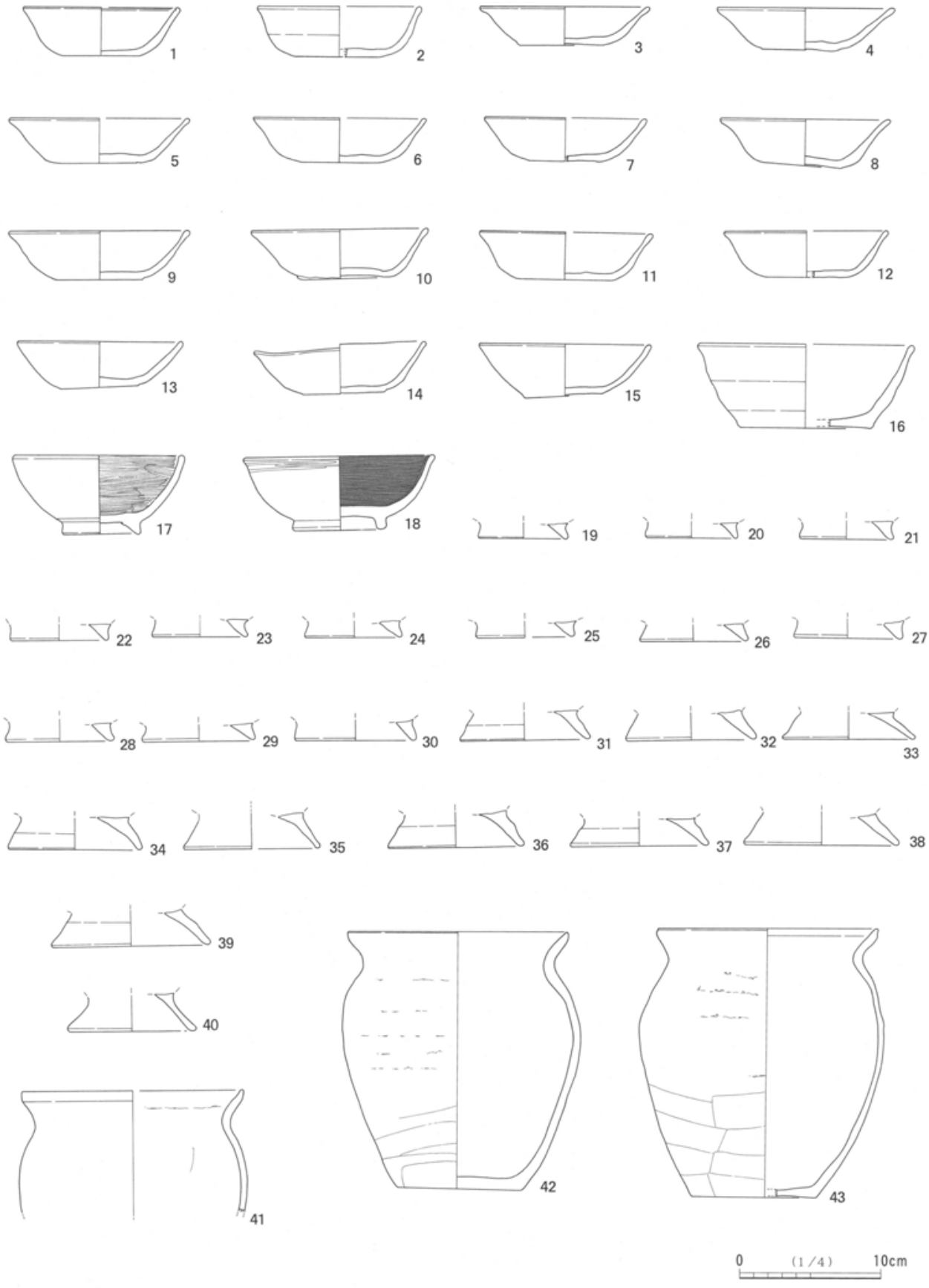
め赤化している。この範囲が焼成の中心部分である。埋土は，床面の直上に炭化材を主体に焼土粒を含む黒褐色土が，また奥壁には炭化材や焼土粒・焼土ブロックを中心とする層が壁に沿って立上がるように，それぞれ堆積している。奥壁面もよく被熱されていることがわかる。これらの土層の上に，灰黄色の砂質粘土が燃焼範囲を広く覆うような状態で検出された。この砂質粘土は，径1.15m×1.9mの範囲に6cm～15cmの厚さで堆積している。さらにこの上には，炭化材や焼土粒をわずかに含む暗褐色土が堆積している。

大量の土師器は，この砂質粘土層と床面との間の層から出土した。器種は，杯・椀・高台付椀・甕である。このほかに，高台付杯・椀の高台部分のみが出土している。遺物は奥壁側1/3の0.95m×1.15mの範囲に集中している。特に甕類の出土が多く，これらの破片を復元したところ，実測可能な個体数で22個体分にもなった。ほぼ完形に復元できた製品の多いことが注目される。杯・椀類の分布は，奥壁側に集中し甕類の縁辺に重なっている。この中で杯は主に奥壁側に多く，高台付杯・椀の高台部は中央から北寄りの範囲に出土している。垂直分布では，甕類が主に下部に集中し，その上に杯類が位置している。土器の焼成は，甕類は良好であるが，杯・椀類はやや脆弱な点が認められる。

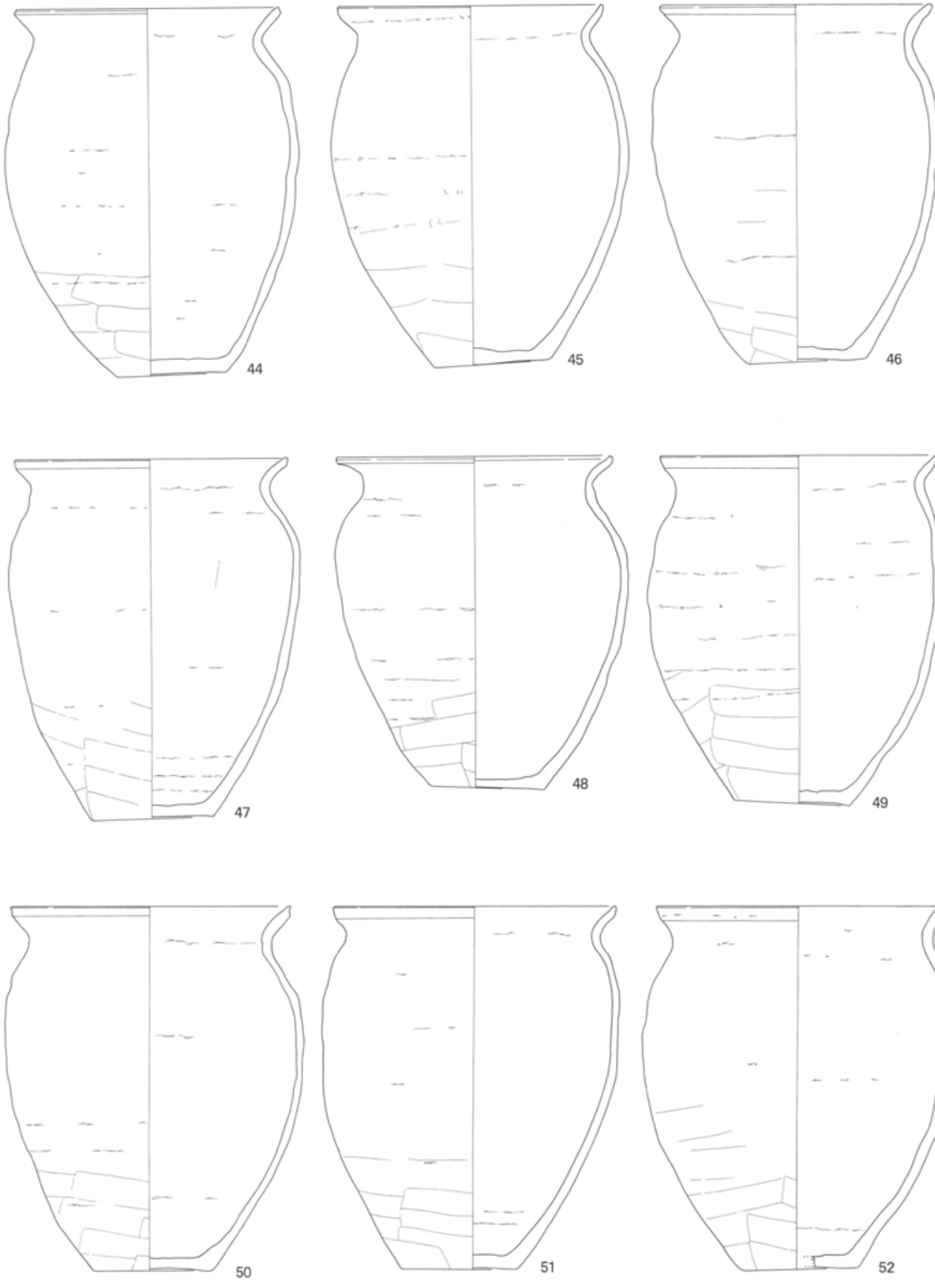
本遺構からは一片毎に取り上げただけでも937点の破片が出土している。一括遺物として取り上げた土器片もあり，総数は1,000点を超える。937点のうち，接合し実測できた破片は711点である。その内訳は，杯39点・高台付椀４点・椀２点・高台付杯・椀の高台部36点，甕類630点である。破片数では甕類が最も多く，一括遺物を除く全体の破片数の67.2%，接合した破片数では88.6%を占めている。

甕類の出土が圧倒的に多いことから，これを中心に焼成していたことも考えられるが，焼成の不良な杯類や欠損した高台を残したまま，杯・椀類を先行して取り上げた可能性もある。この場合は，焼成の終了した甕類が何らかの理由で，取り上げられないまま途中で廃棄されたことになる。生産された完成品が出荷されずにそのままの状態で残っているのは，常態ではない。いずれにしても，理由は明らかではないが何らかの緊急事態が発生し，製品を残した状態で焼成坑を放棄したものと考えられる。

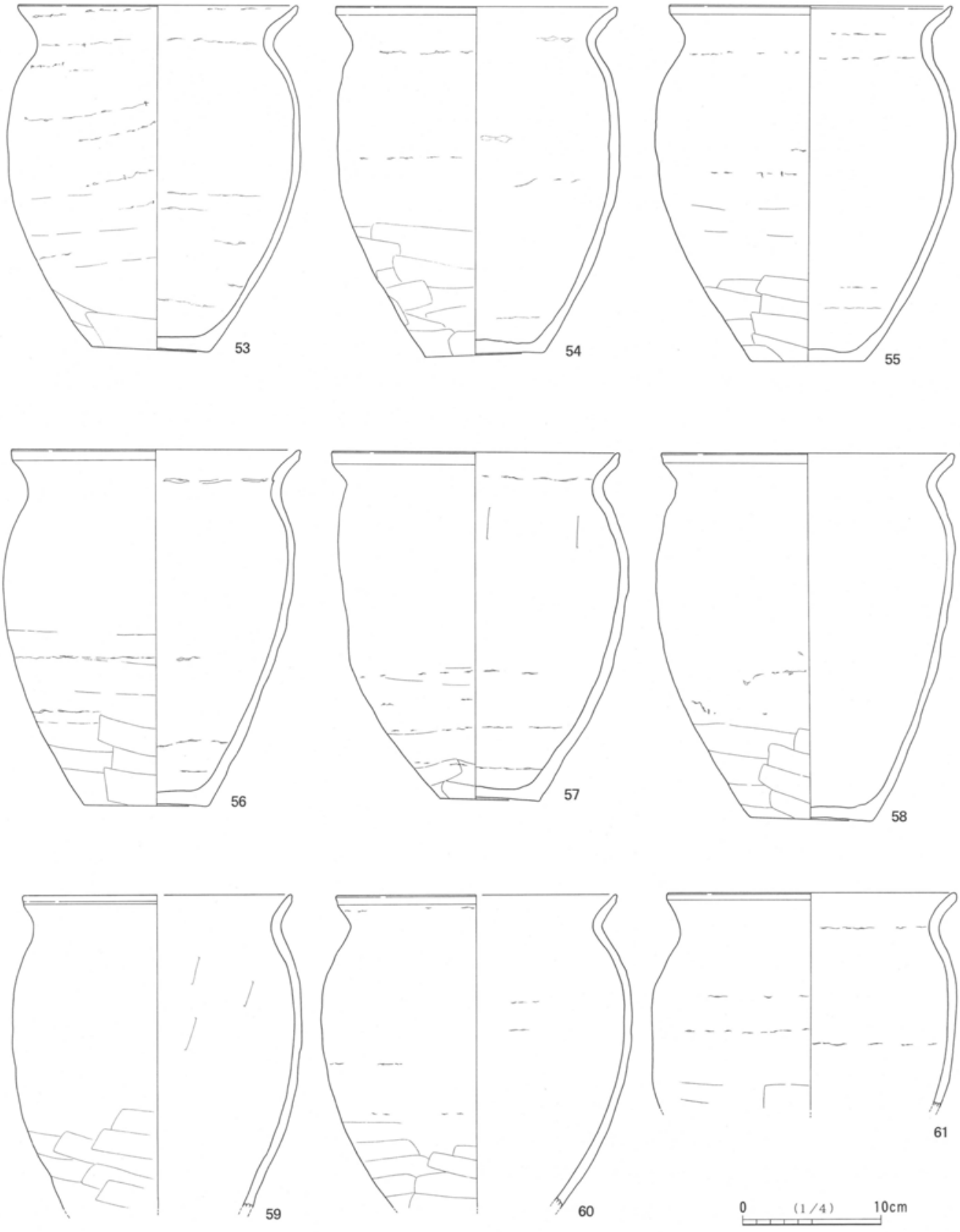
出土した遺物のうち図示できたのは，土師器杯15個体，高台付椀２個体，椀１個体，高台付杯・椀などの高台部22個体，甕22個体である。１～15は杯である。第８章で杯Ｃと分類した一群の土器で，全体に器高が低く粗雑なつくりである。１・２は，杯ＣⅠと分類した杯である。口径11cm前後と小型であるが，径高指数が32前後とやや器高の高い形態である。３～15は杯ＣⅡと分類した一群である。器高が低く，体部下位が大きく張り出し緩い稜を形成する，特徴的な器形である。これらの杯は，体部が外反しながら立ち



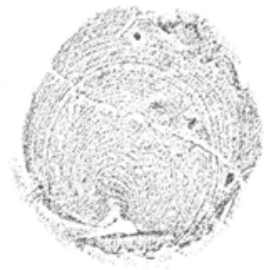
第206図　256出土遺物(1)



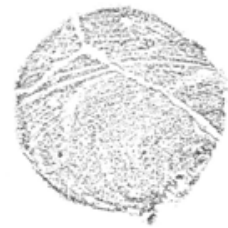
第207図　256出土遺物(2)

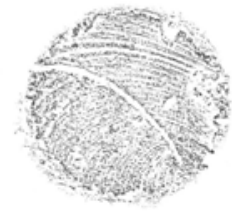


第208図　256出土遺物(3)



回転糸切り





静止糸切り

上がるタイプ(3～5，径高指数25前後)と，やや直線的に立ち上がるタイプ(6～15，径高指数28前後)に細分できる。底部の切り離し技法は静止糸切りが多く，大きく弧状を描くような痕跡が認められる。体部下端のヘラケズリは省略されている。16は無高台の椀Aである。南側に隣接する住居跡255出土の破片と接合した。全体に大形で，底部から直線的に体部が立ち上がっている。17は有台の椀Bである。口径12cmと小形の器形で，体部は丸みをもつ。内面はミガキが施されているが，黒色処理はされていない。18は黒色土器椀Bである。内面に黒色処理が施されているが，地下式土坑025の出土品に比較してミガキはやや雑である。体部が丸みをもち，低い高台が貼り付けられている。19～40は，杯や椀に貼り付けられていた高台部分である。体部との接合部分に糸切り痕が残るものもあり，端部を上にして開くようにつくられていたことがわかる。形態から高台A・B・Cに分類し，底径からⅠ類～Ⅲ類に細分できる。高台A(19～30)は小形で直立する形態で，高さは1.2cm前後である。底径からⅠ類(6.2cm～6.8cm，19～25)，Ⅱ類(7.4cm前後，26～28)，Ⅲ類(7.8cm～8.4cm，29・30)にわけられる。高台B(31～39)は，高さが2.0cm～2.6cmと高く，ハの字状に大きく開く形態である。中位に明瞭な稜をもつもの(36・37など)もある。底径からⅠ類(9cm前後，31～34)，Ⅱ類(9.5cm前後，35～37)，Ⅲ類(11cm前後，38・39)にわけられる。高台C(40)は，底径に比較して3cm前後の高さをもち，形態的には高台Bに類似する。丁寧なつくりで堅緻な焼成である。41～61は甕である。やや長胴の形態で，平底の底部から粘土紐を巻き上げて成形している。体部の内外面にその痕跡が明瞭な甕もある。体部下半は横位のヘラケズリ，上半はナデで仕上げられている。口頸部は，くの字状に短く外反し，口縁部外面が明瞭に面取りされているものもある。大きさから，小型のⅠ類(口径15cm前後・器高19cm前後，41～43)と，大型のⅡ類(口径20cm前後・器高26cm前後，44～61)にわけられる。Ⅱ類は類似した器形が多いが，なかには口縁部が大きく外反するもの(48)や，外反が弱く短く直立するもの(57)もある。小型の甕の出土量は少なく，ほとんど大型のⅡ類で占められている。

6　土　坑

調査区からは多数の土坑やピットが検出されているが，出土遺物から奈良・平安時代と判断できる有天井土坑や土坑を主に掲載した(第209・210図)。出土遺物がなく時期の確定できない土坑については，形態や規模等から同時期と考えられるものや，それ以外の時期が判然としないものも，代表的な土坑はここに図示した。これらの土坑は，出土遺物や形態から土坑墓と考えられるものが多いが，195・196のように貝が大量に投棄されている土坑もある。さらに，緑釉陶器が128からは出土しており，性格は様々である。なお，住居跡等と重複する土坑については，その遺構の項で説明した。

051（第209図）

調査区の北東，Ｄ７グリッドに位置する有天井土坑である。古墳時代後期の住居跡054を削平して構築されている。天井部はすでに崩落しており，遺存状態はあまり良好ではない。

平面形態は不整楕円形で，長軸長2.24m×短軸長1.93mを測る。長軸方位はN-27°-Eである。西側は垂直に掘込まれ，確認面から64cmの位置に中段が形成されている。東側にわずかにオーバーハングした箇所が認められる。底面は長楕円形で，中段からさらに5cm浅く掘込まれている。長径1.91m×短径0.76m，確認面からの深さは74cmである。底面に溝は設けられていない。埋土は，暗褐色土や黒褐色土を主体に，ローム粒やロームブロックを含む黒灰褐色土・暗黄褐色土・暗黄灰褐色土が混在する。

遺物は土師器片などがわずかに出土したが，図示できるものはない。

128（第209図）

調査区の中央，Ｆ５グリッドに位置する。古墳時代後期の住居跡103の北西壁とカマドの袖部を削平して設けられている。円形の土坑で，規模は径61cm×64cm，深さは41cmである。緩やかに掘込まれ，底面はやや硬化している。埋土中層から，土師器杯・高台付椀・甕や緑釉陶器椀の破片が出土した。１は緑釉陶器椀である。出土した４点破片は，複数の個体の可能性もある。体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部に輪花は確認されていない。付け高台で，端部は欠損している。底部は回転ヘラケズリである。体部内面にトチンの跡が残る。ハケ塗りで，灰緑色を呈する。９世紀後半の，猿投窯を中心とした東海地方の製品であろう。覆土中層からの出土である。２は土師器皿で，底部は回転糸切り無調整である。３は高台付杯の底部である。内面にミガキが残る。

168（第209図，図版57）

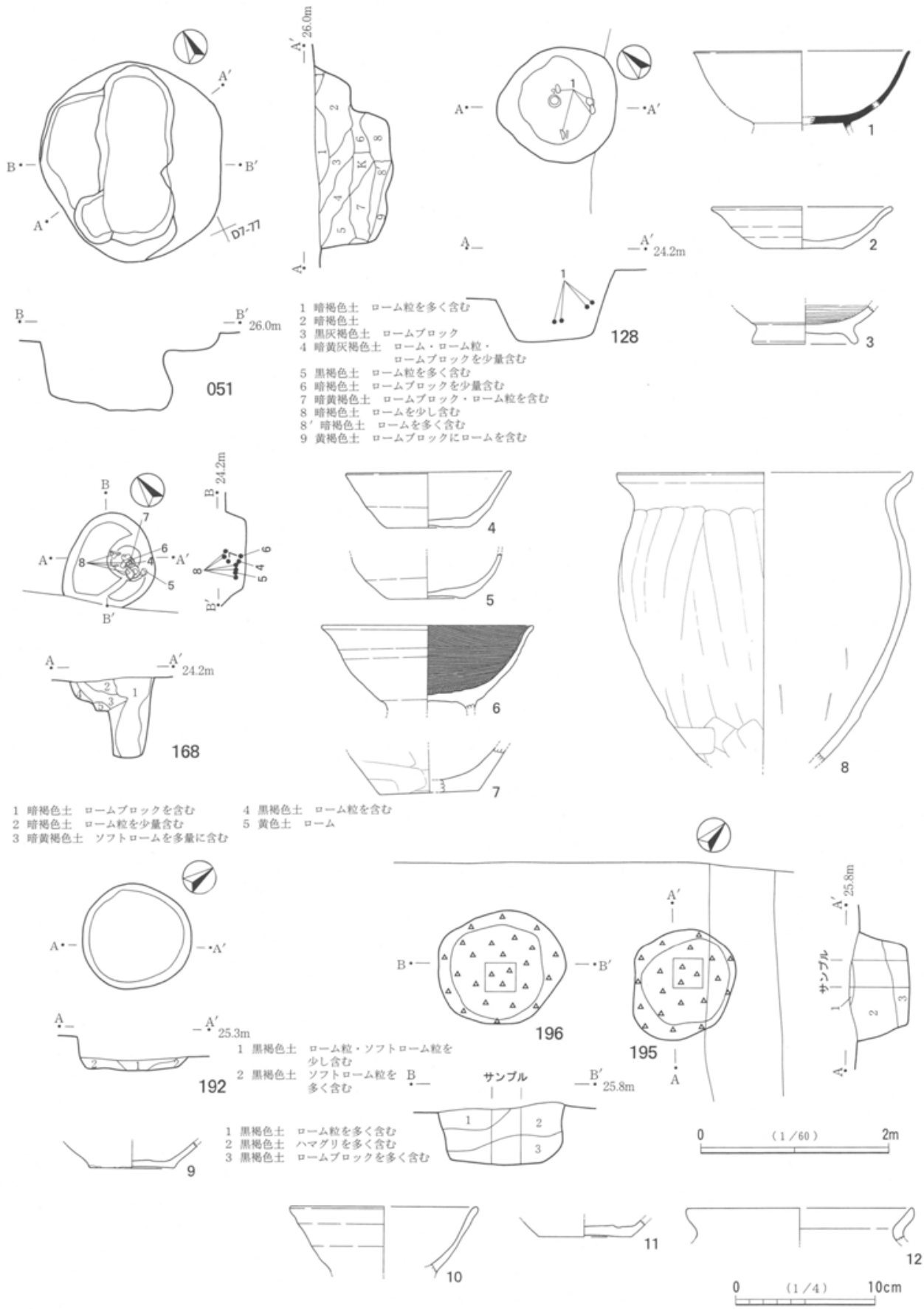
調査区のほぼ中央，Ｅ５グリッドに位置する。南西側が調査区域外にかかる。楕円形を呈すると考えられる土坑で，規模は短軸長0.94m・長軸長は現存で1.02mである。ほぼ垂直に15cm～26cm掘込まれ，底面は凹凸がある。この土坑の南東寄りに埋土上面からピット（径43cm×47cm，深さ87cm）が穿たれている。このピットの暗褐色土の埋土下層には，多量のロームブロックが混在している。土坑の埋土は，ローム粒やロームブロックを多く含む暗褐色土・暗黄褐色土・黒褐色土が混在する。遺物は，土坑底面から土師器杯・椀・甕が出土している。４・５は土師器杯である。ともに小形で，底部は回転糸切り無調整である。６は黒色土器椀である。口縁部がやや外反し，高台を欠損する。内面から口縁部外面の上半にかけての範囲が黒色処理されているが，ミガキは雑である。７・８は甕である。８は口縁部が外反し，体部上位に最大径をもつ。体部はヘラケズリで調整されている。

192（第209図）

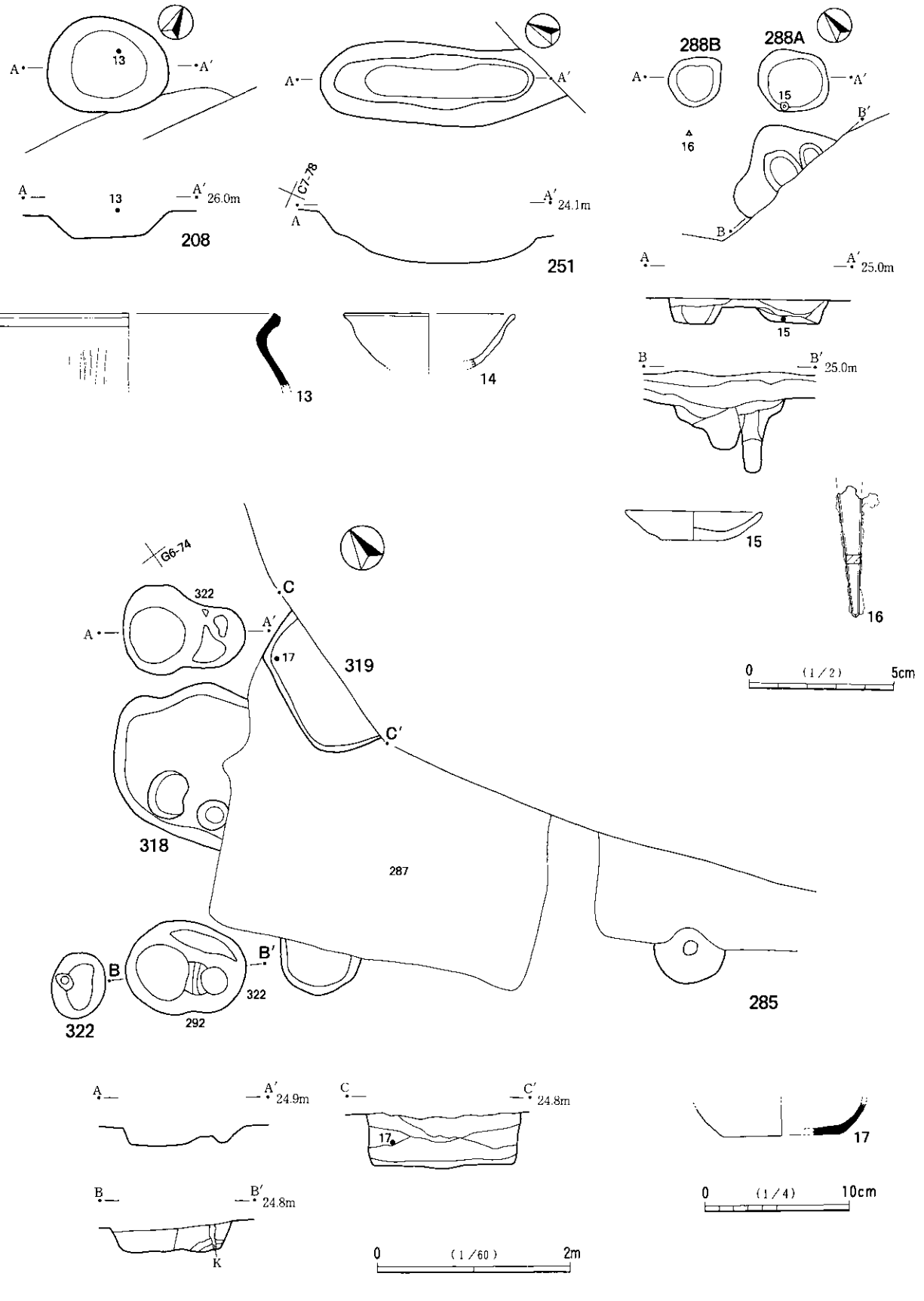
調査区の東，Ｅ７グリッドに位置する。同時期の住居跡199Ａの南西側に設けられている。円形の土坑で，規模は径1.15m×1.17m，深さは37cmを測る。緩やかに掘込まれ，底面は平坦に広くつくられている。埋土は，ローム粒を多く含む黒褐色土が堆積している。遺物は，９の土師器杯が埋土中から出土した。

195（第209図）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。北東側で溝状遺構193と重複する。貝類が充満した土坑で，同様の土坑195は南西側0.8mに隣接する。平面形態は不整円形を呈し，南側が張り出し直線的な部分もある。規模は，径1.13m×1.33m，深さは51cm～59cmを測る。垂直に掘込まれ，底面はほぼ平坦である。埋土は，下層にローム粒・ロームブロックやハマグリを少量含む黒褐色土が堆積し，その上がハマグリを主



第209図　平安時代土坑(1)



第210図　平安時代土坑(2)

体とする混土貝層である。貝層サンプルは図のように30cm×30cm×5cmの単位で切り出し，分析結果を付章に記載した。遺物は少量で，10・11の土師器杯片が出土している。

196（第209図）

195の南西に隣接する貝類が充満した土坑である。平面形態は楕円形を呈し，規模は1.21m×1.36m，深さは57cm～63cmを測る。垂直に掘込まれているが，東側の底面付近では段をもつように緩やかになる。底面は平坦である。埋土は，195と同様の堆積状況を示しており，貝層のサンプルを同じ方法で採取した。分析結果は付章に記載した。遺物はわずかで，12の土師器甕が埋土中から出土した。

208（第210図）

調査区の北東，Ｅ７グリッドに位置する。住居跡197の北西壁の一部を削平して構築されている。不整楕円形を呈し，規模は径1.37m×1.68m，深さは33cmを測る。皿状に緩やかに掘込まれ，底面は平坦である。埋土中から13の須恵器甕の口縁部が出土した。

251（第210図）

調査区の北，Ｃ７グリッドに位置する。南側は調査区域外にかかり，溝状遺構252と重複する。平面形態は長楕円形で，規模は長軸長は現存で2.4m・短軸長0.8mである。長軸方向は緩やかに掘込まれ，底面は中央部が次第に低くなっている。中央部での深さは46cmである。遺物は，埋土中から土師器杯・椀・甕が出土しているが，図示できたのは14の土師器杯片である。

288Ａ・Ｂ（第210図，図版26・57・61）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。２基の土坑が並列し，土坑321（時期不明）が南側に隣接する。２基とも平面形態は円形を呈している。規模は，288Ａが径67cm×75cm・深さ15cm，288Ｂは径53cm×62cm・深さ13cmである。垂直に掘込まれ，底面は平坦である。土坑間には薄く焼土が堆積しているが，被熱されてはいない。埋土は，ローム粒を含む暗褐色土が主体である。288Ａの底面から15の土師器小皿が出土した。周辺からは16の鉄製品なども出土しており，上面に住居などが存在していた可能性が高い。15は小皿ＢⅡ類に分類したもので，浅い皿状を呈し口唇部はやや直立気味に立ち上がる。底部は回転糸切り無調整である。16は現存長4.5cm・幅0.9cm・厚さ3mmを測る。

318（第210図）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。319が東側に隣接する。古墳時代後期の住居跡287の北西壁やカマドの上面を削平して構築されている。重複する部分は，住居跡を先行して調査したため不明である。平面形態は，不整長方形を呈していたと考えられる。規模は，短軸長1.62m・長軸長は現存で1.37mである。ほぼ垂直に掘込まれ，深さは15cmである。底面は平坦で，南西側に２基のピットが位置しているが，本土坑に伴うものではない。遺物は，埋土中から須恵器杯片が出土しているが，図示できなかった。

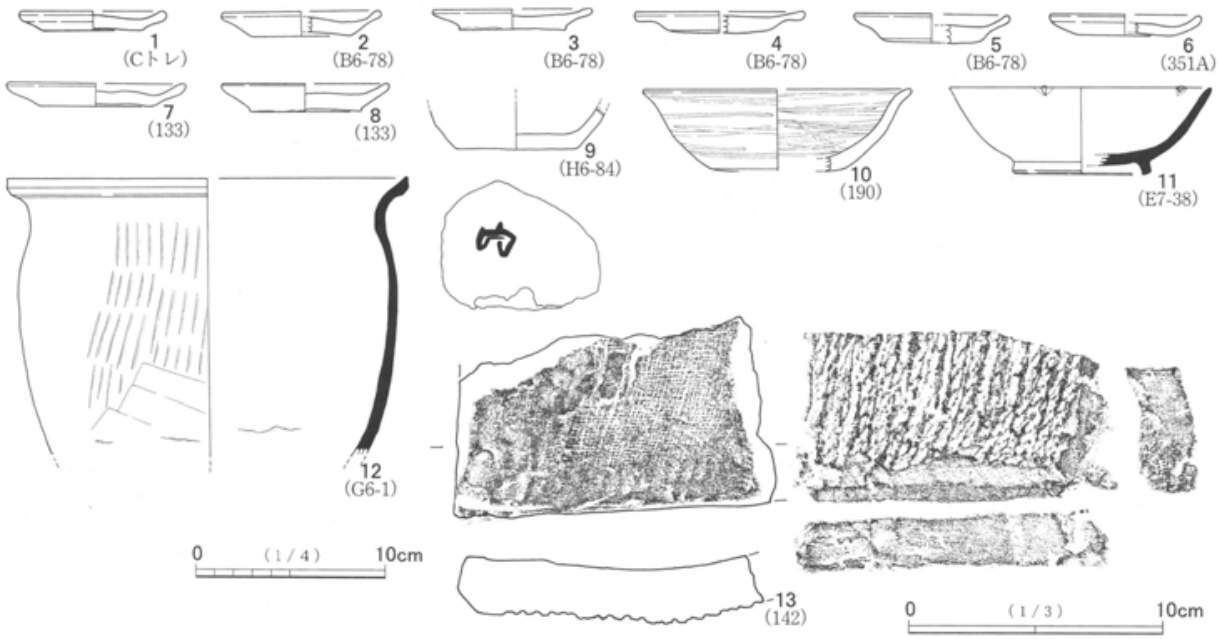
319（第210図）

318の東側に隣接し，287の北側を削平している。東側は調査区域外にかかり，西側1/2の調査である。平面形態は小判型を呈すると考えられる。規模は長軸長1.61m・短軸長は現存で0.6m，深さは16cmである。垂直に掘り込まれ，底面は平坦である。埋土には，ローム粒やロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積している。北西コーナー付近から，17の須恵器杯が出土した。

第３節　遺構外出土遺物

確認調査時や，遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する(第211図，図版57・59)。

１～８は土師器小皿である。器高が低い皿状の扁平な形態で，小皿Ａに分類した一群である。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整で，底部は厚くつくられている。口縁部は外反するものが多いが，４は水平に引き出されている。９・10は杯である。９は底部外面に墨書が書かれているが，判読不明である。11は緑釉陶器の輪花椀である。口唇部にヘラで押した輪花が残る。高台は角高台を貼り付けている。緑釉は全体に薄く，ハケ塗りで施釉されている。内面に爪跡が残る。猿投窯を中心とした東海地方の窯で生産されたものであろう。時期は９世紀後半と考えられる。12は須恵器甕である。13は平瓦である。外面に太い縄目が残り，内面には布目がつく。



第211図　遺構外出土遺物

第７章　中世以降

城ノ台遺跡は，西の生実城と東の有吉城の両城郭の中間に立地している。しかし，有吉城については発掘調査の結果，明瞭に中世まで遡る遺構は土坑や溝状遺構などに限定され，出土遺物も少ないことから，長期間にわたって重要な中世城郭として存在していた可能性は低いことが指摘されている(柴田1995)。また，生実城も主郭や堀・土塁などの遺構は確認できるが，発掘調査は行われていないので，明確な城郭構造や築城時期については推測の域を出ていないのが現状である。

本遺跡は，このような両遺跡に挟まれており，字名からみて城郭に関連する遺構が多く存在するものと考えられていたが，発掘調査の結果，台地の東側を中心に虎口・柵列・土塁や小規模な堀，曲輪の一部と考えられる粗雑に整地された平坦面などが，わずかに検出された程度である。簡易な普請の土塁も，台地の縁辺部に一部が確認されているにすぎない。狭長な範囲の限定的な調査ではあるが，台地上の平坦地には本格的な曲輪や建物跡等の施設は確認されず，中世の陶磁器類や銭貨などの遺物も少ない。以上のことから，城ノ台遺跡は「発掘成果と現状の構造から見る限り，極めて臨時的に築城され，かつ短期間の使用」であり，小弓公方足利義明が討死した天文７年(1538)の国府台合戦直後に築造された，北条氏が「小弓城を攻めるための拠点＝陣城であった」(柴田1995)という見解も有力な説の一つであろう。いずれにしても，本格的な中世城郭として長期間にわたり存在していた可能性は低いと考えられる。このようなことから，本章では検出された遺構と遺物について述べるにとどめたい。

また，遺跡内から検出された溝状遺構については，部分的な調査のため本来の形態や連続性が判然とせず，時期も特定できない遺構がほとんどである。台地上で各時代の集落の区域や各遺構を区画するもの，中世城郭に伴うものも含まれている可能性もあるが，本章でまとめて報告することとした。

なお，遺跡内に所在する出羽三山供養塚である通称「城ノ台行人塚」は，第１章第１節で述べた経緯で移築のための発掘調査が行われた。その成果も本章で報告する。

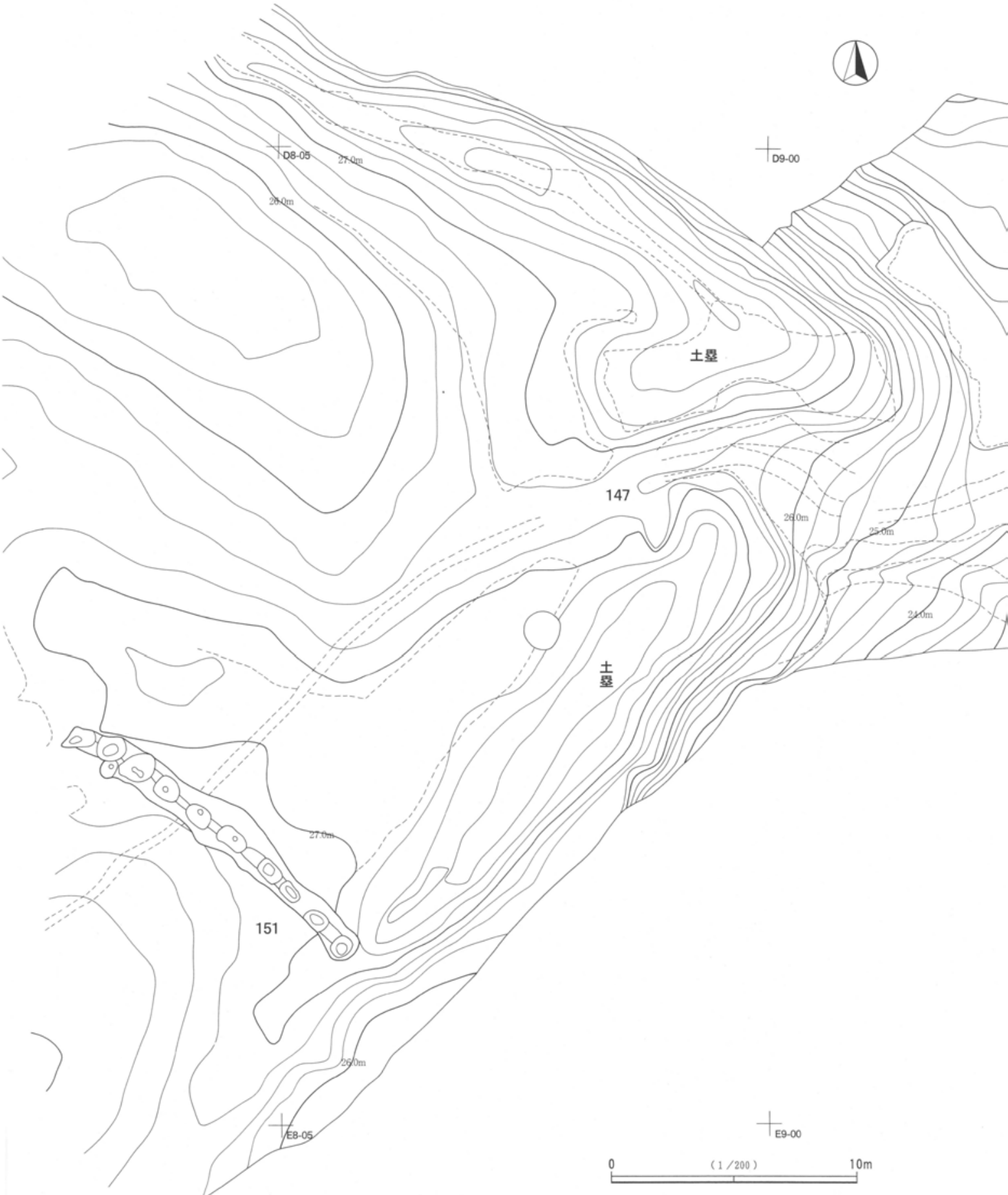
第１節　検出された遺構

１　虎口

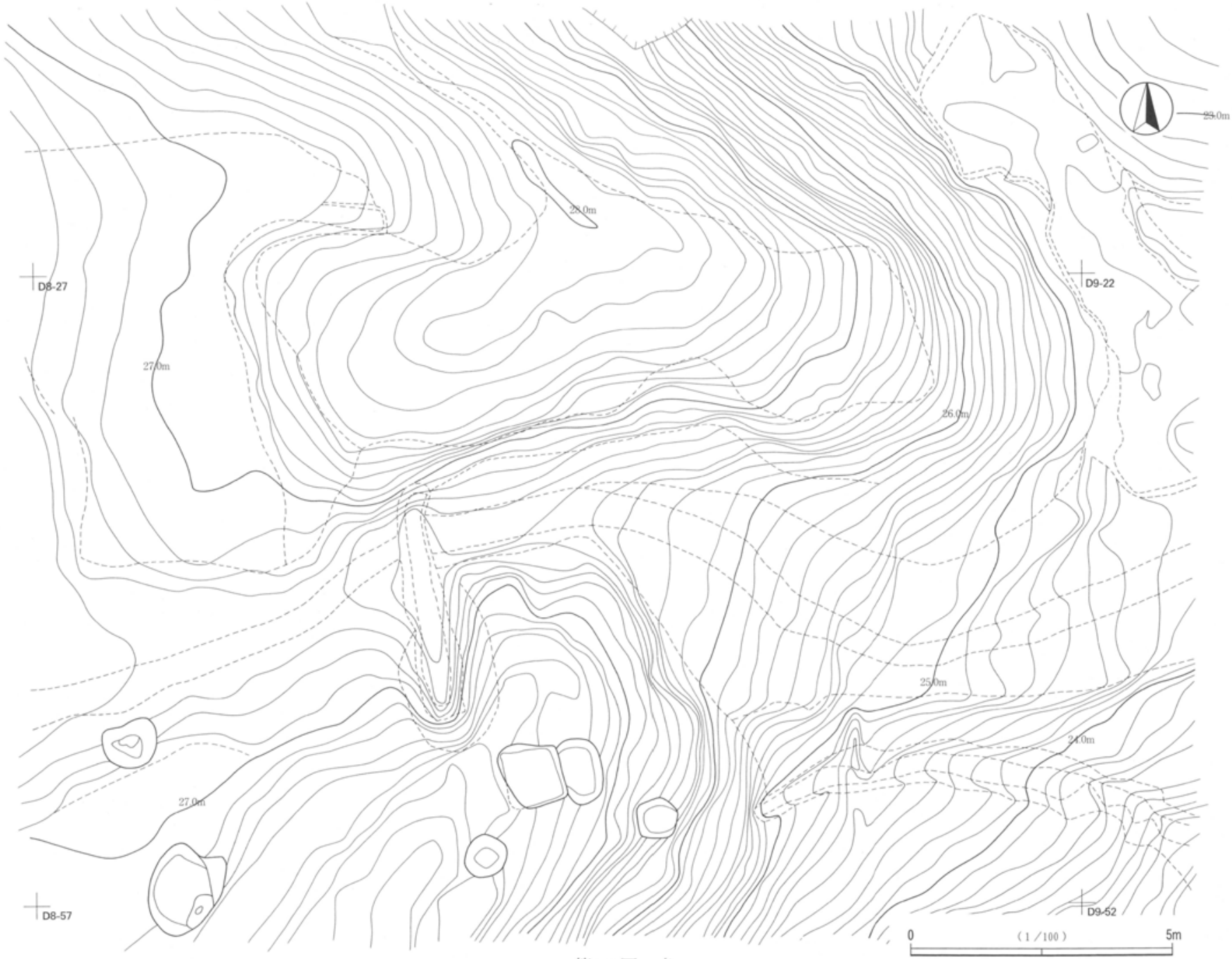
147（第212・213図，図版27）

調査区の東端，Ｄ８グリッドに位置する。台地の周囲は急峻な斜面になっており，台地との連絡はこの箇所に限定され，城郭の構造上，重要な位置を占めている。東側の有吉城へは細尾根が連続しているが，そのなかでも南北からの小支谷が最も迫った細尾根から台地上への登り口に設けられている。有吉城側から遺跡内への出入口にあたり，標高は27ｍである。虎口の両側には土塁が設けられ，台地の縁辺に沿って延びているが，台地の周囲全体を囲うまでには構築されていない。

遺構は，両側を土塁に挟まれた通路部分を中心に，城郭の出口部分(東側)と入口部分(西側)に大きくわけられる。主軸方位をほぼ東西方向にとる。出口部分は，現在も道として使用されており，有吉城側からは細尾根を通って急斜面を登り，やや北西に屈曲した緩斜面上に設けられている。ハの字状に大きく開いており，幅5.2ｍ・奥行4.0ｍを測る。北側の土塁は東側に大きく張出しており，有吉城側から城郭の内部へは直線的に進入できない食い違うような構造になっている。これに続く通路部分は，両側を土塁に挟ま



第212図　虎口周辺全体図


D8-27
D9-22
D8-57
D9-52
28.0m
27.0m
26.0m
25.0m
24.0m
27.0m
23.0m
0
(1/100)
5m

第213図　虎口

れて狭くなっており，長さ9.0m・幅は1.4m～1.9mである。北側は直線的で，高さ1.2mの土塁が迫るようにつくられている。通路部分の西寄りからは，南側の土塁の一部を削り込んで，南北に掘込まれた浅い溝状(長さ4.6m，幅上辺0.6m～0.9m・下辺0.3m～0.5m，深さ14cm前後)の施設が検出された。ここでは「門」にあたる遺構は検出されていないことから，戸のような開閉のための簡易な施設が設けられていた可能性が考えられる。あるいは，一文字虎口のように遮蔽物を設けるための施設であったことも想定される。南側の土塁(高さ1.0m)では，この開閉施設の出口側が方形に形成され，幅が最も狭くなるが入口側では開き気味になっている。入口部分は土塁の立上がりも弱く，幅は通路で2.0m前後であるが，城郭の内部へすすむに従って幅を次第に広げている。

虎口の南北に位置する土塁は，台地の縁辺に沿って一部が遺存している。北側の土塁は，現状で長さ28m，幅3.1m～4.5m，高さは0.6m～0.7mである。虎口付近では，5.3m×12.5mに東西に長くつくられ，通路部分を圧迫するように迫っている。南側の土塁は，現状で長さ23.5m，幅4.5m～5.5m，高さは0.6m～0.9mである。土塁は旧表土(黒暗褐色土)の上に，暗褐色土を主体とする土層やローム粒や焼土粒を含む黒色土などを積み上げて築造している。土塁の外側に堀は検出されていないので，調査区南端の274との関連性は弱いと考えられる。

2　柵列

151（第212図）

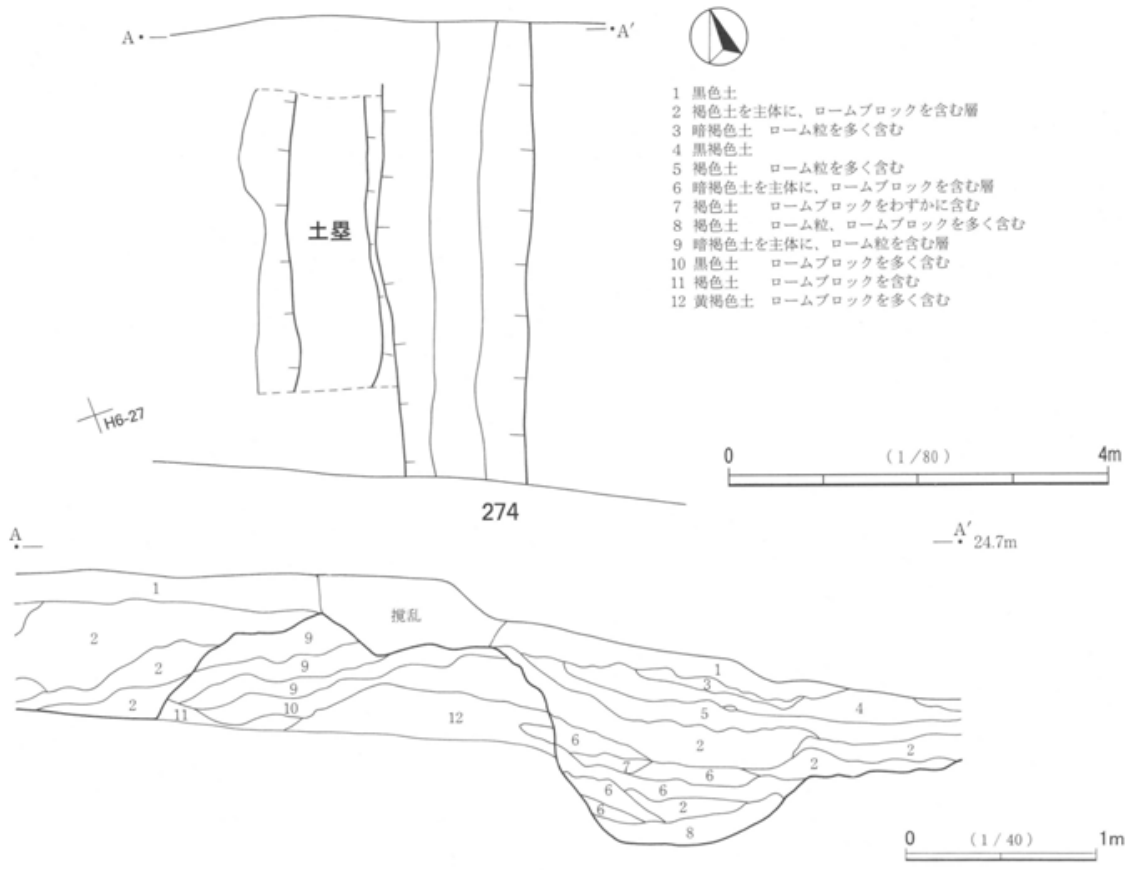
調査区の東端，Ｄ８グリッドに位置し，南側の土塁の南西端に直交するように設けられている柵列である。現状での長さは14.6m，幅0.95m～2.10m，深さは4cm～36cmを測る。中央部で大きく幅を広げているが，平均的には1.2m前後である。底面には10個の長楕円形または長方形のピット(径0.8m～1.5m，深さ24cm～40cm)が直線的に配置されている。ピットの間隔は不統一で，中央部は50cm前後の間隔であるが，北側では20cm前後と狭くなっている。

3　土塁，堀

274（第214図）

調査区の南端，Ｈ６グリッドに位置する。南北の両側は調査区域外にかかり，園路の幅5mの部分的な調査である。堀の内側に土塁が築造されている。東側は緩斜面に位置しており，台地の縁辺部に沿って構築され，北東方面まで延びていたと考えられる。

堀は，調査区内では南北に直線的に延びている。規模は，上端幅1.28m～1.62m・下端幅0.42m～0.56m，深さ20cm～32cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁の立上がりは，外側は緩やかであるが内側では土塁に向かい角度をもって立上がっている。土塁は堀に沿って構築され，規模は現状で下端幅1.18m～1.44m・上端幅0.76m～0.88m，高さは60cm前後である。堀の底面からの高さは，現状で78cm～86cmを測る。盛土は，ハードロームブロックやソフトロームを主体とする黄褐色土を堀側に積み上げ，その上に堀を掘削した際のソフトローム粒を多く含む暗褐色土・黒色土・褐色土を交互に積んで，土塁を構築している。本来は，堀の底面から土塁までの比高は1.5m以上であったと思われる。堀の幅も狭く，土塁の構造も簡易なつくりであることから，中世城郭の本格的な遺構とは判断できない。



第214図　土塁，堀

第２節　溝状遺構

調査区の全域から検出されているが，調査範囲が狭長で限定的なため，その性格や用途については不明な点が多い。形態や方向性も様々であり，なかには集落の区域や遺構を区画するものや，土器生産に伴うもの，中世城郭の普請によるものなどもあると思われるが，ここに一括して掲載する。出土遺物も，覆土中からのものがほとんどであり，遺構への帰属は判然としない。時期的には古墳時代から中世までの遺構が含まれることになるが，代表的な溝状遺構を取り上げて報告する(第215図～217図)。

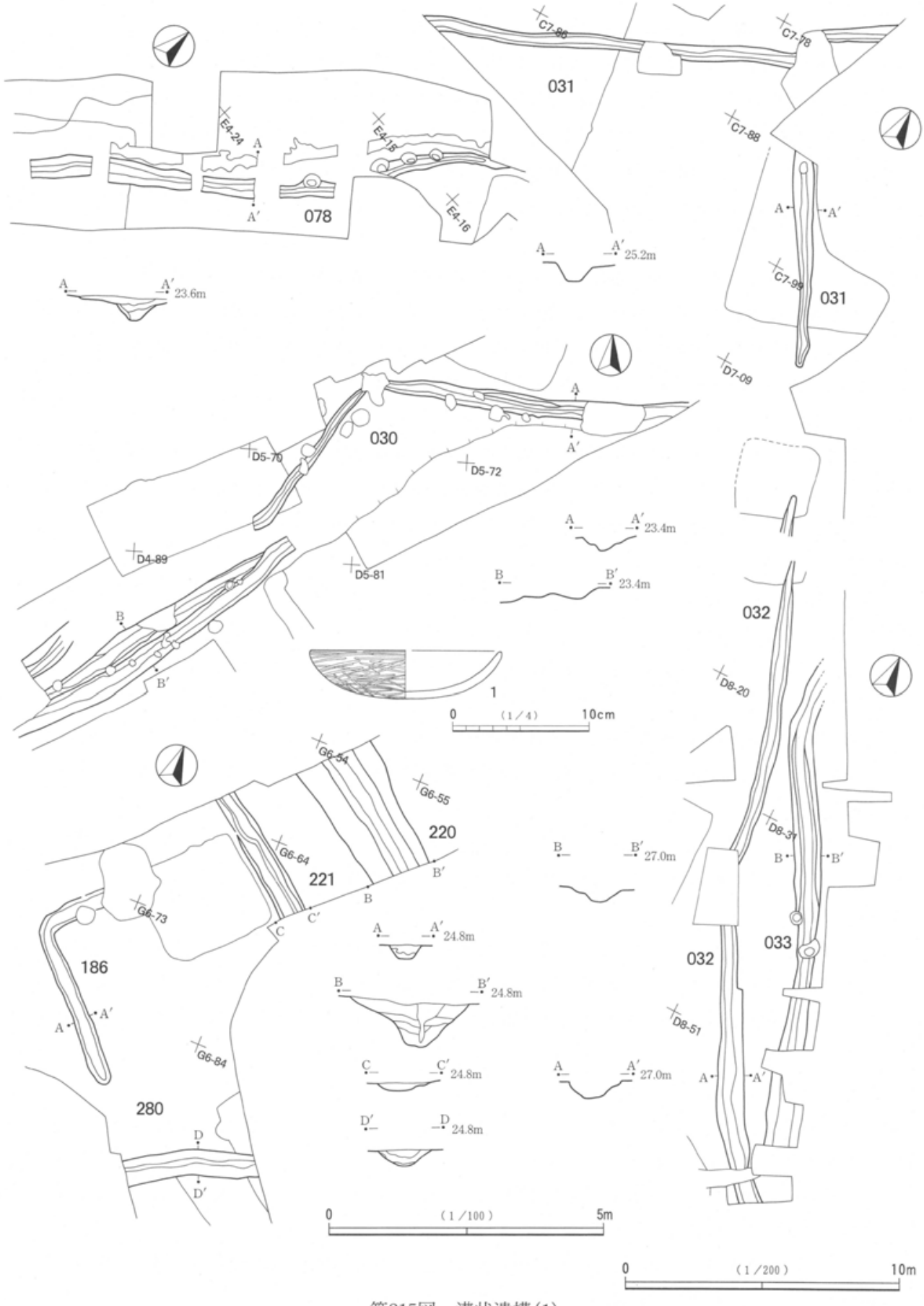
030(第215図)

調査区の北西，Ｄ４・Ｄ５グリッドに位置する。台地縁辺部に沿って走る連続しない２条の溝であるが，遺構番号は030とした。北側の部分は，台地整形と思われる斜面のなかを，南西から北東方向に延びてから屈曲して東方向へ走る。現状で長さ18.1m・幅0.2m～0.7mを測る。掘込みは浅く，25cmである。南側の部分は，配置からみて078と連続する可能性もある。斜面側は削平され，やや平坦な部分もある。現状で長さ12.1m・幅0.6m～1.6mを測る。深さは20cmである。覆土中から土師器杯(１)が出土した。

031，032，033（第215図）

調査区の東，Ｃ７・Ｄ７・Ｄ８グリッドに位置する３条の溝で，併行あるいは直交する溝もある。

031は南西から北東方向に走る北側部分(現状で長さ13.3m・幅0.5m・深さ10cm)と，南東から北西方向に走る東側部分(現状で長さ7.8m・幅0.3m～0.9m・深さ72cm)からなる。交差する位置に他の遺構が重複しているため，連続性は確認できていない。調査範囲内では直線的に走り，北側の掘込みは浅く緩やか


C7-86
C7-78
031
C7-88
E4-24
E4-15
078
E4-16
A
A′
25.2m
23.6m
C7-98
031
D7-09
030
D5-70
D5-72
D4-89
D5-81
23.4m
B
B′
032
1
0 (1/4) 10cm
D8-20
G6-54
G6-55
220
G6-64
221
G6-73
C
C′
27.0m
D8-31
033
032
186
24.8m
D8-51
G6-84
280
D
D′
0 (1/100) 5m
0 (1/200) 10m

第215図　溝状遺構(1)

であるが，東側では逆台形に掘込まれている。覆土から土師器杯片が出土した。

032は南東から北西方向に走る溝で，031の東側部分と途中で途切れるが連続する可能性がある。現状で長さ21.4m・幅0.4m～1.0mを測る。調査範囲では緩やかな曲線的な部分もあるが，全体に直線的に走る。逆台形に掘込まれ，深さは北側では20cmと浅いが，南側に進むに従って61cmと深くなっている。

033は032に併行する溝であるが，北側で北東方向に屈曲する。現状で長さ17.6m・幅0.6m～1.0mを測る。掘込みは全体に緩やかで，深さは30cm前後である。出土遺物は少なく，図示できるものはない。

078（第215図）

調査区の北西，Ｅ４グリッドに位置する。台地縁辺部に沿って南西から北東方向に走る溝で，古墳時代後期の住居跡を削平している。斜面側で台地整形の一部を確認し，溝に沿って硬化面も検出されており，中世の普請に伴う遺構の可能性もある。現状で長さ17.2m・幅0.3m～0.9mを測る。逆台形に掘込まれ，深さは45cmである。出土遺物は少なく，図示できるものはない。

186（第215図）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。平面形態は方形周溝になる可能性もあるが，北東側と南東側で検出されていないため，溝として記載した。南西側の溝（長さ6.5m・幅0.5m～0.7m）は西側で屈曲し，北西側の溝に連続する。逆台形に掘込まれ，深さは25cmである。出土遺物はない。

220，221（第215図，図版26）

220は調査区の南，Ｇ６グリッドに位置する。南東の台地の縁辺部から，北西方向の台地中央に向かって走る，比較的幅の広い溝である。部分的な検出ではあるが，土塁を伴わない堀の可能性もある。現状で長さ4.9m・幅2.4m～2.8mを測る。逆台形にしっかり掘込まれ，深さは85cmである。覆土中から流れ込んだ須恵器杯・椀などが出土しているが，図示できるものはない。

221は，220の南西2mの位置に併行して走る溝である。現状で長さ5.0m・幅0.7m～0.9mを測る。掘込みは緩やかで，深さは15cm程度である。覆土上層から須恵器蓋片が出土している。

280（第215図）

調査区の南，Ｇ６グリッドに位置し，南西から北東方向に走る。現状で長さ4.8m・幅1.0mを測る。緩やかなＶ字形に掘込まれ，深さは30cmである。覆土上層から陶器片が出土している。

117（第216図）

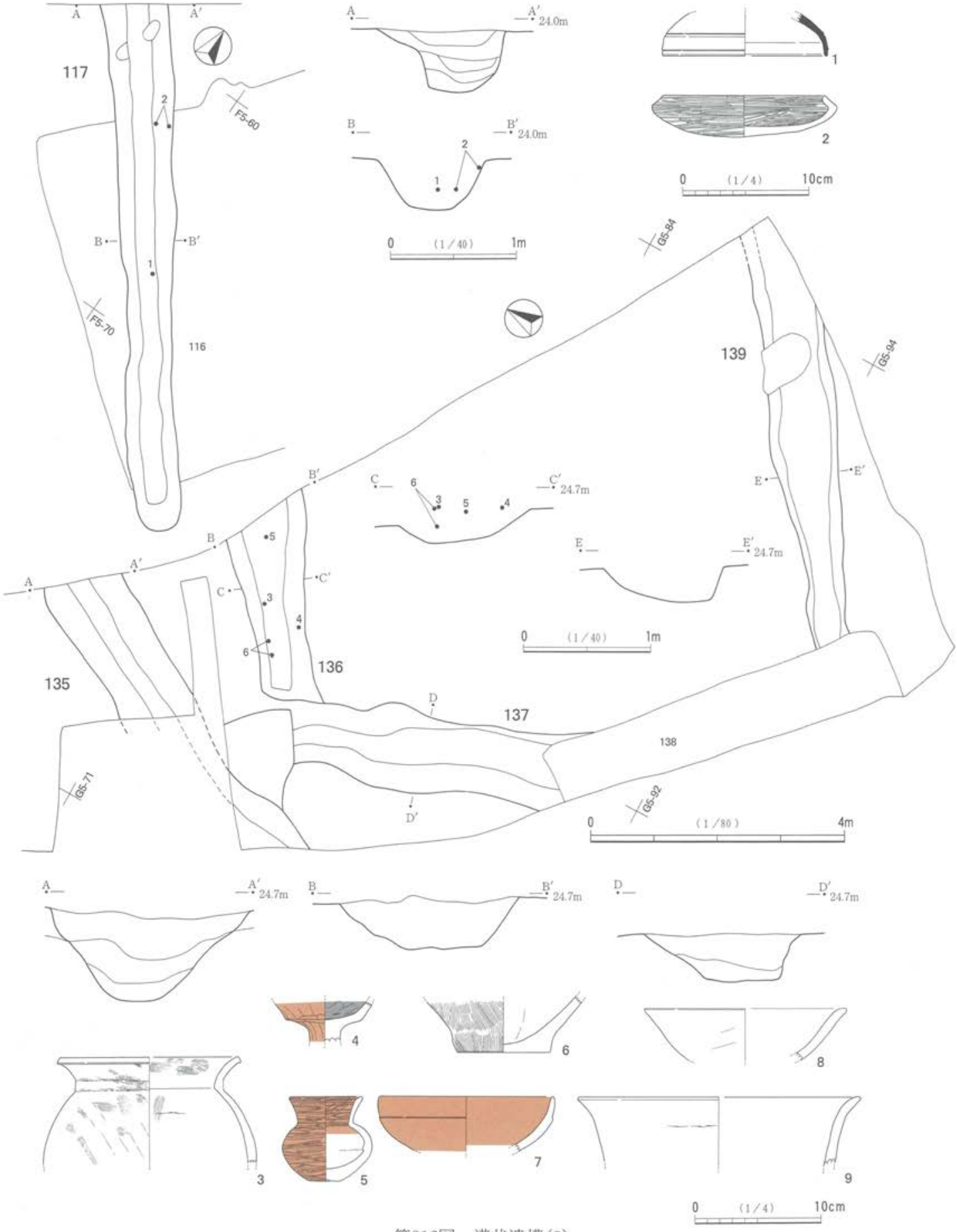
調査区の南西，Ｆ４・Ｆ５グリッドに位置し，南東から北西方向に走る。ほかの調査区内では，連続する同一の溝は確認されていない。古墳時代後期の住居跡116を削平している。現状で長さ8.3m・幅0.7m～1.1mを測る。逆台形に掘込まれ，深さは50cmである。覆土中層から上層の範囲から，須恵器蓋（１）や土師器杯（２）が出土した。

135，136，137，139（第216図，図版57）

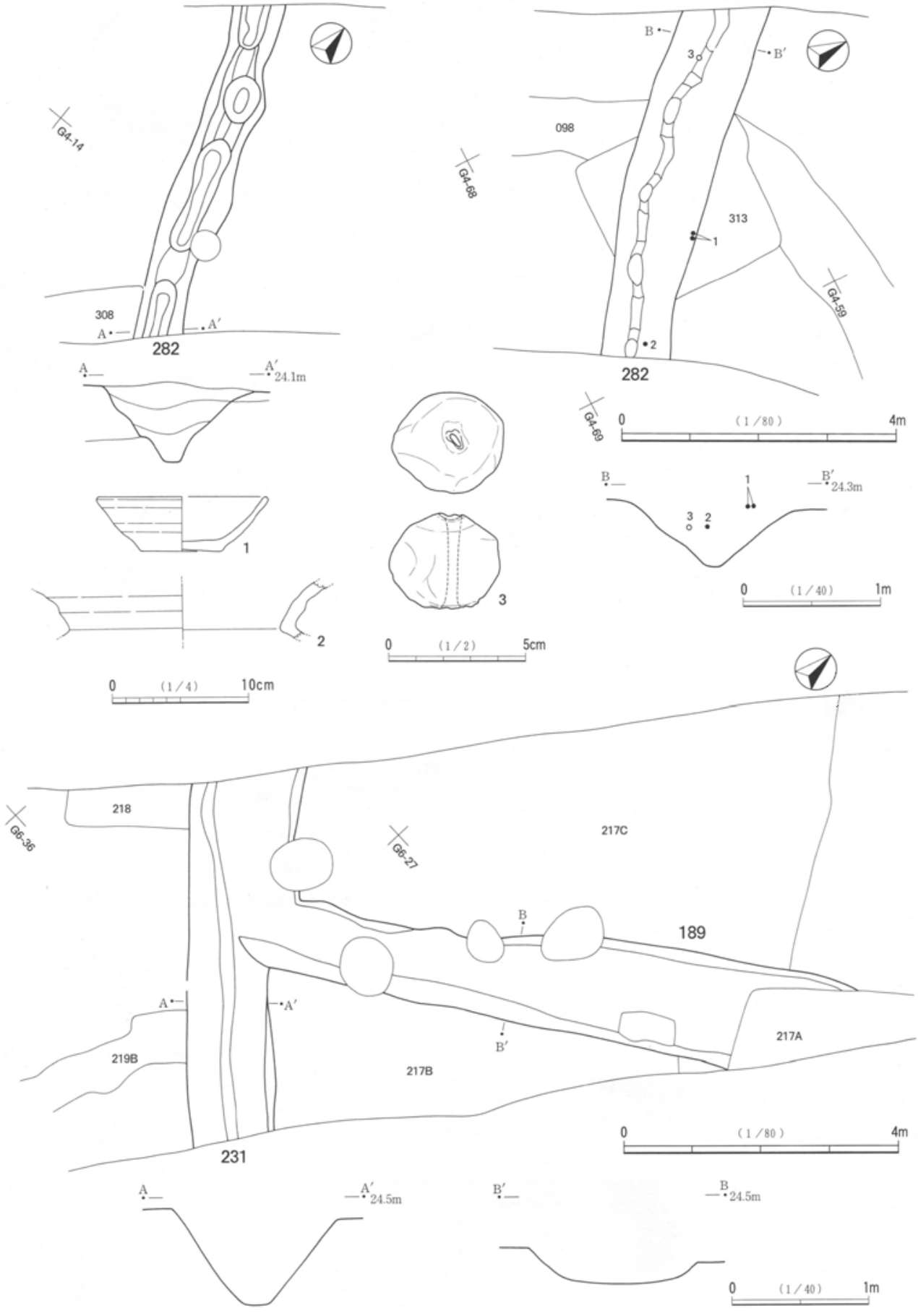
調査区の南，Ｇ５グリッドに位置する。137・139は，古墳時代中期の住居跡138と重複する。いずれも連続性は確認されていない。

135は南西から北東方向に走り，現状で長さ10.2m・幅1.2mを測る。逆台形に掘込まれ，深さは75cmである。覆土中から８・９が出土した。

136は137に接する浅い溝で，現状で長さ3.0m・幅0.8m～1.2mを測る。緩やかに18cm掘込まれている。出土遺物は多く，３～６が覆土中層から上層の範囲に出土している。


117
116
139
135
136
137
138
F5-60
F5-70
G5-84
G5-94
G5-71
G5-92
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
24.0m
24.7m
0 (1/40) 1m
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第216図　溝状遺構(2)


G4-14
308
A
A′
282
A
A′
24.1m
1
2
0 (1/4) 10cm
G4-68
B
3
B′
098
313
1
2
282
G4-59
G4-69
0 (1/80) 4m
B
1
B′
24.3m
3 2
0 (1/40) 1m
3
0 (1/2) 5cm
G6-36
218
G6-27
217C
B
189
A
A′
B′
219B
217B
217A
231
0 (1/80) 4m
A
A′
24.5m
B′
B
24.5m
0 (1/40) 1m

第217図　溝状遺構(3)

137は南北方向に走る溝で，現状で長さ4.0m・幅1.0m～1.4mを測る。掘込みは，場所により緩急の差はあるが，ほぼ逆台形である。深さは60cmで，底面は平坦である。

139は136に併行して走る浅い溝で，現状で長さ6.7m・幅0.6m～1.1mを測る。緩やかに掘込まれ，深さは54cmである。７の土師器杯が覆土中から出土した。

282（第217図，図版60）

調査区の東，Ｇ４グリッドに位置する。調査地点は異なるが，断面の形態や溝底面のピット列が類似していることから，連続性のある同一の溝状遺構であると判断した。台地の縁辺部に沿って走るが，ほかの調査区域では検出されていない。南側では平安時代の住居跡313を削平している。北側は現状で長さ5.1m・幅0.6m～0.9mを測る。Ｖ字状に55cm掘込まれ，溝底面には連続して長楕円形や楕円形のピットが設けられている。南側は現状で長さ5.3m・幅1.0m～1.2mを測る。50cm掘込まれ，溝底面は細く浅いピットが連続する。覆土は黒色土を主体に暗褐色土が混在する。南側の覆土中層から上層にかけての範囲に，土師器杯（１）・甕（２）や土玉（３）などが出土した。３は径4.0cm・高さ3.5cm・孔径4mm～6mmを測る。

189，231（第217図）

189は調査区の南東，Ｇ６グリッドに位置する。奈良時代の住居跡217Ｂを削平し，西側で溝状遺構231と重複する。南西から北東方向に走る浅い溝で，現状で長さ8.3m・幅1.0m～1.6mを測る。緩やかに25cm掘込まれ，底面は平坦である。出土遺物は少なく図示できるものはない。

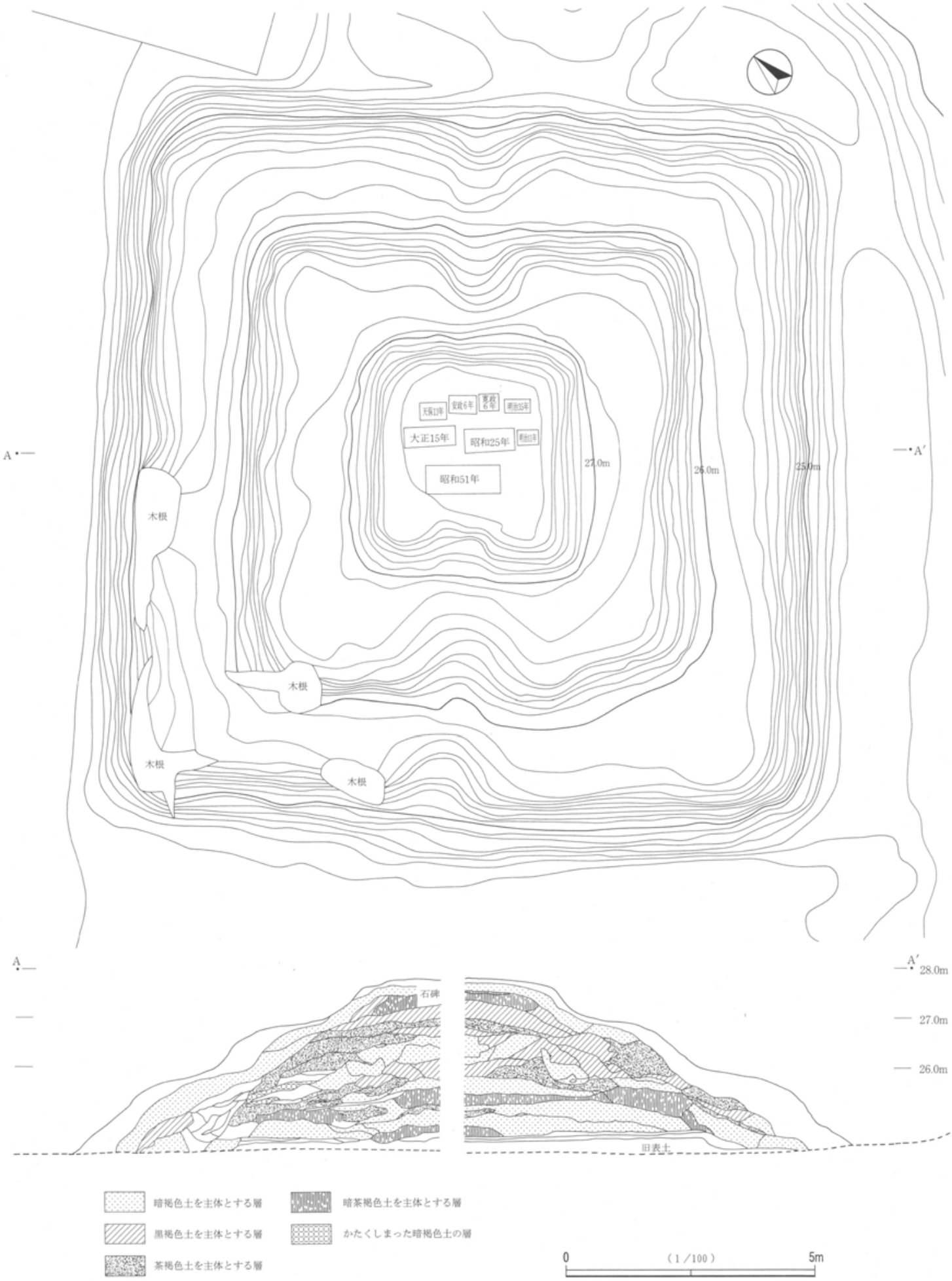
231は南東から北西方向に走り，Ｖ字状に70cm掘込まれている。現状で長さ5.3m・幅1.2m～1.6mを測る。溝底面は細く，やや屈曲しながら続いている。出土遺物はない。

第３節　城ノ台行人塚（第218図，図版28）

位置と現況　調査区中央のやや南西寄り，F5グリッドに位置する。標高24.5mの台地の平坦部に構築されている。出羽三山供養塚で，南西側は段差をつけた簡易な階段が設けられ，頂部には寛政６年(1794)から昭和51年(1976)までの８基の供養碑が建てられていた。北東側にも同様の階段が設けられていたようであるが，供養碑の裏側にあたり現在では使われていない。塚に植えられた樹木により，段が部分的に崩れている箇所もあるが，遺存状態は良好である。なお，この塚の沿革や民俗誌等については，「古城小弓遺跡」（伊藤2003）に詳しく述べられている。それによれば，上総・下総地域では出羽三山に登拝する人々を行人とし，登拝の記念碑を建てる塚を「行人塚」と呼ぶという。今回の公園整備に伴い，この塚を南生実町にある通称「天神山の塚」（古城小弓遺跡）に還座し，平成７年４月２日に開山供養が盛大に行われた。

頂部に建てられていた８基の供養碑の位置と紀年銘は，正面に昭和51年(1976)10月31日，その後に３列に並んで向かって左から順に，大正15年(1926)３月３日・昭和25年(1950)４月９日・明治11年(1878)４月５日，さらにその奥には４列に並んで向かって左から順に，天保13年(1842)３月吉日・安政６年(1859)３月８日・寛政６年(1794)９月13日・明治35年(1902)４月８日，である。還座後も出羽三山への登拝は行われており，江戸時代後期から現在まで210年余りにわたって，この塚での供養は継続している。

形態と規模　方形の三段築成の供養塚である。下段裾部での規模は14.8m×16.0mを測り，階段をもつ北東－南西方向がやや長く構築されている。現地表面からの高さは3.6mであるが，旧表土面からは3.2mの高さとなる。長軸方向はN-48°-Eである。下段の高さは1.6mである。中段裾部は9.3m×9.5mで，南側裾部の階段側はやや形を崩している。高さは1.1mである。最上段は，裾部5.0m×5.1m・頂部3.4m×



第218図　城ノ台行人塚

3.5mと小さくつくられ，高さも0.9mと低くなっている。各段の平場はわずかに傾斜があり，段の肩部は崩れて丸みをもつ箇所もある。

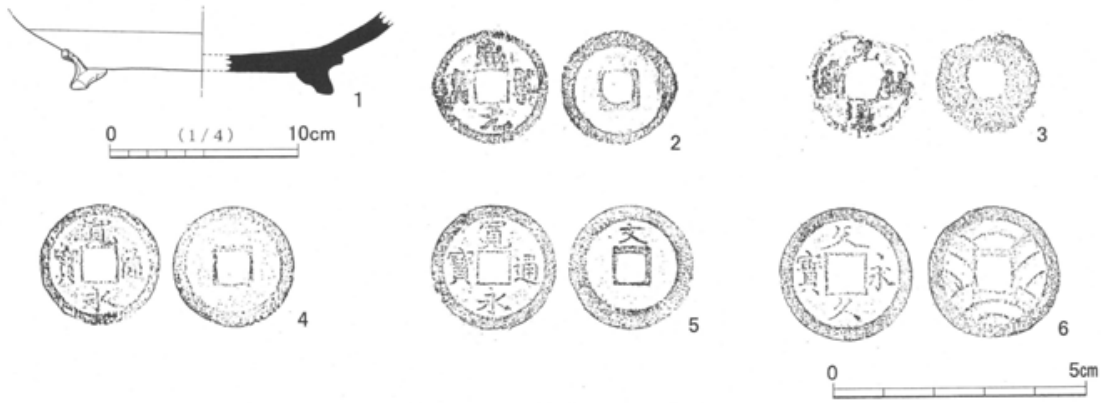
盛土の状況　塚の築成は，まず旧表土層の中央部に暗茶褐色土や暗褐色土を交互に積み上げ，基礎になる下段を形成する。固く締まった土層が部分的にセクションに見いだせることから，盛土を突き固めながら作業を進めていったと考えられる。中段や最上段では黒褐色土が主体となり，暗褐色土や暗茶褐色土を混在しながら積み上げている。最後に，暗褐色土や茶褐色土で全体を覆い，形を整えている。

出土遺物　周辺の土を寄せ集めて盛土を行ったため，各遺構の遺物が盛土内から出土している。これらの遺物は，各時代の章のなかの遺構外出土遺物の節で説明する。

第４節　遺構外出土遺物

確認調査時や，遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する(第219図，第11表，図版59)。

１は瀬戸大窯期の大皿である。指頭で貼り付けた脚が，３か所に付けられていたと考えられる。底部外面に墨痕が残る。２～５は銭貨である。２・３は北宋銭で，２は熙寧元寶(真書)，３は元祐通寶(行書)である。４・５は寛永通寶である。５は新寛永で，背に「文」の文字がみえる。６は文久永寶である。「文」と「寶」の書体から，いわゆる「草文の類」であろう。



第219図　遺構外出土遺物

第11表　銭貨計測表

番号	銭種	書体	初鋳年	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)	出土遺構	備　考
	延喜通寶		907年	1.37	18.80	14.50	7.60	5.60	1.50	1.10	277	第189図5
1	熙寧元寶	真書	1068年	2.22	23.90	18.90	7.30	6.00	1.20	0.60	D8-38	
2	元祐通寶	行書	1086年	1.85	21.60	18.80	8.30	6.90	1.30	1.10	E4-15	
3	寛永通寶			2.10	24.50	19.80	7.80	7.00	1.10	0.60	D6-20	
4	寛永通寶			2.57	25.30	20.50	7.10	6.30	1.30	0.60	C9-83	新寛永
5	文久永寶	草文	1863年	3.57	26.90	21.20	8.40	7.50	1.20	0.80	塚	

参考文献

柴田龍司　1995　「二つのおゆみ城－小弓城と生実城－」『千葉いまむかし』第八号　千葉市教育委員会

伊藤智樹　2003　「古城小弓遺跡」『千葉東南部ニュータウン26』　(財)千葉県文化財センター

第８章　まとめ

城ノ台遺跡の調査は，狭長な調査範囲のため限定的に行われたが，旧石器時代から中世までの遺構・遺物が多数検出され，各時代の豊富な資料を提示することができた。ここでは，その中から特に注目される土師器焼成坑を中心とした古代末期における土器生産の様相について考察し，まとめとしたい。

１　粘土採掘坑と土師器焼成坑

城ノ台遺跡の調査成果の一つは，台地北東側を中心とした区域から，粘土採掘坑と土師器焼成坑が検出され，本遺跡が比較的規模の大きな土器生産遺跡である可能性が明らかとなったことである。ただし，ロクロピットを伴う工房は不明で，土器生産工程の重要な要素である成形の実態は判然としない。また，黒色土器が大量に出土した地下式土坑も粘土採掘坑の周辺から検出されている。焼成坑は確認できなかったが，周辺に黒色土器の焼成坑が存在していた可能性は高い。このように，土器生産に係わるすべての工程の遺構は検出されていないが，古代末期の様相の一端が明らかになったことは大きな成果といえよう。

粘土採掘坑　土器生産工程の第１は，土器の素地になる良質の粘土を確保することである。原材料である粘土は，台地上に堆積している粘土層を採掘することによって採取される。この粘土層は，東京軽石層（ＴＰ）の下位に堆積している常総粘土層で，火山灰が粘性化した粘土層を主体に構成され下部に細砂層を含んでいる。東南部地区のムコアラク遺跡周辺では，法面に現れた層厚約2mの常総粘土層が確認されている。本遺跡の粘土採掘坑は，台地の北端で北側に舌状に張出した部分の東側縁辺部（270・270Ｂ）と，この張出した部分の基部の西側で北向きの緩斜面上（173・348～350）の２か所で検出された。狭長な範囲の調査のため全体の様相は不明であり，採掘の方法などは明らかではない。周辺の遺跡では，台地の斜面側から台地側に向かって水平に掘削する方法と，緩斜面の肩部付近から垂直に掘込んで斜面を抉り込むように掘り進む方法が確認されている。いずれも掘り当てた粘土層を採掘しながら掘り進んでいる。

本遺跡で検出された採掘坑のうち北西に位置する173や348は，斜面側から台地側に向かって雑然と掘削している様子がわかる。特に173では，北側の斜面から水平に掘込み，さらに粘土層を求めてＡ～Ｃの３方向に大きく掘り進み，部分的に抉り込んでいる箇所もある。348も北側から南側へ掘込んでおり，この２基の採掘坑は斜面側では連なっており，並行して作業を進めていたと考えられる。349は斜面には面しておらず，台地平坦面に位置している。台地側が調査区域外にかかっているため，全体の形状は不明であるが，東側は段を形成しながら掘削されている。斜面側からではなく，台地上から掘下げられた可能性が高い。東側で斜面側から掘削された173Ｃと重複し，その上面を削平している。349は，ほかの採掘坑との連続性は不明であるが，単独の採掘坑であろう。この新旧関係で見る限りでは，斜面側からの掘削後に台地平坦面の採掘が行われたと考えられる。安全対策上，粘土を掘削した基底面までは掘り下げていないが，常総粘土層の下位までは掘削したものと思われる。

これに対し，北端の270・270Ｂは円形の採掘坑が遺存し，形態からは北西の採掘坑よりは比較的整然と掘削されていることがわかる。台地縁辺部から平坦面にかけて位置しており，斜面側の状況が不明のため採掘の方法は断定できないが，斜面側からの掘削だけではなく，台地上から垂直に掘下げられた可能性も考えられる。この掘削により粘土層を掘り当てた後は，さらに周辺を抉り込みながら採掘を進めている。この採掘坑では粘土層まで検出できたが，まだ下部に粘土は堆積しており十分に掘り尽くしてはいない。

粘土は良質の白色粘土であり，土器製作の素地としては十分な素材である。

南側採掘坑の基底面直上からは，杯や足高高台付椀などがまとまって出土しており，何らかの行為が行われた可能性が高い。東京都八王子市の南多摩窯跡群(服部ほか1992)では，採掘坑に完形の須恵器甕などが意識的に置かれたような状態で出土しており，粘土採掘後に祭祀的な行為が行われたことを示唆している。本遺跡では，何らかの理由で粘土の採掘を途中で中断することになり，白色粘土が露呈している基底面に土器類を置いて儀礼的な行為を行ったと考えられる。

出土した土器類のうち，足高高台付椀は破片であるが，口縁部が大きく外反する形態である。これらの土器は，おおよそ10世紀末から11世紀前半を中心とした時期が想定できよう。北端の粘土採掘坑は，この時期までは採掘を行っており，周辺の土師器焼成坑との密接な関連性を窺い知ることができる。

土師器焼成坑　粘土採掘坑で採取された粘土は，水と十分に捏ねられて可塑性に富んだ均質の素地に仕上げられる。素地は一時的に保管され，必要に応じた形に成形される。素地の粘土がまとまって出土した小見川町妙見堂遺跡(中野ほか1989)では，「練りたて状態の粘土」が約６kgも集積していた。土器の製作にはロクロを使用する方法と，ロクロを使用せずに粘土紐などを巻上げるなど他の手順で器形を成形する方法がある。本遺跡では製作に関する遺構は検出されていないので，この工程についての様相は不明である。周辺では千葉市坂ノ越遺跡(倉田1993)などで，成形を行うためのロクロピットを伴う住居跡が検出されており，本遺跡でも同様の工房が存在していた可能性が高い。成形された土器は，十分に乾燥させてから焼成を行う。城ノ台遺跡ではこの工程の遺構として，６基の土師器焼成坑が検出されている。

分布は，台地の北端(256・259・289)，東側(049・056)，南端(320)に大別される。このうち，北端と東側では周辺に粘土採掘坑も存在しており，土器生産の中心的な区域を形成していたことがわかる。

全国的に土師器焼成坑(以下，焼成坑と略す)の分類を行った望月精司(望月1997)は，「焼成坑の機能面と焼成の違いを反映」している「被熱の痕跡と形態的特徴」から，焼成坑を３つの類型にわけている。このうちＢ類とした焼成坑は，「床面のみ被熱」され「被熱度合いは弱く，規模もやや小型のもの」が多くみられ，平面形態の特徴としては「円形を基調とし，直線的な面を形成しない」形態のものである。特に，壁面に被熱痕跡が見あたらないことが重要な要素となっている。県内８遺跡・145基の焼成坑を集成し，望月の基準に従って分類した半澤幹雄(半澤1997)によると，このＢ類は91%にも及び，県内の焼成坑の中心となっている。とりわけ，「焼成坑内に奥と手前の位置関係をもつⅠ類」が全体としては54.4%を占めているという。このＢⅠ類のなかでも，９世紀前半代では手前に張り出し構造をもつタイプや，被熱痕が偏在しているものが多く検出されている。それが９世紀末葉以降になると，妙見堂遺跡や袖ヶ浦市永吉台遺跡(豊巻ほか1985)などの焼成坑にみられるように，「奥と手前の位置関係がない」ＢⅡ類が増加する傾向が認められ，これは焼成坑が「構造の簡略化の方向へ進んだ結果」とみている。

以上のような，これまでの研究成果を踏まえ，比較的遺存状態の良好な焼成坑について検討してみたい。なお，類型については前述の望月分類の基準で行っている(第12表)。

049は被熱面が中央から北西寄りに偏在しているが，焼成は弱く壁面までは被熱されておらず，土坑の床面は広く平坦である，などの特徴をもつ。望月分類では，「一定した被熱箇所や被熱面をもたず，総体的に被熱度合いの弱い」Ｃ類のなかの，方形を基本とし「床の一部が被熱する」ＣⅠ２類の焼成坑となるが，被熱面が壁際まで偏在していることから「床と壁の一部が被熱する」ＣⅠ１類に近いタイプとも考えられる。生産器種として，供膳具の小皿・黒色土器椀や足高高台付椀の高台部の破片が壁際寄りから出土して

いる。小皿は焼き歪みが認められ，黒色土器椀は内外面に黒色処理されている。

056は複数の焼成面が検出されたが，平面形態や各焼成面の関連性が明確でないため，分類は不可能である。永吉台遺跡でも複数の焼成坑が重複しており，同様の状況であった可能性も考えられる。中央の焼成面からは，049と形態の類似した小皿と黒色土器椀が出土している。

最も出土遺物の多い256は，規模も大きく長楕円形を呈し，奥壁よりも前壁がやや直線的になっている。床面中央部から奥壁にかけて強く被熱されているが，前壁側では被熱の度合いが次第に弱くなっており，被熱範囲の偏在性が確認できる。望月分類でA類とした焼成坑は，床面と壁面の焼成が最も強く，床面では奥壁寄りに被熱面が偏在し，前部は焼成を受けないタイプのものである。特に，床面よりも奥壁の上半分のほうが，よく被熱されているという。平面形態では，奥壁が明瞭で直線的につくられる方形・逆台形などが主体的であるなどの特徴をもち，「奥と手前の関係が明瞭」である。256の奥壁は北側が丸みをもち，直線的につくられてはいない。また，逆台形・逆三角形のように前壁側がすぼまり，緩やかに立上がるような形態でもなく，「奥壁を軸に土坑形成している」とも考えられない。「逆長台形」に近い形態とも考えられるが，被熱痕跡からはA類に含まれる。その場合は，「縦長指向型」の「超縦長タイプで，平面形態も焼成坑の中では最も大型」な，ＡⅡＣ類に分類できよう。また，燃焼範囲を覆うように砂質粘土が検出されている。奥壁側では砂質粘土と壁面との間にわずかな空間を形成し，炭化粒・焼土粒を含む層が堆積している。この空間が煙り出しの機能をもっていた可能性もある。土器は側壁近くからも出土しており，大量に積み上げて焼成されていたと考えられる。砂質粘土は，これらの土器を覆うように置かれており，焼成方法が「覆い焼き」であったことを示唆している。生産器種は，土師器杯・椀・高台付椀・黒色土器椀・高台・甕などで，これらが一括して焼成されている。

259は楕円形を呈し，被熱面が南寄りに偏在している。床面は焼成の度合いは強いが，壁面までは被熱されていない。北側が攪乱されているため，張り出しの有無は不明であるが，ＢⅠ類に分類される。出土遺物がないので時期の特定はできないが，類型から289とほぼ同時期であろう。

289は楕円形の小規模な焼成坑で，床面中央部がよく被熱されている。焼土が東側に偏在しているが，壁面はあまり焼成を受けていない。全体に緩やかに掘込まれ，「奥と手前の位置関係がなく」，「すり鉢状を呈する」ＢⅡ類に分類できる。生産器種は，供膳具の高台付椀と煮沸具の甕が出土している。

320は調査区南端に位置している。周辺には，類似した焼成坑や粘土採掘坑は確認されていない。平面形態は隅丸方形で，直線的な壁面も形成している。これまでの焼成坑との大きな違いは，被熱面が中央から東側壁面の外側まで広がっていることである。この場合，西壁を「前部」とし東壁を「奥壁」とするならば，A類のなかでは「横長指向型」のＡⅠ類に分類することができる。320は，焼成坑の掘込みが浅いこと，

第12表　土師器焼成坑一覧

（　）は推定値，-は不明を表す

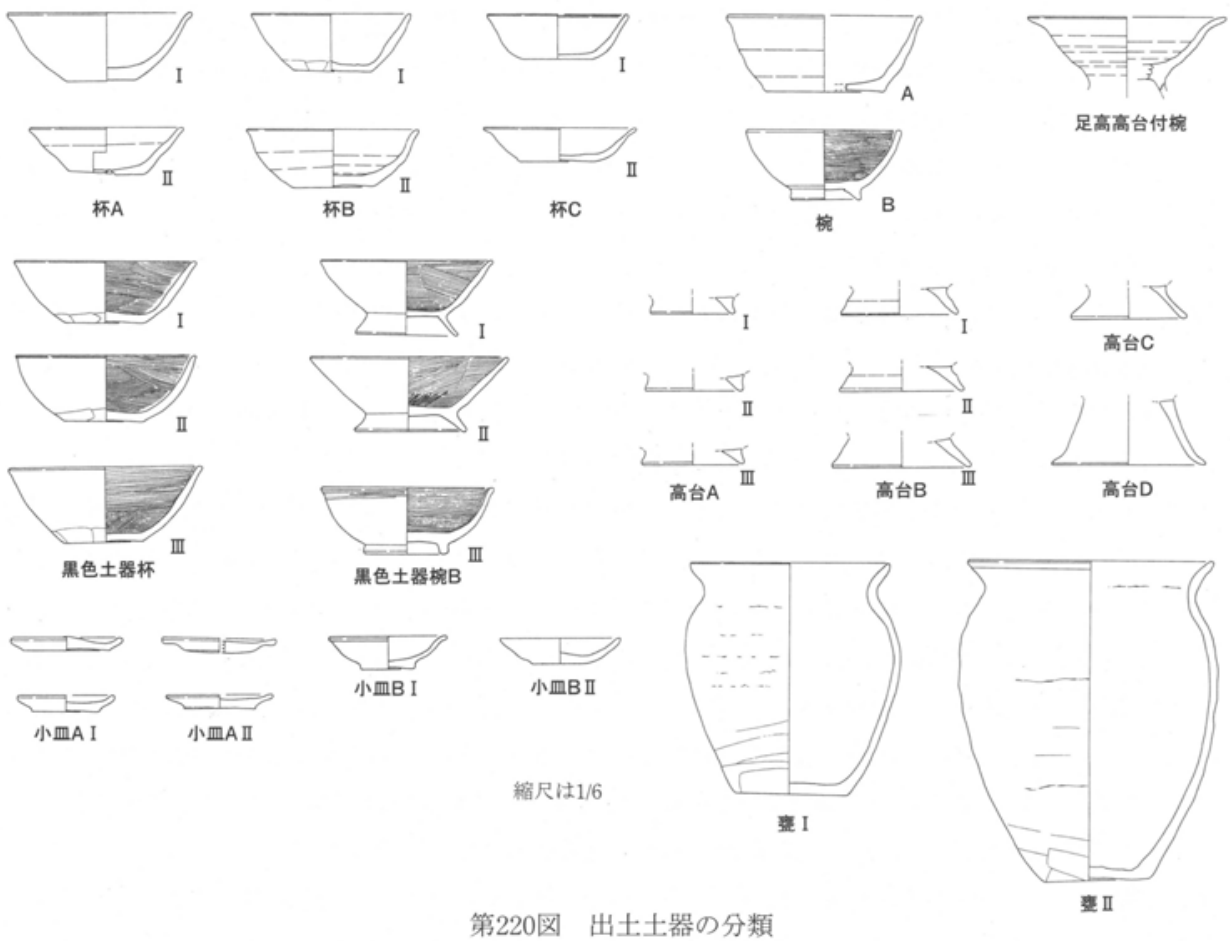
遺構番号	グリッド	平面形態	類　型	長軸長×短軸長(m)	深さ(m)	焼成床面積(m²)	壁面焼成	生産器種
049	D7-57	方形	ＣⅠ2	1.17×1.03	0.06	0.35	無	小皿，黒色土器椀，高台
056	D7-39	楕円形か	-	- × -	-	-	無	小皿，黒色土器椀
256	C7-39	長楕円形	ＡⅡＣ	2.85×1.50	0.28	0.61	有	杯，椀，黒色土器杯・椀，高台，甕
259	C7-17	楕円形	ＢⅠ	(2.0)×(1.5)	0.19	0.70	無	—
289	B7-90	楕円形	ＢⅡ	0.76×0.63	0.16	0.08	無	高台付椀，甕
320	G6-84	隅丸方形	ＡⅠ	1.32×1.06	0.15	0.69	有	杯，甕

東壁が「奥壁」としての直線的な形状が不明瞭であること，焼土が床面中央と北壁から検出されていることなど，前述のA類の特徴との相違点があげられる。再検討の必要はあるが，ここではAⅡ類としておく。生産器種は，土師器杯と甕である。

また，焼成坑は検出されなかったが，地下式土坑023・025内には黒色土器がまとまって投棄されたように出土した。調査区の北西に位置する粘土採掘坑に隣接しており，これらの黒色土器を生産した焼成坑が周辺に存在している可能性が高い。ここでは次項で焼成坑の土器類とともにまとめて，土器類を分類する。

2　出土土器について

出土土器の分類（第220図）　焼成坑からは，杯・皿・椀・高台付椀・足高高台付椀などの供膳具や，煮沸具の甕類が出土した。このような資料の報告にあたっては，焼成坑毎に器種や形態を分類することが求められるが，256とほかの焼成坑とは出土量や器種構成に大きな違いがある。そのため，一定の条件下で共通の分析を行うことは困難であるが，形態・法量・径高指数（口径に対する器高の割合）などを基準にして分類を試みた。さらに関連遺構として，粘土採掘坑270や地下式土坑023・025出土の土器類も分類に加えた。これらの遺構が，焼成坑の機能と密接な関連があると考えたからである。皿については出土量が少ないことから，ほかの遺構から出土した資料もあわせて分類した。なお，大文字のアルファベットは同一器種内の変化を，切り離し技法の違いはアルファベットの小文字で表した。口径や底径などの法量の分類についてはローマ数字を使用し，これらを組み合わせて表記した。



第220図　出土土器の分類

杯A：　底径5.5cm～6.3cm前後の底部から，直線的に立上がり口縁部に至る。底部の切り離しは，回転糸切りのａ類か静止糸切りのｂ類で，体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。大きさから，口径13.5cm～14.0cm前後・器高5cm前後のⅠ類と，口径12cm前後・器高3.5cm前後の小型のⅡ類にわけられる。径高指数は，Ⅰ類は35～37前後であるが，Ⅱ類は30前後と浅い器形である。多くは赤褐色を呈し，堅緻な焼成である。320出土のＡⅠａでは底部周縁にも手持ちヘラケズリがみられ，体部はやや内湾する。025ではＡⅠｂとＡⅡａが共伴して出土している。

杯B：　形態は体部下位が強く張り出し，緩い稜を形成する。口縁部へやや開きながら立上がり，口唇部は小さく外反する。底部は糸切り無調整で，回転糸切りのａ類と，静止糸切りのｂ類がある。体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。胎土には石英粒が入った砂粒が多く含まれている。堅緻な焼成のものがほとんどである。口径は12cm～14cmまであるが，多くは口径13.5cm前後，底径6.5cm前後にまとまっている。径高指数は35前後である。025出土の杯は，口径12.5cm前後と小型(Ⅰ類)のものもあるが，270では口径13.5cm前後とやや大型化(Ⅱ類)している。

杯C：　口径に比較して器高が低い器形の一群である。底部は，回転糸切り痕が明瞭なａ類と，大きく弧状を描く糸切り痕が特徴的に残る静止糸切りのｂ類があり，部分的に軽いナデを施している。体部下端のヘラケズリは省略されている。底径5.0cm前後の小さめの底部から，丸みをもってやや開き気味に立上がるＣⅠ類と，底径5.2cm～6.0cmで体部下位が大きく張り出し，緩い稜を形成する特徴的な形態のＣⅡ類とがある。ＣⅠ類は口径11cm前後，器高は3.6cm前後とやや高く，径高指数は32前後である。ＣⅡ類は多く出土し，体部の立上がりが直線的なもの(径高指数28前後)と，外反しながら立上がるタイプ(径高指数25前後)に細分される。口径11.4cm～12.4cm，器高は3.4cm前後である。外反するタイプは器高が3.0cm前後と低いつくりになっている。底部は5.0cmから6.4cmまでで，多くは5.5cm前後である。全体に粗雑なつくりである。ＣⅡｂ類の出土量が多く，256にまとまっている。

椀A：　大形で底径が大きく，体部は直線的に立上がり，ロクロ目も明瞭である。口径15.0cm前後，器高は6.0cm前後と深めの器形である。底部の調整は不明である。

椀B：　有台の椀である。体部は丸みをもち，口縁部の外反は弱い。口径12.0cm前後の小形の器形である。底径6.0cm前後の低い貼り付け高台がつく。内面はヘラミガキが施されている。

足高高台付椀：　椀部に大きく踏ん張るようような高台が付いた椀である。本遺跡ではあまり良好な資料はみられないが，270から口縁部が外反する器形が出土している。

黒色土器杯：　主に内面を黒色処理され丁寧にミガミが施されたた土器群である。底部から内湾しながら緩やかに立上がる。底部に静止糸切り痕を残した無調整のａ類が多いが，全面あるいは周縁部を手持ちヘラケズリで調整したｂ類もみられる。体部下端は手持ちヘラケズリである。法量分布は，口径13.4cm～15.0cm・器高4.8cm～6.1cm・底径4.9cm～6.7cmである。形態や径高指数からⅠ～Ⅲの３類に分類できる。Ⅰ類は径高指数33～35，器高が5.0cm前後と浅いつくりで，体部下半に稜をもつ。出土点数は多くない。径高指数36～39のⅡ類は出土点数も多く，体部がやや丸みをもつ典型的な形態である。器高は，5.3cm前後と5.6cm前後のものに細分できる。Ⅲ類(径高指数40～43)は，器高が6.0cm前後とやや深めの器形で，深椀に近い形態である。比較的薄手で，丁寧なつくりが多い。

黒色土器椀A：　内面を黒色処理された杯に，高台を有する形態である。底部に静止糸切り痕が認められるものもあるが，ほとんどナデで調整されている。体部が大きく外反し，やや丸みをもつものと，

直線的に延びるタイプがある。口径は13cm代(Ⅰ類)が大半で，14cm～15cm代(Ⅱ類)は少数である。器高も6cm前後と，杯よりは全体に小振りにつくられている。高台は貼り付け高台で，ハの字状に開く形態である。底径は7.2cm～8.5cmと大きく，7.5cm前後が多い。高さは1.2cm～1.7cmである。

黒色土器椀B：　内外面を黒色処理されている。椀Aに比較して，ミガキやつくりは粗雑である。Ⅰ類は，丸みをもつ体部に輪高台が貼り付けられている。256から出土したが，器面がかなり荒れ，口縁部外面にも横方向のミガキが施されている。口径13.5cm前後・器高は6.0cmである。Ⅱ類は，体部下半と高台の境に稜をもち，角張った高台が付いている。049・056出土。

高台A：　杯や椀の高台部分である。これらに接合する器種は，焼成坑では出土していない。平安時代の住居跡271からは，高台部の剥離痕が認められる杯が出土している。回転糸切り痕が明瞭に確認できるものや，粘土紐を接合した痕跡がのこるものがある。底径・底部端から接合部までの高さ・形態からA～Cに分類した。いずれも高台端部は丸くおさめており，角張ってはいない。高台Aは，小形で直立気味に立上がる形態で，輪高台につくられている。高さは1.1cm～1.5cmである。底径から，Ⅰ類(6.2cm～6.8cm)，Ⅱ類(7.4cm前後)，Ⅲ類(7.8cm～8.4cm)にわけられる。

高台B：　ハの字状に大きく開き，高さも2.0cm～2.6cmと高い一群である。逆台形状に，体部との接合部を下にして製作されており，回転糸切り痕が確認できる。上部が指頭で窪み，明瞭に稜をもつものが多い。底径から，Ⅰ類(9cm前後)，Ⅱ類(9.5cm前後)，Ⅲ類(11cm前後)にわけられる。

高台C：　形態は高台Bに類似するが，底径8.8cmの大きく開くような高台である。高さも2.7cmと比較的高くなっている。高台Bのような稜はない。丁寧なつくりで，焼成も堅緻である。同タイプの高台は，271からも出土している。

高台D：　いわゆる足高高台で，大きく踏ん張るように開き，端部がさらに外反する。切り離し技法は不明である。底径12.0cm前後，高さは5.0cm前後である。049出土。

小皿A：　皿状の扁平の形態を呈し，口径に比べて器高が低く，径高指数が12～18前後である。指で押さえながら体部を引き出しているような技法である。底部は回転糸切り無調整で，分厚くつくられている。口径8.0cm前後，底径5.2cm前後のものが多い。口唇部を上部に引き出すAⅠ類と，外反するAⅡ類がある。胎土には砂粒を比較的多く含み，硬質な焼成である。色調は赤褐色から暗褐色である。049・056・351A・B6-78・Cトレンチ出土。

小皿B：　浅い杯状の形態を呈し，口径に比べて底部が小さくつくられている。径高指数は21～28である。口径は9.0cm以上と比較的大きい。底部は回転糸切り無調整で，小さく高台をつけるBⅠ類と，無高台のBⅡ類がある。ともに器面はナデで仕上げられている。BⅡ類では，口唇部を上部につまみあげるものと，外側に引き出すものに細分される。胎土は，小皿Aに比較して砂粒の含有は少ない。焼成は軟質で，器面はやや粉状である。色調は明褐色系が多い。199A・288A出土。

甕：　口縁部が，くの字状に外反し，口唇部を短くつまみあげている。口縁部外面はナデにより面取りされたように明瞭な稜をもつ。底部は粗くナデられ，平底の底部から粘土紐を巻き上げて成形している。内外面には接合痕がみられ，指頭で押さえたような痕跡も目立つ。器面の凹凸が顕著であるが，上半部は比較的平滑になっている。体部下半は横位のヘラケズリ，体部上半はナデが施されている。口縁部内外面はヨコナデで仕上げられている。法量から，Ⅰ類(口径15cm前後・器高19cm前後)とⅡ類(口径18.5cm～21.0cm・器高24cm～28cm)に大別できる。Ⅱ類には，口縁部が大きく外反するものや，

外反が弱いものがある。小型のⅠ類の出土点数は少ない。289出土の甕は，やや粗雑なつくりであるが口唇部の形態は類似する。焼成坑で生産されていた甕は，このタイプに限定されている。

各期の様相と推定年代　以上のように分類した土器の出土状況から時期設定を行い，各期の様相をみていきたい(第13表)。ただし，前述したように各遺構によって器種構成が一様でないため，これまでの先学の研究成果に比べると各期の繋がりは断続的である。各期の年代については，本遺跡では実年代を推定できる出土資料が乏しいため，これまでの研究成果をもとに各期の年代を推定することとした。古代末期から中世にかけての土器様相については，すでに多くの編年研究も公表されているが，ここでは主に房総における編年(寺内ほか1986，笹生1989)を参考にした。また，灰釉陶器の年代については齊藤孝正の論考(齊藤1994)を基準としている。各期の設定は，以下の基準による。

Ⅰ期　杯ＡⅠ・甕の存在

Ⅱ期　杯Ａの継続：杯ＢⅠ，黒色土器杯・椀Ａの出現(Ⅱ－１期)

　　杯ＢⅡ，足高高台付椀の出現(Ⅱ－２期)

Ⅲ期　杯Ａ・Ｂの消滅：杯Ｃ・椀Ａ・Ｂ，黒色土器椀ＢⅠ，高台Ａ～Ｃ，甕の出現

Ⅳ期　黒色土器椀ＢⅡ，高台Ｄ，小皿Ａの出現(Ⅳ－１期)

　　小皿Ｂの出現(Ⅳ－２期)

Ⅰ期　焼成坑では320出土の杯ＡⅠａに限定される。本遺跡では今のところ，この時期から土器生産が開始されたと考えられる。底部は回転糸切りで，周縁と体部下端は手持ちヘラケズリを施している。比較的丁寧につくられている。その他の器種では，320からは甕の底部も出土しているが，口縁部の形態は判然としない。杯の形態や技法から，おおよそ10世紀初頭の時期を想定している。

Ⅱ期　杯類では，杯ＡⅠは継続するが，Ⅰ期の杯よりも体部が直線的な器形となる。底部の切り離しは糸切り無調整で，静止糸切りが多く出土している。Ⅱ期以降は，静止糸切り無調整が主体となっていく。杯Ｂは，体部下位が強く張り出し稜を形成する器形である。Ⅱ－１期に出現し，Ⅱ－２期では次第に口径が大きくなる。Ⅱ－２期では足高高台付椀と共伴する。Ⅱ－１期の特徴は，黒色土器杯・椀Ａが出現することである。９世紀後半以降の椀形態の黒色土器は，灰釉陶器の模倣や影響下に形態を展開させた可能性が指摘されている(森1995)。本遺跡の025では，浅いつくりで体部下半に稜をもつ杯Ⅰ類から椀に近い杯Ⅲ類と，高台をもつ椀Ａが共伴して出土している。椀Ａの器形は小型であるが，高台は口径に比較してやや大きくハの字状に開く特徴的な形態である。杯では，類似する形態の灰釉陶器は黒笹90号窯式か折戸53号窯式の時期が想定される。Ⅲ類のように深椀に近い形態のものも025からは出土しており，折戸53号窯式併行期までは平底無高台杯と高台杯椀が共伴している。灰釉陶器にはあまり類似しない形態もみられることから，黒色土器は灰釉陶器を模倣しながらも，そのなかから新たな器形を展開させていったと考えられる。Ⅱ－１期は，黒色土器椀Ⅲが深椀に近い形態であり，折戸53号窯式の灰釉陶器の形態の類似性と，その後の器形の展開を考慮するならば，10世紀中頃を中心とした時期と考えられる。Ⅱ－２期では，粘土採掘坑270から出土した土器類のうち，足高高台付椀は破片であるが，口縁部が大きく外反する形態である。杯も含めたこれらの土器群は，形態や技法等からみて，笹生編年のⅡ－１期やⅡ－２期に比定される土器群に該当すると考えられる。年代としては，おおよそ10世紀末から11世紀前半を中心とした時期が想定できよう。

Ⅲ期　この時期の資料は，256出土の土器類に限定されている。杯類では，杯Ａ・Ｂが消滅し，替わって杯Ｃが出現する。杯Ｃは体部下端に明瞭な稜をもつことから，杯Ｂの特徴的な形態を引き継いでいるとみることができるが，口径が小さくなり径高指数で判断すると，かなり浅い器形になっていることがわかる。底部も静止糸切りが主体となり，全体に粗雑なつくりである。また，内外面を処理された黒色土器椀Ｂは，全体に丸みをもつ椀形態の器形であるが，出土点数は少ない。特徴的なのはまとまって出土した高台で，形態から３類に分類した。高台Ａは椀・皿類，高台Ｂ・Ｃは足高高台付椀に付けられたと想定される。甕は，土師器に限定され須恵器甕の出土はない。良好な出土資料は256に集中しているため比較検討はできないが，口縁部外面が面取りされる特徴的な器形である。この時期は，器高が次第に低くなり小型化していく杯Ｃ類や，高台の上部の形態から想定される足高高台付椀の存在から，11世紀前半代を中心とした時期が考えられる。

Ⅳ期　この時期の特徴は小皿が出現することである。小皿の形態や黒色土器椀Ｂの共伴の有無で，小期を設定した。Ⅳ－１期では，小皿Ａと黒色土器椀ＢⅡや足高高台付椀が共伴している。小皿Ａと同様の器種は，千葉市赤坂遺跡(横田ほか1992)からも出土している。赤坂遺跡の第１号竪穴跡はロクロピットをもつ工房跡で，５個体の小皿が出土した。小皿は，口径8.2cm～9.4cm・底径5.0cm～6.2cm・器高1.6cm～2.7cmの大きさで，底部は回転糸切り無調整である。法量は小皿Ａに近似し，形態的にも類似していることから，ほぼ同時期の所産と考えられる。小見川町妙見堂遺跡では，焼成坑である第48・191号土坑から小皿が出土している。これらの遺跡では，土師器椀・高台付杯・足高高台付椀が共伴し，妙見堂遺跡では内面を黒色処理した黒色土器椀が共に出土している。Ⅳ－２期は，小皿Ｂが出土している時期である。遺構も明確ではないため，共伴する土器類は判然としないが，周辺の遺跡では灰釉陶器も消滅し土師器杯と皿の出土となる。貿易陶磁器や常滑・渥美などの国産陶器類を，まだ伴っていない時期であろう。Ⅳ－１期は黒色土器Ｂが消滅し，小皿が出現する時期である。小皿は11世紀前半には出現し，椀類とともに11世紀代の土器様式の中心となる。内外面を黒色処理された黒色土器Ｂについては11世紀代で消滅する。小皿Ａは扁平な形態で，これをやや新しい様相ととらえ，Ⅳ－１期は11世紀後半代を中心とした時期を想定している。Ⅳ－２期の年代は判然としないが，小皿Ｂの形態・技法や胎土などから，Ⅳ－１期に連続する11世紀末～12世紀初頭が考えられる。

第13表　古代末期の土器様相の変遷

時期	出土遺構	出土器種													
		杯Ａ	杯Ｂ	杯Ｃ	足高高台付椀	黒色土器杯	黒色土器椀Ａ	黒色土器椀Ｂ	椀Ａ	椀Ｂ	高台Ａ～Ｃ	高台Ｄ	甕	小皿Ａ	小皿Ｂ
Ⅰ	**320**	↓											↓		
Ⅱ-1	023・025	↓	↓			↓	↓						┆		
Ⅱ-2	270		↓		↓								┆		
Ⅲ	**256・289**			↓	┆			↓	↓	↓	↓		↓		
Ⅳ-1	**049・056**											↓		↓	
Ⅳ-2	199A・288														↓

※　出土遺構の欄の太字は，土師器焼成坑である。出土器種の欄の点線は，存在の可能性を示している。

3　土器生産の変遷

Ⅰ期は，本遺跡で土器生産が開始された10世紀初頭の時期で，円形ではなく隅丸方形を呈する焼成坑320が該当し，杯ＡⅠａを焼成している。320は調査区の南側に位置しており，その後の焼成坑が北側に集中する傾向とは異なる立地である。焼成され硬化した面が広く，中央部から東壁外までよく被熱され，焼土は中央部に多く堆積している。焼成坑として比較的よく使用されていたことを示している。杯は，底部は回転糸切りで形態や調整方法が，９世紀代の技法をまだ残している。甕類の底部が共伴しており，供膳具の杯と煮沸具の甕がともに焼成されていたことがわかる。その後の10世紀代における土器生産活動は不明であるが，台地縁辺部を中心とした未調査区域には，同様の焼成坑が存在している可能性は高い。

Ⅱ期(10世紀末～11世紀前半)の焼成坑は検出されていないが，調査区の北西に位置する地下式土坑025にみられるように黒色土器杯・椀Ａの大量廃棄が行われている。周辺には大規模な粘土採掘坑も位置することから，焼成坑も存在していたのであろう。焼成の実態は明らかではないが，黒色土器杯・椀や足高高台付椀の出現など，生産器種の分化や量産体制などが窺える。本遺跡における本格的な土器生産は，10世紀後半代にこの周辺で開始されたと思われる。

Ⅲ期の11世紀前半代では，焼成坑256と289が調査区北端で検出された。この周辺には粘土採掘坑が設けられており，次第に生産の主力を北側に移行させている。この時期は，256にみられるように土器生産の最盛期を迎える。289は楕円形の小規模な焼成坑で，高台付椀と甕を生産している。焼成面は床面に集中し，壁面はあまり焼成を受けていない。高台付椀の高台部は，径9cmで高台ＢⅠ類に分類される。256は本遺跡では最大規模の焼成坑であり，大量の土師器が焼成途中の状態で検出された。平面形態は楕円形で，床面はよく被熱され，特に中央部から奥壁にかけての範囲は強い被熱のため硬化している。出土した土器類の上には砂質粘土が堆積していることから，「覆い焼き」の焼成方法がとられていたと考えられる。本遺跡で検出されたほかの焼成坑は，比較的小規模なものがほとんどであるが，大量生産のために長軸長が2.85mもある，このような形態の焼成坑が採用されたと想定される。生産されていた土器類は，杯Ｃ・黒色土器椀Ｂ・高台Ａ～Ｃ・甕などの豊富な器種で，供膳具も煮沸具も一括して焼成されており，特に甕類の大量焼成は注目される。ただし，杯Ｃにみられるように，つくりや調整が粗雑になる傾向が窺える。内外面を処理された黒色土器椀Ｂも，この時期からⅣ-１期まで生産されているが，Ⅱ-１期の黒色土器椀Ａのような丁寧なミガキが消え，全体に雑な調整となっている。これは量産を目的としていたために，製品の粗雑化が進んだ結果と考えられる。

Ⅳ期では，Ⅳ-１期(11世紀後半代)の小規模な焼成坑049・056が台地東側で検出されている。方形の焼成坑は049のみで，床面の焼成は弱く壁面まで被熱は及んでいない。生産器種は小皿・黒色土器椀Ｂ・高台Ｄで，特に小皿と黒色土器椀がともに焼成されていたことは注目される。生産規模はかなり縮小しており，集落内での消費に限定されていたと考えられる。本遺跡における土器生産もこの時期で終了する。

4　おわりに

城ノ台遺跡における古代末期の土器生産の様相について概観してきた。本遺跡での土器生産は，まず台地南側で焼成坑320により10世紀初頭に開始された。今回の調査範囲からは，ほかの焼成坑や粘土採掘坑は検出されなかったが，同様の焼成坑が周辺に存在していた可能性はある。周辺には住居跡も位置していることから，集落内での小規模な生産から始まったと考えられる。その後の様相は明らかではないが，10世紀後半までには台地北側へ生産の主力を移し，本格的な土器生産体制を構築していったようである。粘

土採掘坑出土の土器は，10世紀末～11世紀前半に比定されることから，10世紀後半には大規模な粘土採掘を開始していたと思われる。その時期の焼成坑は検出されていないが，地下式土坑025にみられるように，この頃には大量廃棄を行えるような生産体制が保証されていたと考えられる。10世紀後半代は台地北側で粘土採掘と土器生産を繰り返し，11世紀前半代には焼成坑256に代表されるように，大量の焼成が可能な土器生産の体制と技術の確立をみた。この体制は，ある事態の発生等により一時的に頓挫し，止むを得ず生産規模を縮小せざるを得なくなった。そして，11世紀後半には台地東側で焼成坑049・056による主に小皿類を焼成する小規模な生産体制へと変化し，中世的な土器様式へと次第に移り変わっていく。生産された土器は集落内の消費に止まらず，周辺の集落などの消費地へ供給されていた可能性は高い。生産・流通・消費の過程の分析は，土器生産体制の背景を知る上で欠かせない要素であるが，供給先の実態は現在のところ明確ではない。妙見堂遺跡や永吉台遺跡では，「隣接地が寺院であり，寺院を造営，維持することができるような集団」（半澤1997）の存在が土器生産体制を成立させたと考えられているが，本遺跡周辺には寺院等の遺跡は今のところ知られていない。城ノ台遺跡における生産体制の成立には別の要因が介在していた可能性もあり，供給先の実態とともに，その解明は今後の大きな課題である。

ところで，焼成坑256にみられる大量の土器の生産を途中で中止せざるを得ないような異常事態の発生の要因を，この時期に求めるならば，自然災害とともに大きな争乱も原因の一つと考えられる。11世紀前半代に関東各地を大きな戦乱に巻き込んだ争乱は，万寿５年(1028)に始まり長元４年(1031)まで続いた平忠常の乱である。忠常は平良文の孫にあたり，上総・下総両国に大私営田をもつ在地領主であるが，公事を果たさず国守の命にも従わなかったという。この乱による百姓の他国への逃亡や田畑の大きな被害などで，主戦場となった上総国・下総国・安房国は，疲弊が著しく「已に亡国」となり，乱後は免税措置などがとられている。本遺跡が位置する千葉郡一帯もこの戦乱に巻き込まれ，甚大な被害を被ったのであろう。９世紀後半代には緑釉陶器を保有できるような高い水準の集落であった城ノ台遺跡は，この地域の中心的な集落の一つであり，そのため忠常の乱の影響が大きかったことは十分に推察できる。その後は，荒廃した土地の再開発のなかで，開発領主として千葉氏などの多くの武士団が成立していくことになる。

参考文献

豊巻幸正ほか　1985　『永吉台遺跡群』　財団法人君津郡市文化財センター

寺内博之ほか　1986　「下総・上総国における古代末期の土器様相」『神奈川考古第21号　古代末期～中世における在地系土器の諸問題』　神奈川考古同人会

中野修秀ほか　1989　『織幡地区遺跡群発掘調査報告書』　小見川町埋蔵文化財調査協会

笹生　衛　　1989　「房総における中世的土器様相の成立過程-房総における古代末期から中世初期の土器様相-」『史館』第21号　史館同人会

服部敬史ほか　1992　『南多摩窯跡群』　東京造形大学宇津貫校地内埋蔵文化財発掘調査団

横田正美ほか　1992　「赤坂遺跡」『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』　財団法人千葉市文化財調査協会

倉田義広　　1993　「坂ノ越遺跡」『土気南遺跡群Ⅲ』　財団法人千葉市文化財調査協会

齊藤孝正　　1994　「東海地方の施釉陶器生産-猿投窯を中心に-」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東３施釉陶器-』　古代の土器研究会

森　　隆　　1995　「黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

望月精司　　1997　「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』　窯跡研究会

半澤幹雄　　1997　「関東東部-千葉県内の事例を中心に-」『古代の土師器生産と焼成遺構』　窯跡研究会

第14表　古墳時代前期・中期出土土器観察表

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
003	第43図1	土師器小型鉢	80	口径 (9.6) 底径 2.8 器高 4.2	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
003	第43図2	土師器鉢	45	口径 (12.0) 底径 (3.0) 器高 6.9	底部 ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
003	第43図3	土師器坩	80	口径 14.8 底径 3.9 器高 7.1	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ミガキ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
003	第43図4	土師器甕	20	口径 － 底径 (8.2) 器高 〈19.4〉	底部 ヘラケズリ 体部 刷毛・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
006	第44図1	土師器杯	95	口径 15.2 底径 6.5 器高 6.2	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
006	第44図2	土師器椀	70	口径 (15.4) 底径 5.6 器高 5.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 刷毛・ナデ・ミガキ・ヨコナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英・長石	
006	第44図3	土師器高杯	70	口径 16.4 裾径 － 器高 〈6.7〉	脚部 － 外面 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
006	第44図4	土師器高杯	60	口径 16.9 裾径 － 器高 〈5.9〉	脚部 － 外面 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
006	第44図5	土師器高杯	80	口径 15.6 裾径 － 器高 〈5.1〉	脚部 － 外面 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
006	第44図6	土師器高杯	50	口径 (16.8) 裾径 － 器高 〈5.5〉	脚部 － 外面 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
006	第44図7	土師器高杯	30	口径 － 裾径 12.6 器高 〈7.9〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 外面 － 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
006	第44図8	土師器高杯	30	口径 － 裾径 － 器高 〈6.6〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 外面 － 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
006	第44図9	土師器甕	10	口径 (15.6) 底径 － 器高 〈6.8〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
006	第44図10	土師器甕	10	口径 (16.8) 底径 － 器高 〈6.4〉	底部 － 体部 ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
006	第44図11	土師器壷	10	口径 (14.2) 底径 － 器高 〈5.3〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
007	第46図1	須恵器蓋	10	口径 (11.8) 天井径 － 器高 〈3.1〉	天井部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
007	第46図2	土師器杯	60	口径 13.8 底径 6.0 器高 5.0	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図3	土師器杯	90	口径 13.2 底径 5.5 器高 5.0	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図4	土師器杯	60	口径 13.7 底径 － 器高 5.6	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・雲母・スコリア	内外面赤彩
007	第46図5	土師器杯	40	口径 (14.3) 底径 (6.1) 器高 6.2	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	褐色	石英・雲母・スコリア	
007	第46図6	土師器杯	30	口径 16.8 底径 － 器高 〈4.1〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図7	土師器杯	40	口径 (16.6) 底径 － 器高 〈4.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
007	第46図8	土師器杯	75	口径 18.1 底径 5.4 器高 4.7	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図9	土師器高杯	55	口径 15.0 裾径 − 器高 〈5.2〉	脚部 − 体部 ヘラナデ・ヨコナデ 内面 ヘラナデ・ヨコナデ	褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
007	第46図10	土師器高杯	60	口径 17.6 裾径 − 器高 〈6.2〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヘラナデ・ヨコナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図11	土師器高杯	60	口径 18.5 裾径 − 器高 〈6.3〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヘラナデ・ヨコナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図12	土師器高杯	40	口径 − 裾径 11.6 器高 〈8.7〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
007	第46図13	土師器高杯	20	口径 − 裾径 − 器高 〈5.3〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ・ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
007	第46図14	土師器甕	70	口径 9.6 底径 3.3 器高 9.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ミガキ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラケズリ	褐色	石英・長石・スコリア	
007	第46図15	土師器壷	90	口径 10.4 底径 〈5.8〉 器高 15.2	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
007	第46図16	土師器壷	90	口径 8.6 底径 4.5 器高 13.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図17	土師器無頸壷	25	口径 8.3 底径 − 器高 〈10.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
007	第46図18	土師器甕	10	口径 17.2 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 − 体部 刷毛・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラケズリ	暗褐色	石英・長石	
007	第46図19	土師器甕	10	口径 (17.6) 底径 − 器高 〈10.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
009	第47図1	土師器高杯	60	口径 13.5 裾径 − 器高 〈6.3〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
009	第47図2	土師器壷	20	口径 (9.2) 底径 − 器高 〈5.9〉	底部 − 体部 ナデ・ヨコナデ 内面 ナデ・ヘラケズリ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
009	第47図3	土師器甕	10	口径 − 底径 7.2 器高 〈3.1〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
016	第47図4	黒色土器杯	30	口径 − 底径 6.6 器高 〈3.5〉	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石	平安時代混入品 内面黒色処理
016	第47図5	土師器鉢	95	口径 13.0 底径 5.5 器高 9.1	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	黄褐色	石英・長石	内外面赤彩
010	第48図1	土師器器台	20	受部径 − 脚部径 − 器高 〈3.3〉	脚部 − 受部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
012	第48図2	土師器杯	15	口径 (12.6) 底径 − 器高 〈3.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
012	第48図3	土師器高杯	15	口径 (12.6) 裾径 − 器高 〈3.4〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
012	第48図4	土師器杯	10	口径 − 底径 4.2 器高 〈1.7〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩 底部外面にヘラ記号
018	第49図1	土師器杯	25	口径 (15.0) 底径 − 器高 〈5.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
018	第49図2	土師器鉢	55	口径 (12.4) 底径 − 器高 8.2	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
018	第49図3	土師器鉢	70	口径 − 底径 − 器高 〈7.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	外面赤彩
020	第50図1	土師器坩	70	口径 11.6 底径 − 器高 5.6	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英・長石・スコリア	器壁が薄い
020	第50図2	土師器坩	70	口径 13.6 底径 3.4 器高 5.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石	器壁が薄い
020	第50図3	土師器鉢	20	口径 (11.4) 底径 3.2 器高 6.4	底部 多方向のヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ヘラナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
020	第50図4	土師器高杯	60	口径 15.0 裾径 − 器高 〈12.0〉	脚部 − 体部 ミガキ 内面 ミガキ・ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	杯部と脚部は貫通 内外面赤彩
020	第50図5	土師器 小型壷	95	口径 9.3 底径 2.8 器高 11.1	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	黄褐色	石英・長石	内外面赤彩
020	第50図6	土師器 小型壷	95	口径 10.8 底径 3.3 器高 12.6	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ミガキ 内面 ミガキ・ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
020	第50図7	土師器 小型壷	40	口径 − 底径 (3.6) 器高 〈12.2〉	底部 一方向のヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
020	第50図8	土師器鉢	10	口径 (18.4) 底径 − 器高 〈6.7〉	底部 − 体部 刷毛 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
020	第50図9	土師器甕	45	口径 17.8 底径 − 器高 〈18.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・刷毛 内面 ケズリ・ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
020	第50図10	土師器壷	10	口径 (15.8) 底径 − 器高 〈9.0〉	底部 − 体部 刷毛・ミガキ 内面 刷毛・ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
020	第50図11	土師器壷	50	口径 − 底径 − 器高 〈14.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・刷毛 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
020	第50図12	土師器壷	65	口径 − 底径 − 器高 〈20.6〉	底部 − 体部 刷毛・ミガキ 内面 刷毛・ミガキ	褐色	石英・長石	内外面赤彩
021	第51図1	土師器甕	10	口径 − 底径 − 器高 〈9.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
021	第51図2	土師器甕	55	口径 − 底径 7.8 器高 〈21.0〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
028A	第53図1	土師器杯	30	口径 (14.2) 底径 − 器高 〈3.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
028A	第53図2	土師器高杯	20	口径 (9.0) 裾径 − 器高 〈5.8〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ヨコナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
028A	第53図3	土師器高杯	70	口径 14.4 裾径 − 器高 〈4.9〉	脚部 − 体部 ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
028A	第53図4	土師器高杯	40	口径 (17.8) 裾径 − 器高 〈5.3〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 刷毛・ナデ・ケズリ 内面 刷毛・ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
028A	第53図5	土師器高杯	30	口径 − 裾径 9.7 器高 〈4.5〉	脚部 ナデ 体部 − 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	外面赤彩
028A	第53図6	土師器高杯	35	口径 − 裾径 9.4 器高 〈5.4〉	脚部 ヨコナデ・ヘラナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	内外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
028A	第53図7	土師器高杯	30	口径 － 裾径 (12.6) 器高 〈8.3〉	脚部 ナデ 体部 － 内面 ヘラケズリ	橙褐色	石英・長石	
028A	第53図8	土師器台付甕	80	口径 － 底径 13.2 器高 〈10.5〉	底部 ヨコナデ 体部 刷毛・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	台部
028A	第53図9	土師器壷	10	口径 16.6 底径 － 器高 〈3.4〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ヨコナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
028A	第53図10	土師器甕	20	口径 (13.2) 底径 － 器高 〈10.6〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
028A	第53図11	土師器甕	40	口径 15.4 底径 － 器高 〈21.9〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
028A	第53図12	土師器甕	40	口径 (23.6) 底径 9.6 器高 －	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	接合しないが，同一個体
034	第54図1	土師器杯	70	口径 (6.8) 底径 3.3 器高 3.7	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	褐色	石英・長石	
034	第54図2	土師器器台	90	受部径 6.7 脚部径 7.9 器高 7.9	脚部 刷毛 受部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
034	第54図3	土師器高杯	45	口径 14.4 裾径 － 器高 〈5.3〉	脚部 － 体部 刷毛目・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石	内外面赤彩
034	第54図4	土師器高杯	30	口径 － 裾径 (10.0) 器高 〈9.5〉	脚部 ヨコナデ 体部 刷毛・ヘラナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
034	第54図5	土師器高杯	45	口径 － 裾径 10.0 器高 〈11.8〉	脚部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 － 内面 ヘラナデ・ヨコナデ	明褐色	石英・長石	
034	第54図6	土師器鉢	30	口径 (14.0) 底径 － 器高 〈6.0〉	底部 － 体部 － 内面 －	橙褐色	石英・スコリア	器面の摩耗が激しい
034	第54図7	土師器壷	70	口径 (10.0) 底径 6.3 器高 15.8	底部 ヘラケズリ 体部 刷毛・ナデ 内面 ヘラナデ・刷毛目	黄褐色	石英・長石・スコリア	
034	第54図8	土師器甕	45	口径 (17.8) 底径 7.0 器高 23.6	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
038	第56図1	土師器杯	70	口径 14.2 底径 － 器高 4.2	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
038	第56図2	土師器杯	20	口径 (13.7) 底径 － 器高 〈3.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
038	第56図3	土師器高杯	65	口径 (14.0) 裾径 10.1 器高 〈10.5〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩 脚部に透孔
038	第56図4	土師器甕	10	口径 (19.6) 底径 － 器高 〈5.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
046A	第57図1	土師器杯	15	口径 (15.0) 底径 － 器高 〈4.6〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
046A	第57図2	土師器壷	30	口径 － 底径 5.2 器高 〈7.2〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	内外面赤彩
046B	第57図4	土師器高杯	50	口径 － 裾径 8.0 器高 〈6.9〉	脚部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
046B	第57図5	土師器甕	10	口径 (16.0) 底径 － 器高 〈8.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
054B	第58図1	土師器坩	60	口径 (13.4) 底径 3.0 器高 6.4	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
063	第59図1	土師器坩	10	口径 ― ― 底径 ― 器高 〈4.0〉	底部 ― 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
063	第59図2	土師器甑	完形	口径 14.6 孔径 ― 器高 10.3	孔部 穿孔・ナデ 体部 ナデ・刷毛 内面 刷毛・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	底部に小孔多数
063	第59図3	緑釉陶器椀	20	口径 ― 底径 (7.0) 器高 〈1.7〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	くすんだ暗灰緑色	緻密で砂粒を含む	平安時代混入品 高台部
063	第59図4	土師器甕	10	口径 17.0 底径 ― 器高 〈10.0〉	底部 ― 体部 刷毛・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
069D	第60図1	土師器坩	30	口径 14.0 底径 ― 器高 〈6.0〉	底部 ― 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
069D	第60図2	土師器壷	35	口径 ― 底径 ― 器高 〈10.6〉	底部 ― 体部 ミガキ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
071	第61図1	土師器高杯	20	口径 14.8 裾径 ― 器高 〈3.5〉	脚部 ― 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
071	第61図2	土師器甕	10	口径 (16.8) 底径 ― 器高 〈3.8〉	底部 ― 体部 ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
071	第61図3	土師器甕	20	口径 ― 底径 7.6 器高 〈2.8〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
091	第62図1	土師器杯	30	口径 (13.6) 底径 ― 器高 5.9	底部 ― 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
091	第62図2	土師器高杯	20	口径 19.8 裾径 ― 器高 〈4.9〉	脚部 ― 体部 刷毛・ケズリ・ナデ 内面 刷毛・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
091	第62図3	土師器甕	10	口径 (16.6) 底径 ― 器高 〈7.4〉	底部 ― 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
091	第62図4	土師器甕	30	口径 (13.2) 底径 ― 器高 〈20.6〉	底部 ― 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
092B	第63図1	土師器高杯	25	口径 (19.5) 裾径 ― 器高 〈8.4〉	脚部 ナデ・ミガキ 体部 ナデ・ミガキ 内面 ナデ	灰褐色	石英・長石・雲母	口縁部櫛描波状文
092B	第63図2	土師器高杯	50	口径 21.4 裾径 ― 器高 〈10.0〉	脚部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 刷毛目・ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
092B	第63図3	土師器高杯	30	口径 ― 裾径 ― 器高 〈7.6〉	脚部 刷毛・ナデ 体部 刷毛・ナデ 内面 刷毛・ヘラナデ	褐色	石英・長石	
092B	第63図4	土師器壷	95	口径 8.5 底径 3.5 器高 12.1	底部 ヘラナデ 体部 刷毛・ヘラナデ 内面 ナデ・指頭痕	暗褐色	石英・長石・スコリア	
092B	第63図5	土師器台付甕	85	口径 12.5 底径 ― 器高 〈13.7〉	底部 ― 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石	
092B	第63図6	土師器台付甕	45	口径 ― 底径 7.4 器高 〈5.2〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	台部
101	第64図1	土師器高杯	40	口径 ― 裾径 (11.6) 器高 〈11.5〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 刷毛・ナデ 内面 刷毛・ヘラケズリ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
101	第64図2	土師器甕	10	口径 (14.2) 底径 ― 器高 〈5.5〉	底部 ― 体部 不明 内面 不明	明白褐色	石英・長石	駿東型甕

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
101	第64図3	土師器甕	10	口径 － 底径 (9.9) 器高 〈5.4〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
101	第64図4	土師器甕	30	口径 － 底径 11.5 器高 〈11.1〉	底部 ヘラケズリ・ミガキ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ミガキ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
110	第65図1	須恵器壷	10	口径 (12.6) 底径 － 器高 〈4.3〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	後期混入品
110	第65図2	土師器高杯	30	口径 16.4 裾径 － 器高 〈5.4〉	脚部 － 体部 ケズリの・ナデ・ミガキ 内面 ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	
110	第65図3	土師器高杯	10	口径 (15.0) 裾径 － 器高 〈2.4〉	脚部 － 体部 － 内面 ミガキ	暗赤褐色	石英・長石	外面赤彩 内面黒色処理
110	第65図4	土師器高杯	10	口径 － 裾径 － 器高 〈5.4〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 － 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
115	第66図1	土師器杯	80	口径 14.0 底径 － 器高 4.3	底部 ヘラケズリ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
115	第66図2	土師器高杯	10	口径 － 裾径 － 器高 〈5.0〉	脚部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
115	第66図3	土師器高杯	10	口径 － 裾径 － 器高 〈3.2〉	脚部 ナデ 体部 － 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
115	第66図4	土師器高杯	10	口径 － 裾径 － 器高 〈2.7〉	脚部 － 体部 － 内面 －	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
121	第67図1	土師器杯	95	口径 12.5 底径 4.2 器高 4.8	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩 底部外面にヘラ記号
121	第67図2	土師器杯	95	口径 14.6 底径 3.5 器高 3.9	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩 底部外面にヘラ記号
121	第67図3	土師器高杯	10	口径 (15.6) 裾径 － 器高 〈4.3〉	脚部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
121	第67図4	土師器高杯	90	口径 14.4 裾径 11.4 器高 12.4	脚部 ケズリ・ナデ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
121	第67図5	土師器鉢	95	口径 10.9 底径 4.5 器高 7.2	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
121	第67図6	土師器壷	15	口径 (9.5) 底径 － 器高 〈5.3〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
121	第67図7	土師器甕	75	口径 17.8 底径 6.8 器高 25.1	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 刷毛・ケズリ・ナデ 内面 刷毛	暗褐色	石英・長石・スコリア	
121	第67図8	土師器甕	60	口径 － 底径 6.0 器高 〈16.2〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
121	第67図9	土師器甕	15	口径 (16.2) 底径 － 器高 〈19.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
138	第68図1	土師器高杯	10	口径 (16.0) 裾径 － 器高 〈5.0〉	脚部 － 体部 ナデ 内面 ヨコナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
138	第68図2	土師器甕	10	口径 － 底径 6.2 器高 〈2.0〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 －	暗褐色	石英・長石	
142	第69図1	土師器杯	95	口径 14.7 底径 － 器高 4.9	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	内外面赤彩 底部外面にヘラ記号

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
142	第69図2	土師器杯	25	口径 (14.8) 底径 4.4 器高 5.1	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
142	第69図3	土師器杯	40	口径 (15.5) 底径 − 器高 4.7	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
142	第69図4	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 − 器高 〈3.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
142	第69図5	土師器杯	70	口径 15.7 底径 − 器高 3.3	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
142	第69図6	土師器鉢	95	口径 9.5 底径 3.2 器高 5.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
142	第69図7	土師器鉢	35	口径 (12.2) 底径 − 器高 6.2	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
142	第69図8	土師器椀	10	口径 (16.0) 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
142	第69図9	土師器鉢	25	口径 (11.5) 底径 − 器高 〈4.8〉	底部 − 体部 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
142	第69図10	土師器高杯	50	口径 16.2 裾径 − 器高 5.5	脚部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
142	第69図11	土師器高杯	20	口径 − 裾径 (11.0) 器高 〈8.0〉	脚部 ナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母・スコリア	内外面赤彩
142	第70図12	土師器壷	65	口径 − 底径 − 器高 〈9.3〉	底部 − 体部 刷毛・ケズリ・ナデ 内面 刷毛・ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
142	第70図13	土師器鉢	30	口径 (19.6) 底径 − 器高 〈13.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
142	第70図14	土師器甕	10	口径 (15.3) 底径 − 器高 〈5.1〉	底部 − 体部 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
142	第70図15	土師器甕	15	口径 (16.0) 底径 − 器高 〈11.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
142	第70図16	土師器甕	20	口径 − 底径 (6.4) 器高 〈7.9〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
166B	第71図1	土師器高杯	10	口径 (16.0) 裾径 − 器高 〈4.4〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	暗赤褐色	石英・長石	
166B	第71図2	土師器高杯	10	口径 (16.4) 裾径 − 器高 〈3.0〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
170A	第73図1	土師器杯	40	口径 (16.2) 底径 7.7 器高 5.2	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
170A	第73図2	土師器鉢	70	口径 25.0 底径 − 器高 22.4	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
172A	第73図3	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈7.1〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
172A	第73図4	土師器高杯	25	口径 − 裾径 − 器高 〈8.7〉	脚部 刷毛・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
172A	第73図5	土師器高杯	30	口径 − 裾径 (14.3) 器高 〈7.6〉	脚部 刷毛・ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
172A	第73図6	土師器甕	30	口径 － 底径 － 器高 〈17.6〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
172A	第73図7	土師器甕	40	口径 (17.0) 底径 － 器高 〈18.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
172A	第73図8	土師器甕	70	口径 18.2 底径 － 器高 〈16.9〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・雲母	
170B	第74図1	土師器杯	20	口径 (15.0) 底径 － 器高 4.0	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
170B	第74図2	土師器杯	完形	口径 14.0 底径 4.7 器高 4.6	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
170B	第74図3	土師器杯	95	口径 15.0 底径 4.4 器高 4.1	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
170B	第74図4	土師器杯	50	口径 15.2 底径 － 器高 3.9	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
170B	第74図5	土師器杯	60	口径 16.8 底径 6.0 器高 5.8	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・雲母	
170B	第74図6	土師器高杯	30	口径 － 裾径 (8.6) 器高 〈3.9〉	脚部 ナデ 体部 － 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	内外面赤彩
170B	第74図7	土師器甕	40	口径 13.4 底径 － 器高 〈10.5〉	底部 － 体部 刷毛目・ヘラケズリ・ナデ 内面 刷毛目・ヘラナデ	褐色	石英・長石	内外面赤彩
170B	第74図8	土師器壷	20	口径 － 底径 － 器高 〈11.2〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
181	第75図1	土師器鉢	完形	口径 10.2 底径 2.7 器高 4.2	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
181	第75図2	土師器坩	70	口径 11.1 底径 (2.8) 器高 8.9	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
181	第75図3	土師器高杯	30	口径 － 裾径 (11.6) 器高 8.8	脚部 ミガキ 体部 － 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
181	第75図4	土師器甕	95	口径 12.6 底径 6.8 器高 16.3	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	底部穿孔
184	第75図5	土師器高杯	10	口径 － 裾径 － 器高 〈3.3〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 － 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
184	第75図6	土師器鉢	95	口径 11.5 底径 4.9 器高 7.0	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	黒色	石英・長石	内外面黒色処理
184	第75図7	土師器壷	80	口径 － 底径 5.7 器高 〈13.8〉	底部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラケズリ・ナデ	褐色	石英・長石	
191	第76図1	土師器坩	80	口径 7.6 底径 3.1 器高 7.9	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
191	第76図2	土師器台付甕	85	口径 10.4 底径 9.3 器高 16.4	底部 ヨコナデ 体部 刷毛・ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
191	第76図3	土師器壷	20	口径 13.5 底径 － 器高 〈4.8〉	底部 － 体部 ヨコナデ・ミガキ 内面 ヘラケズリ・ヨコナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
191	第76図4	土師器甕	10	口径 － 底径 3.7 器高 〈3.0〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
198C	第78図1	土師器高杯	20	口径 (15.8) 裾径 − 器高 〈8.4〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
198C	第78図2	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈6.4〉	脚部 ヘラケズリ・ヘラナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
198C	第78図3	土師器甕	10	口径 (12.5) 底径 − 器高 〈5.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
198D	第78図5	土師器坩	95	口径 7.6 底径 4.4 器高 8.3	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・刷毛	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
198D	第78図6	土師器高杯	20	口径 − 裾径 − 器高 〈6.6〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
198D	第78図7	土師器高杯	40	口径 − 裾径 − 器高 〈6.8〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
198D	第78図8	土師器高杯	40	口径 − 裾径 11.0 器高 〈6.9〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
198D	第78図9	土師器椀	60	口径 11.6 底径 − 器高 8.1	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
198D	第78図10	土師器椀	40	口径 (12.0) 底径 − 器高 〈7.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
198D	第78図11	土師器壷	50	口径 (8.2) 底径 − 器高 〈13.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
198D	第78図12	土師器甕	40	口径 15.2 底径 7.0 器高 25.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
199B	第78図16	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈9.5〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ・ヘラナデ	褐色	石英・長石	
199B	第78図17	土師器高杯	15	口径 − 裾径 9.8 器高 〈2.4〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ・ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
199B	第78図18	土師器甕	15	口径 − 底径 6.2 器高 〈6.1〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
199B	第78図19	土師器壷	25	口径 16.0 底径 − 器高 〈13.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
200C	第79図1	土師器器台	60	受部径 6.6 脚部径 − 器高 〈4.0〉	脚部 − 受部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
200C	第79図2	土師器高杯	15	口径 − 裾径 − 器高 〈3.6〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
200C	第79図3	土師器台付甕	30	口径 − 底径 9.2 器高 〈7.2〉	脚部 刷毛・ナデ 体部 刷毛・ナデ 内面 ヘラケズリ・刷毛・ナデ	褐色	石英・長石	
200C	第79図4	土師器炉器台	85	受部径 8.0 脚部径 11.0 器高 12.1	器受部 ヨコナデ 脚部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
200C	第79図5	土師器壷	10	口径 − 底径 − 器高 〈6.0〉	底部 − 体部 刷毛・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
200C	第79図6	土師器甕	15	口径 − 底径 7.8 器高 〈5.6〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
202	第80図1	土師器器台	70	受部径 8.0 脚部径 11.6 器高 6.9	脚部 ヘラケズリ・ミガキ 受部 ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
202	第80図2	土師器高杯	30	口径 (20.6) 裾径 − 器高 〈10.1〉	脚部 ケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ミガキ・ヘラケズリ	黄褐色	石英・長石	
202	第80図3	土師器高杯	50	口径 − 裾径 10.8 器高 〈5.6〉	脚部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
202	第80図4	土師器甕	25	口径 (9.9) 底径 4.7 器高 12.8	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ヘラナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
217C	第83図1	ミニチュア土器	20	口径 (4.8) 底径 − 器高 〈3.0〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
217C	第83図2	土師器杯	25	口径 (12.2) 底径 − 器高 2.9	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
203	第86図1	土師器杯	80	口径 (13.8) 底径 3.8 器高 6.6	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
203	第86図2	土師器高杯	40	口径 17.9 裾径 − 器高 〈4.9〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
203	第86図3	土師器甕	95	口径 10.3 底径 4.4 器高 7.9	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
203	第86図4	土師器壷	60	口径 − 底径 5.0 器高 〈11.0〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
203	第86図5	土師器甕	10	口径 (18.0) 底径 − 器高 〈7.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗褐色	石英・長石	内外面赤彩
203	第86図6	土師器甕	40	口径 19.0 底径 − 器高 〈17.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ヘラナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	黄褐色	石英・長石・雲母	
203	第86図7	土師器甕	40	口径 − 底径 6.6 器高 〈8.0〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
203	第86図8	土師器甕	15	口径 (15.8) 底径 − 器高 〈12.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
203	第86図9	土師器甕	10	口径 − 底径 7.2 器高 〈9.2〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	

第15表　古墳時代後期出土土器観察表

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
002	第87図1	須恵器杯	20	口径 11.9 底径 － 器高 3.8	底部 － 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
002	第87図2	須恵器蓋	25	口径 12.8 天井径 － 器高 〈4.2〉	天井部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
002	第87図3	土師器杯	15	口径 (12.8) 底径 － 器高 〈3.5〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
002	第87図4	土師器杯	60	口径 (13.8) 底径 － 器高 3.8	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
002	第87図5	土師器杯	25	口径 (14.0) 底径 － 器高 〈3.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・雲母	
002	第87図6	土師器杯	35	口径 13.2 底径 － 器高 〈4.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
002	第87図7	土師器杯	30	口径 (14.2) 底径 － 器高 〈4.6〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石	
002	第87図8	土師器杯	45	口径 (15.5) 底径 － 器高 〈4.4〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
002	第87図9	土師器椀	70	口径 16.6 底径 － 器高 7.3	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
002	第87図10	土師器高杯	35	口径 － 裾径 9.8 器高 〈7.6〉	脚部 ナデ 外面 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩 二次焼成
002	第87図11	土師器甕	60	口径 － 底径 7.6 器高 〈26.6〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
002	第87図12	土師器甑	75	口径 20.8 孔径 8.0 器高 22.9	孔部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
004	第88図1	須恵器蓋	25	口径 (10.8) 天井径 － 器高 〈2.5〉	天井部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	自然釉がかかる
004	第88図2	土師器杯	45	口径 (11.2) 底径 － 器高 4.7	底部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 ヘラケズリ・ミガキ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・雲母	
004	第88図3	土師器杯	75	口径 (11.6) 底径 － 器高 3.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	褐色	石英・長石	
004	第88図4	土師器杯	35	口径 (11.4) 底径 4.9 器高 3.5	底部 回転糸切り・ナデ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	平安時代杯 混入品
004	第88図5	土師器甕	35	口径 15.8 底径 － 器高 〈17.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
004	第88図6	土師器甕	20	口径 (23.9) 底径 － 器高 〈14.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・粗いミガキ・ナデ 内面 ナデ・粗いミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
004	第89図7	土師器甕	40	口径 (23.8) 底径 － 器高 〈27.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
005	第89図10	土師器杯	20	口径 (13.0) 底径 － 器高 〈4.2〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
005	第89図11	土師器蓋	10	口径 － 天井径 － 器高 〈2.8〉	天井部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	つまみ 内外面赤彩
005	第89図12	土師器甕	80	口径 15.8 底径 － 器高 〈27.6〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
008	第90図1	須恵器甕	10	口径 (9.1) 底径 − 器高 〈3.3〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	口縁部・頸部外面に櫛描波状文
008	第90図2	ミニチュア土器	25	口径 (5.8) 底径 − 器高 〈3.3〉	底部 − 体部 ケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
008	第90図3	土師器蓋	50	口径 9.2 天井径 − 器高 3.6	天井部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
008	第90図4	土師器杯	20	口径 (11.2) 底径 − 器高 〈3.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ミガキ・ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
008	第90図5	土師器高杯	10	口径 (16.0) 裾径 − 器高 〈4.5〉	脚部 − 体部 ヘラナデ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ	暗黄褐色	石英・長石	
014	第91図1	土師器蓋	10	口径 − 天井径 − 器高 〈2.5〉	天井部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	つまみ 内外面赤彩
014	第91図2	土師器杯	95	口径 12.4 底径 − 器高 3.8	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
015	第91図3	土師器壷	30	口径 − 底径 − 器高 〈8.2〉	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	外面赤彩
019	第92図1	土師器高杯	20	口径 − 裾径 − 器高 〈5.3〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
019	第92図2	土師器鉢	80	口径 (16.0) 底径 − 器高 〈6.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
019	第92図3	土師器甕	10	口径 (19.4) 底径 − 器高 〈7.0〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
022	第93図1	須恵器蓋	20	口径 − 天井径 4.8 器高 〈2.6〉	天井部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
024	第93図2	手捏ね	90	口径 (4.4) 底径 3.4 器高 2.0	底部 ナデ 体部 ヨコナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
029	第93図3	須恵器杯	10	口径 (9.0) 底径 − 器高 〈2.2〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
029	第93図4	須恵器椀	10	口径 − 底径 − 器高 〈2.9〉	底部 − 体部 ナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
029	第93図5	須恵器蓋	20	口径 (15.8) 天井径 − 器高 〈2.3〉	天井部 − 体部 ナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
029	第93図6	土師器杯	40	口径 (13.3) 底径 − 器高 3.6	底部 − 体部 ナデ 内面 暗文・ナデ	橙褐色	石英・長石	
036	第94図1	土師器椀	40	口径 (11.8) 底径 − 器高 5.5	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
036	第94図2	土師器甕	10	口径 (16.5) 底径 − 器高 〈3.2〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
040	第95図1	土師器高杯	50	口径 − 裾径 11.6 器高 〈9.4〉	脚部 ヘラナデ 体部 ヘラナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	明赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
040	第95図2	土師器壷	10	口径 (15.6) 底径 − 器高 〈3.5〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
040	第95図3	土師器甕	30	口径 13.5 底径 − 器高 〈9.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
042	第95図4	土師器杯	15	口径 (15.0) 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
048	第96図2	土師器杯	20	口径 (13.2) 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
046	第97図1	土師器高杯	10	口径 (14.0) 裾径 − 器高 〈3.6〉	脚部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
046	第97図2	土師器高杯	10	口径 − 裾径 − 器高 〈6.4〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石	外面赤彩
054	第98図1	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 − 器高 〈3.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
054	第98図2	土師器杯	50	口径 (13.8) 底径 − 器高 5.4	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石	
054	第98図3	土師器甕	10	口径 (16.8) 底径 − 器高 〈7.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
057	第100図1	土師器杯	10	口径 (13.7) 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	内外面赤彩
058	第100図2	土師器杯	60	口径 13.6 底径 − 器高 4.3	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
058	第100図3	土師器杯	35	口径 (14.2) 底径 − 器高 3.9	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ミガキ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
058	第100図4	土師器杯	15	口径 (14.2) 底径 − 器高 〈3.1〉	底部 − 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
058	第100図5	土師器甕	10	口径 (21.0) 底径 − 器高 〈9.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
059	第100図6	手捏ね	85	口径 4.1 底径 2.5 器高 2.3	底部 ナデ・ヘラナデ 体部 ナデ・ヘラナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	褐色	石英・長石	
066A	第101図1	土師器杯	20	口径 (13.4) 底径 − 器高 〈4.1〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
066A	第101図2	土師器杯	20	口径 (15.8) 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
066A	第101図3	土師器杯	25	口径 (16.4) 底径 − 器高 〈5.4〉	底部 − 体部 ミガキ 内面 ヨコナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・雲母	
066A	第101図4	土師器鉢	95	口径 12.6 底径 3.6 器高 5.8	底部 ヘラナデ 体部 刷毛・ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	黒褐色	石英・長石	内外面赤彩
066A	第101図5	土師器坩	65	口径 − 底径 2.5 器高 〈6.5〉	底部 ナデ・ミガキ 体部 ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	外面赤彩
066A	第101図6	土師器甕	20	口径 12.6 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
069A	第103図1	須恵器杯	20	口径 (11.2) 底径 (7.8) 器高 3.0	底部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
069A	第103図2	須恵器蓋	10	口径 − 天井径 − 器高 〈1.8〉	天井部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	つまみ
069B	第103図3	土師器杯	15	口径 (14.2) 底径 − 器高 〈3.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
069B	第103図4	土師器高杯	15	口径 － 裾径 (7.8) 器高 〈1.3〉	脚部 ナデ 体部 － 内面 ナデ・ヘラナデ	褐色	石英・長石	外面赤彩
069B	第103図5	土師器甕	10	口径 (18.8) 底径 － 器高 〈6.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
069C	第103図6	土師器杯	10	口径 (11.8) 底径 － 器高 〈2.8〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	黒褐色	石英・長石	内外面黒色処理
069C	第103図7	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 － 器高 〈4.2〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
069C	第103図8	土師器杯	25	口径 (13.8) 底径 － 器高 〈4.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
069C	第103図9	土師器杯	95	口径 14.6 底径 － 器高 4.4	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	
069C	第103図10	土師器杯	45	口径 (15.8) 底径 (6.0) 器高 5.6	底部 刷毛・ケズリ・ナデ 体部 刷毛・ケズリ・ナデ 内面 刷毛・ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
069C	第103図11	土師器高杯	30	口径 － 裾径 － 器高 〈8.0〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩 脚部に小孔
069C	第103図12	土師器高杯	40	口径 － 裾径 (12.0) 器高 〈7.9〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	脚部に透孔
069C	第103図13	土師器鉢	50	口径 (12.9) 底径 6.4 器高 6.6	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
069C	第103図14	土師器甕	10	口径 (19.8) 底径 － 器高 〈3.3〉	底部 － 体部 ヨコナデ・刷毛 内面 刷毛・ヨコナデ	暗褐色	石英・長石	
069C	第103図15	土師器甕	20	口径 － 底径 8.4 器高 〈6.4〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
069C	第103図16	土師器甕	10	口径 － 底径 － 器高 〈7.6〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
069C	第103図17	ミニチュア土器	95	口径 6.4 底径 2.6 器高 3.7	底部 ナデ・ヘラナデ 体部 ナデ・ヘラナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
069E	第103図18	土師器杯	20	口径 (13.8) 底径 － 器高 〈3.8〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
069E	第103図19	土師器杯	85	口径 12.3 底径 5.9 器高 4.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	平安時代混入品
069A	第103図20	土師器甕	15	口径 (16.0) 底径 － 器高 〈5.2〉	底部 － 体部 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
069C 遺構外	第104図25	土師器杯	50	口径 (12.8) 底径 － 器高 〈4.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石	
069C 遺構外	第104図26	土師器高杯	15	口径 (20.6) 裾径 － 器高 〈5.3〉	脚部 － 体部 刷毛・ミガキ 内面 刷毛・ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・雲母	内外面赤彩
069C 遺構外	第104図27	土師器甕	25	口径 13.8 底径 － 器高 〈13.4〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
073	第105図1	土師器高杯	30	口径 － 裾径 － 器高 〈5.6〉	脚部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	褐色	石英・長石	
074	第105図3	須恵器蓋	10	口径 (13.6) 天井径 － 器高 〈2.4〉	天井部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
074	第105図4	土師器杯	20	口径 (12.4) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	
074	第105図5	土師器杯	30	口径 (15.0) 底径 − 器高 〈4.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
074	第105図6	土師器甕	10	口径 − 底径 6.3 器高 〈2.4〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・雲母	内面黒色処理
074	第105図7	土師器甕	20	口径 − 底径 8.7 器高 〈3.9〉	底部 木葉痕 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
074	第105図8	土師器甕	60	口径 18.6 底径 − 器高 〈18.6〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
080	第107図1	須恵器高台付杯	20	口径 − 底径 (9.6) 器高 〈1.5〉	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	奈良時代混入品
080	第107図2	須恵器壺	20	口径 − 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 ナデ・列点文 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
080	第107図3	土師器杯	90	口径 11.0 底径 − 器高 4.1	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
080	第107図4	土師器杯	15	口径 (12.0) 底径 − 器高 〈3.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	暗褐色	石英・長石	
080	第107図5	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 − 器高 〈3.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	内外面黒色処理
080	第107図6	土師器杯	20	口径 (12.0) 底径 − 器高 〈4.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・雲母	内外面黒色処理
080	第107図7	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 − 器高 〈3.4〉	底部 − 体部 刷毛・ケズリ・ナデ 内面 ミガキ	明褐色	石英・長石	内外面黒色処理
080	第107図8	土師器杯	25	口径 (13.8) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
080	第107図9	土師器杯	45	口径 (13.4) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石	
080	第107図10	土師器杯	95	口径 13.2 底径 − 器高 4.8	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
080	第107図11	土師器高杯	20	口径 − 裾径 11.1 器高 〈2.6〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ヘラケズリ・ナデ	黒褐色	石英・長石	
080	第107図12	手捏ね	35	口径 − 底径 (4.2) 器高 〈3.3〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
080	第107図13	土師器甕	20	口径 − 底径 (3.0) 器高 〈4.8〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
080	第107図14	土師器甕	10	口径 (19.9) 底径 − 器高 〈5.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ・ヨコナデ	赤褐色	石英・長石	
082	第107図20	須恵器杯	完形	口径 9.8 底径 − 器高 4.4	底部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	底部外面にヘラ記号
082	第107図21	須恵器杯	20	口径 (12.0) 底径 − 器高 〈3.0〉	底部 − 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	
082	第107図22	須恵器蓋	25	口径 (13.0) 天井径 − 器高 〈3.5〉	天井部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
082	第107図23	土師器高杯	20	口径 － 裾径 － 器高 〈7.2〉	脚部 ヘラナデ 体部 ヘラナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
083	第107図28	須恵器杯	10	口径 〈11.8〉 底径 － 器高 〈2.8〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
083	第107図29	土師器杯	30	口径 13.8 底径 － 器高 4.2	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
093	第107図30	土師器甕	20	口径 － 底径 7.0 器高 〈2.3〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
086	第108図1	土師器杯	15	口径 〈12.8〉 底径 － 器高 〈4.2〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
086	第108図2	土師器杯	15	口径 〈15.1〉 底径 － 器高 〈3.9〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
086	第108図3	手捏ね	95	口径 7.3 底径 7.2 器高 3.5	底部 木葉痕 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
086	第108図4	土師器甕	15	口径 〈17.0〉 底径 － 器高 〈7.1〉	底部 － 体部 刷毛・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
090	第109図1	須恵器杯	10	口径 〈10.4〉 底径 － 器高 〈2.1〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
090	第109図2	須恵器杯	10	口径 〈13.0〉 底径 － 器高 〈2.7〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
090	第109図3	須恵器杯	10	口径 〈13.0〉 底径 － 器高 3.4	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
090	第109図4	土師器杯	70	口径 13.2 底径 － 器高 3.8	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
090	第109図5	土師器杯	70	口径 13.2 底径 － 器高 3.6	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
090	第109図6	土師器杯	25	口径 〈13.0〉 底径 － 器高 3.7	底部 － 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・雲母	
090	第109図7	土師器杯	15	口径 〈14.0〉 底径 － 器高 〈3.2〉	底部 － 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	
090	第109図8	土師器杯	20	口径 〈16.6〉 底径 － 器高 〈5.2〉	底部 － 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	
090	第109図9	土師器杯	10	口径 〈18.8〉 底径 － 器高 〈3.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	黒褐色	石英・長石・雲母	
090	第109図10	土師器高杯	10	口径 － 裾径 〈12.0〉 器高 〈3.0〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 － 内面 ヘラケズリ	明褐色	石英・長石・スコリア	
090	第110図11	土師器鉢	60	口径 19.0 底径 － 器高 〈9.9〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	黒褐色	石英・長石	
090	第110図12	土師器甕	10	口径 〈15.2〉 底径 － 器高 〈5.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	
095B	第111図1	土師器杯	15	口径 〈13.8〉 底径 － 器高 〈3.7〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	内外面赤彩
095B	第111図2	土師器杯	35	口径 〈13.6〉 底径 － 器高 〈3.4〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
095B	第111図3	土師器杯	15	口径 (13.6) 底径 − 器高 〈2.9〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
095B	第111図4	土師器杯	10	口径 (20.0) 底径 − 器高 〈4.6〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
095B	第111図5	須恵器壷	10	口径 (7.0) 底径 − 器高 〈3.9〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
095B	第111図6	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈6.2〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
095B	第111図7	土師器甕	15	口径 13.8 底径 − 器高 〈5.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	
095B	第112図8	土師器甕	45	口径 16.7 底径 − 器高 〈24.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
095B	第112図9	土師器甕	40	口径 (16.8) 底径 6.5 器高 28.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
095C	第112図14	土師器杯	15	口径 (13.0) 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
096B	第114図1	須恵器杯	10	口径 (11.0) 底径 − 器高 〈2.6〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
096B	第114図2	須恵器蓋	10	口径 (15.8) 天井径 − 器高 〈2.1〉	天井部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
096A	第114図3	土師器高杯	75	口径 16.2 裾径 − 器高 〈10.2〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
096A	第114図4	土師器高杯	20	口径 − 裾径 − 器高 〈7.1〉	脚部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
096B	第114図5	土師器甕	20	口径 (21.8) 底径 − 器高 〈14.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
096B	第114図6	土師器甕	20	口径 (25.6) 底径 − 器高 〈13.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
097	第114図7	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 − 器高 〈3.5〉	底部 − 体部 ヘラナデ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
100	第115図1	土師器甕	10	口径 (24.6) 底径 − 器高 〈14.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
100	第115図2	土師器甕	15	口径 (24.3) 底径 − 器高 〈24.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ヘラナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
102	第116図1	土師器杯	10	口径 (12.8) 底径 − 器高 〈3.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石	
102	第116図2	土師器高杯	15	口径 − 裾径 − 器高 〈2.3〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石	内面黒色処理
102	第116図3	土師器高杯	40	口径 10.6 裾径 − 器高 5.6	脚部 ナデ 体部 − 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
102	第116図4	土師器甕	10	口径 (17.4) 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
103	第118図1	土師器杯	25	口径 (12.8) 底径 − 器高 3.5	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
103	第118図2	土師器杯	20	口径 (13.4) 底径 − 器高 〈3.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
103	第118図3	土師器杯	65	口径 12.3 底径 − 器高 4.7	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
103	第118図4	土師器杯	25	口径 (13.8) 底径 − 器高 〈3.9〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
103	第118図5	土師器高台付杯	15	口径 − 底径 5.6 器高 〈1.9〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石	平安時代混入品 内面黒色処理
103	第118図6	土師器椀	30	口径 (12.0) 底径 − 器高 6.2	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ケズリ・ナデ	明赤褐色	石英・長石	旧104−13
105	第118図11	土師器杯	50	口径 9.4 底径 5.0 器高 2.6	底部 − 体部 − 内面 ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
105	第118図12	土師器杯	15	口径 (14.6) 底径 − 器高 〈3.6〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
105	第118図13	土師器高杯	10	口径 (18.0) 裾径 − 器高 〈4.1〉	脚部 − 体部 − 内面 −	橙褐色	石英・長石	内外面赤彩
105	第118図14	土師器高杯	40	口径 − 裾径 10.4 器高 〈6.2〉	脚部 ヘラケズリ 体部 − 内面 ヘラケズリ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
105	第118図15	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈7.7〉	脚部 − 体部 − 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	
105	第118図16	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈8.0〉	脚部 ナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石	
105	第119図17	土師器甕	10	口径 (14.4) 底径 − 器高 〈5.7〉	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
105	第119図18	土師器甕	10	口径 (20.4) 底径 − 器高 〈7.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
106	第119図23	須恵器蓋	15	口径 (10.6) 天井径 − 器高 〈2.8〉	天井部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
106	第119図24	須恵器高台付杯	15	口径 − 底径 (10.8) 器高 〈3.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	奈良時代混入品
106	第119図25	土師器高杯	10	口径 − 裾径 − 器高 〈3.0〉	脚部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
106	第119図26	土師器甕	10	口径 (13.2) 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
106	第119図27	土師器甕	50	口径 18.8 底径 − 器高 〈17.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
107	第120図1	土師器杯	30	口径 (12.2) 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	
107	第120図2	土師器杯	60	口径 13.6 底径 − 器高 3.4	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	内外面黒色処理
107	第120図3	土師器椀	85	口径 11.8 底径 − 器高 7.7	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ミガキ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
107	第120図4	土師器高杯	80	口径 15.3 裾径 − 器高 〈4.7〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩 内面黒色処理

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
107	第120図5	土師器高杯	20	口径 － 裾径 － 器高 〈4.8〉	脚部 ヘラナデ 体部 － 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
107	第120図6	土師器甕	65	口径 16.8 底径 6.3 器高 26.2	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
107	第120図7	土師器甕	80	口径 15.4 底径 － 器高 〈23.5〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
107	第121図8	土師器甕	85	口径 18.4 底径 8.1 器高 28.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
107	第121図9	土師器甕	20	口径 〈25.6〉 底径 － 器高 〈22.0〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
111	第122図1	土師器高杯	30	口径 〈17.0〉 裾径 － 器高 〈4.3〉	底部 － 脚部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	黄褐色	石英・長石	
111	第122図2	土師器甕	40	口径 16.8 底径 7.0 器高 28.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
114	第123図1	土師器杯	10	口径 〈12.8〉 底径 － 器高 〈3.4〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
114	第123図2	土師器高杯	20	口径 － 裾径 － 器高 〈5.4〉	脚部 ナデ 体部 － 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
116	第123図3	土師器杯	55	口径 〈10.8〉 底径 － 器高 3.2	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・雲母	
116	第123図4	土師器杯	25	口径 〈10.0〉 底径 － 器高 〈3.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・雲母	
116	第123図5	土師器杯	40	口径 〈11.8〉 底径 － 器高 3.6	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
116	第123図6	土師器杯	25	口径 〈14.0〉 底径 － 器高 〈3.5〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石	
116	第123図7	土師器杯	60	口径 〈12.4〉 底径 8.8 器高 4.6	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
116	第123図8	土師器杯	65	口径 13.8 底径 7.2 器高 4.4	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石	
116	第123図9	土師器甕	20	口径 － 底径 6.8 器高 〈4.8〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
118	第124図1	土師器杯	55	口径 〈14.2〉 底径 － 器高 3.8	底部 － 体部 刷毛・ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
120	第124図2	土師器杯	15	口径 〈12.6〉 底径 － 器高 〈3.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	黄褐色	石英・長石・雲母	
120	第124図3	土師器高杯	10	口径 〈14.2〉 裾径 － 器高 〈3.9〉	脚部 － 体部 ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	黒褐色	石英・長石	
122	第125図1	土師器杯	85	口径 － 底径 － 器高 〈4.1〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
122	第125図2	土師器杯	45	口径 〈14.0〉 底径 － 器高 4.6	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
122	第125図3	土師器杯	25	口径 〈12.8〉 底径 － 器高 〈3.1〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・雲母	内面黒色処理

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
122	第125図4	土師器高杯	20	口径 － 裾径 － 器高 〈4.3〉	脚部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ・ヘラケズリ	黄褐色	石英・長石	
122	第125図5	土師器甕	15	口径 (20.4) 底径 － 器高 〈9.3〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
122	第125図6	土師器甕	10	口径 (19.8) 底径 － 器高 〈6.1〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・雲母	
122	第125図7	土師器甕	20	口径 － 底径 (9.2) 器高 〈10.3〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
124	第126図1	須恵器杯	10	口径 (14.1) 底径 － 器高 〈3.0〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
124	第126図2	須恵器杯	20	口径 (13.7) 底径 － 器高 4.6	底部 － 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
124	第126図3	須恵器蓋	10	口径 (13.8) 天井径 － 器高 〈3.8〉	天井部 － 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
124	第126図4	須恵器蓋	30	口径 (14.8) 天井径 － 器高 4.0	天井部 － 体部 ナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	天井部にヘラ記号
124	第126図5	土師器杯	45	口径 (13.8) 底径 － 器高 4.4	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
124	第126図6	土師器杯	35	口径 (13.4) 底径 － 器高 5.1	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
124	第126図7	土師器杯	60	口径 14.8 底径 － 器高 4.2	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
124	第126図8	土師器杯	20	口径 (14.4) 底径 － 器高 〈5.2〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
124	第126図9	土師器鉢	30	口径 (14.4) 底径 － 器高 〈4.5〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
124	第126図10	土師器鉢	50	口径 (14.4) 底径 (3.6) 器高 〈8.0〉	底部 木葉痕・ケズリ・ナデ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ	褐色	石英・長石・雲母	内面黒色処理
124	第126図11	土師器高杯	15	口径 － 裾径 － 器高 〈5.5〉	脚部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 － 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
124	第126図12	土師器甕	10	口径 － 底径 2.9 器高 〈1.7〉	底部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・雲母	外面黒色処理 底部穿孔
124	第126図13	土師器甕	10	口径 (12.8) 底径 － 器高 〈6.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
124	第126図14	土師器壷	10	口径 (14.0) 底径 － 器高 〈6.6〉	底部 － 体部 ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
126A	第128図1	須恵器杯	10	口径 (11.9) 底径 － 器高 〈2.4〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
126A	第128図2	須恵器蓋	15	口径 (13.8) 天井径 － 器高 〈3.6〉	天井部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
126A	第128図3	土師器杯	80	口径 11.9 底径 － 器高 4.6	底部 － 体部 ケズリ・ミガキ・ナデ 内面 ミガキ	黒褐色	石英・長石	
126A	第128図4	土師器杯	30	口径 (13.8) 底径 － 器高 〈3.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
126A	第128図5	土師器杯	20	口径 (14.0) 底径 − 器高 〈2.8〉	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	褐色	石英・長石	
126A	第128図6	土師器杯	40	口径 (14.0) 底径 − 器高 4.1	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石	
126A	第128図7	土師器高杯	10	口径 (17.0) 裾径 − 器高 〈5.0〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
126A	第128図8	土師器高杯	10	口径 − 裾径 − 器高 〈7.1〉	脚部 ミガキ・ナデ 体部 − 内面 刷毛	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
126A	第128図9	土師器高杯	25	口径 − 裾径 − 器高 〈9.0〉	脚部 ケズリ・ミガキ・ナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
126A	第128図10	土師器鉢	70	口径 13.1 底径 6.0 器高 9.3	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
126A	第128図11	土師器甕	20	口径 (21.0) 底径 − 器高 〈19.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
126B	第128図12	土師器甕	10	口径 (21.8) 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石	
127	第128図13	須恵器杯	10	口径 (13.0) 底径 − 器高 〈2.2〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
129	第128図14	土師器椀	70	口径 (10.8) 底径 − 器高 5.9	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
161B	第129図1	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 − 器高 〈3.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	
161B	第129図2	土師器高杯	15	口径 − 裾径 − 器高 〈5.2〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	脚部に透孔
161B	第129図3	須恵器高台付杯	55	口径 (14.3) 底径 9.7 器高 4.5	底部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	奈良時代混入品
161B	第129図4	土師器甕	10	口径 (13.4) 底径 − 器高 〈10.1〉	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
161B	第129図5	土師器甕	20	口径 − 底径 10.2 器高 〈14.5〉	底部 ケズリ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
161E	第129図7	土師器杯	10	口径 (12.7) 底径 − 器高 〈7.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
161E	第129図8	土師器杯	10	口径 (13.0) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石	
161G	第131図1	須恵器杯	10	口径 (11.2) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
161G	第131図2	須恵器杯	10	口径 (13.6) 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
161G	第131図3	土師器高杯	10	口径 − 裾径 (10.4) 器高 〈8.6〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ヘラケズリ・ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
161G	第131図4	手捏ね	70	口径 (5.3) 底径 3.6 器高 2.9	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石	
161H	第131図5	須恵器蓋	10	口径 (10.6) 天井径 − 器高 〈3.2〉	天井部 − 体部 ナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
161H	第131図6	須恵器蓋	40	口径 (15.8) 天井径 − 器高 4.7	天井部 − 体部 ナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
161H	第131図7	土師器杯	15	口径 (13.0) 底径 − 器高 3.2	底部 − 体部 刷毛・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
161H	第131図8	土師器杯	20	口径 (13.5) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
161H	第131図9	土師器杯	20	口径 (12.2) 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	
161H	第131図10	土師器杯	10	口径 (13.5) 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
161H	第131図11	土師器杯	40	口径 (15.2) 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
161H	第131図12	土師器甕	15	口径 − 底径 6.7 器高 〈2.2〉	底部 木葉痕 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
161J	第131図13	須恵器杯	10	口径 (12.6) 底径 − 器高 〈2.5〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
161J	第131図14	須恵器蓋	10	口径 (12.8) 天井径 − 器高 〈3.2〉	天井部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
161K	第131図15	土師器杯	30	口径 (13.1) 底径 − 器高 4.8	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
161I	第131図16	土師器杯	10	口径 (13.4) 底径 − 器高 〈3.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石	
161I	第131図17	土師器甕	10	口径 (19.4) 底径 − 器高 〈19.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
164A	第132図1	須恵器杯	20	口径 (12.8) 底径 − 器高 〈4.0〉	底部 − 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
164A	第132図2	土師器杯	30	口径 (13.5) 底径 − 器高 4.0	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	内外面黒色処理
164A	第132図3	土師器杯	95	口径 12.5 底径 − 器高 3.8	底部 − 体部 ナデ・ヘラケズリ 内面 ミガキ・ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
164A	第132図4	土師器甕	60	口径 14.4 底径 − 器高 〈17.3〉	底部 − 体部 ナデ・ケズリ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
166A	第132図5	土師器杯	25	口径 (13.6) 底径 − 器高 4.1	底部 回転糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	平安時代混入品
166A	第132図6	土師器杯	40	口径 (12.2) 底径 5.5 器高 4.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	平安時代混入品
200A	第133図1	土師器杯	50	口径 (11.8) 底径 6.4 器高 4.0	底部 木葉痕・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒色	石英・長石	内外面黒色処理
200A	第133図2	土師器杯	10	口径 (15.0) 底径 − 器高 〈3.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
200A	第133図3	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 − 器高 〈2.6〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
200A	第133図4	土師器高台付杯	15	口径 − 底径 − 器高 〈2.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石	平安時代混入品

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
200A	第133図5	土師器甕	10	口径 － 底径 5.4 器高 〈2.7〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
204B	第134図1	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 － 器高 〈3.6〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
222	第136図1	土師器杯	10	口径 (14.1) 底径 － 器高 〈4.2〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石	
222	第136図2	土師器甕	20	口径 (10.8) 底径 － 器高 〈5.0〉	底部 － 体部 － 内面 －	赤褐色	石英・長石	
222	第136図3	土師器甕	40	口径 13.6 底径 － 器高 11.5	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
225C	第137図1	須恵器杯	10	口径 12.8 底径 － 器高 〈2.4〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
253	第138図1	土師器杯	70	口径 8.8 底径 4.8 器高 3.3	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
253	第138図2	土師器杯	15	口径 (14.8) 底径 － 器高 〈2.8〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
253	第138図3	土師器杯	25	口径 (12.2) 底径 － 器高 〈2.9〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
253	第138図4	土師器杯	15	口径 (13.0) 底径 － 器高 〈3.4〉	底部 － 体部 ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	
253	第136図5	土師器甕	30	口径 (13.6) 底径 － 器高 〈9.9〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
253	第136図6	土師器甕	40	口径 (16.4) 底径 － 器高 〈6.9〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
253	第136図7	土師器甕	30	口径 15.2 底径 － 器高 〈7.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	
253	第136図8	土師器甕	80	口径 12.8 底径 5.1 器高 20.6	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
253	第136図9	土師器甕	30	口径 (15.4) 底径 － 器高 〈21.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	器面は荒れている
253	第136図10	土師器甕	40	口径 18.6 底径 － 器高 〈18.2〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
253	第136図11	土師器甕	40	口径 16.4 底径 － 器高 〈22.5〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
253	第136図12	土師器甕	10	口径 － 底径 6.0 器高 〈3.3〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	橙褐色	石英・長石	
257	第139図1	須恵器杯	30	口径 (11.6) 底径 (7.6) 器高 〈3.6〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
257	第139図2	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 － 器高 〈2.8〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
257	第139図3	土師器甕	10	口径 (20.0) 底径 － 器高 〈4.2〉	底部 － 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	平安時代混入品
257	第139図4	土師器甕	10	口径 － 底径 (6.4) 器高 〈3.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	平安時代混入品 器面は荒れている

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
257	第139図5	土師器甕	10	口径 － 底径 (10.0) 器高 〈1.9〉	底部 手持ちヘラケズリ・ナデ 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	平安時代混入品
257	第139図6	土師器甕	10	口径 － 底径 6.0 器高 〈4.2〉	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	平安時代混入品
257	第139図7	土師器杯	20	口径 － 底径 5.2 器高 〈2.1〉	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ミガキ	褐色	石英・長石	平安時代混入品 内面黒色処理
257	第139図8	土師器高台	10	口径 － 底径 (8.8) 器高 〈2.6〉	底部 － 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	褐色	石英・長石	平安時代混入品
261	第139図9	土師器杯	20	口径 (13.4) 底径 － 器高 〈4.1〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
261	第139図10	須恵器杯	30	口径 － 底径 8.2 器高 〈1.0〉	底部 回転糸切り・回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	奈良時代混入品
271E	第140図1	土師器甕	15	口径 (14.2) 底径 － 器高 〈11.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ・ヨコナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
283	第141図1	須恵器杯	80	口径 11.6 底径 － 器高 3.9	底部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	底部外面にヘラ記号
283	第141図2	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 － 器高 〈3.1〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ミガキ	明褐色	石英・長石	
283	第141図3	土師器杯	20	口径 (12.8) 底径 － 器高 〈3.3〉	底部 － 体部 ケズリ・ナデ 内面 ミガキ	明赤褐色	石英・長石	
283	第141図4	土師器杯	95	口径 13.4 底径 － 器高 3.9	底部 ケズリ・ミガキ 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ミガキ	黒褐色	石英・長石	内外面黒色処理
283	第141図5	土師器杯	10	口径 (14.0) 底径 － 器高 〈3.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	内外面黒色処理
283	第141図6	土師器杯	80	口径 13.2 底径 － 器高 4.8	底部 ケズリ・ナデ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
283	第141図7	土師器杯	95	口径 14.8 底径 － 器高 4.1	底部 ケズリ・ミガキ 体部 ケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
283	第141図8	土師器器台	70	受部径 7.6 脚部径 (9.8) 器高 7.8	脚部 ヨコナデ・刷毛・ナデ 受部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	前期混入品
283	第141図9	土師器高杯	10	口径 (20.6) 裾径 － 器高 〈5.6〉	脚部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石	
283	第141図10	土師器高杯	20	口径 (21.2) 裾径 － 器高 〈5.5〉	脚部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヨコナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
283	第141図11	土師器甕	50	口径 16.2 底径 5.3 器高 24.8	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
283	第141図12	土師器甕	20	口径 (17.1) 底径 － 器高 〈12.5〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
283	第141図13	土師器甕	30	口径 (21.4) 底径 － 器高 〈19.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
283	第141図14	土師器甕	15	口径 － 底径 5.6 器高 〈6.6〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
287	第142図1	須恵器杯	10	口径 (14.2) 底径 － 器高 〈4.1〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	奈良時代混入品

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
287	第142図2	土師器杯	30	口径 (13.2) 底径 − 器高 3.9	底部 ケズリ・ナデ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ミガキ	赤褐色	石英・長石・雲母	
287	第142図3	土師器甕	10	口径 − 底径 6.4 器高 〈2.8〉	底部 − 体部 − 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
307	第144図1	土師器杯	15	口径 (13.4) 底径 − 器高 3.0	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石	
307	第144図2	土師器杯	50	口径 (15.0) 底径 − 器高 3.9	底部 ヘラケズリ・粗いミガキ 体部 ヘラケズリ・粗いミガキ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
307	第144図3	土師器杯	85	口径 12.7 底径 − 器高 4.4	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗黄褐色	石英・長石	
307	第144図4	土師器杯	35	口径 13.7 底径 − 器高 〈4.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
307	第144図5	土師器杯	40	口径 (14.8) 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・粗いミガキ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	
307	第144図6	土師器杯	15	口径 (13.6) 底径 − 器高 〈4.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石	
307	第144図7	土師器杯	40	口径 15.8 底径 − 器高 4.4	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
307	第144図8	手捏ね	80	口径 8.3 底径 5.5 器高 3.1	底部 木葉痕 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
307	第144図9	土師器甕	60	口径 − 底径 6.4 器高 〈23.0〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
307	第144図10	弥生土器壷	25	口径 − 底径 − 器高 〈8.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
326	第144図13	土師器杯	10	口径 (12.4) 底径 − 器高 〈2.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
308	第145図1	須恵器蓋	95	口径 12.0 天井径 4.4 器高 4.4	天井部 − 体部 ヨコナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
308	第145図2	土師器杯	50	口径 13.0 底径 − 器高 4.3	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
308	第145図3	土師器高杯	80	口径 13.3 裾径 − 器高 〈9.0〉	脚部 − 体部 − 内面 ミガキ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
308	第145図4	土師器椀	95	口径 12.4 底径 6.0 器高 7.3	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・雲母	
308	第145図5	土師器甕	50	口径 (16.0) 底径 6.4 器高 25.8	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
308	第145図6	土師器甕	90	口径 15.3 底径 6.1 器高 27.5	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
308	第145図7	土師器甕	70	口径 18.5 底径 6.8 器高 32.6	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
317	第145図8	土師器甕	90	口径 15.4 底径 − 器高 〈20.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	明黄褐色	石英・長石・スコリア	

古墳

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
098	第146図1	土師器杯	95	口径 13.2 底径 − 器高 4.7	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
098	第146図2	土師器甕	10	口径 − 底径 (4.8) 器高 〈2.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	混入品
098	第146図3	土師器甑	10	口径 − 孔径 (15.0) 器高 〈4.4〉	孔部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ・ヘラケズリ	暗褐色	石英・長石	混入品

遺構外

D8-60	第147図1	須恵器蓋	25	口径 (12.4) 天井径 − 器高 4.2	天井部 回転ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	自然釉がかかる 旧40-212
C7-98	第147図2	土師器杯	20	口径 10.8 底径 3.6 器高 3.8	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩 C7-98-3
E7-22	第147図3	土師器杯	50	口径 12.6 底径 − 器高 5.1	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	E7-22-59
E7-33	第147図4	土師器椀	50	口径 12.6 底径 4.8 器高 6.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	E7-33-25・27・36・37
E6-92	第147図5	土師器坩	70	口径 11.9 底径 3.8 器高 6.9	底部 ヘラケズリ 体部 刷毛・ヘラケズリ・ナデ 内面 刷毛・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	旧113-16・21・22
190	第147図6	土師器坩	20	口径 (12.4) 底径 − 器高 〈4.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	190-11
294	第147図7	土師器鉢	90	口径 15.2 底径 4.3 器高 6.0	底部 ヘラケズリ 体部 刷毛・ナデ・ミガキ 内面 刷毛・ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
351A	第147図8	土師器甕	10	口径 (12.9) 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 刷毛 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
塚	第147図9	土師器甕	10	口径 (17.4) 底径 − 器高 〈5.1〉	底部 − 体部 刷毛・ナデ 内面 刷毛ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	塚9
塚	第147図10	土師器甕	10	口径 (18.4) 底径 − 器高 〈6.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・雲母	塚11
第1地点14トレンチ	第147図11	土師器甕	20	口径 (16.3) 底径 − 器高 〈13.9〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 刷毛・ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	1-14-7・8・17
294	第147図12	土師器壺	完形	口径 9.8 底径 3.1 器高 10.3	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 刷毛・ナデ 内面 刷毛・ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	外面赤彩
E7-27	第147図13	土師器壷	15	口径 10.0 底径 − 器高 〈7.5〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石	E7-27-1
E7-33	第147図14	土師器壷	10	口径 (16.0) 底径 − 器高 〈6.3〉	底部 − 体部 ヨコナデ 内面 ナデ・ヨコナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	E7-33-7
351A	第147図15	須恵器杯	10	口径 (11.0) 底径 − 器高 〈2.5〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	351A-1
E5-56	第147図16	須恵器杯	10	口径 (14.4) 底径 − 器高 〈2.9〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	5E-56-1
351A	第147図17	須恵器杯	10	口径 (12.4) 底径 − 器高 〈3.1〉	底部 − 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	351A-3
072	第147図18	土師器杯	10	口径 (12.8) 底径 − 器高 〈3.0〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヨコナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	72-57
塚	第147図19	土師器杯	10	口径 (14.1) 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	塚6

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
351A	第147図20	土師器杯	10	口径 (16.1) 底径 − 器高 〈4.1〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヨコナデ	黄白褐色	石英・長石	351A-4
D8-51	第147図21	土師器杯	20	口径 (14.4) 底径 − 器高 〈4.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	旧40-152・213
190	第147図22	手捏ね	90	口径 5.0 底径 3.8 器高 1.4	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	190-14
072	第147図23	ミニチュア土器	完形	口径 2.9 底径 2.1 器高 3.8	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	72-57
072	第147図24	小型鉢	35	口径 (7.4) 底径 (4.0) 器高 4.7	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・雲母	72-19
第1地点14トレンチ	第147図25	土師器甕	40	口径 17.2 底径 − 器高 (15.6)	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	14T-5・7
第2地点5トレンチ	第147図26	土師器甑	50	口径 (24.6) 底径 − 器高 〈18.7〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	5T-31・33

第16表　奈良・平安時代以降出土土器観察表

（　）推定値　〈　〉現存値

遺構番号	挿図番号	器　種	遺存度(%)	計測値(cm)	調　整	色　調	胎　土	備　考
013	第150図1	須恵器蓋	100	口　径　16.0 天井径　－ 器　高　3.6	天井部　－ 体　部　回転ヘラケズリ・ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・長石	
013	第150図2	須恵器蓋	10	口　径　(13.8) 天井径　－ 器　高　〈1.9〉	天井部　－ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・長石	天井部に自然釉
013	第150図3	須恵器蓋	10	口　径　(13.8) 天井径　－ 器　高　〈2.1〉	天井部　－ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・長石	
013	第150図4	須恵器 高台付杯	40	口　径　(15.0) 底　径　10.0 器　高　4.0	底　部　回転ヘラケズリ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	灰色	石英・長石	
013	第150図5	須恵器 高台付杯	50	口　径　(14.5) 底　径　9.3 器　高　4.5	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・長石	やや焼き歪みがある
013	第150図6	須恵器 高台付杯	30	口　径　(16.0) 底　径　10.2 器　高　4.1	底　部　回転ヘラケズリ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	灰色	石英・長石	
013	第150図7	土師器杯	10	口　径　(13.8) 底　径　－ 器　高　〈3.4〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
013	第150図8	土師器甕	10	口　径　(15.2) 底　径　－ 器　高　〈7.9〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ヨコナデ・ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
017	第151図1	須恵器杯 (高台付)	25	口　径　－ 底　径　8.4 器　高　〈2.7〉	底　部　回転ヘラケズリ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・雲母	
017	第151図2	土師器甕	10	口　径　(21.8) 底　径　－ 器　高　〈5.7〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ヨコナデ・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
092A	第152図1	須恵器杯	10	口　径　(12.2) 底　径　－ 器　高　〈3.7〉	底　部　－ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・長石	
092A	第152図2	須恵器甕	10	口　径　11.0 底　径　－ 器　高　〈2.2〉	底　部　－ 体　部　ナデ 内　面　ナデ	明灰色	石英・長石	
092A	第152図3	土師器甕	15	口　径　(21.0) 底　径　－ 器　高　〈11.5〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
092A	第152図4	土師器甕	30	口　径　(23.6) 底　径　－ 器　高　〈18.1〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ヘラナデ 内　面　ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
095A	第153図1	土師器甕	30	口　径　(15.0) 底　径　－ 器　高　〈11.8〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
095A	第153図2	土師器甕	30	口　径　(20.2) 底　径　－ 器　高　〈13.0〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ 内　面　ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石	
095A	第153図3	土師器甕	30	口　径　22.4 底　径　－ 器　高　〈17.0〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ 内　面　ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
095A	第153図4	土師器甕	30	口　径　(21.5) 底　径　－ 器　高　〈24.0〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ・ナデ 内　面　ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
095A	第153図5	土師器甕	65	口　径　(22.4) 底　径　5.2 器　高　31.4	底　部　ヘラケズリ 体　部　ヘラケズリ 内　面　ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
112	第154図1	土師器杯	90	口　径　14.4 底　径　9.5 器　高　4.6	底　部　ヘラケズリ 体　部　ヘラケズリ 内　面　ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
112	第154図2	土師器甕	30	口　径　15.8 底　径　－ 器　高　〈9.0〉	底　部　－ 体　部　ヘラケズリ 内　面　ヨコナデ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
161D	第155図1	土師器杯	80	口　径　14.3 底　径　12.4 器　高　3.5	底　部　手持ちヘラケズリ・ナデ 体　部　手持ちヘラケズリ・ナデ 内　面　ナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
161D	第155図2	土師器杯	60	口径 (15.3) 底径 7.4 器高 3.8	底部 ヘラケズリ 体部 ケズリ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
161D	第155図3	土師器甕	10	口径 (11.8) 底径 − 器高 〈4.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	161Aの破片と接合
204A	第156図1	須恵器蓋	10	口径 (16.2) 天井径 − 器高 〈2.7〉	天井部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・雲母	
204A	第156図2	須恵器杯	25	口径 (12.7) 底径 (7.8) 器高 〈4.5〉	底部 手持ちヘラケズリ・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・雲母	
204C	第156図3	須恵器杯	10	口径 (12.7) 底径 − 器高 〈4.3〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・雲母	
204A	第156図4	土師器甕	70	口径 20.2 底径 3.3 器高 28.7	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
214A	第157図1	須恵器蓋	40	口径 (17.4) 天井径 − 器高 4.1	天井部 − 体部 ナデ・回転ヘラケズリ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
214A	第157図2	土師器杯	10	口径 (13.8) 底径 − 器高 〈3.6〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
214A	第157図3	土師器椀	10	口径 − 底径 (6.0) 器高 〈2.9〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
214A	第157図4	土師器甕	10	口径 (20.6) 底径 − 器高 〈6.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
214B	第157図7	須恵器杯	75	口径 12.4 底径 8.2 器高 3.8	底部 回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	火襷痕
214B	第157図8	土師器甕	10	口径 (24.6) 底径 − 器高 〈2.5〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
214B	第157図9	土師器甑	10	口径 − 孔径 − 器高 〈8.0〉	孔部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	
214C	第158図1	須恵器杯	60	口径 12.6 底径 8.6 器高 4.1	底部 回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
214C	第158図2	土師器椀	30	口径 (14.0) 底径 − 器高 7.3	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
217B	第159図1	土師器杯	40	口径 (13.4) 底径 − 器高 4.2	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
217B	第159図2	土師器杯	65	口径 15.6 底径 − 器高 3.5	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明黄褐色	石英・長石・スコリア	
258	第160図1	須恵器蓋	80	口径 − 天井径 − 器高 〈1.9〉	天井部 − 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石	
258	第160図2	土師器高台付椀	20	口径 − 底径 8.7 器高 〈3.4〉	底部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
258	第160図3	手捏ね	20	口径 (8.6) 底径 (6.6) 器高 4.0	底部 木葉痕 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
258	第160図4	土師器甕	10	口径 − 底径 4.2 器高 6.1	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	
258	第160図5	土師器甕	15	口径 − 底径 (10.0) 器高 〈5.3〉	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
258	第160図6	土師器甕	10	口径 (22.4) 底径 − 器高 〈7.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
262	第161図1	須恵器杯	50	口径 13.0 底径 9.8 器高 3.2	底部 回転ヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	
262	第161図2	須恵器杯	70	口径 12.3 底径 7.5 器高 3.6	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・雲母	
262	第161図3	須恵器杯	70	口径 13.4 底径 7.7 器高 4.4	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰褐色	石英・雲母	
262	第161図4	土師器杯	50	口径 14.8 底径 9.7 器高 5.7	底部 ヘラケズリ・粗いミガキ 体部 ヘラケズリ・粗いミガキ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
262	第161図5	須恵器高杯	60	口径 − 裾径 12.8 器高 〈10.3〉	脚部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	脚部に長方形の透孔
262	第161図6	土師器台付甕	60	口径 13.0 底径 8.8 器高 13.8	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
262	第161図7	土師器甕	10	口径 (14.2) 底径 − 器高 〈5.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
262	第161図8	土師器甕	10	口径 (22.0) 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
262	第162図9	土師器甕	15	口径 (21.8) 底径 − 器高 〈11.3〉	底部 − 体部 ナデ・ヨコナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石	
262	第162図10	土師器甕	20	口径 (23.6) 底径 − 器高 〈14.2〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
262	第162図11	土師器甕	90	口径 19.4 底径 6.8 器高 24.9	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
262	第162図12	土師器甕	35	口径 (19.0) 底径 7.0 器高 −	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
263	第162図13	土師器杯	30	口径 − 底径 8.4 器高 〈2.7〉	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
263	第162図14	土師器甕	10	口径 (18.4) 底径 − 器高 〈7.9〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	

平安住居

037	第164図1	土師器杯	90	口径 12.6 底径 6.6 器高 4.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
037	第164図2	土師器杯	90	口径 13.0 底径 6.0 器高 4.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
037	第164図3	土師器杯	30	口径 (13.6) 底径 5.8 器高 4.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
037	第164図4	土師器杯	90	口径 13.2 底径 6.4 器高 5.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
037	第164図5	土師器杯	90	口径 14.7 底径 6.7 器高 5.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
037	第164図6	須恵器甕	10	口径 (20.2) 底径 − 器高 〈7.0〉	底部 − 体部 タタキ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
037	第164図7	須恵器甕	35	口径 (20.6) 底径 − 器高 〈16.8〉	底部 − 体部 タタキ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
037	第164図8	須恵器甕	40	口径 － 孔径 15.5 器高 〈23.0〉	孔部 ヘラケズリ 体部 タタキ・ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
060	第165図1	土師器杯	75	口径 12.3 底径 6.3 器高 4.3	底部 回転糸切り・回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
060	第165図2	土師器杯	30	口径 (11.6) 底径 (5.2) 器高 4.3	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石	
060	第165図3	土師器杯	60	口径 (13.0) 底径 5.3 器高 4.3	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
060	第165図4	土師器杯	40	口径 (13.4) 底径 (6.0) 器高 4.2	底部 － 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
060	第165図5	土師器甕	55	口径 － 底径 6.0 器高 〈9.2〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
060	第165図6	土師器甕	40	口径 － 底径 5.6 器高 〈8.5〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
060	第165図7	土師器甕	10	口径 (21.4) 底径 － 器高 〈5.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・雲母	
060	第165図8	土師器甕	20	口径 (24.8) 底径 － 器高 〈9.7〉	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
060	第165図9	土師器甕	80	口径 20.0 底径 (13.0) 器高 21.6	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
061A	第165図10	土師器杯	20	口径 (13.6) 底径 － 器高 〈3.7〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
061A	第165図11	土師器高台付杯	30	口径 － 底径 7.3 器高 〈2.6〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
061A	第165図12	須恵器甕	10	口径 － 底径 (14.0) 器高 〈13.0〉	底部 ヘラケズリ 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
067	第167図1	ミニチュア土器	90	口径 － 底径 3.5 器高 4.3	底部 ナデ 体部 ナデ・ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
069A	第167図2	土師器高台付椀	70	口径 19.2 底径 － 器高 〈5.8〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・雲母	
081A	第168図1	土師器杯	30	口径 (13.2) 底径 6.6 器高 4.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
081A	第168図2	土師器杯	85	口径 13.7 底径 6.4 器高 4.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
081A	第168図3	土師器杯	60	口径 14.1 底径 6.2 器高 5.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
081A	第168図4	土師器杯	30	口径 (14.0) 底径 6.6 器高 5.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
081A	第168図5	土師器杯	55	口径 12.8 底径 (5.0) 器高 4.6	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	体部外面に線刻判読不明
081A	第168図6	須恵器甕	10	口径 (20.0) 底径 － 器高 〈5.0〉	底部 － 体部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・雲母	
081B	第168図8	土師器杯	65	口径 10.9 底径 4.5 器高 3.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
081B	第168図9	土師器杯	70	口径 10.4 底径 4.8 器高 2.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
081B	第168図10	土師器杯	50	口径 10.6 底径 4.8 器高 2.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
104	第169図1	須恵器甕	10	口径 (20.0) 底径 − 器高 〈9.0〉	底部 − 体部 タタキ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
113A	第170図1	土師器杯	75	口径 12.5 底径 6.0 器高 3.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
113A	第170図2	土師器杯	20	口径 (12.9) 底径 6.2 器高 4.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
113A	第170図3	土師器高杯	20	口径 (15.2) 裾径 − 器高 〈4.8〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	古墳時代後期遺構外
113A	第170図4	須恵器甕	10	口径 (17.8) 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 タタキ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
113B	第170図5	土師器甕	10	口径 (23.4) 底径 − 器高 〈5.9〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・雲母	
141	第171図1	土師器杯	55	口径 12.4 底径 5.7 器高 4.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
141	第171図2	土師器杯	65	口径 12.8 底径 5.8 器高 4.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
141	第171図3	土師器杯	30	口径 (12.4) 底径 4.8 器高 5.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
141	第171図4	土師器杯	70	口径 12.8 底径 5.6 器高 4.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
141	第171図5	土師器杯	90	口径 12.6 底径 6.2 器高 4.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
141	第171図6	土師器甕	10	口径 (16.6) 底径 − 器高 〈4.1〉	底部 − 体部 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	暗褐色	石英・長石	
141	第171図7	須恵器甕	30	口径 19.2 底径 − 器高 〈26.6〉	底部 − 体部 タタキ・ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
161A	第172図1	土師器高台付杯	10	口径 − 底径 (8.0) 器高 〈3.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	161D-3と接合
198A	第173図1	土師器杯	25	口径 (13.8) 底径 (5.6) 器高 3.7	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
198A	第173図2	土師器杯	25	口径 (13.0) 底径 (5.6) 器高 4.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
198A	第173図3	土師器杯	70	口径 13.4 底径 6.1 器高 4.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
198A	第173図4	土師器足高高台付椀	30	口径 (14.6) 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
198A	第173図5	灰釉陶器皿	40	口径 (13.6) 底径 − 器高 −	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	
198A	第173図6	灰釉陶器椀	20	口径 (16.0) 底径 − 器高 −	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰白色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
198A	第173図7	緑釉陶器椀	30	口径 (17.2) 底径 (8.0) 器高 −	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	淡緑灰色	緻密 灰褐色	
198A	第173図8	土師器甕	10	口径 − 底径 (7.0) 器高 〈4.6〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
198A	第173図9	須恵器甕	30	口径 (19.4) 底径 − 器高 〈16.5〉	底部 − 体部 タタキ・ケズリ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
199A	第174図16	土師器小皿	完形	口径 9.0 底径 4.2 器高 2.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
199A	第174図17	土師器小皿	65	口径 9.6 底径 3.8 器高 2.7	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
211	第175図1	土師器杯	70	口径 12.8 底径 5.2 器高 4.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
217A	第176図1	須恵器杯	40	口径 (13.8) 底径 7.3 器高 4.1	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・雲母	
217A	第176図2	土師器杯	20	口径 12.8 底径 − 器高 〈3.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
217A	第176図3	土師器椀	20	口径 (11.2) 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石	
217A	第176図4	土師器甕	10	口径 (14.4) 底径 − 器高 〈5.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
217A	第176図5	土師器甕	10	口径 (20.4) 底径 − 器高 〈4.0〉	底部 − 体部 ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	暗褐色	石英・長石	
217A	第176図6	土師器甕	20	口径 − 底径 5.4 器高 〈9.5〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
224A	第177図1	土師器杯	40	口径 14.0 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
224A	第177図2	須恵器甕	15	口径 − 底径 (14.0) 器高 〈14.0〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	灰色	石英・雲母	
225A	第178図1	須恵器皿	95	口径 12.4 底径 5.3 器高 1.9	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
225A	第178図2	須恵器杯	15	口径 (12.4) 底径 (6.0) 器高 4.0	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
225A	第178図3	須恵器杯	60	口径 (12.6) 底径 7.6 器高 3.7	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・雲母	
225A	第178図4	須恵器甕	40	口径 20.6 底径 − 器高 〈15.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・タタキ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
225A	第178図5	土師器甕	20	口径 (21.0) 底径 − 器高 〈11.5〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
225A	第178図6	土師器甕	10	口径 (21.0) 底径 − 器高 〈8.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	明黄褐色	石英・長石・スコリア	
225A	第178図7	土師器甕	10	口径 (22.0) 底径 − 器高 〈6.3〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
225B	第179図1	須恵器蓋	15	口径 − 天井径 − 器高 〈2.1〉	天井部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
225B	第179図2	須恵器杯	15	口径 － 底径 (6.6) 器高 〈1.5〉	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石・スコリア	
225B	第179図3	須恵器杯	20	口径 (13.4) 底径 (9.0) 器高 3.8	底部 － 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石・スコリア	
225B	第179図4	須恵器杯	40	口径 (13.2) 底径 (7.4) 器高 4.5	底部 手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石・スコリア	
225B	第179図5	須恵器甕	10	口径 － 底径 － 器高 〈7.0〉	底部 タタキ 体部 タタキ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
225B	第179図6	土師器甕	15	口径 (13.4) 底径 － 器高 〈5.0〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ・ヨコナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
225B	第179図7	土師器甕	30	口径 13.4 底径 － 器高 〈11.1〉	底部 － 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
240	第181図1	緑釉陶器椀	10	口径 － 底径 － 器高 －	底部 － 体部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	薄緑色	緻密 明灰色	口縁部破片
255	第182図1	土師器杯	20	口径 (11.8) 底径 (5.6) 器高 3.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
255	第182図2	土師器杯	20	口径 (11.0) 底径 (6.2) 器高 3.4	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
255	第182図3	土師器椀	80	口径 (14.8) 底径 (9.0) 器高 6.4	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	256出土破片と接合 第206図16と同一個体
255	第182図4	土師器甕	10	口径 (23.0) 底径 － 器高 〈5.1〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	明黄褐色	石英・長石・スコリア	
264	第183図1	土師器甕	10	口径 － 底径 (7.0) 器高 〈3.7〉	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石	
266	第184図1	土師器杯	80	口径 (11.5) 底径 5.0 器高 (4.1)	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
266	第184図2	土師器杯	40	口径 (13.2) 底径 (6.6) 器高 4.5	底部 回転糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理
266	第184図3	土師器杯	80	口径 13.8 底径 5.9 器高 5.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
266	第184図4	土師器 高台付椀	70	口径 (13.4) 底径 － 器高 〈5.7〉	底部 ナデ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
266	第184図5	土師器甕	15	口径 － 底径 9.1 器高 〈3.9〉	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石	
266	第184図6	土師器甕	30	口径 15.3 底径 － 器高 〈7.4〉	底部 － 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
267	第184図7	土師器杯	30	口径 (14.4) 底径 (7.4) 器高 4.2	底部 － 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理
267	第184図8	ミニチュア土器	完形	口径 4.8 底径 4.6 器高 3.6	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
271A	第185図1	須恵器杯	30	口径 － 底径 (9.4) 器高 〈3.9〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・雲母	
271A	第185図2	土師器杯	55	口径 11.6 底径 4.8 器高 2.9	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
271A	第185図3	土師器杯	70	口径 (11.5) 底径 5.8 器高 3.1	底部 回転糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図4	土師器杯	80	口径 11.6 底径 4.2 器高 3.3	底部 回転糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図5	土師器杯	70	口径 13.4 底径 6.2 器高 3.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図6	土師器杯	95	口径 11.7 底径 4.2 器高 3.8	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図7	土師器杯	90	口径 13.1 底径 6.2 器高 3.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図8	土師器杯	40	口径 (10.9) 底径 (4.4) 器高 〈4.2〉	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
271A	第185図9	土師器杯	20	口径 (11.9) 底径 − 器高 〈3.6〉	底部 − 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図10	土師器杯	20	口径 (12.9) 底径 (5.8) 器高 3.9	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図11	土師器杯	50	口径 13.2 底径 (5.8) 器高 3.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図12	土師器 高台付杯	45	口径 13.8 底径 6.0 器高 3.7	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	高台部欠損
271A	第185図13	土師器杯	45	口径 13.1 底径 (6.4) 器高 4.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図14	土師器杯	50	口径 (13.0) 底径 (5.8) 器高 4.9	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第185図15	土師器椀	25	口径 (12.9) 底径 (7.8) 器高 5.1	底部 回転糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
271A	第185図16	土師器 足高高台付皿	完形	口径 15.0 底径 − 器高 〈3.5〉	底部 回転糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	高台部剥落
271A	第185図17	土師器椀	40	口径 − 底径 4.8 器高 〈5.3〉	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第186図18	土師器高台	20	口径 − 底径 8.6 器高 〈2.3〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第186図19	土師器高台	30	口径 − 底径 7.6 器高 〈2.3〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
271A	第186図20	土師器鉢	25	口径 (22.6) 底径 − 器高 〈9.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第186図21	土師器甕	15	口径 (16.2) 底径 − 器高 〈5.9〉	底部 − 体部 ヘラナデ 内面 刷毛	暗赤褐色	石英・長石	
271A	第186図22	土師器甕	10	口径 − 底径 (10.6) 器高 〈4.7〉	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第186図23	土師器甑	10	口径 − 孔径 (14.1) 器高 〈8.9〉	孔部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第186図24	土師器甕	20	口径 (21.2) 底径 − 器高 〈9.9〉	底部 − 体部 ヘラナデ 内面 刷毛・ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
271A	第186図25	土師器甕	40	口径 21.6 底径 − 器高 〈18.2〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ヘラナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
271A	第186図26	土師器甕	15	口径 〈20.2〉 底径 − 器高 〈19.6〉	底部 − 体部 ヘラナデ・ヘラケズリ 内面 刷毛・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
271B	第186図27	土師器杯	50	口径 〈12.8〉 底径 6.4 器高 4.1	底部 回転糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
271B	第186図28	土師器杯	60	口径 13.8 底径 6.2 器高 5.2	底部 回転糸切り無調整 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理
271B	第186図29	土師器杯	70	口径 15.0 底径 6.9 器高 5.3	底部 回転糸切り無調整 体部 回転ヘラケズリ 内面 ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理
271B	第186図30	土師器高台	30	口径 − 底径 6.4 器高 〈1.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石	
271B	第186図31	土師器甕	10	口径 〈18.8〉 底径 − 器高 〈7.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヨコナデ・ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石	
272	第187図1	須恵器杯	80	口径 12.0 底径 8.1 器高 3.7	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰褐色	石英・長石・雲母・スコリア	底部外面にヘラ記号
272	第187図2	須恵器杯	70	口径 12.8 底径 6.8 器高 4.0	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石・雲母	
272	第187図3	土師器杯	90	口径 12.2 底径 8.8 器高 3.8	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
272	第187図4	土師器甕	20	口径 〈11.6〉 底径 − 器高 〈4.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	黒褐色	石英・長石	
272	第187図5	土師器甕	10	口径 19.1 底径 − 器高 〈7.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石・スコリア	
272	第187図6	土師器甕	10	口径 〈19.2〉 底径 − 器高 〈8.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
277	第189図1	土師器杯	20	口径 〈13.5〉 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
325	第189図2	須恵器甕	10	口径 〈20.6〉 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・スコリア	
277	第189図3	須恵器甑	5	口径 〈26.0〉 孔径 − 器高 〈4.0〉	孔部 − 体部 タタキ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・雲母	
277	第189図4	土師器甕	10	口径 〈20.6〉 底径 − 器高 〈11.4〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ヨコナデ 内面 ヘラナデ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	
313	第190図1	土師器杯	10	口径 〈11.8〉 底径 − 器高 〈3.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石・雲母	
313	第190図2	土師器杯	10	口径 − 底径 〈5.8〉 器高 〈2.2〉	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・雲母	
313	第190図3	土師器杯	10	口径 − 底径 〈5.6〉 器高 〈1.1〉	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
313	第190図4	土師器甕	20	口径 − 底径 8.8 器高 〈8.0〉	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	

掘立柱建物跡

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
228	第191図1	須恵器甑	20	口径 (30.2) 孔径 − 器高 〈10.2〉	孔部 − 体部 タタキ・ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	

地下式土坑

023	第194図1	黒色土器杯	70	口径 15.0 底径 6.3 器高 5.2	底部 静止糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実5
023	第194図2	黒色土器杯	55	口径 15.0 底径 6.6 器高 5.2	底部 静止糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実6
023	第194図3	黒色土器杯	50	口径 (14.4) 底径 5.8 器高 5.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実10
023	第194図4	黒色土器杯	90	口径 14.4 底径 6.7 器高 5.2	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実2
023	第194図5	黒色土器杯	95	口径 14.6 底径 6.0 器高 5.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実1
023	第194図6	黒色土器杯	85	口径 14.6 底径 6.7 器高 5.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実4
023	第194図7	黒色土器杯	95	口径 14.3 底径 5.4 器高 5.8	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実3
023	第194図8	黒色土器杯	20	口径 (13.8) 底径 − 器高 〈5.0〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実9
023	第194図9	黒色土器杯	10	口径 (13.8) 底径 − 器高 〈4.1〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実7
023	第194図10	黒色土器杯	15	口径 (13.5) 底径 − 器高 〈4.0〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 実8
025	第198図1	土師器杯	95	口径 12.0 底径 5.9 器高 3.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰褐色	石英・長石	
025	第198図2	土師器杯	95	口径 13.0 底径 7.5 器高 3.9	底部 静止糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
025	第198図3	土師器杯	95	口径 13.4 底径 6.3 器高 4.3	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
025	第198図4	土師器杯	85	口径 13.3 底径 6.6 器高 4.7	底部 静止糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
025	第198図5	土師器杯	95	口径 12.1 底径 5.6 器高 4.5	底部 静止糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
025	第198図6	土師器杯	70	口径 12.1 底径 6.1 器高 4.5	底部 静止糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
025	第198図7	土師器杯	45	口径 (11.8) 底径 6.0 器高 3.9	底部 静止糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
025	第198図8	土師器 足高高台付皿	85	口径 14.6 底径 9.1 器高 5.5	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	
025	第198図9	黒色土器杯	30	口径 (15.4) 底径 (7.2) 器高 4.5	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒色	石英・長石	内外面黒色処理 25−265
025	第198図10	黒色土器杯	35	口径 (15.0) 底径 6.0 器高 4.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−249

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
025	第198図11	黒色土器杯	50	口径 (14.8) 底径 5.7 器高 4.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−51・52・65
025	第198図12	黒色土器杯	45	口径 (14.4) 底径 6.8 器高 4.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−265
025	第198図13	黒色土器杯	95	口径 14.6 底径 6.2 器高 4.8	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−17・19・32
025	第198図14	黒色土器杯	40	口径 (14.2) 底径 (6.0) 器高 4.8	底部 静止糸切り・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−172
025	第198図15	黒色土器杯	95	口径 14.2 底径 6.2 器高 5.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−70・71
025	第198図16	黒色土器杯	80	口径 14.2 底径 6.5 器高 5.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−7・10・150
025	第198図17	黒色土器杯	40	口径 (14.2) 底径 6.4 器高 5.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−84
025	第198図18	黒色土器杯	65	口径 (14.2) 底径 6.8 器高 5.0	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−265
025	第198図19	黒色土器杯	75	口径 15.0 底径 6.0 器高 5.5	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−154・175・185
025	第198図20	黒色土器杯	65	口径 14.4 底径 6.0 器高 5.3	底部 静止糸切り・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−125・168・180
025	第198図21	黒色土器杯	70	口径 14.0 底径 5.6 器高 5.1	底部 静止糸切り・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗灰褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−194
025	第198図22	黒色土器杯	70	口径 (13.8) 底径 6.5 器高 5.2	底部 静止糸切り・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−126・186
025	第198図23	黒色土器杯	30	口径 (13.8) 底径 5.4 器高 5.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒色	石英・長石	内面黒色処理 25−43・248・265
025	第198図24	黒色土器杯	95	口径 14.0 底径 6.2 器高 5.3	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−9・103・224
025	第198図25	黒色土器杯	85	口径 14.0 底径 6.2 器高 5.2	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−175・198
025	第198図26	黒色土器杯	85	口径 13.6 底径 4.9 器高 5.2	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−48・154・234
025	第198図27	黒色土器杯	70	口径 14.8 底径 5.1 器高 5.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−175
025	第198図28	黒色土器杯	95	口径 14.2 底径 6.5 器高 5.5	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−101・107・159
025	第198図29	黒色土器杯	80	口径 13.4 底径 5.6 器高 5.2	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−136・226
025	第198図30	黒色土器杯	20	口径 (12.8) 底径 6.2 器高 5.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−217・265
025	第198図31	黒色土器杯	90	口径 14.5 底径 5.3 器高 5.8	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−166
025	第198図32	黒色土器杯	85	口径 15.0 底径 6.2 器高 6.0	底部 静止糸切り・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗灰褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−13・56・62・70

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
025	第198図33	黒色土器杯	60	口径 13.4 底径 6.1 器高 5.4	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−115・175
025	第198図34	黒色土器杯	60	口径 (13.4) 底径 5.7 器高 5.4	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−111・143
025	第198図35	黒色土器杯	70	口径 14.0 底径 6.6 器高 5.7	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−75・175・185
025	第198図36	黒色土器杯	55	口径 (13.6) 底径 〈6.0〉 器高 5.6	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−29・265
025	第198図37	黒色土器杯	70	口径 14.4 底径 6.7 器高 6.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−170
025	第198図38	黒色土器杯	60	口径 14.2 底径 6.0 器高 6.0	底部 静止糸切り無調整 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−65・124
025	第198図39	黒色土器杯	95	口径 13.4 底径 6.2 器高 5.7	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−167
025	第198図40	黒色土器杯	60	口径 14.0 底径 6.2 器高 6.1	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−14・143
025	第199図41	黒色土器椀	50	口径 (12.6) 底径 (7.6) 器高 6.0	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石	内面黒色処理 25−176・263
025	第199図42	黒色土器椀	65	口径 (13.0) 底径 7.5 器高 5.8	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−74・238
025	第199図43	黒色土器椀	70	口径 13.2 底径 (6.0) 器高 5.6	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石	内面黒色処理 25−21・63・120
025	第199図44	黒色土器椀	95	口径 13.4 底径 8.0 器高 5.9	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−23・35・43・52・55
025	第199図45	黒色土器椀	80	口径 (13.5) 底径 7.8 器高 5.9	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−95・98
025	第199図46	黒色土器椀	50	口径 (13.6) 底径 〈7.3〉 器高 5.8	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−34・54・106・142
025	第199図47	黒色土器椀	80	口径 13.6 底径 7.4 器高 5.8	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−73
025	第199図48	黒色土器椀	60	口径 13.6 底径 7.6 器高 6.1	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−23・26・36・51
025	第199図49	黒色土器椀	85	口径 13.7 底径 7.2 器高 6.3	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−155・260・263
025	第199図50	黒色土器椀	60	口径 13.8 底径 7.4 器高 5.7	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−45・54・222・225
025	第199図51	黒色土器椀	55	口径 (13.8) 底径 8.0 器高 6.0	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−1・63
025	第199図52	黒色土器椀	55	口径 (14.0) 底径 7.9 器高 5.6	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−63・86
025	第199図53	黒色土器椀	45	口径 (14.4) 底径 7.1 器高 5.6	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 23−1 25−1・3・146
025	第199図54	黒色土器椀	80	口径 15.2 底径 8.5 器高 6.0	底部 静止糸切り無調整・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−154

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
025	第199図55	黒色土器椀	75	口径 13.6 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 静止糸切り・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	明褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−12・25・63
025	第199図56	黒色土器椀	70	口径 14.4 底径 − 器高 〈5.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	暗黄褐色	石英・長石・スコリア	内面黒色処理 25−245・265
025	第199図57	土師器甕	80	口径 14.3 底径 6.8 器高 13.4	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
025	第199図58	土師器甕	70	口径 21.0 底径 7.8 器高 25.6	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	

粘土採掘坑

173	第201図1	須恵器高台付杯	10	口径 (14.2) 底径 (9.6) 器高 3.8	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明灰色	石英・長石	
173	第201図2	手捏ね	95	口径 4.2 底径 − 器高 1.8	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
173	第201図3	土師器高杯	40	口径 − 裾径 9.2 器高 〈5.7〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ 体部 − 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	外面赤彩
173	第201図4	土師器高杯	40	口径 − 裾径 (11.6) 器高 〈8.5〉	脚部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 体部 − 内面 ナデ・ヘラナデ	赤褐色	石英・長石・雲母	
173	第201図5	土師器甕	40	口径 16.2 底径 − 器高 〈13.1〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	黄褐色	石英・長石	
173	第201図6	土師器甑	30	口径 − 孔径 8.4 器高 〈16.2〉	孔部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
349	第201図7	須恵器短頸壷	10	口径 (11.4) 底径 − 器高 〈4.9〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	灰色	石英・長石・雲母	
349	第201図8	土師器高杯	50	口径 − 裾径 (12.1) 器高 〈9.1〉	脚部 ナデ 体部 ナデ 内面 ヘラケズリ・ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	内外面赤彩
270	第202図1	土師器杯	60	口径 13.4 底径 6.0 器高 4.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	明褐色	石英・長石	
270	第202図2	土師器杯	60	口径 13.4 底径 6.4 器高 4.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
270	第202図3	土師器杯	70	口径 14.2 底径 6.2 器高 4.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
270	第202図4	土師器杯	50	口径 (14.0) 底径 (7.2) 器高 4.7	底部 回転糸切り無調整 体部 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	明褐色	石英・長石	
270	第202図5	土師器足高高台付椀	15	口径 (15.6) 底径 − 器高 〈5.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
270	第202図6	土師器高台	10	口径 − 底径 (7.0) 器高 〈1.9〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
270	第202図7	土師器壷	10	口径 (12.0) 底径 − 器高 〈5.1〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	内外面赤彩

土師器焼成遺構

320	第203図1	土師器杯	70	口径 14.3 底径 5.3 器高 5.4	底部 回転糸切り・手持ちヘラケズリ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
320	第203図2	土師器甕	10	口径 − 底径 6.0 器高 〈2.1〉	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	赤褐色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
320	第203図3	土師器甕	10	口径 － 底径 5.4 器高 〈1.8〉	底部 回転糸切り無調整 体部 手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
289	第203図4	土師器高台	10	口径 － 底径 (8.8) 器高 〈3.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
289	第203図5	土師器甕	10	口径 (17.0) 底径 － 器高 〈7.2〉	底部 － 体部 ヘラナデ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石	
049	第203図6	土師器小皿	20	口径 (8.2) 底径 〈5.8〉 器高 1.9	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
049	第203図7	土師器小皿	40	口径 (8.2) 底径 (6.8) 器高 1.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石・スコリア	
049	第203図8	黒色土器椀	30	口径 － 底径 6.0 器高 〈4.6〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒色	石英・長石・雲母	内面黒色処理
049	第203図9	土師器高台	10	口径 － 底径 (12.0) 器高 〈5.1〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	
056	第203図10	土師器小皿	55	口径 (7.2) 底径 5.2 器高 1.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
056	第203図11	黒色土器椀	10	口径 － 底径 (6.6) 器高 〈2.8〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石・雲母	内面黒色処理
256	第206図1	土師器杯	50	口径 (10.8) 底径 5.4 器高 3.4	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-928・830
256	第206図2	土師器杯	30	口径 (11.4) 底径 (6.0) 器高 3.6	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-902
256	第206図3	土師器杯	95	口径 11.8 底径 5.8 器高 2.8	底部 不明 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-102・467
256	第206図4	土師器杯	80	口径 12.4 底径 5.4 器高 3.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-11・485・630
256	第206図5	土師器杯	25	口径 (12.6) 底径 (6.0) 器高 3.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	256-787
256	第206図6	土師器杯	60	口径 (12.0) 底径 5.4 器高 3.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-81・122・807
256	第206図7	土師器杯	45	口径 (11.2) 底径 (5.0) 器高 3.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-28・144
256	第206図8	土師器杯	95	口径 11.8 底径 5.1 器高 3.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-105・289・906
256	第206図9	土師器杯	60	口径 12.5 底径 6.0 器高 3.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-727・731・848
256	第206図10	土師器杯	80	口径 12.4 底径 5.8 器高 3.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-822・884
256	第206図11	土師器杯	30	口径 (12.0) 底径 6.4 器高 3.4	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	256-772
256	第206図12	土師器杯	40	口径 (11.6) 底径 (5.6) 器高 3.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-834
256	第206図13	土師器杯	90	口径 11.4 底径 5.5 器高 3.3	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	256-816・852・853

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
256	第206図14	土師器杯	75	口径 12.0 底径 5.2 器高 3.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-805・828・854
256	第206図15	土師器杯	50	口径 12.0 底径 5.3 器高 3.8	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	256-33・154
255	第206図16	土師器椀	80	口径 (14.8) 底径 (9.0) 器高 6.4	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	255出土破片と接合 第182図3と同一個体
256	第206図17	土師器椀(高台付)	80	口径 11.9 底径 5.4 器高 5.7	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ミガキ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
256	第206図18	黒色土器椀	70	口径 (13.4) 底径 5.3 器高 6.0	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒色	石英・長石	内面黒色処理
256	第206図19	土師器高台	10	口径 − 底径 6.2 器高 〈1.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-180・282
256	第206図20	土師器高台	10	口径 − 底径 6.3 器高 〈1.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-91
256	第206図21	土師器高台	10	口径 − 底径 6.4 器高 〈1.3〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-172
256	第206図22	土師器高台	10	口径 − 底径 (6.6) 器高 〈1.1〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-471
256	第206図23	土師器高台	10	口径 − 底径 6.6 器高 〈1.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-245
256	第206図24	土師器高台	10	口径 − 底径 6.6 器高 〈1.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	256-177
256	第206図25	土師器高台	10	口径 − 底径 6.8 器高 〈1.1〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-895
256	第206図26	土師器高台	15	口径 − 底径 7.4 器高 〈1.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	256-175・206・796
256	第206図27	土師器高台	10	口径 − 底径 7.4 器高 〈1.3〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	256-109・119
256	第206図28	土師器高台	10	口径 − 底径 7.4 器高 〈1.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	橙褐色	石英・長石	256-868
256	第206図29	土師器高台	10	口径 − 底径 7.8 器高 〈1.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-143
256	第206図30	土師器高台	10	口径 − 底径 8.4 器高 〈1.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	256-1
256	第206図31	土師器高台	20	口径 − 底径 8.8 器高 〈2.2〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	256-171
256	第206図32	土師器高台	15	口径 − 底径 9.0 器高 〈2.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	256-733
256	第206図33	土師器高台	20	口径 − 底径 9.2 器高 〈2.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	256-877
256	第206図34	土師器高台	20	口径 − 底径 9.2 器高 〈2.3〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	256-546
256	第206図35	土師器高台	10	口径 − 底径 (9.4) 器高 〈2.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	黒色	石英・長石	256-340・611

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
256	第206図36	土師器高台	20	口径 － 底径 9.4 器高 〈2.6〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	256-556
256	第206図37	土師器高台	15	口径 － 底径 (9.6) 器高 〈2.0〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	256-173・525・583
256	第206図38	土師器高台	15	口径 － 底径 (10.8) 器高 〈2.4〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	256-88・94・124
256	第206図39	土師器高台	20	口径 － 底径 10.9 器高 〈2.6〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	256-342・786・800
256	第206図40	土師器高台	15	口径 － 底径 (8.8) 器高 〈2.7〉	底部 ナデ 体部 ナデ・回転糸切り 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石	256-165
256	第206図41	土師器甕	20	口径 (15.6) 底径 － 器高 〈8.9〉	底部 － 体部 ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第206図42	土師器甕	80	口径 (15.3) 底径 8.7 器高 18.4	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第206図43	土師器甕	90	口径 15.4 底径 9.0 器高 19.4	底部 ナデ？ 体部 手持ちヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図44	土師器甕	80	口径 18.5 底径 7.7 器高 26.4	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図45	土師器甕	90	口径 18.7 底径 8.4 器高 25.9	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図46	土師器甕	90	口径 19.2 底径 8.2 器高 25.6	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図47	土師器甕	80	口径 19.2 底径 18.6 器高 25.9	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図48	土師器甕	60	口径 19.4 底径 8.0 器高 24.0	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図49	土師器甕	90	口径 19.6 底径 8.1 器高 25.3	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図50	土師器甕	90	口径 19.7 底径 8.4 器高 26.5	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図51	土師器甕	80	口径 20.0 底径 8.0 器高 26.3	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第207図52	土師器甕	70	口径 20.0 底径 8.3 器高 26.4	底部 ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図53	土師器甕	80	口径 20.1 底径 8.5 器高 25.2	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図54	土師器甕	95	口径 20.2 底径 8.5 器高 25.4	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図55	土師器甕	50	口径 20.3 底径 8.2 器高 25.9	底部 ナデ・ケズリ 体部 ナデ・ケズリ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図56	土師器甕	70	口径 20.6 底径 9.0 器高 25.0	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図57	土師器甕	80	口径 20.6 底径 7.2 器高 28.0	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
256	第208図58	土師器甕	75	口径 21.0 底径 8.8 器高 26.7	底部 ナデ・ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図59	土師器甕	40	口径 19.4 底径 − 器高 〈23.0〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図60	土師器甕	40	口径 〈20.1〉 底径 − 器高 〈22.9〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
256	第208図61	土師器甕	40	口径 20.6 底径 − 器高 〈15.6〉	底部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	

土坑

301	第192図1	土師器高台付杯	15	口径 − 底径 7.1 器高 〈2.5〉	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
301	第192図2	土師器高台付杯	15	口径 − 底径 〈7.2〉 器高 〈2.8〉	底部 回転糸切り痕・ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色	石英・長石	
128	第209図1	緑釉陶器椀	60	口径 〈15.5〉 底径 − 器高 −	底部 回転ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	淡灰緑色	緻密 明灰色	同一個体4片
128	第209図2	土師器杯	25	口径 〈12.6〉 底径 〈5.8〉 器高 3.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
128	第209図3	土師器高台付杯	10	口径 − 底径 〈7.2〉 器高 〈2.8〉	底部 回転糸切り 体部 ナデ 内面 ミガキ	暗褐色	石英・長石・雲母	
168	第209図4	土師器杯	95	口径 11.6 底径 12.0 器高 4.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
168	第209図5	土師器杯	70	口径 − 底径 5.4 器高 〈3.2〉	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石・スコリア	
168	第209図6	土師器椀	95	口径 15.0 底径 − 器高 6.2	底部 ナデ 体部 ナデ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石・スコリア	内外面黒色処理
168	第209図7	土師器甕	10	口径 − 底径 〈7.0〉 器高 〈3.1〉	底部 ヘラケズリ 体部 ケズリ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石・スコリア	
168	第209図8	土師器甕	40	口径 〈21.0〉 底径 − 器高 〈21.0〉	底部 − 体部 ケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	石英・長石・雲母	
192	第209図9	土師器杯	10	口径 − 底径 〈6.1〉 器高 〈1.9〉	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	赤褐色	石英・長石・スコリア	
195	第209図10	土師器杯	20	口径 〈13.2〉 底径 − 器高 〈4.8〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
195	第209図11	土師器杯	10	口径 − 底径 〈8.0〉 器高 〈1.3〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰褐色	石英・長石・スコリア	
196	第209図12	土師器甕	10	口径 〈16.0〉 底径 − 器高 〈2.4〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	黒褐色	石英・長石	
208	第210図13	須恵器甕	10	口径 〈20.0〉 底径 − 器高 〈5.0〉	底部 − 体部 タタキ 内面 ナデ	明赤褐色	石英・長石・スコリア	
251	第210図14	土師器杯	10	口径 〈12.0〉 底径 − 器高 〈3.7〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石・雲母	
288	第210図15	土師器小皿	95	口径 9.4 底径 4.3 器高 2.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
319	第210図17	須恵器杯	10	口径 − 底径 〈8.0〉 器高 〈2.1〉	底部 手持ちヘラケズリ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	

遺構外

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	計測値(cm)	調整	色調	胎土	備考
Cトレ	第211図1	土師器小皿	30	口径 (7.4) 底径 (5.2) 器高 1.0	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
B6-78	第211図2	土師器小皿	40	口径 (8.2) 底径 (5.0) 器高 1.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	石英・長石	
B6-78	第211図3	土師器小皿	50	口径 (8.2) 底径 (5.6) 器高 1.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
B6-78	第211図4	土師器小皿	20	口径 (8.8) 底径 (2.7) 器高 1.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	
B6-78	第211図5	土師器小皿	40	口径 (8.0) 底径 (5.4) 器高 1.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	
351A	第211図6	土師器小皿	20	口径 7.8 底径 5.0 器高 1.1	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	
133	第211図7	土師器小皿	15	口径 (9.0) 底径 (6.0) 器高 1.2	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	E7-44出土
133	第211図8	土師器小皿	30	口径 (8.6) 底径 (5.6) 器高 1.5	底部 回転糸切り無調整 体部 ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石	E7-44出土
H6-84	第211図9	土師器杯	20	口径 − 底径 6.2 器高 〈2.3〉	底部 回転ヘラケズリ 体部 回転ヘラケズリ・ナデ 内面 ナデ	明褐色	石英・長石・スコリア	底部外面に墨書 判読不明
190	第211図10	土師器杯	20	口径 (14.0) 底径 − 器高 〈4.5〉	底部 − 体部 ナデ・ミガキ 内面 ナデ。ミガキ	暗褐色	石英・長石・スコリア	
E7-38	第211図11	緑釉陶器椀	30	口径 (14.8) 底径 (6.8) 器高 4.6	底部 ナデ 体部 ナデ・ケズリ・ミガキ 内面 ミガキ	淡緑色	緻密 灰白色	輪花
G6-1	第211図12	須恵器甕	10	口径 (21.0) 底径 − 器高 〈14.9〉	底部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰褐色	石英・長石・スコリア	

溝状遺構

030	第215図1	土師器杯	30	口径 (14.0) 底径 − 器高 3.5	底部 ヘラケズリ・ミガキ 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ	黄褐色	石英・長石	
117	第216図1	須恵器蓋	10	口径 (12.8) 天井径 − 器高 〈3.4〉	天井部 − 体部 ナデ 内面 ナデ	暗灰色	石英・長石	
117	第216図2	土師器杯	60	口径 (12.5) 底径 − 器高 3.3	底部 − 体部 ヘラケズリ・ミガキ 内面 ナデ・ミガキ	黒褐色	石英・長石	
136	第216図3	土師器甕	10	口径 (14.0) 底径 − 器高 〈8.5〉	底部 − 体部 刷毛・ヘラケズリ・ナデ 内面 刷毛・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	
136	第216図4	土師器高杯	30	口径 − 裾径 − 器高 〈3.2〉	脚部 ケズリ・ナデ 体部 ケズリ・ナデ 内面 ヘラケズリ・ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	外面赤彩 内面黒色処理
136	第216図5	ミニチュア土器	95	口径 5.6 底径 2.4 器高 6.8	底部 ヘラケズリ・ナデ 体部 ヘラケズリ・ナデ・ミガキ 内面 ヘラナデ	暗赤褐色	石英・長石	内外面赤彩
136	第216図6	土師器甕	10	口径 − 底径 7.2 器高 〈3.2〉	底部 ナデ 体部 刷毛 内面 ヘラナデ	明褐色	石英・長石	
139	第216図7	土師器杯	10	口径 (13.6) 底径 − 器高 〈4.3〉	底部 − 体部 ケズリ・ナデ 内面 ナデ	褐色	石英・長石	内外面赤彩
135	第216図8	土師器高杯	15	口径 (15.8) 裾径 − 器高 〈4.2〉	脚部 − 体部 ヘラケズリ・ナデ 内面 ヨコナデ	暗赤褐色	石英・長石	

遺構番号	挿図番号	器　種	遺存度(%)	計測値 (cm)	調　　整	色　調	胎　土	備　　考
135	第216図9	土師器甕	10	口　径　(21.8) 底　径　－ 器　高　〈5.5〉	底　部　－ 体　部　ナデ 内　面　ヘラナデ	褐色	石英・長石	
282	第217図1	土師器杯	40	口　径　(12.2) 底　径　5.8 器　高　4.0	底　部　回転糸切り 体　部　ナデ 内　面　ナデ	暗褐色	石英・長石・雲母・スコリア	
282	第217図2	土師器甕	10	口　径　－ 底　径　－ 器　高　〈4.2〉	底　部　－ 体　部　ナデ 内　面　ヘラナデ	明赤褐色	石英・長石・雲母	

第17表　石製模造品（剣形品）計測表

単位（mm）　〈 〉現存値

挿図番号	遺構番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	孔径	重量(g)	備　　考
第53図14	028A	152	51.5	19.0	5.0	1.0	5.55	
第58図2	054B	002	〈25.0〉	19.5	4.5	1.5	4.44	
第70図23	142	030	〈35.2〉	15.3	3.7	2.5	5.45	
第70図24	142	006	41.0	18.5	4.5	2.0	3.89	旧039－006
第97図3	046	036	32.0	19.0	4.5	1.0	2.86	
第100図7	057	046	35.0	16.8	4.3	1.5	2.99	
第107図24	082	066	23.5	14.5	3.2	2.0	1.76	
第128図15	126A	089	42.6	22.7	3.5	2.5	5.85	
第138図13	253	011	〈50.5〉	20.7	5.5	1.5	7.78	
第140図2	271E	002	〈34.0〉	12.8	4.3	1.5	2.54	
第140図3	271E	005	27.5	14.5	4.2	1.5	2.60	
第140図4	271E	018	〈32.5〉	15.5	3.5	1.0	3.20	
第148図27	E7－22	002	44.0	19.5	8.5	1.5	9.27	
第148図28	4トレンチ	025	〈42.0〉	22.8	5.5	1.5	6.43	
第148図29	14トレンチ	003	35.8	21.6	5.0	2.0	5.95	
第148図30	D9－40	001	〈37.0〉	16.5	5.0	1.5	4.49	
第148図31	10トレンチ	003	32.0	16.2	4.5	4.0	3.05	
第148図32	B6－48	001	〈30.5〉	13.5	5.2	1.5	3.38	
第148図33	D6－21	001	〈23.0〉	11.6	2.7	1.5	1.35	
第148図34	一括		〈16.8〉	15.8	3.6	2.0	1.80	
第148図35	表採		34.0	〈17.0〉	3.5	－	3.54	
第148図36	D8－13	001	〈21.0〉	〈9.0〉	〈4.0〉	－	0.82	
第171図10	141	035	〈39.5〉	18.6	5.0	2.5	4.98	
第186図37	271	032	〈36.5〉	16.5	3.7	1.5	3.70	
第186図38	271	001	25.8	13.4	3.0	1.5		

第18表　石製模造品（有孔円板）計測表

単位（mm）　〈 〉現存値

挿図番号	遺構番号	遺物番号	径	厚さ	孔径	重量(g)	備　考
第56図6	038	197	21.5×26.5	4.0	2.0	3.82	
第56図7	038	270	24.0×24.0	3.0	2.0	2.93	
第56図8	038	273	24.0×36.0	5.0	2.5	5.06	
第62図5	091	005	24.5×25.5	3.5	2.5	4.10	
第62図6	091	040	30.0×27.5	2.5	2.0	3.37	
第67図10	121	024	27.5×〈29.0〉	4.0	2.0	6.49	
第70図19	142	005	27.5×28.0	4.5	2.0	2.72	
第70図20	142	006	27.0×〈27.0〉	3.5	2.5	4.57	
第70図21	142	011	23.5×24.0	2.5	1.5	5.59	旧39－011
第70図22	142	009	〈25.0〉×〈29.5〉	3.5	2.5	2.69	旧39－009
第87図13	002	035	19.0×21.0	5.0	1.0	2.64	
第98図4	054	167	28.5×30.5	3.0	2.0	4.49	
第103図21	069A	058	22.5×24.0	2.5	1.5	2.91	
第103図22	069B	610	〈29.5〉×30.5	3.0	2.5	5.83	
第107図15	080	177	27.5×29.0	3.5	2.0	5.29	旧081－177
第121図11	107	071	〈23.0〉×27.0	4.0	2.5	4.44	
第131図19	161G	004	22.5×26.0	4.5	1.5	5.11	
第138図14	253	012	25.0×〈25.0〉	3.5	2.0	2.70	
第140図5	271E	019	20.5×21.0	3.5	1.5	2.65	単孔
第144図12	307	106	33.0×34.0	5.5	2.0	9.71	
第148図37	D9－02	001	29.5×30.0	5.5	1.5	7.20	
第148図38	4トレンチ	013	28.5×28.5	4.0	1.5	4.95	
第148図39	8トレンチ	A	24.0×〈25.0〉	3.0	1.5	2.64	
第148図40	E7－23	033	25.0×26.5	3.5	1.5	4.17	
第148図41	D9－11	001	24.0×25.0	3.0	1.5	2.98	
第148図42	B6－38	001	21.0×21.5	3.0	2.5	2.50	
第148図43	D6－21	001	17.0×17.0	3.5	1.5	1.58	
第171図8	141	031	25.5×25.5	4.0	3.0	4.17	
第171図9	141	043	23.0×29.5	5.0	3.0	5.59	
第186図35	271	129	19.0×〈20.0〉	3.0	2.0	1.90	
第186図36	271	133	〈16.5〉×〈25.0〉	〈4.5〉	2.0	2.27	
第199図60	025	001	19.5×21.0	4.5	4.0	2.75	

付　章　貝サンプルの分析結果

弥生時代から平安時代の７遺構で貝殻の堆積が認められた。貝サンプルは9.52㎜，４㎜，２㎜，１㎜メッシュの試験フルイによる水洗分離を経て，選別を行った。貝類の同定は，西野雅人と小笠原永隆が行った。なお，多くのサンプルで微小貝を検出したが，分析を行っていない。貝類のほかにはフジツボが少量検出されたほか，195・196は動物骨が複数入っていた。動物骨の同定は小林園子氏にお願いした。

分析試料は少ないが，古代の貝類利用を知るデータを付け加えることができた。

1　出土状況と貝層の概要

弥生時代

G6-36-P6　弥生時代の貝層である。柱穴状の穴に落ち込んでおり，貝層中には弥生土器片が数多く含まれていた。当遺跡では弥生時代の遺構・遺物はほかに見つかっていないので，貝は弥生時代に廃棄されたものであろう。径20cm，厚さ35cmの貝層全量，約14.5リットルのサンプルを採取した。現地では厚さ５cmごとに採取したが，試料が少ないため，一括して報告する。ハマグリ，マガキ，ウミニナが多い。

古墳時代

028A　中期の住居跡内貝層である。南西隅の100cm×50cmほどの範囲に三角堆積していた。貝層の厚さと，サンプルの採取位置は不明である。9.5リットルのサンプルが採取されている。ハマグリ，シオフキガイに，ツメタガイ，イボキサゴが混じる。

034　前期の住居跡内貝層である。南東隅に80cm×40cmのブロック貝層でほぼ水平に堆積していた。厚さは最大で14cmである。サンプルは貝層の西側半分，28リットルを採取した。マガキが最も多く，ハマグリ，シオフキガイがこれに次ぐ。

198C　中期の住居跡内貝層である。遺構セクションA-A′（第77図）の最下層の上面に点々と貝が遺存していた。サンプルは貝殻と周囲の土を８か所で採取している。全部で1.3リットルと，ごく少量であるため，一括して報告する。貝の数も少なく，ハマグリ，シオフキガイ主体である。

126A　後期の住居跡内貝層である。カマドの右袖近くに，30cm×10cmの小さなブロックであり，全量採取しても1.9リットルであった。貝の数も種類も少なく，イボキサゴ，ハマグリ，シオフキガイの３種のみであった。

平安時代

195と196土坑は並んだ位置にあり，形状も，覆土中層に貝殻を廃棄していることも共通している。出土土器もほぼ同時期のものであろう。いずれも貝のほかに獣骨・魚骨片を含んでいることや，貝類の計測値が共通する一方で，貝種組成には差がみられる。

195　径1.2mの円形土坑一杯に混貝土層が入っていた。厚さは最大で50cmある。中心部分に30cm×30cmのスポットを設けて，厚さ５cmのコラムサンプルを13カット，全部で77.5リットル採取した。貝種組成や計測値にカット間の差がみられないので，貝殻と土が混じったものが再廃棄されたと考えられる。イボキサゴが半分以上を占め，ほかにハマグリ，マテガイ，シオフキガイも多い。

196　径1.2mの円形土坑一杯に混貝土層が入っていた。厚さは30cmである。中心部分に30cm×30cmのス

第19表　貝サンプル一覧

遺構	時期	遺構	採取法	カット数	備考	分析・採取量
G6－36－P6	弥生末	ピット	I	1	ピット内コラムサンプルを一括	14.5㍑
028A	古墳中	住居跡	I	1	全量一括採取か？	9.5㍑
034	古墳前	住居跡	I	1	貝層の半分を一括採取	28.0㍑
198C	古墳中	住居跡	I	1	貝小ブロック7か所を一括	1.3㍑
126A	古墳後	住居跡	I	1	小ブロック一括	1.9㍑
195	平安前	土　坑	C	13	コラムサンプル30×30×5cm	77.5㍑
196	平安前	土　坑	C	13	コラムサンプル30×30×5cm	71.1㍑
025	平安後	土　坑	I	1	貝層の1か所で部分採取	41.0㍑

第20表　貝類種名一覧

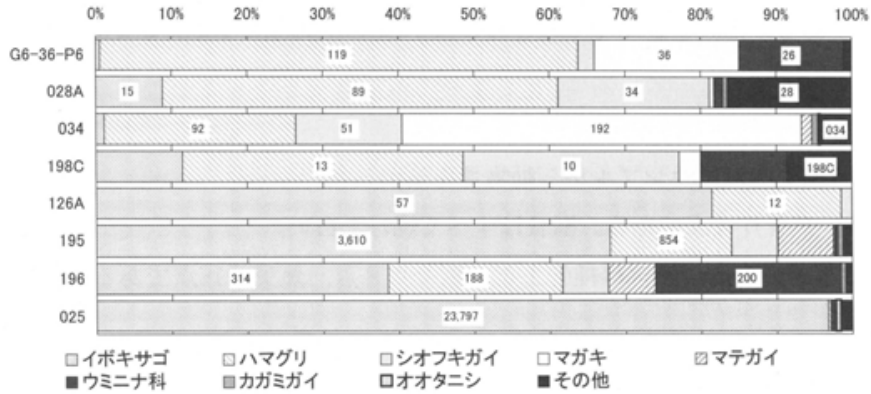
腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	Umbonium (Suchium) moniliferum
		リュウテンサザエ科	サザエ	*Batillus cornutus*
	中腹足目	タニシ科	オオタニシ	*Cipangopaludina japonica*
			マルタニシ	*Cipangopaludina chinensis laeta*
		ウミニナ科	ウミニナ科	*Potamididae gen. & sp. Indet.*
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
		ムシロガイ科	アラムシロガイ	*Reticunassa festiva*
			ムシロガイ	*Niotha livescens*
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	サルボウガイ	*Scapharca subcrenata*
	ウグイスガイ目	ナミマガシワガイ科	ナミマガシワガイ	*Anomia chinensis*
		イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis*
			バカガイ	*Mactra chinensis*
			ニッコウガイ科種不明	Tellinidae gen. & sp. indet.
		シオサザナミガイ科	シオサザナミガイ科種不明	
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		マルスダレガイ科	カガミガイ	*Phacosoma japonicum*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	*Mya arenaria oonogai*
	計		15科	22種

第21表　貝類同定結果

	弥生	古墳中	古墳前	古墳中	古墳後	平安	平安	平安
	G6-36-P6	028A	034	198C	126A	195	196	025
イボキサゴ	1	15	4	4	57	3,610	314	23,797
サザエ		2						
オオタニシ			1					166
ウミニナ科	26	2		4		31	200	108
ツメタガイ		15	4					3
アカニシ		4				1		4
アラムシロガイ						37	1	360
ムシロガイ								1
サルボウガイ		2				2		1
ナミマガシワガイ								1
マガキ	36	1	192	1		2		1
シオフキガイ	4	34	51	10	1	326	49	41
バカガイ						17	2	
シオサザナミガイ科						1		1
マテガイ			5			392	51	2
カガミガイ		1	3			35	5	11
アサリ	2	4	11	3		5	1	3
ハマグリ	119	89	92	13	12	854	188	90
オキシジミ						1	3	
オオノガイ		1				1		
合　計	188	170	363	35	70	5,315	814	24,590

第22表　貝種組成

	弥生	古墳中	古墳前	古墳中	古墳後	平安	平安	平安
	G6-36-P6	028A	034	198C	126A	195	196	025
イボキサゴ	1	15	4	4	57	3,610	314	23,797
ハマグリ	119	89	92	13	12	854	188	90
シオフキガイ	4	34	51	10	1	326	49	41
マガキ	36	1	192	1		2		1
マテガイ			5			392	51	2
ウミニナ科	26	2		4		31	200	108
カガミガイ		1	3			35	5	11
オオタニシ			1					166
その他	2	28	15	3		65	7	374
合　計	188	170	363	35	70	5,315	814	24,590
比率の低い種								
サザエ		2						
ツメタガイ		15	4					3
アカニシ		4				1		4
アラムシロガイ						37	1	360
ムシロガイ								1
サルボウガイ		2				2		1
ナミマガシワガイ								1
バカガイ						17	2	
シオサザナミガイ科						1		1
オキシジミ						1	3	
オオノガイ		1				1		
アサリ	2	4	11	3		5	1	3



第221図　貝類組成

ポットを設けて，厚さ５cmのコラムサンプルを13カット，全部で71.1リットル採取した。195と同様に，カット間の内容の差が認められないので，貝殻と土が混ざったものが再廃棄されたものと思われる。イボキサゴ，ウミニナ属，ハマグリが多い。

025　地下式土坑内貝層である。土坑の深さは2m以上あり，多量の土が埋まった後に急角度で貝殻が投げ込まれ，貝層上面付近に多量の土師器が伴っていた。貝層は長径２m，最大部の厚さ30cmほどあり，サンプルはその一部を任意に採取していて，41リットルあった。イボキサゴがほとんどを占める。

2　貝種組成

全体で15科22種を検出した。弥生時代から平安後期の各時期のデータが得られた。ただし，各時期のデータはほとんど単独であって，時期を代表できるものではない。その上で若干傾向について触れたい。

全時期を通じて，イボキサゴ・ハマグリ・シオフキガイの３種が主体となっている。これらは内湾砂底種であり，遺跡から近い村田川の河口付近の前浜干潟で採取可能であったと思われる。周辺の遺跡では，縄文時代中期から近世に至るまでこの傾向は変わらない。ただし，今回の結果では，弥生時代から古墳時代のサンプルで，縄文時代のようなイボキサゴの占有率が他の種を圧倒するような状況がみられないことが特徴である。時期的には，古墳時代中期以前と古墳時代後期以降で変化がみられる。後期以降にはイボ

キサゴが多くなり，ハマグリが少なくなっている。

主体種以外に目を転じると，比較的多様な貝種がみられ，サンプル間の差が大きくしている。ある程度まとまっている種をあげると，G6-36-P6のマガキとウミニナ，028Aのツメタガイ，034のマガキ，195のマテガイ・カガミガイ・バカガイ，196のウミニナ属とマテガイ，025のオオタニシがある。これらは，いずれも食用に採取したものと考える。このうち，ツメタガイ・カガミガイ・バカガイは主要３種を目的とした漁に伴って採取された可能性が高い。G6-36-P6と034のマガキは，二枚貝の付着した痕跡をもつものが多いので，これも同様の漁場で採取されたであろう。マテガイも漁場は同じであるが，独特の漁法と食習慣が平安時代にもあったことを示している。ウミニナ類はあとで詳しく述べる。

3　貝殻のサイズ

イボキサゴ，二枚貝とも古代の貝層に特徴的な大型貝を中心としている。縄文時代に比べると，資源の利用に余裕があったのであろう。時期差は認められず，むしろ同じ時期で大きな差もみられた。034のハマグリは殻長が小さくても50㎜，平均は77㎜と群を抜いて大きい。平安後期の025でイボキサゴ・ハマグリの両方が小さめであるのは，中世でやや小さめの貝が増える傾向につながるものかもしれない。

4　動物骨

平安時代の195・196土坑の貝サンプルから動物骨を検出した。

195　獣骨片３点，魚骨片４点である。獣骨はすべて焼けて白い。

196　ドブネズミ遊離歯１点，キス科椎骨１点，獣骨片８点，魚骨片16点である。獣骨のうち，１点のみが焼けて白い。

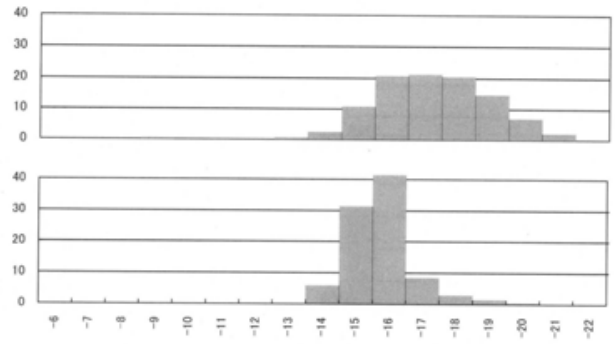
5　ウミニナ類の食痕について

G6-36-P6は大きな個体で殻頂部が折れているものがほとんどであり，「殻頂部切断-吸出し法」（西野1997）で身を食したものとみられる。切断の位置はやや不揃いである。種はすべて「ウミニナ」であった。これに対して，196ではほとんどの個体(96.4%)が焼けていた。みな強く火を受けて灰色になり，内面の平滑な部分にはひびが入っている。種は「ウミニナ」と「イボウミニナ」の両種がみられ，「ウミニナ属」とした。ほかにイボキサゴも焼けているものが多い(75.4%)が，この２種以外の貝種は，小片以外には焼けたものがみられず，殻の保存状態が良好である。特定の種のみ焼けているのは，焼いて食べたと考えるのがもっとも考えやすい。殻頂部が破損しているものがもっとも多いが，体層部が破損するものも多い。焼いてから「殻頂部切断」や「体層部破壊法」で殻を壊して身を取り出したものであろうか。しかし，あまりに強く火を受けすぎており，ここまで焼くと食べられないのではないかという疑問が湧く。あるいは，食べながら，残った殻を火にくべたものであろうか。この見方の場合は，火のあたりで食べていることが想定できるが，焼いて食べたとは限らないことになる。焼くことのメリットは焼くと味がよいこと，殻が壊れやすくなることなどが考えられるが，今のところ想像の域を出ない。

文献

西野雅人　1997　「ウミニナ類の身を取り出す２つの方法」研究連絡誌50　(財)千葉県文化財センター

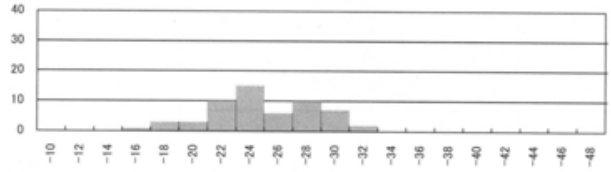
イボキサゴ



195 平安
試料数 598
平均 16.74
標準偏差 1.70

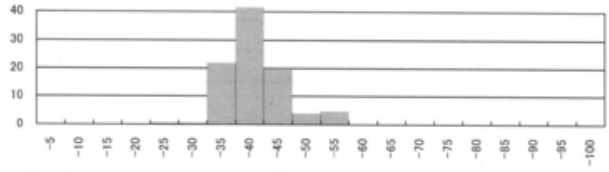
025 平安
試料数 200
平均 15.30
標準偏差 0.92

ウミニナ科



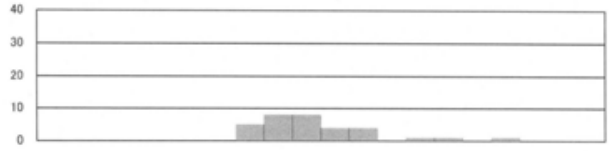
025 平安
試料数 57
平均 23.92
標準偏差 3.80

オオタニシ

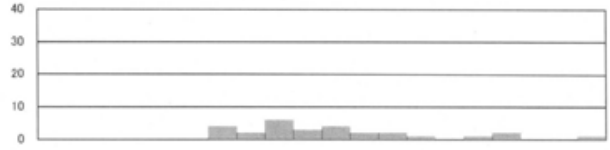


025 平安
試料数 150
平均 38.36
標準偏差 4.94

ハマグリ

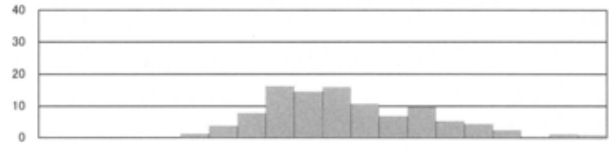


G6-36-P6 弥生
試料数 32
平均 49.41
標準偏差 10.16

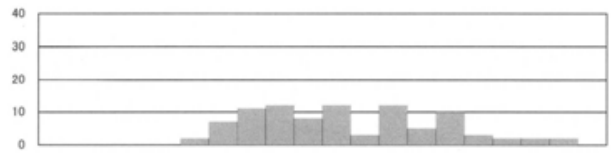


028A 古墳中
試料数 28
平均 52.41
標準偏差 17.06

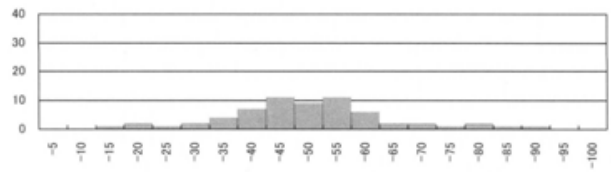
034 古墳前
試料数 36
平均 76.84
標準偏差 11.37



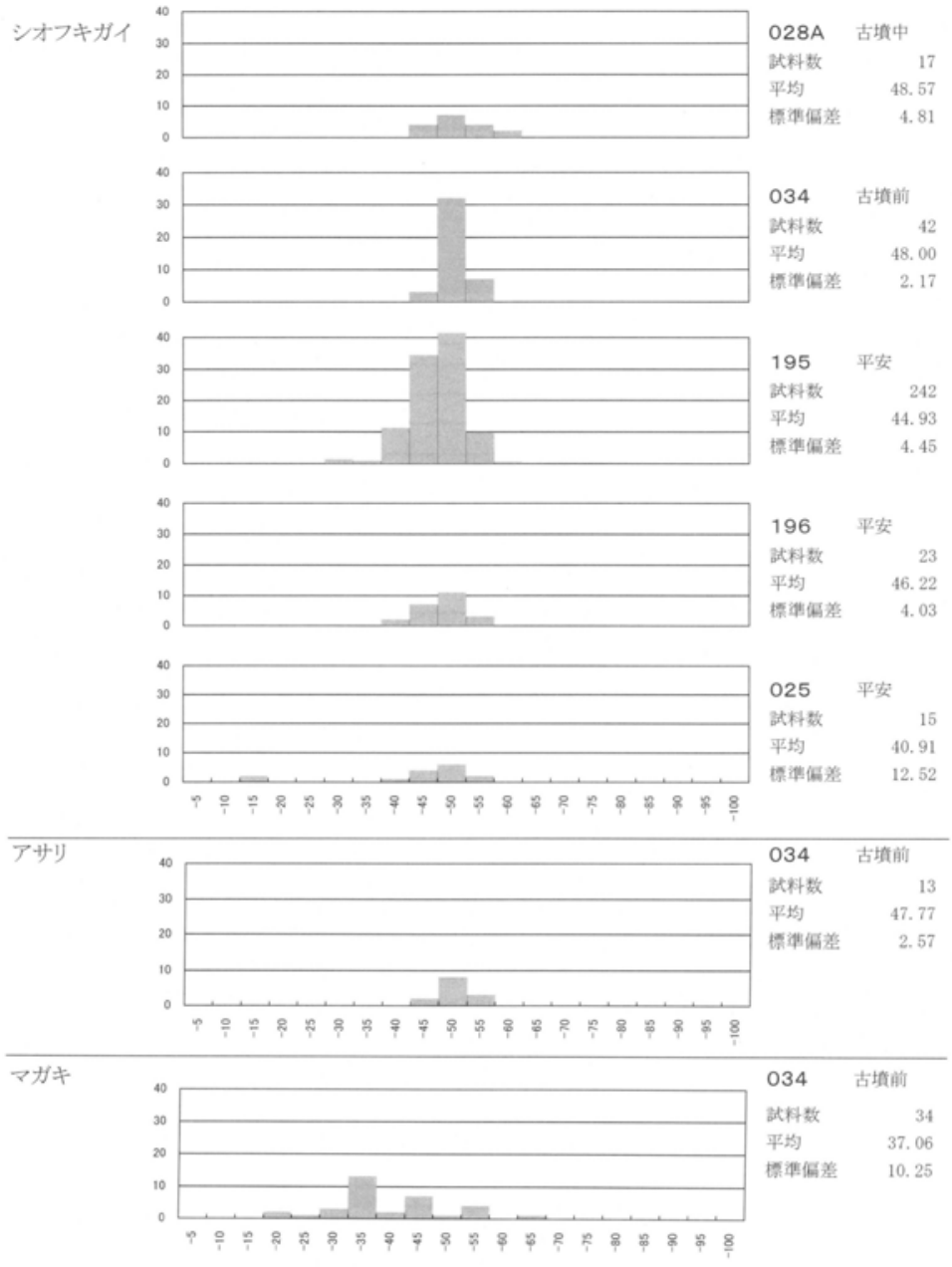
195 平安
試料数 565
平均 54.29
標準偏差 13.80



196 平安
試料数 91
平均 54.50
標準偏差 15.99



025 平安
試料数 63
平均 47.69
標準偏差 14.89



第222図　貝類計測値分布

第23表　貝類計測値分布

イボキサゴ殻径

殻径mm	025	195-06	195-08	195-10	195計
-6.0					
-7.0					
-8.0					
-9.0		1		1	2
-10.0					
-11.0		1			1
-12.0			1		1
-13.0			3		3
-14.0	12	6	3	5	14
-15.0	63	14	21	29	64
-16.0	98	34	53	36	123
-17.0	17	40	40	47	127
-18.0	6	50	34	38	122
-19.0	3	34	28	25	87
-20.0	1	16	11	14	41
-21.0		2	6	4	12
-22.0				1	1
試料数	200	198	200	200	598
平均	15.30	16.90	16.65	16.67	16.74
標準偏差	0.92	1.67	1.66	1.76	1.70

ウミニナ科殻高

殻高mm	025
-10.0	
-12.0	
-14.0	
-16.0	1
-18.0	3
-20.0	3
-22.0	10
-24.0	15
-26.0	6
-28.0	10
-30.0	7
-32.0	2
-34.0	
-36.0	
-38.0	
-40.0	
-42.0	
-44.0	
-46.0	
-48.0	
試料数	57
平均	23.92
標準偏差	3.80

オオタニシ殻高

殻高mm	025
-5.0	
-10.0	
-15.0	
-20.0	
-25.0	1
-30.0	1
-35.0	33
-40.0	72
-45.0	30
-50.0	6
-55.0	7
-60.0	
-65.0	
-70.0	
-75.0	
-80.0	
-85.0	
-90.0	
-95.0	
-100.0	
試料数	150
平均	38.36
標準偏差	4.94

ハマグリ殻長

殻長mm	025	028A	034	195-02	195-03	195-04	195-05	195-06	195-07	195-08	195-09	195-10	195計	196	G6-36-P6
-5.0															
-10.0															
-15.0	1														
-20.0	2														
-25.0	1														
-30.0	2					1	1	1	1		1	2	7	2	
-35.0	4	4		1	1	3	2	6	2	2	3	1	21	7	
-40.0	7	2		3	2	1	8	7	12	2	3	6	44	11	5
-45.0	11	6		5	6	9	9	14	19	13	7	9	91	12	8
-50.0	9	3	1	3	2	8	15	8	16	8	10	12	82	8	8
-55.0	11	4	1	7	6	9	9	9	10	19	14	7	90	12	4
-60.0	6	2	2	5	4	5	12	7	5	6	11	5	60	3	4
-65.0	2	2	1	3	5	4	8	2	6	1	5	4	38	12	0
-70.0	2	1	3	5	6	4	7	4	9	10	5	4	54	5	1
-75.0	1	0	8	1	4	4		6	4	3	2	5	29	10	1
-80.0	2	1	3	1	3	3	2	2	3	2	5	3	24	3	0
-85.0	1	2	5	1			3	3		2	2	2	13	2	1
-90.0	1		10							1	1		2	2	
-95.0			1	1	1	1		1		2			6	2	
-100.0		1	1		1				2			1	4		
試料数	63	28	36	36	41	52	76	70	89	71	69	61	565	91	32
平均	47.69	52.41	76.84	55.36	59.50	54.54	52.96	52.31	52.04	55.86	55.39	54.11	54.29	54.50	49.41
標準偏差	14.89	17.06	11.37	13.19	15.24	13.47	11.94	15.07	13.73	13.72	13.06	14.59	13.80	15.99	10.16

シオフキガイ殻長

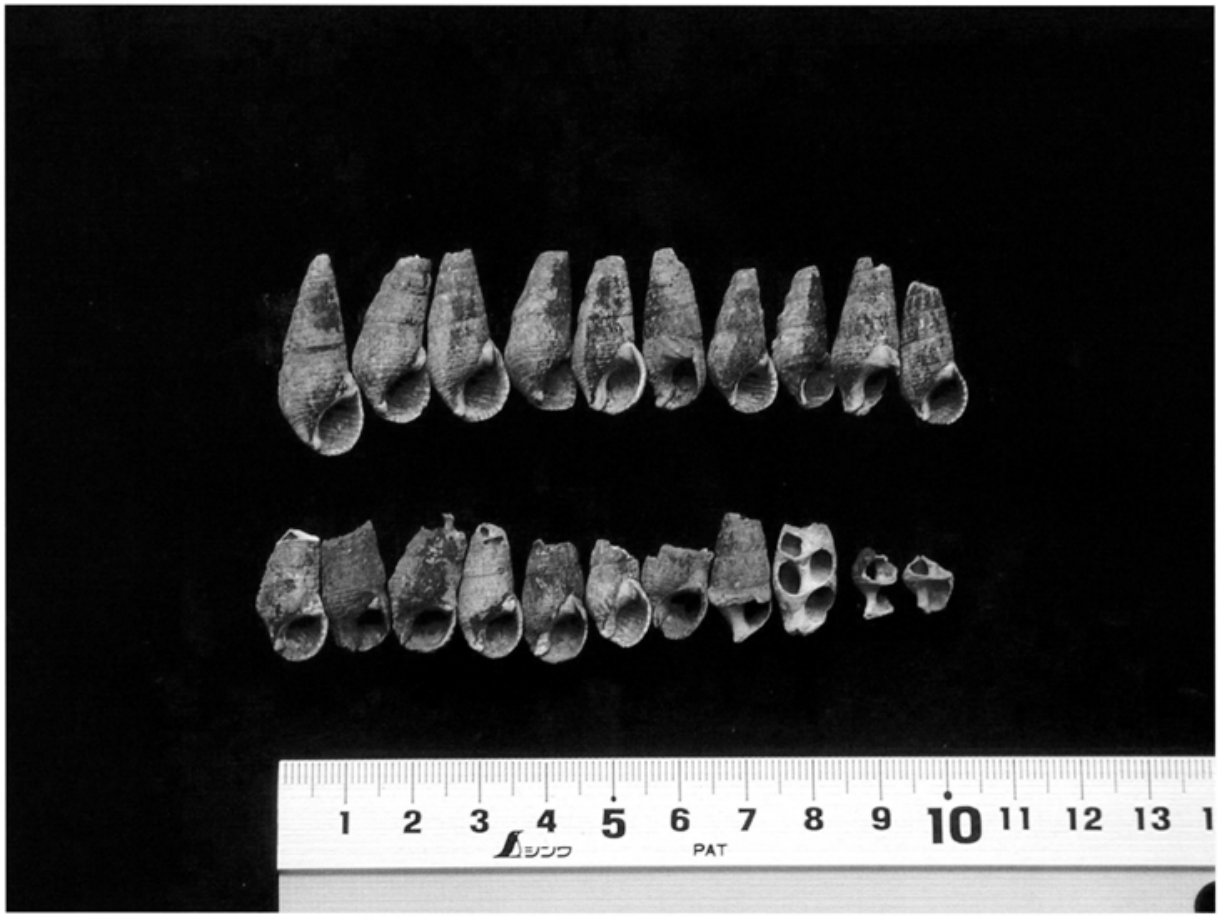
殻長mm	025	028A	034	195	196
-5.0					
-10.0					
-15.0	2				
-20.0					
-25.0					
-30.0				3	
-35.0				2	
-40.0	1			27	2
-45.0	4	4	3	84	7
-50.0	6	7	32	101	11
-55.0	2	4	7	24	3
-60.0		2		1	
-65.0					
-70.0					
-75.0					
-80.0					
-85.0					
-90.0					
-95.0					
-100.0					
試料数	15	17	42	242	23
平均	40.91	48.57	48.00	44.93	46.22
標準偏差	12.52	4.81	2.17	4.45	4.03

マガキ殻長

殻長mm	034
-5.0	
-10.0	
-15.0	
-20.0	2
-25.0	1
-30.0	3
-35.0	13
-40.0	2
-45.0	7
-50.0	1
-55.0	4
-60.0	
-65.0	1
-70.0	
-75.0	
-80.0	
-85.0	
-90.0	
-95.0	
-100.0	
試料数	34
平均	37.06
標準偏差	10.25

アサリ殻長

殻長mm	034
-5.0	
-10.0	
-15.0	
-20.0	
-25.0	
-30.0	
-35.0	
-40.0	
-45.0	2
-50.0	8
-55.0	3
-60.0	
-65.0	
-70.0	
-75.0	
-80.0	
-85.0	
-90.0	
-95.0	
-100.0	
試料数	13
平均	47.77
標準偏差	2.57



G 6-36-P6　ウミニナ

196　ウミニナ